山王廃寺

～山王廃寺等Ⅴ遺跡発掘調査報告書～

2000年3月
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

山王廃寺

～山王廃寺等Ⅴ遺跡発掘調査報告書～

２０００年３月
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1　菩薩像胸部　9A80336　正面

1　菩薩像胸部　9A80336　背面

1　菩薩像胸部　9A80336　右斜側面

1　菩薩像胸部　9A80336　左斜側面

1　菩薩像胸部　9A80336　右側面

1　菩薩像胸部　9A80336　上面

2　菩薩像または天部像垂髻　11A962718　正面

3　菩薩像または天部像髻　11A962719　正面

4　如来倚像または菩薩倚像膝部　11A962670　正面

5　如来像または菩薩像左脚部　11A962764　正面

6　神将像頭部　11A962820　正面

6　神将像頭部　11A962820　右斜側面

6　神将像頭部　11A962820　左斜側面

6　神将像頭部　11A962820　右側面

6　神将像頭部　11A962820　左側面

7　神将像右上半身　11A962825　背面

7　神将像右上半身　11A962825　側面

7　神将像右上半身　11A962825　正面

8　神将像右肩・右上腕部　11A962749　右側面

9　神将像左肩・左胸部　11A962761　正面

10　神将像背面左肩部　11A962748　正面

11　神将像肩甲　11A962710　正面

12　神将像肩甲・鰭袖　11A962713　正面

13　神将像鰭袖　11A962711　正面

14　神将像右胸部　11A962731　正面

15　神将像左胸部　11A962754　正面

16　神将像胸部外側　11A962　正面

17　神将像腹部　11A962753　正面

18　神将像下腹部　11A962810　正面

19　神将像下腹部　11A96369+11A962755　正面

20　神将像右腰部　11A962702　正面

21　神将像左腰部　11A962750　正面

22　神将像下甲　11A962712　正面

25　神将像右手先　11A962715　側面

23　神将像右前腕部　11A962756　正面

24　神将像左前腕部　11A962762　正面

26　神将像脛当　9A80289　正面

27　神将像沓先　11A962716　左斜側面

29　魔神像または邪鬼右脚部　11A962751　正面

30　神将像甲　11A962807　正面

31　比丘像上半身　9A80335　正面（胸片つき）

31　比丘像上半身　9A80335　右側面

31　比丘像上半身　9A80335　背面

31　比丘像上半身　9A80335　右斜側面

31　比丘像上半身　9A80335　右斜背面

32　比丘像左肩・左上腕部　11A962824　背面

32　比丘像左肩・左上腕部　11A962824　正面

32　比丘像左肩・左上腕部　11A962824　断面

32　比丘像左肩・左上腕部　11A962824　左側面

33　女性像頭部　11A962821　正面

33　女性像頭部　11A962821　背面

33　女性像頭部　11A962821　右側面

33　女性像頭部　11A962821　左斜側面

34　女性像面部　11A962822　正面

34　女性像面部　11A962822　背面

34　女性像面部　11A962822　右側面

34　女性像面部　11A962822　右斜側面

35　女性像胸部　11A962763　正面

35　女性像胸部　11A962763　背面

35　女性像胸部　11A962763　右側面

35　女性像胸部　11A962763　上面

36　女性像上背・左上腕部　11A962765　背面

36　女性像上背・左上腕部　11A962765　左側面

36　女性像上背・左上腕部　11A962765　背面の文様

36　女性像上背・左上腕部　11A962765　肘の文様

37　胡人像上半身　11A962823　正面

37　胡人像上半身　11A962823　右斜側面

37　胡人像上半身　11A962823　右側面

37　胡人像上半身　11A962823　腹部文様

37　胡人像上半身　11A962823　下面（断面）

38　腰と右手先?　11A962758　表面

38　腰と右手先?　11A962758　断面

39　左足先左半部　11A961871　上面

39　左足先左半部　11A961871　斜側面

40　天衣　11A962714　表面

40　天衣　11A962714　断面

41　衣の下端部　11A962161　表面

42　衣部　11A96923　表面

44　衣部　9A80290　表面

46　衣部?　11A962757　表面

47　金箔地に色帯のある断片　11A962817　表面

48　顔料の残る断片　11A962804　表面

49　猪頭部前半　9A80311　右側面

49　猪頭部前半　9A80311　左側面

49　猪頭部前半　9A80311　上面

49　猪頭部前半　9A80311　下面

49　猪頭部前半　9A80311　右斜側面

49　猪頭部前半　9A80311　正面

50　獣毛　11A962700　表面

50　獣毛　11A962700　裏面

51　駱駝前脚部　9A8057　外側面

51　駱駝前脚部　9A8057　内側面

51　駱駝前脚部　9A8057　上面（断面）

51　駱駝前脚部　9A8057　下面（断面）

53　棒状の断片　11A962771＋11A962772＋
11A962770　3点全景

54　棒状の断片　9A80304～9A80308
5点全景

55　筒状の断片　11A962759　表面

56　半円筒状の断片　11A962745　表面

57　筒状の断片　11A962671　表面

58　三角状の断片　11A962692　表面

59　直方体状の断片　11A962728　表面(斜めからの全景)

59　直方体状の断片　11A962728　裏面

60　陰刻線２条のある断片　11A962691　表面

61　稜線のある断片　9A80292　表面

62　稜線のある断片　11A962800　表面

63　稜線のある断片　11A962729　表面

64　飛雲頭部　11A962730　表面

65　飛雲脚部　11A962717　表面

66　飛雲脚部　11A962752　表面

67　飛雲脚部　9A80309　表面

68　飛雲脚部　9A80291　表面

69　飛雲?　11A962788　表面

72　箱形天蓋　11A962720+11A962809　表面

73　箱形天蓋　11A962724　表面

PL30

74　箱形天蓋　11A962725　表面

75　箱形天蓋　11A962721　正面

76　箱形天蓋　11A962722　正面

77　箱形天蓋　11A962723　正面

78　箱形天蓋　11A962802　正面

79　箱形天蓋　11A962706　正面

80　山岳頂部　11A962767　正面

上

80　山岳頂部　11A962767　背面

上

上

81 山岳頂部　11A962699 側面

82 山岳頂部　9A80334　側面

上

84　磯形　11A962827　表面

85　磯形　11A962538　表面

86　磯形　11A962701　表面

87　磯形　11A962697　表面

88　磯形　11A962709　正面

95　彩色の残る磯形　11A962708+11A962726　表面

96　彩色の残る磯形　11A962818　表面

97　彩色の残る磯形　11A962819　表面

序

前橋市は、北に赤城山がそびえ、南に関東平野が開け、市内中央を流れる利根川がその関東平野を貫流しています。山紫水明にあふれ、四季の彩り豊かなまちであり、水と緑と詩のまちとして、文化あふれるまちでもあります。

前橋は28000年前の旧石器から、近代化遺産にいたるまでの長い歴史を持っています。特に古墳時代には全国有数の古墳が所在する地域であり、国内有数の勢力がいたものと考えられます。

前橋市総社町にも王山古墳や総社二子古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳などの国内有数の古墳が古墳群を成しており、高い石の加工技術を示す終末期の方墳も三基所在しています。

この総社町に残る古代の寺院跡が山王廃寺（放光寺）です。山王廃寺は７世紀後半に建立されたと言われ、大正年間に発見された塔心礎は「山王塔址」として国の史跡に指定されています。また、石製鴟尾、石製根巻石、緑釉陶器、塑像片、瓦片などが発見されており、類例のない貴重なものが多く残されています。

本年の調査は、市道舗装改良工事に伴う発掘調査として実施されましたが、多くの塑像片・瓦片等の発見があり、山王廃寺の伽藍等の寺域全貌とその変遷を把握する貴重な資料を得ることができました。

調査にあたりましては、道路建設課、地元自治会を始めとする関係の方々にご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

平成12年３月28日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　渡辺勝利

例　　言

1．本報告書は、前橋市道舗装改良工事に伴う山王廃寺等Ⅴ遺跡発掘調査報告書である。

2．遺跡は群馬県前橋市総社町総社2399番地ほかに所在する。

3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　渡辺勝利が、前橋市長　萩原　弥惣治と発掘調査委託契約を締結し実施した。

4．発掘調査担当者　　佐藤　則和・平石　和明（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

5．発掘調査期間　　平成11年６月21日～平成11年７月10日

6．調査面積　　1,200㎡

7．整理期間　　平成11年７月11日～平成12年３月28日

8．本書の原稿執筆・編集は、佐藤・平石・井野が行った。本書では平成９年度と平成11年度の山王廃寺にかかわる遺構・資料を掲載した。塑像の考察を中心とし、伽藍・変遷の考察を掲載した。

執筆分担	第１章　山王塔跡の発見と指定	佐藤　則和・平石　和明
	第２章　山王廃寺の位置・歴史的環境	佐藤　則和・平石　和明
	第３章　遺跡確認の歩みと成果	井野　誠一
	第４章　平成９年度～平成11年度の調査	佐藤　則和・平石　和明
	第５章　特論	松田　誠一郎
		瀬山　里志
		松田　妙子
		井上　唯雄
	第６章　成果と課題	石川　克博

9．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

10．協力者

肥塚　隆保（奈良国立文化財研究所　遺物処理研究室長）、沢田　正昭（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）、鈴木　雅浩（前橋市立桂萱中学校）、瀬山　里志（サントリー美術館）、田邉　三郎助（町田市立博物館館長）、東野　治之（奈良大学教授）、百橋　明穂（神戸大学教授）、西川　杏太郎（文化財保護審議会会長）、平田　政彦（斑鳩町教育委員会）、前原　豊（前橋市役所）、松田　誠一郎（東京芸術大学助教授）、松田　妙子（美術史学会会員）、右島　和夫（群馬県立歴史博物館）、水野　敬三郎（東京芸術大学名誉教授）、山崎　隆之（愛知県立芸術大学教授）

その他　平山　利男（写真撮影）、元興寺文化財研究所（保存処理）、奈良国立文化財研究所（塑像等調査）、朝日印刷工業株式会社

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図に建設省国土地理院発行の1/2.5万地形図（前橋）を使用した。

3．本遺跡の略称は11A96である。

4．遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構　全体図…1/80・1/3000

遺物　瓦…1/3・1/4　　遺構断面図1/80

5．スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構断面図　As—B純層…　、As—B混土層…

目　　次

序
例言
凡例
目次

第１章　山王廃寺塔址の発見と指定 …… 1
第２章　山王廃寺の位置・歴史的環境 …… 2
第３章　遺跡確認の歩みと成果 …… 5
第４章　９～11年度の調査（山王廃寺等Ⅰ～Ⅴ遺跡） …… 9
　第１節　調査の概要 …… 9
　第２節　「廃棄土坑」の調査 …… 11
　第３節　周辺の立ち会い調査 …… 19
　第４節　山王廃寺関連出土遺物の分布 …… 20
第５章　特　　論 …… 24
　第１節　山王廃寺出土の塑像等について …… 24
　第２節　山王廃寺の創建と衰微 …… 91
第６章　成果と課題 ……108

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 3
第２図　山王廃寺跡調査区位置図…… 4
第３図　山王廃寺等Ⅰ～Ⅳ遺跡調査区域図……10
第４図　山王廃寺等Ⅴ遺跡全体図……13
第５図　山王廃寺等Ⅴ遺跡トレンチ断面図……14
第６図　山王廃寺等Ⅴ遺跡出土文字瓦（１）……17
第７図　山王廃寺等Ⅴ遺跡出土文字瓦（２）……18
第８図　山王廃寺出土の緑釉水注等一括遺物……21
第９図　山王廃寺等Ⅰ～Ⅴ遺跡調査状況図……22

写真図版目次

ＰＬ１－１　菩薩像胸部　9A80336
ＰＬ２－１　菩薩像胸部　9A80336
ＰＬ３－２　菩薩像または天部像垂髻　11A962718
　　－３　菩薩像または天部像髻　11A962719
　　－４　如来倚像または菩薩倚像膝部
　　11A962670
ＰＬ３－５　如来像または菩薩像左脚部
　　11A962764
ＰＬ４－６　神将像頭部　11A962820
ＰＬ５－６　神将像頭部　11A962820

PL 6－7　神将像右上半身　11A962825
PL 7－7　神将像右上半身　11A962825
－8　神将像右肩・右上腕部　11A962749
－9　神将像左肩・左胸部　11A962761
PL 8－10　神将像背面左肩部　11A962748
－11　神将像肩甲　11A962710
－12　神将像肩甲・鰭袖　11A962713
－13　神将像鰭袖　11A962711
PL 9－14　神将像右胸部　11A962731
－15　神将像左胸部　11A962754
－16　神将像胸部外側　11A962
－17　神将像腹部　11A962753
PL10－18　神将像下腹部　11A962810
－19　神将像下腹部　11A96369＋11A962755
－20　神将像右腰部　11A962702
－21　神将像左腰部　11A962750
PL11－22　神将像下甲　11A962712
－25　神将像右手先　11A962715
－23　神将像右前腕部　11A962756
－24　神将像左前腕部　11A962762
PL12－26　神将像脛当　9A80289
－27　神将像沓先　11A962716
－29　魔神像または邪鬼右脚部　11A962751
－30　神将像甲　11A962807
PL13－31　比丘像上半身　9A80335
PL14－31　比丘像上半身　9A80335
PL15－32　比丘像左肩・左上腕部　11A962824
PL16－33　女性像頭部　11A962821
PL17－34　女性像面部　11A962822
PL18－35　女性像胸部　11A962763
PL19－36　女性像上背・左上腕部　11A962765
PL20－37　胡人像上半身　11A962823
PL21－37　胡人像上半身　11A962823
PL22－38　腰と右手先？　11A962758
－39　左足先左半部　11A961871
－40　天衣　11A962714
PL23－41　衣の下端部　11A962161
PL23－42　衣部　11A96923
－44　衣部　9A80290
－46　衣部？　11A962757
－47　金箔地に色帯のある断片　11A962817
－48　顔料の残る断片　11A962804
PL24－49　猪頭部前半　9A80311
PL25－50　獣毛　11A962700
－51　駱駝前脚部　9A8057
PL26－53　棒状の断片　11A962771＋11A962772＋11A962770
－54　棒状の断片　9A80304～9A80308
－55　筒状の断片　11A962759
－56　半円筒状の断片　11A962745
－57　筒状の断片　11A962671
－58　三角状の断片　11A962692
PL27－59　直方体状の断片　11A962728
－60　陰刻線２条のある断片　11A962691
－61　稜線のある断片　9A80292
－62　稜線のある断片　11A962800
－63　稜線のある断片　11A962729
PL28－64　飛雲頭部　11A962730
－65　飛雲脚部　11A962717
－66　飛雲脚部　11A962752
－67　飛雲脚部　9A80309
－68　飛雲脚部　9A80291
－69　飛雲？　11A962788
PL29－72　箱形天蓋　11A962720＋11A962809
－73　箱形天蓋　11A962724
PL30－74　箱形天蓋　11A962725
－75　箱形天蓋　11A962721
－76　箱形天蓋　11A962722
－77　箱形天蓋　11A962723
－78　箱形天蓋　11A962802
－79　箱形天蓋　11A962706
PL31－80　山岳頂部　11A962767
－81　山岳頂部　11A962699
－82　山岳頂部　9A80334
－84　磯形　11A962827

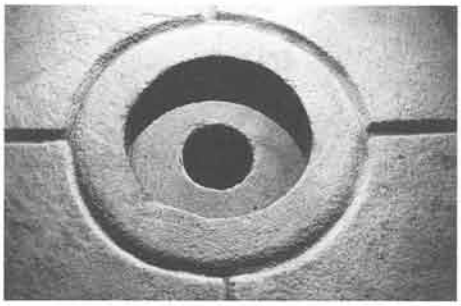
PL31—85　磯形　11A962538
PL32—86　磯形　11A962701
—87　磯形　11A962697
—88　磯形　11A962709
—95　彩色の残る磯形　11A962708＋11A962726
—96　彩色の残る磯形　11A962818
—97　彩色の残る磯形　11A962819
PL33—1　菩薩像胸部　9A80336
—2　菩薩像または天部像垂髻　11A962718
PL34—2　菩薩像または天部像垂髻　11A962718
—4　如来倚像または菩薩倚像膝部　11A962670
PL35—5　如来像または菩薩像左脚部　11A962764
—7　神将像右上半身　11A962825
PL36—6　神将像頭部　11A962820
PL37—8　神将像右肩・右上腕部　11A962749
PL38—9　神将像左肩・左胸部　11A962761
—10　神将像背面左肩部　11A962748
—12　神将像肩甲・鰭袖　11A962713
PL39—13　神将像鰭袖　11A962711
—14　神将像右胸部　11A962731
—17　神将像腹部　11A962753
—20　神将像右腰部　11A962702
PL40—20　神将像右腰部　11A962702
—21　神将像左腰部　11A962750
—23　神将像右前腕部　11A962756
PL41—24　神将像左前腕部　11A962762
—25　神将像右手先　11A962715
PL42—27　沓先　11A962716
—28　神将像（集合）
PL43—31　比丘像上半身　9A80335
PL44—33　女性像頭部　11A962821
PL45—35　女性像胸部　11A962763
—36　女性像上背・左上腕部　11A962765
—37　胡人像上半身　11A962823
PL46—39　左足先左半部　11A961871
PL46—42　衣部　11A96923
—43　衣部　11A962693
—44　衣部　9A80290
—45　衣部？　11A962789
PL47—46　衣部？　11A962757
—49　猪頭部前半　9A80311
—52　動物頭部？　11A962581
PL48—54　棒状の断片（小像の腕？）　9A80304～9A80305
—55　筒状の断片　11A962759
PL49—56　半円筒状の断片　11A962745
—57　筒状の断片　11A962671
—58　三角状の断片　11A962692
—59　直方体状の断片　11A962728
—62　稜線のある断片　11A962800
—63　稜線のある断片　11A962729
PL50—64　飛雲頭部　11A962730
—65　飛雲脚部　11A962717
—66　飛雲脚部　11A962752
—67　飛雲脚部　9A80309
—70　飛雲脚部／磯形？　9A80332
PL51—71　箱形天蓋（集合）
—72　箱形天蓋　11A962720＋11A962809
—73　箱形天蓋　11A962724
—78　箱形天蓋　11A962802
PL52—80　山岳頂部　11A962767
—81　山岳頂部　11A962699
—82　山岳頂部　9A80334
—83　山岳頂部　11A962695
PL53—84　磯形　11A962827
—85　磯形　11A962538
—86　磯形　11A962701
—87　磯形　11A962697
—88　磯形　11A962709
PL54—89　磯形　11A962704
—90　磯形　11A962703
—91　磯形　11A962694
PL55—92　磯形　11A9629

ＰＬ55—93　磯形　11A9628
—94　磯形　11A962766
—95　彩色の残る磯形　11A962708＋11A962726
ＰＬ56—98　壁画　11A962733
—99　壁画　11A962737
—100　壁画　11A962734
—101　壁画　11A962736
—102　壁画　11A962732
—103　壁画　11A962735
ＰＬ57—104　頭部・面部(集合)
—105　体部ほか(集合)
ＰＬ58—106　文様のある断片(集合)
—107　山岳・磯形(集合)
ＰＬ59—108　銅製懸裳？　11A962760
—109　銅製蓮弁　9A80315
ＰＬ60—110　銅製框座　11A962668
—111　金銅製帯状金具　9A80316
—112　風鐸上部 9A80296
ＰＬ61—113　西側基壇
—114　塔心礎
ＰＬ62—115　遺構出土状況（１）
—116　遺構出土状況（２）
ＰＬ63　9A801～9A8033（塑壁）
ＰＬ64　9A8034～9A8070（塑壁）
ＰＬ65　9A8071～9A80120（塑壁）
ＰＬ66　9A80121～9A80171（塑壁・塑像）
ＰＬ67　9A80172～9A80214（塑壁）
ＰＬ68　9A80215～9A80240（塑壁）
ＰＬ69　9A80241～9A80278（塑壁）
ＰＬ70　9A80279～9A80316（塑像・塑壁・釘・銅製品等）
ＰＬ71　9A80317～9A80324（塑壁）
ＰＬ72　9A80325～9A80332（塑壁・飛雲・山岳・塑像）
ＰＬ73　9A80333～9A80359（塑壁）
ＰＬ74　9A80360～9A80384（塑像・塑壁）
ＰＬ75　11A961～11A9631（塑像・塑壁・磯形）
ＰＬ76　11A9629～11A9639（磯形・塑壁）
ＰＬ77　11A9640～11A9660（塑壁）
ＰＬ78　11A9661～11A9686（塑壁）
ＰＬ79　11A9687～11A96117（塑壁）
ＰＬ80　11A96118～11A96143（塑壁）
ＰＬ81　11A96144～11A96178（塑壁）
ＰＬ82　11A96179～11A96218（塑壁）
ＰＬ83　11A96219～11A96259（塑壁）
ＰＬ84　11A96260～11A96316（塑壁）
ＰＬ85　11A96317～11A96352（塑壁）
ＰＬ86　11A96353～11A96389（塑像・塑壁）
ＰＬ87　11A96390～11A96451（塑壁）
ＰＬ88　11A96452～11A96501（塑壁）
ＰＬ89　11A96502～11A96546（塑壁）
ＰＬ90　11A96547～11A96590（塑壁）
ＰＬ91　11A96591～11A96639（塑壁）
ＰＬ92　11A96640～11A96688（塑像・塑壁）
ＰＬ93　11A96689～11A96735（塑壁）
ＰＬ94　11A96736～11A96774（塑壁）
ＰＬ95　11A96775～11A96810（塑壁）
ＰＬ96　11A96811～11A96834（塑壁）
ＰＬ97　11A96835～11A96873（塑壁）
ＰＬ98　11A96874～11A96887（塑壁）
ＰＬ99　11A96888～11A96910（塑壁）
ＰＬ100　11A96911～11A96950（塑像・塑壁）
ＰＬ101　11A96951～11A96977（塑壁）
ＰＬ102　11A96978～11A961021（塑壁）
ＰＬ103　11A961022～11A961072（塑壁）
ＰＬ104　11A961073～11A961124（塑壁）
ＰＬ105　11A961125～11A961167（塑壁）
ＰＬ106　11A961168～11A961201（塑像・塑壁）
ＰＬ107　11A961202～11A961229（塑壁）
ＰＬ108　11A961230～11A961244（塑壁）
ＰＬ109　11A961245～11A961278（塑壁）
ＰＬ110　11A961279～11A961313（塑壁）
ＰＬ111　11A961314～11A961348（塑壁）
ＰＬ112　11A961349～11A961381（塑壁）
ＰＬ113　11A961382～11A961402（塑壁）

PL114　11A961403～11A961430（塑壁）
PL115　11A961431～11A961460（塑壁）
PL116　11A961461～11A961489（塑壁）
PL117　11A961490～11A961525（塑壁）
PL118　11A961526～11A961570（塑壁）
PL119　11A961571～11A961611（塑壁）
PL120　11A961612～11A961647（塑壁）
PL121　11A961648～11A961669（塑壁）
PL122　11A961670～11A961690（塑壁）
PL123　11A961691～11A961724（塑壁）
PL124　11A961725～11A961767（銅製品・塑壁）
PL125　11A961768～11A961807（塑壁）
PL126　11A961808～11A961836（塑壁）
PL127　11A961837～11A961873（塑壁・塑像）
PL128　11A961874～11A961900（塑壁）
PL129　11A961901～11A961922（塑壁）
PL130　11A961923～11A961959（塑壁）
PL131　11A961960～11A962003（塑壁・塑像）
PL132　11A962004～11A962029（塑壁）
PL133　11A962030～11A962045（塑壁）
PL134　11A962046～11A962061（塑壁）
PL135　11A962062～11A962083（塑壁）
PL136　11A962084～11A962117（塑壁）
PL137　11A962118～11A962160（心材・塑壁・塑像）
PL138　11A962161～11A962191（塑像・塑壁）
PL139　11A962192～11A962212（塑壁）
PL140　11A962213～11A962254（塑壁・心材）
PL141　11A962255～11A962305（塑壁）
PL142　11A962306～11A962330（塑壁）
PL143　11A962331～11A962369（塑壁・塑像）
PL144　11A962370～11A962401（塑壁）
PL145　11A962402～11A962445（塑壁・塑像）
PL146　11A962446～11A962496（塑壁・塑像）
PL147　11A962497～11A962529（塑壁・塑像）
PL148　11A962530～11A962539（銅製品・塑壁・磯形）
PL149　11A962540～11A962558（塑像・塑壁）
PL150　11A962559～11A962574（塑壁）
PL151　11A962575～11A962609（塑壁・塑像）
PL152　11A962610～11A962644（塑壁）
PL153　11A962645～11A962664（塑壁）

第１章　山王廃寺塔址の発見と指定

山王廃寺が位置する前橋市総社町総社昌楽寺廻り周辺は古くから農村集落が形成され、その中心に鎮座する日枝神社から「山王」と呼ばれている。

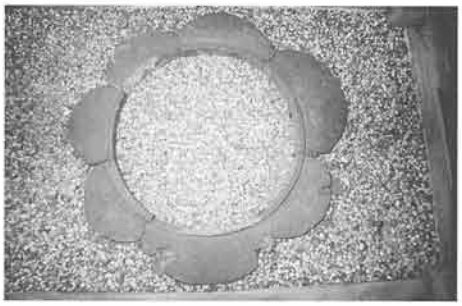

塔心礎

大正年間に日枝神社境内で地元の住人が穴を掘った際に巨大な石が出土した。塔心礎の発見である。この偶然の発見により山王廃寺の発見は始まった。

大正10年に福島武雄氏（群馬県史跡天然記念物調査委員会臨時会員）によって調査が行われ、この地に塔を持つ寺院の存在が明らかとなった。そして、昭和３年に山王塔址として内務大臣より国指定史蹟とされ、これを契機に山王廃寺は全国的にも注目され、多くの研究者がこの地を訪れるようになった。地元でも耕作等の機会に多数の遺物が出土し、その結果、山王廃寺趾を中心に寺院に附随する古瓦、貴重な土器、建築物の礎石等の数多くの新たな発見があった。２つ発見された石製鴟尾は、全国的にも例が少なく、昭和11年に国認定重要美術品となった。連弁を形どった石製根巻石は昭和28年に国指定重要文化財の指定を受けた。34年には塑像頭を発見。36年には、緑釉水注、碗、皿及び銅鋺が発見され、国指定重要文化財となった。

石製鴟尾

その後、10年あまり、本格的な発掘調査を実施する機会を得ることはできなかったが、昭和49年、山王地区の土地改良事業に伴い、前橋市教育委員会による本格的な発掘調査が開始された。昭和56年までの７年間に行われた７次の調査によって山王廃寺の全貌が少しずつ明らかになってきた。特に山王廃寺塔趾周辺の調査では、周辺からの礎石等の発見により、塔に附随する金堂、講堂、食堂、回廊などの伽藍配置の存在が推定されるようになった。遺物では「放光寺」と刻まれた瓦が出土し、「山上碑」や「上野国交替実録帳」などの歴史的資料とつながりをみせ、今まで実体が不明確であった山王廃寺の存在が明らかとなった。この調査により、今まで断片的だった山王廃寺が徐々にその全容を表してきた。その後、大規模な発掘調査は行われなかったが、平成２年より周辺での各種開発に伴う調査が実施された。中でも、今回の報告となる平成９～11年度における調査は塑像片築や新たな遺構の発見により、新たな山王廃寺の側面を発見する契機となった。


根巻石

緑釉水注

第２章　山王廃寺の位置・歴史的環境

山王廃寺は前橋市街地から利根川を隔てて、北西約４kmに所在する。古くからの農村地域で西には現在も水田が広がっている。しかし、近年の開発により、主要幹線道路が縦横に走り、工場、商業団地、住宅地等の建設も進んでおり市街化の波が押し寄せている現状である。西方の水田地帯には関越自動車道が南北に走り、向こうに国分寺跡を望むことができる。

山王廃寺が位置する前橋市総社地区は数多くの史跡・遺跡が点在している。

縄文時代では、国分僧寺・尼寺中間地域遺跡（12）や熊野谷遺跡（２）に代表される中期から後期にかけての住居址群。弥生時代では国分僧寺・尼寺中間地域遺跡の集落や日高遺跡（30）の水田址などがある。

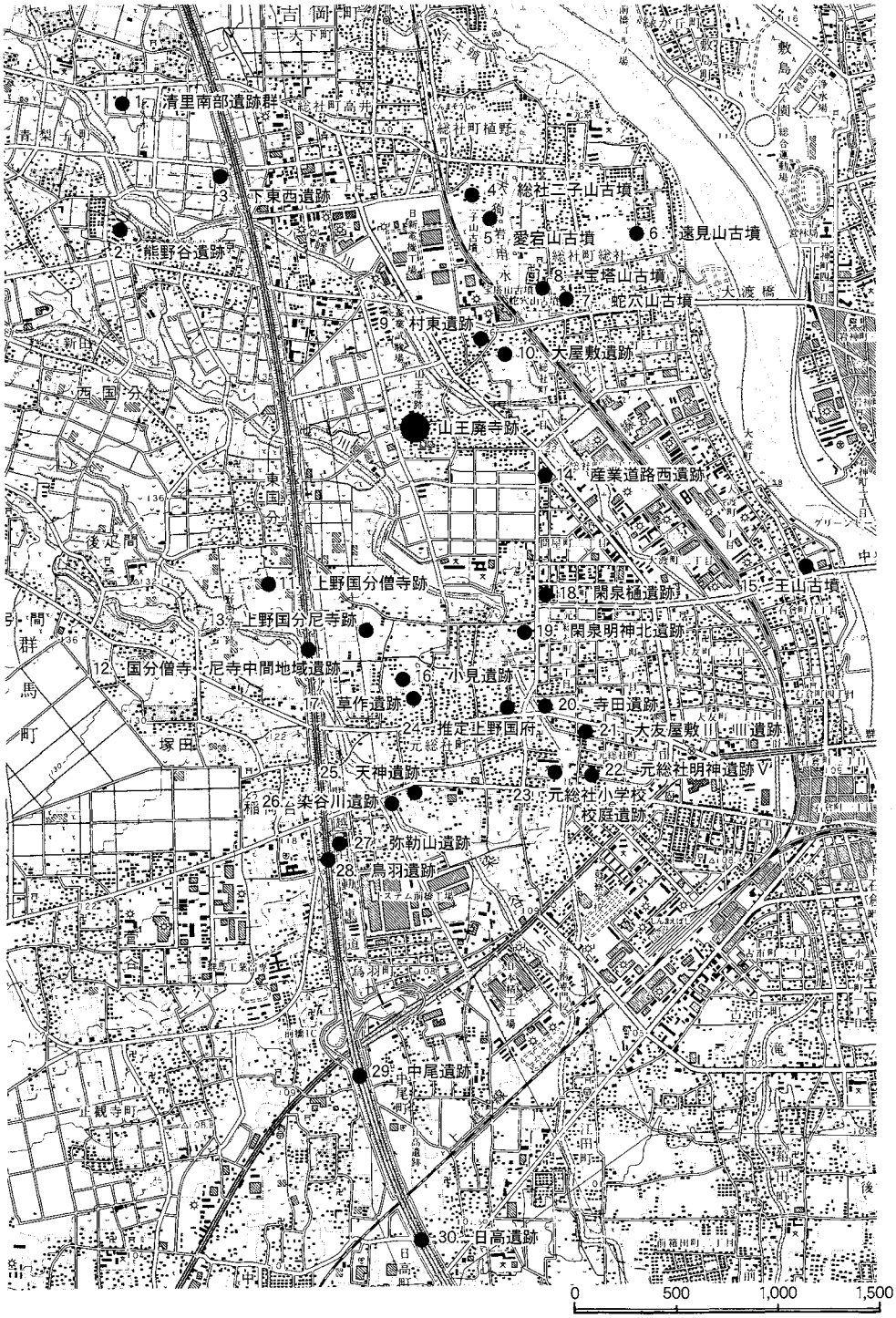
古墳時代になると数多くの古墳が構築される。利根川西岸に連綿と続く古墳群は「総社古墳群」と称され、県内でも屈指の古墳群の一つである。古墳群形成の先駆けとなったのは５世紀末に構築されたと推定される前方後円墳の遠見山古墳（６）である。次いで６世紀前半には東国でも早い時期に横穴式石室を採用した積石塚の前方後円墳である王山古墳（15）が造られる。これらの古墳から総社古墳群の豪族が上野地域内でも指折りの優勢を誇る勢力になっていたことがうかがえる。

６世紀後半には、前方部と後円部に石室を有する国指定史跡の総社二子山古墳（４）が造られたが、これを最後にこの地域での前方後円墳が消滅する。７世紀前半には巨石使用の横穴式石室をもつ大型の方墳、愛宕山古墳（５）が構築された。周辺にはこのような大型の古墳は見あたらないことから、上野地域において、総社古墳群の豪族を頂点とした一元的な支配構造が確立していったことが推測される。

７世紀第３四半期になると、高度な石材加工技術を駆使して造られた横穴式石室と内部に家形石棺をもつ方墳、宝塔山古墳（８）が造られた。７世紀第４四半期には宝塔山古墳よりさらに完成度の高い石材加工技術で横穴式石室を造った蛇穴山古墳（７）が造られた。これらの古墳の石材加工技術は山王廃寺の塔心礎、石製鴟尾の加工技術と密接に結びついており、また、造られた時期も並行していることから、古墳を造営した豪族が山王廃寺の造営にも関わっていたことが想定される。この時期、この総社地区では山王廃寺を中心として仏教文化が古墳文化と併存しながら花開いた様子がうかがえる。

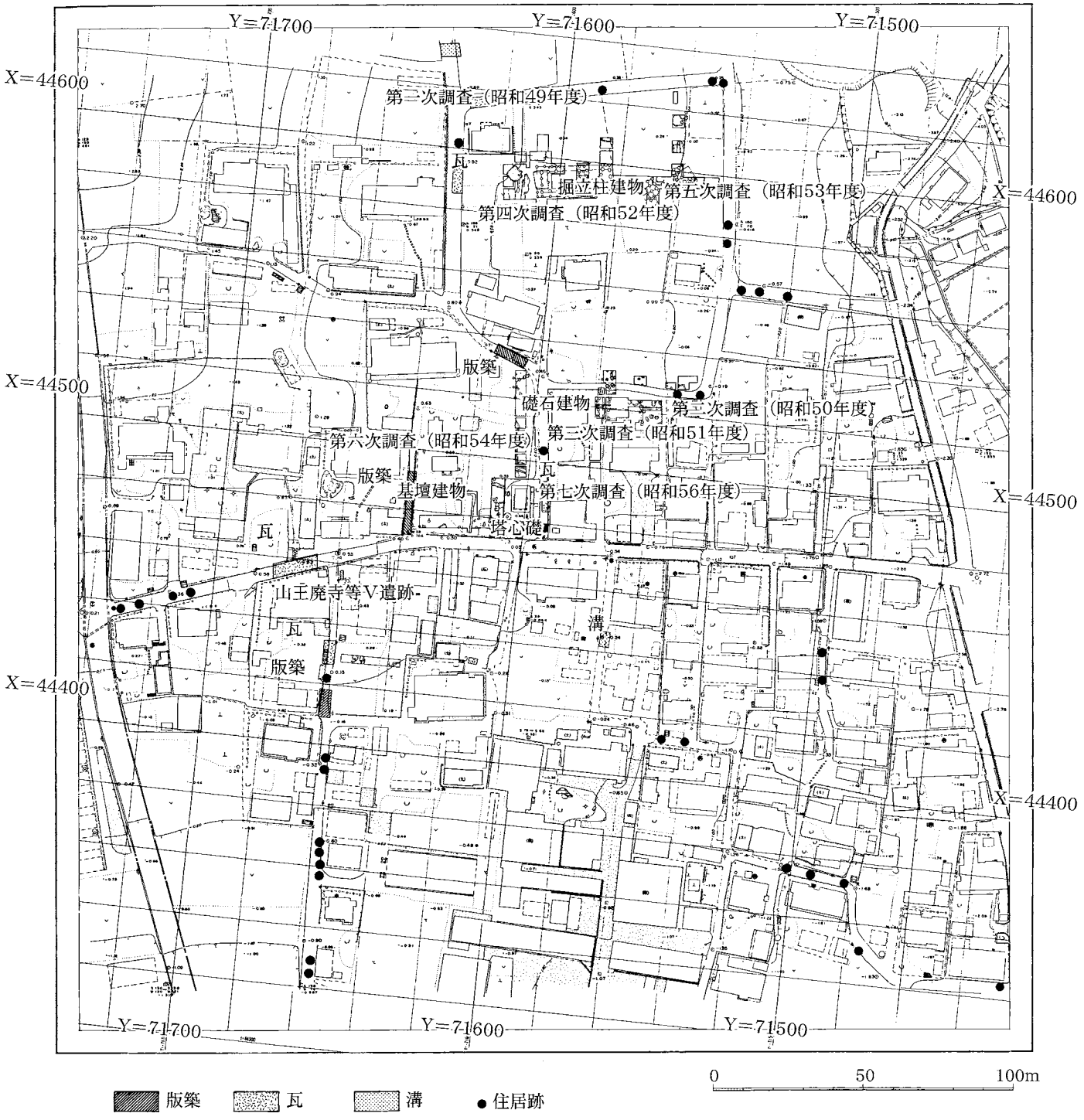
集落については、大屋敷遺跡（10）から６世紀初頭～後半にかけての集落が検出された。この遺跡からは須恵器台付長頸壺や須恵器大型器台、円面硯、そして、高坏や石製模造品等の祭祀関係遺物が多数出土しており、単なる一般集落とは異なる性質をもつ集落と考えられる。この集落は奈良・平安時代へと引き継がれている。

奈良･平安時代になると、上野国府（24）、国分僧寺（11）、国分尼寺（13）等、当地域は古代上野の政治･文化の中心地としての様相を帯びてくる。これらの地方政治の中枢機能が集まる約２km四方の中に山王廃寺が位置していることからも、山王廃寺の位置の重要さがうかがえる。ところで、山王廃寺からやや遅れて建立される国分二寺は地理的に隣接しているばかりではなく、軒丸瓦等に同笵同型のものとみられるものが見られる。奈良時代における両者の関連についても注目される。



1．清里南部遺跡群　2．熊野谷遺跡　3．下東西遺跡　4．総社二子山古墳　5．愛宕山古墳　6．遠見山古墳　7．蛇穴山古墳　8．宝塔山古墳　9．村東遺跡　10．大屋敷遺跡　11．上野国分僧寺跡　12．国分僧寺・尼寺中間地域遺跡　13．上野国分尼寺遺跡　14．産業道路西遺跡　15．王山古墳　16．小見遺跡　17．草作遺跡　18．閑泉樋遺跡　19．閑泉明神北遺跡　20．寺田遺跡　21．大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡　22．元総社明神遺跡Ⅴ　23．元総社小学校校庭遺跡　24．推定上野国府　25．天神遺跡　26．染谷川遺跡　27．弥勒山遺跡　28．鳥羽遺跡　29．中尾遺跡　30．日高遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　山王廃寺跡調査区位置図

第３章　遺跡確認の歩みと成果

第一次調査（昭和49年）　土地改良事業に伴う調査　山王廃寺跡発掘調査団

寺域限界の確認のため、推定寺域（心礎を中心として方二町）の縁辺部にトレンチを設定して調査を実施した。この一次調査成果により、方二町の寺域を想定した。また心礎の北約110m付近で北門(四次調査で建物跡と判明）を検出したことが成果としてあげられる。

また、塔の北100m、東100mで金箔付炭化物を検出した。この調査結果は、寺の範囲を示す資料として注目された。（当初の伽藍の範囲を示すもの）（報告書未刊）

第二次調査（昭和50年）　国・県補助による緊急調査　前橋市教育委員会

塔北東の礎石群の隣接地で礎石の有無の調査を行った。寺に関係する確かな遺構は検出されなかった。塔の北50m、東40から50mの地点で奈良時代前半の住居跡を検出した。寺域内の住居跡であり、寺の施設であったのか時期を含めその性格を検討する必要がある。

また、付近に1108年降下のＢ軽石を含むII層で埋まった東西の溝が発見された。幅1.1m、深さ13cmである。II層は上面に瓦が密集し、層中にも瓦を含んでいる。この溝は調査時の所見では人為的な掘削ではないとのことであるが、周辺に瓦の密集地があり、その敷かれたような分布（二次堆積と見られる）の範囲線とほぼ同じ方向である点が溝及び瓦の堆積時期を含め注目される。(三次調査での記述では山王廃寺廃絶後に瓦の処理のために掘られたもので、礎石群Ｂの建設に伴うものとされている)

第三次調査（昭和51年）　国・県補助による緊急調査　前橋市教育委員会

二次調査の継続で、礎石群の調査を行った。調査の結果、塔の北西から礎石群Ａ・Ｂが検出された。礎石群ＡはＮ36Ｅ30区を南端としている。Ｂ軽石を含むII層中に造られていることから、中世以降のものとみられる。

礎石群Ｂは、Ｂ軽石降下以前に崩壊しており、山王廃寺にかかわる施設とみられる。礎石痕と栗石の一部が残存しているのみであった。礎石群Ｂ（山王廃寺）はＢ軽石降下（1108年）以前に失われ、続く寺院（昌楽寺）はＢ軽石降下以降に造られたことがわかる。また、北30m・東40m付近から奈良時代初期の住居跡が発見されている。この住居跡も第二次調査で発見された住居跡とともに寺域内であり、かつ山王廃寺の存続期間内の住居跡であり、その性格の検討が必要である。

さらに、塔心礎東34mの南北ラインから西に焼土と炭化物を含む地層が検出された。東34mのライン東では地層はIII層からIV層に移行しているが、東34mの西ではこのIII層に類似するが、焼土粒・炭化物の混入が多く、堅くしまっている層となっている。山王廃寺再建に伴う整地層とみられ、東34mまでの範囲が逆に再建された寺（昭和54年検出の法起寺伽藍に伴うもの）の寺域と考えることもできる。（当初の寺域より縮小して再建されているとみられる）

第四次調査（昭和52年）　国・県補助による緊急調査　前橋市教育委員会

第一次調査で検出された「北門跡」の調査を実施した。調査の結果、この遺構は門跡ではなく、梁行三間、桁行九間の掘立柱建物跡と判明した。この建物は「僧房」か「食堂」と考えられる。

この建物の南に並ぶように埴輪転用施設跡が発見された。七個体分の円筒埴輪がつながって一直線に並べられていた。検出は一部であるが、西・東にも続いていた状況が見られた。これは、北に接して検出された掘立柱建物跡の暗渠排水とみられる。

また、この建物の廃絶後に竪穴住居跡が造られている。その中で最も古いものは四次の所見では８世紀後半とあるが、９世紀第２四半期と見られる。（井上唯雄氏 教示）

上記の事から見ると、９世紀第２四半期に近い時期まで三間九間の掘立柱建物跡を含む伽藍が存続していたことが認められる。

心礎周辺での版築の状況をみると、日枝神社境内の塔心礎周辺では現地表面から30cmまでは攪乱土層であり、その下より版築が認められた。塔心礎の表面より上に30cmまで版築が現状で残されていた。版築は、ローム主とする層、黒色土層、これらの混土層などが薄い層で４cm、厚い層で23cmほどの厚さで12層重ねて積んであり、いずれも非常に堅く突き固めている。自然堆積層は心礎表面より110cm下方になって検出される。

以上のことから、塔基壇の版築は現状で140cmの厚さで残されていることが認められた。

また、周辺の状況からは、基壇を造るにあたって「掘込地業」の行われたこと、心礎がその「掘込地業」を掘り込んで据えられたこと、周囲に玉石が根締めとして詰められていることが認められた。（塔では心礎付近と縁辺部で、版築に相違がみられる。これは寺再建によるもの。）（昭和56年調査参照）

第五次調査（昭和53年）　国・県補助による発掘調査　前橋市教育委員会

第五次調査は、第四次調査に継続するものとして、東に隣接する地区の調査を行った。四次調査で検出された掘立柱建物跡にひさしが付くことがわかった。ひさしは南面と北面にみられた。この建物は東端より三間目に間仕切りがあり、さらに西側三間目にも間仕切りがあることが想定されている。四次調査の掘立１は、ほぼ南北に梁行方位をとっており、山王廃寺の施設であり礎石群Ｂとの関連が考えられるものであるが、その他の掘立２～６は方位がほぼ北北西であり、別の建物群と見られる。重複の前後関係は明確でないとの所見であるが、山王廃寺創建に先立つ豪族の居館関連との考えもある。掘立７は、掘立１とほぼ同方位であるが、時期が異なり、掘立１や掘立２～６に重複する新しい住居跡よりも更に新しいものである。また、掘立２～６に重複する新しい住居跡の年代観は、９世紀前半から10世紀後半までが含まれ掘立１より新しい住居跡の年代観が９世紀前半であることから、当初の山王廃寺の伽藍はこの時期には失われていたとも想定できる。

第六次調査（昭和54年）　国・県補助による発掘調査　前橋市教育委員会

六次調査は塔の西に接する地と北の地の調査を行い、山王廃寺の中心域の伽藍の状況の把握を目的として行われた。六次調査では、塔跡西側・基壇建物跡・掘立柱建物跡・住居跡等が検出されている。また、塔の西から多量の瓦片が出土した。

塔跡は、塔心礎の西8.6mより西の調査区では検出されず六次調査の結果からは基壇の範囲は一辺が17.2m以内と判断された。また、塔の西に南北11m、東西４mの範囲で白色粘土面が広がっており、塔基壇の周囲に白色粘土が敷設されていたことが確認された。白色粘土面上からは、屋根からずりおちた状況で、重なり合った多数の瓦が出土している。また、その上方に二次堆積の瓦が検出されている。

基壇建物跡は塔心礎より19.6mの間隔があり、塔基壇が前述の規模とすると塔と基壇の間隔は11.4mになる。基壇の規模は検出された範囲で東西16.6m、南北11.7mあり、東西に長い長方形を呈している。方位は

南北方位Ｎ－５°－Ｅである。サブトレンチの結果からは東西長は17m以内と見られる。

基壇は旧地表面に直接構築されたもので、現状で８層の版築土が残っていた。また、周囲に角閃石安山岩が基壇側面に接するように出土しており、化粧石を持つ「壇上積基壇」と考えられる。この基壇は「金堂」と判断された。

さらに、基壇の東面には上巾60cmのテラス状の平坦面があり、その外とは20cmの段差がある。この平坦面は北面には続いていなかった。「上成基壇」的な造作があったとみられる。また、北面に白色粘土の張り出しがあり、基壇への階段の存在も考えられる。

基壇は基本土層のIIIの３層面上（旧地表面はIV層）に直接築いている。平均して厚さ５cmの厚さで、白色粘質土、ローム、浮石混じりの黒色土、暗褐色粘質土を「版築状」に積み上げている。現状で８層残っている。表土より約120cmで、版築そのものは80cmほどの厚さである。ただし、「版築状」と表記されているように、積み上げられた土層は厚さも揃っておらず、場所により層数も異なる。この版築の中からは若干の瓦が検出されており、この基壇建物が再建されたものであること、その再建工事が「版築状」と表現される状況の工事であったと言える。

基壇建物の周辺からは、多量の瓦が出土している。堆積の土層からの判断では塔屋根よりずり落ちた瓦は1108年降下のＢ軽石以前の崩壊・転落になる。

版築の下の土層は、土層断面図でみるとIIIの３層とIIIの②層と表記されている。このIIIの②層はIIIの２層の誤記とみられるが、IIIの２層には瓦・焼土粒・炭化物を含み、IIIの３層には焼土粒が含まれている。このことからは、この基壇建物の「版築」造成前に火災による建物の焼失とその後かたづけがあり、その整理後にこの基壇建物を築いたことが想定される。

このことからもこの基壇建物は当初建立の伽藍とは異なるものと判断されるものである。

四次・五次調査で、９世紀の第２四半期まで当初伽藍の僧房と考えられる掘立柱建物跡が存在していたことが判明しており、上記の結果と合わせると当初伽藍の存続は、周辺部建物の存続が、９世紀第２四半期までであり、その後の火災で主要建物が焼失し、その後再建されたのが六次調査検出の基壇建物であると考えられる。

基壇建物は再建されたが、北の掘立柱建物は再建されなかったこと、三次調査で塔心礎東34mのラインまでが、再建寺域と考えられることから合わせると、規模を縮小して再建されたと考えられる。（平成11年度調査の塑像片と共に出土した土器は10世紀後半のものであり、当初の主要伽藍の焼失時期を考える上での重要な資料と言える）平成９年度に検出された版築は、第六次調査（昭和54年）で検出された版築にくらべ、版築全体の位置の食い違い、各層の土質の違い、層の積み重ねの状況が異なるなど、別の基壇（金堂）であることを示している。特に版築の形状が、六次調査の版築と相似形であるとはみられない（南北に長いと見られる）ことからは、再建前の山王廃寺の伽藍が「法起寺式伽藍」ではない可能性が考えられる。（山王廃寺等調査報告書―平成11年度刊に詳述）

調査での出土文字瓦は、創建当初のものではなく、補修用として使われたものである。

六次調査で確認された塔の瓦は1108年以前に塔よりずり落ちたと認められ、再建放光寺は1108年以前に失われたと考えられる。この内容は「上野国交替実録帳」の記載内容とも合致する。「上野国交替実録帳」には、長元３年（1030年）以前「1014年か」に定額寺より除く申請のあったことが記されており、除かれるような寺の状況であったことが考えられる。寺が既に崩壊して失われたか、寺の呈をなしていなかったとも考えられる。

第七次調査（昭和56年）　国・県補助による発掘調査　前橋市教育委員会

第七次調査では①塔の規模、性格等の確認②金堂跡の規模の確認・回廊の確認③南東部寺域確認を目的として実施された。

①塔の規模、性格等の確認では、基壇の西端と北端を確認することができた。これは、塔の中心より７ｍをはかり、一辺長が14ｍであることが判明した。（再建整備後の塔基壇）

塔の版築は、４次調査での結果と同様に、13ないし14層の版築が140㎝の厚さで検出された。また、塔基壇が地山を１ｍ近く掘り込んだ「掘り込み地形」であることが認められ、心礎の栗石とみられる石も検出されている。しかし、心礎北2.8ｍより北では心礎で見られたような整然とした版築は見られず、Ⅲ―③層を40～50㎝掘り込んで３～４層積み上げた程度で、心礎付近に比べ簡便な方法になっている。

この、簡便な版築は、金堂である基壇建物と共通し、基壇建物が再建時に基壇を積み直していることから、塔心礎の周辺部も同様の積み直しがあったとも考えられる。また、塔の周囲に厚さ10㎝程度の白色粘土帯が敷設されているが、塔北では粘土面の上に親指大の玉石が10㎝内外の厚さで敷かれていた。塔西では検出されなかったが、塔北の状況が本来とも考えられる。

さらに、白色粘土面の下の土坑中より皇朝十二銭の「隆平永寶」（初鋳年796年）二枚と「富寿神寶」（初鋳年818年）七枚が出土している。このことは、塔基壇の再整備が９世紀の前半以降になされたことを証するものと言える。この９世紀前半の時期は、四次・五次の調査での北辺の掘立柱建物の廃絶の時期にも合致する。

②金堂跡の規模の確認・回廊の確認は、明確な規模・範囲の確定には至らなかった。金堂の東端より24ｍの位置では、版築は検出されず、金堂の東西長は24ｍには達しなかったと推定される。この結果、再建金堂の東西長は16.6ｍ以上24ｍ以下、南北長11.7ｍ＋α ｍであることが確認された。

昭和57年から平成８年度までの周辺での工事に伴う調査について

平成８年度までは、周辺での各種工事に伴い、工事立ち会い型での調査が断続的に行われた。平成２年度までは、周辺での工事は特に見られなかったが、平成２年度にこの区域一帯に敷設されていた上水道の管の敷設替えが行われ、塔心礎の南の道にまず工事が入った。心礎の南からは大量の瓦が出土したが、その中には昭和54年検出の金堂の地覆石片が含まれていた。この工事箇所は既設の水道工事により基壇は失われていたが、壁面に確認することができた。工事溝の北面には基壇版築は認められたものの、南面には見られず、基壇の南限はこの工事溝内と確認された。北面の基壇の位置は、昭和54年検出の基壇の東限の延長線上にあり、版築の構成も同様であった。同一と考えられる。

また、金堂域西の民家の南道路からも版築が認められた。これは、当初、位置から見て、昭和54年の金堂範囲の確認域より西に位置するため、回廊の版築ではないかと考えられたが、その後平成９年度調査の金堂域西の南北の道から検出された版築と同様の構成であるため、平成９年度検出の版築の西限を示すものとわかった。

前述の通り、平成９年度検出の基壇と昭和54年検出の基壇とは位置・版築組成など相違点が多く、別の基壇（金堂）と考えられる物である。

また、寺域の西には時代の異なる南北の溝が多数検出されている。寺域西限を示すと考えられる溝は確認できなかった。

その後の寺域西の建物建設に伴う調査で、浅間Ｂ軽石でほぼ埋まった大溝が確認されている。南北に走り、ほぼ道路に平行していた。

現在人家が密集している寺域の周辺での立ち会いでは、住居後の確認はみられたが、山王廃寺に結びつくものは認められなかった。

第４章　９～11年度の調査（山王廃寺等Ⅰ～Ⅴ遺跡）

第１節　調査の概要

①調査の経緯

平成９年度に、山王廃寺周辺での下水管埋設工事に伴う調査が実施された。現道路の南端寄り幅約１m、深さ約２mで掘削し下水管を埋設する工事であった。工事箇所が現生活道路であるため、基本的には工事の進捗状況に合わせた立ち会い調査とした。調査は層序を中心に遺構確認、記録保存、写真撮影を行い、重要な遺構、遺物が検出、出土した際は協議・検討していく方針となった。また、山王廃寺想定寺域内、特に日枝神社周辺の伽藍配置に関わってくる地点については工事前に発掘調査を行うことにした。工事路線名に即してトレンチ名を設定し、図面作成と遺物収集のために、各トレンチ20m毎に道路に測量鋲を打ち、公共座標・公共水準を取り付けた。

②平成９年度調査（山王廃寺等Ⅰ遺跡）

平成９年度は日枝神社を中心に広範囲にわたって実施された。平成９年８月20日より、１トレンチ日枝神社南西部について発掘調査を実施し、金堂南の版築と思われる層を確認した。この版築は、６次の版築とは位置、版築の土層が異なるものである。８月25日からは各トレンチの立ち会い調査が進められた。翌平成10年２月13日、10トレンチまでの立ち会い調査を終了した。この調査では、１トレンチ西部から「瓦溜まり」が検出された。ここからは、多量の瓦とともに多くの塑像片、壁材片、炭化物等をはじめ金属製品も発見された。個人蔵の１点の塑像頭部や地元に残される４点の資料を除くと初めてまとまった山王廃寺での塑像片検出であり、建物壁材片とあわせ注目された。また、金堂を南北に横切る８トレンチからは金堂の版築が確認され、かつての調査での規模を再検討する必要性が生じた。また、新たに講堂と考えられる建物址を発見したほか、築垣と思われる版築を南辺から検出した。

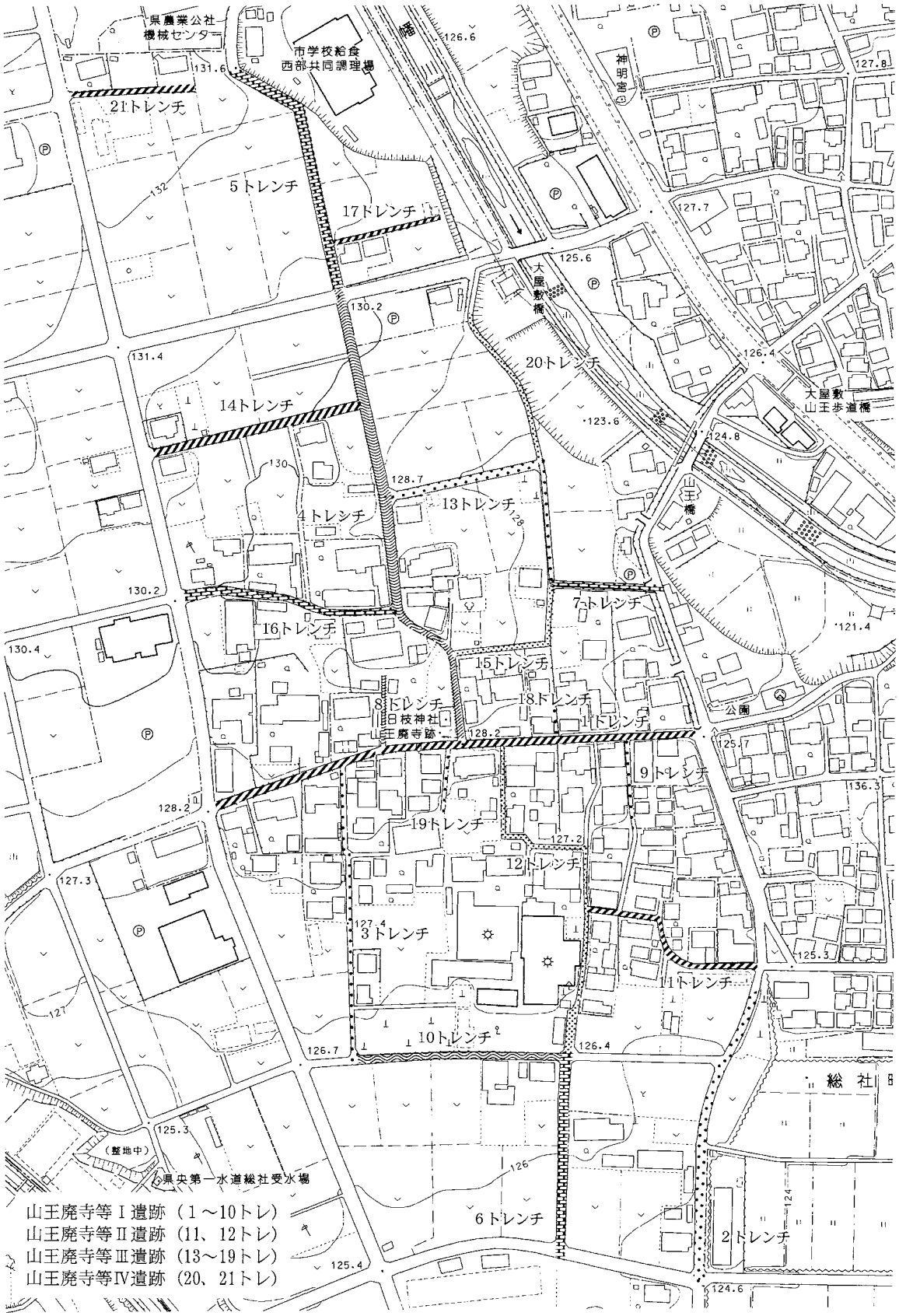
③平成10年度調査（山王廃寺等Ⅱ，Ⅲ遺跡）

平成10年度の調査は、日枝神社の南東部を中心に、６月15日、11トレンチから調査を開始し、10月９日12トレンチまで終了した。寺域の確認が期待されたが、手がかりとなる遺構の確認はできなかった。同年11月９日からは日枝神社北部を中心に13～19トレンチ調査を実施し、翌平成11年１月30日に調査を終了した。この調査では多くの住居址が検出された。

④平成11年度調査（山王廃寺等Ⅳ，Ⅴ遺跡）

本年度の調査は平成11年４月15日から、日枝神社北東、八幡川右岸に沿った20トレンチと、日枝神社北約400mの21トレンチを調査したがともに遺構は確認されなかった。

「瓦溜まり」周辺の調査（Ⅴ）は、日枝神社前の東西道路（１トレンチ）の舗装改良工事に伴い、本発掘調査を行うこととなった。９年度の立ち会い調査で「瓦溜まり」が確認されており、今回本発掘調査となった。平成11年６月21日、９年度調査の北側からトレンチ調査を開始した。長さ約10m、幅１mのトレンチは70～80cmほど掘ると多量の瓦片、塑像片等が出土した。「瓦溜まり」はさらに北へ広がっているが、民地に入っ



第３図　山王廃寺等Ⅰ～Ⅳ遺跡調査区域図

てしまうため、この先の調査は実施できなかった。南側は道路部分の調査可能範囲が幅60cmほどしか残っていなかったが、隣接する都丸保氏のご協力を得、同氏宅の裏庭を調査できることとなった。このトレンチも道路部分同様、多くの瓦片に混ざって塑像片等が出土した。「瓦溜まり」はさらに西、南に広がっていたため、可能な限りトレンチを広げた結果、「瓦溜まり」の西端と思われる部分が確認できた。しかし、南端については調査範囲以南の建物下にまで広がると思われる。7月7日、現地での調査を終了した。

「瓦溜まり」は以下「廃棄土坑」として扱う。

第2節 「廃棄土坑」の調査

①遺構について

9年度の調査の成果を受けて、11年度にはこの地区に実施される道路改良工事に先立つ調査として、この廃棄土坑の調査を実施した。

a．廃棄土坑の規模の確認

b．廃棄土坑の埋没過程の確認

c．埋設遺物の検出と取り上げ

d．遺物の検討による古代寺院の実態解明

この調査は道路建設課の協力等により平成11年6月21日から7月7日まで実施されることになった。しかし、調査区が道路や建物との関係で制約を受けたため、発掘区は限定されざるを得ない状況であった。

平成9年度の調査成果をふまえて設定された今回の調査区は、位置的には確実に確認されている塔、金堂跡からはそれぞれ南西方向に65m、30mの位置にあたり、推定回廊の外郭線からはわずかに15mほどである。

調査は前回の廃棄土坑の規模の確認が目的の一つであったこともあって、まだ後世の手が入っていない部分を中心に設定した。まず、道路敷設部分は環境整備に伴う再三、下水道の敷設工事でその大半は既に破壊され尽くしている状況で、今回の調査区、道路敷の北側部分が僅かに残っていたのみであった。

また、廃棄土坑が延びる南の都丸氏宅の裏庭部分は立木、下水溝、雨水溝など意外に多くの調査を阻害する要因があり、調査区を狭めざるを得ない状況で、小トレンチを4本入れるに止まった。

その結果、限界を突き止めるまでには至らなかったが東西方向で11.6m以上、南北方向で7.8m以上に及ぶ規模が確認できた。なお、東西方向については延びてもあとわずかであろうとみられる。南北方向はさらに南、北双方にかなり延びることが予想された。

1トレンチ　規模：東西10.4m×南北1m×深さ1.7m

廃棄土坑の規模を確認する目的で宅地の裏庭を東西方向に掘削した。4層目から焼土、炭化物が出土しはじめる。この層は西にいくにしたがって低くなり、調査区の西側にくる部分ではAS－B軽石の純層の堆積が認められることから、その下の層に埋まる瓦などはその降下以前に埋められたことが確かである。

遺物包含層はほぼ80cmの厚さである。特に図の右側の部分から中頃にかけて瓦の堆積が顕著に見られ、ほとんど灰・炭化物と瓦だけが積み重なる状況であった。左半分は瓦に交じって塑像片や青銅製品片の錆びたものが多く含まれる。また、最下層は瓦の大型の破片が敷き詰めるようにひと並びしている。

これらの状況は、この穴の埋め戻しが一気になされたものでなく、意識的に三層になされたことがうかが

える。特に、塑像片の埋まり方は瓦に比べると特段に意識して埋設された可能性もうかがえる。その中から三つの塑像頭部片や７つ以上の胴部片など、塑像片の多くが確認されたことが特筆される。

瓦は創建期のものとみられるものも多少出土したが、ほとんどが９世紀ころの国分寺瓦や多くの文字瓦が出土していて、ここに埋められた建物が補修された建物であったことを立証している。

土器は土師器、須恵器坏が見られるが、ともに10世紀のもので、とくに須恵器の高台を逆三角形に張り付け、口唇部を厚く外に折り曲げた技法、高足高台の走りと見られる酸化炎焼成の高台椀はこれらの土器が日常雑器であることから、廃棄土坑への遺物埋納の時期を示すものとして注目される。

２トレンチ　　規模：東西７ｍ×南北0.7m×深さ1.6m

東から西方向に向かって深くなる。４層目からが埋められた層で、４層は焼土、炭化物が交じって出土しはじめる状況は１トレンチと共通している。ただ、この層を覆う３層は黄褐色の砂質土で、周辺では見かけない土である。ことによると廃棄土坑を埋めて整地する際によそから特に持ち込んだ可能性もある。

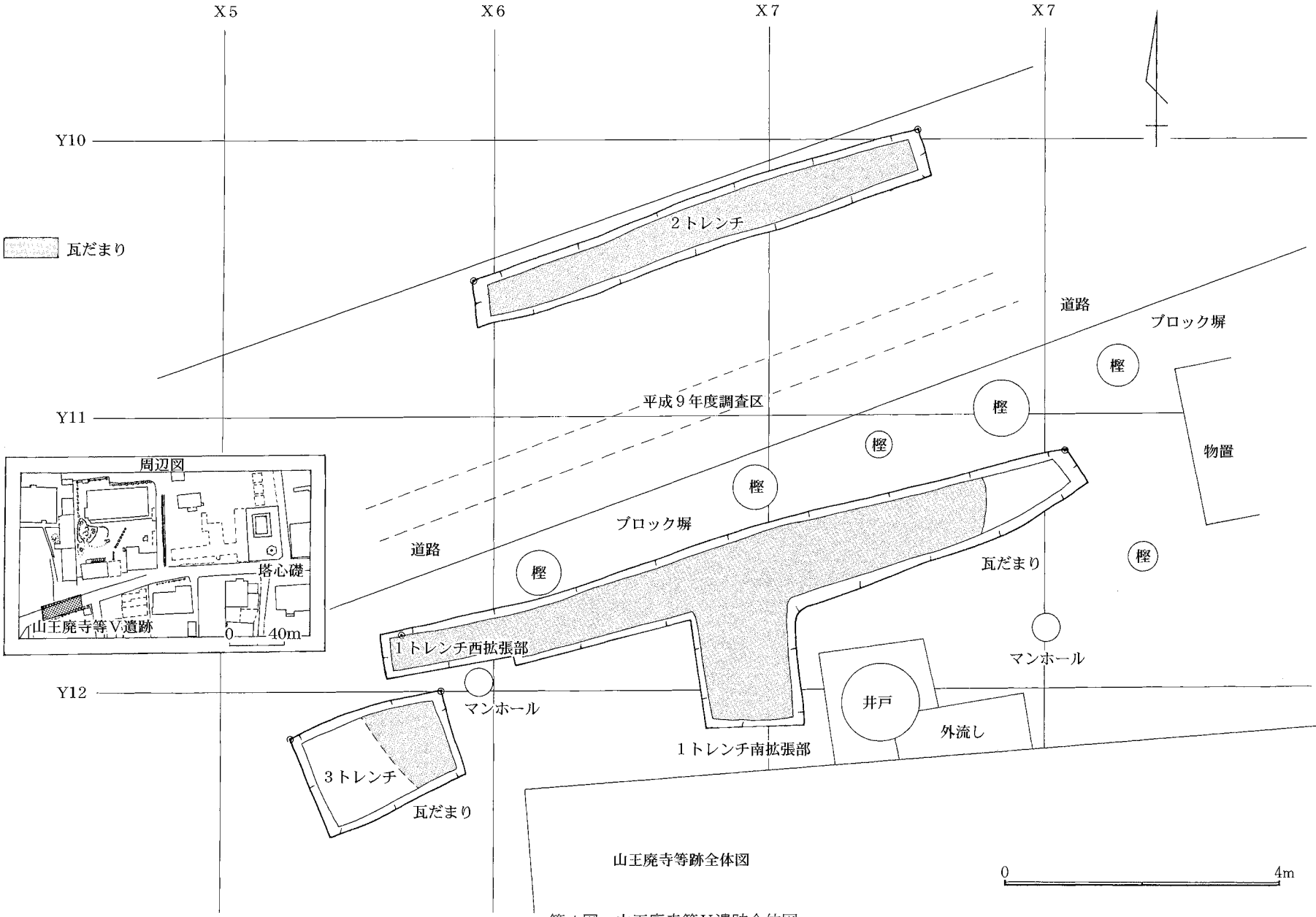
ここでの遺物出土状況は５層から瓦、塑像の小片、青銅品片などが出土している。６層からは塑像片、壁材片などの大型品、７層からはやはり大型瓦片が集中的に出土した。こうした出土状況は１トレンチと共通している。

全体的に深さが１トレンチより浅くなる傾向が指摘できること、遺物のうち瓦の量が少ないこと、壁材片の量が多いことなどが特徴的である。また、土器も10世紀後半のものが認められているほか、青銅製品の錆びたものが多く含まれることが指摘される。穴の深さが１トレンチより浅くなってきていることからも北限もそう遠くはないと考えられる。

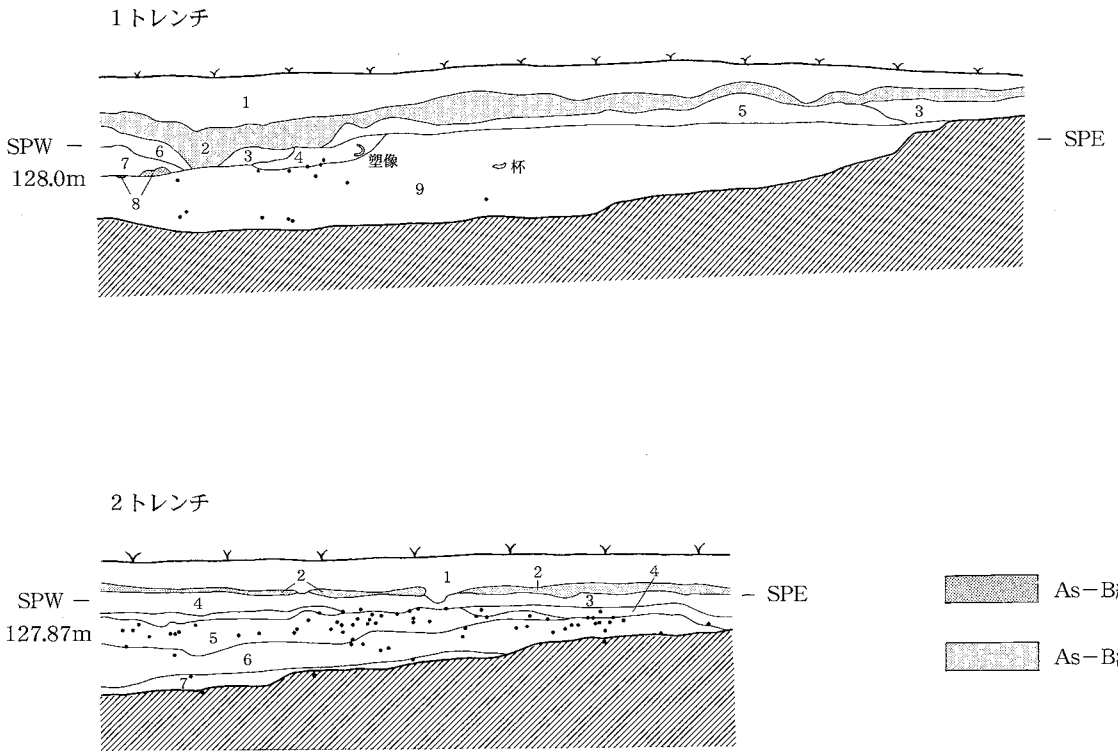
３、４トレンチ　　規模：東西2.3m×南北1.5m（３トレンチ）
規模：東西1.5m×南北1.6m（４トレンチ）

３トレンチは西限を確認するためあけたトレンチで、西に行くに従ってやや浅くなる傾向が見られる。瓦の堆積層も薄くなり、穴の西限が近いことが推察される。瓦、塑像片、壁片の出土量も極端に少なくなり、堆積層の厚さも40cmほどである。特にトレンチ内の点線部分から西（左側）は次第に底部は上がっていくものと思われる。

４トレンチは１トレンチの拡大部分で、基本的に埋まり方、出土遺物に差は見られない。瓦の出土量は最も多く、文字瓦、軒丸の出土量は今回の調査で最高であった。トレンチの南限はまだ収束の気配も見られないことから、おそらく人家の下まで延びていっているであろうことが予想される。



第4図　山王廃寺等Ⅴ遺跡全体図



1トレンチ
1層　黒褐色細砂層　粘性あり　締まりややあり
2層　暗褐色細砂層　粘性あり　締まりあり　As－B混土層
3層　にぶい褐色細砂層　粘性ややあり　締まりややあり　焼土・炭化物粒子１％含む
4層　黒褐色細砂層　粘性ややあり　締まりあり　瓦・炭化物あり
5層　にぶい褐色細砂層　粘性ややあり　締まりあり　炭化物・焼土粒子５％含む
6層　灰褐色細砂層　粘性ややあり　締まりあり　As－B10％含む
7層　灰褐色細砂層　粘性ややあり　締まりあり　As－B20％含む
8層　褐灰色粗砂層　粘性なし　締まりなし　As－B純層
9層　黒褐色細砂層　粘性ややあり　締まり大変あり　瓦・炭化物・焼土粒子あり

2トレンチ
1層　褐色細砂層　粘性ややあり　締まりややあり
2層　にぶい黄褐色細砂層　粘性あり　締まりあり　As－B混土層
3層　暗褐色細砂層　粘性あり　締まりあり　焼土・炭化物粒子３％含む
4層　暗褐色細砂層　粘性あり　締まりあり　焼土・炭化物粒子５％含む
5層　黒色細砂層　粘性あり　締まりあり　焼土・炭化物を多く含む　大型塑像を含む
6層　黒褐色細砂層　粘性あり　締まりあり　焼土・炭化物を多く含む　小型塑像を含む
7層　赤褐色細砂層　粘性なし　締まりなし　瓦が多く含まれる　灰・焼土の混土層

3トレンチ
1層　褐色細砂層　粘性なし　締まりなし
2層　黒褐色細砂層　粘性なし　締まりややあり　As－B主体混土層
3層　にぶい褐色細砂層　粘性なし　締まりなし　As－B
4層　暗褐色細砂層　粘性あり　締まりあり　焼土粒子極小１％
5層　暗褐色細砂層　粘性あり　締まり大変あり　焼土・炭化物粒子10％含む
6層　暗褐色細砂層　粘性あり　締まり大変あり　焼土・炭化物粒子10％含む
7層　灰黄褐色細砂層　粘性ややあり　締まり大変あり　白色軽石５％含む
8層　にぶい黄褐色細砂層　粘性なし　締まりあり
9層　暗褐色細砂層　粘性あり　締まり大変あり　白色軽石３％含む

第５図　山王廃寺等Ⅴ遺跡トレンチ断面図

②出土遺物について

今回の発掘調査では、塑像片をはじめ、多種にわたり多くの遺物が出土した。その多くは火災の影響を受け、原形をとどめるには厳しい状態であったが、大きな成果をもたらした。塑像については他節で詳しい考察をしているので、ここでは瓦を中心にその他の出土遺物について考察してみたい。なお、多量の遺物のため、まだ整理が完了していない状況である。したがって、ここでは現段階で確認されていることを中心に述べる。

・平瓦

出土したコンテナバット150箱もの大量の瓦のうち、平瓦と思われるものが圧倒的に多かった。小破片から完形に近いものまで大きさはさまざまであるが、瓦溜まり下層部に近いほど、破損は少なく、１個体が大きかった。

軒丸瓦80点、軒平瓦94点、文字瓦134点、鬼瓦７点については形を識別できた。

・軒丸瓦

軒丸瓦と思われるものは小破片を含めて80点確認できた。今回出土した軒丸瓦は過去の調査において出土した種類と同様で新たな種類の発見はなかった。

今回出土した種類は、複弁蓮華文が40点と最も多く、次いで国分寺系の瓦が18点と多かった。

複弁蓮華文は小破片のものがほとんどのため、葉数については未確定だが、８葉と確認できるものが１点、そのほかの多くは７葉と思われる。中房内の蓮子が確認できたものはいずれも１＋４＋８で、径4.5cmであった。また、蓮子が１＋８＋８で、径5.5cmのものが２点あり、いずれも木笵により制作されたと考えられる。

国分寺系瓦の多くは単弁４葉で蓮子はクロス状、子葉があり、間弁はＴ字状、素文周縁で表現されているものであった。全体的に凹凸ははっきりしており、縁部のほうが高くなっているものもあった。ほかに単弁６葉蓮華文が２点（うち、１点はほぼ完形）出土した。蓮子は一粒で、子葉があり、素文周縁で全体的に平坦である。

そのほか、素弁８葉蓮華文がほぼ完形で１点出土した。推定径16cmで素文周縁、花弁は中央部に膨らみがあり、先端部が厚く盛り上がっている。間弁は楔形で盛り上がっている。中房は径4.3cmで蓮子が１＋６で配列されている。

・軒平瓦

軒平瓦と思われるものは小破片を含めて94点確認できた。軒丸瓦同様に新たな発見はなかった。

その多くは三重弧文であり、厚さは３～４cmの範囲におさまる。３本の弧は均等な割合でつくられている。これらのうち、２点に突帯がついていた。１点は６㎜のところに高さ６㎜、幅１cmで、もう１点は６㎜のところに高さ４㎜、幅９㎜で11cmの顎部を持つ。なお、ほかの顎部の有無は小破片のため、確認できなかったが、瓦先端部分が厚く形成されているものが多い。

四重弧文は１点確認できた。厚さ３cmで６㎜のところに高さ４㎜、幅８㎜の突帯を持つ。

素文は１点確認され、厚さ3.4cmで6.5cmの顎部を持つ。

そのほか、唐草文と思われるもの１点、隆起線状のもの２点が出土したが、いずれも小破片のため、詳細は不明である。

・鬼瓦

鬼瓦の出土については過去の調査での出土例はなく、今回の新たな発見である。

完形のものはなかったが、いずれも１／４の残存状況で部位は右下２点、左下４点、左上１点の計７点である。材質や形状から３種類のものがみられた。周縁から２～３cm内側に高さ３㎜ほどの隆起線が１条あり、その内側に径1.5～２cm、高さ５㎜の突起物が4.5～5.5cm間隔で配列されている。その内側には２条の隆起線がある。

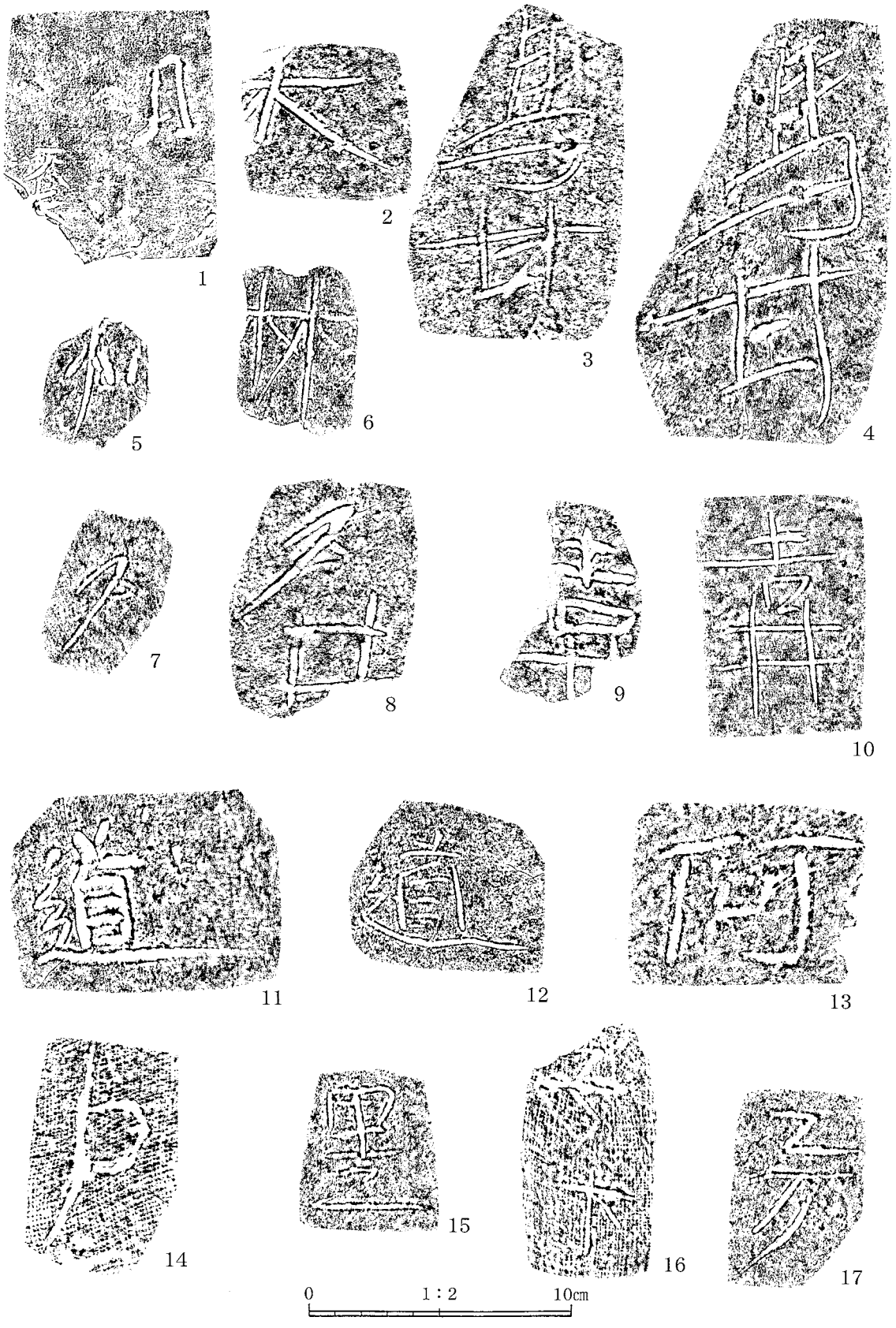
１個体の推定の大きさは横30～40cm、高さ40cmほどになるのではないか。

・文字瓦

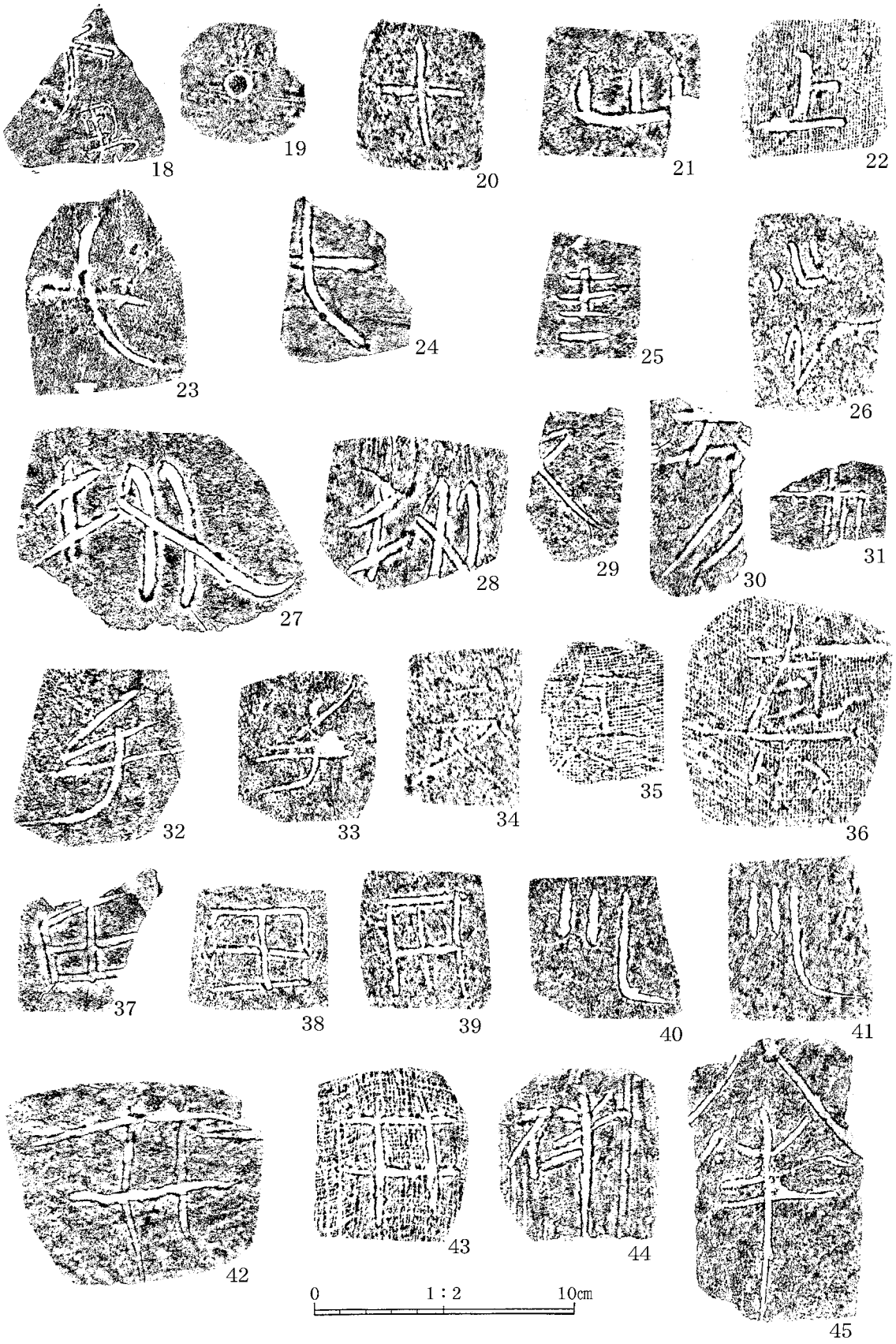
刻線されていたと思われる瓦片は134点、うち文字と思われる瓦片は112点である。過去の調査においても文字瓦は多数出土しており、今回出土した「手」「七」「真」「井」「阿」「道」等は出土していた。今回新たに見つかった字は「林」「男」「川」等である。また、７次で「八伴」は「大伴」、「馬」は「馬甘」と判断ができた。「井」は単独での出土が多かったが、今回「石井」「吉井」と言葉として意味を持つ文字が解明できた。中でも注目すべきは「天長」の文字である。この文字を年号と仮定するならば天長年間は824～833年の10年間である。このことは山王廃寺の存在時期を裏付ける大きな資料となった。

解読できた主な文字

馬甘	３点	道	４点	手	５点	大伴	２点	又	２点
吉井	２点	田	４点	七	３点	林	４点	男	１点
阿	２点	十	１点	真	10点	井	５点	上	２点
石井	１点	石	１点	川	２点	山	３点		２点
	２点		２点		１点	天長	１点		



第６図　山王廃寺等Ⅴ遺跡出土文字瓦（１）



第７図　山王廃寺等Ⅴ遺跡出土文字瓦（２）

第３節　周辺の立ち会い調査

平成９～11年度に実施された山王廃寺等Ⅰ～Ⅴ遺跡の立ち会い調査では、瓦溜まりの他にも多くの遺構が検出された。層序での確認調査であったため、各遺構の全容は不明であったが、以下の通りである。

①講堂跡の版築

金堂と塔の北、約30m付近から約34mにわたって版築を確認できた。版築は総社砂層面である地山を水平に掘り込み、総社砂層のシルト層や粘土質層と上部の黒色土を交互に用い、５～10cmの厚さで６～８層ほど固く締められた状態で確認できた。また、南限と北限の境には、版築で土を積み固める際に土止めにした板枠を置いたと思われる浅い溝が認められた。

②築垣跡と推定される版築

塔心礎から南西に約100mの３トレンチの地点から１mにわたって版築を確認できた。残存状況は悪かったが、５～10cmの厚さに４層の版築があり、黒色土と総社砂層をそれぞれ用いている。版築の存在と周辺の遺構の分布状況から南限を示す築垣跡の版築が推定される。

③金堂跡の版築

塔心礎から西に約30m８トレンチから版築が確認された。版築は約80cmの厚さに15～18層に分けられる。下部は総社砂層をほぼ水平に掘り込んだ上に黒色土をやや厚く敷いている。土の質や色調、厚さから大きく三工程の施行過程が観察でき、下部の版築はやや厚くなされている。中部は褐色土主体に５cmの厚さで形成され、上部は白色土を主体とした層で３cmの厚さで薄く形成されていた。残存状況は中央部が非常に良好であったのに比べ、南北はやや希薄になっていることから、それぞれの端に近いことが推定される。

④住居址

層序での確認だったため、住居址全体の形等は確認できなかったので、基本的に層を掘り込んでいる遺構を住居址とした。そのため、中には不明瞭なものもあったが、１～21トレンチの調査で80軒の住居址が確認された。推定時期は層序や出土遺物等から推定し、時期的には鬼高期～10世紀と幅があり、必ずしも山王廃寺と並行して存在した住居址ばかりではない。これらの住居址は山王廃寺中心部より南部、北部に多く分布しており、これらの住居址は山王廃寺と同時期と考えられるものが多い。

⑤溝・堀

各トレンチからは溝・堀と思われる遺構も検出された。しかし、住居址同様、層序での確認であったので、部分的でありそれぞれの溝、堀のつながりについては不明である。時期についても不明であるが、その多くは中世と考えられる。

⑥その他

その他の遺構として、まず礎石を挙げたい。15トレンチにおいて、幅約70cm、深さ約50cmのピットの下部から37cm×27cm×８cmを測る楕円形の扁平な石が検出された。この地点は昭和51年度第三次調査の際に確認された礎石群Ｂの一部と考えられる。

また、寺域中心部より北の４，13トレンチには瓦がまとまって出土した箇所があった。

第４節　山王廃寺関連出土遺物の分布

山王廃寺跡周辺からの出土遺物には、礎石類、石造遺物、金銅製品、瓦、土器、陶器類、塑像等多岐にわたり、量的にも多く、寺の充実度を垣間見ることができる。概略その分布範囲は塔心礎を中心とすると、東西南北ともに300ｍの範囲に集中している。（出土遺物は時期差が大きく、詳細は検討を委する）

①礎石類

総数23個ほどがチェックされているが、最も集中しているのは心礎のある日枝神社境内で７個程ある。境内入口部にある２個は西方100ｍほどの都丸氏宅より移動したという。径66cmほどで柱座をもつ。社殿の礎石の２つも方向100ｍからの出土という。またそのすぐ左手のものも付近にあったと伝え、心礎東北５ｍほどのものも道を隔てた東民地から移動したものという。これらは比較的はっきりした出土地点をもつ。また、境内東南隅の道路隅切り部分には塔基壇上から落とし込んだといわれる礎石とみられる大石が石垣面に露出している。

金堂跡と推定される部分から道を隔てて西にある、都丸準之助氏宅の母屋下には「家の下１尺程に礎石あり」（群馬県史と市名勝天然記念物調査報告第１輯．昭４）との記述がみられ、北方10数間の位置に瓦が集中して出土するという。同氏宅には庭にももう１個礎石があるが、これは東方八幡川周辺から持ち込んだという。

塔心礎のすぐ南を東西に走る道路が五千石用水と交差する地点にも７個ほどの礎石があるという。これらは以前、尾崎喜左雄氏らにより東門と推定された地点であるが、八幡川、五千石用水工事等の中で取り扱われた可能性があり、原位置との関連はあまりみられない。

その他にも礎石とみられるものも散見されるが、総じて礎石で原位置を止めているものはほとんどない。現状で、早い時点で整地の際、台地の傾斜に沿って、東方の低い方を中心に移動したと推定される。

②石造遺物

石製鴟尾　―　現在は日枝神社境内と都丸民司氏宅の二カ所に置かれているが、以前は塔跡北北東75ｍほどのところから発見されたという。この位置は、推定講堂跡の東北部に当たっている。日枝神社境内のものは講堂跡に隣接するような位置にあり、都丸宅のそれより東北東へ40ｍほど寄ったところに発見されたという。この二つは石質、加工技術等ではやや異なるが、対となって金堂等の大屋根の棟を飾ったとみられる。

根巻石　―　日枝神社境内に保存されている根巻石は、その出土場所は不明である。早くに移動して心礎東方100ｍほどの民家の井戸枠として利用されたことがある。その後も移動したが、日枝神社境内に移されたもので、畑地で発掘したと伝えられている。硬質輝石安山岩製の７葉の蓮弁を表したものでその内径の大きさから塔の心柱の基部を飾ったものとみられている。

露盤　―　都丸氏宅の鴟尾の横に置かれた方形で中央をくり抜いた形の石製品に対し、阿部義平氏は塔の露盤の残片であるとした。中央の柱の通る部分と、周辺のやや丸味をみせる削り面はやわらかい感じを与える。出土地点は不明である。

③金銅製品

・金銅　金具等

都丸茂雄氏所有の畑地から出土したという。錫杖頭部状のもの、宝相華文つきの飾金具で、ところどころ鋲止めしているもの、透かし文つきの金銅板などがある。出土地点は塔心礎の西南220ｍほどの地点。

・銅椀

二点確認されている。１つは塔心礎西南西160ｍほどの昌楽寺廻中道2730番地、谷田勇氏所有の畑地から昭和24年３月に発見された。径16㎝、深さ７㎝、灰白色の肉薄の優れ品である。また、１つは第５次調査で出土したもので心礎から北へ121ｍ、東へ52ｍの地点で錆化の著しい腐銀片である。

・小金銅仏

塔心礎の南西120ｍから検出したというブロンズ像でやや赤味を帯びる。頭部を僧形につくり、右手は下げて与願印を、左手は忍刀印に結ぶ地蔵菩薩像である。円形の台座は蓮弁を省略する。総高7.52㎝、最大幅2.54㎝、重さ112.6ｇ、都丸甲子郎氏蔵。

・銅印

心礎から北へ124ｍ、東へ20ｍの地点で出土した「酒」字印。印台は厚く蒼紐、私印とみられる。

・銭貨

隆平永宝２枚、富寿神宝７枚が出土している。地点は塔の補修の際の粘土層下から癒着して出土した。塔の修復を考える上で貴重な発見である。

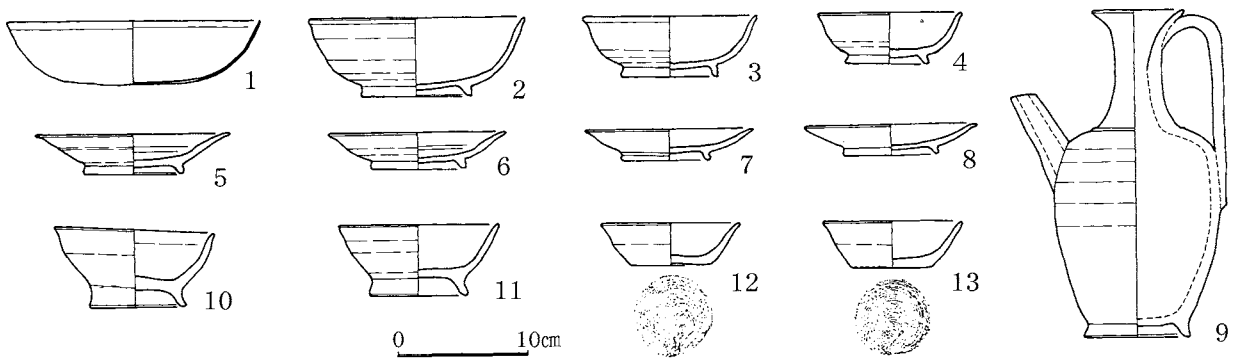
④塑像、土器、陶器等

・塑像

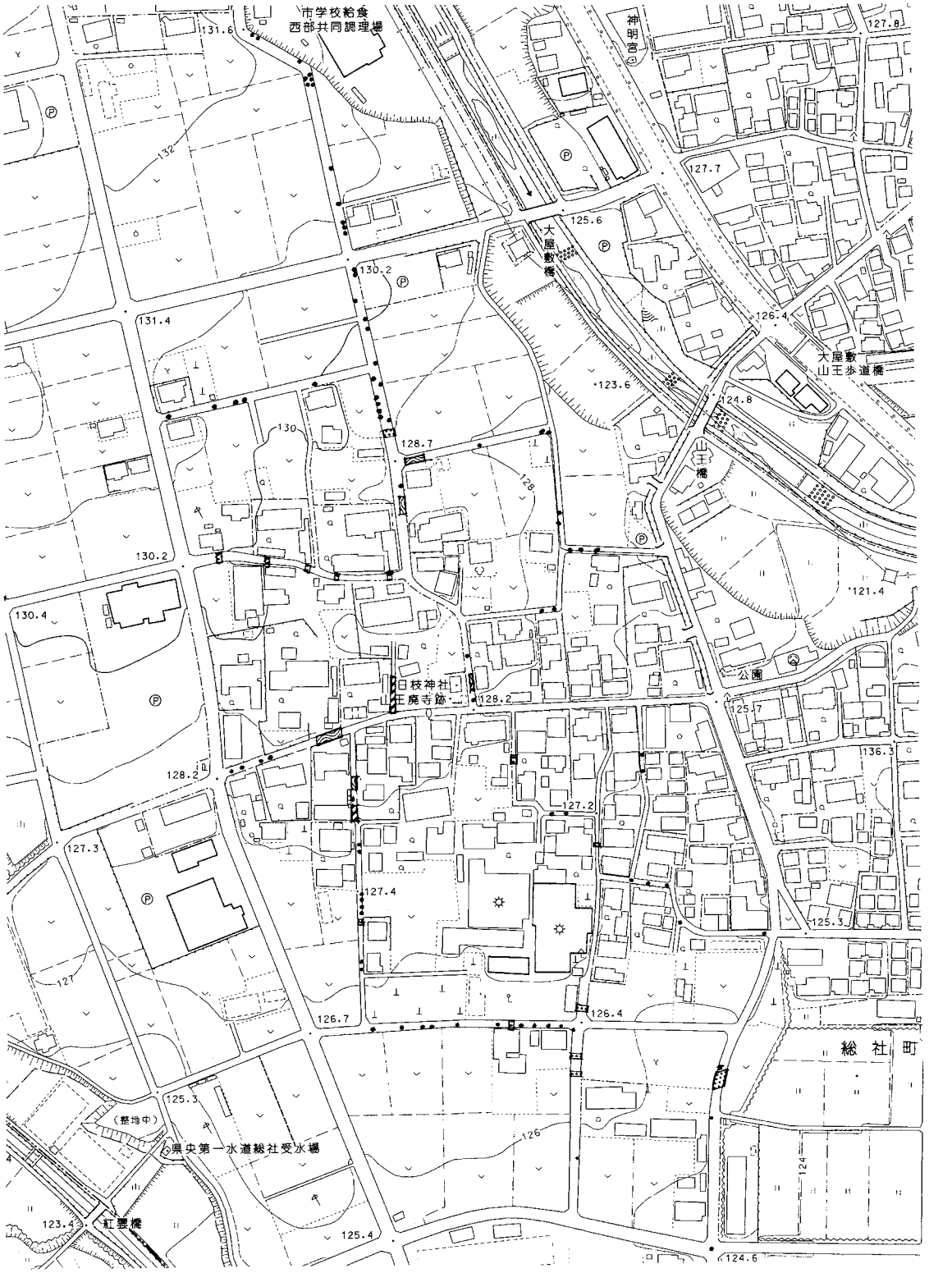
住谷修氏が収集した女人像頭部は、塔心礎東南の道路部分の掘削に際し、出土したものという。これと同巧のまげの向きのみを反対にした像が平成10年度調査の廃棄土坑から出土しているので塔に関連したものであろう。

・土器、陶器

山王廃寺出土土器の中で最も注目されるのは、緑釉水注などの一括遺物で、昭和36年塔心礎南東約200ｍの地点で工事中、偶然発見された。緑釉水注１点、碗３点、皿４点、土師器の高台碗２点、坏２点で他に鉄釘３点が出土した。これらは扁平な石の上面およびその周辺に置かれていたもので、中央に緑釉碗３点が重ねられ、その上に銅碗を伏せて置く。その他の遺物は平石の周辺に配され、緑釉皿４点は伏せた状態、水注は



第８図　山王廃寺出土の緑釉水注等一括遺物（県史通史編２）



第９図　山王廃寺等Ⅰ～Ⅴ遺跡調査状況図

北西側に石にもたせかけるように置かれていたという。これから考えると扁平石を壇としてその上に法具とし埋納したとみられる。(梅沢重昭「緑釉水瓶とその伴出遺物」群馬県歴史博物館報6）これらの緑釉は東濃産のものとみられる。

これと伴出した須恵器は酸化炎焼成のもので高足高台に変化する時点のものとみられる。これら一群の土器の年代観は、緑釉陶器は10世紀後半代、須恵器、土師器の年代観では10世紀も終末に近い頃とみられる。この他、第7次の発掘調査で確認された廃棄土坑から一括出土した土器群をはじめ、断片的に出土した山王廃寺に関連する土器が多い。

第5章　特　論

第1節　山王廃寺出土の塑像等について

瀬山　里志（VI）
松田誠一郎（I・II・III・V・VII）
松田　妙子（IV）

I．出土遺物の概要

II．塑像片の概要
1．像の種類と大きさ
2．製作技法

III．当初の安置空間
1．出土塑像の特徴
2．塔の規模
3．塔本塑像とその安置空間
4．問題点――金堂安置の仏像と根巻石――

IV．塑像の主題について
1．塔本四面具について
2．山王廃寺の塔本四面具について

V．塑像の形式と作風
1．神将像の復原
2．神将像の個体数と尊名の問題
3．神将像の形式――甲制・服制――
4．女性像の服制
5．菩薩像の胸飾
6．作風

VI．塑像の彩色文様について
1．団花文
2．扇状花
3．まとめ

VII．総括と問題点
1．総括
2．根巻石と塑像との関係――塔の創建と塔本塑像の製作――
3．製作背景をめぐる問題点――総社古墳群との関係を中心に――

Ⅰ．出土遺物の概要

平成９年と11年の両年度に山王廃寺等遺跡より出土した遺物の点数は、表１のとおりである。総点数のうち約７割は塑像片で占められ、残りの大部分は壁体で、そのほか若干の金属製品などが含まれる（**表１**）。

塑像片は、仏像をはじめとする人物像・動物像などと山岳・磯形の２種に大別されるが、数量的には、塑像片の総点数の９割以上を山岳・磯形が占める。像の表面には彩色仕上げの痕跡が残るものが多く、一部の断片には金箔押しや彩色文様･切金文様の痕跡も残る。壁体には、彩画の痕跡をとどめるものが含まれるが、構図やモチーフなどは判別できない。金属製品のうちには、小仏像の台座、風鐸の残欠が含まれている。

遺物はいずれも火中している。塑像の多くは素焼き状になり、塑土に混ぜられたスサや心木はほとんど焼失している。また、人物像のうちには、高温のために顔料を塗った像の表面が沸騰し、気泡を生じているものもみられる。

表１　遺物の種類と出土点数

遺物の種類	総数(割合%)	内訳(割合%)	平成９年度出土分	平成11年度出土分
塑像片	2,203 (69.6)	2,203 (100.0)	245	1,958
人物・動物など		137 (6.2)	31	106
山岳・磯形		2,066 (93.8)	214	1,852
壁体片	936 (29.6)		73	863
金属製品	21 (0.7)		18	3
不明	3 (0.1)		0	3
合　　計	3,163 (100.0)		336	2,827

Ⅱ．塑像片の概要

１．像の種類と大きさ

はじめに述べたとおり、塑像は大別して人物・動物などの像、器物、雲、山岳・磯形などに大別される。

人物像としては、如来・菩薩・神将の仏教尊像のほか、裸形および袈裟を着けた羅漢像、邪鬼とみられる裸形像、婦女や胡装の俗人像などがある。それらの中には、原初像の像高が推定できるものがある（**表２**）。仏・菩薩・天の諸像は、２尺以上の像高であったと推定できる。最大の如来像または菩薩像で、像高３尺ほどである。比丘像は、これらの尊像に比べるとやや小さめで、像高は２尺未満と推定される。女性や胡人など供養者とみられる諸像は、いずれも比丘像以下の大きさで、１尺以上、２尺未満の像高と推定される。

動物像としては、猪の頭部のほか、駱駝の前脚部とみられる断片が出土している。

器物としては、垂幕風の彩色文様のある箱形天蓋とみられる断片や、箱形の器物とみられる、金箔を押した稜角のある断片などが出土している。

雲については、巻き込みのある飛雲頭部のほか、金箔地に顔料で縞模様を描いた飛雲脚部などが出土している。特に雲脚については、表面から裏面にかけて仕上面が回り込んでいる断片があり、群像の安置空間の問題を考える上で興味深い。

山岳･磯形（注１）については、前後に山襞を重ねた細長い山頂部、テーブル状の平らな上面をもつ磯形、水平方向の層理やくぼみをあらわした崖、斜面の一部などがある。これらは、群像を安置する空間を形づくっていたとみられる。

表2　人物像の大きさ

※「No.」の項の番号は、作品解説の番号である。
「推定像高」の項の［立像］［坐像］は、それぞれ「立像として」、「坐像として」の意味である。

No.	断　　片	姿勢	推定像高（cm）
1	菩薩像胸部 9A80336	不明	60- 70［立像］
2	菩薩像または天部像垂髻　11A962718	不明	60- 70［立像］
4	如来像または菩薩像膝部 11A962670	倚像	70- 80
5	如来像または菩薩像左脚部 11A962764	立像？	90-100［立像］
6	神将像頭部 11A962820	不明	60- 70［立像］
7	神将像右上半身 11A962825	不明	60- 70［立像］
8	神将像右肩・右上腕部 11A962749	不明	60- 70［立像］
9	神将像左肩・左胸部 11A962761	不明	60- 70［立像］
10	神将像背面左肩部 11A962748	不明	60- 70［立像］
12	神将像肩甲・鰭袖 11A962713	不明	60- 70［立像］
14	神将像右胸部 11A962731（2片）	不明	60- 70［立像］
15	神将像左胸部 11A962754	不明	60- 70［立像］
17	神将像腹部 11A962753	不明	70- 80［立像］
18	神将像下腹部 11A962810	立像	60- 70
19	神将像下腹部 11A96369＋11A962755	立像	60- 70
20	神将像右腰部 11A962702	立像	60- 70
23	神将像右前腕部 11A962756	不明	60- 70［立像］
24	神将像左前腕部 11A962762	不明	60- 70［立像］
31	比丘像上半身 9A80335	不明	45- 55［立像］
32	比丘像左肩・左上腕部 11A962824	不明	45- 55［立像］
33	女性像頭部 11A962821	不明	20- 25［坐像］
34	女性像面部 11A962822	不明	-25-［坐像］
35	女性像胸部 11A962763	不明	20- 25［坐像］
36	女性像上背部・左上腕部 11A962765	不明	20- 25［坐像］
37	胡人像上半身 11A962823	不明	-30-［立像］

2．製作技法

a）人物像の心木・塑土

人物像では、角材などに藁や紐などをあらく巻き付けたものを心とし、これに下土・中土・仕上土の順で塑土を3層に盛るものが多い。腕や天衣遊離部などの末端部では、銅線に紐などを巻いたものを心として、塑土を2～3層に盛る。その製作技法は、法隆寺塔本塑像（和銅4年〔711〕）をはじめとする、7～8世紀の塑像遺品と共通する（注2）。

心木は、ほとんどのものが焼失するが、比丘像上半身（9A80335、31［解説31、以下、番号のみ記す］）と女性像胸部（11A962763、35）の像内には、炭化した心木が残存する。両例とも、体部内では長方形の断面を示すが、頸部内では面取りがされている。材質的には、比丘像の心木に広葉樹環孔材を用いていることが肉眼で確認できる。近畿地方に残る塑像では、心木にはヒノキなどの針葉樹やクス（広葉樹散孔材）を用いるものが多い。一方、関東地方や東北地方には塑像の遺品が少なく、心木の樹種が確認できるものはない。しかし、両地方の平安前期（9世紀）以後の木彫像では、広葉樹環孔材のケヤキを使用する作例が多くみられる。山王廃寺塑像の心木は、現地で調達した材料を用いている可能性が高い。

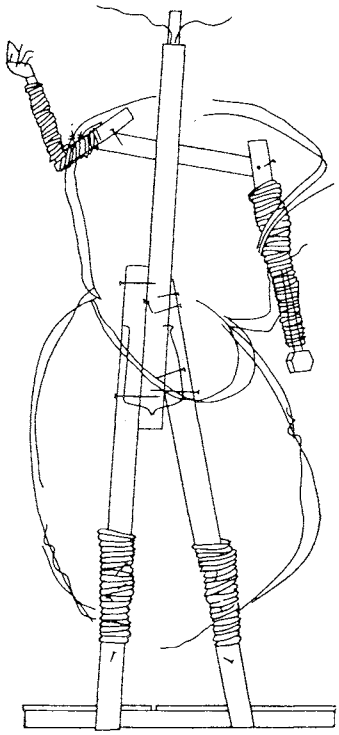
構造的には、心木じたいが残存する前記２例のほか、菩薩像胸部（9A80336、１）、菩薩像または天部像垂髻（11A962718、２）、神将像頭部（11A962820、６）、比丘像左肩・左上腕部（11A962824、32）、女性像頭部（11A962821、33）、女性像面部（11A962822、34）、胡人像上半身（11A962823、37）などに、像内中央を通った心木の痕跡が確認される。

また、神将像右上半身（11A962825、７）では胴部内右寄りを通る心木の痕跡がみられ、神将像沓先（11A962716、27）では足首を貫通する心の痕跡がみられる。これにより、像高60～70cmの神将像では、頭部から胴部に至る像内中央を通る心木のほか、胴部内の左右や両脚部内を通る心木があったことが推定できる。頭部から腰部に至る心木と、腰部から両脚部に至る心木を組み合わせる心木構造は、東大寺法華堂執金剛神立像（**挿図１**）や東大寺戒壇堂四天王立像にみられる（注３）。新薬師寺十二神将立像では、より複雑な心木構造がみられ、頭部から上半身に至る心木、上半身の左右を通る心木、腰部から両脚部に至る心木を組み合わせ、この骨格心木に横桟や斜め材を打ち付けて補強している（注４）（**挿図２**）。山王廃寺の胴部右側の心木痕は、東大寺像のような両脚部心木の上部か、新薬師寺像のような上半身の骨格心木の一部に当たるものと考えられる。

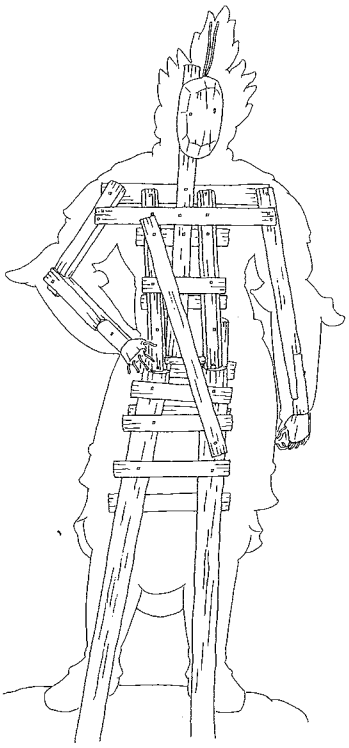
心木に巻き付ける繊維については、神将像頭部（11A962820、６）、比丘像上半身（9A80335、31）、女性像胸部（11A962763、35）、胡人像上半身（11A962823、37）に、藁や紐などを巻き付けた痕跡が確認できる。また、女性像頭部（11A962821、33）では、頸部内にガーゼのような細かい布目が残り、木心の頸部に細布を巻いていたことが確認できる。小像の頸部では塑土の盛りつけが薄くなるため、藁や紐でなく、厚みのない布を巻いたものとみられる。小像の心木細部にみられる丁寧で合理的な仕事ぶりに、作者の製作態度が端的にあらわれている。

塑土は、仏・菩薩・天・比丘の各像では、切藁をスサとして多く混ぜた小石混じりの粗い土を下土とし、細かい植物繊維（麻の繊維か？）や切藁をスサとして混ぜた砂混じりの土を中土とし、篩にかけた粒子の細かい土を仕上土として用いる。大きさの小さい供養者像でも、女性像面部（11A962822、34）や胡人像上半身（11A962823、37）では、同じような３種類の塑土が用いられる。女性像頭部（11A962821、33）や女性像胸部（11A962763、35）では、下土に藁スサを用いず、細かい植物繊維のスサを混ぜる。その組成は前述した２～３尺像の中土に近い。女性像胸部ではこの下土と、これと同様の組成をもつ中土、細かい仕上土を順に３層に盛り、女性像頭部では中土が省略され、下土・仕上土の順に２層に塑土を盛っている。

腕や天衣遊離部などの末端部は、頭・体の根幹部を塑形した後、銅線



挿図１．東大寺法華堂　執金剛神立像（構造図）
西川杏太郎『塑像』（注２参照）より転載。原図辻本干也氏。



挿図２．新薬師寺　珊底羅大将立像（構造図）
信太司ほか『天平塑像の心木構造の研究―新薬師寺十二神将像―』（科研報告書、注４参照）より転載。

を取り付け、そのまわりに藁や紐などを巻き付けて心とし、これに塑土を2～3層に盛って造形する。

腕については、菩薩像胸部(9A80336、1)、神将像肩甲・鰭袖(11A962713、12)、神将像右前腕部(11A962756、23)、比丘像上半身(9A80335、31)に、0.3cm角の銅線の心が残存する。また、神将像右肩・右上腕部(11A962749、8)、神将像左前腕部(11A962762、24)には、心が通っていた孔があり、その内面に紐などを巻いた痕跡がのこる。塑像の腕の心は、一般に等身以上の大きさの像では木材が使われるが、法隆寺塔本塑像や薬師寺塔本塑像など、2～3尺以下の小像では銅線を用いることが多い。銅線の心は、木材の心に比べ、塑土の重さを支える力は弱いが、簡単に自由な形を作ることができる利点がある。山王廃寺の塑像が、腕に銅心を用いているのは、小さな像だからであろう。

天衣遊離部については、菩薩像胸部(9A80336、1)、神将像右腰部(11A962702、20)、天衣(11A962714、40)に銅線の心が残存する。銅心の太さは腕の心よりも細く、0.1cm角のものが用いられる。前の2断片では、本体の彫刻面に直角に近い角度で突き刺した、銅心の付け根の部分がのこる。後の1断片では、天衣の外縁ちかくに銅線1本が貫通し、その銅線をくるんで折り畳まれた目の細かい布の痕跡が確認できる。これにより、天衣遊離部では、平行にわたした2本の銅線に細布を巻いたものを心としていたことがわかる。

末端部の塑形では、藁スサを混ぜた粗い土を使わないことも多く、神将像肩甲・鰭袖(11A962713、12)、神将像鰭袖(11A962711、13)、神将像右手先(11A962715、25)、神将像沓先(11A962716、27)、左足先左半部(11A961871、39)では、砂混じりの細かい土や細かい篩土などを2～3層に盛っている。

細部では、細かい仕上土を用いて別に作った装身具や着衣の一部などを、仕上面の上に貼り付ける技法も見られる。たとえば、菩薩像胸部(9A80336、1)では、肉身の面をいったん仕上げた上で、胸飾(亡失)や天衣(過半亡失)を別に作って貼り付け、神将像右腰部(11A962702、20)や神将像左腰部(11A962750、21)では、腰部の表甲の面をいったん仕上げた上で、天衣を別に作って貼り付けている。

また、神将像頭部(11A962820、6)では、黒目に硬い球状のものを嵌め込んだ痕跡がみられる。7世紀末から8世紀にかけての塑造や乾漆造の着甲像のうちには、黒目にガラスや鉱物の球を嵌入する作例がみられる(**表3**)。この黒目にも、もとは鉱物ないしガラス質の玉が嵌入されていたと推定される(注5)。

表3　黒目に鉱物などを嵌入する7～8世紀の着甲像

	所蔵者など	作　品　名	技　法	時　代	黒　目　の　材　質
1	東京芸術大学	天王立像	木造	7C後半	本体・邪鬼の黒目に木片嵌入。
2	川原寺裏山遺跡	鳥頭・牛頭・馬頭	塑造	7C末	目の周囲にガラス質の融解物。
3	興福寺	迦楼羅・鳩槃荼立像	脱乾漆造	734年	鉱物またはガラスの玉を嵌入。
4	東大寺法華堂	執金剛神立像	塑造	740年代	鉱物またはガラスの玉を嵌入。
5	東大寺戒壇堂	四天王立像	塑造	740年代	鉱物またはガラスの玉を嵌入。
6	新薬師寺	十二神将立像	塑造	740年代	吹きガラスの玉を嵌入。
7	法隆寺食堂	四天王立像	塑造	8C後半	もと硬い玉状のものを嵌入か。

b）人物像の仕上げ法

人物像の表面は、一部の断片に金箔押しや彩色を施した痕跡がのこる。しかし、いずれも火災による高熱のため、金箔や顔料は消失ないし変質しており、製作当初の色調をとどめている部分はない。表面の加飾法として特に注目されるのは、繧繝彩色と切金の使用である。繧繝彩色については、神将像右肩・右上腕部(11A962749、8)の肩甲内区に繧繝小札文(金箔地)の痕跡があり、胡人像上半身(11A962823、37)の筒袖衣右身頃に繧繝半裁唐花文の痕跡がある。切金については、神将像右肩・右上腕部(11A962749、8)の鰭袖に四菱入り斜格子文の痕跡がみられる。そのほか、神将像左腰部(11A962750、21)の天衣垂下部には、衣文線

の峰にそって切金線とみられる金線が残存する。

彫塑の彩色に切金文様を使用する例としては、中国では、山東省青州市博物館蔵石造如来立像（青州市竜興寺跡出土、北斉・６世紀）や敦煌莫高窟第427窟諸尊像（隋・６世紀末～７世紀初）などが早い例で、唐の遺品では、陝西省西安碑林博物館蔵白大理石製宝生如来坐像（唐・８世紀後半）に精密な文様がみられる。わが国では、まず法隆寺金堂四天王立像（７世紀半ば頃）に切金線の使用がみられ、続いて法隆寺中門金剛力士立像(和銅４年〔711〕)の衣部残欠（阿形像岩座周辺より発見）に３個の菱形を組み合わせた簡単な切金文様がみられる(注６)。直線と菱形などを組み合わせた本格的な切金文様の例としては、東大寺戒壇堂四天王立像（740年代）の袴や鰭袖などにみられるものが古い（注７)。新薬師寺十二神将立像（740年代）のうち２体にも、窄袖(さくしゅう)や胸甲に簡単な四菱文の切金文様がみられるが、袴や鰭袖などの地文様は黄土で描かれ、切金は用いられていない(注８)。山王廃寺塑像片にみられる切金文様は、戒壇堂四天王像のそれとともに、面的な広がりをもつ本格的な切金文様の古例として注目に値しよう。

衣文線の峰にそって切金線を置く手法は、絵画の遺品では、ボストン美術館蔵法華堂根本曼荼羅（唐または日本、８世紀）にみられるが、彫塑の遺品では、東寺西院不動明王坐像（貞観９年〔867〕）や和歌山県慈尊院弥勒仏坐像（寛平４年〔892〕）などが古い例で、神将像左腰部の金線が切金線と認められれば、日本の彫塑作例としては最古のものとなる。

繧繝彩色と切金文様を併用する山王廃寺塑像の彩色は、奈良県内にのこる中央の遺品と比較しても、最も本格的な部類に属するもので、像高２尺前後の大きさの像としては、たいへん入念な仕上げ法であるといえる。

ｃ）器物の塑土

器物とみられる断片については、心木に関する手がかりは確認できない。塑土については、箱形天蓋（11A962724ほか、72～79)は、人物像と同様の３層構造である。ただし、下土の藁スサは長めで量が多く、また、厚く盛られた下土に対して中土は薄く（0.5cm前後）均一に盛られる。こうした点には、人物像の塑土構成との違いがみられる。

ｄ）飛雲の心・塑土・仕上げ法

飛雲の心については、飛雲脚部（9A80309、67）の内部中央に銅心（0.2cm×0.2cm）が残存している。断面では銅心と塑土は密着しており、銅心に直接塑土を盛っているようにみえる。飛雲脚部(11A962717、65)には、内部中央に心が通っていたとみられる溝状の窪み（幅1.0cm前後）がある。その溝の内側は、硬いものが接していたような滑らかな面であり、もとは木材の心に直接塑土を盛っていたと考えられる。

塑土については、飛雲脚部(11A962717、65)では、砂混じりの土を厚く盛って雲脚の概形を造り、緻密な仕上土を表面に薄く盛る２層構造である。飛雲脚部(11A962752、66)でも、概形を形づくる小石や砂の混じった土と、表面に薄く盛られた緻密な仕上土の２層が残存している。

仕上げ法については、飛雲脚部（11A962752、66）や飛雲脚部（9A80291、68）に、金箔地彩色がみられる。いずれも雲脚の稜線にそって約1.0cm前後の幅で金箔地が帯状に残るように、稜線間の谷の部分に縞状に顔料を塗っている。飛雲頭部（11A962730、64）・飛雲脚部（11A962717、65）・飛雲脚部（9A80309、67）は、高熱のため金箔地が細粒状に変質しているが、同じような金箔地彩色であったことが確認できる。飛雲の輪郭や雲気の方向に沿って帯状に彩色を施す手法は、初唐期・盛唐期の敦煌莫高窟壁画――たとえば第220窟(唐・

貞観16年〔642〕）西壁龕頂の仏説法図や同第328窟西壁龕頂の弥勒仏説法図――に広くみられる。しかし、金箔地に色帯を配する雲の表現は類例が少なく、華麗な仕上げ法として注目される。

e）山岳・磯形の心木・塑土・仕上げ法

山岳・磯形の心木については、山岳頂部（11A962767、80）の内部中央に丸い穴（径1.8cm）があり、丸い木の棒を心としていたと推定される。この穴の内面には、藁や紐などを巻き付けた痕跡は確認できない。法隆寺の塔本塑像では、水平方向に突出する部分においては、数本の腕木を組み合わせた木骨に葭束の木舞を渡したものを心とし、垂直方向に突出する部分においては、ベースとなる土台に数本の木串を縦に突き刺して心としている。山王廃寺の山岳頂部は、法隆寺塔本塑像の垂直方向に突出する山塊とは異なる心木構造を示している。

塑土については、人物像の場合とは異なり、下土と仕上土の2層構造を基本とする。下土は小石混じりの粗い土で、スサとして大量の切藁を混ぜた痕跡がみられる。人物像の下土に比べると、切藁の長さは2cm前後と長めのものが多い。仕上土は砂混じりの土で、スサとして切藁や細かい植物繊維を混ぜた痕跡がみられる。その組成は、人物像の中土とほぼ同じである。下土で山岳や磯形の概形を造った上で、仕上土を人物像の場合より厚めに盛って、山襞・層理・窪みなどの細部を造形している。

表面の仕上げについては、当初は彩色仕上げであったとみられ、彩色の下地とみられる白色を呈する顔料が多くの断片に残存する。

また、彩色の残る磯形（11A962708＋11A962726・11A962818・11A962819、95・96・97）では、白色下地の上層に暗紫色や黒色を呈する粒子の粗い顔料で、不整形の模様が描かれる。法隆寺塔本塑像の東面の山岳には、稜線にそって樹木を表現した彩色が点々と残存するという（注9）。山王廃寺の磯形に残る文様についても、こうした樹木をあらわす彩色との関連を考えるべきかもしれない。

なお、磯形（11A962827、84）の上面には、小孔2（その1＝0.2cm×0.7cm、深さ1.5cm、その2＝0.5cm×0.2cm）があり、銅心などを突き刺していたとみられる。法隆寺塔本塑像の山岳には、樹木が植えられていたことが13世紀の記録にみえ、その一部に当たるとみられる銅板製の樹木が発見されている（注10）。この磯形の小孔も、銅板製の樹木を植えた痕跡の可能性がある。

III．当初の安置空間

1．出土塑像の特徴

大量の塑像片が発掘された山王廃寺等Ⅴ遺跡は、塔跡、金堂跡からそれぞれ南西に65m、30mの位置にあり、推定回廊の外郭線から15m外側にある。同遺跡は、10世紀末頃における同寺火災の後、天仁元年〔1108〕の浅間B軽石降下以前に、瓦・建築部材・壁材・塑像・焼土などの遺物を片づけて埋納するために掘られた穴である。穴は東西方向11.6m以上、南北方向7.8m以上の規模をもつ。穴の底面は東側から西側にかけてゆるやかに傾斜し、遺物包含層は東側が高い層序を示していて、東側、すなわち伽藍中心部の方向から遺物を引きずり込んでいるようすがうかがわれる。

出土した塑像片については、次の点が注目される。

①如来・菩薩・神将・比丘形などの仏教尊像を含むが、その大きさは最大でも3尺像以下である。

②仏教尊像のほか、女性や胡人などの俗人像が含まれ、その大きさはいずれも２尺像より小さい。

③人物像の大きさに関して、仏教尊像は俗人像よりも大きく、仏教尊像の中でも仏・菩薩・天部像が比丘像よりも大きいなど、人物像の尊格と大きさの間に法則性がみられる。

④猪・駱駝の像が含まれる。

⑤金箔を押した飛雲が出土している。

⑥大量の山岳・磯形が出土している。

これらのことから、仏教的な主題に基づいた山岳表現をともなう群像を想定することができる。とりわけ③の事実は、多くの仏教尊像や俗人像が、もと一群の群像を構成していたことを示唆している。また、主題に関しては、④の事実から、ブッダの説法や浄土のようすをあらわした場面とは異なる、仏伝などの説話に基いた場面が含まれていたことが推定できる（主題の詳細に関しては、第IV章を参照）。

こうした山岳表現をともなう群像としては、**表４**に示した諸作例があり、その安置空間としては、塔の初層を想定するのが最も自然である（注11）。

表４　山岳表現をともなう群像

	寺院・堂宇	作　品　名	技法	時　代	備　　考
1	四天王寺・塔	仏像４体・霊鷲山像	不明	648年	現存せず。『日本書紀』大化４年２月８日条。
2	法隆寺・塔	塔本四面具	塑造	711年	維摩変・弥勒浄土・分舎利・涅槃。
3	薬師寺・塔	釈迦八相像	塑造	730年頃	一部現存。『七大寺巡礼私記』、『縁起』。
4	上淀廃寺・塔	塔本塑像	塑造	７～８Ｃ	俗人像・山岳など出土。
5	興福寺・塔	四仏浄土変	不明	765年以前	現存せず。『興福寺流記』。６と類似か。
6	元興寺・塔	四仏浄土変・山	塑造?	765年以後	現存せず。『七大寺巡礼私記』。

２．塔の規模

山王廃寺の塔については、昭和56年度の第７次発掘調査により、基壇の１辺長が14m（唐尺換算で47尺、以下、特に断らない場合は唐尺［１尺＝29.8cm］を用いる）であることが確認された（注12）。一方、山王廃寺の創建年代については、創建期瓦の示す形式や、金堂の補修用瓦の銘にみえる寺名「放光寺」が、辛巳歳〔681〕銘の《山ノ上碑》（高崎市山名町所在）の碑文にみえる「放光寺」に比定できることから、７世紀第３四半期と考えられている（注13）。

飛鳥時代（538～710年）の塔に関しては、1990年に発表された宮本長二郎氏による地域別の統計がある（注14）。この統計に近年の発掘成果を加えて、基壇規模の順に配列しなおしたものが**表５**である。これによれば、基壇規模が確認できる飛鳥時代の塔は全国に60例以上あり、山王廃寺の塔基壇はその中でも最大級の部類に属している。その規模は、元薬師寺や若草伽藍の例よりわずかに大きく、山田寺の例より一回り大きい。塔の建物規模については明らかでないが、基壇の規模からある程度推定できる。すなわち、**表５**より基壇規模と建物規模の両方が確認できる41例を抽出して、基壇１辺の長さに対する建物１辺の長さの比率の統計をとると、40%以上、65%未満の範囲に分布し、そのうち約80%の作例が、45%以上、60%未満の範囲に分布していることがわかる（**表６**）。このことから、山王廃寺の塔の建物は、１辺の長さが21.15尺以上、28.2尺未満の範囲に収まる蓋然性が高いと考えられる。

一方、金堂については、基壇の規模が東西16.6m以上、24m以下、南北11.7＋α mであることが判明したが（注15）が、基壇や建物の全貌は明らかではない。しかし、その建物規模については、津金澤吉茂氏によ

り、円形柱座を造り出した礎石から推定される柱径と基壇規模の範囲から、次の3通りの可能性が提示されている（注16）。

①桁行5間（17.70m＝59.4尺）×梁行4間（14.16m＝47.5尺）

②桁行5間（15.54m＝52.1尺）×梁行4間（12.32m＝41.3尺）

③桁行7間（21.56m＝72.3尺）×梁行4間（12.32m＝41.3尺）

山王廃寺は東西に塔と金堂が並ぶ法起寺式の伽藍配置をもつ（注17）が、塔の建物規模については、1塔―1金堂式の伽藍における塔と金堂の大きさの関係からも考えることが可能であろう。いま試みに**表5**より、塔と金堂の両方の規模が確認できる、1塔―1金堂式の寺院12例を抽出して、金堂規模の順に並べると**表7**になる。これをみると、1塔―1金堂式の寺院の場合、金堂と塔の規模の間に一定の関係があることがわかる。すなわち、梁行40～50尺の金堂をもつ寺院では、塔の面積が金堂の面積の30％前後となるものが多く、これより金堂規模の小さい寺院では、その比率が40％を越えるものが多い。山王廃寺金堂の想定規模はいずれも梁行50尺以上であり、仮に面積比30％として塔の規模を算出すると、①の場合で塔の1辺の長さが29.1尺、②の場合で25.4尺、③の場合で29.9尺となる。このうち①の29.1尺と③の29.9尺は、基壇一辺の長さ47尺に対してそれぞれ61.9％、63.6％を占め、基壇に対して建物が大きくなり過ぎる嫌いがある。②の25.4尺ならば、基壇1辺の長さに対して54％となり、建物と基壇の大きさの調和がよく保たれる。

一般に、塔の建物は方3間を原則とし、柱間は中央と左右を均等にするか、中央が左右よりやや広くするのが普通である。この点を考慮すれば、山王廃寺の塔の建物規模は、中央・左右とも8尺とする24尺か、左右を8尺とし中央を9尺とする25尺が、もっとも蓋然性の高い想定となろう。

表５　飛鳥時代の塔の規模

【表の見方】

１．飛鳥時代寺院のうち、塔の遺構が確認できるものについて、塔と金堂の規模を表示した。

２．寺院は、塔の基壇の大きさの順に配列した。基壇が同規模の場合は、情報量の多い方を先にした。

３．長さの単位はいずれも尺。「尺度」の項、無印は唐尺、＊印は高麗尺、＊＊印は曲尺。

４．「→46.3」は46.3尺以下、「55.7→」は55.7尺以上、「41→43」は41尺以上、43尺以下「、—」は不明の意味。

５．19樫原廃寺（京都）は、八角塔のため、建物規模は不記載とした。

６．「塔建物／基壇」・「塔中央間／１辺」の項、単位は％。

７．「金堂柱間数」の項、「３×２#」は、３間×２間の身舎に３間×２間の四面庇を付けた特異な平面をもつ建物。

８．データは次の文献によった。

宮本長二郎「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」（『法隆寺と斑鳩の古寺』〔『日本古寺美術全集２』〕）、1979年11月、集英社。

宮本長二郎「飛鳥時代の建築と仏教伽藍」（『法隆寺から薬師寺へ』〔『日本美術全集２　奈良・飛鳥の建築・彫刻』〕）、1990年10月、講談社。

名張市教育委員会『夏見廃寺　第一次発掘調査概要』、1985年７月、名張市遺跡調査会。

泉南市教育委員会『海会寺　海会寺遺跡発掘調査報告書』、1987年９月、泉南市教育委員会。

淀江町教育委員会『上淀廃寺』（『淀江町埋蔵文化財調査報告書』第35集）、1995年３月、淀江町教育委員会。

林博通「穴太廃寺（滋賀県）」／水口昌也「夏見廃寺（三重県）」／奥村清一郎「高麗寺跡（京都府）」／仮屋喜一郎「海会寺跡（大阪府）」／村田喜久夫「上植木廃寺（群馬県）」（『仏教芸術』174）、1987年９月、毎日新聞社。

岩永省三「奥山廃寺の発掘調査」／花谷浩「元薬師寺の発掘調査」／山下隆次「尼寺廃寺の発掘調査」（『仏教芸術』235）、1997年11月、毎日新聞社。

No.	寺院名	所在地	塔の年代	塔						金堂				
				尺度	基壇の１辺長	建物の１辺長	中央柱間	建物／基壇	中央間／１辺	尺度	基壇規模	柱間数	桁行	梁行
01	大官大寺	奈良	７Ｃ後		125	50	10	40.0	—		179×96	９×４	153	70
02	下野薬師寺	栃木	８Ｃ		53	—	—	—	—					
03	吉岡廃寺	岡山	７Ｃ末		53	—	—	—	—					
04	英賀廃寺	岡山	７Ｃ後		53	—	—	—	—					
05	山王廃寺	群馬	７Ｃ後		47	—	—	—	—		55.7→×39.2→			
06	尼寺廃寺	奈良	７Ｃ後		→46.3	24	8	52.1	33.3					
07	野中寺	大阪	650年		46	19.5	6.5	42.4	33.3			５×４	30	
08	穴太廃寺	滋賀	７Ｃ末		45.3	—	—	—	—		75.2×64.1	３×２#	47.7	36.2
09	元薬師寺	奈良	７Ｃ末		東46 西42.6	24 —	8 —	52.2? —	33.3 —		99×61			
10	若草伽藍	奈良	７Ｃ初	＊	45	—	—	—	—	＊＊	72×64			
11	新堂廃寺	大阪	７Ｃ後		45	—	—	—	—		54×48			
12	海会寺	大阪	７Ｃ後		44	22	8	50.0	36.4		70×？			
13	小山池廃寺	広島	７Ｃ末		44	22	8	50.0	36.3					
14	山田寺	奈良	676年		43	22	8	51.2	36.4		65×56	３×２#	45	36
15	伊丹廃寺	兵庫	７Ｃ後		43	22	9	51.2	40.9		70×54	５×４	47	34
16	宮の前廃寺	広島	８Ｃ		43	21	7	48.8	33.3					
17	高麗寺跡	京都	７Ｃ後		42	—	—	—	—		53.7×45	５×４	34	30
18	斉尾廃寺	鳥取	７Ｃ末		41	21	7	51.2	33.3			５×４	42	35
19	樫原廃寺	京都	７Ｃ中		41									
20	篠尾廃寺	福井	７Ｃ後		41	—	—	—	—					
21	奥山久米寺	奈良	７Ｃ後		40.5	22.5	7.5	55.6	33.3					
22	禅寂寺	大阪	７Ｃ後		40	21	8	52.5	38.1					
23	新治廃寺	茨城	７Ｃ末		40	18	6	45.0	33.3	＊＊	54×45	５×４	42	32
24	奥山廃寺	奈良	７Ｃ後		約40	22	7.3	55.2	33.3		78.5×64.1			
25	南滋賀廃寺	滋賀	７Ｃ後		40	—	—	—	—	＊＊ ＊＊	中　75×60 小　44×40	５×４		
26	佐野廃寺	和歌山	８Ｃ		40	—	—	—	—					
27	猪名寺廃寺	兵庫	７Ｃ後		40	—	—	—	—					
28	大寺廃寺	鳥取	７Ｃ後		40	—	—	—	—		46×40			
29	天王平廃寺	島根	７Ｃ後		40	—	—	—	—					
30	白鳥廃寺	香川	７Ｃ末		40	—	—	—	—					

31	橘寺	奈良	7C後	*	39	20	6.7	51.3	33.3	*	61×51.5		42	34
32	川原寺	奈良	7C後		39	20	6.7	51.3	33.3		中　80×64 西　72×49	5×4	56	40
33	土師百井廃寺	鳥取	7C後	*	39	18	6	46.2	33.3					
34	立光寺	徳島	7C後		39	21.8	7.8	55.9	35.8					
35	美濃弥勒寺	岐阜	7C後		39	21	7	53.8	33.3		50×41.5	5×4	36.5	28
36	虚空蔵寺	大分	7C後		38.5	17.5	6.5	45.4	37.1					
37	定林寺	奈良	7C前		38	19.5	6.5	52.1	33.3					
38	上野廃寺	和歌山	7C末	*	38	18	6	47.4	33.3					
39	寺町廃寺	広島	7C後		38	24	8	63.2	33.3					
40	宇佐弥勒寺	大分	7C後		38	18	6	47.4	33.3			5×4	68.5	57
41	夏見廃寺	三重	8C中		38	18	6	47.4	33.3		49×38.9	3×2#	29.2	22.9
42	寺本廃寺	山梨	7C後		38	18	—	47.4	—					
43	久米廃寺	岡山	8C		38	—	—	—	—					
44	北野廃寺	愛知	7C後		38	—	—	—	—		50×42			
45	開法寺	香川	7C後		37.7	19.5	6.7	51.7	34.4					
46	結城廃寺	茨城	7C後		37	—	—	—	—					
47	多賀城廃寺	宮城	8C前		37	21	7	56.8	33.3		66×55	5×4	46	35
48	西條廃寺	兵庫	7C後		36	21	7	58.3	33.3					
49	石井廃寺	徳島	7C末		36	18	6	50.0	33.3		47×40.7	5×4	31.5	25.2
50	大海廃寺	岡山	7C後		36	—	—	—	—		50.5×44	5×4	32.5	26
51	額田廃寺	三重	7C前		36	—	—	—	—		62×50			
52	宮井廃寺	滋賀	7C後	*	35	19	7	54.3	36.8					
53	法隆寺	奈良	7C後	*	35	18	7.5	51.4	41.7	*		5×4	39	30
54	法輪寺	奈良	7C後	*	35	18	7.5	51.4	41.7	**	49.5×42.5			
55	法起寺	奈良	706年	*	35	18	7.5	51.4	41.7	**	53×42			
56	田辺廃寺	大阪	7C末		34.5	15.4	5.4	44.6	35.1		60×39		46	25
57	縄生廃寺	三重	7C後		34	18	6	52.9	33.3					
58	飛鳥寺	奈良	6C末	*	34	—	—	—	—	* *	中60.5×50 東西53×40	5×4	44	31
59	広渡廃寺	兵庫	7～8C		34	—	—	—	—					
60	来住廃寺	愛媛	7C後		33	19.5	6.5	59.1	33.3					
61	四天王寺	大阪	7C前	*	32.5	21	8	64.6	38.1		65×54	5×4	40	
62	賞田廃寺	岡山	7～8C	*	32.5	19.5	7.5	60.0	38.5					
63	中宮寺	奈良	7C初	*	32	19.5	6.5	60.9	33.3			5×4	36.5	29.2
64	上淀廃寺	鳥取	7C後		中32 南32	19.5 —	6.5 —	60.9 —	33.3 —		48×42			
65	高井田廃寺	大阪	7C中		29	—	—	—	—		60×49	5×4	41	31
66	上植木廃寺	群馬	7C後		28	—	—	—	—		40.6×33.2			
67	檜前寺	奈良	7C後		—	25.5	8.5							
68	下太田廃寺	兵庫	7C後		—	21	9							
69	観世音寺	福岡	7C後		—	20	7	—	35.0					
70	崇福寺	滋賀	7C後		—	18.5	6.5			** **	弥勒72×52 小　38×38	5×3 3×3	54 27	30 27
71	法安寺	愛媛	7C後		—	17	6	—	35.3					
72	比曽寺	奈良	8C		—	16.5	5.5		33.3					
73	幡多廃寺	岡山	7C末		—	—	—	—	—					
74	末松廃寺	石川	7C後		—	—	—	—	—					

表６　飛鳥時代塔の基壇規模と建物規模の比率（建物１辺長／基壇１辺長）

比率 Ｘ％以上～Ｙ％未満	件数　　＊印＝１件	割　合
40～45％	＊＊＊	7.3％
45～50％	＊＊＊＊＊　＊＊＊	19.5％
50～55％	＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊　＊＊＊＊	46.3％
55～60％	＊＊＊＊＊　＊	14.6％
60～65％	＊＊＊＊＊	12.2％

表７　飛鳥時代寺院の塔と金堂の大きさ

No.	寺 院 名	金堂規模	塔１辺長	面積比 塔／金堂	伽藍配置	備　　考
15	伊丹廃寺	47×34	22	30.3％	法隆寺式	
47	多賀城廃寺	46×35	21	27.4％	観世音寺式	
14	山田寺	45×36	22	29.9％	四天王寺式	
18	斉尾廃寺	42×35	21	30.0％	法隆寺式	
31	橘寺	42×34	20	28.0％	四天王寺式	高麗尺使用
61	四天王寺	40×？	21	—	四天王寺式	高麗尺使用
53	法隆寺	39×30	18	27.7％	法隆寺式	高麗尺使用
35	美濃弥勒寺	36.5×28	21	43.2％	法起寺式	
63	中宮寺	36.5×29.2	19.5	41.4％	四天王寺式	高麗尺使用
49	石井廃寺	31.5×25.2	18	40.8％	法起寺式	
07	野中寺	30×？	19.5	—	野中寺式	
41	夏見廃寺	29.2×22.9	18	48.5％	法起寺式	

３．塔本塑像とその安置空間

塔本塑像は塔初層の須弥壇上に安置されるが、須弥壇の規模は塔の中央柱間が基準になる。塔本塑像を安置する唯一の伝世遺構である法隆寺五重塔では、主屋建物の１辺の長さが641.6cm(18高麗尺、１高麗尺＝約35.6cm)、中央柱間が268.0cm（7.5高麗尺）で、須弥壇（第３次）１辺の長さが約420cmである（注18）（**表８**）。中央柱間の1.5倍ほどの一辺長をもつ大形の須弥壇上に築かれた塑土の山岳によって、心柱や四天柱は完全に塗り込められている。もと塔本塑像が安置されていた平城薬師寺の東西塔は、基壇の１辺の長さが1330cm（44.6尺、西塔）、建物主屋の１辺の長さが709.1cm（23.9尺、東塔）、中央柱間が234.5cm（7.9尺、東塔）である（注19）。山王廃寺の塔主屋の推定規模は、平城薬師寺東塔とほぼ同程度である。

塔本塑像の人物像の大きさ(像高)に注目すると、法隆寺像の場合、北面主尊の涅槃釈迦仏像（北１号）は99.5cm、南面主尊の弥勒仏倚像（南１号）は81.0cmで、東面主尊の維摩居士坐像（東１号）・文殊菩薩坐像（東２号）はそれぞれ52.4cm、45.2cmである。主尊以外の菩薩坐像（北３・４号）は57.0～58.5cm、着甲坐像は30～45cm前後、比丘坐像・俗人坐像は20～45cm前後、雲中人物坐像は12～25cmほどである（注20）。薬師寺像の場合、東塔分の立像心木で35～50cm前後、坐像心木で20～30cm前後、鎌倉時代の木彫後補像のうち八部衆立像で50cm前後、俗人立像で30～50cm前後、裸形横臥像で33.2cm、俗人坐像で20cm前後である。西塔分の塑像片については、小形・中形・大形の３類に大別され、小形像は立像に換算して像高30cm前後、中形像は同じく像高60cm前後とされ、大形像には主尊級の如来坐像(坐高60cm以上)、及びこれより大きい涅槃釈迦とみられる像が含まれるという（注21）（**表８**）。

山王廃寺の人物像の推定像高は、主尊級の立像または涅槃像で90～100cm、倚像で70～80cmで、その大きさは法隆寺塔本塑像の主尊像とほぼ同大である。菩薩像・神将立像の推定像高は60～70cmで、その大きさは薬

表8　法隆寺五重塔・薬師寺東西塔と山王廃寺塔

【表の見方】

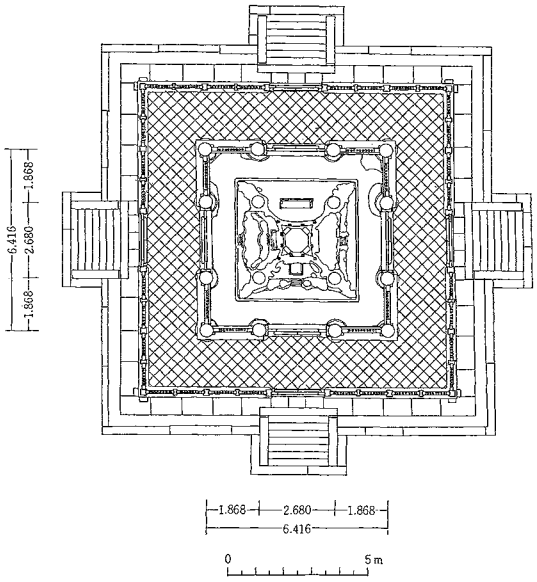
1．単位はcm。＊印は後補像。

2．「人物像の大きさ」の項　[立]は、立像と仮定して。[坐]は、坐像と仮定して。[立/涅槃]は、立像または涅槃像と仮定して。「雲中」は、雲中にあらわされた人物像。「如/菩」は、如来または菩薩。＊印は後補像。後補像の大きさは、全高である。

※薬師寺西塔跡出土塑像片中には、涅槃像の一部かともみられる大形の衣部断片があり、その大きさは、主尊級の如来坐像（坐高60cm以上）より更に大形かとされる（奈良国立博物館・奈良国立文化財研究所『研究報告　薬師寺西塔跡出土塑像断片』、1981年3月、57ページ）。

寺院名	基壇1辺長	主屋1辺長	中央柱間	須弥壇1辺長	人物像の大きさ（像高）			
					立像	横臥	倚像	坐像
法隆寺塔	1248	641.6	268.0	約445	なし	99.5	81.0	菩薩　52.4-58.5 維摩　45.2 着甲　30.0-47.5 比丘　20.5-46.2 俗人　17.1-47.4 雲中　12.8-25.1
薬師寺東塔	1330	709.1	234.5		心木　31.4-53.2 八部＊　-56.9 俗人＊23.4-58.8 天部＊22.0-46.7	33.2＊		心木　18.0-36.4 俗人＊17.6-
薬師寺西塔	1400				中形　-60- 小形　-30-	※		大形如来　-60
山王廃寺塔	1400				如/菩　90-100[立/涅槃] 菩薩　60-　70[立] 神将　60-　70 比丘　45-55[立] 胡人　-30-[立]	70-80	女性 20-25- [坐]	

師寺西塔塑像の中形像に対応し、東塔の鎌倉後補の八部衆立像よりやや大きい。比丘像（推定立像高45～55cm）は薬師寺西塔の中形像と小形像との中間の大きさで、胡人像（推定立像高30cm前後）・女性像（推定坐像高20～25cm前後）は、法隆寺塔本塑像の俗人像のうち比較的小形のものと対応する大きさである。全体として、山王廃寺等Ⅴ遺跡から出土した各種人物像は、法隆寺や薬師寺の塔本塑像と相前後する大きさをもつものといえる。特に主尊級の像のスケールが法隆寺塔本塑像と一致することは、その安置空間の広さを考える上で参考になろう。



挿図3．法隆寺五重塔初層　平面図
『奈良六大寺大観　第1巻　法隆寺1』
（1972年8月、岩波書店）より転載。

先述したように、山王廃寺塔の中央柱間は8尺（238.4cm）ないし9尺（268.2cm）程度と推定される。四天柱の柱間に須弥壇を築くと、須弥壇の1辺長は柱間距離より四天柱1本分だけ狭くなり、柱径を50cmと仮定すれば、柱間8尺の場合で188.4cm、同9尺の場合で218.2cmの広さになる。東西南北各面の奥行は、根巻石や心礎から推定される心柱の直径（約96cm）（注22）を考慮すると、柱間8尺の場合で96.2cm、同9尺の場合で111.1cmである。これでは、3尺の主尊像を中心とする山岳を背景にした群像の安置空間としては手狭

である。須弥壇は、法隆寺五重塔の第２次須弥壇（１辺長約400cm）（**挿図３**）と同じように、四天柱を取り込むだけの広さをもつものと想定するのが自然であろう。その１辺長は、法隆寺五重塔の第２次須弥壇と中央柱間との関係を基準にすれば、中央柱間８尺の場合で12尺（357.6cm）前後、中央柱間９尺の場合で13.5尺（402.3cm）前後が目安となろう。各面の奥行は前者の場合で130.8cm、後者の場合で153.2cmである。

４．問題点――金堂安置の仏像と根巻石――

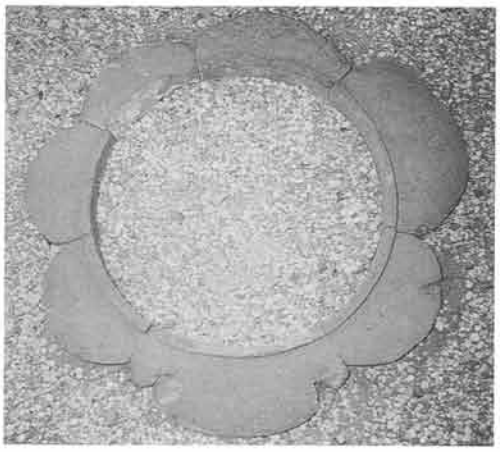
これまで述べてきた通り、山王廃寺等Ｖ遺跡より出土した人物像や山岳などの塑像は、その大部分が塔本塑像の断片であると考えられる。それでは、Ｖ遺跡には、金堂に安置されていた仏像は含まれていないのであろうか？　Ｖ遺跡と伽藍中枢部との位置関係からみれば、同遺跡より出土した塑像片のうちに金堂関係のものが含まれている可能性も一応考えられる。

金堂の建物については、先に紹介した津金沢氏による３つの想定案があるが、ここでは、そのうち規模が最も小さく、塔の基壇規模とも整合性の高い、②案＝桁行５間(15.54m＝52.1尺)×梁行４間(12.32m＝41.3尺)を中心に、金堂本尊像の問題について検討してみたい。７～８世紀の桁行40～60尺規模の仏堂について、その本尊像の法量が確認できる主な例を挙げると、**表９**のようになる。これによれば、桁行40尺以上の規模をもつ川原寺・観世音寺・飛鳥寺・当麻寺の各金堂には、脇侍菩薩像をともなった丈六ないし周丈六（丈六より一回り小さいサイズ）の本尊像が安置され、斉尾廃寺の金堂には、１～1.6丈級の尊像が安置されていたことがわかる。これらの例からみれば、山王廃寺の金堂にも脇侍菩薩像をともなう、丈六ないし周丈六の本尊像が安置されていた蓋然性が高いと考えられる。

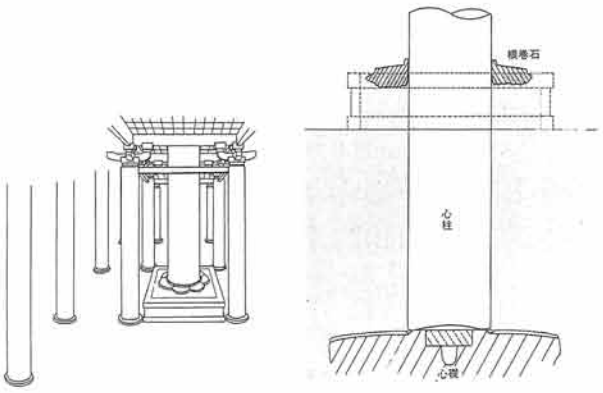
他方、山王廃寺等Ｖ遺跡から出土している大量の塑像片のなかには、丈六級の大型像や１丈級の菩薩像の断片は見いだすことができない。未発掘の部分が残されている現時点では断定はできないが、Ｖ遺跡に金堂の主要尊像が埋納されている可能性は低いと言わざるを得ない。

次に問題になるのが、日枝神社の境内に置かれる輝石安山岩製の根巻石（**挿図４**）である。この根巻石については、津金沢氏によって塔心柱の根巻石であることが論証され、塔初層の須弥壇上に安置する復原案が提示されている（注23）（**挿図５**）。同氏は、山王廃寺の塔を《山ノ上碑》（681年）以前の創建とした上で、根巻石を塔創建時の製作と推定する。

根巻石を塔初層の心柱の周囲に配置したと考えると、同じ初層の須弥壇上に置かれるべき塔本塑像との関



挿図４．山王廃寺　根巻石



挿図５．山王廃寺　根巻石復原案（津金澤吉茂氏による）
津金澤吉茂論文（注16参照）より転載。

係が重要な問題となろう。津金沢氏の案のように須弥壇上に根巻石を配置する場合、同じ須弥壇上に塔本塑像を安置すれば、塔本塑像の背景をなす山岳によって、入念に加工された根巻石はほとんど隠されてしまう。また、初層の基壇上に根巻石を配置する場合には、塔本塑像を安置するべき須弥壇じたいの存在を否定しなくてはならない。つまり、根巻石と塔本塑像は同時には存在し得ないことになる。

解決するべきこの問題点については、塔本塑像の製作年代について検討を加えた上で、あらためて考えることにする。

表9　7～8世紀の桁行40～60尺の仏堂とその安置仏像

寺院名	堂　宇	堂宇規模		像種（技法・時代）	法　量	備　　考
		柱間数	桁行×梁行			
川原寺	中金堂 西金堂 （7C後）	5×4 不明	56×40 不明	如来または菩薩（塑造・7C後） 如来または菩薩（塑造・7C後）	1.6丈 1丈	右耳22.8cm 右耳16.5cm
観世音寺 （福岡）	金堂	不明	54×34.5	阿弥陀如来（鋳銅） 脇侍菩薩2 四天王4	1.6丈	金堂規模は資財帳による。仏像は現存せず。
飛鳥寺	中金堂 東西金堂	不明 5×4	不明 44×31	釈迦坐像（銅造・609年） 脇侍菩薩2＝亡失	1.6丈	本尊像は中金堂安置。
斉尾廃寺 （鳥取県）	金堂 （7C）	5×4	42×35	如来または菩薩（塑造・7～8C） 菩薩（塑造・7～8C） 如来（塑造・7～8C）	1～1.6丈 1～1.6丈 0.8丈	口唇・足先 髻 螺髪
当麻寺	金堂 （7C末）	5×4	41×32	弥勒仏坐像（塑造・7C末） 脇侍像2＝亡失	222.8cm	丈六の約85%。 建物は13C。

IV．塑像の主題について

山王廃寺の塑像片は、塔の四面に安置されていた塑像群と山岳（塔本四面具）の断片とみられる。本論は、現在確認している出土断片から、山王廃寺塔の四面がどのような主題で構成されていたかを、試みに論じるものである。

1．塔本四面具について

塔本四面具で、8世紀に遡る唯一の現存例は、奈良県法隆寺五重塔（和銅4年〔711〕以下、法隆寺塔と省略）で、塑造による山岳と群像で構成されている（**挿図6**）。塔本四面具の塑像片が出土している寺院には、奈良県川原寺、同県本薬師寺、同県薬師寺、三重県天花廃寺、滋賀県雪野廃寺、同県崇福寺などがある。また、奈良県追分廃寺、滋賀県宮井廃寺、岡山県久米廃寺などから出土した塑像片については、塔本四面具であった蓋然性が認められている（注24）。

挿図6．法隆寺五重塔東面　維摩経変相

文献上では、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』に法隆寺塔、『興福寺流記』に興福寺五重塔、『薬師寺縁起』・『七大寺巡礼私記』に薬師寺東西塔、『七大寺日記』・『七大寺巡礼私記』に元興寺五重塔、『日本書紀』大化4年〔648〕2月8日条・『太子伝古今目録抄』に四天王寺五重塔の各

塔本四面具についての記載がある(以下、興福寺塔、薬師寺塔、元興寺塔、四天王寺塔と省略)。これらの史料により、興福寺塔以下の塔本四面具についても、そのようすをある程度知ることができる。

ところで、毛利久氏は古代の塔本四面具について、四方四仏形式・仏伝形式・法隆寺形式・釈迦及び四天王形式の4つに分類されている（注25)。

四方四仏形式は、4面とも如来を中心に諸菩薩等を安置するもので、天平2年〔730〕建立の興福寺塔、称徳～光仁朝〔764～781〕建立の元興寺塔などにみられる。『興福寺流記』から、興福寺塔の塔本四面具は天平宝字年間〔757～765〕には完成、東面に薬師、南面に釈迦、西面に阿弥陀、北面に弥勒の各如来、及び菩薩・天・眷属・供養者等を安置したことが知られる。興福寺塔の塔本四面具が塑造であったという確証はない。一方、元興寺塔は、『七大寺日記』・『七大寺巡礼私記』から山岳があらわされていたことが確認でき、塑造であった蓋然性が高い(注26)。元興寺塔は興福寺塔を模して建立されたという説があり、興福寺の塔本四面具も、元興寺塔と同様に塑造による山岳と群像で構成されていたと推定される（注27)。

仏伝形式は、釈迦の伝記中の重要な場面をあらわしたもので、天平2年頃に建立された薬師寺東西塔に代表される。『薬師寺縁起』によれば、東塔の四面は入胎・受生・受楽・苦行、西塔の四面は成道・転法輪・涅槃・分舎利の場面であった。また、薬師寺塔の塔本四面具は、出土断片と『七大寺巡礼私記』から、塑造による山岳と群像で構成されていたことが確認できる（注28)。

法隆寺形式は、四方四仏形式と仏伝形式が混合したものとされる。塔の東面に維摩・文殊の問答、南面に弥勒説法を配し、西面・北面にそれぞれ分舎利・涅槃の仏伝の場面を配する。この仏伝中の2場面は、塔が本来、釈迦の舎利を安置する場所であることを考えると、その機能に相応しい選択である。また、弥勒説法の場面は、釈迦の後継者をあらわしたものと考えることもできる。法隆寺塔は山岳と像群で構成される塔本四面具の全容を知るうえで、貴重な伝世遺品である。

釈迦及び四天王形式は、四天王寺塔にみられる。『日本書紀』・『太子伝古今目録抄』によれば、四天王寺塔には、「霊鷲山像」と「大小2組の四天王像」が安置されていたことがわかる（注29)。毛利久氏は、この「霊鷲山像」を釈迦の常住説法をあらわした「霊鷲山説法像」と解釈し、釈迦像が併置されていたと推定されている。この寺の創建は、物部守屋討伐に際し、聖徳太子が四天王の小像を作り、勝利を願ったことに端を発しており、塔本四面具はこの経緯を反映したものといえよう。また、『日本書紀』には鼓を累積して霊鷲山を造るとあり、この形容は「霊鷲山像」が塑造であったことを類推させる。

塔本四面具の形式について概観したが、釈迦及び四天王形式以外のものには、確実に如来・菩薩で構成される説法の場面が含まれている。また、法隆寺塔・出土塑像片・諸史料から、安置空間を塑造による山岳と像群で構成する例が、主題の如何にかかわらず存在するという点も留意される。

ところで、この塑造による山岳群像表現については、淵源を中国に求めることができる。中国には、古く、神仙思想に基づく固有の山岳信仰がある。これが、須弥山をはじめとする仏教世界における諸山への理解を円滑にし、その造形を容易に進めることとなる。『魏書』巻114釈老志には、北魏の天興元年〔398〕に五層の仏図(塔)、耆闍崛山と須弥山殿を造ったとある。これらは繍飾、すなわち絵画的装飾が施されたらしく、塑造であった可能性が指摘されている。『長安志』巻5宮室3には、後秦の姚興が長安の永貴里に塔を建立し、波若（般若）臺を造ったことが記されている。その割注に、波若臺中には須弥山が造られ、四面は崇岩峻壁、珍獣がいたり、仙人や仏像などが安置されたとある。この造像についても塑造であったと推測されている。姚興は『魏書』巻95の伝によれば、泰常元年〔416〕に卒しているので、波若臺内の造像も、それ以前であった蓋然性が高い。『長安志』は、北宋の宋敏求〔1019～79〕によって編まれたものであるから、5世紀初頭の

造像について全面的に信頼を置くことはできない。しかし、『魏書』釈老志の記載も勘案すれば、塑造による仏教的な山岳群像表現の萌芽が、4世紀末から5世紀初め頃まで遡る可能性は認められる。

また、『魏書』巻4下世祖紀には、太平真君7年〔446〕に、鄴城にある五層の仏図を毀したところ、泥像の中より玉璽が二つ出てきたとある。『法苑珠林』巻39伽藍篇36には、江陵の長沙寺に、南朝劉宋の譙王（衡陽文王）義季が造立した塔があり、塔内に塑像があったことが記されている。衡陽文王義季は『宋書』巻61に伝があり、元嘉24年〔447〕に卒しているので、長沙寺塔に塑像が安置された時期も、元嘉24年以前である蓋然性が高い。この像は出来映えが良かったらしく、忉利天の工匠が造ったと評価されており、他に比較の対象になる多くの塑像が存在していたことを想起させる。南北両朝とも、5世紀前半には、内部を塑像で構成する塔があったことが確認できる。

一方、洛陽永寧寺出土の塑像片（北魏・6世紀前半）は、優れた造形をみせており、南北朝期に、塑像技法が格段に進歩を遂げたことを示している。その高い技法は次の時代へと継承され、隋唐において頂点に達する。現在でも、敦煌莫高窟などの唐代彫塑にその一端をみることができる。

『歴代名画記』『酉陽雑俎』続集巻5・6寺塔記などには、武則天期〔684～704〕の寶弘果、玄宗期〔712～756〕の楊恵之をはじめとする優れた塑像作家や、長安・洛陽の寺院にある、塑像についての記載が散見する。これらは、中原地域における塑像製作の盛んなようすを彷彿とさせる。『歴代名画記』巻3記両京外州寺観等壁画、洛陽の敬愛寺条には、寺内の西禅院殿内に仏事と山、東禅院の般若臺内に仏事があり、いずれも塑造で、寶弘果の製作とある。東禅院の「般若臺内の仏事」に関しては、先述の『長安志』巻5、永貴里の波若（般若）臺内の記載が示唆的であるが、「般若臺」についての、広範な史料的検討が必要であろう。現状では、「仏事」の具体的内容を明らかにはできないが、少なくとも、西禅院殿内の例によって、山岳を伴う、仏教的主題に基づく彫塑が存在したことは確認できる（注30）。法隆寺の塔本四面具のモデルには、このような作例を想定することができる。ただし、建築内に残る本格的な山岳は、中国に於いては唐に遡る遺品が確認できない。従って、伝世した法隆寺塔をはじめとする、日本の塔本四面具の塑像は、東アジアの塑造による山岳群像表現を考えていくうえで、重要な鍵となる遺品である。

古代の塔本四面具について概観したが、以下の3点を、山王廃寺塔を考察していくうえで、留意したい。

①塔を建立する場合、その塔本四面具を塑造による山岳と群像で構成することは珍しいことではない。

②形式の如何にかかわらず、初転法輪を含む釈迦説法、弥勒説法など、如来・菩薩を中心とする説法の場面が含まれる蓋然性が高い。

③法隆寺塔や薬師寺塔では、仏伝を題材とした場面を選択している。塔は本来釈迦の舎利を納めるための建物であり、仏伝の中でも涅槃、分舎利の2場面は塔本四面具に相応しい。

2．山王廃寺の塔本四面具について

現在、山王廃寺塔本四面具とみられる出土塑像片には、如来・菩薩・神将・比丘・供養者・胡人・魔神ないしは邪鬼・猪・雲脚・山岳などがある。

まず、注目されるのは山岳の断片数の多さである。これは、主題の如何にかかわらず、山王廃寺塔の四面の安置空間が、山岳と群像で構成されていたことを示唆する。

次に、山王廃寺の塔本四面具の具体的な主題については、次の3点に留意しながら考察を進めたい。

①如来像ないし菩薩像の断片数が少ない

②女性供養者像、胡人像など俗人の断片がある

③猪の断片がある

まず、如来ないし菩薩像の断片についてであるが、その数は少なく、脛・膝・胸・衣部の断片などがあるに過ぎない。従って、現状では山王廃寺の塔本四面具を四方四仏形式とするのは難しい。ただし、その形状から、膝の断片（11A962670、４）は如来倚像の膝、胸の断片（9A80336、１）は脇侍菩薩の胸の可能性があり、塔本四面具の内に、如来倚像を中心とした説法の場面があったことが推測される。箱形天蓋(11A962720他、72～79）が、この如来の頭上に懸っていたと想像することもできよう。法隆寺塔の南面に弥勒倚像を中心とする説法の場面があり、薬師寺塔には仏伝中の初転法輪の場面があったことは考慮される。ただし、７世紀末から８世紀にかけての如来倚像の遺品には、薬師如来の例が法隆寺金堂壁画10号壁に、阿弥陀如来の例が同じく法隆寺の塼製阿弥陀三尊及び僧形像などにみられ、その尊名は必ずしも一定ではない。従って、山王廃寺の塔本四面具の如来倚像の名称についても特定はできない。如来・菩薩を中心とした説法の場面があったと推定するにとどめておく。

次に、女性の供養者（11A962821・11A962822・11A962763・11A962765、33～36）や胡人（11A962823、37）など俗人形の断片の存在は、仏伝を含む仏教説話に由来する場面があったことを示唆する。この点に関しては、猪の断片(9A80311、49)から検討を加えたい。この断片は頭部前半のみで、猪像か猪頭人身像か判断できないが、猪というモティーフに絞って考察を進める。

釈迦の生涯中で重要な出来事といえば、降兜率・托胎（入胎）・出胎（受生＝誕生）・出家・降魔・成道・初転法輪（転法輪）・涅槃などの八相であろう。塔の四面の内に仏伝に題材を求める場面があるとすれば、まず、八相から選ばれるのが自然であり、薬師寺塔の例はこの点を傍証する。猪は八相の内、成道と密接に関わる降魔の場面に登場する。唐以前に漢訳された仏伝関係の経典中、『過去現在因果経』巻３、『仏所行讃』巻３、『仏本行経』巻３は、釈迦の成道を妨げようとする魔軍の中に、猪頭の魔神がいることを明記している（注31)。

造形遺品の上では多くの場合、視覚的効果もあり、一連の出来事として成道は降魔とともにあらわされる。すなわち、菩提樹下で触地印を結び、端然と結跏趺坐する釈迦、その周囲に、成道を阻止しようとするマーラの３人の娘や、武器を執り騒然とする魔神達を配するというものである。この魔軍の中に猪頭の魔神がいる作例としては、

○サーンチー　第１塔西門南柱（１世紀初）（**挿図７**）
○ガンダーラ　石造浮彫（２～３世紀、米・フリアギャラリー蔵）
○アジャンター　第26窟左側廊（６世紀）
　第１窟仏殿前室左壁（６世紀）
○キジール石窟　第175窟主室前壁上部断片（７世紀、独・ベルリン美術館蔵）
　第205窟・第２区マヤ洞の四相図（７世紀）（**挿図８**）
○敦煌莫高窟　第254窟前室南壁(北魏・５世紀、猪に似た獣面人身の魔神)
　第263窟前室南壁(北魏・５世紀、猪に似た獣面人身の魔神)
　第428窟北壁中央東壁（北魏・６世紀、猪に似た獣面人身の魔神）
○雲崗石窟　第６洞西壁中層中央石造浮彫（５世紀、北魏）
　第10洞主室南壁西側石造浮彫（５世紀、北魏）（**挿図９**）

などが挙げられる。これらの遺品は、降魔成道の場面に猪頭の魔神をあらわ

挿図７．サーンチー第１塔西門南柱

挿図8．キジル205窟・第2区マヤ洞の四相図の降魔図

挿図9．雲岡石窟第10洞主室南壁西側　石造浮彫降魔図

すことが、地域を超えて拡がっていることを示している。

初唐から盛唐にかけての中原地域では、涅槃図が中心で、現在、参考とすべき降魔成道図の遺品が確認できない。しかし、『歴代名画記』巻3記両京外州寺観等画壁によれば、画家尉遅乙僧が長安の光宅寺東菩提院で降魔変を描いている。他に長安の菩提寺仏殿、化度寺、大雲寺塔、洛陽の聖慈寺西北禅院などでは、本行経変が描かれており、これらが『仏本行経』などに依拠していれば、降魔成道図も含まれていた可能性がある。晩唐の敦煌ではあるが、第156窟前室窟頂に降魔成道図が描かれており、10世紀頃の製作とみられる、第17窟出土の仏伝幡降魔図（仏・国立ギメ東洋美術館蔵）では、猪頭人身の魔神が再び確認できる。

日本の遺品では、天平時代頃の製作とみられる、醍醐寺本『絵因果経』（**挿図10**）が注目される。『絵因果経』は、料紙を上下に分け、下に『過去現在因果経』本文、上に対応する説話絵を付随させたもので、その原型は隋頃に求められる（注32）。先述したが、『過去現在因果経』は魔軍の中に猪頭の魔神がいることを記しており、対応する絵にも猪らしき頭が描かれている。おそらく、隋唐の中原地域で製作された降魔成道図の中には、猪頭の魔神を描いたものがあったのであろう。その影響を受け、日本でも同様の降魔成道図が製作されるようになったとみられる。

以上のことから、猪の塑像片が存在する、山王廃寺塔にも降魔成道の場面があったことが想定される。ところで、薬師寺西塔にも成道の場面があったはずだが、『薬師寺縁起』には「西塔果相、成道内降魔相在之、転法輪、涅槃　或本ニ分舎利（傍点は筆者）」とある。これによれば薬師寺西塔の成道の場面も、他の多くの遺品と同様、降魔を含めた構成となっていたことがわかる。8世紀前半における塔本四面具と降魔成道の場面の関連を考える上で興味が持たれる点である。

なお、褌をしめた右脚部の断片（11A962751、**29**）は、神将像足下の邪鬼の可能性もあるが、推定像高60～70cmと考えられる神将像につく単独の邪鬼としては小さすぎる。邪鬼とすれば、左右足下に踏まれる2頭のうちのいずれか1頭であろうが、『絵因果経』の降魔の場面には、褌を着けた邪鬼風の魔神が描かれており、あるいは、この断片をそれに当てることもできよう。

挿図10．醍醐寺本『絵因果経』　降魔の場面

次に、塔であることを勘案すれば、涅槃が含まれていた蓋然性は認めてよい。如来または菩薩の左脚部の断片（11A962764、**5**）は、涅槃に於ける釈迦の左脚の一部の可能性がある。また、比丘（9A80335・11A962824、**31・32**）・供養者・胡人などを、涅槃に参集した人々と考えることもできる。寝台ともみられる金箔を押した直方体状の断片（11A962728、**59等**）も、複数確認されている。法隆寺塔や薬師寺塔に、涅槃の場面があることは参考になる。

ところで、涅槃の場面が存在したと想定する場合、猪の断片に関して検討すべき点がある。

中国では、隋より陵墓内に陶製などの十二支（十二生肖）像を副葬することが始まり、唐には広く行われた。その古い遺品では、湖南省湘陰県の大業６年〔610〕墓から出土した像のように獣冠を着ける人頭人身の像があるが、唐に入ると次第に、獣頭人身の像が主流になったとみられる。十二支のモティーフが、いつ頃、朝鮮半島へ伝播したかは不明だが、７～８世紀とみられる伝金庾信墓出土の蠟石製浮彫像や８世紀半ば頃の聖徳王陵の石彫像などに獣頭人身の十二支像がみられる。日本では、７世紀末から８世紀初頭にかけて造営されたとみられる、奈良県明日香村のキトラ古墳で、墓室の四方の壁面に３体ずつ獣頭人身像が描かれていることが確認された。北壁中央と東壁北側の人物像が、子像と寅像とわかり、時計回りに配置された十二支像と判明した（注33）。

一方、法隆寺塔の涅槃の場面には、獣冠を着ける人頭人身像と獣頭人身像があり、町田甲一氏は、これらの像のうち、北５号・北９号・北10号・北13号が、五十二類（五十二衆　涅槃に参集した五十二の生類）のうち、鳥獣類を代表した十二獣像ではないかと指摘された（**表11**）。『大方等大集経』巻23によれば、十二獣は十二時獣ともいい、時辰を司り、閻浮提を一日交代で遊行教化するという。十二支中の寅が獅子となる以外は、すべて十二支と一致している（注34）。

キトラ古墳の作例は、墳墓壁画ではあるが、日本において、８世紀初頭には、獣頭人身の十二支像のイメージが伝来成立していた事を示している。獣頭人身像が存在する法隆寺塔の場合、町田説を念頭におけば、涅槃の場面に猪頭人身像が安置されていた可能性が考えられる。山王廃寺塔の猪の断片も、あるいは、涅槃に立ち会った十二獣像と関連するものかもしれない。

しかし、７～８世紀の十二支像の遺品は、獣頭であれば、十二体とも揃って獣頭とするのが一般的である。これに対して、町田氏の比定に従えば、法隆寺塔の十二獣像は北５号が犬（？）、北９号が牛（？）、北10号が馬、北13号が鼠（？）であるが、前３者は獣冠を着ける像で、残る１者は獣頭像となる（**表11**）。獣冠の人頭人身像と獣頭人身像が混在することになり、この点に疑問が残る。十二獣像については、遺品の存在、涅槃の場面との関連など不明な点があり、今後の検討課題としておく。

なお、涅槃図には参集した五十二類をあらわすため、多くの鳥獣類を描くものがある。40巻本『大般涅槃経』巻１に、涅槃に集まった者についての記載があるが、このうち、動物の類は象、獅子、水牛、牛、羊などで、猪は含まれていない。遺品を概観すると、確認されている隋唐の壁画や浮彫の涅槃の場面には、獅子や猿などが登場するのみである。法隆寺塔に続く、神護景雲元年〔767〕の奈良県頭塔の涅槃の場面も、画面の制約を考慮すべきだが、参集した者の中に動物は含まれていない。動物が描かれた涅槃図がみられるようになるのは、日本では平安時代以降であり、鎌倉時代の遺品において、その種類が次第に増えたことが指摘されている。従って、山王廃寺塔の涅槃の場面に、猪像が安置された蓋然性は低いと考えられる（注35）。

現在、確認されている出土断片から、山王廃寺の塔本四面具の主題について考察を試みた。以下に簡略にまとめる。

①如来・菩薩の断片から、説法の場面があると推定した。

②俗人の断片から、仏伝を含む仏教説話に由来する場面があったと推定した。

③猪の断片から、仏伝中の降魔成道の場面があると推定した。

④塔であることも鑑みて、涅槃の場面があると推定した。

これらの主題は、法隆寺塔や薬師寺塔の場面選択と通じており、日本古代の塔本四面具の主題を考える上で、たいへん興味深い。また、東アジア全体の山岳群像表現を考察するうえでも、貴重な作例と考えている。

V．塑像の形式と作風

1．神将像の復原

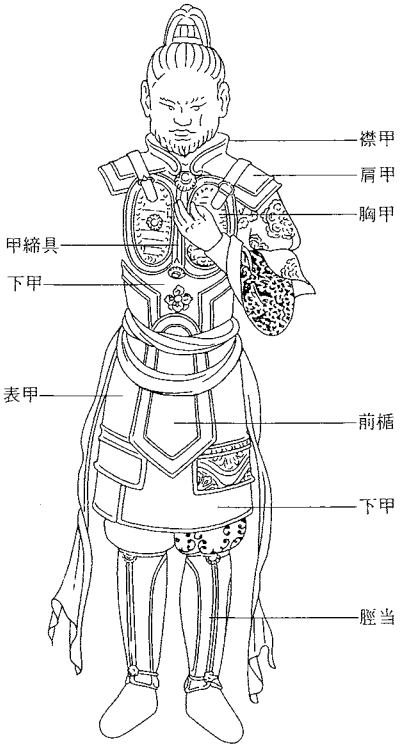
山王廃寺出土塑像片のうちには、推定像高60～70cmの神将形立像の断片が多く含まれている。まず、これらのうち甲や着衣を含む断片を部位ごとに整理し、当初像の鎧や着衣の形式を復原してみたい(注36)。なお、本節では記述の煩雑さをさけるため、神将像の断片については「神将像」の語を省略し、「部位（断片番号、**解説番号**)」の形式で略記する。

a）表甲

表甲（おもてごう）は、背面から腰回りまでを被う上下ワンピースの皮甲である（**挿図11**、以下、神将像甲制の細部名称については同図を参照)。日本の神将像に特有なもので、その甲制の基本となる防具である。

表甲については、①右上半身（11A962825、7）、②背面左肩部（11A962748、10)、③右腰部（11A962702、20)、④左腰部（11A962750、21）の4点の断片がある。

①では、上背部から腋下にかけての部分が確認できる。背面の上端部は襟甲の下層に重なり、腋下の縁には稜がつくられる。また、縁に沿って内外区を分ける界線1条と縁取線1条が陰刻される。②では、弧状の輪郭をもつ背面の上縁が確認できる。上端は膨らみのある襟部の下層に重なる。界線・縁取線を陰刻する点は、①と同じである。



挿図11．天平神将像の甲制（興福寺畢婆迦羅像）

松田誠一郎「菩薩像、神将像の意匠形式の展開」（注36参照）より転載。

③④では、腰帯以下の側面の形が確認できる。③では下縁に沿って界線1条と縁取線1条が陰刻されるが、その間隔は上背部のそれよりも広い。前面・背面は断片が残存せず、形式の詳細は確認できない。しかし、④の下方の中土露出部には、縦方向と横方向の太い陰刻線が残る。この陰刻線は表甲の大まかな形を示した下当たりの線とみられ、表甲正面下部の輪郭を推定する根拠となる。これによって、上背部から両腋下を通って腰回りを覆い、腹部から下腹部にかけての正中線で前縁を対向させる、表甲の輪郭が復原できる。

b）胸甲

胸甲については、①右胸部（11A962731、14)、②左胸部（11A962754、15)、③胸部外側（11A962、16）の3点の断片がある。

いずれも、覆輪（外区）は内区に対して一段高く作られ、縁取線が陰刻される。

①では、覆輪をわたって内区に少しかかる吊革があらわされる。胸甲の吊革は、左肩・左胸部（11A962761、9）や右肩・右上腕部（11A962749、8）でも、肩甲上にあらわされる。他方、右上半身（11A962825、7）や背面左肩部（11A962748、10）では肩甲上に吊革がなく、胸甲に吊革をあらわした個体とあらわさない個体があったことがわかる。②は左胸甲の下部の、胸中央をわたる甲締具に接する

部分である。③は胸甲の覆輪とみられるが、その縁は内外ともゆるやかに湾曲しており、左右いずれかの胸甲の外側とみられる。

ｃ）前楯

表甲正面の合わせ目の前に当てる盾状の防具が、前楯（まえだて）である。

前楯については、①腹部（11A962753、17）、②下腹部（11A962810、18）、③下腹部（11A96369＋11A962755、19）の３点の断片がある。

①は腰帯より上の半円形の上端部、②は腰帯より下、天衣をはさんだ中央部、③は天衣を含む剣先形の下端部である。①と②は腰帯の意匠が相違し、別個体の断片であることが確認できる。いずれの断片も、界線１条と縁取線１条が陰刻される。

ｄ）腰帯・天衣・甲締具

腰帯については、①腹部（11A962753、17）、②下腹部（11A962810、18）、③右腰部（11A962702、20）の３点の断片がある。①は、革帯とみられる縁取りつきの平帯で、この部分では２重に巻かれる。②③は、布製とみられる縄状の捻り目をあらわした帯である。

天衣については、①下腹部（11A962810、18）、②下腹部（11A96369＋11A962755、19）、③右腰部（11A962702、20）、④左腰部（11A962750、21）、の４点の断片がある。①②は、前楯の上層に重なって下腹部の前をたるみながらわたる部分で、③④は左右腰脇で腰帯に結びつける部分である。③④ともその結び方は片輪結びで、結び目の後方側（③では向かって左側、④では向かって右側）に「輪」をつくり、反対側から末端部を垂下する。③では、表甲下縁に銅心の付け根が残存しており、天衣の末端部は、ここから本体より遊離してさらに垂下していたとみられる。

甲締具（こうしめぐ）は、表甲や胸甲などを束縛するために上半身にわたす紐や帯である。その断片は確認できない。右上半身（11A962825、７）では、表甲の上背部右側から右腋下にかけての部分が残るが、その表面には紐などを貼り付けた痕跡はみられない。この像については、正面胸下を横にわたり、両腋の下を通って背面にまわる甲締の紐は、製作当初よりなかったものと判断できる。

ｅ）肩甲

肩甲については、①右上半身（11A962825、７）、②右肩・右上腕部（11A962749、８）、③左肩・左胸部（11A962761、９）、④背面左肩部（11A962748、10）、⑤肩甲（11A962710、11）、⑥肩甲・鰭袖（11A962713、12）の６点の断片がある。

いずれも界線・縁取線を陰刻するが、①②④⑥は界線・縁取線とも１条とし、③は界線２条・縁取線１条とする。また、②④は両端部下方の輪郭に稜角が作られるのに対し、①③の輪郭には稜角がない（④⑥は不明）。これらの相違は、神将像の個体ごとの細部意匠の変化とみられる。

ｆ）襟甲

襟甲については、①右上半身（11A962825、７）、②左肩・左胸部（11A962761、９）の２点の断片がある。

いずれも、立襟の部分は丈が低く、①ではその上縁がやや外側に反り返る。立襟の部分、肩上に広がる部分のいずれにも、縁取線が陰刻される。前面部の形は②で確認できる。先細りの前端部が、小さく外側に開

挿図12．興福寺　沙羯羅立像（八部衆像のうち）

いている。

なお、③背面左肩部（11A962748、10）では、襟周りが少し膨らんだ形をしている。この部分には縁取線がなく、形態からみても通常の襟甲とは考えられない。肩まで広がらず、衣文もあらわされないことから、領巾（りょうきん）とも考えにくい。襟回りに着ける防具としては、盛唐～晩唐期の着甲像や、その影響を受けた天平後期の着甲像の一部にナマコ状の襟巻きがみられる（注37）。防具とみるならば、このナマコ状の襟巻きとみるほかない（注38）。柔らかい質感のあるその形は、防具というより、むしろ動物の一部を思わせる。こうした見方に立てば、八部衆像のうち摩睺羅迦（まごらか）像の頸に巻いた蛇の胴部に当たる可能性（注39）（**挿図12**）や、獣冠の裾などに当たる可能性も考えられる。

g）下甲

表甲の下に着ける鎧を、下甲（したごう）と呼ぶ。その大部分は表甲や胸甲などに覆われて見えないが、上半身では胸甲と表甲の隙間にあらわれ、下半身では表甲の下に下縁があらわれる。

下甲については、①右上半身（11A962825、7）、②左胸部（11A962754、15）、③下甲（11A962712、22）の3点の断片がある。

①②は上半身の部分で、①では右腋下で表甲の下層に重なる部分が、②では胸甲下の一部が確認できる。③は下半身の下縁の部分で、甲の隅部を含む。下甲下縁で甲の隅部があらわされるのは正面中央、または左右側面である。向かって右下に隅部がくる形からみて、正面中央の切れ目に接した右側（像にとって）、左側面の切れ目に接した前側、右側面の切れ目に接した後側、のいずれかであったと考えられる。

h）鰭袖

神将像の肩から肘辺までを覆う、ラッパ状の袖口をもつ衣を、鰭袖（はたそで）とよぶ。

鰭袖については、①右上半身（11A962825、7）、②右肩・右上腕部（11A962749、8）、③左肩・左胸部（11A962761、9）、④肩甲・鰭袖（11A962713、12）、⑤鰭袖（11A962711、13）の5点の断片がある。

いずれの断片も、肩甲の下から肘上のくくりまでの部分で、ラッパ型に開いた袖口の部分の断片は確認されていない。

i）窄袖

神将像の前腕部を覆う、狭い袖口をもつ衣を、窄袖（さくしゅう）とよぶ。

窄袖については、①右前腕部（11A962756、23）、②左前腕部（11A962762、24）の2点の断片がある。いずれの断片も、肘から手首までの仕上面が残り、衣文まで丁寧に塑形されており、大袖と併用されていたとは考えられない。前腕の内側には袖口の衣縁があらわされる。

j）脛当

脛当（すねあて）については、①脛当（9A80289、26）、②沓先（11A962716、27）の2点の断片がある。

脛当の正面には中央に稜線をあらわしたり、紐や帯などの装飾がつけられるが、①にはこうした稜線や装

飾がない。このことから、①はふくらはぎを覆う背面の一部とみられる。②は沓先の断片だが、足首を覆っている金箔が押された部分は、脛当の下縁とみられる。

k）沓

沓（くつ）の断片としては、①沓先（11A962716、27）がある。全体にすっきりとした細長い形を呈し、先端が尖っている。沓先には皺はあらわされない。

l）復原案

以上、出土した断片に基づき、表甲・胸甲・前楯・腰帯・天衣・甲締具・肩甲・襟甲・下甲・鰭袖・窄袖・脛当・沓の各部分について、形式の復原を検討した。現在までのところ、袴や裙（くん）については断片が確認されておらず、これらの部分については詳細を明らかにできない。

これまでの検討結果に基づき、断片の出ていない部分について推測を交えながら、神将像の全貌を復原すると、**挿図13**のようになる。なお、７～８世紀の神将像では、裙をあらわす作例と裙をあらわさない作例があるが、断片が確認されていないため、復原図では裙をあらわさなかった。

２．神将像の個体数と尊名の問題

a）神将像の個体数

推定像高60～70cmの神将像に関しては、左右いずれかの肩甲を含む断片が６点出ており、先の部位別の検討を通して、その意匠には、個体別の変化がつけられていることが確認できた。ここでは、胸甲吊革の有無も考慮に入れながら、６点の断片の意匠の異同を検討し、神将像の個体数について考えてみたい。

肩甲を含む６点の断片を、①界線の意匠、②輪郭の稜角、③胸甲吊革の有無、の３点を指標にして比較すると、**表10**のようになる。この表から、少なくとも解説番号７、８・10、９の３群は、①②③の３意匠の組合せが異なり、それぞれ別個体であることが判明する。①～③の共通する８と10も、襟まわりの形状が異なり、別個体とみられる。11・12は情報量が少なく、12と９が別個体であることがわかるだけである。結論として、少なくとも４個体以上の神将像の存在が確認できる。

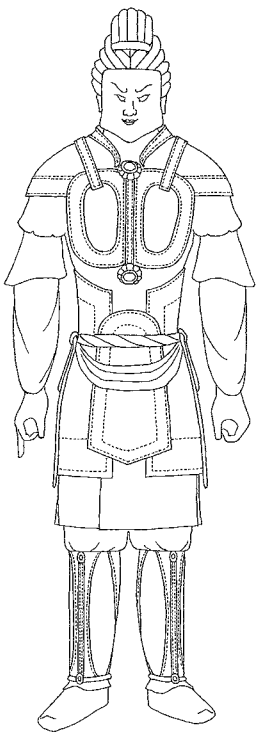
そのほか、これらの像よりもやや大きい、推定像高70～80cmの神将像の腹部（11A962753、17）が出土しており、これを含めれば、合計５体以上の神将像があったことになろう。

表10　肩甲を含む断片６点の意匠の異同

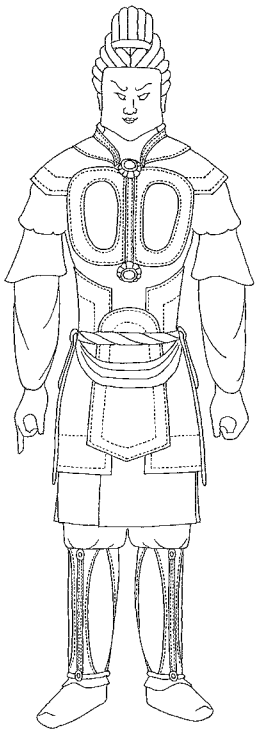
解説番号	部位（断片番号）	①肩甲界線の意匠	②肩甲輪郭の稜角	③胸甲吊革の有無
7	右上半身（11A962825）	１条	×	×
8	右肩・右上腕部（11A962749）	１条	○	×
9	左肩・左胸部（11A962761）	２条	×	○
10	背面左肩部（11A962748）	１条	○	×
11	肩甲（11A962710）	?	?	?
12	肩甲・鰭袖（11A962713）	１条	?	?

b）神将像の名称

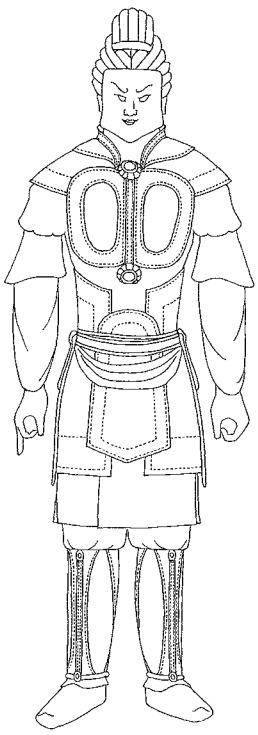
山王廃寺塔本塑像の神将像については、全部で何個体あったのか、それらの像は１群なのか、複数群なのか、４面のうち１面に配置されたのか、複数面に分かれて配置されたのかなど、像種を特定する上で重要な



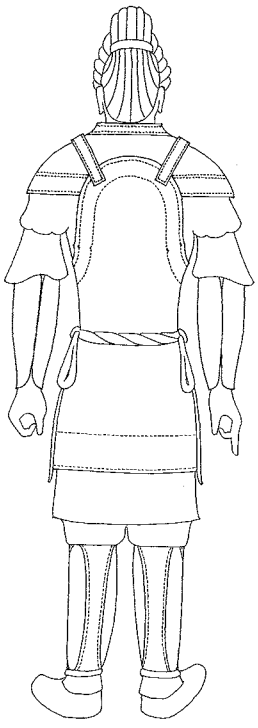
挿図13-ａ．山王廃寺神将像
甲制復原図（その１・正面）



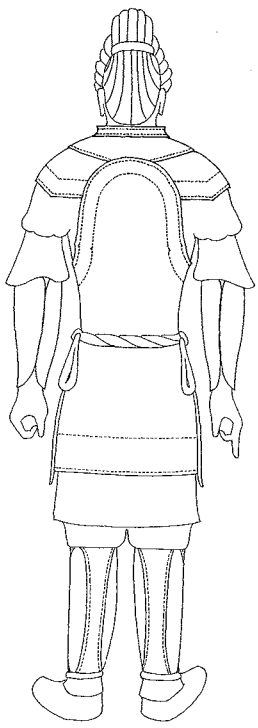
挿図13-ｃ．山王廃寺神将像
甲制復原図（その２・正面）



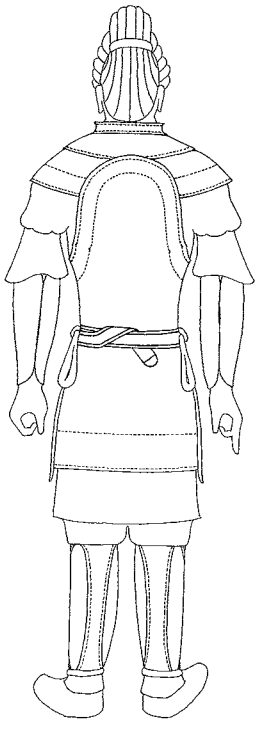
挿図13-ｅ．山王廃寺神将像
甲制復原図（その３・正面）



挿図13-ｂ．山王廃寺神将像
甲制復原図（その１・背面）



挿図13-ｄ．山王廃寺神将像
甲制復原図（その２・背面）



挿図13-ｆ．山王廃寺神将像
甲制復原図（その３・背面）

【注記】その１（13-ab）は、頭部（11A962820）、右上半身（11A962825）、左肩・左胸部（11A962761）、右胸部（11A962731）、左胸部（11A962754）、胸部外側（11A962）、下腹部（11A962810）、下腹部（11A96369＋11A962755）、右腰部（11A962802）、下甲（11A962712）、脛当（9A80289）、沓先（11A962716）を組み合わせて一体分とした復原案である。その２（13-cd）・その３（13-ef）はその１をベースとしながら細部を変えた復原案で、その２は肩部を右肩・右上腕部（11A962749）で復原し、その３は肩部を右上半身（11A962825）で、腰帯を腹部（11A962753）で復原した。ただし、その３・背面の腰帯末端部は、当麻寺四天王像などを参考にして描いた。

点に関して不確定要素が多く、名称の特定は困難である。ここでは、そのことを認識した上で、断片的な情報から推論できることを述べてみたい。

まず、神将像頭部(11A962820、6)に注目すると、焔髪(えんぱつ)をあらわしていることが注意される。7～8世紀の神将像で、焔髪をあらわす作例としては、

①法隆寺金堂旧壁画第10号壁薬師浄土図のうち神将像1体（飛鳥後期・7世紀末）

②興福寺八部衆立像のうち伝鳩槃荼立像（天平・734年）（**挿図14**）

③東大寺法華堂金剛力士立像（阿形）（天平・8世紀半ば頃）（**挿図15**）

④新薬師寺十二神将立像のうち8体（天平・8世紀半ば頃）（**挿図16**）

の4例がある。これらの作例には、十二神将像・八部衆像・金剛力士像が含まれるが、四天王像や二天像は含まれていない(注40)。7～8世紀の四天王像・二天像では、頭髪を端正にまとめて髻を結う作例が多く(注41)、この頭部を四天王像や二天像に比定することは困難といえる。

次に、山王廃寺塑像の主題の面から検討を加える。塔本塑像と考えられる山王廃寺塑像の主題については、本論中のIVにおいて、四方四仏浄土をあらわしたとは考えにくいことと、仏伝などの仏教説話に基づく場面があった可能性を指摘した。

前者の結論は、四方四仏浄土に含まれる薬師浄土像の存在について否定的であり、薬師如来の眷属である十二神将像があらわされた蓋然性も低いことになろう。

後者の結論は、山王廃寺塑像の群像構成を、主題が類似する法隆寺や薬師寺の塔本塑像から推測することを可能にする。

法隆寺の塔本塑像については、13世紀の『聖徳太子伝私記』は、南面（弥勒仏像土）に二天像があり、北面（涅槃像土）と東面（維摩詰像土）に八部衆像があったと記す（注42)。18世紀の『古今一陽集』も、南面の二天像については『聖徳太子伝私記』の記事を引き、北面には「竜神八部」像があり、東面には八部衆像があったと記す（注43)。

現在、同塔南面中段には神王半跏像2軀（南4号・南5号）がある（注44)。北面には、3面6臂の阿修羅

挿図14．興福寺　鳩槃荼立像（八部衆像のうち）

挿図15．東大寺法華堂　金剛力士立像（阿形）

挿図16．新薬師寺　迷企羅大将立像（十二神将立像のうち）

挿図17．法隆寺五重塔北面
乾闥婆坐像（北７号）

坐像（北６号、像高41.3cm）のほか、着甲坐像が11軀（北５号、北７～14号、北15･16号）ある（**表11**）。そのうち獅子冠をかぶる像（北７号、像高40.0cm）（**挿図17**）は乾闥婆に、竜をあらわす像（北８号、像高47.4cm）は竜王にそれぞれ比定でき、阿修羅を含めて八部衆像のうち３軀が確認できる（注45）。その大きさは坐高40cm前後で、立像に換算すると山王廃寺像よりも大きくなる。また、鳥獣の頭部をもつ異形像（北５号、北９・10号、北12～14号）については、『大般涅槃経』に説かれる、釈迦の涅槃に参集した52類の衆生のうちの鳥獣衆を代表する、十二獣をあらわしたとみる説がある（注46）。東面には、文献にみえる八部衆像は置かれていない（注47）。

文献と現存する像から、法隆寺塔本塑像には当初、南面に二天像、北面と東面に合計２具の八部衆像があったと推定され、北面の着甲像のうちに五十二類像が含まれている可能性がある。

薬師寺東西塔の塔本釈迦八相像については、東塔分の心木とともに伝来した鎌倉時代後補の木彫像のうちに、３面の阿修羅立像（全高55.3cm、現状）・獅子冠をかぶる乾闥婆立像（全高56.9cm）のほか、乾闥婆と類似した甲制を示す着甲立像が４軀（全高45cm前後、うち２軀は頭部欠）ある。これらは、１群の八部衆像とみられ、仏伝を主題とする薬師寺塔本塑像に、八部衆像が含まれていたことが確認できる（注48）。その像高は、阿修羅像で60cm前後、乾闥婆像などの着甲像で50cm前後とみられ、山王廃寺の神将像よりやや小さめである。

両作例の検討から、塔本塑像中の着甲像として、二天像・八部衆像・五十二類像があらわされる可能性があることが明らかになった。とりわけ、両方に共通して八部衆像があらわされていることは、注目するべきであろう。仏伝の場面を含む主題構成であったと推定される山王廃寺の塔本塑像中に、八部衆像があらわされた蓋然性は高いといえよう。

以上のことからみて、山王廃寺の神将像は、八部衆像である可能性が高いと考えられる。ただし、法隆寺塔本塑像のように、八部衆像とともに四天王像や二天像などが併置されていた可能性もあり、神将像断片のうちに、その一部が含まれている可能性も否定できない。

なお、Ⅴの１ｆ）において、特異なナマコ状の襟部をもつ神将像背面左肩部（11A962748、**38**）について、八部衆像の一部に当たる可能性を指摘したが、ここでの結論もこれと矛盾しない。

表11　法隆寺五重塔北面の着甲像

【表の見方】

1．北面着甲像の頭部の図像的特徴や尊名解釈に関して、以下の論文・解説の見解をまとめた。各論の間で見解に大差のない項目に関しては、適宜一括して表記した。

①久野健「法隆寺五重塔北面涅槃像をかこむ人物像（『仏教芸術』４）、1949年６月。後に同著『日本仏像彫刻史の研究』（1984年12月、吉川弘文館）所収。

②町田甲一「法隆寺五重塔北面における異形の鬼神像及び七体の僧形像について」（『国華』834）、1961年９月。後に同著『上代彫刻史の研究』（1977年５月、吉川弘文館）所収。

③西川新次『法隆寺五重塔の塑像』（注10参照）

④町田甲一「五重塔塔本塑像」（『奈良六大寺大観　第３巻　法隆寺３』）、1969年11月、岩波書店。

2．「頭部の図像的特徴」の「分類」欄では、北面着甲像を、「人頭」＝鳥獣冠をかぶる人頭像、「獣頭」＝鳥獣頭像、「異形」＝異形の頭部をもつ像の３類に大別した。

3．人頭像のつける鳥獣頭形のかぶりものの呼称については、各論文の間に相違があるが、本表では「鳥獣名＋冠」の形式で統一し、鳥獣頭像と区別した。

4．「尊名解釈」欄で用いた略称は、次の通り。天＝天部、五＝五部浄、竜＝竜王、畢竜＝畢婆迦羅竜王、沙竜＝沙羯羅竜王、乾＝乾闥婆、迦＝迦楼羅、緊＝緊那羅、鳩＝鳩槃荼、摩＝摩睺羅迦、類＝五十二類（釈尊の涅槃に集まった五十二の生類）、獣＝十二獣（五十二類中の鳥獣類の代表）

5．③の西川論文は、北９号像と北10号像とを取り違える。その点については、訂正して記載した。

番号	頭部の図像的特徴					尊名解釈			
	分類	①久野	②町田	③西川	④大観	①久野	②町田	③西川	④大観
北５	人頭		犬冠？	象冠	犬冠		五？/獣？	五	獣？
北７	人頭	獅子冠				乾？/天？	乾	緊	乾
北８	人頭	頭上に竜頭（頭部後補、竜の銅心当初）				竜	竜/畢竜？	竜	竜
北９	人頭	鳥冠	牛冠？	牛冠	牛冠	迦	獣？	不明	獣？
北10	人頭	獣冠	馬冠	馬冠	馬冠	乾/天	鳩？/獣？	鳩？	獣？
北11	人頭		頭上に竜頭（頭部・竜とも後補）			不明	竜/沙竜？	不明	竜
北12	獣頭		鳥頭	鳥頭	鳥頭？/獣頭？		迦	類	迦？
北13	獣頭		鼠頭？	鼠頭	鼠頭？		獣？	類	獣？
北14	獣類		鳥頭？	馬頭	鳥頭？/亀頭？/蛇頭？/午（馬）頭？			類	
北16	異形			口辺にエラ１角？/鶏冠？	有髭髯			乾？/迦？	
北17	異形		４目？有髭	５目顎髯	４目？有鬚		鳩？	摩	

３．神将像の形式――甲制・服制――

ここでは、Ⅴの１における神将像の復原に立脚しながら、そのよろいや服装の形式（甲制・服制）の歴史的な位置について考察を加える。

ａ）甲制

山王廃寺神将像の甲制は、次の５点に注目するべき特徴がみられる（**表12―ａ**）。

表12—a　7～8世紀の神将像の甲制

【凡例】 1. 表12-a・bとも、山王廃寺像と共通する形式（●）と類似する形式（○）を中心に表記した。
2. 当該部分の存在や当初の形状を確認できるものだけを表記し、そのほかはすべて省略した。
3. 群像や塑像片の場合、1体でも該当する形式が確認できれば、その記号を記入した。
4. 1つの欄に複数の記号が併記されるものは、1群の像のなかに複数のケースが含まれることを示す。
5. 表12-aの①表甲欄では、次の記号を用いた。　○：肩越形式の表甲　◆：正面に分け目のない表甲
6. 表12-bの①欄では、次の記号を用いた。　●：窄袖あり　◆：籠手あり　▲：大袖あり
7. 表12-bの②欄では、次の記号を用いた。　●：開放形式　◆：筒形形式

NO	製作年代	所蔵者・作品名	①《天平甲制》		②襟甲		③背面に甲締具なし	④背面に弧状の表甲上縁	⑤肩甲が角張る
			表甲	前楯	前開き	低平			
1	623	法隆寺金堂 釈迦三尊像台座板絵四天王像／同台座内白描天王像							
2	7C	法隆寺金堂 阿弥陀三尊像台座板絵四天王像							
3	7C中葉	法隆寺金堂　四天王立像					●		
4	7C後半	法隆寺 持国天・多聞天立像			●		●		
5	7C後半	東京芸術大学 天王立像			●		●		
6	7C後半	法隆寺 玉虫厨子扉絵二天像			●				
7	7C後半	大阪府海会寺出土 神将塼仏			●				
8	7C後半	大阪府海会寺出土 神将像右腕							
9	694年頃	藤井斉成会有鄰館 神将塼仏			●	●			
10	7C末	当麻寺金堂 四天王立像		○	●				
11	7C末	法隆寺金堂 旧壁画第9・10号壁			●				
12	7C末	法隆寺 橘夫人厨子扉絵四天王像			●	●			●
13	7C末	鳥取県上淀廃寺 壁画神将像			●				
14	7C末～8C初	川原寺裏山遺跡 神将立像腰部		○					
15	711年	法隆寺五重塔北面 着甲坐像	●	○	●	●	●		
16	730年頃	薬師寺西塔跡出土 神将像断片	●	●	●	●			
17	734年	興福寺 八部衆立像	●	●	●	●	●	●	●
18	8C前	滋賀県雪野廃寺出土 神将像断片	●	●	●				
19	8C前	鳥取県上淀廃寺 神将像残欠							
20	8C中葉	東大寺法華堂 四天王立像	●○	●	●	●		○	
21	8C中葉	東大寺法華堂 金剛力士立像	●○	●	●	●			
22	8C中葉	東大寺戒壇堂 四天王立像	○	●	●	●			
23	8C中葉	東大寺法華堂 執金剛神立像	○	●					
24	8C中葉	新薬師寺 十二神将立像	●○	●	●	●			
25	8C中葉ヵ	川原寺裏山遺跡出土 神将像残欠	●	●					
26	755年－原図	戒壇院厨子扉絵 四天王像	●◆	●	●	●	●		
27	8C後半	東大寺二月堂光背 四天王像	●	●					
28	8C後半	唐招提寺講堂 伝持国天・増長天立像	●	●	●				
29	8C後半	金剛山寺 伝二天立像	●	●	●	●			●
30	777-778年頃	西大寺四王堂 四天王像残欠	●	●					
31	8C後半	唐招提寺金堂 四天王立像	○	●	●	●			
32	8C後半	法隆寺旧食堂 四天王立像	●◆	●	●	●			
33	8C後半	大安寺 持国天立像	○	●		●			
34	8C後半	大安寺 多聞天立像	○	●	●	●			
35	8C末～9C初	大安寺 増長天・広目天立像	●	●	●	●			
36	8C末～9C初	正倉院 漆金銀絵仏龕扉四天王像	●◆	●					
37	8C末～9C初	正倉院 漆仏龕扉絵増長天像	◆	●					
38	791年	興福寺北円堂 四天王立像	●○	●	●	●		○	
39	8C末～9C初	滋賀県鶏足寺　十二神将立像	●	●	●	●			
40	8C末～9C初	興福寺東金堂　四天王立像	○	●	●	●			

表12—ｂ　７～８世紀の神将像の服制

【注記】次の作品については、報告書の掲載ページや図版番号を付記した。
7/ 8　泉南市教育委員会編『海会寺　海会寺遺跡発掘調査報告書　図版編』、1987年9月、泉南市教育委員会。
13/19　淀江町教育委員会編『上淀廃寺　淀江町埋蔵文化財調査報告書第35集』、1995年3月、淀江町教育委員会。
14/25　奈良国立博物館編『飛鳥の塼仏と塑像　川原寺裏山出土品を中心として』、1976年7月、奈良国立博物館。
16　奈良国立博物館・奈良国立文化財研究所編『薬師寺西塔跡出土塑像断片』、1981年3月。
18　日本古文化研究所編『日本古文化研究所報告第7 雪野寺阯発掘調査報告』、1937年11月、日本古文化研究所。

NO	所蔵者・作品名	①窄袖と大袖		②開放形式の窄袖	備考
		窄袖	大袖		
1	法隆寺金堂 釈迦三尊像台座板絵四天王像／同台座内白描天王像		▲		
2	法隆寺金堂 阿弥陀三尊像台座板絵四天王像		▲		
3	法隆寺金堂 四天王立像	●	▲	◆	
4	法隆寺 持国天・多聞天立像				下腹前に腰帯垂下。頭部・両腕後補。
5	東京芸術大学 天王立像		▲		下腹前にパルメット飾垂下。
6	法隆寺 玉虫厨子扉絵二天像		▲		
7	大阪府海会寺出土 神将塼仏				報告書、図版132-1。
8	大阪府海会寺出土 神将像右腕	●		◆	報告書、図版133-1。
9	藤井斉成会有鄰館 神将塼仏	◆	▲		三重県夏見廃寺出土の大型多尊塼仏と同原型。
10	当麻寺金堂 四天王立像	●	▲	●	持国天像の前楯、広目天像の窄袖は当初。
11	法隆寺金堂 旧壁画第9・10号壁	●	▲	◆	第10号壁東側神将像は、窄袖・大袖併用か。
12	法隆寺 橘夫人厨子扉絵四天王像				鰭袖のみを着け、窄袖・大袖はなしか？
13	鳥取県上淀廃寺 壁画神将像				報告書、口絵Ⅱ/Ⅲ。
14	川原寺裏山遺跡 神将立像腰部				『飛鳥の塼仏と塑像』PL. 54。
15	法隆寺五重塔北面 着甲坐像	●	▲	●◆	
16	薬師寺西塔跡出土 神将像断片	●		●	報告書図版、腹部11、襟甲813、窄袖157/13。
17	興福寺 八部衆立像	●		●	
18	滋賀県雪野廃寺出土 神将像断片	●		●	報告書図版、腹部19、胸部11、窄袖14、裙13。
19	鳥取県上淀廃寺 神将像残欠				c400胸部-報告書PL. 69。c508左腰・左大腿部。
20	東大寺法華堂 四天王立像	●		●	
21	東大寺法華堂 金剛力士立像				阿形像・吽形像とも大袖・窄袖は着けない。
22	東大寺戒壇堂 四天王立像	●		●	
23	東大寺法華堂 執金剛神立像	●		◆	
24	新薬師寺 十二神将立像	●		●	真達羅像の襟甲・肩甲は後補。
25	川原寺裏山遺跡出土 神将像残欠				『飛鳥の塼仏と塑像』PL. 28/29
26	戒壇院厨子扉絵 四天王像	●	▲	●	鑑真請来唐本によるか。
27	東大寺二月堂光背 四天王像				4像とも上半身欠失。
28	唐招提寺講堂 伝持国天・増長天立像		▲		持国天像の襟は布。
29	金剛山寺 伝二天立像		▲		阿形像は襟巻。28ともと一具像か。
30	西大寺四王堂 四天王像残欠		▲		腰帯より下。右膝・右大袖の一部を含む。
31	唐招提寺金堂 四天王立像	◆	▲		持国天・広目天像は、襟甲内側に布を表す。
32	法隆寺旧食堂 四天王立像	●◆		●	増長天・広目天像の表甲は、合わせ目なし。
33	大安寺 持国天立像				両腕後補。
34	大安寺 多聞天立像				左上腕部を除く両腕、後補。
35	大安寺 増長天・広目天立像	◆			広目天の右前腕、当初。
36	正倉院 漆金銀絵仏龕扉四天王像	◆	▲		
37	正倉院 漆仏龕扉絵増長天像	◆	▲		腰回りを覆う甲、正面に合わせ目なし。
38	興福寺北円堂 四天王立像	◆	▲		増長天像は、背面に表甲上縁をあらわす。
39	滋賀県鶏足寺　十二神将立像		▲		
40	興福寺東金堂　四天王立像	◆	▲		

①基本となる甲制について、表甲と前楯を組み合わせた《天平甲制》を採用すること。

②丈が低く、前開きの襟甲を着けること。

③背面に甲締め用の紐がないこと。

④背面の表甲上縁が円弧を描くこと。

⑤一部の像の肩甲が、角張った輪郭をもつこと。

まず、①について。日本の神将像を特徴づける最大の形式的要素として、《天平甲制》と呼ばれる基本甲制がある。これは、上背部から両腋下を通り、腰回りまでを被う上下ワンピースの〈表甲〉を着けた上で、これで被うことのできない胸部や下腹部に〈胸甲〉や〈前楯〉を当てる甲制である。この基本甲制は、7世紀後半の唐や統一新羅の着甲像の甲制をもとにしながら、日本独自のアレンジを加えて、8世紀前半に成立したものと考えられる（注49）。腰帯をはさんで上下の輪郭がスムーズにつながる〈表甲〉や、同じく腰帯の上下に輪郭があらわれ、表甲正面の合わせ目に重ねられる〈前楯〉は、大陸着甲像の甲制にはみることのできない、日本の神将像に特有なよろいである（注50）。

《天平甲制》の成立過程は段階的で、まず、7世紀末の当麻寺金堂四天王立像（**挿図18**）において、腰帯上に上端があらわされない〈前楯〉があらわれる。続いて、和銅4年〔711〕の法隆寺五重塔の着甲像（北7号像など）（**挿図17**）において、〈表甲〉が明確な輪郭をあらわし、〈表甲〉の正面合わせ目の下層に上端があらわされない〈前楯〉が重ねられる。《天平甲制》を示す初期の作例としては、天平2年〔730〕頃の薬師寺西塔跡出土塑像のうち神将像腹部（注51）（**挿図19**）、天平6年〔734〕の興福寺八部衆立像のうち着甲像6軀（**挿図11・14・20**）があり、730年代には《天平甲制》が成立していたことがわかる。おそらく、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期にかけて、新しい唐風の着甲像の甲制が統一新羅や唐から日本に伝えられ、その新渡の甲制に徐々に日本的な変容が加えられて、《天平甲制》の成立に至ったものと推測される。その後、《天平甲制》はわが国に長く定着し、8世紀第2四半期以後、じつに近世・近代に至るまで神将像の基本甲制として継承された。

山王廃寺の神将像が《天平甲制》を採用していることは、その製作年代の上限が730年頃（より厳密には711年以後、734年以前）にあることを示すものといえる。

次に、②について。飛鳥時代（538～710年）の神将像では、法隆寺金堂四天王立像（**挿図21**）のように、丈が高くラッパ状の襟甲を着ける作例と、東京芸術大学大学美術館天王立像や当麻寺金堂四天王立像（**挿図18**）のように、丈が高く前開きの襟甲を着ける作例が多い。これに対し、山王廃寺神将像の襟甲は丈が低く、前開きの形式を示す。同様の形式は、絵画や浮彫の作品ではすでに飛鳥後期（662～710年）の橘夫人厨子扉絵四天王像（**挿図22**）や藤井斉成会有鄰館の神将塼仏にみられるが、彫塑作品では法隆寺五重塔の着甲像が早い例で、以後、天平時代に一般的な形式として定着する。特に左肩・左胸部（11A962761、9）にみられる、襟甲先端部がわずかに外側に開く形は、法隆寺五重塔の着甲像（北8・11・17号など）（**挿図23**）の襟甲末端部の形によく似ている。

その次に、③について。右上半身（11A962825、7）の背面には、表甲を束縛する甲締め用の紐がみられない。

《天平甲制》成立以後の天平神将像では、東大寺戒壇堂四天王立像（**挿図24**）をはじめとして、ほとんどの作例が胸下を横にわたり、両腋の下を通って背面にまわる甲締の紐や帯をあらわす。ところが、興福寺八部衆立像のうち5軀（沙羯羅・鳩槃荼・乾闥婆・緊那羅・畢婆迦羅）（**挿図11・12・14**）は、例外的に胸下から背面にまわる甲締具があらわされず、甲締具としては胸甲中央をわたる平帯のみがあらわされる。その簡

素な甲締具の形式は、《天平甲制》成立以前の作例である法隆寺五重塔の着甲像（北５・７・８・９・10・11・16・17号）（**挿図17・23**）のそれと一致し、古い形式を伝えたものと考えられる。これに対して、迦楼羅像（**挿図20**）だけは、背面にまわる甲締紐を採用している。《天平甲制》成立後まもなくの作とみられる、興福寺八部衆像の甲締具の形式には、新旧の両形式が併存していたことになろう。

山王廃寺神将像の甲締具に関しては、前面部の断片が出土しておらず、詳細は明らかではないが、背面の形から推せば、法隆寺五重塔の着甲像や興福寺八部衆像のうち５軀の甲締具と同一の形式であった蓋然性が高い。とすれば、《天平甲制》を採用する神将像のなかでも、初期的な性格をもつ作例であったと考えること

挿図18．当麻寺金堂　持国天立像（四天王像のうち）

挿図19．薬師寺西塔跡出土塑像片（神将像腹部）

挿図20．興福寺　迦楼羅立像（八部衆像のうち）

挿図21．法隆寺金堂　持国天立像（四天王立像のうち）

挿図22．法隆寺橘夫人厨子扉絵　増長天立像（四天王像のうち、描起）

挿図23．法隆寺五重塔北面着甲坐像（北17号）

挿図24．東大寺戒壇堂　増長天立像（四天王像のうち）

挿図25．東大寺法華堂
広目天立像
（四天王像のうち）

ができよう。

最後に、④⑤について。④⑤ともに比較的類例の少ない特徴的な形式である。

④は背面左肩部（11A962748、10）の表甲上縁にみられる特徴で、興福寺八部衆立像のうち5軀（沙羯羅・鳩槃荼・乾闥婆・緊那羅・畢婆迦羅）（**挿図12**）に同じ形式がみられ、東大寺法華堂四天王立像のうち広目天像（**挿図25**）や興福寺北円堂四天王立像のうちの増長天像に類似した形式がみられる。ただし、法華堂像や北円堂像の表甲上縁には左右の肩に稜角があり、その輪郭は円弧とはいえない。

⑤は右肩・右上腕部（11A962749、8）と背面左肩部（11A962748、10）の2点にみられる特徴で、法隆寺橘夫人厨子扉絵四天王像のうち獅子冠をかぶる増長天像（**挿図22**）、興福寺八部衆立像のうち5軀（沙羯羅・鳩槃荼・乾闥婆・緊那羅・畢婆迦羅）（**挿図11・12・14**）、東大寺法華堂執金剛神立像（**挿図26**）に類似した形式がみられる。このうち橘夫人厨子扉絵像の肩甲は上腕部外側までを覆う大型のものであり、東大寺像の肩甲は一部に尖りをあらわすものの、全体の輪郭は曲線的であり、いずれも山王廃寺神将像の肩甲の形式とはやや隔たりがある。それに対し、興福寺八部衆像5軀の肩甲は、大きさや全体の輪郭が山王廃寺神将像によく似ている。また、山王廃寺神将像の肩甲は、稜角のあるものとないものの2種類があるが、興福寺八部衆像の場合も迦楼羅像（**挿図20**）の肩甲には稜角がなく、2種類の肩甲を併用する点でも共通性がみられる。

以上の検討により、山王廃寺神将像の甲制は、現存遺品のうちでは興福寺八部衆像の甲制に最も近いと判断される。

b）服制

山王廃寺神将像の甲制については、窄袖をあらわす点に特徴がある。山王廃寺神将像の窄袖は、①大袖と組み合わされていないことと、②袖口の衣縁を前腕の下側に直線状に長くあらわし、袖の下方を開放することに特徴がある（**表12—b**）。

まず、①について。神将像の袖は、大袖と窄袖の2類に大別される。

大袖は、7～8世紀の作例では、和銅4年〔711〕の法隆寺五重塔の着甲像（北7・8号）（**挿図17**）以前の作例の多くと、天平勝宝5年〔755〕の戒壇院厨子扉絵の四天王像（多聞天像）をはじめとする、8世紀後半以後の作例の多くにみられる（注52）（**表12**）。その間、8世紀第2四半期には、興福寺八部衆立像のうちの着甲像6軀（**挿図11・14・20**）、東大寺法華堂四天王立像・金剛力士立像（**挿図15**）、

挿図26．東大寺法華堂
執金剛神立像

挿図27．大阪府海会寺出土
塑造神将像右腕部

東大寺戒壇堂四天王立像（**挿図24**）、東大寺法華堂執金剛神立像（**挿図26**）、新薬師寺十二神将立像（**挿図16**）など、大袖を着けない神将像が多く造られた。

一方、窄袖は、７世紀の作例では、法隆寺金堂四天王立像（**挿図21**）、海会寺（大阪府泉南市）出土の塑造神将像右腕（**挿図27**）、当麻寺金堂四天王立像（**挿図18**）、法隆寺金堂旧壁画第10号壁東側の神将像（注53）にみられる。このうち法隆寺金堂四天王像と当麻寺金堂四天王像では、大袖と窄袖が併用される(注54)。８世紀前半の作例では、多くの作例に窄袖があらわされるようになる。そのうち、法隆寺五重塔の着甲像では、大袖と窄袖を併用するもの（北７・８号）（**挿図17**）がみられるが、８世紀第２四半期の作例では、多くの像が窄袖のみをあらわす。８世紀後半の作例では、大袖と籠手（こて）を着ける作例が多くなり、窄袖を着ける作例は、戒壇院厨子扉絵四天王像と法隆寺旧食堂四天王立像の２例だけにとどまっている。

次に、②について。７～８世紀の窄袖には、「長袖シャツ」のような筒形の袖口のもの（筒形形式）と、袖口の衣縁を前腕の下側に長く直線状にあらわし袖の下側を開放したもの（開放形式）の２種類がある。

７世紀の着甲像では、筒形形式が主流で、法隆寺金堂四天王立像（**挿図21**）、海会寺出土神将像右腕（**挿図27**）、法隆寺金堂旧壁画第10号壁東側の神将像の３例にみられ、開放形式は、７世紀末の当麻寺金堂四天王立像（**挿図18**）に初見する。和銅４年〔711〕の法隆寺五重塔の着甲像では、この両形式が受け継がれ、北８・12・13・14号に筒形形式がみられ、北17号像（**挿図23**）に開放形式がみられる。

ところが、８世紀第２四半期に入ると、筒形形式に代わり開放形式が完全に主流となり、天平２年〔730〕頃の薬師寺西塔跡出土神将像断片、同６年の興福寺八部衆立像（**挿図14・20**）をはじめとして、東大寺法華堂の四天王立像、同戒壇堂の四天王立像（**挿図24**）、新薬師寺十二神将立像（**挿図16**）など、主要作例のほとんどに開放形式が採用され、筒形形式はわずかに東大寺法華堂執金剛神立像（**挿図26**）に半袖状の例がみられるだけとなる。

以上の検討を総合すれば、山王廃寺神将像の袖の形式は、８世紀第２四半期を中心とする、天平時代前期の特徴を示すものとみられる。

４．女性像の服制

次に、女性像の服制に関する問題について、山王廃寺塑像の歴史的定位に関連する問題を中心に取り上げる。

ａ）半臂と背子

女性像上背・左上腕部(11A962765、36)は、鰭袖衣の上に、袖なしの上着を重ねて着ける。断片の下端部にはくくりがあらわされ、胸下に相当する高さに紐を締めることがわかる。

これと類似した上着は、法隆寺五重塔塑像（和銅４年〔711〕）のうち女性像７軀（東面８・11・13・15号像、西面10・13・14号像）（**挿図28-ab**）にもみられる（**表13**）。いずれの像の上着も、ごく短い

挿図28-ａ．法隆寺五重塔塑像のうち女性像（東15号）

挿図28-ｂ．法隆寺五重塔塑像のうち女性像（東15号）

表13　日本の彫刻・絵画作品にあらわされた半臂・背子

【表の見方】

1.「●」印と「×」印について。

項目	●印	×印
形状・袖	短い袖がつく	袖なし
形状・くくり	胸下の高さにくくりをあらわす	くくりをあらわさない
形状・紐帯	紐・帯をあらわす	紐・帯をあらわさない
形状・裾	裾をあらわす	裾をあらわさない
組み合わせる衣服・各項	着用する	着用しない

2.「形状・襟」の項について。「左」は垂領・左衽（左前打ち合わせ）、「右」は垂領・右衽（右前打ち合せ）、「×」は丸襟で襟を打ち合わせないことを意味する。

3.？印について。各項目の「？」は、詳細が確認できないことを意味する。

No.	所蔵者　作品名	時　　代	分類	形　　状					組み合わせる衣服			
				袖	括り	紐帯	裾	襟	窄袖	大袖	鰭袖	領巾
1	山王廃寺　女性像断片	天平（８C）	背子	×	●	?	?	?	?	?	●	×
2	法隆寺五重塔　東８	天平（711年）	半臂	●	●	●	●	左	●	×	×	×
3	法隆寺五重塔　東11	天平（711年）	半臂	●	●	×	×	右	●	×	×	●
4	法隆寺五重塔　東13	天平（711年）	半臂	●	●	●	?	?	●	●	●	●
5	法隆寺五重塔　東15	天平（711年）	半臂	●	●	●	●	左	●	×	×	×
6	法隆寺五重塔　西10	天平（711年）	半臂	●	●	×	×	?	●	×	×	●
7	法隆寺五重塔　西13	天平（711年）	半臂	●	●	×	×	右	●	×	×	●
8	法隆寺五重塔　西14	天平（711年）	半臂	●	●	×	×	?	●	×	×	●
9	正倉院鳥毛立女屏風第４扇	天平(752～756年)	半臂	●	?	●	?	左	●	×	×	●
10	正倉院鳥毛立女屏風第５扇	天平(752～756年)	半臂	●	?	●	×	右	●	×	×	●
11	薬師寺　吉祥天画像	天平（８C後）	半臂	●	?	●	●?	右	●	●	●	●
12	薬師寺　神功皇后坐像	平安（９C末）	背子	×	×	×	●	×	×	●	×	●
13	薬師寺　仲津姫坐像	平安（９C末）	背子	×	×	×	●	左	×	●	×	●

袖がつき、胸下に横にくくりがあらわされる。そのうち、東８・15号像は、胸下に紐の結びをあらわし、腰上に裾をあらわす。また、東８・11・15号、西13号の各像は垂領と判別され、襟を左前（東８・15）、または右前（東11・西13）に打ち合わせる。

この種の袖なし、ないし短い袖つきの上着は、正倉院に伝存する大歌・呉楽・唐古楽・唐中楽・唐散楽・狛楽・雑楽の楽服などに、８世紀の遺品がみられる。関根真隆氏の研究（注56）によれば、これには、「半臂」と「背子」の２種がある。

正倉院の半臂には29例の遺品があり、そのうち銘記より品名の判明するものが11例、天平勝宝４年〔752〕の年記をもつものが８例（うち６例に品名併記）ある（注57）。山本らく氏が調査報告した作例は、いずれも垂領・右衽（襟を右前に打ち合わせる）で、ごく短い袖がつき、左右の衽に紐をつけ、裾に襴（裾を飾る横裂）をつける（注58）。その形式は、法隆寺五重塔の東11号像・西13号像の上着とほぼ一致する。仕立は、単（裏地なし）と袷（裏地つき）の両例があるが、袷が一般的で、材料は、日常服には布が、楽服の表裂には錦・両面・綾・羅が用いられた。

背子の遺品は、南倉に呉女背子（**挿図29**）１例のみが伝わる。これには「東大寺　前呉女　六年」の墨書がある。「東大寺」の呼称は天平17年〔745〕を初見とするから、「六年」は天平勝宝６年〔754〕、天平宝字６

年〔762〕、宝亀６年〔775〕のいずれかと思われ、８世紀後半の製作と考えられる。ただし、品名を示す語は、銘記中に含まれない。呉女背子は垂領で、左右の衿を中央で突き合わせ、袖はなく、右前身ごろに紐がつき、裾に短い襴を取りつける。仕立は袷で、表裂には錦が用いられる。

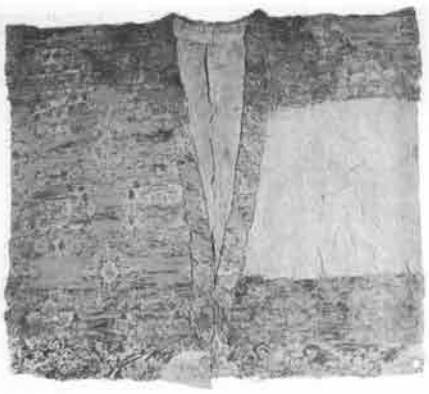
背子に関しては、『倭名類聚抄』（承平年間〔931～937〕、源順編）装束部・衣服類の「背子　領巾附」項に、次のような記事がみえる（注59）。

「背子　領巾附　辨色立成云、背子、和名賀良岐沼、形如半臂無摺襴之袷衣也、楊氏漢語抄云、背子、婦人表衣、以錦為之、領巾、日本紀私記云、比禮、婦人項上帊也」

（背子領巾附ケタリ　『辨色立成』ニ云ク、背子、和名ハ賀良岐沼、形ハ半臂ノ如ク、摺襴無キノ袷ノ衣ナリ、『楊氏漢語抄』ニ云ク、背子、婦人ノ表衣ニシテ、錦ヲ以テ之ヲ為ル、領巾、『日本紀私記』ニ云ク、比禮、婦人ノ項上ノ帊ナリ）

関根氏は、呉女背子の腰襴が半臂に比べてごく小さいこと、袷仕立てであること、錦を材料とすることが、『倭名類聚抄』の引用する『辨色立成』や『楊氏漢語抄』の説に合致するとし、これを根拠に、呉女背子を伝称どおり「背子」に比定できるとする。また、半臂と背子との形式的相違について、呉女背子の形式や、袖の長さに由来する「半臂」の語源から、腰襴の有無に加えて、袖の有無によっても、両者は区別されるべきであるとする（注60）。

この種の袖の短い上着や袖なしの上着は、中国、隋・唐代の墳墓壁画や陶俑に多くの着用例がみられる。たとえば、永泰公主李仙蕙墓（陝西省乾県乾陵陪葬墓、神龍２年〔706〕埋葬）前室東壁南側の女侍図（**挿図30**）や、陝西歴史博物館蔵三彩梳粧女坐俑（1955年、陝西省西安市東郊王家墳村第90号唐墓出土、唐・８世紀）には、半袖の上着、すなわち半臂がみられる。また、袖なしの上着は、半臂ほど着用例は多くないが、章懐太子李重潤墓（陝西省乾県乾陵陪葬墓、神龍２年〔706〕埋葬）後室東壁北舗の女侍図のうち、肩に領巾をはおろうとする女侍（**挿図31**）や、李貞墓（陝西省禮泉県、開元６年〔718〕埋葬）出土の三彩騎馬女子俑などにその例がみられる（注61）。このうち前者は、窄袖と半臂を着けた上で、袖なしの上着を重ね着する。その上着は垂領で、左右の衿を中央で突き合わせるが、下端に襴はつけない。両衿の間からは結び紐が垂れるが、これは半臂のものかもしれない。紐のことを保留するとしても、その形式は正倉院の呉女背子とおおむね共通する。また、腰襴のない点は、前述した『辨色立成』の説と合致す



挿図29．正倉院　呉女背子（南倉宝物）

挿図30．陝西省永泰公主（李仙蕙）墓前室東壁南側　侍女図（模写）

挿図31．章懐太子（李重潤）墓後室東壁北舗　女侍図

る。こうした袖なしのベスト状の上着が呉女背子の源流とみられ、これが唐名の「背子」に当たるものと考えられる。

以上のことを考慮した上で、本論では、類似した形式を示す半臂と背子を、袖の有無を主な指標として区別して表記する。すなわち、以下の記述では、法隆寺五重塔女性像にみられるような半袖の上着を「半臂」と呼び、山王廃寺女性像にみられるような袖なしの上着を「背子」と呼ぶ。

さて、半臂・背子の着用者の性別に関しては、関根氏は、『延喜式』巻14縫殿寮の年中御服条（天皇の衣服に関する規定）春季・夏季・秋季・冬季項と中宮御服条（皇后の衣服に関する規定）春季・冬季項（注62）にそれぞれ「半臂」と「背子」が相対するように記載されることや、前述した『倭名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』が背子を「婦人ノ表衣」とすることなどから、日本古代の半臂を「男が四季を通じて外面に着用した装飾的な衣」とし、背子を「ごく限られた女性の冬衣料」であったとする（注63）。

一方、中国においては、半臂は男性だけでなく、女性も着用する衣料であった(注64)。７～８世紀の墳墓壁画や陶俑を通覧すると、半臂を着ける人物像は、男性像よりもむしろ女性像の方が多いようである。背子については、女性像に着用例が確認される。

こうしてみると、少なくとも半臂については、男女が共用した唐と、主に男性が着用した日本との間に、着用者に関する認識のズレがあったことになろう。

b）８～９世紀の彫刻・絵画作品にみられる半臂・背子

８～９世紀の彫刻・絵画作品には、背子や半臂を着ける人物像がみられる（**表13**）。

まず、背子については、山王廃寺女性像、および薬師寺八幡三神坐像（寛平年間〔889～897〕頃）のうち神功皇后像と仲津姫像に確認される。

山王廃寺女性像の背子は、欠損のため、襟の形式や腰襴の有無は明らかではない。衣服の形式としては、袖がなく、胸下の高さに紐を締めることが確認できる。彩色は、大小の文様が規則的に残存し、主文と副文を交互に配列した錦の裂地をあらわしていた可能性がある。背子の下には、大袖と鰭袖を着けるが、領巾は着けない。袖なし、紐つきの形式は、正倉院の呉女背子に一致する。また、彩色文様に関しては、『倭名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』の「錦ヲ以テ之ヲ為ル」とする説を想起させる。

挿図32．薬師寺　仲津姫坐像
（八幡三神像のうち）

薬師寺二女神像（**挿図32**）の背子は、腰上までの短い丈で、腰襴はつけない。袖はないが、左右の身頃が両肩さがりまでを覆う。襟は、仲津姫像分は垂領・左衽とし（注65）、神功皇后像分は丸襟とする。いずれも胸もと、襟の内側より二条の紐が垂れるが、この紐は、背子の下に着ける別衣のものかもしれない。彩色は、仲津姫像分は緑青地に草花文を散らし、神功皇后像分は蘇芳地に菱形花文を規則的に配列する。文様の形態からみて、仲津姫像分は刺繍または染物の裂地、神功皇后像分は錦の裂地をそれぞれあらわしたものと推測される。背子の下には大袖衣を着け、両肩には領巾をはおる。腰襴をつけないこと、婦人の衣料であること、錦の文様を描くこと(神功皇后分)、領巾をともなうこと、いずれも『倭名類聚抄』の説と一致する。

このほか、松尾大社の女神像（９世紀）も、垂領・左衽の背子

と領巾を着けるかとみられるが、大袖衣と背子・領巾との境界が明瞭に彫出されず、彩色も剝落しているため、ここでは詳細には言及しない。

次に、半臂については、前述した法隆寺五重塔女性像のほか、正倉院北倉の鳥毛立女屏風第４扇・第５扇（**挿図33**）に確認される。鳥毛立女の半臂は、両扇とも垂領・左衽（第４扇）または右衽（第５扇）で、肘上に半袖状の袖口をあらわす。腰襴の有無は確認できない。腹前からは二条の紐が垂れるが、これは裙に附属するものかもしれない。文様は、薄墨で宝珠形散らしや三円文散らしを簡略に描く。半臂の下には窄袖を着け、両肩には領巾をはおる。

挿図33．正倉院　鳥毛立女屏風　第５扇

このほか、薬師寺吉祥天画像も垂領・右衽で、腰上までの短い上着を着けるが、この上着も、右袖口の輪郭からみて半臂と思われる。彩色は、薄赤（あるいは薄紫）地に繧繝唐花文を規則的に配列するが、錦の裂地をあらわしたものとみられる。腰上には赤地に小花文を並列した帯状部があり、これに重なるように蝶結びの紐が描かれるが、それぞれ半臂の腰襴と留め紐をあらわした可能性がある。半臂の下には大袖衣と鰭袖衣を着け、両肩には領巾をはおるが、その着衣形式は法隆寺五重塔東13号像に近い（注66）。

関根氏によれば、日本では半臂は男性衣と認識されたようだが、８世紀の絵画・彫刻では、女性像や女天像が身に着ける。この点に関しては、関根氏じしんが法隆寺五重塔女性像の半臂（または背子）について言及するなかで、疑問を呈されている（注67）。この点については、後述したい。

ｃ）背子の採用年代と法隆寺五重塔塑像の女性像

背子が大陸から日本にもたらされた時期や、日本の宮廷女性の服制に採用された時期については、文献史料に明記がない。日本における採用時期に関しては、高橋健自氏が、次に示す、『続日本紀』天平２年〔730〕４月庚午（16日）条（注68）にみえる詔の時であろうと推定する（注69）。

「庚午。詔曰。……自今以後。天下婦女。改旧衣服施用新様。……」

（庚午。詔シテ曰ク、……今自以後、天下ノ婦女、旧キ衣服ヲ改テ、新様ヲ施用ヒヨ。……）

しかし、この聖武天皇の詔は、婦女の服制に「新様」を施用することを命じたもので、背子については記述がない。関根氏の指摘される（注70）とおり、この詔を根拠に、同年に背子の着用が開始されたと断定することはできない。

その後、佐々木進氏は、法隆寺五重塔塑像の製作年代を服飾史の観点から検討した論文（注71）のなかで、背子が８世紀中ごろ以降の絵画作品や文献に確認されるようになることを指摘し、高橋氏の天平２年着用開始説を補強、支持した。さらに高松塚古墳壁画と法隆寺五重塔塑像の服制を比較し、背子を着けず、襟を左衽に打ち合わせる前者を、養老３年〔719〕頃までの旧様を示すものとし、背子を着け、襟を右衽に打ち合わせる像の多い後者を、天平２年以後の新様を示すものとした。この比較論に立脚しながら、法隆寺五重塔塑像の製作年代について、上限を天平２年と推定し、同年より天平20年頃までの間、特にその前半期、730年代の製作であると結論された。

しかし、この佐々木氏の説には、２つの点に問題があるように思われる。

第１の問題点は、法隆寺五重塔女性像の短い袖つきの上着を背子とみることである。前述した関根氏の定

義にしたがえば、これは背子ではなく、半臂とみるべきかと思われる。

第2の問題点は、法隆寺五重塔塑像の供養者像を、服飾史の資料として、高松塚古墳壁画の人物像と同列に扱う方法論にある。高松塚古墳壁画は主題的には世俗画であり、その作画の目的は、墓主の属した宮廷社会の風俗を再現的に表現することにあったと考えられる。したがって、その人物像の服飾は、同時代の宮廷の服制を反映したものとみることができる。これに対し、法隆寺五重塔塑像の東面・西面・北面の主題は仏教説話や仏伝である。各面の構図は、基本的に大陸で成立した図様に準拠しているとみられ(注72)、人物像などの細部においても、その影響が及んでいる蓋然性が高い。少なくとも、法隆寺五重塔塑像においては、高松塚古墳壁画のように、人物像の服制に同時代の宮廷風俗を反映させる必然性はない。両作品の人物像の間にみられる服飾の相違に関しては、それぞれの表現の目的や図像的な典拠など、造形表現としての性格の相違と関連するところが少なくないと思われる。とすれば、両者の間にみられる服飾の相違を、日本の宮廷における服制の変遷と直結させて解釈する論法には、疑問が残ると言うべきであろう。

法隆寺五重塔塑像の問題に即して言えば、たとえ日本において半臂や背子の着用が始まっていなくても、半臂や背子を着けた絵画や彫刻の人物像が大陸から伝わっていれば、東西両面の女性像のような人物像が造られたとしても不思議はない。関根氏が疑問とした、法隆寺五重塔女性像が半臂を着ける点についても、その造形が唐本の図様を典拠としたものであれば、整合的に解釈できる。唐において半臂は、男女共用と認識されていたからである。正倉院の鳥毛立女屏風の半臂についても、同様に解釈できよう（注73)。

以上の問題点を考慮すると、天平2年の服制改革時にかりに背子が採用されたことを認めたとしても、これによって、法隆寺五重塔塑像の製作年代の上限を天平2年に求めることはできないと考えられる（注74)。

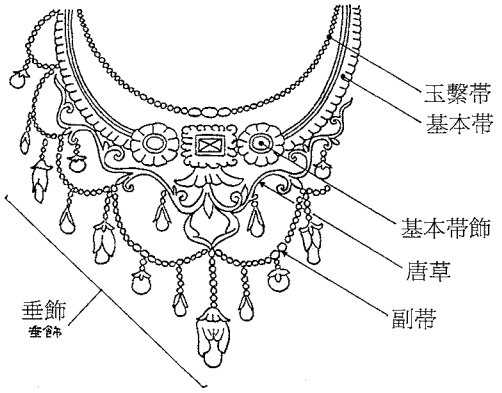
d）山王廃寺女性像の背子とその年代

山王廃寺女性像は、背子を着けた人物像としては、9世紀末の薬師寺神功皇后像・仲津姫像よりはるかに古い。また、8世紀後半の正倉院の伎楽装束、呉女背子と比較しても、これに先行する可能性が高い。背子は、「からきぬ」として平安時代の宮廷女性の服制のなかに定着するが、山王廃寺女性像は、その形式が大陸より日本に伝わったことを示す、最も早い時期の遺品とみられる。

しかし、その製作年代については、法隆寺五重塔の女性像の場合と同様、わが国の宮廷における背子の採用年代から限定することはできない。また、法隆寺五重塔塑像との年代的な前後関係についても、女性像の着ける半臂・背子の形式分析によって判断することは困難と言わざるを得ない。

5．菩薩像の胸飾

菩薩像胸部(9A80336、1)には、別製の胸飾を貼り付けた痕跡がある。現在、塑土をすべて亡失し、意匠の詳細は明らかではない。ここではそのシルエットを手がかりに、推測できることを述べる。



挿図34．胸飾の部分名称図

a）菩薩像胸部の胸飾

菩薩像胸部の胸飾については、その痕跡よりつぎの特徴が確認できる(注75)（胸飾の部分名称については、**挿図34**を参照)。

①基本帯のみの１重の胸飾である。

②基本帯の下縁中央に縦長楕円形の垂飾３が下がり、左右に横長楕円形の飾りがつく。

③左右肩上に円形の飾りがつき、そこから短い帯状の飾りが下がる。

ｂ）菩薩像胸部の胸飾の類例

日本の仏像の胸飾は、７世紀第４四半期から８世紀第１四半期にかけて、初唐期のさまざまな形式が集約的に摂取され、華やかで多彩な形式がみられるようになる。８世紀第２四半期になると、その多彩なヴァリエイションの中から特定の形式が選択されて、主流形式となった。その形式は、内側に玉繋帯、外側に基本帯を配する２重の構成をもち、基本帯の下縁に沿って中央から左右に展開する蔓唐草をめぐらせる点などに特徴がある。740年代の製作とみられる東大寺法華堂不空羂索観音立像の胸飾（**挿図35**）に、その典型がみられる。８世紀後半に入ると、天平勝宝６年〔754〕の鑑真渡来を契機に唐の新形式がもたらされた。その形式は、玉繋帯をともなわない１重の構成で、基本帯に沿って左右に展開しない唐草を配置する点などに特徴がある。唐招提寺十一面観音立像の胸飾（**挿図36**）にその典型がみられる。８世紀後半の仏像の胸飾は、法華堂本尊像にみられる伝統形式と唐招提寺十一面観音像にみられる新形式の２形式を中核に展開したが、新形式の影響が新興の木彫像に強くあらわれたのに対し、在来の乾漆像や塑像では多くの作例が伝統形式を継承する。

山王廃寺菩薩像の胸飾は、１重の構成だが、基本帯に垂飾と楕円形飾がつく本格的な形式を示す。しかし、その基本帯には唐草はめぐらされない。こうした形式は、根津美術館銅造観音菩薩立像、興福寺東金堂日光・月光菩薩立像、奈良国立博物館保管釈迦如来説法図繡帳（勧修寺繡帳）の一部の供養菩薩像、興福寺旧西金堂阿修羅立像（八部衆像のうち、天平６年〔734〕）（**挿図37**）など、伝統形式が成立するより前の、７世紀末から８世紀前半にかけての作例に類例がみられる。特に、左右肩上の円形飾りの下から短い帯状の飾りが下がるのは、比較的珍しい形式だが、先に挙げた興福寺阿修羅像の胸飾の同じ場所にも同様の飾りがあらわされており、山王廃寺菩薩像との形式的な類似が注目される。

山王廃寺菩薩像の胸飾に関しては、細部意匠が確認できないため、これ以上の分析はできない。しかし、剝落痕からうかがわれるその概形は、８世紀前半に位置づけて矛盾のない形式を示すものと考えられる。

挿図35．東大寺法華堂
不空羂索観音立像　胸飾

挿図36．唐招提寺
十一面観音立像　胸飾

挿図37．興福寺　阿修羅立像
（八部衆像のうち）　胸飾

6．作風

最後に、山王廃寺塑像の作風に関して、検討可能な部分を取り上げて考察する。

a）神将像の面貌

神将像頭部（11A962820、6）は、顎の先が尖り、下顎が左右に張り出した、面長な輪郭の顔だちを示す。五角形を思わせるその顔だちは、東京国立博物館保管クス材製伎楽面のうち金剛面（法隆寺献納宝物212号）・力士面（同227号）、同じくキリ材製伎楽面のうち金剛面（同213号）（**挿図38**）と似ている。ことにキリ材製金剛面の面貌は、こめかみから頬にかけての微妙な起伏、ほっそりとした輪郭、顔の造作が下方に集まる点などにも、山王廃寺神将像との類似が指摘できる。これに対し、興福寺八部衆立像（天平6年〔734〕）の顔（**挿図39**）は、下顎や顎先の形は類似するが、面長ではない。東大寺戒壇堂四天王立像の顔（**挿図40**）は、下顎は左右に張るが、顎先は尖らず、全体として四角張った顔だちを示す。いずれの像でも顔の長さに対して横幅が広めで、山王廃寺像とは異なった印象を与える顔だちを示す。

また、目の形については、上眼瞼裂の目頭近くに角を立てる点が注意を引く。こうした瞋目の表現は、当麻寺金堂四天王立像（7世紀末）（**挿図41**）ではじめて、きわめて写実的な形であらわれる。当麻寺像では、目頭近くの角の立ち方が緩やかで、目の見開きも自然である。この角を立てた瞋目は、8世紀第2四半期の忿怒像にも継承され定着するが、それとともに表現の形式化が進む。すなわち、興福寺八部衆立像のうち鳩槃荼像（**挿図39**）、東大寺法華堂執金剛神立像、東大寺戒壇堂四天王立像のうち持国天像・増長天像（**挿図40**）、東大寺法華堂四天王立像・金剛力士立像、新薬師寺十二神将立像などでは、目の見開きが誇張され、目頭の部分が縦に裂けたようにあらわされるようになる。この間、法隆寺金堂旧壁画の神将像や法隆寺献納宝物伎楽面のうちクス材製金剛面（212号）・力士面（227号）・崑崙面（214号）、キリ材製金剛面（同213号）（**挿図38**）などでは、両者の中間的な形がみられ、なお形式化に至らない写実性をとどめた表現がみられる（注76）。

山王廃寺神将像の瞋目は、目頭の部分は縦に裂けたようにあらわされていたとみられ、その点は興福寺鳩槃荼像以下の諸作例

挿図38．東京国立博物館保管　金剛面（法隆寺献納宝物213号）

挿図39．興福寺　鳩槃荼立像（八部衆像のうち）

挿図40．東大寺戒壇堂　増長天立像（四天王像のうち）

挿図41．当麻寺金堂　持国天立像（四天王立像のうち）

と共通する。しかし、目の見開きはこれらの作例に較べると誇張が少なく控えめであり、瞋目の表現が定型化する直前の様相を示しているように思われる。

挿図42．法隆寺五重塔東面女性侍者坐像（東６号）

挿図43．薬師寺西塔跡出土塑像片（俗人像面部）

ｂ）女性像の面貌

女性像の顔については、女性像頭部（11A962821、33）と女性像面部（11A962822、34）の２断片がある。

そのうち女性像面部は、両目の一部を含む顔面上部に欠損があるものの、比較的よく当初の造形をとどめている。この像は、推定坐高25cm前後の小像だが、熟練したヘラ使いで細部まで丁寧に造り込まれている。細かく毛筋をあらわした柔らかなボリュームのある頭髪、微妙に起伏するこめかみから頬にかけての肉どり、小鼻を明瞭にあらわした鼻、中央にふくらみをもたせた上唇、わずかに上がった口角など、その造形はヒトの顔の特徴を細かく的確に捉えている。

法隆寺五重塔塑像の女性像（**挿図42**）は、この断片より大きさのある坐高35cm前後のものが多い。法隆寺五重塔塑像の面部と山王廃寺の女性像面部とを比較すると、法隆寺五重塔塑像の方がより単純な面で構成されており、顔の造作は大ぶりで、概して細部にあまり拘泥せず大つかみに造形されていることがわかる。これに対して、山王廃寺の断片は、肉どりに微妙な起伏があり、顔の造作は現実的な比例を示し、細部の造形もより細かく具体的である。全体として、山王廃寺の女性像面部は、法隆寺五重塔塑像の女性像に比べ、写実性の面で一歩進めた感がある。その面貌表現は、薬師寺西塔跡出土の俗人像面部（天平２年〔730〕頃）（**挿図43**）のそれに通じる性格をもつものと思われる。

ｃ）衣部

衣部に関しては、以下の像種・部位について、法隆寺五重塔塑像と比較可能な断片がある。

①男性像の窄袖

［山王廃寺］胡人像上半身（11A962823、37）

［法隆寺塔］男性像（東９号）（**挿図44**）

②神将像の鰭袖・窄袖

［山王廃寺］神将像右上半身（11A962825、７）、神将像右肩・右上腕部（11A962749、８）、神将像左前腕部（11A962762、24）

［法隆寺塔］着甲像（北17号）（**挿図23**）など

③女性像の背子背面・鰭袖口

［山王廃寺］女性像上背・左上腕部（11A962765、36）

［法隆寺塔］女性像（東８・11・13・15号、西10・13・14号）（**挿図28・29**）

挿図44．法隆寺五重塔東面男性侍者坐像（東９号）

まず、①の窄袖の衣文を比較する。法隆寺の男性像では、強い陰影があらわれる起伏の大きい衣文を、繰り返して配する。これに対し、山王廃寺の胡人像では、衣文の整理が進むとともに、粗密緩急のアクセントが加わり、微妙な面の起伏によって布の質感がより自然に表現される(注77)。簡潔で要を得た、手慣れた写実的表現である。

同じような衣文表現の違いは、②の鰭袖のふくらんだ部分についても指摘できる。法隆寺着甲像の鰭袖は、c字形に湾曲する衣文を交えた賑やかな構成を示し、全体に衣文の彫りが深い。これに対し、山王廃寺神将像の鰭袖は、より簡潔な衣文構成を示し、鰭袖のふくらみと調和した微妙な起伏によって、布の質感をたくみに表現している。その衣文表現は、法隆寺五重塔の着甲像より興福寺八部衆立像（**挿図14・20**）のそれに近い。

③に関しては、背面における造形の精粗が注意を引く。法隆寺五重塔東面・西面の半臂を着ける女性像(**挿図29**)は、半臂背面には帯のくくりだけをあらわし、衣文はあらわない。これに対し、山王廃寺の女性像上背部・左上腕部は、法隆寺の女性像より小さい像であるにもかかわらず、背子背面に丁寧に衣文をあらわしている。同じような背面における造形の精粗は、②の鰭袖の衣文についても指摘することができる。これらのことから、山王廃寺塑像の入念な製作態度をうかがうことができる。

d）神将像の皮甲

神将像の皮甲については、部位の特定できる断片が多いが、次の断片にその作風上の特徴がよくあらわれている。

①神将像上半身（11A962825、7）
②神将像右肩・右上腕部（11A962749、8）
③神将像左肩・左胸部（11A962761、9）
④神将像背面左肩部（11A962748、10）
⑤神将像右胸部（11A962731、14）
⑥神将像左胸部（11A962754、15）
⑦神将像下腹部（11A96369＋11A962755、19）
⑧神将像右腰部（11A962702、20）

比較的大型の断片である①⑧でみると、山王廃寺神将像の皮甲は、法隆寺五重塔の着甲像(和銅4年〔711〕)（**挿図17・23**）や興福寺八部衆立像（天平6年〔734〕）（**挿図14・20**）に比べて薄手にあらわされていることがわかる。肩甲（②③）の縁は薄く鋭角的につくられ、甲の輪郭もより整理された感があり、見る者に明快な印象を与える。

その一方、胸甲（⑤⑥）や表甲腰部（⑧）では曲面の起伏は小さく、ことに胸甲は平板状にあらわされる。8世紀半ば頃の製作とみられる東大寺法華堂執金剛神立像(**挿図26**)、同四天王立像・金剛力士立像(**挿図15**)、東大寺戒壇堂四天王立像(**挿図24**)、新薬師寺十二神将立像(**挿図16**)では、胸部や腰部の曲面の抑揚が強く、皮甲を通してその内側に包まれた肉身の存在が明瞭にあらわされる。山王廃寺神将像は、皮甲を比較的薄手にあらわしてはいるが、8世紀半ば頃の着甲像と比較すると、皮甲に包まれた肉身の存在感はなお希薄であるといえる。その意味では、法隆寺五重塔の着甲像や興福寺八部衆立像などに近い造形感覚を示すものといえよう。

細部では、前楯の下縁（⑦）の表現が注目される。先に挙げた8世紀半ば頃の着甲像では、表甲・下甲の

縁の一部や前楯の下縁に反りをあらわし、皮甲の質感を細かく表現する。それに対し、法隆寺五重塔の着甲像（**挿図17・23**）や興福寺八部衆立像（**挿図14・20**）では、まだ、こうした皮甲の質感表現はあらわれていない。前述の肉身表現の問題とともに、皮甲の質感表現の面においても、730年代から740年代にかけて天平着甲像の作風がより写実性を深めたことがわかる(注78)。山王廃寺神将像の前楯は平板状で、下縁にも反りがあらわされない。その硬い表現は、東大寺法華堂や戒壇堂の着甲像など、８世紀半ば頃の作例に比べて古風であり、興福寺八部衆立像に近い。

ｅ）肉身の表現

肉身の表現がよくわかる断片としては、菩薩像胸部（9A80336、１）と比丘像上半身（9A80335、31）がある。

菩薩像胸部は、胸部や上背部の肉づきがゆたかで、体軀に厚みがある。このような充実した体つきは、塑像やこれを原型とする脱活乾漆像のこれまで知られている作例では、740年代前半の造立とみられる東大寺法華堂の不空羂索観音立像（**挿図45**）にはじめてあらわれる。これに対し、710年代から730年代にかけての作例、すなわち法隆寺五重塔文殊菩薩坐像（東２号、和銅４年〔711〕）（**挿図46**）、薬師寺西塔跡出土菩薩像上半身（天平２年〔730〕頃）、興福寺阿修羅立像（八部衆像のうち、天平６年〔734〕）（**挿図47**）は、一様に胸板の薄い華奢な体つきを示す。一方、ブロンズ像の作例では、塑像や脱活乾漆像よりも早く、養老２年〔718〕頃の造立と考えられる薬師寺金堂の薬師三尊像両脇侍像（**挿図48**）（注79）に、厚みのある堂々とした体つきがあらわれる。現存する遺品から判断する限り、塑像や脱活乾漆像ではブロンズ像に少し遅れてこうした現実味のある肉身表現があらわれ、まもなく東大寺法華堂本尊像において完成に至ったと考えられる。

こうした天平前期における塑像・脱活乾漆像の肉身表現の展開の面から、山王廃寺菩薩像の歴史的な位置を考えれば、薬師寺塔本塑像や興福寺八部衆立像より後、東大寺法華堂本尊像より前に置くのが自然であろう。

挿図45．東大寺法華堂　不空羂索観音立像

挿図46．法隆寺五重塔　文殊菩薩坐像（東２号）

挿図47．興福寺　阿修羅立像（八部衆像のうち）

挿図48．薬師寺金堂　日光菩薩立像（薬師三尊像のうち）

挿図49．法隆寺五重塔北面
羅漢坐像（北22号）

挿図50．法隆寺五重塔北面
羅漢坐像（北22号）

比丘像上半身は、実際の人体を思わせる、骨格や肉身の克明で再現的な表現に特徴がある。ことに肩胛骨を高く隆起させた背面の表現はきわめて現実的で、強い印象を与える。その表現を法隆寺五重塔北面の羅漢像(北21～27号)（**挿図49・50**）と比較すると、法隆寺像では骨格の表現があらく観念的で、肉づけも細部に拘泥せず大つかみにあらわされるのに対し、山王廃寺像では骨格の表現が詳細で現実的になり、肉づけにも細かい抑揚がつけられ、皮膚の微妙な質感までが感じられる。要するに、山王廃寺の比丘像は、肉身表現の写実性において法隆寺五重塔の羅漢像より一歩先を行くものと考えられる（注80）。また、体軀の横幅が狭い点は、法隆寺五重塔の羅漢像や興福寺十羅漢立像（天平6年〔734〕）と共通するが、体軀の奥ゆきは菩薩像の場合と同様、両像に比べて厚みが増し、充実した体つきを示す。

f）まとめ

以上の作風に関する検討から、山王廃寺の塑像は、表現の写実性の面において、和銅4年〔711〕の法隆寺塔本塑像よりも進み（b・c・d・e）、740年代の東大寺法華堂・戒壇堂の塑像・乾漆像までには至らない（a、d、e）、両者の中間的な位置にあると判断され、天平2年〔730〕頃の薬師寺塔本塑像や天平6年〔734〕の興福寺八部衆・十羅漢像と、ほぼ同時期の製作と考えられる（b、c、d）。

山王廃寺塑像と薬師寺塔本塑像・興福寺旧西金堂像との関係については、神将像の面貌（a）に関しては、山王廃寺塑像により古風な要素がみられるように思われるが、他方、皮甲や肉身の表現（d、e）にはより進んだ要素も認められ、その製作年代の前後関係は確言できない。ただ、山王廃寺塑像の厚みのある充実した体つきは、天平前半期の塑像・脱活乾漆像の作風展開の上で注目すべき重要な特徴と思われる。この点を重くみれば、両像にやや遅れての製作と考えべきかもしれない。

VI．塑像の彩色文様について

山王廃寺出土塑像は、当初鮮やかな色彩で彩られていたが、現在は焼損によって色彩の多くを失っている。しかしわずかだが文様の痕跡が認められ、完全な復元は無理だとしても構造の概略・概形が推定できるものがある。ここではそれらの文様について、美術史的な位置付けを試みたい。

1．団花文

胡人像上半身(11A962823、37)の右襟側の帯状区画に、半截の団花文が交互に配される（**挿図51**）。団花文は、C字形を外向きに連ね(Cの線の途切れた方を外とする)、連結部に三裂花弁を置いている。C字形を基礎構造としている点が注意される。

日本の団花文としては、法隆寺金堂壁画(7世紀末～8世紀初頃)のものが古例である（**挿図52・53**）。法隆

寺壁画では、連珠円文（**挿図54**）が多く使用され団花文の使用はわずかであり、連珠円文から団花文へと流行が移る過渡的な位置にあると考えられる。法隆寺壁画の団花文はＣ字形を構造の基礎としたもので、胡人像の団花文と類似する。

興福寺八部衆像（天平６年・734年）の彩色については、承暦２年（1078）・貞永元年（1232）の二度の修理記録があり、現在の彩色の大方は後者の鎌倉時代のものと見られる。しかしそれらの修理は天平の意匠を踏襲するものであったと思われ、多くの部分に天平の文様の面影を認めることができる（注81）。天平当初のものを踏襲すると思われる団花文には、胡人像同様、Ｃ字形を基礎構造とするものが多い（**挿図55・56**）。そして東大寺法華堂執金剛神像（８世紀中頃）の袴や表甲の外区にも、Ｃ字形を構造の基礎とする団花文が認められる（**挿図57・58**）。

ところが東大寺法華堂執金剛神像と作風の近い、東大寺戒壇堂四天王像（８世紀中頃）にはＣ字形を基礎とする団花文が認められない。東大寺法華堂金剛力士・四天王像（８世紀中頃）の内では、わずかに金剛力士阿形像腋下の甲の縁にＣ字形を用いた団花文が認められるが（**挿図59**）、腕の衣や裙などの目立つ部位には大型で複雑化した団花文が採用されている（**挿図60**）。Ｃ字形の団花文は、最早、興福寺八部衆像や東大寺法華堂執金剛神像のように一番目立つ大型の団花文には採用されておらず、流行の主流がＣ字形の団花文から、より複雑な団花文へと移ったものと見られる。

このようにＣ字形を基礎とする団花文は、日本における団花文の出現期から、恐らく興福寺八部衆像造立（734年）のやや後、730年代まで流行したものと考えられる。Ｃ字形の団花文から流行が移った契機として、天平７年（735）の遣唐使帰朝を想定することもできよう（注82）。

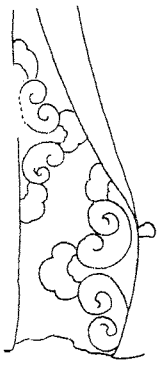
ところで、Ｃ字形の団花文の形にもやや時代による変化が認められる。法隆寺金堂壁画のものはＣ字形が細いが、興福寺八部衆像以下ではＣ字形が太く肥厚するものが多く、東大寺法華堂執金剛神像では腎臓形とも言うべき肥厚形を呈している。山王廃寺胡人像のＣ字形は腎臓形を呈する程ではないがかなり太いものであり、法隆寺金堂壁画よりも興福寺八部衆像に近いものと言える。

さて山王廃寺出土の団花文の遺例には、他に箱形天蓋（11A962724、**73**）のカーテン状垂幕に見られるものがある（**挿図61**）。十字形の構造で先端に扇状花を配すものと推定される。扇状花とは、Ｖ字に開く外花弁の間にアーチを架けるように内花弁を置く花文である。この団花文の扇状花は、蕨手形の外花弁と三裂花弁の内花弁で構成している。

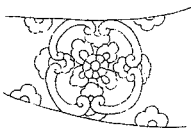
２．扇状花

扇状花は、唐草においては７世紀末から８世紀初にかけて、パルメットに代わって主流となるもので、扇状花唐草の古例は妙心寺梵鐘（戊戌年銘・698年）である。扇状花の出現は団花文の出現と揆を一にしており、法隆寺金堂壁画（７世紀末～８世紀初頃）の団花文にも十字形構造の先端に扇状花を配すものが認められる（**挿図53**）。山王廃寺の扇状花を伴う団花文は少なくとも７世紀末以降のものと言えるが、８世紀を通じて扇状花を伴う団花文の遺例は多く、それ以上の年代限定は難しい。

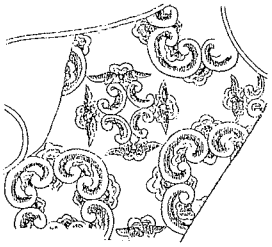
ところで山王廃寺出土箱形天蓋（11A962720＋11A962809、72）には唐草も見られる（**挿図62**）。しかし団花文に扇状花を採用しながら、この唐草には扇状花が認められない。焼損で消失した部分もあると推定されるが、構成から考えて当初扇状花が存在したようには見えない。しかし葉の先端が立体的に雲頭状に翻る点など、８世紀以降の様式を備えることは間違いがない。



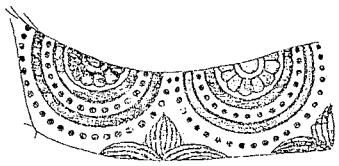
挿図51．山王廃寺出土
胡人像（11A962823）
右襟　団花文



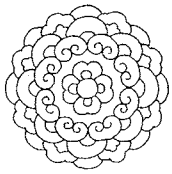
挿図52．法隆寺金堂壁画
第6号壁　勢至菩薩像
腰布　団花文



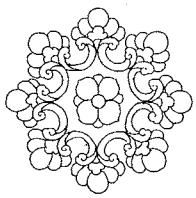
挿図53．同 第11号壁
象　鞍褥　団花文



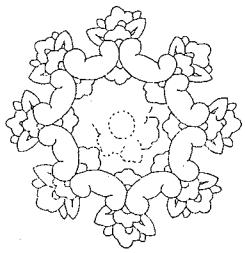
挿図54．同 第10号壁
如来像　僧祇支縁
連珠円文



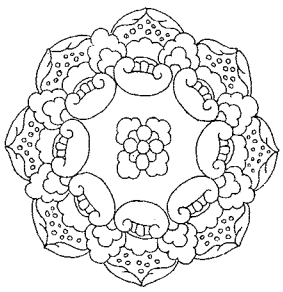
挿図55．興福寺　阿修羅像
裙　団花文



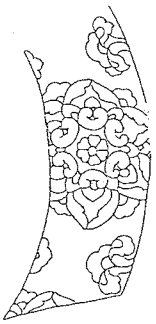
挿図56．興福寺　迦楼羅像
袴　団花文



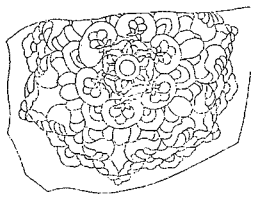
挿図57．東大寺法華堂
執金剛神像　袴　団
花文　小田誠太郎注
82論文より転載



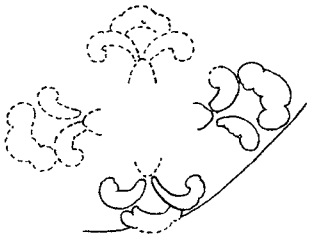
挿図58．同　表甲外区
団花文



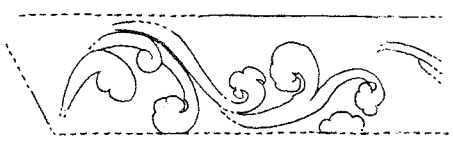
挿図59．東大寺法華堂
金剛力士阿形像　腋
下甲外区　団花文
小田注82論文より転
載



挿図60．同　袴　団花文
小田注82論文より
転載



挿図61．山王廃寺出土
箱形天蓋垂帳（11A962724）
団花文



挿図62．山王廃寺出土
箱形天蓋（11A962720
＋11A962809）　唐草

3．まとめ

以上の考察により、山王廃寺塑像片の文様は8世紀前半のものと考えられる。中でもC字形を用いる団花文を手掛かりに更に年代を限定するならば、720年代から730年代前半頃と推定することができよう。

Ⅶ. 総括と問題点

1．総括

これまでの検討をまとめれば、次のようになる。

①山王廃寺等Ⅴ遺跡出土の塑像は、7～8世紀の中央における作例と共通する、本格的な製作技法を用いて製作されている。

②心木には広葉樹環孔材を用いるものがあり、その用材は現地で調達したものと推定される。

③製作はきわめて丁寧で、仕上げには繧繝彩色や切金文様を用いる。

④これらの塑像片は、山岳をともなう塔本塑像の一部とみられる。

⑤塔本塑像を安置する須弥壇は、1辺長12～13.5尺（357.6～402.3cm）程度の大きさであったと推定される。

⑥その主題は、仏伝中の降魔成道・涅槃の両場面ほか、説法の場面があったと推定され、法隆寺や薬師寺の塔本塑像と類似した場面選択をしていたとみられる。

⑦群像のうちには像高70cm前後の神将立像が少なくとも5体あり、その造形や主題との関係から、八部衆像の存在が推定される。

⑧神将像の甲制には、730年代の作例にはじめてあらわれ、その後、日本の神将像の基本甲制として長く定着した《天平甲制》が採用される。

⑧甲制の細部形式は、天平6年〔734〕の興福寺八部衆立像の甲制に最も近く、神将像の服制にも、8世紀第2四半期の作例に共通する特徴が確認できる。

⑨痕跡からうかがわれる菩薩像の胸飾の形式も、8世紀前半に位置づけて矛盾がない。

⑩作風については、和銅4年〔711〕の法隆寺塔本塑像から、740年代の東大寺法華堂・戒壇堂の塑像・乾漆像へと至る、写実様式の展開過程に位置づけることができる。とりわけ充実した肉身の表現には、薬師寺塔本塑像や興福寺八部衆立像より進んだ面がみられる。

⑪彩色文様にも、8世紀前半の特徴がみられる。特にC字形を用いる団花文の形態は、興福寺八部衆立像のそれに近く、この点からは720年代から730年代前半の製作と考えることが可能である。

塑像は重量が重く、材質的にも脆弱なため、製作後の移動が困難である。山王廃寺塑像の製作も、現地で行われたと考えられる。塑像の心木に中央ではあまり用いられない広葉樹環孔材を用いている点も、そのことを傍証する。

他方、これまでの造形的な検討を通して明らかなように、山王廃寺の塑像は、中央の作例である法隆寺塔本塑像や薬師寺塔本塑像と比較しても、全く遜色のないすぐれた作ゆきを示す。その高い製作水準から、作者は中央から派遣された官営工房系の仏工と考えられる。したがって、その造像には中央における造形・技法の展開が、ほぼリアルタイムで反映されているとみてよかろう。

こうしたことを前提として、これまでの各方面からの検討結果を総合的に判断すれば、山王廃寺塑像の製作年代は、8世紀第2四半期、730年前後に求めることができよう。

2．根巻石と塑像との関係――塔の創建と塔本塑像の製作――

塔本塑像とみられる山王廃寺等Ⅴ遺跡出土塑像の製作年代を730年前後と考えると、7世紀第3四半期とされる伽藍の創建から、半世紀以上遅れて塔本塑像が造られたことになる。

塔の創建に遅れて、塔内に安置する仏像が造立された事例は、藤原氏の氏寺である興福寺にみられる。『興福寺流記』所引の「天平記」によれば、同寺五重塔は天平2年〔730〕に光明皇后により創建された。その安置仏像について、『興福寺流記』は「天平記不注所安仏等」（天平記は安ずる所の仏等を注さず）とし、「宝字記」を引いて初層に安置された四方四仏浄土の詳細を記載する。つまり、同塔の安置仏像は、「天平記」の勘録された天平16年〔744〕以後、「宝字記」の勘録された天平宝字年間〔757～765〕以前に造立されたと考えられる。塔はほんらい仏舎利を安置するための施設で、仏像を安置する必要はない。したがって、塔内に安置される仏像の造立が、仏舎利の納置や塔建物の造営に遅れて行われたとしても問題はない。

先に指摘したように、塔初層の心柱の周囲に置かれたと推測される根巻石は、塔本塑像の安置を前提としたものとは考えにくい。創建期のものとみられる根巻石の存在は、当初、山王廃寺の塔内に塑像群を安置する計画がなかったことを立証するものといえよう。

ところで、8世紀第2四半期において山王廃寺の塔内に、山岳をともなう塑像群があらためて製作された理由は明確ではない。畿内における塔内安置の山岳像や群像の例としては、7世紀のものに、大化2年〔646〕の四天王寺塔の霊鷲山像および四天王像があり、7世紀末から8世紀初めにかけての製作とみられるものに、川原寺の塔本塑像（川原寺裏山遺跡出土）がある。8世紀になると、仏堂内に浄土変を立体であらわすことが盛んになったが(注83)、これと対応するように、仏伝や仏教説話を主題とする塔本群像の造立も一段と盛んになった。和銅4年〔711〕の法隆寺塔本塑像、天平2年〔730〕頃の薬師寺東西塔塔本塑像のほか、滋賀県雪野廃寺出土の塔本塑像も8世紀前半の製作とみられ(注84)、これらに遅れて、8世紀中頃には興福寺塔の四方四仏浄土像が造立され、8世紀後半には元興寺塔に山岳をともなう四方四仏浄土像が造立された（本論Ⅳの1）。このような畿内における塔本群像造立の趨勢からみれば、8世紀第2四半期における山王廃寺の塔内荘厳も、こうした畿内寺院における塔本塑像の流行を背景にしたものと考えることができよう。

山王廃寺の塔本塑像の造立に関して、もうひとつ思い合わされることは、法隆寺五重塔の心柱朽損にともなう修理と、須弥壇改変のことである。法隆寺五重塔の八角形の心柱は、下部を約10尺ほど地下に埋めるが、塔の創建後まもなく、その地表近くの部分が腐朽しはじめた。そのため、心柱中心部を残して腐朽部が除去され、その四周より凝灰岩の切石や自然石を挿入して補強された。この補強工事に関連して創建時(第1次)の須弥山像や須弥壇も改変拡大されたらしく、第2次須弥壇の日干しレンガは、この補強用の切石にかかって築かれている（注85)。

山王廃寺の塔も、心礎南側の地層断面で心礎上面より上方30cmまで版築の跡が残り、心礎が地下式であったことが確認されている(注86)。基壇の上面は確認できず、基壇上面から心礎上面までの深さも正確にはわからない。しかし、心礎が地下式ないし半地下式であれば、創建後50年ほどで心柱の地下部分が腐朽することはおこり得る。想像をたくましくすれば、法隆寺五重塔と同じような事情で、心柱に対する補強工事が必要となり、これに関連して須弥壇の改変や塔本塑像の製作が行われたとも考えられる。

３．製作背景をめぐる問題点――総社古墳群との関係を中心に――

最後に、山王廃寺Ⅴ等遺跡出土塑像の製作背景をめぐる問題点について、山王廃寺と総社古墳群との関係に注目しながら、考察を加えてみたい。

ａ）山王廃寺と宝塔山古墳・蛇穴山古墳

７世紀後半における山王廃寺の造営に関しては、総社古墳群のうち宝塔山・蛇穴山両古墳の造営との密接な関係が指摘されてきた（注87）。

両古墳は、山王廃寺の北東約800ｍに位置する終末期古墳である（注88）。宝塔山古墳は、１辺約60ｍの方墳で、内部施設として、直方体に加工された「截石」を鉤の手状に組み合わせて築造した「截石切組積」の横穴式石室をそなえる。石室内には家形石棺が残存する。蛇穴山古墳は、１辺約39ｍの方墳で、内部施設としてやはり截石切組積の横穴式石室をそなえる。

両古墳の石室や宝塔山古墳の石棺は、きわめて硬質な輝石安山岩（宝塔山石棺・宝塔山石室天井石・蛇穴山石室天井石・同壁石）や硬質な角閃石安山岩（宝塔山石室壁石）を使用して、精巧に加工される点に大きな特徴がある。截石切組積の石室は、群馬県域の終末期古墳の特色だが、その発展段階の初期に位置づけられる山ノ上古墳（高崎市山名町、小円墳）の石室では、加工しやすい軟質の凝灰岩が使用される。これに対し、宝塔山古墳の石室は、硬質な石材を使用しながら壁体は歪みなく平滑に仕上げられ、切組積を駆使した巧妙な壁面構成がみられる。同古墳の石室は截石切組積石室の典型を示し、その築造には新来の技術的体系があったと推定されている（注89）。さらに蛇穴山古墳の石室では、壁面の仕上げや石材の組合せの工夫が一段と進み、技術的な洗練が認められるとされる。

一方、山王廃寺関係の石造物としては、塔の基壇上に建つ日枝神社（前橋市総社町総社字昌楽寺廻り）境内に、鴟尾１個・根巻石７個（1960年に現在地に移転）・塔心礎１個・柱座を造り出した礎石５個があり、周辺の民家に鴟尾１個が所蔵される。これらの石造物にも、輝石安山岩（塔心礎・礎石・根巻石）・角閃石安山岩（日枝神社鴟尾）・複輝石安山岩質溶結凝灰岩（民家鴟尾）の硬質な石材が使用される。同寺創建期のものとみられるこれらの石造物には、硬質の石材を精巧に加工する高度な技術が用いられるが、その加工技術は、両古墳の石室や石棺のそれと共通したものであることが指摘されている（注90）。山王廃寺の金堂・塔の造営と宝塔山・蛇穴山両古墳の造営との年代的順序については、なお検討の余地を残す（注91）が、７世紀後半を中心とする時期に１寺２古墳が、共通した先端技術を用いて相前後して造営されたことについては異論がなく、定説化している。

石材加工技術の共通性のほか、宝塔山古墳に関しては、次の点についても山王廃寺との関係が指摘されている。

①宝塔山古墳の石室は45度南から西に寄って開口する。同様の工法になる石室のほとんどは南中して開口しており、これは異例に属する。宝塔山石室の開口方向の延長線上には山王廃寺の塔跡があり、そこから宝塔山古墳と山王廃寺との特殊な関係が推測できる（注92）。

②宝塔山古墳石棺の脚部には、格狭間があらわされる。その意匠には、仏教文化からの影響が認められる（注93）。

以上のことから、山王廃寺と宝塔山・蛇穴山の両古墳は、総社の地を本拠地とし、大和政権と緊密な関係をもつ同一の有力氏族によって、７世紀後半と中心する時期に併行して造営されたものと考えられている。

b）総社古墳群の性格

総社古墳群は、大型の前方後円墳4基（王山古墳［全長75.6m］・王河原山古墳［消滅］・遠見山古墳［全長72m］・総社二子山古墳［全長98m］）と、大型の方墳3基（愛宕山古墳［1辺約60m］・宝塔山古墳［1辺約60m］・蛇穴山古墳［1辺約39m］）によって構成される（注94）。主として大型古墳のみによって構成される古墳群であり、東国の古墳時代後期において、屈指の質の高い古墳群とされる。

その築造は、6世紀初頭の王山古墳にはじまり、6世紀末には総社二子山古墳が築造された。7世紀にはいると、前方後円墳が消滅して方墳が築造されるようになり、7世紀初頭には愛宕山古墳が築造され、宝塔山古墳・蛇穴山古墳がこれに続いた。群馬県域における7世紀の大型の方墳は、6世紀の大型の前方後円墳が各地域に分散するのとは対照的に、総社古墳群に集中する。3基の大型方墳は7世紀の上野地域において傑出した存在であり、これらの大型方墳と東国有数の本格的伽藍＝山王廃寺の双方を造営した氏族が、同地域において圧倒的な地位を占めていたことが推測できる。

また、次の事実は、総社に本拠地をもつこの氏族が大和政権と深く結び付いていたことを示すとされる。

①総社古墳群にみられる墳丘の形の変遷（前方後円墳→方墳）が、畿内の首長墓にみられるそれ（前方後円墳→方墳・円墳）と対応すること。

②上野地域では愛宕山古墳と宝塔山古墳だけが、家形石棺を使用すること。

③宝塔山・蛇穴山両古墳の石室や宝塔山古墳の家形石棺に、硬質の石材を精巧に加工する先進的な技術が使用されること。

④宝塔山・蛇穴山両古墳の石室の壁面全体に漆喰が塗布され、白壁に仕上げられること。

以上のうち、②の家形石棺に関しては、同時期の大和政権の近辺では大王とその一族、及び政権を構成する有力氏族の墳墓に限定的に使用されており、愛宕山・宝塔山の両古墳が家形石棺を使用することは、その被葬者が大和政権に直接組み込まれていたことを示す有力な証拠とされる。③の石材加工技術に関しては、それまでの在地の技術では到底なし得ない水準にあると評価され、④の石室壁面の漆喰塗りに関しては、7世紀中葉以降の大和の主要古墳に限定的にみられることが指摘され、専門技術者の派遣を含めた、大和政権からの直接的影響が想定されている。

7世紀の上野地域においては、愛宕山古墳以後の総社古墳群だけが突出して、近畿地方の支配者層の用いた墳墓の構造や構築技術の影響をきわめて強く受けている。このことは、総社古墳群に被葬された氏族が、大和政権から一定の地位を認められ、上野地域を一元的に支配していたことを示すと考えられている（注95）。律令制下において総社の地に上野国府が開設されたことは、7世紀におけるこの氏族の実力を端的に物語るものといえよう。

c）山王廃寺等Ⅴ遺跡出土塑像の製作背景

山王廃寺等Ⅴ遺跡から出土した塔本塑像とみられる塑像群は、伽藍創建期より約半世紀ほど遅れ、8世紀第2四半期の造立と推定された。塑像の製作水準はきわめて高く、同時期に中央で製作された塑像遺品と比較しても遜色がなく、地方寺院出土の塑像としては抜群のできばえを示す。その造像は、東国の在地仏師による造像とは考えがたく、中央から直接派遣された官営造仏所系の仏師による造像と推定される。

山王廃寺塑像の示す中央的な性格は、総社古墳群や山王廃寺を7世紀に造営した氏族が、大和政権と密接な関係をもっていたと推定されることと考え合わせれば、必ずしも不審とするには足らないであろう。山王廃寺等Ⅴ遺跡から出土した塑像は、7世紀後半に山王廃寺を造営した氏族が、8世紀第2四半期、730年前後

の時点においても中央との強い関係を保持していたことを示しているといえよう。

d）山王廃寺の造営氏族の問題

総社古墳群や山王廃寺を造営した氏族をめぐっては、『新撰姓氏録』にみえる「阿利眞公」（有馬公）とみる説（注96）、《山の上碑》碑文にみえる「佐野三家」とみる説（注97）、上毛野氏とみる説（注98）などがある（注99）。

これらの3氏族のうち、『日本書紀』に氏族に関する伝承や事績がみられるのは、上毛野氏だけである。上毛野氏は、崇神天皇の皇子豊城入彦を祖と称する有力氏族で、そのウジ名や後述する伝承・事績から、その本貫地は上野国であったと考えられる（注100）。

7世紀前半以前の上毛野氏に関しては、大和政権の東国治定や蝦夷征伐に従い、対朝鮮軍事・外交に関与したことが『日本書紀』にみえる（注101）。天武10年〔681〕には、大錦下（従4位下相当）の上毛野君三千が、「帝記及び上古の諸事を記定する」ために開かれた天武朝の史局に参加し（注102）、持統5年〔691〕には詔により「祖等の墓記」を進上している（注103）。『日本書紀』にみえる大化前代の伝承のうちには、三千関係のものや墓記を典拠とするものが含まれていると考えられる。天武13年〔684〕には、新たに制定された八色の姓のうちの第2位、「朝臣」のカバネを畿内の有力氏族とならんで賜った（注104）。この時、車持君・下毛野君・佐味君・大野君・池田君の5氏も、上毛野君とともに「朝臣」のカバネを賜っている。『新撰姓氏録』によれば、これら5氏は上毛野氏と同祖とされる（注105）。延暦10年〔791〕4月5日の池原公綱主等の奏言（注106）には、豊城入彦の子孫である「東国六腹の朝臣」の語がみえるが、天武13年に賜姓された上毛野氏を含めた6氏族がこれ比定される（注107）。

7世紀第3四半期から8世紀第1四半期にかけては、三千・小足・安麻呂・堅身・廣人・荒馬の6名が、従5位下から従4位下（ないし大錦下）に至る位階を得、そのうち小足と安麻呂が陸奥守に、広人が陸奥按察使に任じられている（**表15**）。これに先だって、『日本書紀』舒明天皇9年〔637〕条には、大仁位（正5位相当）にあった上毛野君形名が将軍として蝦夷を討伐したことがみえ、同天智天皇2年〔663〕3月条・同年6月条には、上毛野君稚子が前将軍として新羅を攻めたことがみえる。これらのことから、上毛野氏は7世紀前半から8世紀前半にかけて、従4位ないし正5位まで昇り得る貴族としての一定の待遇を受け、大和政権の東北経営や対朝鮮軍事の一翼を担っていたことがわかる。

養老4年〔720〕には、蝦夷の反乱で陸奥国按察使の広人が殺害される（注108）。神亀5年〔728〕には内・外階制が成立し、中央官人の5位への昇叙の方式が、カバネの尊卑や氏の門地によって2コースに区分された。その結果、ごく少数の名門氏族が内階コース（正6位上以下→従5位下）を進み、大多数の氏族は外階コース（正6位上以下→外従5位下）を進むこととなった（注109）。上毛野朝臣は外階コースの氏族とされ、8世紀第2四半期には外従5位下より上の位階に昇るものがみられなくなる（**表15**）。神亀6年には、宿奈麻呂が長屋王の変に連坐して流罪に処される（注109）。この事件を契機に、上毛野氏本宗家の中央における地位は大きく後退したとみられる。その後、天平勝宝2年〔750〕に田辺史が上毛野君の氏姓を賜り（注110）、この異系の上毛野氏が同氏の中核的位置を占めるに至った。

上毛野氏の東国での本拠地としては、そのウジ名などからみて、上毛野国の中心地域、後に上野国府が開かれた前橋市総社の地とみるのがもっとも自然である。

総社にある宝塔山・蛇穴山両古墳や山王廃寺を造営した氏族については、早く尾崎喜左雄氏が、当地に根をおろした大豪族を想定すべきであるとして、『新撰姓氏録』右京皇別上・垂水公条（注111）にみえる「阿

表15　7世紀から8世紀前半にかけての上毛野朝臣の位階と官職

【表の見方】

1．7世紀から8世紀前半にかけての上毛野氏のうち、位階の判明する人物のみを掲載した。

2．特に注釈のない記事は、『日本書紀』および『続日本紀』による。

3．「在」は在位・在職、「昇」は昇叙、「復」は復位をあらわす。

4．「637．--」は「637年」（月不明）の意味で、「749．閏5」は「749年閏5月」の意味である。

5．「形名／方名」項の「大仁」は、推古11年〔603〕制定の冠位12階の冠位で、大宝令官位制の正5位に相当する。「三千」項の「大錦下」は、壬申の乱前後にわたる冠位26階制の冠位で、大宝令官位制の従4位に相当する。「小足／男足」項の「直広参」は、天武14年〔685〕冠位制の冠位で、大宝令官位制の従5位上に相当する。以上の冠位に関しては、これに相当する大宝令位階のところに、「在大仁」のように、冠位名を付けて記入した。

官位／名	外従5位下	従5位下	従5位上	正5位下	正5位上	従4位下	従4位上
形名／方名				637．--在大仁 在討蝦夷将軍			
三千						681．3在大錦上　＊1 681．10卒	
小足／男足			700．10 在直広参 任吉備総領		703．7在 任下総守	708．3在 任陸奥守 709．4卒	
安麻呂			708．3在 任上総守 709．7在 任陸奥守	711．4昇＊2			
堅身		707．2昇 自従6位上 713．4　＊3 自備前介 任美作守					
広人		708．1昇 自従6位上	714．3昇 714．11在＊4 任迎新羅使 右副将軍 717．3在 在右少弁 717．4在 任大倭守	720．1昇 720．9没＊5 在陸奥国按 察使			
荒馬		709．1昇 自正6位下					
宿奈麻呂	728．5昇 自従6位上 729．2　＊6 流罪 742．6復位						
稲麻呂	743．5昇 自従6位上						
足人	749．閏5昇＊7 自外従7位 下在上野国 勢多郡小領						

【注釈】　＊1．詔により、川島皇子らと共に帝記及び上古の諸事を記し定める。

＊2．『本朝月令』4月7日奏成選短冊条所引「式部記文」にも、叙位の記事あり。

＊3．『伊呂波字類抄』所引「美作風土記」。和銅6年〔713〕4月、備前守百済南典とともに介として、備前6群を割き美作国を置くことを解し、美作守となる。

＊4．左大臣石上朝臣麻呂の薨去に際して、太政官の誄を為す。

＊5．蝦夷の反乱に遭い殺される。

＊6．長屋王の変に連坐。

＊7．上野国国分寺に知識物を献じたことにより昇叙。

利眞君」（有馬君）をこれに比定した（注112）。尾崎氏は、同書にみえる「阿利眞君」を上毛野氏の一族とし、孝徳朝に特別な待遇を得た氏族の名と解した（注112）。しかし、「豊城入彦命の六世の孫」（傍点筆者）と記される「阿利眞君」は、記述内容からみて個人の名と解するのが自然で、氏族の名と解することには無理がある。仮に「阿利眞君」が氏族名であるとしても、東国六腹の朝臣にも数えられず、『日本書紀』や『続日本紀』に関連記事のみえない氏族を、大和政権との密接な関係のもとに、上毛野地域支配の頂点に立った有力氏族に比定することは困難であろう（注113）。《山ノ上碑》碑文を根拠に、山王廃寺（＝放光寺）との関係が指摘される「佐野三家」についても、同様の理由で、山王廃寺や総社古墳群の造営主体者と考えることは困難であろう。碑文の伝える両者の関係も、佐野三家（屯倉）の管理者となった健守命の曾孫である「長利僧」が、碑文の成立した681年当時、「放光寺僧」であったらしいことを示すに過ぎない（注114）。

前述したとおり、愛宕山・宝塔山・蛇穴山の各古墳の構造や築造技術には、その被葬者たちと大和政権との密接な関係が示されており、その造営年代は、史料に確認される上毛野氏の有力者――上毛野君形名・稚子・三千、上毛野朝臣小足・安麻呂ら――の活躍年代とも重なり合う。持統5年〔691〕には、上毛野氏の「祖等の墓記」が天皇に進上されているが、そのなかには総社の3古墳の墓誌が含まれていたことも考えられる。考古学的な方法に立脚した右島氏の総社古墳群の分析（注115）と、文献史学の方法に立脚した熊倉氏の上毛野氏論（注116）がともに提示するとおり、総社古墳群や山王廃寺の造営主体者は、上毛野氏の本宗家であるとみるのが、最も妥当な解釈と思われる。

e）山王廃寺塑像と上毛野氏――上毛野朝臣宿奈麻呂と長屋王――

最後に、山王廃寺等Ⅴ遺跡出土塑像と上毛野氏との接点について考えてみたい。山王廃寺塑像は、8世紀第2四半期、730年前後の製作と推定されるが、その頃、上毛野氏は、一族の命運を左右する事件に遭遇していた。神亀6年〔729〕2月、正2位左大臣として政府首班の地位にあった長屋王は、密告により六衛府の兵に自宅を囲まれ、妻子ともども自害した（注117）。長屋王の変である。事件後、長屋王の一族以外の関係者がほとんどが赦免されるなかで、上毛野朝臣宿奈麻呂ら7人だけは、長屋王と「交り通う」との罪状で流罪に処せられた（注118）。宿奈麻呂は長屋王にごく近い立場にあり、事件に深く関与していたのである（注119）。

宿奈麻呂との関係が確認される長屋王は、仏教を厚く信仰し、さまざまな作善を行っている。和銅5年〔712〕には、王の妃＝吉備内親王の兄にあたる文武天皇の追善のために『大般若経』1部・600巻を書写し（注120）、神亀5年〔728〕にも、両親の追善のために『大般若経』1部・600巻を書写した（注121）。『唐大和上東征伝』によれば、長屋王は仏法を崇敬し、千の袈裟を造って唐の大徳・衆僧に棄施したが、その袈裟の縁には「山川異域　風月同天　寄諸仏子　共結来縁」の4句が刺繍されていたという（注122）。

ところで、和銅経の奥書末尾には「北宮」と記される。「北宮」は吉備内親王、ないしはその宮を指す語だが、この場合は後者の用例で、書写の場所を示しているとみられる。とすれば、この「北宮」の語は、近年発掘された平城京左京3条2坊の長屋王邸を指している可能性がある（注123）。長屋王邸から出土した木簡には、さまざまな家政機関の名がみえる。そのなかには、「仏造司」［(116)・16・3］（注124）、「仏造帳内」（帳内は長屋王の妻＝吉備内親王に給付されたトネリ）、［215・28・4］、「鏤盤所」「長」「銅造」「帳内」「雇人」（415・26・8）、「書法所」［(185)・21・3］、「経師」［(169)・22・4］、「帙師」［(210)・(19)・2］などが含まれ、王家の家政機関に造寺造仏や写経事業を担当する部局があり、専門技術者が配属されていたようすがうかがわれる（注125）。

長屋王家と造寺造仏との関係に関しては、養老5年〔721〕に竣工した興福寺円堂院（北円堂）の建物と仏

像を、元明・元正両天皇の勅により右大臣長屋王が「別造」したこと（注126）と、養老年間〔717～724〕に長屋王の妻である吉備内親王が薬師寺東院を造立したこと（注127）が知られる。両院の造営と長屋王家の家政機関との関係は必ずしも明らかではないが、長屋王家の仏造司に所属した仏工も、官営造仏所と密接な関係にあったとみるべきであろう。

以上のような長屋王の仏教信仰や作善のあり方を考慮すると、上毛野朝臣宿奈麻呂と長屋王との「交通」は、中央作に匹敵する高い製作水準を示す山王廃寺塑像の製作背景を考える上で、たいへん示唆的であると思われる。

もっとも、山王廃寺塑像の製作年代と長屋王の変との時間的な前後関係については微妙であり、塑像が事件後に製作されている可能性も考えられる。上毛野氏の中央における勢力は、長屋王の変を大きな契機として衰退するとされるだけに、上毛野朝臣宿奈麻呂を介して山王廃寺塑像と長屋王とを直結させることには慎重にならざるを得ない。ここでは、山王廃寺塑像の中央的な性格を説明し得る歴史的な要素として、長屋王と上毛野朝臣宿奈麻呂との関係を指摘するにとどめておきたい。

【注釈】

〈漢文史料の引用について〉

注釈の漢文史料は、原則として異体字・旧字は現行の常用漢字に改めた。句読点は、原則として参照した公刊本等によったが、一部私意により改めた部分がある。また、（　）内の訓読・注記、省略記号「……」は筆者による。

1．この報告書では、群像の安置空間を形づくったとみられる断片のうち、尖った頂上部をもつ山岳と断定できる断片以外のものは、すべて磯形と総称した。

2．古代塑像の製作技法については、次の文献を参照。

辻本干也「心木の構造と変遷について」（『美術院紀要』1）、1969年9月。

辻本干也「奈良時代の塑像技法」（『仏教芸術』73・74）、1969年12月、1970年2月。

西川杏太郎『塑像』（『日本の美術』255）、1987年8月、至文堂。後に、「日本塑像の技法について」と改題して、同著『日本彫刻史論叢』（1990年1月、中央公論美術出版）に所収。

本間紀男『天平彫刻の技法――古典塑像と乾漆像について――』、1998年2月、雄山閣出版。

3．東大寺戒壇堂四天王立像、同法華堂執金剛神立像の心木構造については、次の文献を参照。

久野健「1　彫刻　e　塑像」（東京国立文化財研究所光学研究班編『光学的方法による古美術品の研究』）、1955年3月、1984年3月（増訂版）、吉川弘文館。

久野健「東大寺の塑像――光学的方法による古美術品の研究――」（『美術研究』166）、1952年8月。後に同著『日本仏像彫刻史の研究』（1984年12月、吉川弘文館）所収。

田邉三郎助「執金剛神立像　法華堂所在」（『奈良六大寺大観　第10巻　東大寺2』）、1968年8月、岩波書店。

4．新薬師寺十二神将立像の心木構造については、次の文献を参照。

久野健「新薬師寺の十二神将像について」（『美術研究』281）、1972年10月。後に同著『日本仏像彫刻史の研究』（1984年12月、吉川弘文館）所収。

石川陸郎「新薬師寺招杜羅大将像のX線による調査」（『美術研究』281）、1972年10月。

信太司・長沢市郎・山崎隆之・稲葉政満・水野敬三郎『天平塑像の心木構造の研究――新薬師寺十二神将像――　課題番号09610057』（『平成9年度～平成11年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書』、研究代表者＝信太司）、1990年3月。

5．ただし、黒目の脱落した窪みや両目の周囲には、川原寺裏山遺跡出土鳥頭のようなガラス質の融解物は確認できない。あるいは10世紀末頃の火災より前の時点で、すでに黒目は脱落していたのかもしれない。

6．法隆寺編『法隆寺重要文化財塑造金剛力士立像修理工事報告書』（1965年3月、法隆寺発行）、127ページ。

7．有賀祥隆『截金と彩色』（『日本の美術』373）、1997年6月、至文堂。

8．水野敬三郎「十二神将立像　本堂所在」（『大和古寺大観　第4巻　新薬師寺　白毫寺　円成寺』）、1977年2月、1984年　月（第2刷）岩波書店。後に、「新薬師寺本堂十二神将立像」と題して、同著『日本彫刻史研究』（1996年1月、中央公論美術出版）所収。

なお、同解説では鰭袖や袴の地文様を「金泥」とするが、その後の調査により「黄土」であることが確認され、同書第2刷において訂正された。

9．小杉一雄「塑壁考」（『東洋学報』25-2）、1938年2月、東洋協会学術調査部、258～260ページ。小杉氏は、東面山岳の彩色を当初のものと認めた上で、北面山岳の補彩についても、原彩色に従ったものとした。さらに、法隆寺塔本塑像の山岳表現と正倉院の槃龍鏡・海磯鏡の鏡背にみえる山岳図との共通性を指摘し、稜線に点々とめぐらされる彩色が樹木の表現であることを明らかにしている。

10．『聖徳太子伝私記』（『古今目録抄』）上巻（嘉禎4年〔1238〕頃、顕真撰）次塔底条（藤田経世『校刊美術史料　寺院篇　中巻』〔1975年3月、中央公論美術出版〕による）には、「惣相内ハ皆〔山、脱カ〕也、以銅ヲ作樹ヲ植（ウヘ）之ヲ」とある。『法隆寺縁起白拍子』（貞治3年〔1364〕写本）一現身往生塔婆縁起事条（『奈良六大寺大観　第3巻　法隆寺3』〔1969年11月、岩波書店〕による）には、「中臺ニ築ツキ山ヲ、金（カネ）ノ松ヲソ植給（ウヘ）ヲ」とある。また、『古今一陽集』（良訓撰、延享3年〔1746〕写本）西之部（石黒豊次校訂本〔1974年10月、綜芸舎〕による）には、「古今目録抄、以銅作松樹之形壇植之矣、私云如此類当時所不及観也、」とある。これらの文献より、13～14世紀には山岳に銅製の松樹が植

えられていたが、18世紀にはそれらが失われていたことがわかる。

法隆寺塔本塑像の須弥山の各所にその植込痕が残存することは、早くに小杉一雄氏によって指摘されていた(＊１)が、昭和34～35年度の修理時に山岳の亀裂中より銅製鍍金の松樹形が発見され、文献の記載が裏づけられた(＊２)。

＊１　小杉一雄「塑壁考」(注９参照)。

＊２　西川新次『法隆寺五重塔の塑像』、1966年７月、二玄社。

11. 従来、山王廃寺出土の塑像として広く知られていた、群馬・住谷修氏所蔵の塑造女性像頭部は、平成11年度に出土した女性像頭部（11A962821、33）と作風・技法が共通しており、両像はもと一群の像を構成していたとみられる。住谷氏の女性像については、塔の東南部から出土したとの伝承がある。もっともその正確な出土地点は明らかでなく、伝承じたいの信憑性にも問題はあるが、山王廃寺等Ⅴ遺跡出土の塑像片に塔本塑像が含まれるとみる推定とは整合性があり、一応、ここに注記しておく。

12. 前橋市教育委員会『山王廃寺第７次発掘調査報告書』、1982年３月、前橋市教育委員会。

13. 山王廃寺の創建年代に関する主要論文は、次の通り。

①尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』、1966年１月、吉川弘文館。

②稲垣晋也「飛鳥白鳳の古瓦」(奈良国立博物館編『飛鳥白鳳の古瓦』所収)、1970年11月、奈良国立博物館。

③森郁夫「古瓦から見た群馬の古代寺院」(『群馬県歴史散歩』52)、1982年５月、群馬県歴史散歩の会。後に同著『日本の古代瓦』(1991年11月、雄山閣出版）所収。

④松田猛「山王廃寺の性格をめぐって」(『群馬県史研究』20)、1984年12月、群馬県。

⑤石川克博「山王廃寺の創建期について――素弁八葉蓮華文軒丸瓦をめぐって――」(『群馬県史研究』26)、1987年12月、群馬県。

⑥松田猛「上毛野における古代寺院の建立――山王廃寺創建期軒丸瓦の再検討――」(『信濃』43-４)、1991年４月、信濃史学会。

⑦松田猛「寺院の建立とその背景」(群馬県史編さん委員会編『群馬県史 通史編２　原始古代２』第１章 古代国家の形成と上毛野国、第４節)、1991年５月、群馬県。

⑧大脇潔「畿内と東国の初期寺院」(特別展図録『東国の初期寺院――古墳時代から律令時代への動き――』所収)、1991年10月、栃木県立しもつけ風土記の丘資料館。

①は、山王廃寺の根巻石・鴟尾・塔心礎を、宝塔山・蛇穴山両古墳（群馬県前橋市総社町）の石材・石製品や飛鳥寺・元薬師寺・薬師寺の塔心礎と比較し、「大化改新から天平二年までの約八五年間」に、山王廃寺金堂、宝塔山古墳、蛇穴山古墳、山王廃寺塔の順序で造営されたとする（同書628ページ)。

②は、山王廃寺の素弁蓮華文鐙瓦（軒丸瓦）を、６～７世紀の鐙瓦全体の形式分類のなかに位置づけた業績である。稲垣氏は、山王廃寺鐙瓦を「第一類　素弁蓮華文」の「第一様式」「Ｄ　素文縁　花弁端剣尖形点珠形式」に分類し（同書215ページ)、その年代を標識例である、天智４年〔665〕築城の太宰府基肄城の瓦と「同時期に比定される」とする（同書270ページ)。

昭和54年度の第６次発掘調査では、金堂基壇付近より「放光寺」と篦書きした瓦が出土した（前橋市教育委員会『山王廃寺第６次発掘調査報告書』、1980年３月)。山王廃寺の創建年代に関する研究は、新たな段階に入った。

③は、山王廃寺の素弁蓮華文軒丸瓦に関する②の稲垣説を基本的に踏襲しながら、山王廃寺を辛巳歳〔681〕銘の《山ノ上碑》にみえる「放光寺」に比定した上で、山王廃寺の造営を「670年代の前半には行われた」とする。

④は、出土瓦や文献から山王廃寺の定額寺としての性格を明らかにし、同寺を長元３年〔1030〕頃に作成された『上野国交替実録帳』定額寺項にみえる「放光寺」に当たることを論証している。

⑤は、山王廃寺の素弁８葉蓮華文軒丸瓦を、岡山県栢寺廃寺出土瓦を介して、広島県寺町廃寺出土瓦と関連づけ、660年代前半とされる寺町廃寺の創建年代から、山王廃寺の創建を670年代まで遡り得るとする。寺名問題については、「山上碑銘中の放光寺が山王廃寺にあたるとしても年代的には矛盾しない」とする。

⑥は、山王廃寺出土の２種類の素弁８葉蓮華文軒丸瓦（素弁Ａ・Ｂ）と複弁８葉蓮華文軒丸瓦をいずれも同寺創建期のものとし、それらの年代について「７世紀中葉から第３四半期に位置づけることができるであろう」とし、複弁７葉蓮華文軒丸瓦を「それに続く７世紀第４四半期」のものとした。論文④と合わせて、山王廃寺が《山ノ上碑》碑文中にみえる「放光寺」に当たることを論証する。

⑦は、松田氏による山王廃寺に関する概論で、論文④⑥の論旨をまとめており、創建年代については、７世紀中葉に遡る可能性を示唆する。

⑧は、創建期の素弁８葉蓮華文軒丸瓦に関して、百済末期様式と位置づける②の稲垣氏による分類に対し、高句麗系に属するものと分類され、そのなかでも後出するタイプで、豊浦寺塔跡出土とされる軒丸瓦に最も似ているとされた。豊浦寺塔は『扶桑略記』に634年に心柱を立てたとあり、山王廃寺瓦もこれと前後する時代を与えて不思議はないが、この瓦に重弧文軒平瓦が伴うとすれば、その実年代が７世紀中葉を大きく遡るとは考えにくいとする。

14. 宮本長二郎「飛鳥時代の建築と仏教伽藍」(『法隆寺から薬師寺へ』[『日本美術全集２　奈良・飛鳥の建築・彫刻』])、1990年10月、講談社。

15. 前橋市教育委員会『山王廃寺第７次発掘調査報告書』(注12参照)。

16. 津金沢吉茂「古代上野国における石造技術についての一試論――山王廃寺の塔心柱根巻石を中心に――」(『群馬県立歴史博物館紀要』４)、1983年３月、群馬県立歴史博物館。

17. 前橋市教育委員会『山王廃寺跡第６次発掘調査報告書』、1980年３月。

18. 法隆寺五重塔のデータは、次の文献による。

鈴木嘉吉「五重塔」(『奈良六大寺大観 第１巻 法隆寺１』)、1972年８月、岩波書店。

竹島卓一編『国宝法隆寺五重塔修理工事報告』及び『同附図』(『法隆寺国宝保存工事報告書13 五重塔』及び『同13―別冊』)、1955年３月、法隆寺国宝保存会・竹島卓一発行。

なお、須弥壇については実測値を得られなかったため、同解説に「初重内部は四天柱の柱筋より約二・五尺外方までの大きな漆喰塗りの須弥壇を築き」とあることにより、須弥壇の１辺を計算（268.0＋2.5×30.3×２）により約420cmと推定した。

なお、同塔の須弥壇は、塔創建期に築かれた第１次のもの、８世紀に改造拡大された第２次のもの、慶長年間に補修された第３次のもの（現存する漆喰塗りのもの)の、３次にわたって築かれている。計算により大きさを推定した須弥壇は、第３次のものである。第２次須弥壇の１辺長は、『報告書』の第54図「須弥壇復元図（中世)」によって判断すると、第３次須弥壇のそれの約96％に当たり、400cm前後とみ

られる。第1次須弥壇の推定1辺長は、『報告書』の第55図「須弥山復元図（当初）」によって判断すると、四天柱の柱間距離（268.0cm）の約120％で、320cm前後となる。

19. 薬師寺三重塔のデータは、次の文献による。
伊藤延男「東塔」（『奈良六大寺大観 第6巻 薬師寺全』）、1970年8月、岩波書店。
なお、四天柱の柱間に取り付けられた現在の須弥壇は、正保2～3年〔1645～46〕に造られたものである。

20. 法隆寺塔本塑像の法量については、次の文献による。
法隆寺昭和資財帳編集委員会編『昭和資財帳　法隆寺の至宝 第3巻 金銅像・塑像・乾漆像・石像』、1996年4月、小学館。

21. 奈良国立博物館・奈良国立文化財研究所『研究調査報告　薬師寺西塔跡出土塑像断片』、1981年3月、57ページ。

22. 津金沢吉茂「古代上野国における石造技術についての一試論――山王廃寺の塔心柱根巻石を中心に――」（注16参照）。

23. 津金沢吉茂「古代上野国における石造技術についての一試論――山王廃寺の塔心柱根巻石を中心に――」（注16参照）。

24. 毛利久「本邦上代塔基仏像の研究」（同著『日本仏教彫刻史の研究』所収）、1970年5月、法蔵館、77～81ページ。
亀田菜穂子「塑像と古代寺院」（網干善教先生華甲記念会編『網干善教先生華甲記念考古学論集』所収）、1988年9月、網干善教先生華甲記念会、790～798ページ。

25. 毛利久「本邦上代塔基仏像の研究」（注24参照）、67～75ページ。

26. 『興福寺流記』。本文は、『奈良六大寺大観　第7巻　興福寺1』（1969年7月、岩波書店）による。
「五重塔一基。私云、東金堂草創以後、経四年次年造了。天平二年也。……安置仏像者、天平記不注所安仏等、宝字記云、東方薬師浄土変。薬師一軀。脇侍菩薩二軀、延暦記云、并金色也。羅漢二軀、延暦記阿難舎利弗像。神王八軀、延暦記云以上漆色。薄山火炉一口……。南方、釈迦仏土変。釈迦仏像一軀。脇士菩薩二軀、延暦記云并金色也。羅漢像六軀。浄飯王像一軀、従者八口、今勘七口。摩耶夫人形一軀、従女七人。八部神像。神王像二口、延暦記并居小呉床。金剛力士形二軀延暦記、金剛力士各一口。国王形三人、延暦記二口。蝦夷形一人、延暦記、毛人波羅門人形一人。獅子形二頭、以上綵色。延暦加記云、新羅人形一口、太子形一口。西方、宝字記云、阿弥陀浄土変。弥陀仏像一軀。脇侍菩薩等廿二、白金色也。延暦記脇侍二菩薩仏像二軀、以上金色。音楽菩薩八軀、弘仁不記之。持化仏菩薩像二軀。花座菩薩八軀云云。種種鳥形十翼……。北方、宝字記云、弥勒浄土変。弥勒像一軀。菩薩六口、二金色。延暦記云、脇侍菩薩像二軀、以上金色。囲繞菩薩四軀云云。羅漢像四口。天人形十二人、延暦記云、楽天形十人、合掌天一二口、牢度跋提神形一人、持花神王形二口。薄山火炉一具……。毎方華樹二柱、延暦記云、宝樹八株、毎角神王形一鋪、延暦四王像四軀、潘州一軀、以上綵色、音声菩薩以下、或立或居、左右分別云云」。
（五重塔一基。私に云く、東金堂の草創以後、四年を経て次年に造り了る。天平二年なり。……安置せる仏像は、天平記は安ずる所の仏等は注せず、宝字記に云く、東方は薬師浄土変。薬師一軀、脇侍菩薩二軀、延暦記に云く、并に金色なり。羅漢二軀、延暦記に阿難舎利弗像、神王八軀、延暦記に云く、以上漆色、薄山火炉一口……。南方は釈迦仏土変。釈迦仏像一軀。脇士菩薩二軀、延暦記に云く、并に金色なり。羅漢像六軀。浄飯王像一軀、従者八口、今勘するに七口。摩耶夫人形一軀、従女七人。八部神像。神王像二口、延暦記に并な小呉床に居る。金剛力士形二軀、延暦記に金剛力士各一口。国王形三人、延暦記に二口。蝦夷形一人、延暦記に毛人波羅門人形一人。獅子形二頭、以上綵色。延暦加記に云く、新羅人形一口、太子形一口。西方は宝字記に云く、阿弥陀浄土変。弥陀仏像一軀。脇侍菩薩等廿二、白金色なり。延暦記に、脇侍二菩薩仏像二軀、以上金色。音楽菩薩八軀、弘仁は之を記さず。持化仏菩薩像二軀。花座菩薩八軀云云。種種の鳥形十翼……。北方は宝字記に云く、弥勒浄土変。弥勒像一軀。菩薩六口、二つは金色。延暦記に云く、脇侍菩薩像二軀、以上金色。囲繞菩薩四軀云云。羅漢像四口。天人形十二人、延暦記に云く、楽天形十人、合掌天一二口、牢度跋提神形一人、持花神王形二口。薄山火炉一具……。毎方に華樹二柱、延暦記に云く、宝樹八株。毎角に神王形一鋪、延暦に四王像四軀、潘州一軀、以上綵色。音声菩薩以下、或は立ち或は居り、左右に分別す、云云。）

『七大寺日記』元興寺条。本文は、藤田経世『校刊美術史料　寺院篇　上巻』（1972年3月、中央公論美術出版）による。
「塔基四方浄土造様、山タタミタル様、并仏造様、スハマノツクリ様、柱絵等尤神妙也、可見、但北方ノ弥勒ノ浄土仏綵色ニテ、余ノ三方ノ仏ハ金色也、其弥勒ノ綵色ナル、不得心、末子細不審也。」

『七大寺巡礼私記』元興寺条。本文は、『校刊美術史料　寺院篇　上巻』（前掲）による。
「五重塔一基瓦葺、斯塔在金堂巽方、安四方浄土之相、其仏菩之様不可思議也、畳嶮岨之山、置曲折之路、凡言語道断也。」
（五重塔一基瓦葺。斯の塔、金堂の巽の方に在り。四方に浄土之相を安じ、其の仏菩の様は不可思議なり。嶮岨之山を畳み、曲折之路を置き、凡そ言語道断なり。）

27. 足立康「元興寺五重塔の高さ」（『東洋美術』12）、1921年7月、東洋美術研究会、119～123ページ。

28. 『薬師寺縁起』。本文は、藤田経世『校刊美術史料　寺院篇　中巻』（注10参照）による。
「一、宝塔二基、各三重、毎重有裳層、高十一丈五尺、縦広三丈五尺、右両塔内安置釈迦如来八相成道形也、東塔因相、入胎、受生、受楽、苦行或本ニ出家第四也、西塔果相、成道内降魔相在之、転法輪、涅槃、或本ニ分舎利。」
（一、宝塔二基、各三重、重毎に裳層有り。高十一丈五尺、縦広三丈五尺、右の両塔内に釈迦如来八相成道形を安置する也なり。東塔は因相にて、入胎、受生、受楽、苦行或本に出家第四なり、西塔は果相にて、成道内に降魔相在り、転法輪、涅槃、或本に分舎利。）

『七大寺巡礼私記』薬師寺条（注26参照）。
「東西両塔高十一丈五尺、……東塔安入胎、受生、受楽、苦行之相、西塔安成道、転法輪、涅槃、分舎利(之カ)□相、右両塔之内、八相之様不可思議也、山川嶮之峡、巌洞曲折之路、皆奇妙也。」
（東西両塔高十一丈五尺、……東塔は入胎、受生、受楽、苦行之相を安じ、西塔は成道、転法輪、涅槃、分舎利(之カ)□相を安ず。右の両塔之内、八相之様は不可思議なり。山川嶮之峡、巌洞曲折之路、皆、奇妙なり。）

29. 『日本書紀』大化4年2月己未［8日］条。本文は、『日本古典文学大系　日本書紀』（新装版、1993年9月、岩波書店）による。なお、以下の本論における『日本書紀』の引用は、同書によった。
「阿部大臣、請四衆於四天王寺、迎仏像四軀、使坐干塔内、造霊鷲山像、累積鼓為之。」
（阿部大臣、四衆を四天王寺に請せて、仏像四軀を迎へて、塔の内に坐せしむ、霊鷲山の像を造る。鼓を累積ねて為る。）
『太子伝古今目録抄』所引『大同縁起』。本文は、『大日本仏教全書』第71巻（1972年9月、講談社）による。
「五重塔一基、内安置天宮一具、亀甲合子一合、其内有金瓶、安置舎利一枚、又瑠璃瓶一基、内安置舎利五枚、因長不開、奉擔波羅門六軀、小四天四口、安倍大臣敬請者、大四天王四口、右奉為越天皇敬造、請坐御塔四角。」

（五重塔一基、内に天宮一具を安置す。亀甲合子一合、其の内に金瓶有りて、舎利一枚を安置す。又、瑠璃瓶一基、内に舎利五枚を安置す。因りて長く開かず。波羅門六軀、小四天四口を擔い奉る。安倍大臣の敬請するは、大四天王四口。右は越天皇の為に敬造し奉り、御塔の四角に請坐す。）

30. 中国南北朝から唐における塑造に関して、引用した史料を列記する。

『魏書』巻114釈老志。本文は、標点本（1974年６月、中華書局）による。

「天興元年……、始作五級仏図、耆闍崛山及須弥山殿、加以繢飾。」

（天興元年……、始めて五級の仏図、耆闍崛山及び須弥山殿を作る、加うるに繢飾［絵画による装飾］を以てす。）

『長安志』巻５宮室３。本文は、『山川風情叢書』文淵閣本『四庫全書』影印（1993年３月、上海古籍出版社）による。

「永貴里有波若臺［以下割注、姚興……起造浮図於永貴里、立波若臺。居中作須弥山、四面有崇岩峻壁、珍禽異獣林木、極精奇。仙人仏像倶有人所未聞、皆以為希奇］。」

（永貴里、波若臺有り。［姚興、……浮図を永貴里に起造し、波若臺を立てる。中に須弥山を作りて居き、四面には崇岩峻壁有り、珍禽異獣林木、極めて精奇なり。仙人、仏像は倶に人の未だ聞かざる所に有りて、皆、以って希奇と為す。］）

大村西崖氏、小杉一雄氏は、上記２例の造像が塑造によると推定している（＊）。

『魏書』巻４下世祖紀、太平真君７年〔446〕４月戊子条。

「鄯城毀五層仏図、於泥像中得玉璽二。」

（鄯城にて五層の仏図を毀すに、泥［塑］像の中より玉璽二つを得る。）

『法苑珠林』巻39伽藍篇36。本文は、『大正新脩大蔵経』第53巻598ページａ段（1962年９月、大正新脩大蔵経刊行会）による。以下、同書からの引用については、『大正蔵』と略称し、ページ数・段については「598ａ」の形で略記した。

「殿前塔、宋譙王義季所造。塔内素像忉利天工所造。」

（殿［長沙寺の大殿］の前の塔は、宋の譙王［衡陽文王］義季の造る所なり。塔内の素［塑］像は忉利天の工の造る所なり。）

『歴代名画記』は、『中国美術論著叢刊』（秦仲文他校点　1963年６月、人民美術出版社）、及び『東洋文庫』305（長広敏雄訳注　1977年３月、平凡社）を併用した。

「西禅院殿内仏寺［事］并山。并寶弘果塑。東禅院般若臺内仏事……。已上并是寶弘果塑。」

（西禅院殿内の仏寺［事］并びに山。ともに寶弘果、塑す。東禅院の般若臺内の仏事……。已上、ともに是れ寶弘果、塑す。）

＊１　大村西崖『支那美術史彫塑篇』、1915年６月、復刻（『中国美術史彫塑篇』と改題）、1980年２月、国書刊行会、173～174ページ。
小杉一雄氏「塑壁考」（注９参照）、104～106ページ。

31.『過去現在因果経』巻３。本文は、『大正蔵』第３巻640ｂ（1964年10月、大正新脩大蔵経刊行会）による。

「其諸軍衆、忽然来到、充満虚空。形貌各異。或執戟操剣。頭戴大樹、手執金杵、種種戦具、皆悉備足。或猪魚驢馬師子龍頭熊羆虎児及諸獣頭。」

（其の諸軍衆、忽然と来たり到り、虚空に充満す。形貌は各おの異なる。或いは戟を執り剣を操る。頭に大樹を戴き、手に金杵を執り、種種の戦具、皆、悉く備へ足る。或いは猪、魚、驢馬、師［獅］子、龍頭、熊羆、虎児、及び諸もろの獣頭なり。）

『仏所行讃』第３巻。本文は、『大正蔵』第４巻25ｃ（1961年４月、大正新脩大蔵経刊行会）による。

「魔軍忽然集、種種各異形。執戟持刀剣、戴樹捉金杵、種種戦闘具。猪魚驢馬頭、駝牛児虎形、師子龍象首、及餘禽獣類。」

（魔軍忽然と集まる。種種、各おの異形なり。戟を執り、刀剣を持ち、樹を戴き、金杵、種種の戦闘具を捉る。猪、魚、驢馬の頭にして、駝、牛児虎の形なり、師［獅］子、龍、象の首、及び餘たの禽獣の類なり。）

『仏本行経』第３巻。本文は、『大正蔵』第４巻77ｂ（前掲）による。

「或化黒象如須弥、乗是大象、執大弓、来向菩薩欲燒燃。或化猪頭駱駝首、象羆熊頭無数変。」

（或いは黒象と化すこと須弥の如し。この大象に乗りて、大弓を執り、来たりて菩薩に向かい燒燃せんと欲す。或いは猪の頭、駱駝の首、象、羆熊の頭など無数に変じて化する。）

『修行本起経』巻下（『大正蔵』第３巻471ａ）、『太子瑞応本起経』巻上（『大正蔵』第３巻477ｂ）、『普曜経』巻６（『大正蔵』第３巻521ａ）、は「豕」とする。『仏本行集経』巻30（『大正蔵』第３巻791ｂ）、『方広大荘厳経』巻９（『大正蔵』第３巻593ｃ～594ａ）には「猪」ないしは「豕」の字はみられない。『説文』では「豕」は豬、豬はブタ、イノコ、家畜の一種を指すとする。「猪」は一つの毛穴から三本の毛が生えている豕とする。

32. 百橋明穂『仏伝図』（『日本の美術』267）、1988年８月、至文堂、34ページ。

33. 熊傳新「湖南湘陰県隋大業６年墓」（『文物』1981―４）、1981年４月、40ページ。
花谷浩・村上隆「キトラ古墳の調査」（『奈良文化財研究所紀要』2004）、2004年６月、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所、75ページ。

34. 町田甲一「法隆寺五重塔北面における異形の鬼神像及び七躰の僧形像について」（『国華』834）、1961年９月。後に同著『上代彫刻史の研究』（1977年５月　吉川弘文館）所収、299～303ページ。
十二獣については、『大方等大集経』巻23（『大正蔵』第13巻167ｂ～168ａ［1963年４月、大正新脩大蔵経刊行会］）によった。

35. 中野玄三『涅槃図』（『日本の美術』268）、1988年９月、至文堂、30ページ、70～77ページ。
涅槃に参集する五十二類中の動物については、40巻本『大般涅槃経』巻１（『大正蔵』第12巻365ｃ～371ｃ［1967年11月、大正新脩大蔵経刊行会］）によった。

36. 古代神将像の甲制・服制に関しては、次の文献を参照。
松田誠一郎「法隆寺食堂梵天・帝釈天・四天王像について」（『美術史』118）、1985年４月。
松田誠一郎「南北朝より唐代に至る大陸神将形像の服制・甲制の展開とその日本に及ぼした影響について」（『鹿島美術財団年報』第４号昭和61年版）、1987年11月。鹿島美術財団。
松田誠一郎「菩薩像、神将像の意匠形式の展開」（水野敬三郎・岡田英男・浅井和春編『東大寺と平城京』〔『日本美術全集 第４巻　奈良の建築・彫刻』〕）所収）、1990年６月、講談社。

37. 着甲像の着けるナマコ状の襟巻きは、日本では、天平後期以後にあらわれ、奈良県金剛山寺二天像のうち阿形像（天平・8世紀後半）や東寺本及び醍醐寺本『仁王経五方諸尊図』（原本、大同元年〔806〕空海将来）などに類例みられ、中国では、盛唐後期以後にあらわれ、敦煌莫高窟では第112窟・第12窟・第6窟・第100窟に類例がみられることが、鈴木喜博氏により指摘されている（＊1）。

なお、私見によれば、ナマコ状襟巻きを着ける着甲像としては、陝西省臨潼県慶山寺舎利塔基精室の石門扉線刻二天像のうち向かって右扉像（唐・開元29年〔741〕、1985年出土、臨潼県博物館所蔵）（＊2）が最古の基準作例であり、この時期の唐本図像が、天平勝宝5年〔753〕の鑑真渡来時に日本に伝来し、金剛山寺二天像の典拠とされたものと考えられる。

＊1　鈴木喜博「総論　金剛山寺二天像について――解体・復元修理の成果を踏まえて――」（奈良県教育委員会文化財保護課編『修理報告　金剛山寺の二天像』所収）、2003年3月、金剛山寺。

＊2　慶山寺舎利塔基精室石門扉絵については、次の文献を参照。
臨潼県博物館「臨潼唐慶山寺舎利塔基精室清理記」（『文博』1985-5）。
東京国立博物館・NHK・NHKプロモーション『宮廷の栄華　唐の女帝・則天武后とその時代展』（特別展図録）、1998年10月、NHK・NHKプロモーション、73ページ、図版36。

38. このナマコ状の襟巻きは、唐の着甲像では8世紀第2四半期以後、日本の着甲像では8世紀第3四半期以後の作例にあらわれる、比較的新しい形式である。その初見年代は山王廃寺塑像の製作年代（後述）より遅れるから、この断片の膨らみのある襟部をこの襟巻きとみなすことには問題が残る。

なお、着甲像ではないが、法隆寺五重塔北面の男性侍者像（北29）の着けるベスト状の革衣にも、ナマコ状に膨らんだ襟がみられる。

39. 興福寺八部衆立像のうち、頭部から上半身にかけて蛇をまとう伝沙羯羅像は、その図像的な特徴から、ほんらい摩睺羅迦像として製作されたと考えられる（＊）。その背面の襟甲中央から左肩にかけて蛇の胴部が甲に密着してあらわされ、この断片と類似した形を示す。ただし、伝沙羯羅像の蛇の胴部に比べると形に膨らみが弱く、摩睺羅迦像と断定することはためらわれる。

＊　水野敬三郎「八部衆立像」（『奈良六大寺大観　第7巻　興福寺1』）、1969年7月、岩波書店。跡に、「興福寺十大弟子・八部衆立像」と題して、同著『日本彫刻史研究』（注8参照）所収。

40. ただし、西大寺四王堂銅造四天王立像のうち増長天立像には、焔髪があらわされる。西大寺像は天平神護元年〔765〕に創鋳され、宝亀8・9年〔777・778〕頃に4体が完成した。現存像の大部分は中世の後補で、当初部は指先・足の一部と邪鬼のみである。別に保管される腰部残欠は、現存の多聞天像の腰部と形が一致し、現存像の体部が当初像の概形を伝えていることがわかる（＊）。しかし、当初像の頭部は現存せず、増長天像の頭部がどこまで古い形を伝えているか、疑問がある。

＊　町田甲一「四天王立像（四王堂）」（『奈良六大寺大観　第14巻　西大寺全』）、1973年5月、岩波書店。

41. 焔髪をあらわす四天王像・二天像は、9世紀後半以降に遺品がみられる。主要な古例としては、次のものがある。
清凉寺持国天立像・増長天立像（四天王立像のうち）、9～10世紀
大阪府観心寺四天王立像、9～10世紀
広島県古保利薬師堂持国天立像（四天王立像のうち）、9～10世紀
奈良県弘仁寺増長天立像（二天立像のうち）、延喜2～9年〔902～909〕
兵庫県円教寺持国天立像・増長天立像（四天王立像のうち）、永延2年〔988〕

42. 『聖徳太子伝私記』（『古今目録抄』）上巻　次塔底条（注10参照）。
「其内ノ南面ハ弥勒曼陀羅、……二王二天等眷属一々御坐（マシマス）、……」
「北面ニハ涅槃像、……八部衆左右山際（ヤマハキ）ニ列座セリ……」
「東面ニハ浄名文殊ノ不二法門之所ナリ、……八部衆等皆列座セリ、……」

43. 『古今一陽集』西之部（注10参照）。
「南面弥勒曼荼羅、……二王二天等古今目録抄取意、……」
「北面涅槃像、……龍神八部、左右巖際囲繞悲啼、……」
「東面文殊浄名不二法門體相、……浄名文殊無数眷属左右囲繞、八部衆等在会座、……」

44. 南面中段の神王像2軀は、厚い補修土に塗り籠められるが、当初作の弥勒仏像に次ぐ作品とされる（＊）。ただし、当初部が残存するか否かを含め、その製作年代は明らかではない。なお、南面下段の神王像2軀は近世の後補作で、ここでは問題としない。

＊　西川新次『法隆寺五重塔の塑像』（注10参照）、174ページ。

45. 町田甲一「五重塔塔本塑像」（『奈良六大寺大観　第3巻　法隆寺3』）、1969年11月、岩波書店。

なお、竜頭を戴く北11号像も竜王に比定されるが、頭部は竜頭を含めてすべて後補であり、そのほんらいの名称については明らかではない。ここでは、確実な八部衆像の例には含めない。

47. 東面の八部衆像については、現在、北面に置かれる着甲像11軀のなかに紛れ込んでいるとみる説（＊1）と、すでに廃滅したとみる説（＊2）がある。

＊1　久野健「法隆寺五重塔北面涅槃像をかこむ人物像」（『仏教芸術』4）、1949年6月。後に同著『日本仏像彫刻史の研究』（1984年12月、吉川弘文館）所収。

＊2　西川新次『法隆寺五重塔の塑像』（注10参照）。

48. 長和4年〔1015〕撰述の『薬師寺縁起』によれば、東塔には釈迦八相のうち入胎・受生・受楽・苦行の4相が、西塔には成道・転法輪・涅槃・分舎利の4相が安置されていた（注28参照）。八部衆像が安置されていた塔については、像の伝来から推せば、東塔とみるのが自然である。しかし、仏伝表現のなかで八部衆像があらわされる代表的な場面は初転法輪と涅槃であり、この点から、西塔安置の像と考えることもできる（＊）。

＊　田邊三郎助「塔本釈迦八相像残缺」（『奈良六大寺大観　第6巻　薬師寺全』）、1970年8月、岩波書店。

49. 松田誠一郎「菩薩像、神将像の意匠形式の展開」（注36参照）。

50. 松田誠一郎「菩薩像、神将像の意匠形式の展開」（注36参照）。

近年、井上豪氏は、日本の古代神将像の甲冑の形式的な源流を検討された論文（＊1）のなかで、盛唐期の敦煌莫高窟第384窟西龕北側の天

王立像を例示し、その上背部と腰部を覆う甲を背甲と腰甲が一体になった「胴纏」とみなして、これを「胸甲・胴纏型甲冑（B2タイプ）」に分類されている。そして、こうした形式の甲冑は、日本の東大寺戒壇院持国天像の甲冑と同様のものであるとして、「胴纏は日本で独自に作られた形式」であるとする私説を批判され、胴纏は中国でできたものとされている。

私説の立脚点は、天平神将像と大陸着甲像の外見上の違い――特に腰帯を挟んで上半身と下半身の甲の輪郭が連続するか、否かという違い――にある。上下の甲の輪郭がスムーズにつながる、天平式の胴部を覆うよろいについては、日本におけるディスクリプションの慣習にしたがって、「表甲」と呼んでいる。これに対し、上下の輪郭の連続性が確認できない大陸着甲像の鎧については、基本的に中国側の研究者が用いている述語を用い(＊2)、一部名称のない部分についてはこれを援用して造語し、上背部を覆う甲を「背護」、腹部を覆う甲を「腹護」、腰部を覆う甲を「膝裙」と呼び分けている。

井上氏は、盛唐期着甲像の〈背護〉と〈膝裙〉が一連のものであるという前提に立ち、これを上下ワンピースの〈胴纏〉ととらえ、天平神将像の〈表甲〉（井上氏は「胴纏」と呼ぶ）と同一のものと理解して、前記した私説に対する批判を展開されている。

しかし、〈背護〉と〈膝裙〉が一連のものであることを確実に論証しうる大陸着甲像の作例は、管見の及ぶ範囲では見あたらない。むしろ、〈背護〉と〈膝裙〉の縁の形式には違いがみられることが多い。また、〈背護〉の縁は左右脇腹辺にあらわれることが多く、左右大腿部の内側にあらわれる〈膝裙〉の縁とは連続していないようにみえることが多い。

したがって、〈背護〉と〈膝裙〉が一連のもので、ともに「胴纏」を構成していると断定することには問題があるように思われる。また、仮に両者が一連のものであるとしても、大陸着甲像の甲制の主要な構成要素である〈腹護〉（腹部から胸中央部を覆う甲）や、その中央にあけられた孔内に伏せられる〈護臍円護〉は、天平神将像の甲制には取り入れられておらず、両者の甲制を同類のものとする井上氏の論旨には賛成できない。

天平神将像の〈表甲〉は、大陸着甲像の〈背護〉と〈膝裙〉の形式の影響を受けたものと考えられる(＊3)。しかし、両者を単純に同類の「胴纏」とみることはできない。唐や統一新羅の着甲像には、腰帯を挟んで上下の輪郭がスムーズに繋がる〈表甲〉や〈前楯〉の例はないのである。ここに確認される大陸着甲像と天平神将像の相違は、〈腹護〉や〈護臍円護〉の有無とともに、両者の外見的な違いを決定づける、最も重要なポイントであると考えられる。これに加えて、日本においては、〈表甲〉と〈前楯〉を組み合わせる《天平甲制》は、7世紀末から8世紀前半にかけて段階的に成立しており、その成立後は近世・近代まで長くこの甲制が踏襲されている。こうした内外の事情から考えれば、やはり天平神将像の〈表甲〉や〈前楯〉は、大陸着甲像の甲制に基づきながら、これに独自のアレンジを加えて、日本で成立したものと考えるべきであろう。

＊1　井上豪「日本古代神将像の甲冑――形式と伝来について――」（『早稲田大学会津八一記念博物館　研究紀要』1）、2000年3月、早稲田大学会津八一記念博物館。

＊2　楊泓『中国古兵器論叢』、1980年6月、文物出版社。
劉永華『中国古代軍戎服飾』、1995年11月、上海古籍出版社。

＊3　松田誠一郎「菩薩像、神将像の意匠形式の展開」（注36参照）。
松田誠一郎「日本の古代彫塑」（『武蔵野美術』107）、1998年1月。

51. 奈良国立博物館・奈良国立文化財研究所編『研究調査報告　薬師寺西塔跡出土塑像断片』（注21参照）、46ページ、図11(昭和9年出土分)。

52. 7～8世紀の神将像の大袖については、次の文献を参照。
松田誠一郎「法隆寺食堂梵天・帝釈天・四天王像について」（注36参照）。

53. 海会寺出土の塑造神将像右腕については、次の文献を参照。
泉南市教育委員会編『海会寺　海会寺遺跡発掘調査報告書』、1987年9月、泉南市教育委員会、本文編90ページ(解説)、図版編PL.50－1（図面）・PL.133－1（写真）。

54. 法隆寺金堂旧壁画第10号壁東側の神将像では、窄袖の袖口は帯状の衣縁からあらわれている。この帯状の衣縁は、あるいは大袖の縁かもしれない。とすれば、この神将像でも窄袖と大袖が併用されていることになる。

55. 法隆寺五重塔北面17号像の窄袖については、「両肘内側から手先に至る割れ、両手肘前の外側に沿う割れなど」の補強修理のほかは、大きな補修部はないようである(＊)。
＊　西川新次『法隆寺五重塔の塑像』（注10参照）、203ページ。

56. 関根真隆『奈良朝服飾の研究』、1974年3月、吉川弘文館。半臂については、本文編106～117ページ、図録編34～36・125～129ページ参照。背子については、本文編117～120ページ、図録編37・130ページ参照。
以下、日本古代の半臂・背子に関する記述に関しては、同書による点が多い。

57. 関根真隆『奈良朝服飾の研究』（注56）、本文編333～335ページ（附表1　正倉院衣服類目録のうち、表3　半臂）。

58. 渾脱半臂（墨書「東大寺唐散楽渾脱天平勝宝四年四月九日」）、茶臈纐纈半臂（墨書「東大寺大歌半臂　天平勝宝四年四月九日公文真総」）、曝布彩絵半臂、夾纈羅半臂（墨書「東大寺雑楽半臂」）、安君子半臂残欠（墨書「古楽安君子」）、白橡地錦単半臂残欠（墨書「東大寺雑楽半臂」）など。関根真隆『奈良朝服飾の研究』図録編34～35ページ（図版32～33）、125～129ページ（実測図19～23）。

59. 本文は、次の文献による。ただし、句読点・訓読は筆者による。
京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成　倭名類聚抄〔本文編〕』（1968年9月、臨川書店）所収『元和古活字本』。

60. 関根真隆『奈良朝服飾の研究』（注56）、本文編108・118ページ。

61. 本文中で提示した墳墓壁画や陶俑の図版については、下記を参照。
李仙蕙墓　前室東壁南側女侍図　……百橋明穂・中野徹編『世界美術大全集　東洋編4　隋・唐』（1997年12月、小学館）、33ページ、図版17。
陝西歴史博物館蔵三彩梳粧女坐俑……陝西省文物管理委員会編『陝西省出土唐俑選集』、1958年5月、文物出版社、彩色挿頁2。『世界美術大全集　東洋編4　隋・唐』（前掲）、308ページ、図版196。東京国立博物館・NHK・NHKプロモーション編『宮廷の栄華　唐の女帝・則天　武后とその時代展』（特別展図録、東京都美術館・神戸市博物館・福岡市美術館・名古屋市博物館）、1998年10月、107ページ、図版57。
李重潤墓　後室東壁北舗女侍図　……陝西省博物館・陝西省文物管理委員会編『唐李重潤墓壁画』、1974年、文物出版社、図版37。
李貞墓出土　三彩騎馬女子俑　……朝日新聞社編『中国唐俑の美』（特別展図録、名古屋市博物館・福岡市博物館・京都国立博物館・

東京国立博物館)、1984年9月、100～101ページ、図版83。兵庫県立歴史博物館・朝日新聞社編『大唐王朝の華—唐・長安の女性たち』(特別展図録、兵庫県立歴史博物館・岐阜市歴史博物館・鳥取県立博物館・和歌山市立博物館・群馬県立歴史博物館・三重県総合文化センター・京都高島屋)、1996年3月、図版43。

62.『延喜式』巻14　縫殿寮。本文は、『新訂増補　国史大系26　交替式・弘仁式・延喜式』(新装版、2000年11月、吉川弘文館)による。ただし、原文の返り点は省略した。

「年中御服　春季。正月料。二月三月亦同。……半臂十領藍四領。紫六領。十一月一領。十二月二領。並用白。……夏季。四月料。……半臂十領紫五領。藍五領。九月一領用白。……五月料。……半臂十領。……六月料。……半臂十領。……秋季。七月料同六月。八月同五月。九月同四月。冬季。十月料同三月。

十一月十二月並同正月。」

「中宮。春季。正月料。二月三月亦同。……背子十領白一領。白橡九領。……冬季。十月料同三月。十一月十二月並同正月。」

63. 関根真隆『奈良朝服飾の研究』(注56)、本文編108・114ページ。

64. 中国の半臂・背子については、次の文献を参照。

原田淑人『唐代の服飾』、1970年3月、東洋文庫、101～102、151～153ページ。

沈従文『中国古代服飾研究　増訂本』、1992年8月、商務院書館(香港)有限公司、245～256ページ。

黄能馥・陳娟娟『中国服装史』、1995年5月、中国旅游出版社、163ページ。

周音・高春明『中国衣冠服飾大辞典』、上海辞書出版社、1996年12月、225～226ページ(背子項)、227ページ(半臂項)。

65. 薬師寺中津姫坐像の襟は、丸襟の神功皇后像と同様に彫刻されており、打ち合わせをあらわさないとみる説(*)もある。しかし、両女神像の彩色をみると、背子の襟に縁取りをあらわさない神功皇后像に対し、仲津姫像では襟の縁取りが2条の朱線であらわされており、衽を左前に打ち合わせていることが確認できる。

＊　片岡直樹「八幡三神像」(大橋一章・松原智美編『薬師寺』所収)、2000年12月、里文出版。

66. 法隆寺五重塔東13号像は、保存状態が悪く、正面胸前部、右肩以下のすべて、背面の左鰭袖部などに補修がある(＊1)。しかし、左側面や背面の図版(＊2)をみると、鰭袖衣の上に半臂を着け(鰭袖のくくりの上に袖口があらわされる)、両肩に領巾をはおることが確認できる。

また、彫塑の吉祥天像としては、西大寺の木心乾漆像(8世紀後半)が、半臂とみられる上着を着ける。この上着は丸襟で、左右の胸下辺にくくりをあらわし、正面に蝶結びをあらわす。しかし、西大寺像は、全体に保存状態が悪く、半臂をあらわした上半身の造形についても、肩以下の両腕は後補され、襟まわりの造形にも疑問があり、どこまで制作当初の様相を伝えているのか、問題がのこる(＊3)。

＊1　西川新次『法隆寺五重塔の塑像』(注10参照)、190ページ。

＊2　法隆寺昭和資財帳編集委員会編『法隆寺の至宝—昭和資財帳—　第3巻　金銅像・塑像・乾漆像・石像』、1996年4月、小学館、63ページ。

＊3　今城甚造「吉祥天立像」(『奈良六大寺大観　第14巻　西大寺全』)、1973年5月、岩波書店。

67. 関根真隆『奈良朝服飾の研究』(注56)、本文編118ページ。

68. 本文は、『新訂増補　国史大系　続日本紀』(新装版、2000年10月、吉川弘文館)による。ただし、旧字は当用漢字に改め、原文の返り点・送りがなは省略し、訓読を併記した。なお、以下の本論における『続日本紀』の引用は、同書によった。

69. 高橋健自「奈良時代の女装」(『寧楽』10)、1928年8月。

70. 関根真隆『奈良朝服飾の研究』(注56)、本文編119ページ。

71. 佐々木進「服飾史よりみた法隆寺塔本塑像」(『同志社大学博物館学年報』10)、1979年2月、同志社大学博物館学芸員課程。

72. たとえば、東面の維摩詰像土は、中国・南北朝時代から初唐期にかけて多くの作例が残る維摩経変相と共通した構図や場面選択を示し、中国において定型化された図様に準拠していることが明らかである(*)。

＊　松本栄一『燉煌画の研究』、1937年3月、東方文化学院東京研究所、復刻版、1985年7月、同朋舎出版、図像篇143～164ページ(第1章　燉煌画に於ける各種変相の研究、第6節　維摩経変相)、附図46ａ～54ｂ。

金維諾「敦煌壁画維摩変的発展」(『文物』1955-2)。

藤枝晃「維摩変の系譜」(『東方学報』京都36)、1964年10月。

賀世哲「敦煌莫高窟壁画中的〈維摩詰経変〉」(『敦煌研究』1982-試刊2)。

張乃祭「龍門石窟維摩経変造像及其意義」(『中原文物』1982-3)。

松田誠一郎「特集　維摩像の成立と展開」(田邊三郎助編『日本の仏像大百科　第5巻　習合神・高僧』)、1991年7月、ぎょうせい。

石松日奈子「維摩・文殊像の研究——中国南北朝期仏教美術における左右対置表現の一例として——」(『南都仏教』71)、1995年4月。

73. 島田修二郎氏は、鳥毛立女屏風の各扇について、総じて衣服の表現に不自然なところがあることを指摘し、作者が唐の士女の服装について正確な知識を持たず、唐代士女画の粉本を誤解したのではないかと推測する(*)。この島田氏の指摘も、本図が唐画の典拠に基づいて製作されたことを傍証する論拠となろう。

＊　島田修二郎「鳥毛立女屏風」(正倉院事務所編『正倉院の絵画』所収)、1968年6月、日本経済新聞社。後に、同著『日本絵画史研究』[『島田修二郎著作集　1』](1987年11月、中央公論美術出版)所収。

74. 法隆寺五重塔塑像については、天平19年〔747〕勘録の『法隆寺資財帳』に和銅4年〔711〕造立のことが明記される。しかし、五重塔の解体修理により須弥壇改変の事実が判明し、須弥壇の改変時期と現存像の造立年代との関係をめぐって、次の2説が提示された。

第1は、現存像の多くを和銅4年の原初像とみる町田甲一氏らの説で(＊1)、町田氏は北面比丘像の一部を須弥壇改変の頃に追加された像とみる。第2は、現存像と興福寺旧西金堂乾漆像との作風的な類似に着目し、現存像の製作年代を和銅4年より後の須弥壇改変時、天平6年頃とみる西川新次氏の説(＊2)である。

その後、水野敬三郎氏は、法隆寺五重塔阿修羅像と興福寺旧西金堂阿修羅像(天平6年〔734〕)を比較し、後者が前者より写実性の面で進んでいることを指摘し、様式面から和銅説を支持した。佐々木進氏は、着衣形式の分析から天平説を補強した。一方、西川氏は水野説を受けて旧説を改め、和銅4年説を支持する新説を発表した(＊3)。

本論は、町田・水野両氏の和銅4年説を妥当と考え、これに従う。

＊１　町田甲一「法隆寺五重塔北面における異形の鬼神像及び七体の僧形像について」（注34参照）。
町田甲一「法隆寺塔本塑像中の第一次追加像について――特に北面に於ける比丘形七軀について――」（『仏教芸術』48）、1962年５月。

＊２　西川新次「法隆寺五重塔の塑像――その群像構成と表現――」（『大和文華』37）、1962年５月。
西川新次『法隆寺五重塔の塑像』（注10参照）。

＊３　水野敬三郎「八部衆立像」（注39参照）。
佐々木進「服飾史よりみた法隆寺塔本塑像」（注72参照）。
西川新次『文化財講座　日本の美術５　彫刻（飛鳥・奈良）』、1978年９月、第一法規出版、191ページ。

75．８世紀の仏像の胸飾については、次の文献を参照。
松田誠一郎「８世紀の胸飾における伝統の形成と新様の受容について――彫塑附属の胸飾を中心にして――（上）（下）」（『MUSEUM』422・423）、1986年５月・６月。
松田誠一郎「菩薩像、神将像の意匠形式の展開」（注36参照）。

76．水野敬三郎「樟材製面」（東京国立博物館編『法隆寺献納宝物　伎楽面』所収）、1984年２月、東京国立博物館。

77．女性像胸部（11A962763、35）の左肘辺にも、この胡人像とよく似た衣文処理がみられる。

78．松田誠一郎「法隆寺食堂梵天・帝釈天・四天王像について」（注36参照）。
なお、川原寺裏山遺跡出土塑像片のうち神将像左腰部残欠（＊１）にも、表甲や下甲の縁にめくれや反りがあらわされる。この残欠の製作年代については、川原寺創建期＝天智朝とみる説（＊２）もある。しかし、この神将像残欠の甲制は、
①基本となる甲制に、表甲の上に前楯を重ねる《天平甲制》を採用すること
②下甲の側面部に切れ目をあらわすこと
③前楯の下端部を翻転させること
の３点に特徴がある。このうち、①の初見作例は薬師寺西塔跡出土塑像片（天平２年〔730〕頃）であり、②の初見作例は興福寺八部衆立像（天平６年〔734〕）であり、③の類例は興福寺東金堂多聞天立像（四天王立像のうち、９世紀初め）まで降りないと見あたらない。一方、川原寺裏山遺跡からは、大量の塼仏や塑像片とともに「富寿神宝」（弘仁９年〔818〕初鋳）・「承和昌宝」（承和２年〔835〕初鋳）が出土しており、その遺物のうちには、７世紀後半のものだけでなく、８～９世紀のものが含まれている可能性がある。
以上のことから判断すれば、この神将像残欠を川原寺創建期＝７世紀後半の製作とみることには無理があり、むしろ、８世紀第２四半期以後の製作とみるのが穏当と思われる。

＊１　奈良国立博物館編『飛鳥の塼仏と塑像――川原寺裏山出土品を中心として――』（1976年７月、奈良国立博物館）、12ページ、図版29。

＊２　大橋一章「白鳳彫刻論」（『仏教芸術』223）、1995年12月。

79．薬師寺金堂薬師三尊像の製作年代をめぐっては、藤原京における薬師寺創建期の造立とみる飛鳥時代後期説と、薬師寺の平城京移転後に新たに造立されたとみる天平説がある。本論では、天武14年〔685〕造立の山田寺仏頭との比較などから、現存像を平常移転後、養老２年〔718〕までの製作とみる松山鉄夫氏（＊）の天平説を妥当と考え、これにしたがう。なお、薬師寺金堂本尊像の製作年代をめぐる研究史については、次の文献を参照。
大橋一章「薬師寺本尊と白鳳・天平論争」（大橋一章編『寧楽美術の争点』所収）、1984年10月、グラフ社。
松山鉄夫「薬師寺研究の最近の動向――『奈良六大寺大観・薬師寺』の刊行以後――」（同著『日本古代金銅仏の研究　薬師寺篇』所収）、1990年２月、中央公論美術出版。
林南壽「薬師寺薬師三尊像」（大橋一章・松原智美編『薬師寺　千三百年の精華　美術史研究のあゆみ』所収）、2000年12月、里文出版。

＊　松山鉄夫『日本古代金銅仏の研究　薬師寺篇』（前掲）。

80．法隆寺五重塔北面の羅漢像７軀（北21～27号）に関しては、五重塔創建後あまり時代を経ない頃に行われたとみられる須弥山・須弥壇の改造にともなって、追加して造立されたとみる町田甲一氏の説（＊１）がある。町田氏は、７世紀末の塔創建の後、20年ないし50年以内の時期、おそらく８世紀前半頃に須弥壇・須弥山の拡大改造が行われたと想定する。その上で、北面羅漢像については、
①人間的感情を誇張的にあらわした表情や、動きを強調した大仰なポーズに、他像と著しく異なる作風が認められること
②その作風は、和銅４年〔711〕まで遡らず、８世紀半ば頃の東大寺戒壇堂四天王像や新薬師寺十二神将像に近いこと
③像高が北面後列の諸像と比べて大き過ぎ、改造前、第１次須弥壇の北面には、これらの像を収容する余裕がないとみられること
などを根拠に、須弥壇・須弥山の改造にともない拡大された壇上の空間を埋めるために、730～740年頃までに追加製作されたのではないかと推論した。
これに対し、西川新次氏は、須弥壇・須弥山の改造が和銅４年を降りない頃に行われたとする浅野清氏の説、および法隆寺五重塔塑像と興福寺西金堂旧像との間に様式的な年代差を認める水野敬三郎氏の説に従い、かつ法隆寺五重塔塑像の各像の間には、様式上の差が認められないとして、現存像のすべてを和銅４年時の造立と推定した（＊２）。
私見によれば、北面羅漢像は、塔内の他の塑像との比較において、肉身や着衣の表現に大きな差異は認められず、両者は基本的に共通した作風をもつものと思われる。また、塑土についても、北面羅漢像は淡褐色の仕上土を用いるが、これは塔内の他の塑像の仕上土と同質のものとみられる。このことに関連して、同じく和銅４年に造立された中門金剛力士像の当初の仕上土が、五重塔塑像と同質の淡褐色の塑土であるのに対し、第１次補修時の仕上土が青味がかった塑土に代わっていることが想起される（＊３）。これらのことから、本論では、北面羅漢像を和銅４年時の当初像とみる西川新次氏の説に妥当性を認め、これに従う。

＊１　町田甲一「法隆寺五重塔北面における異形の鬼神像及び七躰の僧形像について」（注34参照）。

＊２　西川新次『文化財講座　日本の美術５　彫刻（飛鳥・奈良）』（注74参照）、191ページ。

＊３　法隆寺編『法隆寺重要文化財塑造金剛力士立像修理工事報告書』、1965年３月、法隆寺、92～93、127～130ページ。
なお、この補修の年代について、西川新次氏は、特定が難しいと前置きしながら、８世紀後半かと想定する。

81．興福寺八部衆像の現状の彩色については、幾つかの見方がある。松浦正昭氏は、迦楼羅像について、前楯縁と脛当の金地唐草・表甲裾外区の小花文・袴の団花文・袖の唐草文などを天平当初のものと認める（＊１）。浅井和春氏は、迦楼羅や乾闥婆の袴の団花文・五部浄の胸甲の縁

や畢婆迦羅の脛当の金地唐草について、「一部に後世の描き起こしを含むとしても、当初の彩色と筆法を彷彿とさせる」とする。また阿修羅像の裙の団花文も「鎌倉時代の全面的修補にかかるとはいえ」、「文様のかたちはそのものは奈良時代に発すると思われる」(＊2)とする。

＊1　松浦正昭「〈表紙・口絵解説1〉興福寺西金堂の造営と迦楼羅像」(『仏教芸術』160)、1985年5月。

＊2　浅井和春「八部衆・十大弟子の造像 天平期の彩色と技法を探る」(『日本の国宝55 奈良・興福寺1』)、1998年3月、朝日新聞社。

82. 以上のような天平彫刻の文様については、小田誠太郎氏の論考(*)がある。小田氏は、本論のように東大寺執金剛神像と東大寺戒壇堂四天王像の間に様式の違いを認めず、戒壇堂像と東大寺法華堂金剛力士・四天王像の間の様式の違いを重視している。また、C字形を伴う団花文については、拙稿(＊2)も参照。

＊1　小田誠太郎「東大寺天平彫刻の文様について」(『仏教芸術』147)、1983年3月。

＊2　瀬山里志「天平彫刻団華文小考――C字形を伴う団華文を中心に」(『サントリー美術館　論集』6)、2002年5月、サントリー美術館。

83. たとえば、平城遷都後に造営された興福寺では、養老5年〔721〕8月の藤原不比等の一周忌には、中金堂の弥勒浄土像(橘三千代発願)と北円堂の弥勒三尊像・羅漢像2軀・四天王像からなる群像(元明天皇・元正天皇発願、長屋王造立)が供養された。天平6年〔734〕の橘三千代の一周忌には、西金堂の釈迦集会像(光明皇后発願)が供養された(＊1)。また、大安寺では、天平14年〔742〕に、丈六釈迦如来像を本尊とする金堂に、菩薩像2軀・羅漢像10軀・八部衆像が追加して造立され、興福寺西金堂と類似した構成をもつ釈迦集会像が完成した(＊2)。

＊1　『興福寺流記』。

＊2　『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』。

84. 日本古文化研究所編『日本古文化研究所報告第七　雪野寺阯発掘調査報告』、1937年11月、日本古文化研究所。

雪野廃寺出土の塑像片のうちには、《天平甲制》を採用した神将像の断片が含まれ、少なくともこの神将像に関しては、製作年代の上限を730年頃と考えることができる。そのほかの菩薩像なども、作風より天平時代前期、8世紀前半の製作と思われる。

85. 法隆寺編『法隆寺重要文化財塑造金剛力士立像修理工事報告書』(注6参照)。

西川新次『法隆寺五重塔の塑像』(注10参照)、152～153ページ。

86. 前橋市教育委員会『山王廃寺跡第4次発掘調査概報』、1978年3月、前橋市教育委員会、55ページ。

87. 尾崎喜左雄「宝塔山及び蛇穴山両古墳石室用石と山王廃寺跡出土石製装飾品及びその塔心礎との技法上の比較」(同著『横穴式古墳の研究』第3篇 第2章 第4節〔617～632ページ〕)(注13-①参照)。

津金沢吉茂「古代上野国における石造技術についての一試論――山王廃寺の塔心柱根巻石を中心に――」(注16参照)。

88. 宝塔山古墳・蛇穴山古墳については、次の文献を参照した。

尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』(注13-①参照)。

松本浩一「8　蛇穴山古墳　前橋市総社町」・石川正之助「9　宝塔山古墳　前橋市総社町」(群馬県史編さん委員会編『群馬県史　資料編3　原始古代3』)、1981年3月、群馬県。

右島和夫「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」(『群馬県史研究』22)、1985年10月、群馬県。後に、「総社古墳群の研究」と改題して、同著『東国古墳時代の研究』(1994年5月、学生社)第6章に所収。

右島和夫「古墳文化の終焉」(群馬県史編さん委員会編『群馬県史　通史編1　原始古代1』第5章 第10節)、1990年3月、群馬県。

石川克博「上毛野・上野国をめぐる七・八世紀の問題――文献と考古学資料の接点を求めて――」(『ぐんま史料研究』1)、1994年2月、群馬県立文書館。

右島和夫「山王廃寺を造ったのは誰」(群馬県立歴史博物館『第53回企画展　謎の大寺・飛鳥川原寺　白鳳の仏』[展覧会図録])、1996年4月、群馬県立歴史博物館。

89. 右島和夫「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」(注88参照)、29ページ。

右島和夫「古墳文化の終焉」(注88参照)、853ページ。

90. 尾崎喜左雄「宝塔山及び蛇穴山両古墳石室用石と山王廃寺跡出土石製装飾品及びその塔心礎との技法上の比較」注87参照)。

津金沢吉茂「古代上野国における石造技術についての一試論――山王廃寺の塔心柱根巻石を中心に――」(注16参照)、59ページ。

91. 山王廃寺の造営と宝塔山・蛇穴山両古墳の造営との関係を最初に指摘した尾崎喜左雄氏は、1寺2古墳の造営順序に関して、次のような説を提示した(＊1)。

①宝塔山石棺は、面が真平らに整えられ、きわめて鋭く堅い截り方を示す。これに続く製作とみられる宝塔山石室壁石も面にふくらみがなく、鋭く堅い截り方を示す。

②これに対し、宝塔山石室天井石と蛇穴山石室天井石・壁石は、面にふくらみがある。

③山王廃寺根巻石は、仕上げ面にふくらみがなく、きわめて鋭く堅い截り方を示し、宝塔山石棺のそれに比しうる。

④山王廃寺塔心礎は、仕上げ面にわずかなふくらみがあり、きわめて軟らかに仕上げられる。その截り方は、蛇穴山石室玄門のそれと全く一致する。

⑤使用尺度については、鴟尾・根巻石・宝塔山古墳石棺は高麗尺によっていると推定され、宝塔山天井石・蛇穴山石室・塔心礎は唐尺によって計り出された高麗尺によっていると推定される。

⑥根巻石と鴟尾は金堂に附属するものと推定され、山王廃寺の石造物は、金堂の後に塔を建てる伽藍造営の一般的な順序からみて、金堂根巻石→金堂鴟尾→塔心礎の順序で製作されたと判断できる。

⑦根巻石や宝塔山古墳石棺にみられる鋭く堅い表現は「飛鳥期」のものと、塔心礎や蛇穴山古墳石室にみられる軟らかい豊かな表現は「白鳳期」から天平初期にかけてのものとそれぞれ対比される。

⑧1寺院・2古墳の造営は、山王廃寺金堂→宝塔山古墳→蛇穴山古墳→塔心礎の順序で進んだと考えられる。その造営年代は、舒明天皇11年〔639〕の百済大寺金堂の石製鴟尾の製作や、塔心礎と薬師寺西塔心礎との類似性を考慮すれば、大化改新(645年)から天平2年〔730〕までの85年間に配されるべきで、特にその後半に重点を置くべきである。

その後、津金沢吉茂氏(＊2)は、根巻石を中心に山王廃寺と宝塔山・蛇穴山両古墳の石造物について石材加工の痕跡を詳しく検討して、根巻石と宝塔山古墳石棺の工法が一致することを指摘し、両者の類似を指摘した尾崎氏の説を加工技術の面から補強した。その一方、根巻

石の使用箇所に関しては根巻石の内径＝柱径を根拠に塔と推定し、あわせて宝塔山石棺や山王廃寺石造物の使用尺度についても特定は困難とされ、尾崎氏の提示した年代観に疑問を呈した。その上で、山王廃寺の造営年代に関しては、《山ノ上碑》の成立した681年までに金堂や塔は完成していたとし、根巻石と塔心礎は同時期のもので、ともに塔創建時のものであると結論した。

＊１　尾崎喜左雄「宝塔山及び蛇穴山両古墳石室用石と山王廃寺跡出土石製装飾品及びその塔心礎との技法上の比較」（同著『横穴式古墳の研究』第３篇 第２章 第４節）（注13-①参照）。

＊２　津金沢吉茂「古代上野国における石造技術についての一試論――山王廃寺の塔心柱根巻石を中心に――」（注16参照）。

92. 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』（注13-①参照）、627ページ。

93. 尾崎喜左雄『古墳のはなし』、1952年６月、世界社、134ページ。
尾崎喜左雄「古墳の終末」（大場磐雄・内藤政恒・八幡一郎監修『新版考古学講座　第５巻　原史文化〈下〉』所収）、1970年６月、雄山閣出版、207ページ。

94. 総社古墳群については、次の文献を参照した。
右島和夫「古墳文化の終焉」（注88参照）、845～859ページ。
右島和夫「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」（注88参照）。
右島和夫「山王廃寺を造ったのは誰」（注88参照）。

95. 右島和夫「古墳文化の終焉」（注88参照）、857～859ページ。
右島和夫「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」（注88参照）、29～31ページ。
右島和夫「山王廃寺を造ったのは誰」（注88参照）。

96. 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』（注13-①参照）、628～629ページ。

97. 松島栄治・梅沢重昭・田島桂男・茜史朗「闘論　古代東国の謎に挑む」（1982年１月６日・11日、於高崎市労働会館、上田正昭・森浩一・原島礼二・松島栄治・梅沢重昭・田島桂男『古代東国の謎に挑む』所収）、1982年５月、あさを社、140・189ページ（松島栄治氏の発言）。

98. 右島和夫「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」（注88参照）、31ページ。
右島和夫「古墳文化の終焉」（注88参照）、859ページ。
熊倉浩靖「上毛野氏と東国六腹の朝臣」（原島礼二・金井塚良一編『古代を考える　東国と大和王権』所収）、1994年１月、吉川弘文館、85～86ページ。

99. これら３説のほか、山王廃寺の造営に関しては、創建期瓦の形式分析に立脚して、蘇我氏の影響を認めるべきであるとする、松田猛氏の説(*)がある。
＊　松田猛「上毛野における古代寺院の建立――山王廃寺創建期軒丸瓦の再検討――」（注13-⑥参照）。

100. 上毛野氏に関しては、次の文献を参照した。
佐伯有清「上毛野氏の性格と田邊氏」（同著『新撰姓氏録の研究　研究篇』所収）、1963年４月、吉川弘文館。
関口功一「七世紀以前の上毛野氏」（群馬県史編さん委員会編『群馬県史　通史編２　原始古代２』第１章 第５節）、1991年５月、群馬県。
平川南「八世紀の上毛野氏」（『群馬県史　通史編２　原始古代２』第２章 第４節）（本注前掲）。
熊倉浩靖「上毛野氏と東国六腹の朝臣」（注98参照）。
石川克博「上毛野・上野国をめぐる七・八世紀の問題――文献と考古学資料の接点を求めて――」（注88参照）。
竹内理三・山田英雄・平野邦雄『日本古代人名辞典　第２巻（お・か）』上毛野氏関連項目［538～543ページ］、1959年７月、吉川弘文館。
群馬県史編さん委員会編『群馬県史　資料編４　原始古代４』、1985年３月、群馬県。
坂本太郎・平野邦雄『日本古代氏族人名辞典』上毛野氏関連項目［196～198ページ］、1990年11月、吉川弘文館。

101.『日本書紀』には、表14に示したような、大化前代の上毛野氏伝承を載せる。

表14　大化前代の上毛野氏に関する伝承

日本書紀の紀年	伝承の内容　▲＝東国治定・蝦夷征伐に関する伝承　●＝対朝鮮外交・軍事に関する伝承
崇神48年正月戊子	▲崇神天皇、２子のうち活目尊（いくめのみこと）を後嗣とし、豊城命（とよきのみこと）に東国を治めさせる。
垂仁５年10月朔	上毛野君の遠祖八綱田（やつなた）、垂仁天皇の兄狭穂彦（さほびこ）を討つ。
景行55年２月壬辰 同 56年８月	▲豊城命の孫彦狭嶋王（ひこさしまのみこ）を東山道十五国都督とするが、赴任途中で没する。（＊１） ▲彦狭嶋王の子、御諸別王（みもろわけのみこ）、東国に赴き善政を行い、蝦夷を鎮定する。
神功49年３月 同 50年２月	●荒田別（あらたわけ）・鹿我別（かがわけ）を将軍として新羅を攻め、７国を平定。 荒田別ら、帰国。
応神15年８月丁卯	●上毛野君祖荒田別・巫別（かんなぎわけ）を百済に派遣し、王仁を連れ帰る。
仁徳53年５月 同 55年	●上毛野君祖、竹葉瀬（たかはえ）を新羅に派遣し、不朝貢の理由を糺す。竹葉瀬の弟田道（たじ）、新羅を破る。 ▲蝦夷の反乱を撃つため、田道を派遣するが、敗死。
安閑元年閏12月	▲武蔵国の笠原直使主（おみ）の同族小杵（おき）、使主と国造を争い、上毛野君小熊に援助を求める。朝庭、使主を国造とし、小杵を誅す。
舒明９年	▲上毛野君形名（かたな）を将軍として、蝦夷の反乱を討つ。

＊１　『先代旧事本紀』10国造本紀・上毛野国造条に関連記事あり。

102.『日本書紀』天武天皇10年3月丙戌［17日］条（下線筆者）。

「丙戌、天皇御于大極殿、以詔川嶋皇子・忍壁皇子・広瀬王・竹田王・桑田王・三野王・大錦下上毛野君三千・小錦中忌部連首・小錦下阿曇連稲敷・難波連大形・大山上中臣連大嶋・大山下平群臣子首、令記定帝記及上古諸事。大嶋・子首、親執筆以録焉。」

（丙戌に、天皇、大極殿に御して、川嶋皇子・忍壁皇子・広瀬王・竹田王・桑田王・三野王・大錦下上毛野君三千・小錦中忌部連首・小錦下阿曇連稲敷・難波連大形・大山上中臣連大嶋・大山下平群臣子首に詔して、帝記及び上古の諸事を記し定めしめたまふ。大嶋・子首、親ら筆を執りて以て録す。）

103.『日本書紀』持統天皇5年8月辛亥［13日］条（下線筆者）。

「八月己亥朔辛亥、詔十八氏、大輪・雀部・石上・藤原・石川・巨勢・膳部・春日・上毛野・大伴・紀伊・平群・羽田・阿倍・佐伯・采女・穂積・阿曇。上進其祖等墓記。」

（八月の己亥の朔辛亥に、十八の氏、大輪・雀部・石上・藤原・石川・巨勢・膳部・春日・上毛野・大伴・紀伊・平群・羽田・阿倍・佐伯・采女・穂積・阿曇、に詔して、其の祖等の墓記を上進らしむ。）

104.『日本書紀』天武天皇13年11月戊申朔条（下線筆者）。

「十一月戊申朔、大三輪君・大春日臣・阿倍臣・巨勢臣・膳臣・紀臣・波多臣・物部連・平群臣・雀部臣・中臣連・大宅臣・粟田臣・石川臣・桜井臣・采女臣・田中臣・小墾田臣・穂積臣・山背臣・鴨君・小野臣・川辺臣・櫟井臣・柿本臣・軽部臣・若桜部臣・岸田臣・高向臣・宍人臣・来目臣・犬上臣・上毛野君・角臣・星川臣・多臣・胸方君・車持君・綾君・下道臣・伊賀臣・阿閉臣・林臣・波弥臣・下毛野君・佐味君・道守臣・大野君・坂本臣・池田君・玉手臣・笠臣、凡五十二氏、賜姓曰朝臣。」

（十一月の戊申の朔に、大三輪君・大春日臣・阿倍臣・巨勢臣・膳臣・紀臣・波多臣・物部連・平群臣・雀部臣・中臣連・大宅臣・粟田臣・石川臣・桜井臣・采女臣・田中臣・小墾田臣・穂積臣・山背臣・鴨君・小野臣・川辺臣・櫟井臣・柿本臣・軽部臣・若桜部臣・岸田臣・高向臣・宍人臣・来目臣・犬上臣・上毛野君・角臣・星川臣・多臣・胸方君・車持君・綾君・下道臣・伊賀臣・阿閉臣・林臣・波弥臣・下毛野君・佐味君・道守臣・大野君・坂本臣・池田君・玉手臣・笠臣、凡て五十二氏に、姓を賜ひて朝臣と曰ふ。）

105.『新撰姓氏録』左京皇別下・右京皇別上・摂津国皇別。各氏族の先祖に関する記事については、表16を参照。

表16　『新撰姓氏録』に記載される6氏族の先祖

氏族名	先祖に関する記事	本　貫
下毛野朝臣	崇神天皇豊城入彦命之後也	左京皇別下
上毛野朝臣	下毛野朝臣同祖、豊城入彦命五世孫多奇波世君之後也	同上
池田朝臣	上毛野朝臣同祖、豊城入彦命十世孫佐太公之後也	同上
車持公	上毛野朝臣同祖、豊城入彦命八世孫射狭君之後也 同豊城入彦命之後也（＊1） （＊1）「同」は、韓矢田部造条の「上毛野朝臣同祖、豊城入彦命之後也」を受ける。	同上 摂津国皇別
佐味朝臣	上毛野朝臣同祖、豊城入彦命之後也	右京皇別上
大野朝臣	同豊城入彦命四世孫大荒田別命之後也（＊2） （＊2）「同」は、佐味朝臣条（前掲）の記事を受ける。	同上

106.『続日本紀』延暦10年4月乙未［5日］条（下線筆者）。

「夏四月乙未。近衛将監従五位下兼常陸大掾池原公綱主等言。池原。上毛野二氏之先。出自豊城入彦命。其入彦命子孫。東国六腹朝臣。各因居地。賜姓命氏。斯乃古今所同。百王不易也。伏望因居地名。蒙賜住吉朝臣。勅綱主兄弟二人。依請賜之。」

（夏四月乙未、近衛の将監従五位下兼常陸の大掾池原の公綱主等言す、池原・上毛野二氏の先は、豊城入彦の命より出たり。其の入彦の命の子孫、東国六腹の朝臣は、各々居地に因て、姓を賜ひ氏を命す。斯れ乃ち古今の同き所にして、百王不易なり。伏して望らくは、居地の名に因り、住吉の朝臣を蒙り賜はんと。綱主兄弟二人に勅して、請に依て之を賜ふ。）

107. 熊倉浩靖「上毛野氏と東国六腹の朝臣」（注98参照）。

108.『続日本紀』養老4年9月丁丑［28日］条。

「丁丑。陸奥国奏言。蝦夷反乱。殺按察使正五位下上毛野朝臣広人。」

（丁丑、陸奥の国奏言す、蝦夷反乱して、按察使正五位下上毛野朝臣広人を殺すと。）

109.『続日本紀』天平元年2月戊寅［17日］条。

「戊寅。外従五位下上毛野朝臣宿奈麻呂等七人。坐与長屋王交通並處流。自余九十人悉従原免。」

（戊寅。外従五位下上毛野朝臣宿奈麻呂等七人。長屋王と交通するに坐せられて並に流に處せらる。自余九十人は悉く原免に従ふ。）

110.『続日本紀』天平勝宝2年3月戊戌［10日］条。

「三月戊戌。……又賜中衛員外少将従五位下田辺史難波等上毛野君姓。」

（三月戊戌、……又、中衛員外の少将従五位下田辺の史難波等に上毛野の君の姓を賜ふ。）

111.『新撰姓氏録』右京皇別上・垂水公条。本文は、佐伯有清『新撰姓氏録の研究　本文篇』（1962年7月、吉川弘文館）による。

「垂水公

豊城入彦命四世孫賀表乃真稚命之後也。六世孫阿利眞公。謚孝徳天皇御世。天下旱魃。河井涸絶。于時阿利眞公。造作高樋。以垂水岡基之水。令通宮内。供御御膳。天皇美其功。使賜垂水公姓。掌垂水神社也。日本紀漏。」

（垂水の公

豊城入彦の命の四世の孫、賀表乃真稚の命の後なり。六世の孫、阿利眞の公、謚孝徳天皇の御世に、天下旱魃し、河井孤絶す。時に阿利眞の公、高き樋を造作し、垂水岡基の水を以て宮内に通ぜしめ、御膳に供御す。天皇、その功を美め、垂水の君の姓を賜ひ、垂水

神社を掌らしむ。日本紀に漏る。）

112．尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』（注13-①参照）、629～630ページ。

113．熊倉浩靖「上毛野氏と東国六腹の朝臣」（注98参照）、85ページ。

熊倉氏は、『新撰姓氏録』の記載法の問題に加えて、有馬君が東国六腹の朝臣に数えられないことや、『日本書紀』や『続日本紀』に有馬君に関する記事がみえないことを指摘して、「阿利眞君」（有馬君）を在地の有力氏族の名と解する尾崎説を批判し、有馬君は個人名である可能性が高いとした。

114．《山ノ上碑》碑文。本文は、群馬県史編さん委員会編『群馬県史　資料編４　原始古代４』（1985年３月、群馬県）による。

「辛己歳集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黒売刀自、此
新川臣児斯多々弥足尼孫大児臣娶生児、
長利僧母為記定文也、　放光寺僧　」

（辛己［巳］の歳集月の三日に記す
佐野の三家を定め賜へる健守命の孫、黒売刀自、此れ
新川臣の児、斯多々弥の足尼の孫、大児の臣と娶ひて生める児、
長利僧、母の為に記し定める文なり、　放光寺の僧）

碑文中の「長利」については、僧職名「長吏」とも、僧名「長利」ともとれるが、前後の文が個人名を列記した系譜であることから、僧名とみるのが穏当とされる(*)。

＊　前沢和之「主要史料解説　山上碑銘」（『群馬県史　資料編４　原始古代４』［本注前掲］所収）。

115．右島和夫「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」（注88参照）、31ページ。

116．熊倉浩靖「上毛野氏と東国六腹の朝臣」（注98参照）、85ページ。

117．『続日本紀』天平元年２月辛未［10日］条・壬申［11日］条・癸酉［12日］条。

118．『続日本紀』天平元年２月戊寅［17日］条（注109参照）。

119．寺崎保広『長屋王』（『新装版　人物叢書』221）、1999年２月、吉川弘文館、258ページ。

120．『大日本古文書』24－２～３。

121．『大日本古文書』24－５～６。

122．『唐大和上東征伝』。本文は、蔵中進編『宝暦十二年版本　唐大和上東征伝』（1979年11月、和泉書院）による。

「大和尚答曰、……又聞、日本国長屋王崇敬仏法、造千袈裟、棄施此国大徳衆僧。其袈裟縁上繡著四句曰、山川異域、風月同天、寄諸仏子、共結来縁。以此思量、誠是仏法興隆、有縁之国也。……」

（大和尚答へて曰く、……又聞く、日本国の長屋王、仏法を崇敬して、千の袈裟を造りて、此の国の大徳・衆僧に棄施す。其の袈裟の縁の上に四句を繡著して曰く、『山川域を異にすれど、風月天を同じくす。諸々の仏子に寄せて、共に来縁を結ばん』と。此を以て思量するに、誠に是仏法興隆、有縁の国なり。）

123．綾村宏「長屋王とその時代」（奈良国立文化財研究所編『平城京　長屋王邸宅と木簡』所収）、1991年１月、吉川弘文館。
寺崎保広『長屋王』（注119参照）。

124．［　］内の３組のアラビア数字は、木簡の長さ・幅・厚さをあらわす（単位cm）。そのうち、（　）内の数字は、欠損や２次的整形があるために、現存部分の法量を示したことを示す。

125．森公章「長屋王邸宅の住人と家政機関」（『平城京　長屋王邸宅と木簡』所収）（注123参照）。
寺崎保広『長屋王』（注119参照）、173～178ページ、237～238ページ。

126．『興福寺流記』円堂院条。本文は、『奈良六大寺大観　第７巻　興福寺１』（1969年７月、岩波書店）による。

「一　円堂院。北円堂一宇。……
宝字記云。西院円堂。并仏菩薩縁起者。平城宮御宇奈保山太上天皇。并中太上天皇。為藤原太政大臣所造也。天皇欲令永滅有縁之塵労。長證無等之常楽。仍勅右大臣従二位長屋王。別造此院并仏菩薩等像也、養老五年秋八月三日。丹青方畢。荘厳就功云云。」

（一　円堂院。北円堂一宇。……
宝字記に云く、西院円堂并びに仏・菩薩の縁起は、平城宮御宇奈保［元明］山太上天皇、并びに中太［元正］上天皇、藤原の太政大［不比等］臣の為に造る所なり。天皇、永く有縁の塵労を滅し、長く無等の常楽を證せしめんと欲し、仍て右大臣従二位長屋王に勅して、別に此の院并びに仏・菩薩等の像を造らしむるなり。養老五年秋八月三日、丹青方に畢り、荘厳就功すと云云。）

127．護国寺本『諸寺縁起集』所引『薬師寺縁起』。本文は、藤田経世『校刊美術史料　寺院篇　上巻』（注10参照）による。

「一、東院……流記云、東禅院舎三口、堂細殿僧房、吉備内親王奉為　元明天皇、以養老年中造立也、」

（一、東院……流記に云く、東禅院の舎三口、堂・細殿・僧房。吉備内親王、元明天皇の奉為に、養老年中を以て造立するなり。）

なお、『諸寺建立次第』薬師寺条は「東院ハ長屋ノ親王ノ建立也」と記し、薬師寺東院を長屋王の建立とする。

【挿図の出典】

挿図４　茨城県立歴史館編『特別展　東国の古代仏教―寺と仏の世界―』、1994年10月、茨城県立歴史館。

挿図６　東京国立博物館・奈良国立博物館・奈良国立文化財研究所・法隆寺他編『法隆寺昭和資財帳調査完成記念　国宝法隆寺展』、1994年３月、ＮＨＫ。

挿図７　肥塚隆・宮治昭編『世界美術全集　東洋編　第13巻　インド１』、2000年６月、小学館。

挿図８　百橋明穂『仏伝図』（『日本の美術』267）、1988年８月、至文堂。

挿図９　雲岡石窟文物保管所編『中国石窟　雲岡石窟　第２巻』、1990年１月、平凡社。

挿図10・33　中野政樹・平田寛・阿部弘・菊竹淳一編『正倉院と上代絵画　飛鳥・奈良の絵画・工芸』（『日本美術全集　第３巻』）、1992年10月、講談社。

挿図12・14・20・39・47　奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観　第7巻　興福寺1』、1969年7月、岩波書店。
挿図15・24・25・26・45　奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観　第10巻　東大寺2』、1968年8月、岩波書店。
挿図16　西川新次編『大和古寺大観　第4巻　新薬師寺　白毫寺　円成寺』、1977年2月、岩波書店。
挿図17・23・42・44・46・49　西川新次『法隆寺五重塔の塑像』、1966年7月、二玄社。
挿図18・41　毛利久編『大和古寺大観　第2巻　当麻寺』、1978年12月、岩波書店。
挿図21　奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観　第2巻　法隆寺2』、1968年4月、岩波書店。
挿図22　東京美術学校編『法隆寺大鏡　第18集』、1924年8月、南都七大寺大鏡発行所。
挿図27　泉南市教育委員会編『海会寺　海会寺遺跡発掘調査報告書　図版篇』、1987年9月、泉南市教育委員会。
挿図28-ａｂ・50　法隆寺昭和資財帳編集委員会編『法隆寺の至宝―昭和資財帳―　第3巻　金銅像・塑像・乾漆像・石像』、1996年4月、小学館。
挿図29　奈良国立博物館編『平成10年　正倉院展目録』、1998年10月、奈良国立博物館。
挿図30　群馬県立歴史博物館編『唐墓壁画集錦』、1989年10月、群馬県立歴史博物館。
挿図31　陝西省博物館・陝西省文物管理委員会編『唐李重潤墓壁画』、1974年12月、文物出版社。
挿図32・48　奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観　第6巻　薬師寺全』、1970年8月、岩波書店。
挿図35　伊藤延男編『東大寺と新薬師寺・法華寺』（『日本古寺美術全集4』）、1980年11月、集英社。
挿図37　小川光三・西村公朝・西川杏太郎・山崎隆之他『魅惑の仏像1　阿修羅　奈良・興福寺』、毎日新聞社、1986年2月。
挿図38　東京国立博物館編『法隆寺献納宝物　伎楽面』、1984年2月、東京国立博物館。
挿図40　上原昭一・鈴木嘉吉編『南都七大寺―天平の美術』（『日本美術全集4』）、1977年10月、学習研究社。
挿図43　奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『日本と韓国の塑像　飛鳥資料館図録第14冊』、1985年10月、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館。

第2節　山王廃寺の創建と衰微

井上　唯雄

Ⅰ．山王廃寺研究の経過
　1．総社古墳群と山王廃寺
　2．文字資料と遺跡との関連

Ⅱ．山王廃寺創建以前の遺跡
　1．遺構の種類と配置
　2．遺構の全体的な様相
　3．山王廃寺創建以前の山王地区の遺跡の性格

Ⅲ．山王廃寺の創建のいくつかの問題
　1．主要堂塔の検出と寺院形成
　2．「放光寺」銘瓦の発見と山王廃寺
　3．調査成果の再検討結果と山王廃寺の創建
　4．山王廃寺をめぐるいくつかの問題

Ⅳ．山王廃寺の衰退
　1．遺構・遺物からみた山王廃寺の衰退
　2．文献資料からみた山王廃寺の衰退
　3．山王廃寺衰退の時期

Ⅰ．山王廃寺研究の経過

山王塔址の発見から90年近くが経過した。その間、多くの研究者及び関係機関がその実態の解明に努力してきた結果、この山王廃寺が東国屈指の古代寺院であることが分明になりつつある。ここでは、山王廃寺が、いつ、いかなる社会的背景の中で創建され、それがいつ頃まで機能していたかについて、先学の研究成果を一応整理しておきたい。

山王廃寺の創建に関しては、大きく分けて総社古墳群、文字資料との関連、瓦当面を中心とした瓦の研究の面からのアプローチが成されてきた。これに昭和49年以来の前橋市教育委員会の調査成果等を加味して整理してみたい。

1．総社古墳群と山王廃寺

総社古墳群と山王廃寺の関連について最初に指摘したのは尾崎喜左雄である。とりわけ、宝塔山、蛇穴山古墳の横穴式石室や家形石棺と山王廃寺の塔心礎、根巻石、石製鴟尾などの石材加工技術に着目し、その関連を指摘した（注１）。

宝塔山古墳石室写真

更にこれを発展させて詳細な関連を追求したのが津金沢吉茂、右島和夫である。津金沢は総社古墳群および山王廃寺にみられる石材加工技術の厳密な分析を行ない、特に宝塔山古墳の天井石、蛇穴山古墳玄室等と山王廃寺塔心礎の加工技術が「水磨き」によるものではなく、丹念な面調整の技法によるものであることを実証した（注２）。

右島は愛宕山、宝塔山、蛇穴山古墳の築造について大和の古墳との関連を軸に詳細に検討し、大和政権から直接に地位を承認された総社古墳群の氏族を上毛野氏と推論した(注３)。愛宕山古墳は56mの方墳で前方後円墳が規制で消滅した後の大型墳で、上野地域への中央集権的な体制が及んだことを示す７世紀前半の古墳である。巨石巨室を有し、大型の刳抜式家形石棺を伴う畿内有力墳に類する点で、上野国内の他地域の勢力とくらべてヤマト政権から格段の特権を与えられた結果で、東国、東北地方への進出拠点としての背景がうかがえるという。このあとに続く宝塔山（７世紀中葉）、蛇穴山（７世紀後葉）古墳は、ともに截石切組積石室を有し、最も洗練された構築技術で高い完成度を示す古墳である。県内各地で認められる截石切組積石室をもつ古墳の頂点にたつ内容を示している。

宝塔山古墳は60mの大型墳で７世紀第３四半期の築造で、硬質石材を自在に加工した複室構造、壁面漆喰仕上げ、家形石棺の意匠など畿内勢力との直接的な関連を推定させる。山王廃寺は技術的にみて、本墳と併行して造営されたものとみられるし、ヤマト政権との関係の中で行われたとみる。

蛇穴山古墳は１辺39mと規模が縮小するが、各壁面を１枚石で構築する技法により進んだ洗練された技術をうかがわせるが、これも畿内における有力者らの古墳にみられる傾向に合致するという。

こうした山王廃寺と総社古墳群に共通する石材加工技術、家形石棺（宝塔山）の格狭間型式の採用にみる仏教思想との融合など両者の関連は疑う余地がない。その背景のヤマト政権と強固なつながりをもてる上野国内最有力の氏族として浮上するのが上毛野氏で、総社古墳群は上野国「国造」の奥つ域であるとする白石

太一郎の考えともそごはない(注４)。いずれにしても宝塔山、蛇穴山古墳の築造と山王廃寺の創建は同じ勢力によって行われた一連の事業で、ヤマト政権の技術的、政策的援助によってはじめて可能であったと考えられる。上野国内の最有力氏族としての上毛野氏がヤマト政権と極めて密接かつ直接的なつながりをもつことの背景には新しい社会への転換を模索するヤマト政権の拠点としての上野国を重視する社会的背景があったのであろう。

２．文字資料と遺跡との関連

古代においては文字資料と遺跡が結びつく例は極めて稀である。しかし、一旦両者の結びつきがみられると、その資料的価値は相乗効果ではかり知れない成果をもたらしてくれる。山王廃寺がその好例である。

昭和49年から始まった前橋市教育委員会の山王廃寺第６次調査（1980）で寺域中枢部に当たる東西に並ぶ塔址及び金堂基壇部分を確認した。この金堂址東側の２次堆積瓦の中から「放光寺」とヘラ描きされた平瓦が出土し、注目された(注５)。これらの瓦は奈良時代後半から平安時代前半の国分寺系瓦との共伴で、後世、補修に際して持ち込まれたものと推定されている。

この「放光寺」が注目されるのは上野三碑の一つで天武天皇10年（681）の紀年のある「山ノ上碑」碑文中に「放光寺」なる寺名が認められることからである（注６)。三家（屯倉）の家系の僧長利が放光寺の僧をしていたことがわかる資料である。これでみると放光寺は既に寺としての形を整えていたとみられるもので、遺跡の実態と時期、社会的背景、他資料との校合などから「放光寺」銘瓦が示す寺名はこの放光寺であるとする考え方が定着してきている。

従来、不分明なため、放光寺の位置についてはいくつかの議論があったが、それらは推察の域を出なかったので、この「放光寺」銘瓦の発見は画期的なもので、山王廃寺が放光寺であるとする見方によって、文字資料と遺跡の実態との関係をより具体的に考察する必要が生じてきて、多くの課題に迫るルートが開かれた意義は大きい。

「放光寺」に関する文字資料には「上野国交替実録帳」（1030ころ）にも定額寺四つの筆頭寺院として名を連ねている。しかし惜しいことに定額寺については氏人の申請によりこれから除外したとあり、内容は全く不明である(注７)。いずれにしても律令政府が寺院政策のために設けた寺格が与えられ、経済的な優遇を受けるかわりに、その活動や堂舎、仏具などに一定の統制が加えられていた有力な氏寺としての姿が浮かび上がってくる。

定額寺としての放光寺の性格に関して松田 猛は瓦の同笵関係に注目して上野国分寺との関連について検討を加えた(注８)。その中で変形七葉軒丸瓦は山王廃寺で使用していたものを笵の手直し後、上野国分寺へ供給されたこと、その背景にある国司による定額寺用の資材、工人組織の国分寺修造への転用などの具体的事例をあげ、山王廃寺が国司の管轄下におかれた定額寺であったことを論じ、山王廃寺の再整備も９世紀中葉に勅によりなされた定額寺の修造を命じた結果によるものと断じた。その主体となった強力な檀越こそ、上毛野氏である可能性が高いと指摘したい。

【注】

１．尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」吉川弘文館　1966
　尾崎喜左雄　前橋市史１巻「豪族の支配と古墳の築造」1971
２．津金沢吉茂「古代上野国における石造技術についての一試論」群馬県立歴史博物館研究紀要第４号 1983
３．右島和夫　「東国古墳時代の研究」総社古墳群の研究　学生社 1994
４．白石太一郎　古墳とヤマト政権「古代国家への道」文芸春秋社 1999
５．前橋市教育委員会「山王廃寺第６次発掘調査概報」1980

この際出土した「放光」「方」「光」のヘラ描き、刻字なども「放光寺」に当たるものであろうと思われる。

6．山ノ上碑（高崎市山名町所在）

辛巳歳集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黒賣刀自此
新川臣児斯多々弥足尼孫大児臣娶生児
長利僧母為記定文也　放光寺僧

7．上野国交替実録帳　定額寺項

放光寺 法林寺 弘輪寺 慈広寺の4ケ寺があり、それぞれ内容をうかがえる。

定額寺
放光寺
件寺依氏人申請不為定額寺仍除放已了者

8．松田　猛「山王廃寺の性格をめぐって」山王廃寺と国分寺 県央研究 1984

9．山王廃寺跡第7次発掘調査概報　前橋市教育委員会　1982

II．山王廃寺創建以前の遺跡

大正期に発見された山王廃寺は、昭和初年の福島武雄の調査以降ほとんど手が入っていなかった。前橋市教育委員会は昭和49年度以降計画的に寺域確認を主眼とする調査に着手した。以来7次に及ぶ調査が実施され、多くの成果を上げてきている。

この調査によって検出された遺構や遺物については寺院創建以前に位置づけられるものも多く存在するが、各年次毎の報告は成されているものの、総合的な検討はあまり成されていない。そこで、本稿は検出遺構・遺物について総合的に検討し、寺院創建以前の遺跡の性格についても触れてみたい。

1．遺構の種類と配置

今までの調査で検出された寺院創建以前の遺構としては竪穴住居跡、掘立柱建物、井戸等がある。これらはあるまとまりを示しており、遺跡の性格についても推察できる様相をみせている。

遺跡のある地域をみると、すぐ東を南東方向に流れる八幡川によって規制された台地の東緩傾斜面に占地している。この台地は西を牛池川によって区画されている。台地の幅は600mあり、寺院跡は台地中央に占地するが、東半は寺院創建以前の遺構と重複する様相をみせている。

調査地点は土地利用とからんで偏りをみせているが、塔心礎部分を基点（0・0）とし、東西南北方向に50mずつの区画を設定し、各区画の最大数値を取って呼称する。例えば基点から北へ50m、東へ50mまでの区画はN50・E50区画とする。

ア．N50・E50区

基点（心礎）東の区画で調査区は北三分の一に集中している。一部連続する遺構がN50・E100区画にはみ出す状態である。ここには、掘立柱建物及び竪穴住居跡が確認されている。掘立柱建物はN40・E40付近を中心に南北に長い建物となるとみられる。現状では南北4間、東西1間が確認できる。この側柱列は、同方向に柱穴が並ぶように検出されることから、建替えが想定される。竪穴住居跡は1．2．4．5．6号住居が検出されている。出土遺物でみると、最も古い6号住居跡が5世紀末ころに比定されるが、他はすべて6世紀も前半代とみられる一群で、前述の掘立柱建物の周辺に集中している。

掘立柱建物と竪穴住居跡の関係については報告書には明瞭な記述を欠いているが、重複する5号住居床面に柱穴の堀り方がかかり柱穴の方が新しいと受けとれる表現方法をとっている。5号住居跡は6世紀第1四半期とみられる遺物を出土しているところから掘立柱の時期はそれ以降とみるのが妥当かもしれない。

イ．N150・E50区

この部分もトレンチ調査による成果で、全貌は把握できない。その中で遺構としては、掘立柱建物、竪穴住居跡、井戸等が検出されている。その中心はN120・E60までである。ここでの掘立柱建物は、2棟の総柱建物に特徴がある。全掘はされていないが、状況的に3間×3間の大型建物で、2棟とも建替えられた痕跡を認めることができる。側柱のみの掘立柱建物は、寺院関連の掘立柱建物と重複していてかなり破壊されているが、N116・E20地点にあり、8世紀後半の住居跡とも重複している。完掘されていないが、西側に並列する柱穴群があり、庇または目隠塀的な性格をうかがわせる。

竪穴住居跡は、この部分にはあまり見当たらないが、17号住居跡は破片に6世紀段階でも古い時期の遺物を含むことからこの時期のものとみられる。

井戸は、東側の総柱建物の北に接する位置にあり、生活的なにおいを感じさせる。

ウ．N50・W50区

山王廃寺の中枢部であるが、寺創建以前は竪穴住居が散見される程度で遺跡としては周辺部に該当する。ここでも掘立柱建物が検出されている。掘立柱建物は塔址北方40mほどのところに検出された。未完掘であるが側柱建物4間×2間分が確認されている。

竪穴住居跡は4軒検出されている。塔址北方の2軒はまとまった出土遺物を欠くが、6世紀段階のものと考えられる。塔址、金堂址と関係する竪穴住居跡があり、二つの建物より先行するものであることが調査で判明している。

塔址下層から検出された竪穴住居跡は土師器模倣坏を出土しているが、その特徴は、小形化していること、口縁部と体部の境の稜がやや弱くなっていること、体部が浅いことなどが指摘でき、7世紀も中頃に近い時期のものとしてみることができる。また、金堂址と関連する竪穴住居は明確な出土遺物を欠くが、出土する破片等から6世紀後半代の時期を与えることが妥当とみられる。

これ以外の区については、一部道路部分の工事掘削に立ち会っているがその詳細な分析はまだできていない。

2．遺構の全体的な様相

部分的な調査ながら、検出された遺構を整理してみると次のようになる。

ア．掘立柱建物

No.	検出区 規模	棟走向 主軸方位	遺構の概略等
2	N116.E40 3×3間 (5.3×5.3)	E—W N—25°—W	総柱建物　建替 3と並列　未完掘
3	N116.E52 3×3間 (5.4×5.4)	E—W N—22°30′—W	総柱建物 5は3の建替　　未完掘
4	N112.E44 1＋α×1＋α	N—S N—25°30′—W	周辺に井戸
5	N116.E52 3×3間 (5.3×5.3)	E—W N—28°—W	3と重複だが前後関係不明 同規模建替　未完掘
6	N116.E20 2×3間 (3.6×8.0)	E—W N—24°—W	西側に柱列 未完掘
8	N50.W10 2×4間 (3.0×8.5)	N—S N—30°—W	2回の建替か 未完掘

その他 ア	N40.E58 1×2間+α	E—W N—28°—W	掘立の可能性あり 報告書欠
その他 イ	N40.E40 1+α×4+α (2×5.5)	N—S N—25°—W	掘立の可能性あり 報告書欠

イ．竪穴住居跡

No.	位　置	主軸方向	遺構・遺物	時期
1	N50.E100	N—28°—W	未完掘　周溝　柱穴小片のみ	6世紀
2	N50.E100	N—28°—W	未完掘　周溝　1号より新しい	6
4	N50.E50	N—23°—W	東壁かまど　長甕　坏　未完掘	6　1/4
5	N50.E50	N—32°—W	南西隅部のみ検出　小甕　坏	6　1/4
6	N50.E50	N—22°—W	南東隅部検出　東かまど　未完掘	5　4/4
17	N130.E50	N—26°—W	西北隅検出　未完掘	6
25	N30.W10	N—28°—W	一部検出　小片のみ	6
26	N20.W10	N—21°—W	一部検出　小片のみ	6
27	N10.W10	N—26°—W	塔に先行　坏　甕	7中ころ
28	S10.W40	N—23°—W	金堂に先行	6C後

以上、掘立柱建物と竪穴住居跡をまとめてみるといくつかの共通点が指摘できる。

①5世紀末～6世紀の竪穴住居跡の検出範囲と掘立柱建物が重なる。

②掘立柱建物の周辺部に竪穴住居跡が分布する傾向がある。

③遺構の主軸方向が両者ともほぼ25°～30°に集中する。

④その方位は台地の走向方向と一致する。

⑤掘立柱建物を中心とした遺構は現状で東西90m、南北80mほどの範囲とみられる。

⑥遺構の時期は5世紀末～7C中ころまでの時期に集約が、中心は6世紀後半から7世紀前半ころとみられる。

⑦井戸などの存在から生活的なにおいもうかがえる。

3．山王廃寺創建以前の山王地区の遺跡の性格

今までの調査で検出された寺院創建以前の遺構について概観し、傾向を指摘した。その結果として、掘立柱建物が多いこと、比較的桁行の柱数の多い建物が、しかも計画的に配置されたとみられる様相がみてとれ、一般の集落の状況とは様相を異にする傾向がうかがえた。まず、遺跡の占地をみると、共に東南方向に流れる東の八幡川、西の牛池川に挟まれた幅600mほどの台地上にある。遺構は台地鞍部に近い東面緩傾斜地に検出される。この台地走向に方位を合わせるように掘立柱建物、竪穴住居がみられるが、その軸線の方位は北から25°～30°ほどズレて統一性をもっている。掘立柱建物群は東西90m、南北80mほどの方形区画に包含され、しかも桁行柱間5間以上の規模で南北方向に棟走行をもち、東の方向に開く配置を感じさせる。また、北側には3間×3間の比較的大型の総柱建物が配され、周辺には井戸も検出されている。

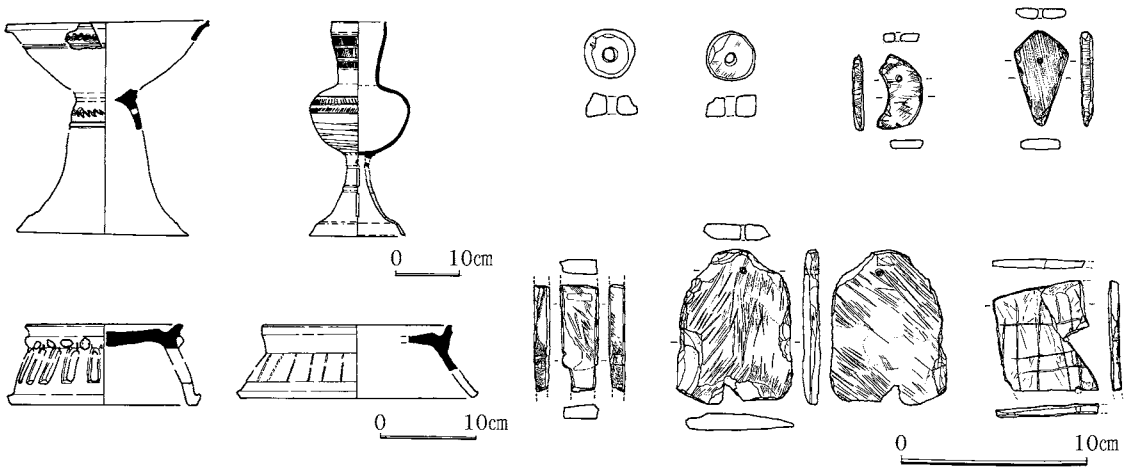
これら掘立柱建物の多くは最高3回に及ぶ建替えが行なわれたことが裏付けられており、比較的長期間にわたって機能していたことが推察される。竪穴住居は5世紀代のものを除いてはほぼ掘立柱建物群の周辺部

に集中する傾向が見られ、この配置が6世紀代に形成されたとみることができよう。

このようにみてくると、これら一連の遺構は一般の集落とみるより、有力者階層の居宅（ヤケ）としての性格を示しているように推察される。その範囲も古墳時代の豪族居館と匹敵する規模である。まだまだ遺構の全ぼうをつかむまで調査規模を拡げていない状況での推論であるが、一応の性格付けをしておきたい。

更に周辺の遺跡との関係で山王地区をみるとその特質が浮かび上がってくる。まず、古墳との関連をみてみよう。この地域には北東1.5kmに5世紀後半とみられる遠見山古墳、つづいて南東2kmにある6世紀前半の横穴式石室をもつ王山古墳（前方後円墳75.6m）がある。長さ16mの長大な石室をもつこの古墳は横穴式石室の初現形態として注目されるが、新たな葬法を採用した新興勢力の台頭が背景にあるものと推察される。その後、6世紀中ころ王川原山古墳、総社二子山古墳と連綿として前方後円墳が続き、地域も南から北に移動していく。7世紀になると、愛宕山、宝塔山、蛇穴山古墳が大方墳という形で県内でも特筆される総社古墳群として発展をみる。この総社古墳群は既に多くの研究者が指摘するように山王廃寺と直接結びつく古墳群として注目されてきた。この古墳群出現の背景には、中央集権的支配体制の実現を目指した大和政権の積極的な働きかけがあったものとみられている。この古墳群は山王地区の東北方500mという至近距離にある。古墳の技術的な面と共に山王の有力者層とは直接的なつながりがあったとみる観方は既に記述した。

この総社古墳群と山王地区の中間に位置する大屋敷地区で特異な遺跡が発見されている。山王地区からは八幡川をへだてて400mほどの位置で、総社古墳群はすぐ北に隣接している地域である。ここで前橋市教育委員会が開発に伴う調査を6次にわたり実施してきているが5世紀後半からの南北80m、東西50mほどの範囲で竪穴住居200軒余、掘立柱建物等を検出している。この集落は6世紀～9世紀前半を盛期としているが、特筆されるのは出土遺物である。6世紀代までの遺構からは300点以上の石製模造品を集中的に出土する竪穴住居や大型須恵器器台、高坏などを出土するものがあり、7世紀段階の台付長頸瓶、8世紀の金銅製鈹具、円面硯などを出土する遺構があり注目される。



大屋敷遺跡出土遺物

これら一群の秀れた豊富な出土品の性格は有力者が背景に存在することを推察させ、しかも、祭祀的な臭いを感じさせる。調査が極く限られた部分であるため、全体像を把握するには至っていないが、6世紀以降、中央部分に竪穴住居が検出されない空閑地があり、周辺から大きな柱穴状のピット群が発見されている部分もあり、掘立柱建物の存在する可能性が指摘される。また一部の遺構には山王廃寺と関連する瓦等も出土しており、山王地区との関連もうかがわれる。これらを勘案して、大屋敷遺跡は山王地区及び総社古墳群と有

機的関連をもつ遺跡として理解してよいと考える。その性格は、山王地区が居宅であるのに対し、政治的な意図をもつスペース（まつりごと）で、総社古墳群の墓域としてのスペースと機能を分担していたとみることはできないであろうか。

III. 山王廃寺の創建といくつかの問題

山王廃寺の創建については、主要堂塔の検出による寺院形成や出土する瓦を中心とした遺物から多くの研究者による想定がなされてきている。しかし、個々の評価については必ずしも統一的な見解も得られていない。それは、当該地域が住宅密集地であり、発掘調査が思うに任せないことに起因しているといえる。更に最近の新しい知見が得られたこともあってより内容を複雑にしている。ここではそれらを一応整理すると共に、従来の見解に対する若干の問題点を指摘しておきたい。

1．主要堂塔の検出と寺院形成

山王廃寺に関する発掘調査は大正10年(1921)、福島武雄による塔心礎の調査に始まる。この調査は、偶然発見された心礎部分に限定されたが、周辺に分布する礎石、古瓦の散布と時期についても含めて検討した。その結果、礎石の状況、瓦の文様、意匠等を勘案して、国分寺以前の寺院であるとの見解を示した（注１）。

それ以降、発掘調査は行われなかったが、尾崎喜左雄は周辺の調査を進め、特に終末期古墳における石材加工技術と塔心礎との共通点から関連を打ち出した。また、地形、古瓦の散布調査、石造物調査などを集約検討し、主要堂塔が南北一直線上に並列する四天王寺式伽藍を提唱した(注２)。この他にも、瓦当文様を規準とした判断で法隆寺式、薬師寺式などの寺院形式を提唱する見解も見られた。しかし、いずれも主要堂塔の検出を見ない時点での想定であり、確たる根拠のあるものとはならなかった。

山王廃寺に本格的に発掘調査の手が入ったのは前橋市教育委員会による周辺の土地改良事業に伴う寺域特定の要請を受けての調査で、昭和49年７月のことであった。これより先、廃寺関連の遺物とみられる石製鴟尾１対（昭11）根巻石（昭28）緑釉水瓶、椀、皿及び銅椀（昭29）が発見され、重要文化財等に指定されたが、これらも含めて本格的検討に着手したといえる。

調査は昭和56年度の第７次まで継続されることになるが、住宅密集地であることから調査も制約を受けることになり、限定された地域にとどまざるを得なかった。そうした中でも第４次調査における塔心礎北110mほどの９×３間の東西棟の掘立柱建物の検出（注３）、第６、７次の塔金堂基壇の確認（注４）等、堂塔の検出がなされ、はじめて法起寺式伽藍配置を想定する根拠を得た。

その後、文化財サイドにおける意図的な発掘調査は中断されるが、周辺地域の上、下水道工事などにより、主として道路部分の立会い調査が行われた。平成９年にN60～70、W10～20の地点の道路下で数層の版築をもつ基壇を検出した。その位置は、塔跡北60mほどの地点に当ること、版築の手法をとった入念なつくりから講堂跡とみられ、法起寺式伽藍配置を補強することになった（注５）。

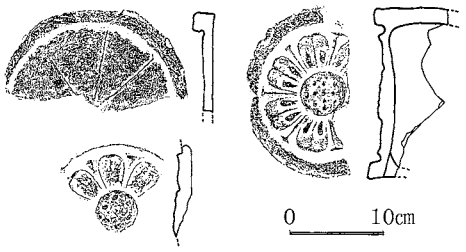
また、同年の立会い調査では塔心礎から南西100mの道路下から厚さ30cmの版築が検出された。層厚は５～10cmで黒色土と総社砂層が互層に積まれていた。位置と遺構の状況から築垣の基部とみられるというが、点の調査で今後も検討すべきものである（注６）。

こうした知見を総合してもまだまだ断片的で、その全体像を想定するために調査を継続していく必要を痛感するが、鍵は見えてきた感がつよい。

２．「放光寺」銘瓦の発見と山王廃寺

第６次調査における「放光寺」銘瓦の発見は山王廃寺研究に一石を投ずることになった。すなわち、山王廃寺が文献に見える「放光寺」の可能性が高まったことによって創建期論争を再燃させることになった。従来、瓦当面の検討のみでなされてきた創建期について新たに文字資料からアプローチが可能になった。

山ノ上碑（高崎市山名町）碑文中の「放光寺」（注７）が文字瓦が示す放光寺であれば碑文中の「辛巳歳」（天武10年）（681）には既に放光寺は建立をみていたとみるのが自然であり、創建についての時期の下限を想定できることになった。



創建期瓦

一方、瓦当面からの研究では早くから素弁七葉、素弁八葉、複弁八葉の軒丸瓦と三重孤文軒平瓦が創建期に関わる瓦として注目されてきた。素弁七葉軒丸瓦は完形品は出土していないが、中央の中房に擬せられるかたまり部分から７本の隆起線が放射状にのびるもので、単弁を表しているとみられている。また、同じく素弁の八葉軒丸瓦は花弁に１枚ずつの子葉を配し、中房は１＋６の蓮子配置をみせる。周縁は三重圏文である。複弁七葉軒丸瓦は花弁に２枚ずつの子葉を置いたもので、蓮子は１＋８＋８であること、周縁に鋸歯文を伴わないことなどの地方色をみせる。軒丸瓦では三重孤文が圧倒的で、四重孤文もある比較的精巧なつくりで均整のとれたものが多い。

造瓦の技法でみれば百済末期様式の流れをくむものとみられ、素弁の軒丸瓦２種が古式をのこしており、複弁のものはやや後出的な要素が指摘されている（注８）。これらの特徴から山王廃寺の創建は７世紀中ころまでさかのぼるとする説（注９）もあるが、細部の技法でやや時期を下げて考える研究者も多い。

また、山ノ上碑の天武10年（681）に寺が存在したとする考えを前提に、一般に創建に着手後僧が寺に入り機能を開始するまでの期間を想定し、それより10年ほど創建期をさかのぼらせ山王廃寺の創建を西暦670年ころとする考えもある（注10）。近年、こうした７世紀後半670年ころとする見方に対し、瓦、文献資料検討結果をふまえて、やや創建期を遡らせる考え方も出てきている（注11）。

３．調査結果の再検討結果と山王廃寺の創建

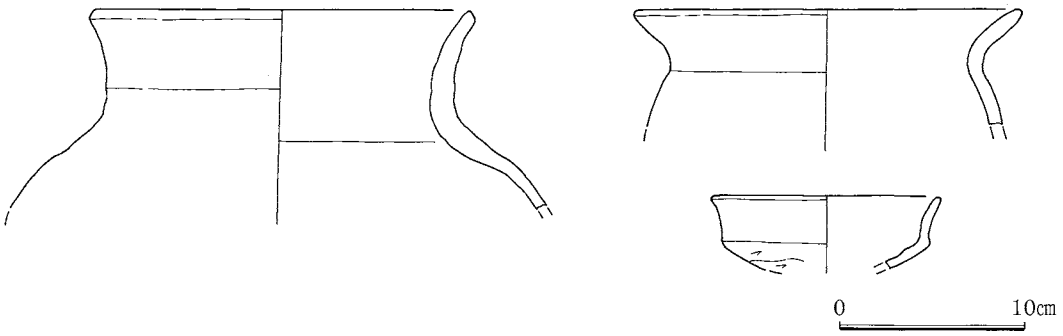
前橋市教育委員会による７次に及ぶ山王廃寺の調査結果については総括的に扱った論考はない。そこで、いくつかの観点から検討を加えてみたい。

まず、調査報告書によって瓦の出土地点を洗い出してみた。素弁７葉軒丸瓦、素弁８葉軒丸瓦を複弁瓦に先行するものとしてとらえて、出土地点をみると、その多くが塔・金堂周辺に集中して出土している傾向が見られた。特に素弁７葉軒丸瓦は塔址基壇の西縁に沿って掘られた補修期のものとみられる足場穴とみられる柱列の柱穴中からまとまって出土している。補修の時期は出土皇朝銭との関連で９世紀第２四半期とみられる（注12）が、塔の創建瓦は素弁７葉軒丸瓦であった可能性が高い。

一方、金堂基壇周辺は瓦が崩落した状態そのままでの出土ではないが素弁８葉軒丸瓦がかなりまとまって出土している様相がみてとれる。このようにみてくると、古式とみられる瓦は塔、金堂周辺からかなりまとまって出土しているといえる。講堂址の基壇周辺は未調査であるが、素弁瓦の集中出土傾向は認めない。

一方、塔址、金堂址の下層から住居跡が検出されている。金堂址下層から検出された住居跡は６世紀第４

四半期に属するものとみられるが、塔址と関連する竪穴住居跡は7世紀第2四半期に比定される土器を伴っている。調査所見では「塔址と重複するが、地層断面の観察により、住居跡が塔址に先行することが確認されている」としている。この際の実測図でみるとこの住居跡のために掘り上げられたロームが周縁壁上にのこり、その直上に塔址の整地面が来ていることが確認される。このことから、この住居跡が埋没してからそう期間を経ない段階で塔基壇の整地が成されたと考えられる（注13）。



塔址基壇下住居跡出土遺物

また、古墳との関連では塔心礎と宝塔山古墳における石材加工技術の共通性が指摘されている。すなわち、硬質な石材を加工する技術と心礎の面調整の技法が酷似することは素人目にも明らかである。そこで山王廃寺の創建が宝塔山古墳の築造時期と並行するとすれば、宝塔山古墳の築造時期が問題となる。その時期を右島和夫は7世紀第3四半期としている(注14)。が、論考の内容を推量すれば、その初めのころと理解してよさそうである。以上の所見に基づいて、山王廃寺の創建期について再度検討を加えることにしよう。塔基壇下の住居跡の時期が7世紀第2四半期で、それからあまり時期を経ない時点で基壇造成が開始されたとみると、7世紀第3四半期の当初に近い時期が想定される。その時期は宝塔山古墳の築造時期の想定とも矛盾しない。

瓦の面でみると素弁の軒丸瓦の年代観も同様の傾向を指しているといえる。しかし、山王廃寺の規模や伽藍配置などを考慮すると塔・金堂が当初建立され、着手されたとみられなくもない。むしろ、七堂伽藍すべてが同時に着工、完成したとする見方より、より現実性をもっているかも知れない。

これらを総合して山王廃寺の創建期について考えてみると7世紀中ころに近い第3四半期の時期が想定される。しかし、まだまだその決定については資料不足の感は否めない。今後、引き続いてより確実な資料の積み上げを進めながら慎重に検討を進める必要があろう。

4．山王廃寺をめぐるいくつかの問題

①堂塔の建立と寺の整備

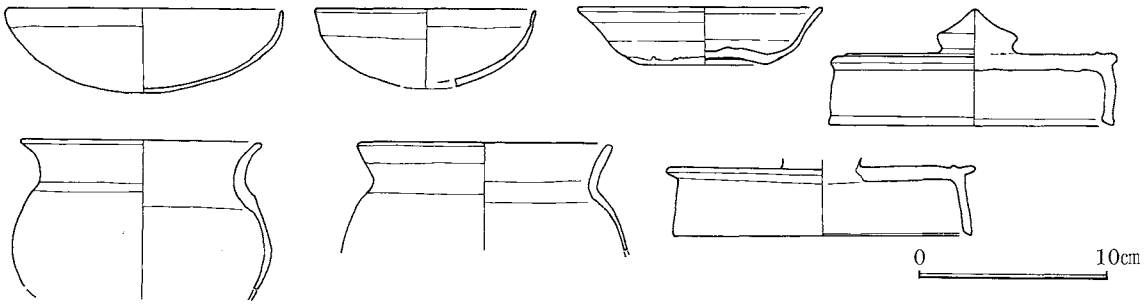
現在確認されている建物は東に塔、西に金堂が並び、その後に講堂で堂塔の配置から法起寺式の寺院型式が想定されている。この他、回廊かとみられる柱列や基壇状の遺構なども一部で検出されている。また寺域北辺とみられる部分には東西棟の9×3間の長大な掘立柱建物が検出されている。

これらの中で、中心となる建物は塔・金堂である。仏教の教義に由来することは当然であるがそれを模したとみられる瓦塔・瓦堂などの検出例も多い。寺としての形式はとれないまでも瓦塔・瓦堂でそれを代用し、仏教崇拝が行われたことの証左である（注15）。

一方、近県の白鳳期に創建されたとみられる飛鳥寺系の瓦を出土する寺院址をみると、埼玉県比企郡滑川町の寺谷廃寺、栃木県那須郡小川町の浄法寺廃寺、馬頭町尾の草遺跡（注16）などがある。いずれも関東では最古段階の寺院とみられている。ところがこれらはいずれも狭小な土地に立地し、建立された建物も単堂の仏殿様のものが検出されているに過ぎない。瓦堂のような形の伽藍配置をもたない寺院的なものを想定せざるを得ない。山王廃寺が、これらとは著しくかけはなれた形で当初から主要堂塔が整った形で創建されたと考えるより、古式の瓦を出土する塔・金堂建物が先行して建てられたとしても不自然ではない。むしろ、素弁瓦の出土が顕著な塔・金堂周辺の様相や、塔基壇西辺の柱穴からの集中出土などを考慮すると、塔、金堂が先行してつくられ、以降次第に寺地を整備していったとみられなくもない。特に講堂と推定される基壇の版築と金堂、塔基壇のつくりを比較すると全く異質の感がすることもその推察を補強してくれる。

②掘立柱建物の時期

山王廃寺が順次整備されていったと仮定すれば、また新たな問題が生ずる。その一つは、寺域北辺の東西棟の長大な掘立柱建物である。調査時点では、重複する竪穴住居跡に先行する遺構であるとした。そして、建物の性格は僧房ないしは食堂ではないかとされている。そして、竪穴住居がつくられる時期には消滅したものとされる。そこで、竪穴住居の時期を出土遺物からみると、８世紀中ごろには既にない。一方、塔本塑像は、８世紀第２四半期以降に配置されたとの判断が出されている。とすれば、山王廃寺が内容的に最も充実するのもその時期としていい。寺が充実する時点で重要な建物が滅失するという矛盾をどう考えるべきなのであろうか。



掘立柱建物と重複する住居出土遺物

竪穴住居跡からはカマドに創建期瓦とみられる瓦が発見されている。既にこの遺跡内に瓦が持ち込まれてからの住居跡である。また、掘立柱建物の柱穴も径50cm内外で掘りかたも円形でやや新しい様相も見てとれる。むしろ、この掘立柱建物は竪穴住居の後につくられたとみることの方が寺としての充実期との関連で妥当性が強いように思える。ちなみに、この掘立柱建物の時期につてい考えてみると、７号住居跡（８世紀第３四半期）と10号住居跡（９世紀第３四半期）の間に建てられたとみられる。この間には重複する範囲に遺構が見られないことによる。８世紀中ころから９世紀中ころまでの間、まさに寺の整備が進行した時期と重なる間に掘立柱建物が存在した可能性を指摘しておきたい。

③塔本塑像と根巻石

塔本塑像とみられる像の時期は８世紀第２四半期以降とする見解が示された。これと関連して注目されるのが根巻石の存在である。根巻石が塔の心礎の基部を飾っていたとすれば、塔本塑像が配置された際には排除されたものであろう。建立当初、心柱がどの位置に、どのように設置されていたか類例がなく、不明であるが、塑像群と重複する位置にあった可能性が高い。

塔本塑像が持ち込まれた時点で、不要なものと化した根巻石は、取り除かれて建物外に運び出されたとみ

る以外にない。当初、この根巻石がどこで発見されたかについては明らかでないが、畑地よりの出土と伝えている。早くに移動したが、現在は日枝神社境内に収まっている。

④山王廃寺関連遺物の散乱

寺と関連する遺物は礎石類、石造遺物、金堂製品、瓦、土器・陶器類・塑像等多岐にわたっている。量的にも多く、内容の充実がうかがえるものが多い。それらの内、建物（堂塔）やその中に収められていたとみられるもので原位置で出土したものは心礎以外ほとんどない。今後、発掘調査を進める上でどれだけ原位置からの出土遺物を検出できるかが問題である。礎石が原位置で発見される可能性も現状ではかなり望み薄な感じがする。基壇の判明している金堂、塔址でも今まで原位置で確認されたものは心礎以外ない。建物の場合、間取りで建物の性格や時期を推察できるケースが多いことからすると、多くの問題点をはらんでいるといわざるを得ない。

また、廃棄土坑の発見とからめて考えると、塑像等では主尊とみられるような大型仏像は全く含まれていない。これだけの本格的寺院であれば当然大型の仏像も存在したはずである。その意味では、単に寺院の建物部分のみでなく、周辺にもこの種廃棄土坑の存在を想定せざるを得ない。今後とも、広範囲にわたる観察を機会ある毎に考慮していく必要があろう。

【注】

1．群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告　第1輯　群馬県　昭4．6
15．山王塔址．P177

2．尾崎喜左雄　前橋市史第1巻　P607　在地豪族の権威を示す山王廃寺跡　昭46

3．山王廃寺跡　第4次発掘調査概報　　前橋市教育委員会　1978
「食堂」か「僧房」と推定している。

4．山王廃寺跡　第6次発掘調査概報　　前橋市教育委員会　1980
「放光寺」銘瓦の検出 塔の補修等、重要な発見があった
山王廃寺跡　第7次発掘調査概報　　前橋市教育委員会　1982

5．山王廃寺等遺跡　下水道築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　1999

6．前原 豊「よみがえる白鳳の寺　山王廃寺」群馬文化　254号　平成10．4
延長1m　南限を示す築垣とみている

7．山ノ上碑文
辛巳歳集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黒賣刀自此
新川臣児斯多々弥足尼孫大児臣娶生児
長利僧母為記定文也　放光寺僧

8．森　郁夫「日本の古代瓦」　1991
群馬最古の寺院は山王廃寺であること、素弁8葉蓮華文軒丸瓦、同7弁軒丸瓦で弁端の反り、中房径の大きいことなどを指摘し、単弁から複弁への変化を説く

9．岡本 東三、東国の古代寺院と瓦　　吉川弘文館　1966

10．石川 克博等「山王廃寺」　群馬県史　資料編2　1986

11．前沢 和之　「地域表徴としての古代石碑　山ノ上碑と放光寺をめぐって」『歴史評論　609』2001．放光寺は7世紀中期に中央政権の影響のもとで建立された東国地域での先駆的寺院とみる

12．山王廃寺跡　第7次発掘調査概報　　前橋市教育委員会　1982
A区、塔址基壇西縁部、白色粘土下土坑中から隆平永宝2．（初鋳、延暦15）
富寿神宝7（初鋳、弘仁9）が出土している。

13．実測図の検討結果による

14．右島 和夫『東国古墳時代の研究』「総社古墳群の形成過程とその歴史的背景」1994
宝塔山古墳の築造を7世紀第3四半期としているが、「その後各地に盛んに築造される截石切組積石室に対して大きな技術的影響を与えている」としている点を考慮するとその築造期は第3四半期のはじめ、いいかえれば7世紀中ころに近い時期を想定していると考えられる

15．群馬県内の瓦塔出土地名表（上西原遺跡、群馬県教育委員会　1999）によれば58カ所が挙げられている。内、瓦堂は融道寺遺跡（高崎市）、伊勢崎市昭和町で出土しているという。全国的にみても埼玉県と共に最も濃密な分布を見せている。

16．岡本 東三「東国における初期寺院の成立」東国の古代寺院所収、吉川弘文館　1996

17．N120・E8の柱穴　住居床面の貼床粘土が柱穴の上面にまで続いている。柱穴12では柱痕部でないところから瓦片が出土しているなどの矛盾点が指摘できている。

Ⅳ．山王廃寺の衰退

従来、山王廃寺の衰退については漠然と11世紀ころとされてきた。それは前橋市教委の調査での刻字瓦の出土で「上野国交替実録帳」中の「放光寺」が山王廃寺とみられること、その「上野国交替実録帳」が1030年ころ書かれたものであるという前提によったものである。しかし、山王廃寺が機能していた最終段階については、あまりつっこんだ検討はなされていないのが実状である。

そこで本稿では、遺構、遺物の状況からみた山王廃寺の衰微について、「上野国交替実録帳」の記載事項と合せて検討することにした。

１．遺構・遺物からみた山王廃寺の衰退

７次に及ぶ前橋市教委の調査でも寺の衰微についてうかがえる資料は検出されなかったが、平成９年度の調査による「廃棄土坑」の発見は寺の衰微と関連する情報を多数提供した（注１）。

①多量の炭化木材の検出

「廃棄土坑」からは多量の瓦、塑像片や土器の他、炭化木材が多数検出されている（注２）。これらの中には、柱材とみられるものが多く含まれていて、この瓦によって葺かれていた建物が火災により消滅したことを容易に想定させる。また、その建物の一つに塔本塑像とみられるものが多数検出されていることからすると、塔の損壊があったことが裏書きされている。塔は金堂と共に主要伽藍の建物であり、廃棄土坑が金堂に隣接していることも考慮すると、塔、金堂の二つの建物とも同時に焼け落ちた可能性が高い。

主要伽藍の焼失は寺としての機能を失わせるものであり、この事件が山王廃寺の衰微に深くかかわった出来事であったことは想像に難くない。

②出土土器からみた山王廃寺の焼失時期

「廃棄土坑」からの多くの出土遺物の中で、その時期を最も端的に示すのは日常雑器の示す時期であろう。それは、性格上、消耗品として扱われるものであり、伝統的に扱われる器物とは自ら取扱上の差異が生じるからである。

そうした観点で平成９年度、11年度の調査により検出された「廃棄土坑」からの出土土器を検討することにする。また７次調査のトレンチ内で検出された「瓦溜まり」とされる地点から出土した土器群おも含めてその時期を検討してみたい。

①前橋市教委、第７次調査「瓦溜り」出土土器

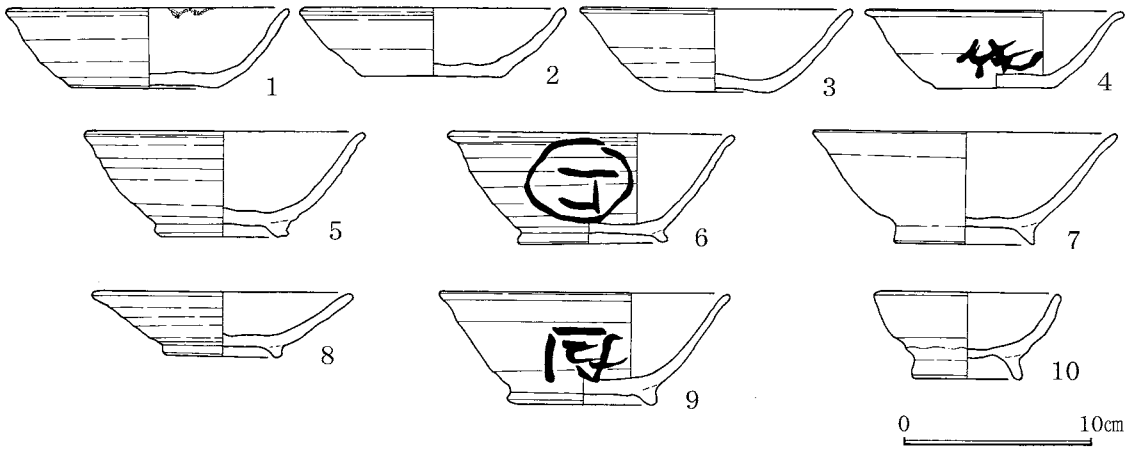
従来等閑視されてきたが第７次調査における「Ｅトレンチ」で検出された。その記述によると次のような点が指摘できよう。

ア．記述によると土器が集中して出土している。

「瓦に混じって多量の土器が出土している。完形あるいは完形に近いものだけでも60個体近くを数えることができるが、その９割強を粗製の土師器坏が占めており、興味がもたれた」との記述がある（注３）。

図示した資料は平底の坏と高台付椀であるが、全体的には胎土に夾雑物を多く含み、焼成も甘く、全体につくりは粗雑であるとの調査結果がみられ、一部酸化炎焼成の須恵器も含んでいる。

細部に注目すると坏は底径が大のものから小へ、体部口唇部が直に外開きするものから肥厚しながら外反するもの、全体的に体部が浅く直に開くものから内弯傾をみせながら深いものの相違があり、時間的な開きを思わせる。



第7次調査「瓦溜まり」出土土器

高台椀は、体部の傾向は坏と連動するが高台部は台形に強くふんばるもの、三角形状の付け高台のもの、高足高台的傾向を見せるもの等があり、やはり時期差を思わせる。

こうした多量の土器の出土の性格については近くに食事と関連した施設があったことを想定させる。その眼で墨書土器をみると9の墨書は「厨」の可能性があり、一層想定を補強しているようにも見える。

また、10の高足高台は、一群の土器の中では最も時期的に下がることが想定され、この「瓦溜り」の時期を示すものかもしれない。

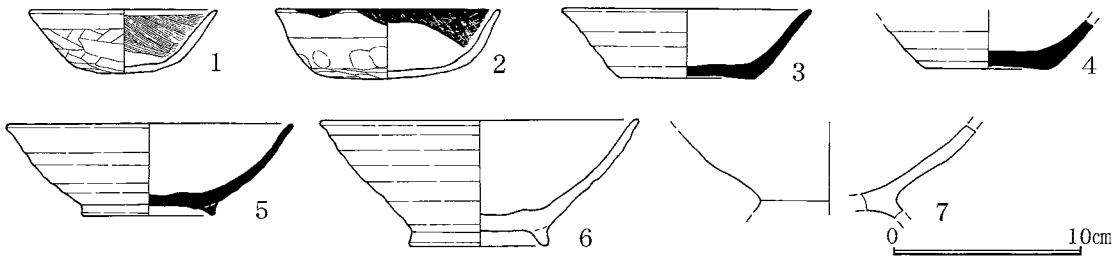
イ.「廃棄土坑」の延長上である可能性があること

この土坑の位置は平成9、11年度調査の「廃棄土坑」の南35mほどの地点である。ピットは穴の南限であること、平成9、11年度調査の「廃棄穴」が家の下まで延びていることが確実となり、南限が確認されていないことと併せて考えると、場合によってはこの「廃棄土坑」がここまでのびる可能性も否定しきれない。この想定によると「廃棄土坑」は南北50mほど、東西20m以上の非常に大きなものである可能性もある。今後の調査にまたざるを得ない（注4）。

②平成9、11年度調査「廃棄土坑」出土の土器

前に述べたように土坑調査に伴なって土器が出土している。これらの土器は日常雑器としての性格を有するものであり、消耗品的な性格をもつものであるから、時期推定にも最も有力な資料となる。

そこで、それらを図示すると次のようである。1、2は土師器であり、3、4、5は須恵器、6、7は酸化炎焼成の須恵器である。



「廃棄土器」出土土器

挿図1．小形の丸底坏で、底部が小さく、口縁部は大きく外開きする。外面は削、内面はナデで整えている。口唇部近くは横ナデで整えられているが稜（段）は消滅している。7世紀末葉の土器である。

挿図2．坏で律令期のものである。ただ体部が深く、口縁部に稜を意識した横ナデ技法がみられること、

体部から口縁部に移行する部分に丸味を有することから8世紀段階のものとみることができよう。

挿図3．糸切り未調整の坏である。灰白色を呈し、体部外面にはロクロ痕をのこしている。9世紀中葉ころの時期であろう。

挿図4．上半を欠くが底径が3より小さく、体部の立ち上がりがやや内弯気味である。時期的には3よりやや下がる。9世紀後半のものとみられる。

挿図5．高台椀で体部が深い。口径に比し、底部が小さく、その比は2.6強と大きい。高台は逆三角形の付高台で接地面が高台内側にくる。体部は内弯しながら立ち上がり、うすい口唇部はやや肥厚して外開きする。体部外面にはロクロ痕が明瞭である。時期的には10世紀後半ころのものであろう。

挿図6．高台椀で5と比較すると深みがあり、高台がやや方形気味であること、口唇端部は直に開く、口径に比べて底径は小さく、その比は2.4である。全体的に5より先行するていねいなつくりで10世紀中ころのものと考えられる。

挿図7．廃棄土坑出土のものではなく、塔址南東50m付近の道路に下水管を埋設する工事中に出土した。ここは溝が南北に道路に沿うように走り、その溝の上面は路面のように固く踏み固められていた。その上面の砂質土から出土したもので瓦器質の高足高台椀とみられる。この一群の土器は水ひされた粘土を素地に比較的ざっくりとした感じに焼かれていてややもろい。他の住居跡出土例からすると11世紀前半くらいの時期におかれるものである。

これらの一群の土器をみるとき、創建期からの土器が出土していることがわかるが、その衰微した時期を考えるにはその最も新しい時期の土器を考えることが常道である。

それでみれば、土坑からの出土で最も新しい土器は5で、その時期は10世紀後半としてほぼ誤りあるまい。これを基準とすれば土坑の埋没の時期は10世紀後半とすることができる。一方、7次調査土坑で出土した土器の中には11世紀にかかるとみられるような高足高台の様相をみせる土器も含まれている。

これらを総合して土坑出土の土器の最も新しいものの時期は10世紀も終末のころにおけると考えられる。

③降下軽石との関連

群馬県内の遺跡の時期を決定する鍵層にはいくつかあるが、廃棄土坑の上面を覆う形でAs-B軽石（浅間山を給源とする1108年降下とされる軽石）を確認した（注5）。比較的上面が攪乱されていない都丸保宅の裏庭部分では埋没した瓦、炭化材、土器、塑像等の堆積した上面にわずかな間層をおいて検出された。これでみるとあたかも直接瓦礫上面を覆うような感じもするが埋没遺物は東から西方向にかけてゆるい傾斜をみせていること、東側より西側にいくに随って層厚を増す傾向が指摘できることからすると、土坑上面東側では遺物層上面にはあまり土砂の堆積がみられなかったとみられる。

こうした状況を勘案すると軽石降下の時期と土坑を埋め戻した時期の間には意外に大きな時期的隔たりがあったと推定される。

また別に述べる土坑が径30mを超すような大規模なものであった場合も下の埋没状況と合せて軽石堆積の時期を決定するには慎重さを要求されよう。

2．文献資料からみた山王廃寺の衰退

山王廃寺（放光寺）が文献に表れるのは「上野国交替実録帳」（1030年ころ）である。九条家本『延喜式』巻16、20、32、38の裏文書で前上野介藤原家業と新任の介藤原良任との間でかわされた文書の草案である。この中の定額寺項中に次のような記述がある（注6）。

国分二寺諸定額寺仏像経論資材雑具堂塔雑舎并府院諸郡
官舎破損無実事項
　定額寺
　　放光寺
　　件寺、依氏人申請不為定額寺、仍除放已了者

ここにみられる放光寺は文字瓦の出土から山王廃寺とみられている。山王廃寺が百町までの寺田の所有を許され、その経営、資財管理について国司の関与を受ける定額寺の寺格をもつ寺であったことが判る。

この「上野国交替実録帳」は長元3年（1030）ころの作成とみられる文書で定額寺項の末部を欠損しているが、法林寺、弘輪寺、慈廣寺の名が見られる。その筆頭にかかげられた放光寺が、他寺のように建物あるいは品名の列記を欠き、無実となったものも記載されていない。氏人の申請により定額寺から除いたことのみが書かれている。この時点で寺格を変更するような大事件が生じたために定額寺からはずす措置がとられたのであろうか。先の遺構、遺物の状況でみれば、寺の主要堂塔が火災により焼失し寺としての体裁を保てなくなったのであろうか。

ところで法林寺項の金堂について

「長和3年交替日記云　　天延3年7月1日遭大風転塡倒無実　今検同前」

と書かれている。そして、長和3年交替の文言を墨で消し、他の項目に合わせた「同前」に書き替えている。これからみると定額寺項の内容は長和3年（1015）の国司交替時の記載とみていいという（注7）。この見方からすれば既に長和3年（1015）には放光寺は定額寺からはずされていたことになる。更に、その手続きと定額寺からはずすという裁可の期間も考慮すれば、放光寺が衰微したのは遡ることになろう。

3．山王廃寺の衰退の時期

前述のように山王廃寺の衰退の時期を示す資料が集積されて来た観がある。ここで、資料のもつ意味を整理し、衰退の時期についてまとめてみたい。

まず、関連する土器についてであるが、具体的には廃棄土坑出土の土器を中心に述べることとする。まず、市教育委員会7次調査の際の土坑出土土器についてみると、やや時期的に幅があることは一目瞭然である。9世紀後半ころからの遺物が出土しているが「厨」とみられる墨書土器を伴なうものは10世紀前半ころのものであろう。この時点では当然寺の一施設として機能していた「大炊屋」ないし「厨屋」が存していたことは想定される。これら一群の土器で衰退期を示すのは、最も新しい時期のものが検討の対象となる。10世紀後半ころのものも多いが、10の高台付椀が、胎土、成形、焼成の面からみて最も新しいものと考えられる。体部で下段の不明確な稜をもちながら内弯しつつ外開きする小形の体部は肉厚で、焼成も酸化炎焼成様でもろい。また、高台は高足高台への移行期の様相を見せて10世紀終末ころの時期とみられる。

また、平成9、11年度調査時における「廃棄土坑」出土の土器も、ほぼこの傾向を示している。この部分は主要堂塔に関係する遺物であるので量的には数点に止まっているが、この内挿図5は前述10の遺物に近似する時期で、高台部が貼り付け三角形高台で10世紀後半も終末に近いころのものとみることができる。

一方、文献からのアプローチでも、「上野国交替実録帳」定額寺項の記載が長和3年（1015）であるとすれば、それ以前に寺としての体裁を失っていたとみられる。まして、上野国内の最有力氏族を檀越とする寺であればしかるべきルートに従って定額寺から除く措置がとられたものとみられる。また、その記載が「交替実録帳」が書かれた長元3年（1030）の前々回の国司交替の時期の表現が盛られていることからすると、さ

らに寺の衰退はさかのぼるかも知れない。

更に、平成10年、市の水道敷設工事に伴なって調査した寺域中の回廊、東南隅部とみられる堀の上部から出土した酸化炎焼成の高台椀も、高足高台椀で、これも10世紀末～11世紀初頭ころの時期を示している。

なお、国の重要文化財に指定されている緑釉水注、椀、皿セットは、寺域推定範囲の東南隅部分に当たっており、儀式に使用されたものとみられている。美濃窯の優品としてのこれら陶器の一群は10世紀後半のものとみられている。寺との関連はいまひとつ明確ではないが、時期的には衰退期と合致する傾向が指摘される。

以上、検討してきたように、これらの資料とも10世紀末ころの時期を示している。このことから、山王廃寺（放光寺）の衰退時期は現状では10世紀末前後とするのが妥当なところであろう。

この山王廃寺の所在する付近には「昌楽寺廻り」なる地名が現存する。また、昌楽寺は現在、ここから南南東４キロメートルに現存している。これらから、山王廃寺が滅亡後、この付近に昌楽寺が新たにつくられたと考える研究者もいる（注９）。

発掘調査の結果でも、浅間Ｂ軽石層の上に据えられた礎石が検出されており、1108年以降の礎石建物の存在が確認されている。寺地として人々から聖地とみられた地は、その後も寺地として栄えたのであろう。

【注】

１．前原　豊　「よみがえる白鳳の寺　山王廃寺」　群馬文化　254号
　群馬文化地域文化研究協議会　　1998．４
　山王廃寺等Ｖ遺跡　発掘調査概報　前橋市教育委員会　2000
２．前掲　　調査報告書参照
３．山王廃寺跡第７次発掘調査報告書　前橋市教育委員会　1982．３
　瓦溜まり状ピット
　瓦にまじって多量の土器が出土している。完形あるいは完形に近いもの60個体ほど、その一部を提示した。
４．道路部分及び都丸 保宅裏庭部分を一部調査したが、東限は確認できたものの、他の辺は未確認である。
５．廃棄土坑発掘概報による
６．上野国交替実録帳
７．群馬県史　資料編４　巻末解説項
　前沢和之は上野国交替実録帳について基本的事項を踏まえつつ、詳細な分析を試みている。
８．松田　猛　「山王廃寺の性格をめぐって」県研究史　1984
９．近藤 義雄氏説等

第6章　成果と課題

折々の偶然的な発見や発掘調査の実施によって、山王廃寺に関するさまざまな情報が蓄積されてきている。平成11年度の発掘調査では大量の塑像を発見するという画期的な成果をあげた。これまでの成果をいくつかの観点にそってまとめると、山王廃寺がもつ資料的価値の高さと歴史的意義の大きさを知ることができる。同時に、当面する課題もかかえている。これらについて整理しておきたい。

1．平成11年度発掘調査の成果

(1)　遺構の性格と年代

今回の調査で発見された遺構は、山王廃寺が衰退あるいは廃絶していく過程で廃棄物処理のために掘られた穴、「廃棄土抗」である。

しかし、そこに埋められたものは、寺の中でもきわめて重要な役割を果した塑像の一群であり、廃棄というより埋納されたような状況であった。

塑像が埋められた時期については、第五章第2節「山王廃寺の創建と衰微」(105頁)に井上唯雄氏の考察があり、10世紀の後半と推定されている。その根拠として、塑像片とともに10世紀後半と比定される土器が含まれていること、穴が埋められ後、天仁元年(1108)の浅間山噴火による軽石(AS-B)が降下堆積していることなどをあげている。

この穴の中に埋められたものは、大半が塑像片並びにそれと一体的に構成されたとみられる背景の破片である。さらには、瓦片、壁材片、土器片等である。埋土中には焼土、炭化物等が細片となり大量に混入していた。塑像片、壁材片、瓦片等にも焼けた痕跡が認められ、山王廃寺が火災に遭って建物とその内部を構成していた仏像・什宝等が焼けたことが窺える。すなわち、山王廃寺の主要な建物が焼け建物内にあった塑像群が崩落し溶変したため、瓦片などともに大きな穴を掘って廃棄したとみられるのである。瓦を下にし、塑像片を入れた後その上にまた瓦を置くなど、埋納するがごとく埋められていた。

このような廃棄埋め立てが行われたのは、上述のとおり、おおむね10世紀後半のこととみられる。

(2)　塑像群の発見

塑像群の発見は極めて重要である。従来からその存在は知られていたが個体数が少なくその性格等を論議するには至らなかった。しかし、大量に発見された塑像片から多くの仏像とその背景の存在が確認され、これらの性格について論究できる資料の蓄積がなされた。

松田誠一郎氏を中心とする研究グループにより塑像片1点ずつ精緻な分析と考察が第5章第1節に詳述されている。こうしたまとめがなされたことは山王廃寺の研究に新しい側面を切り開く画期的な成果である。

松田氏の研究成果は「総括と問題点」(72頁)の項でまとめられているが、「1．総括」①～⑪からその要点をまとめて再掲するとつぎのとおりである。

・これらの塑像が寺院の主要伽藍の一つである塔の初層の基部を荘厳した、いわゆる、塔本塑像の一部である。

・中央における作例と共通した本格的な製作技法を用いているが、用材は現地調達されたと推測され、現地

で造られたと見られる。

・主題については、仏伝中の降魔成道・涅槃など法隆寺や薬師寺の塔本塑像と類似した場面選択をしている。

・群像の中には神将立像が少なくとも5体はあり、八部衆像の存在も推定される。神将像の甲制は天平6年(734)の興福寺八部衆立像に最も近く、服制にも8世紀第2四半期の作例に共通する特徴が確認できる。菩薩像の胸飾り形式も8世紀前半に位置づけて矛盾がない。

・作風については、和銅4年(711)の法隆寺塔本塑像から740年代の東大寺法華堂・戒壇院の塑像・乾漆像へと至る写実形式の展開過程に位置づけることができる。

・彩色文様にも8世紀前半の特徴が見られる。

以上の所見から、山王廃寺の塑像は、法隆寺や薬師寺の塔本塑像と比較しても遜色ない優れたもので、作者は中央から派遣された官営工房系の仏工であり、その制作年代は8世紀第2四半期、730年前後と考えらる。

上述のように、これら塑像の資料的な価値は極めて大きいものである。これらは、後世の造り替えや後補などはないとみられ、天平期の特徴ある造りを呈している。全国的に見ても天平期の塔本塑像が遺存している例は稀少であり、歴史的価値の高いものである。

山王廃寺は、東国の一地方の寺院であるが、出土した塑像はきわめて中央的なもので地方色に乏しいという。これは、山王廃寺の造営と塑像の安置が中央の最高水準の寺院造営と仏像制作技術によるもので、こうした技術力を直接的に支配、あるいは、導入できる立場にあった権力者よってなされたと考えられる。

(3)　瓦等その他の遺物の概要

従来までの発掘調査において、多種多量の瓦が出土しており、その概要は既刊の報告書に掲載されている。また、地元の人々が、折々に採集し、保管している瓦の種類も多岐にわたっている。今回の発掘調査で出土した瓦は、すでに知られている瓦の種類の範囲におさまるものである。

創建期のものと見られる素弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとして、複弁八葉蓮華文軒丸瓦・複弁七葉蓮華文軒丸瓦・単弁六葉蓮華文軒丸瓦・単弁四葉蓮華文軒丸瓦など7世紀後半から9～10世紀に至る各種の軒丸瓦が散見される。軒平瓦も三重弧文軒平瓦をはじめ重弧文系のもの、唐草文軒平瓦等が見られる。鬼瓦片数片も認められる。これらも軒丸瓦と同じ年代の幅が考えられる。上野国分寺出土瓦と同種の瓦が認められ、国分寺供給されたと同種のものが補修用として山王廃寺にも供給されていたことを窺わせている。

また、文字瓦も各種認められる。人名や氏族名らしきもの記号・符丁らしきもの等もあるがその性格の考察については慎重に進める必要がある。それは、1文字乃至は2文字のものが大半でその性格の見極めがなかなか難しい。また、国分寺出土ものと共通するものがあることから、国分寺出土品との関連も考慮に入れなければならない。

ただ、今回の出土品の中に、明らかに年号と見られるものが1点認められることは注目に値する。「天長」と記されており、年号とすれば、この瓦が造られたのは西暦824年～832年の間で9世紀第2四半期に限定され、このころ、補修が行われた際に使用されたと見られる。また、従来より、文字瓦は9世紀頃のものとの推定されていたが、それに対して一定の回答を与える発見でもある。この遺跡から、先に「放光寺」なる文字瓦が出土しているが、この文字瓦についても9世紀頃と推定したが、確からしさを高めたといえる。塔跡の調査をした際に、皇朝十二銭の隆平永宝(796)・富寿神宝(818)が基壇中に認められ、この頃、塔の補修がなされたと推定しているがこの見解とも一致する。

ちなみに、9世紀初めの上野国に関する歴史的な出来事というと2件が記録されている。一つは、弘仁9年(818)大地震があり甚大な被害があった。もう一つは、天長3年(826)に上野国は上総・常陸とともに親王任国となり国守には親王を任じ太守と称するようになった。補修とこれらの出来事との関連の有無は定かでないが、9世紀前半の寺の補修は弘仁9年の地震と関連があるかもしれない。。

廃棄土坑出土土器については前項でも述べたように、一番新しいものでも10世紀後半である。

2．山王廃寺の歴史的意義

上述したように、現在までに明らかになったことはごく一部でしかないが、山王廃寺が高い資料価値をもつ遺跡であり、歴史的意義もまた深いものがある。

(1)　古墳文化から仏教文化への過渡期の所産

(2)　金石文や文献史料と接点をもつ遺跡

(3)　古代国家形成期を知る遺跡

おおむねこの3点に集約できるのではなかろうか。以下、これらの点について若干の説明をする。

(1)　古墳文化から仏教文化への過渡期の所産

上毛野地域の古墳文化が終末期を迎えるのは7世紀後半のこととされている。総社古墳群中の宝塔山古墳、蛇穴古墳がその代表的なものであり、特に蛇穴山古墳は最終末とされている。いずれも方墳であり、截石切組積の精巧な横穴式石室を有している。両古墳の石室の石材加工技術は山王廃寺の塔心礎や根巻石・石製鴟尾のそれとの類似性・関連性が指摘されている。加えて、宝塔山古墳石室の家形石棺の格狭間は仏教の影響を受けたものである。早くから石室が開口され副葬品は不明であるが、石室の構築方法を見るだけでも卓越した技術力と権力を類推させるものがある。地理的な位置関係や年代観からしても、この両古墳と山王廃寺の造営者は同一の氏族と見ることが妥当であり、総社地区に勢力を伸ばした豪族がかかわっていたと見られる。この豪族は古墳文化の終焉と初期寺院の造営という歴史上の画期にかかわっていることに大きな意味があるといわなければならない。

すなわち、遺跡が古墳の最終末期、また、仏教文化の受容期としての側面をもつ。古墳文化と仏教文化はそれぞれ独自の研究方法や体系をもっているが、遺跡が両者にかかわる接点をもつ点で資料的な意味が大きい。

群馬県内には山王廃寺のほか、上植木廃寺・寺井廃寺等初期寺院跡がいくつかあるが、山王廃寺は県内で最も古い寺院跡の一つであることに間違いなく、東日本全体を見渡しても本格的な伽藍をもつ初期寺院跡として重要である。

(2)　金石文や文献史料と接点をもつ遺跡

次に資料的な意義について触れておこう。遺跡の調査であるから、考古学的な手法による成果を大切にしなければならない。現在までに、石製品・瓦類・土器類・金属製品・塑像片等、さまざまな遺物を蒐集してきている。遺構や遺物をもとにして資料を整理しながら究明していかなければならない。

さらに、他の性格の違う資料との間に接点が認められれば、それも援用して考察の幅を広げていくことができる。

さて、この遺跡からは「放光寺」「方光」と記された文字瓦が出土したことはすでに述べた。主要伽藍に使用された瓦に記されていたのであり、この文字瓦は9世紀中頃のものとされるものである。こうした文字瓦は、屋根瓦の補修時に葺かれたものであり、古代において放光寺と称される寺名であったことはほぼ確実である。

ところで、高崎市山名町に所在する山上碑銘に「放光寺僧」と記されている。同碑文の冒頭には「辛巳歳」とあり、681年に相当するという。平城京が造営される以前の7世紀後半に上毛野地域に放光寺という寺があり、僧侶としての活動が行われていたことがわかる。

また、長元3年(1030)頃の国司交替にかかる引継文書の草案の断簡とされる「上野国交替実録帳」の定額寺項に「放光寺　件寺、依氏人申請不爲定額寺、仍除放已了者、」とある。平安時代、国司の引継事項の対象となる寺に放光寺の名が見える。

これら3つの資料は、古瓦と石碑銘と古文書という全く異質な資料であること、古代資料とはいえ年代もかなり離れていることにまず留意しなければならない。

しかし、年代も性格も異なる資料であるが、三者に共通することは、いずれも上毛野地域に関する資料でその記述に「放光寺」という古代寺院名が認められることである。

まずは、三者に見える放光寺が同一の寺を指すものとして矛盾はないかという資料取り扱い上の基本的な問題が横たわっていることは忘れてはならないが、以下に示すことなどから山王廃寺が放光寺を指すとしてよいであろう。

①山王廃寺の考古学的所見から、7世紀後半から10世紀後半もしくは11世紀初にかけて寺が存続していたとして矛盾はない。

②何度か寺が補修された形跡があり、9世紀ころの補修瓦も大量に発見されている。「放光寺」銘瓦もその一つである。遺跡が示すとおりさまざまな秀逸な遺物が出土しており、並外れた寺であったことは確実であり、他に放光寺という寺がありそこから転用されたとは考えにくい。

③山王廃寺、山上碑、上野国交代実録帳、いずれも上毛野地域にかかわる第一級の資料である。「放光寺」は当時格別な存在意義をもつ寺であったからこそ文字に遺されたのであり、山王廃寺が示す様相は、相応であるとみられる。

ところで、山王廃寺とは現在の地名に因んだ遺跡名称であり、古代の寺名そのものではない。古代の寺名が特定できるという点でも数少ない希有な事例と言える。

これらのことは、山王廃寺の解明に山上碑銘や上野国交代実録帳が大きな役割を果たすだけでなく、それぞれの資料解釈に山王廃寺解明の成果が援用できるということでもある。

いうまでもなく、山上碑は国特別史跡、上野国交替実録帳は国宝とされている『延喜式』の紙背文書である。上野地域に関する第一級資料であると同時に、古代史に関する重要資料間に関連づけができ、具体的な遺跡として特定できるという点で貴重なことといわなければならない。

(3)　古代国家形成期を知る遺跡

以上述べてきたように、総社の地域に勢力を張り、上毛野地域全体にも影響力をもつ豪族が古墳を造り寺院を建てたと考えられる。

しかし、山王廃寺が建立されたのは中央から遠く離れた東国の一地方であり、中央の影響を強く受けて建立されていることに疑いない。山王廃寺がもつ内容がきわめて高度で中央的であることからすれば、この寺

が中央政府の意図が強く働いた政策がもとになって人材が送り込まれ選地されたとも考えられる。単に地方で勢力を張っていた豪族がいたというだけではこれだけの高度で中央的な文化を導入できることにはならないであろう。中央政府に、相当の位置を占める人物の関わりがあってなし得たことと考えられるのである。

いずれにしても、強大な勢力をもつ者が建立に関わったと考えられる。

中央と地方の両者の側面をもつ氏族という観点からすれば上毛野氏が関わっていたのではないかとも考えられるのである。

また、山王廃寺創建期以前には、古墳時代の豪族居館的な建物が検出されていると井上氏が第5章第2節（97頁）で指摘しているように、有力者階層の居宅であったところに寺が建てられている点にも注意が必要である。

また、山王廃寺に隣接した地域には、後に、上野国府や上野国分寺・尼寺など律令期の中心的な機関が形成されていったのである。中央集権的な地方の諸機関・施設が置かれていく背景には山王廃寺の造営者が中央の意図を体して地方支配を具現化していくうえで中心的な役割を担っていたと考えられるのである。

山王廃寺が建立された7世紀後半は、古墳文化から仏教文化への過渡期、同時に、律令政治が整っていく時代にあたる。

わが国の律令政治はどのように展開したのか。中央の様子や制度上のことはある程度の解明が進んでいるが、地方における具体的な展開はなかなかわかりにくい。この山王廃寺の解明がすすめば、7世紀後半の古墳時代末期の様相、地方における初期寺院建立の背景、あわせて、国府や国分寺等成立の過程、中央権力と地方豪族との関係等、上毛野地域の具体像を通して、地方に律令政治が浸透し古代国家が形成されていく様相が明らかにされる可能性がある。

さらに、上毛野地域が東国の北辺に位置し、東北経営の要衝であったという地理的位置と時代的背景を考えると、上毛野地域に時の中央政府は大きな関心を払っていた。そうした中にあって、この時代の上毛野地域の政治や行政の体制が整備され機能していったことと山王廃寺の建立はどのような関わりがあったのだろうか。そうした課題にも回答を与える可能性を秘めている。

山王廃寺は、古代国家形成期の遺跡として大きな意義をもっている。

3．今後の課題

(1)　伽藍配置や寺域、性格の解明

前項で触れたように山王廃寺がもつ歴史的意義は大きなものがあるといえる。したがって、この遺跡を保存し活用することを考えなければならないが、遺跡そのものの解明が十分にはすすんでいない。

まずは、考古学的手法によって、山王廃寺の伽藍配置・寺の施設が及ぶ範囲を特定すること、あわせて、どんな性格の寺であったのかを解明しなければならない。

遺跡地は、早い時期から心礎がある日吉神社を中心に農村集落が形成され、住宅密集地となっていた。それがために、伽藍配置や寺域の解明が困難な状況に陥っていた。加えて、新たな開発が進んできており、この点の解明は焦眉の急を要する課題である。

これまでに発見されている遺構を手がかりとして、その広がりを追究していくことが必要である。

時々の開発に迫られる事前調査でなく、遺跡の保存と活用を前提とした、積極的な意味づけをした調査が必要と考える。長中期的な展望をもった組織的な取り組みをすることが大切である。

(2)　遺跡の保存と活用

このような貴重な遺跡を保存・活用しながら次代に引き継いでいくための方策を講じること、すなわち、関係諸機関と連絡・調整を図りながら必要な箇所を調査した上で、まずは遺跡を保存することが必要ではなかろうか。

現在、遺跡の上に生活をしている地元の方々の理解と協力も得なければならない。

また、これまでに収集されている貴重な遺物も確実に保存し活用できるようにしていくことも必要である。市教育委員会が発掘調査して収集したものは整理保管されているが、それ以外の公的機関や民間で収集・保管されているものもある。民間で保管されているものにはその重要性について啓発し、保存と活用について認識を深めてもらうことも大切と考える。

(3)　山王廃寺研究の進展に期待

山王廃寺は上野国の古代史を明らかにする上で重要な位置を占めている。山上碑や上野国交替実録帳など、第一級の資料との関わりを示している。山王廃寺の究明が進めば、関連してこれら資料の解明も進むであろうし、同時代の遺跡を解明することにつながるなど果たす役割は大きいといえよう。

さらに、地方から日本古代史の一端を明らかにする可能性を秘めた資料的価値の高い遺跡といえる。

1　菩薩像胸部　9A80336　断面(接合前)

1　菩薩像胸部　9A80336 下面(断面)

2　菩薩像または天部像垂髻　11A962718　背面

2　菩薩像または天部像垂髻　11A962718　右側面

2　菩薩像または天部像垂髻　11A962718　上面

4　如来倚像または菩薩倚像膝部　11A962670　裏面(断面)

4　如来倚像または菩薩倚像膝部　11A962670　右側面

4　如来倚像または菩薩倚像膝部　11A962670　左側面(小断片未接合)

5　如来像または菩薩像左脚部　11A962764　左側面

5　如来像または菩薩像左脚部　11A962764　裏面

7　神将像右上半身　11A962825　背面右斜側面

7　神将像右上半身　11A962825　断面

6　神将像頭部　11A962820　右斜側面

6　神将像頭部　11A962820　背面

6　神将像頭部　11A962820　上面

6　神将像頭部　11A962820　下面(断面)

8　神将像右肩・右上腕部　11A962749　正面

8　神将像右肩・右上腕部　11A962749　背面

8　神将像右肩・右上腕部　11A962749　鰭袖斜格子文

8　神将像右肩・右上腕部　11A962749　下面(断面)

9　神将像左肩・左胸部　11A962761　側面

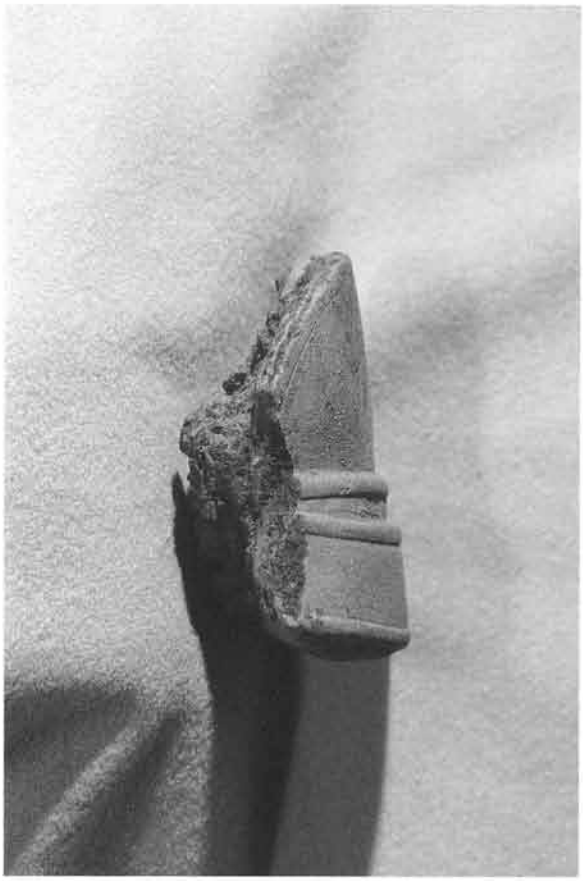
10　神将像背面左肩部　11A962748　下面(断面)

10　神将像背面左肩部　11A962748　裏面

12　神将像肩甲・鰭袖　11A962713　下面(断面)

13　神将像鰭袖　11A962711　斜側面

14　神将像右胸部　11A962731　裏面(断面)



17　神将像腹部　11A962753　右側面

20　神将像右腰部　11A962702　裏面

20　神将右腰部　11A962702　裏面(断面)

21　神将像左腰部　11A962750　裏面(断面)

23　神将像右前腕部　11A962756　上面

23　神将像右前腕部　11A962756　内側面

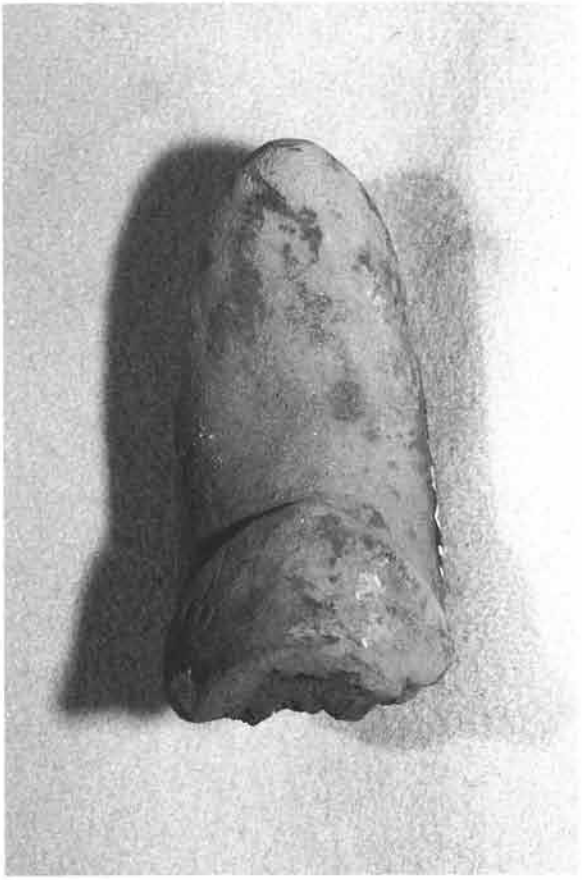
24　神将像左前腕部　11A962762　内側面

24　神将像左前腕部　11A962762　上面(断面)

24　神将像左前腕部　11A962762　下面

25　右手先　11A962715　手首断面

27　神将像沓先　11A962716　底面



27　神将像沓先　11A962716　上面

28　神将像(集合)　七分身正面

28　神将像(集合)　七分身右斜側面

31　比丘像上半身　9A80335　正面(胸片なし)

31　比丘像上半身　9A80335　胸部剥離断片

31　比丘像上半身　9A80335　上面(断面)

31　比丘像上半身　9A80335　下面(断面)

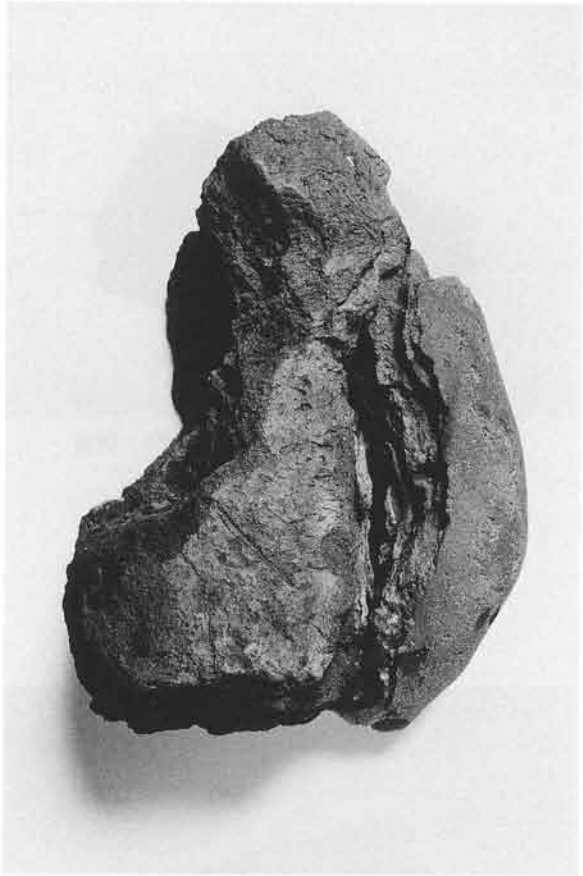
33　女性像頭部　11A962821　右斜側面

33　女性像頭部　11A962821　左側面

33　女性像頭部　11A962821　上面

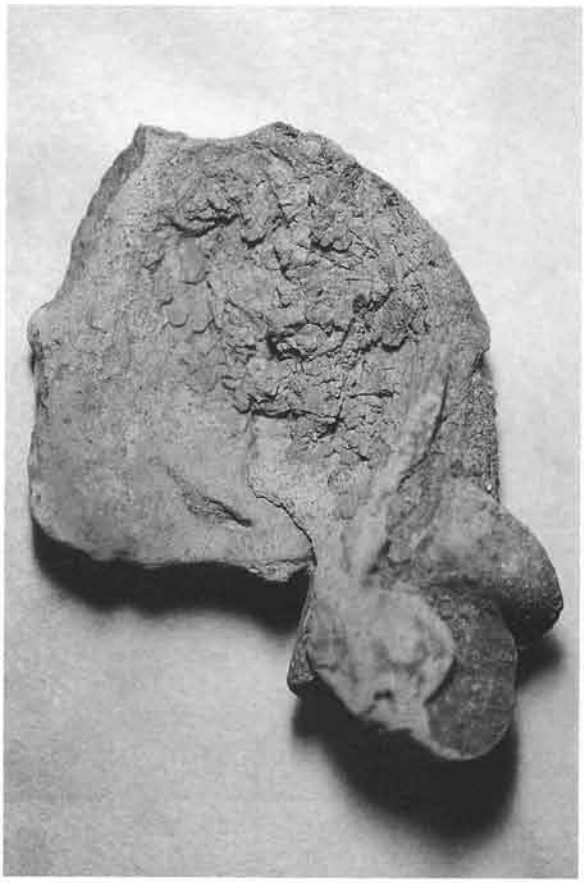
33　女性像頭部　11A962821　下面

35　女性像胸部　11A962763　下面



37　胡人像上半身　11A962823　背面

36　女性像上背・左上腕部　11A962765　背面左斜側面



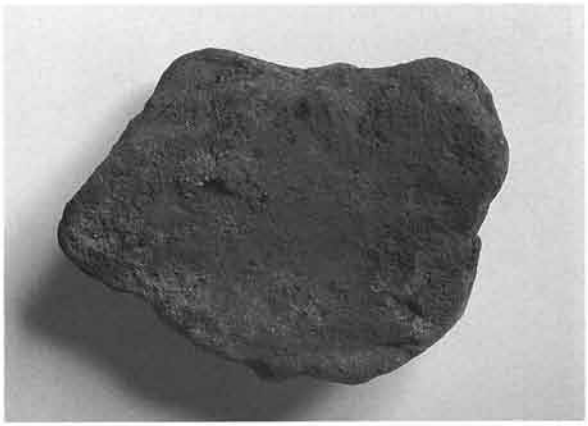
36　女性像上背・左上腕部　11A962765　裏面

39　左足先左半部　11A961871　側面

39　左足先左半部　11A961871　下面(断面)

42　衣部　11A96923　表面

43　衣部　11A962693　表面



44　衣部　9A80290　裏面

45　衣部?　11A962789　表面

46　衣部？　11A962757　表面

46　衣部？　11A962757　断面

49　猪頭部前半　9A80311　下面斜め見上げ

49　猪頭部前半　9A80311　断面

52　動物頭部？　11A962581　表面

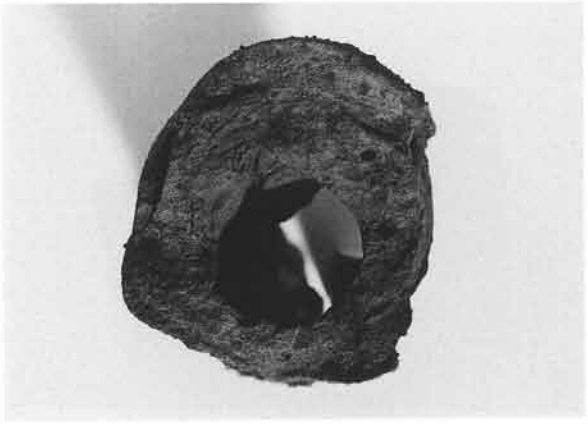
52　動物頭部？　11A962581　表面

54　棒状の断片(小像の腕?)　9A80304　表面

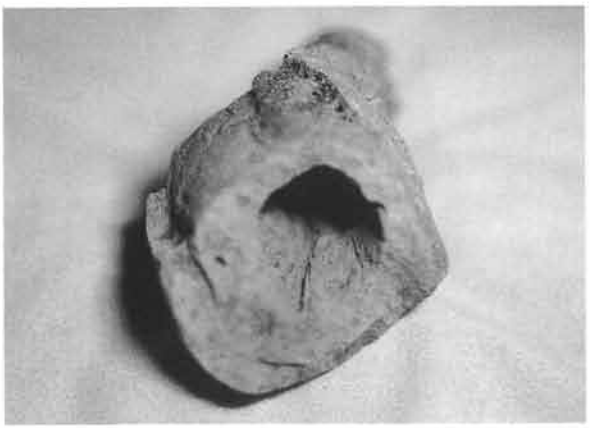
54　棒状の断片(小像の腕?)　9A80304　断面

54　棒状の断片(小像の腕?)　9A80305　表面

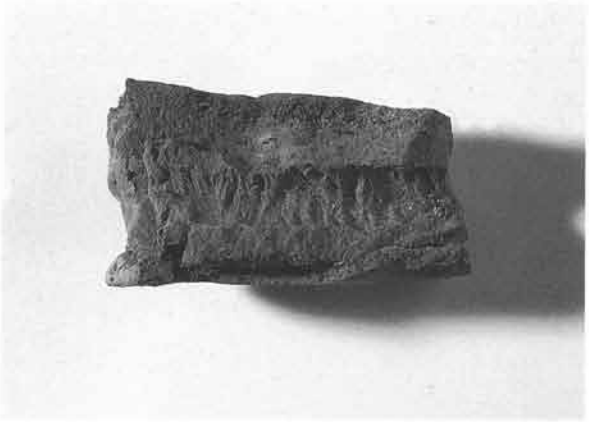
54　棒状の断片(小像の腕?)　9A80305　断面



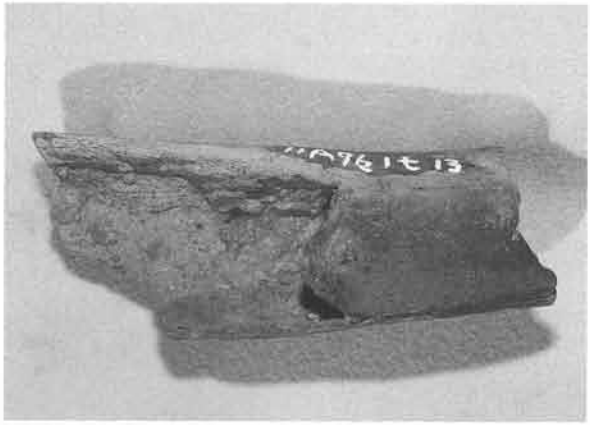
55　筒状の断片　11A962759　断面



55　筒状の断片　11A962759　心孔内面



56　半円筒状の断片　11A962745　断面



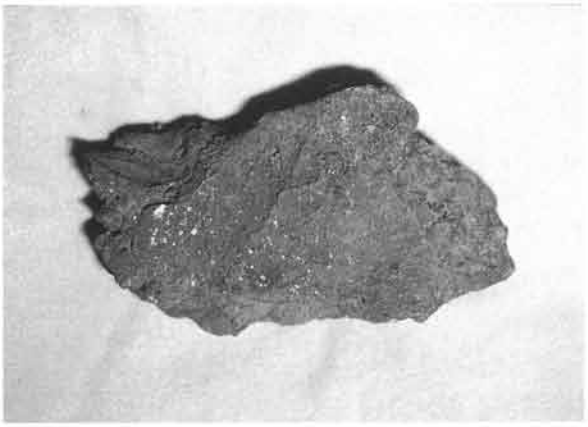
57　筒状の断片　11A962671　裏面

58　三角状の断片　11A962692　裏面

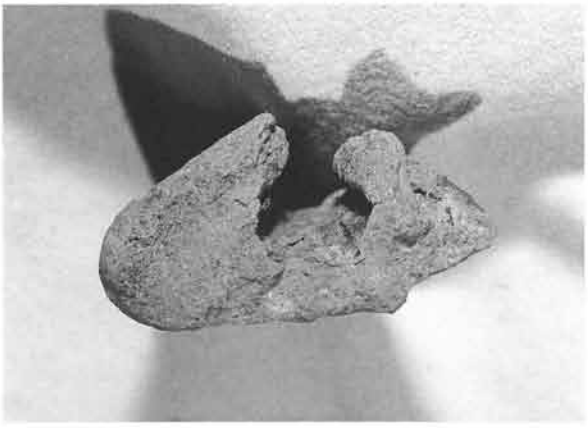
59　直方体状の断片　11A962728　表面

62　稜線のある断片　11A962800　裏面

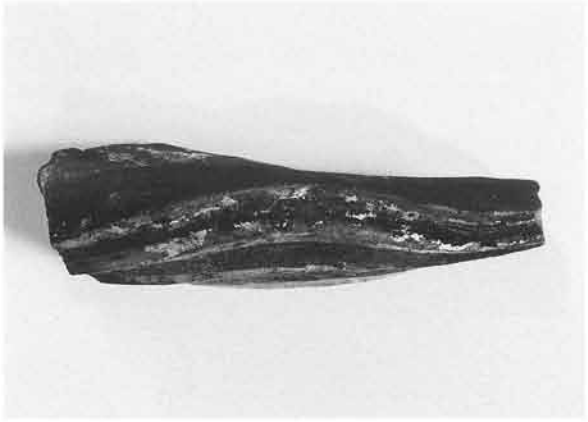
63　稜線のある断片　11A962729　表面



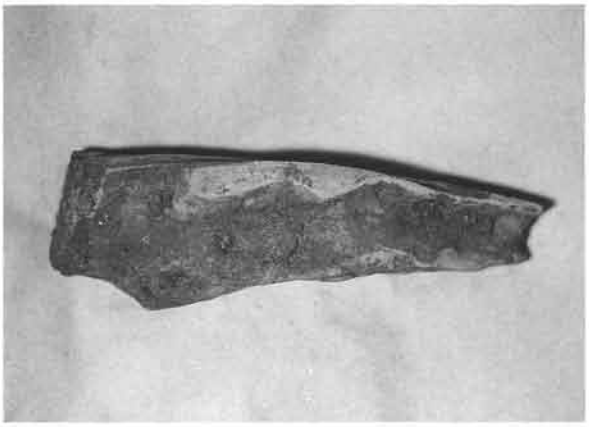
64　飛雲頭部　11A962730　裏面



65　飛雲脚部　11A962717　断面

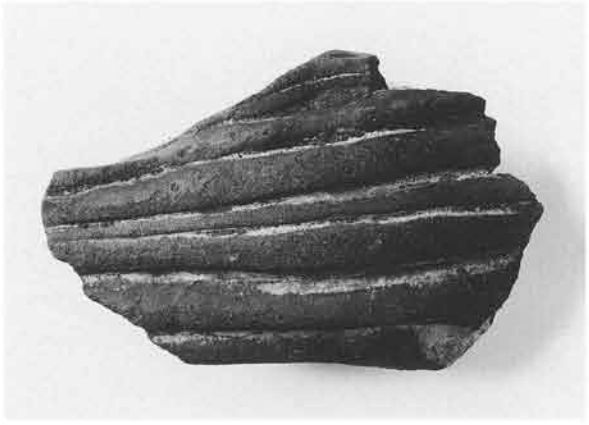


66　飛雲脚部　11A962752　表面



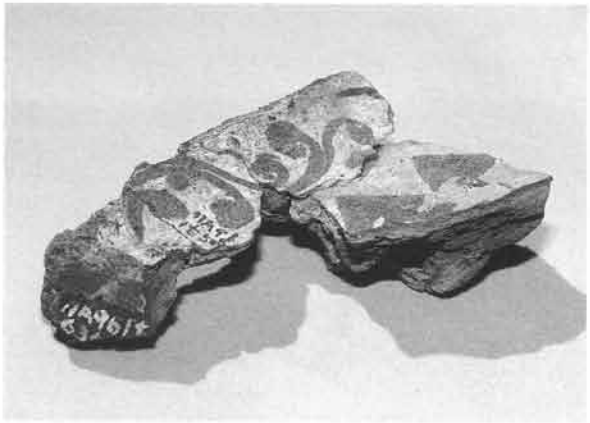
66　飛雲脚部　11A962752　裏面

67　飛雲脚部　9A80309　断面



70　飛雲脚部／磯形？　9A80332　表面

71　箱形天蓋(集合)



72　箱形天蓋　11A962720+11A962809　表面

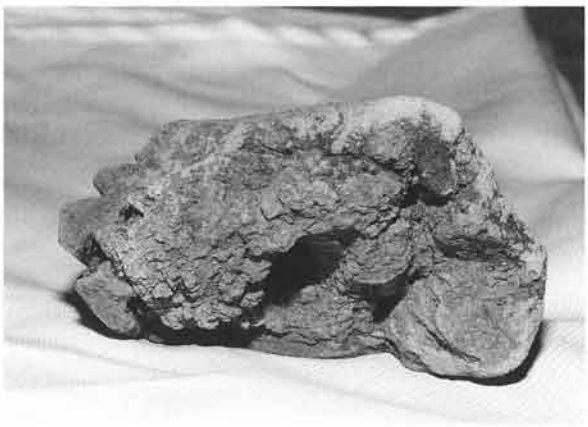
73　箱形天蓋　11A962724　表面

73　箱形天蓋　11A962724　断面

78　箱形天蓋　11A962802　表面

78　箱形天蓋　11A962802　断面

80　山岳頂部　11A962767　断面



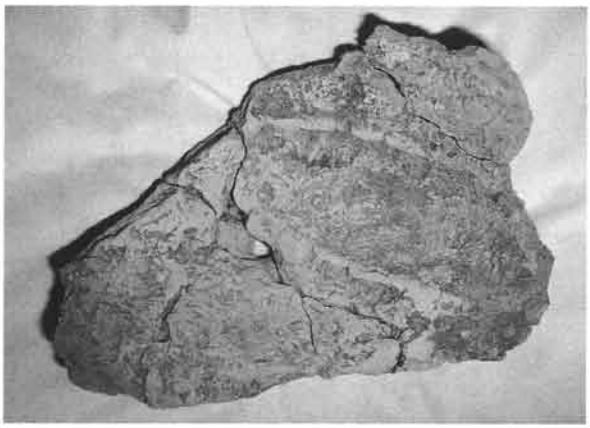
80　山岳頂部　11A962767　断面

81　山岳頂部　11A962699　正面

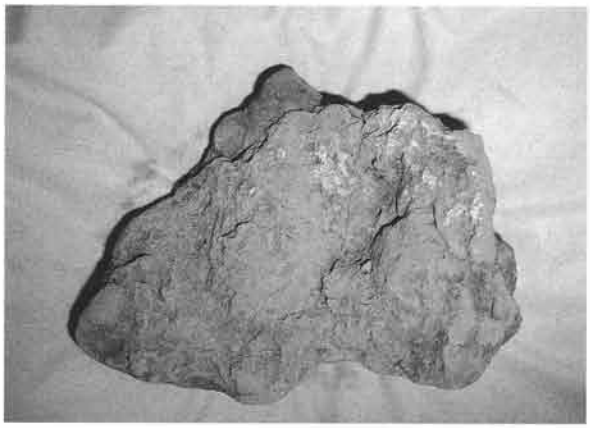
81　山岳頂部　11A962699　背面

82　山岳頂部　9A80334　正面

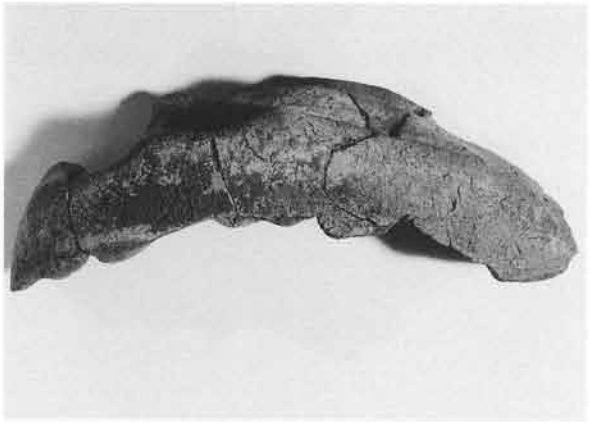
83　山岳頂部　11A962695　側面



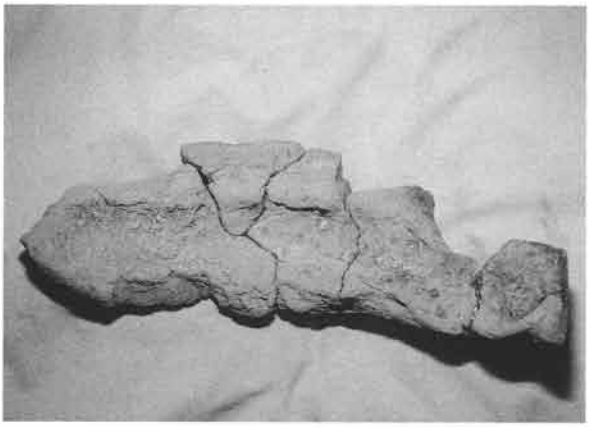
84　磯形　11A962827　裏面



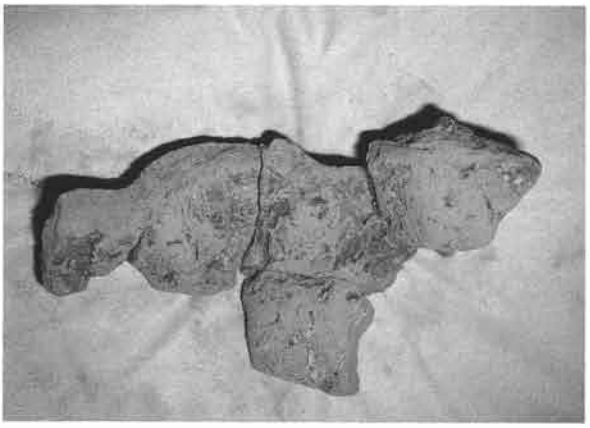
85　磯形　11A962538　裏面



86　磯形　11A962701　表面



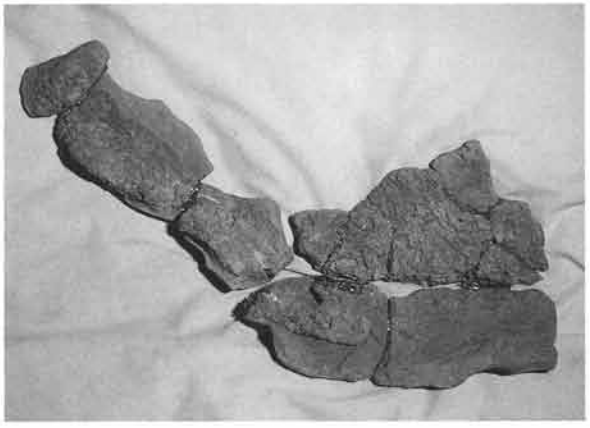
86　磯形　11A962701　裏面



87　磯形　11A962697　裏面

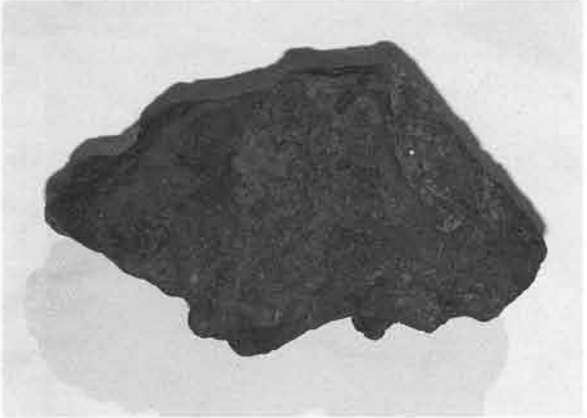
88　磯形　11A962709　側面

89　磯形　11A962704　表面



89　磯形　11A962704　裏面

90　磯形　11A962703　表面



90　磯形　11A962703　裏面

91　磯形　11A962694　正面

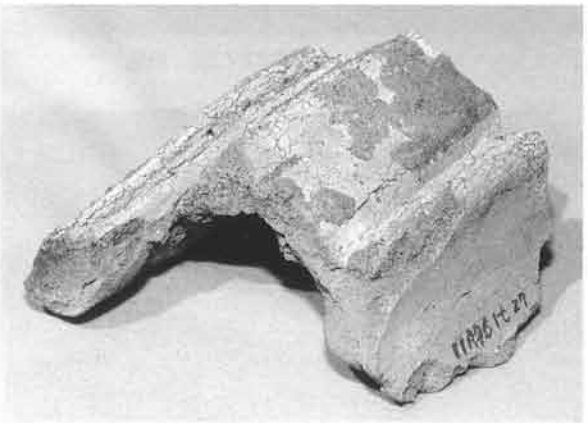
91　磯形　11A962694　側面

92　磯形　11A9629　表面

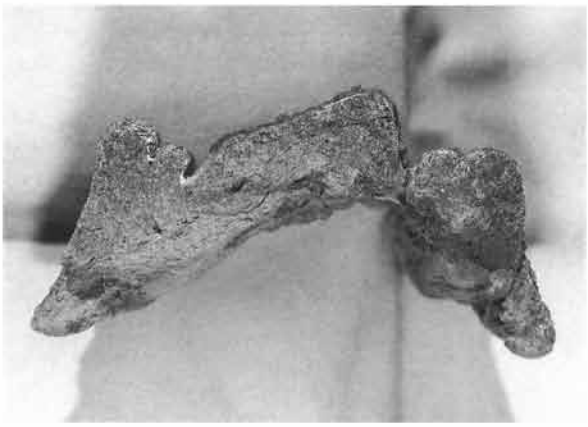
92　磯形　11A9629　裏面

93　磯形　11A9628　表面

94　磯形　11A962766　表面

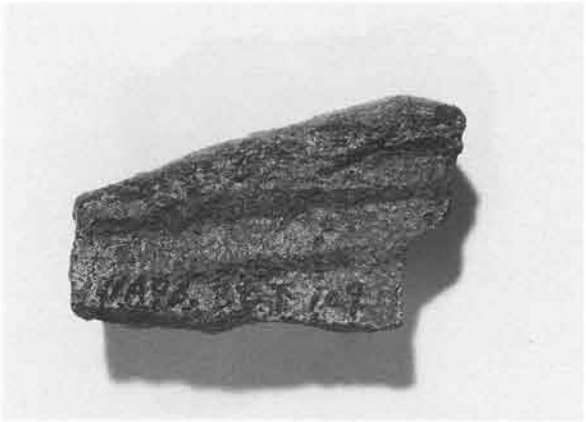


95　彩色の残る磯形　11A962708＋11A962726
斜めからの全景



95　彩色の残る磯形　11A962708＋11A962726
断面

98　壁画　11A962733　表面

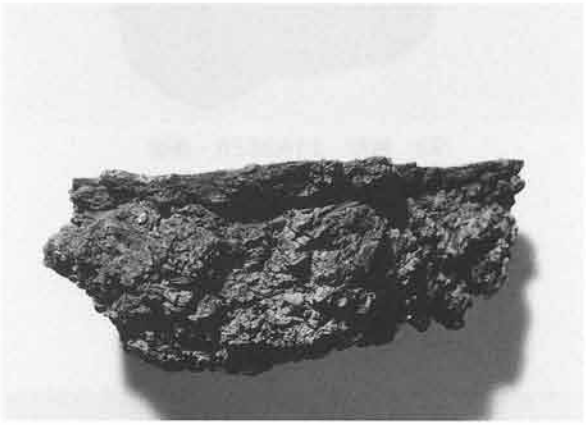


99　壁画　11A962737　表面

100　壁画　11A962734　表面

101　壁画　11A962736　表面

102　壁画　11A962732　表面

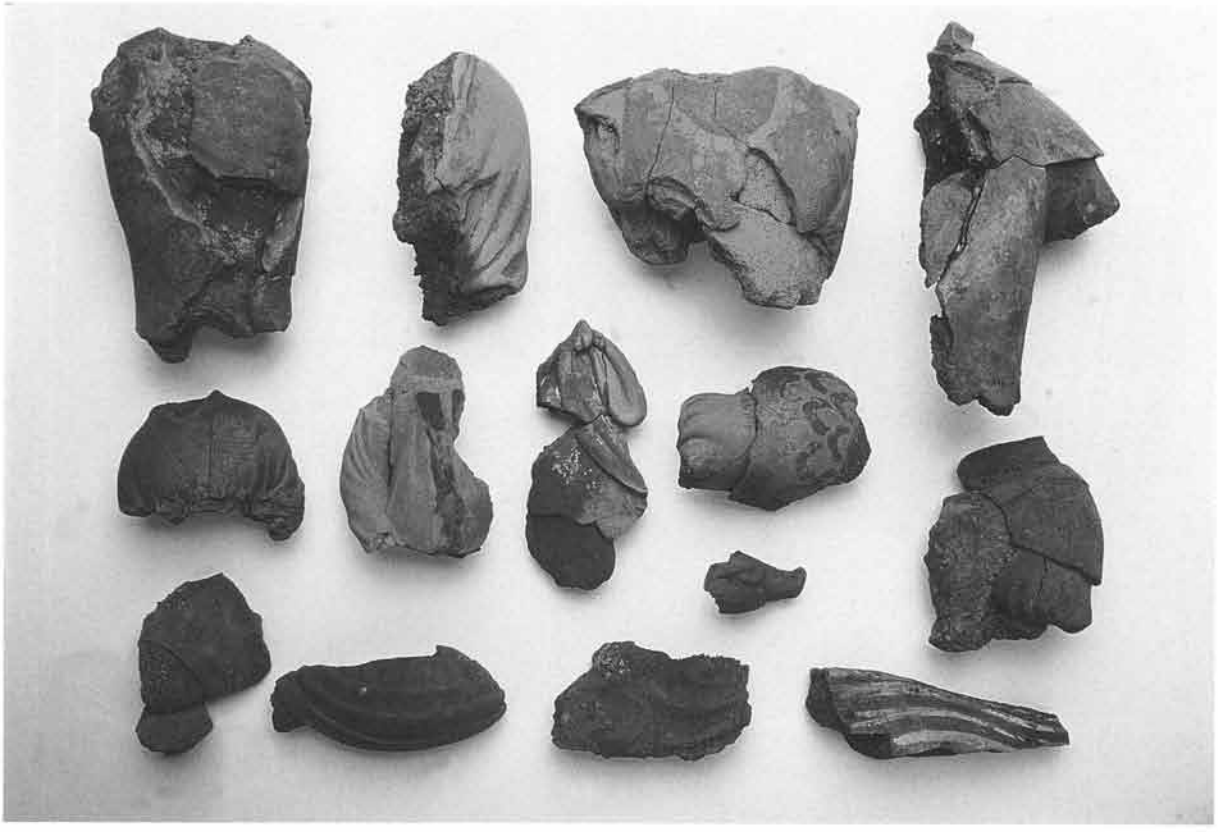


102　壁画　11A962732　断面

103　壁画　11A962735　表面

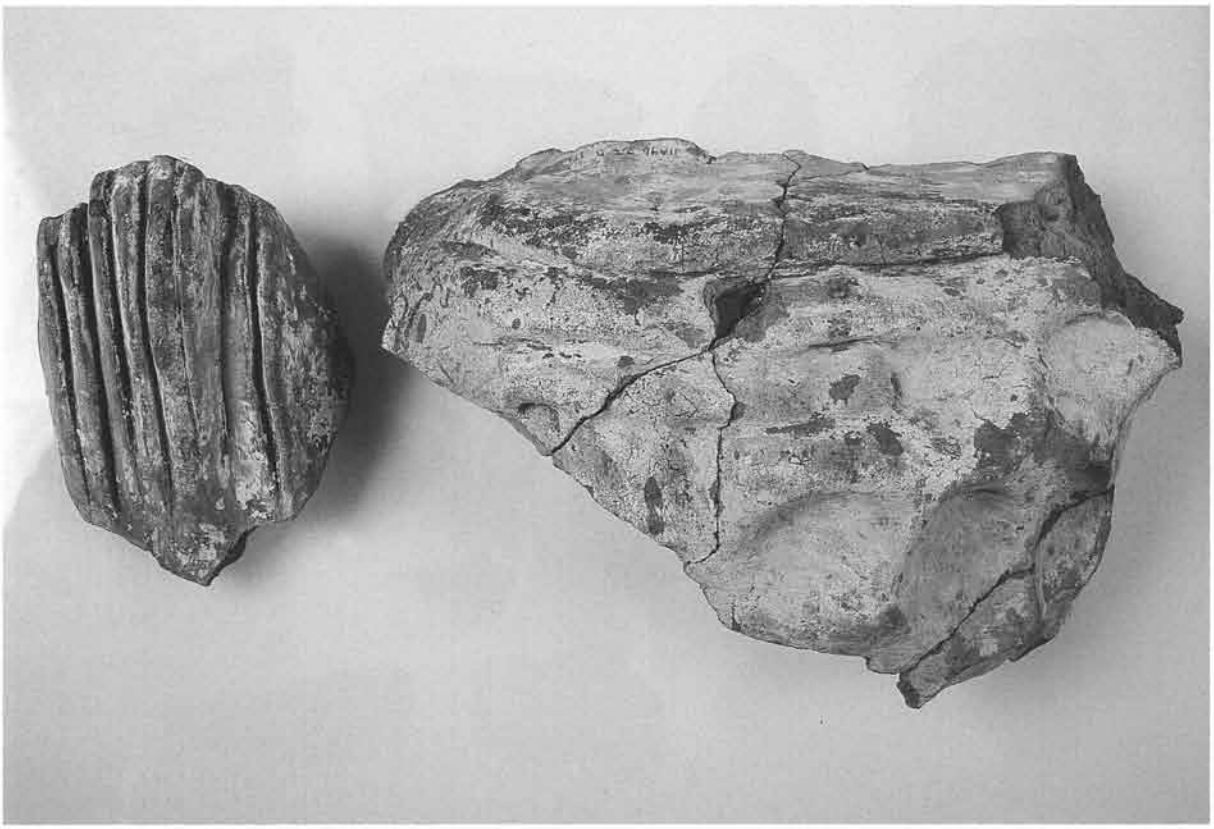
103　壁画　11A962735　断面

104　頭部・面部(集合)　3点全景



105　体部ほか(集合)　14点全景

106　文様のある断片(集合)　9点全景



107　山岳・磯形(集合)　2点全景

108　銅製懸裳?　11A962760　正面

108　銅製懸裳?　11A962760　裏面

108　銅製懸裳?　11A962760　上面

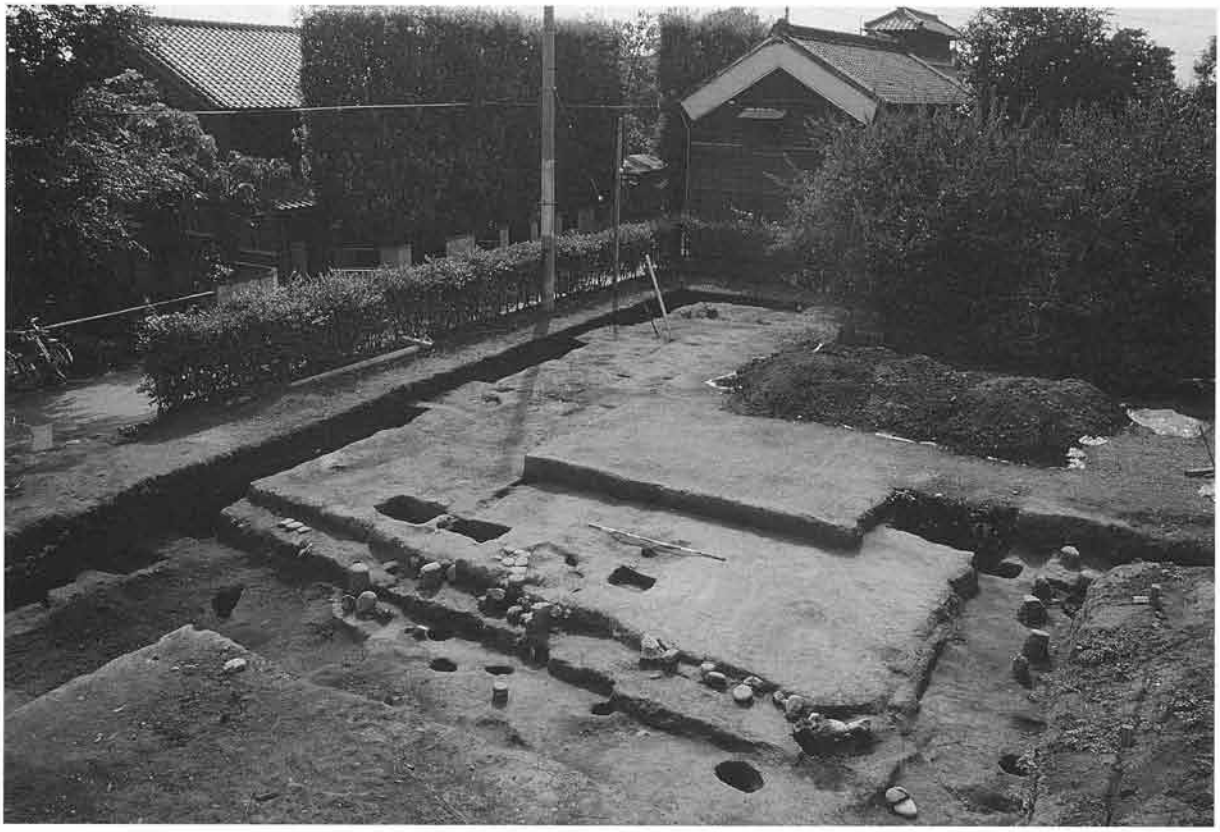
109　銅製蓮弁　9A80315　表面

110　銅製框座　11A962668　側面

110　銅製框座　11A962668　上面

111　金銅製帯状金具　9A80316　表面

112　風鐸上部　9A80296　表面

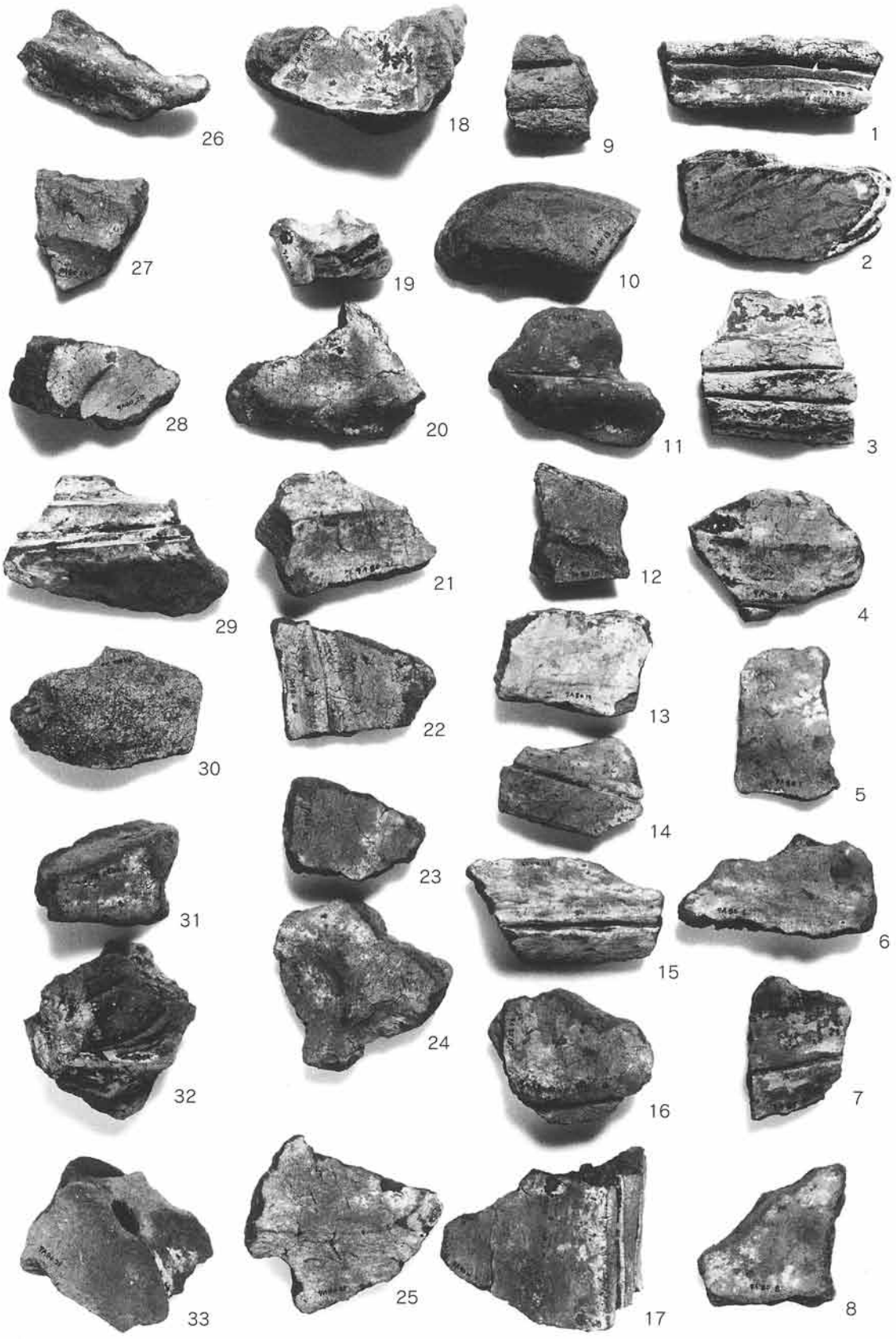


113　西側基壇

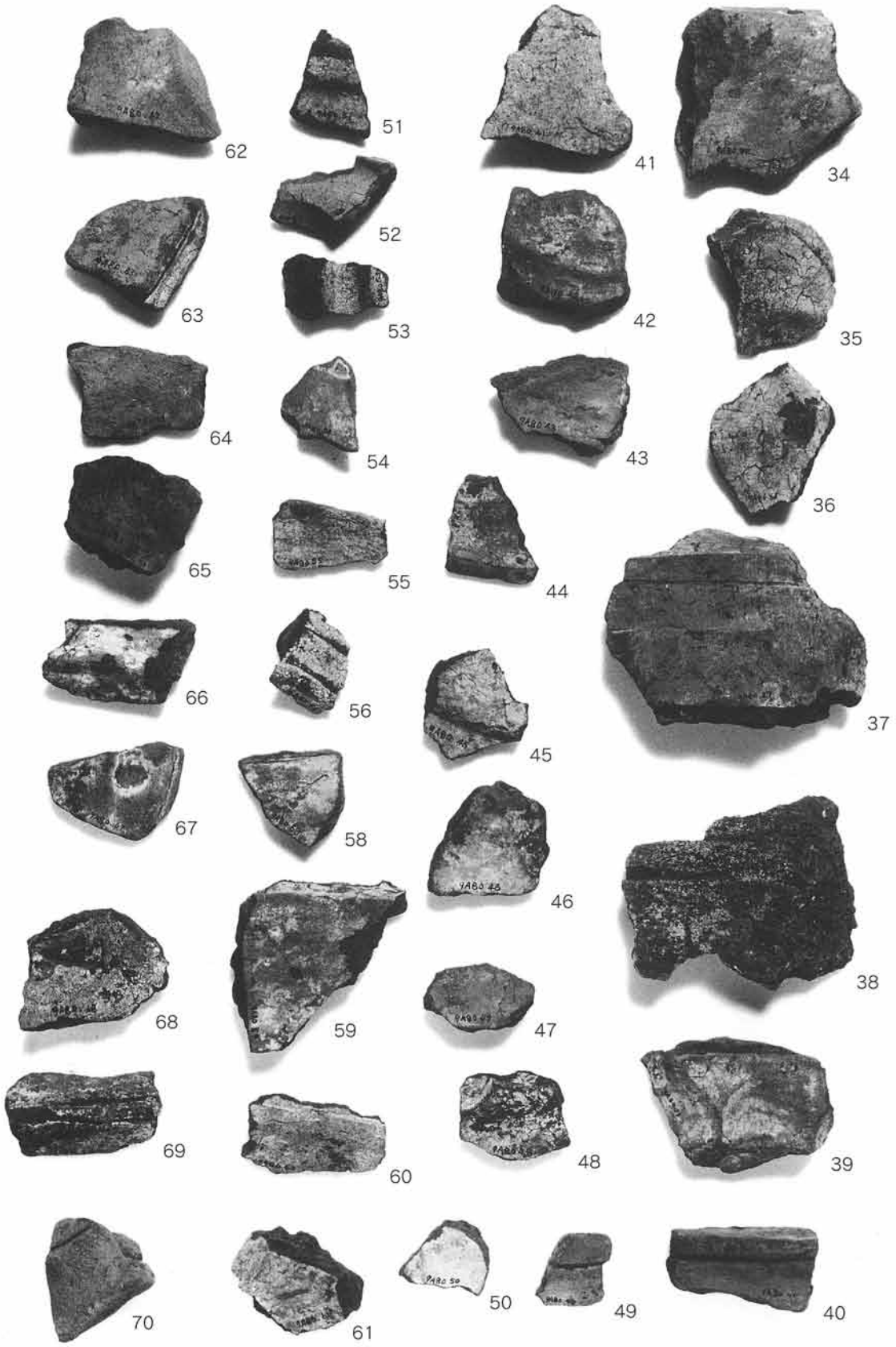
114　塔心礎

115　遺構　出土状況(1)

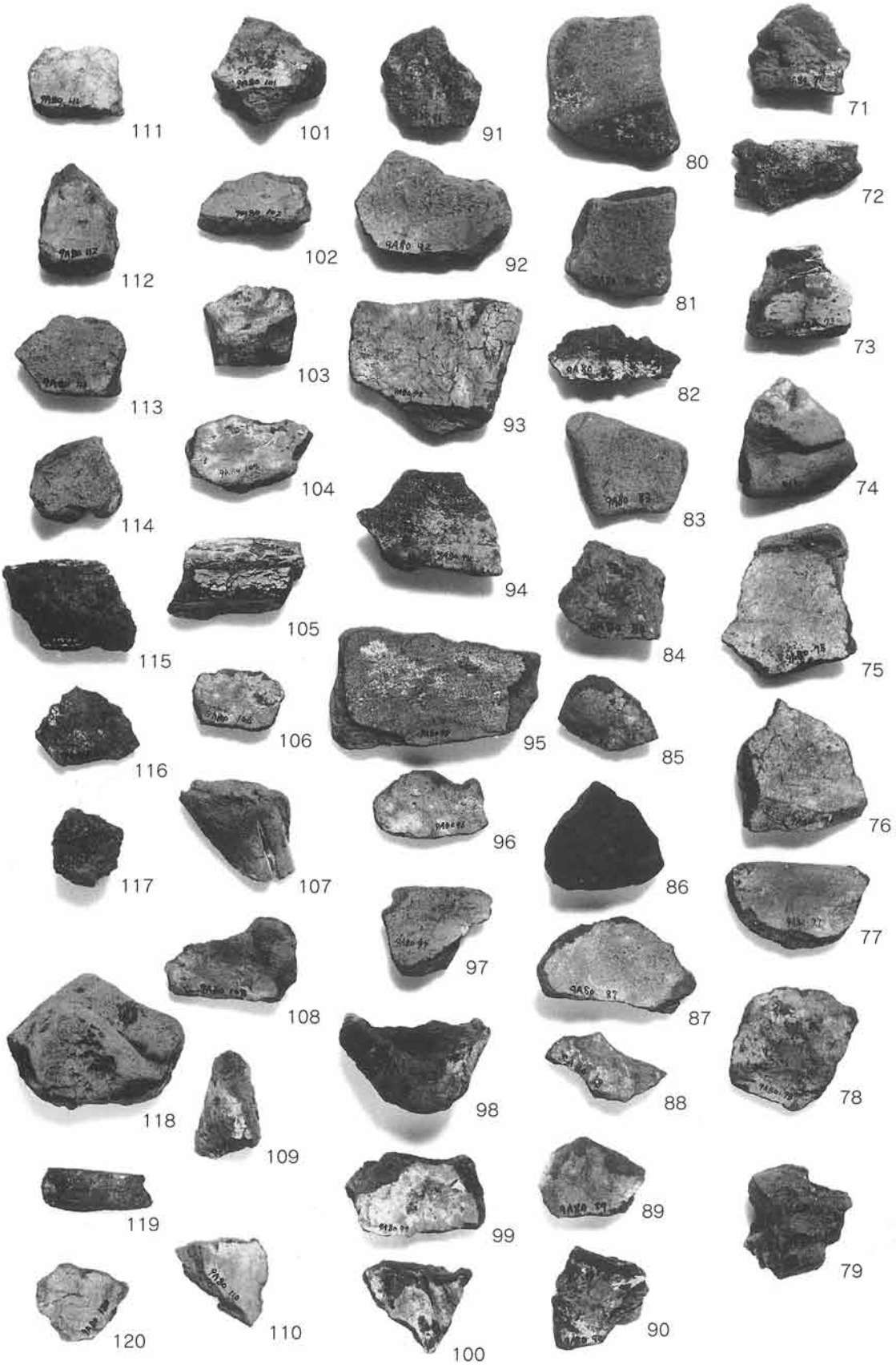
116　遺構　出土状況（2）



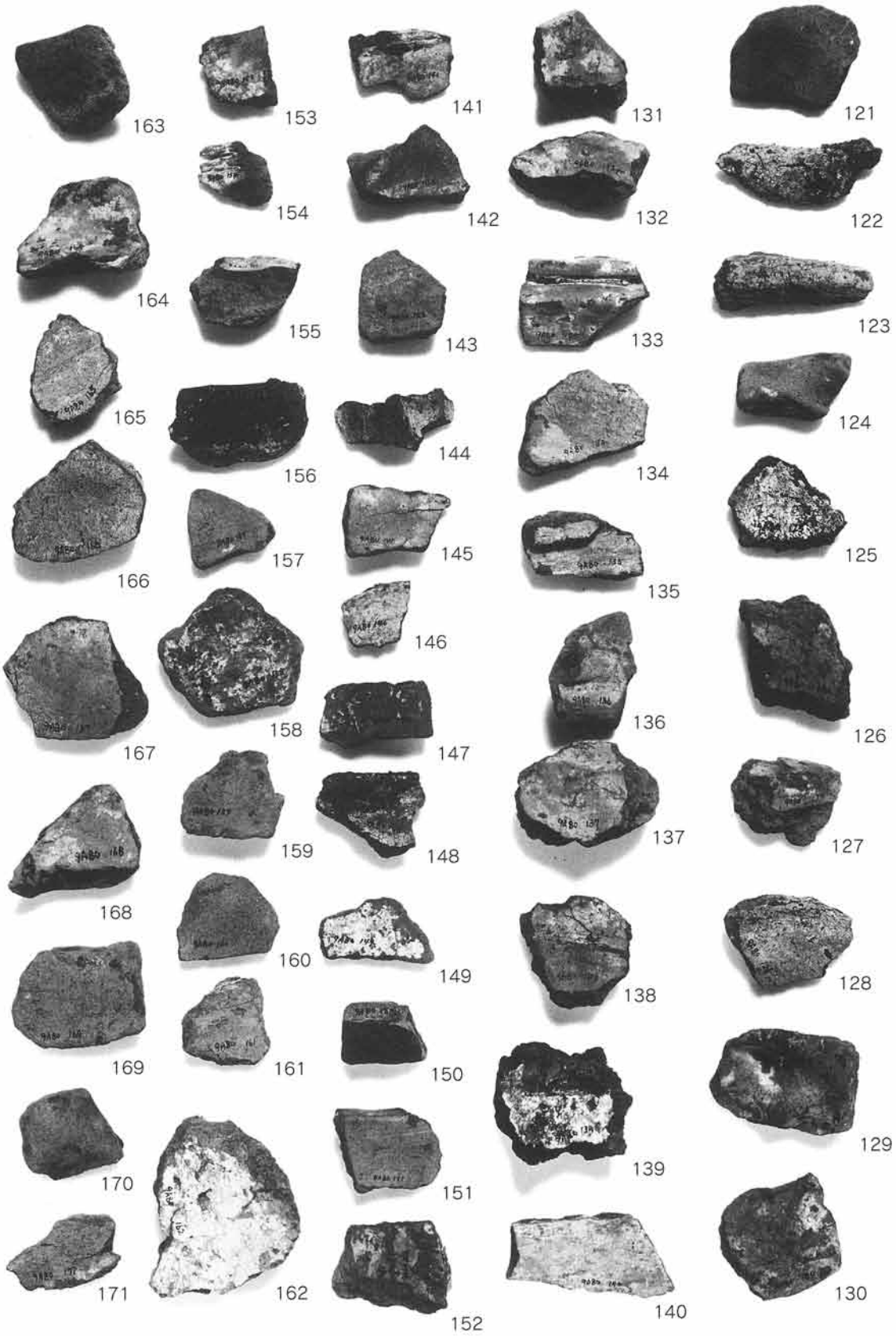
9A801～9A8033（塑壁）



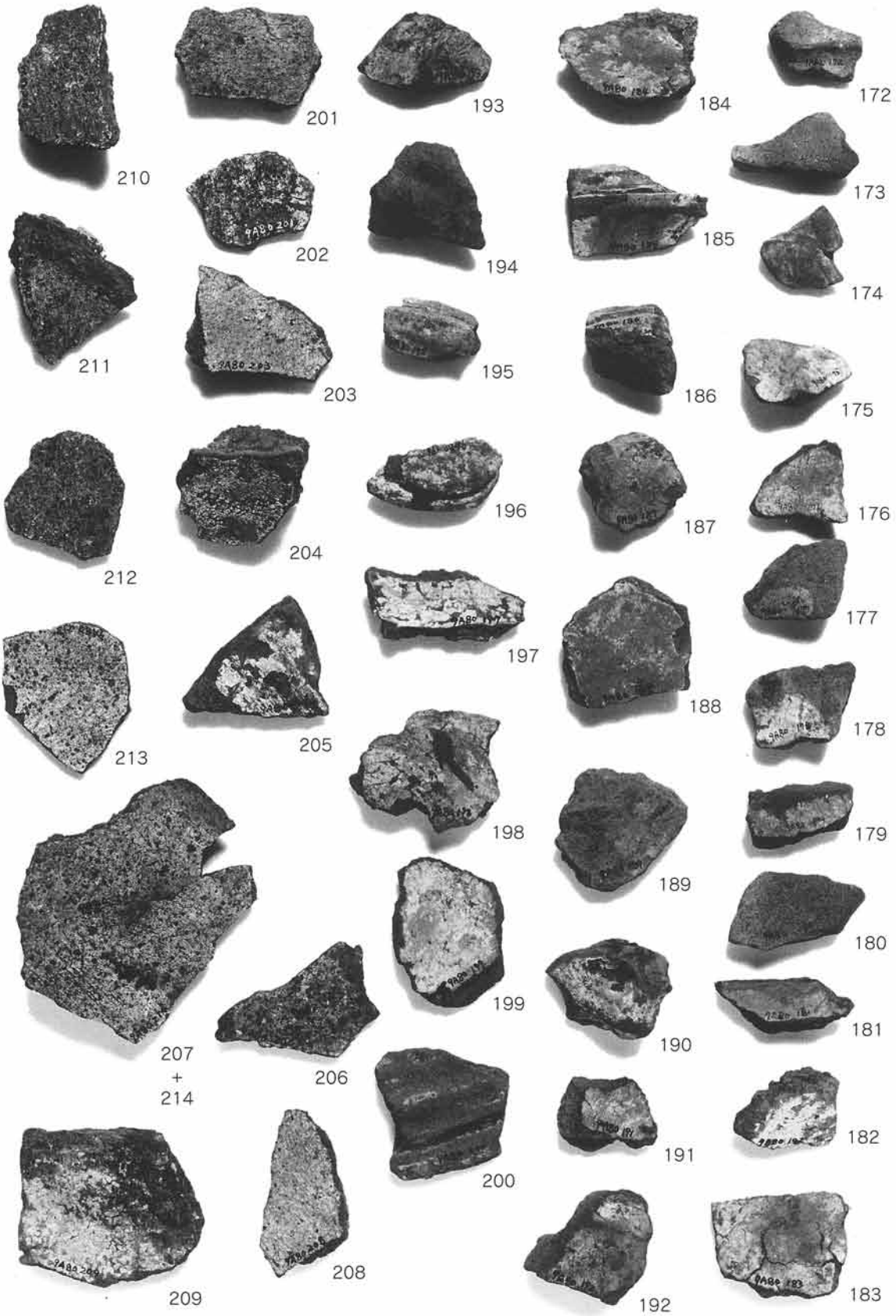
9A8034~9A8070（塑壁）



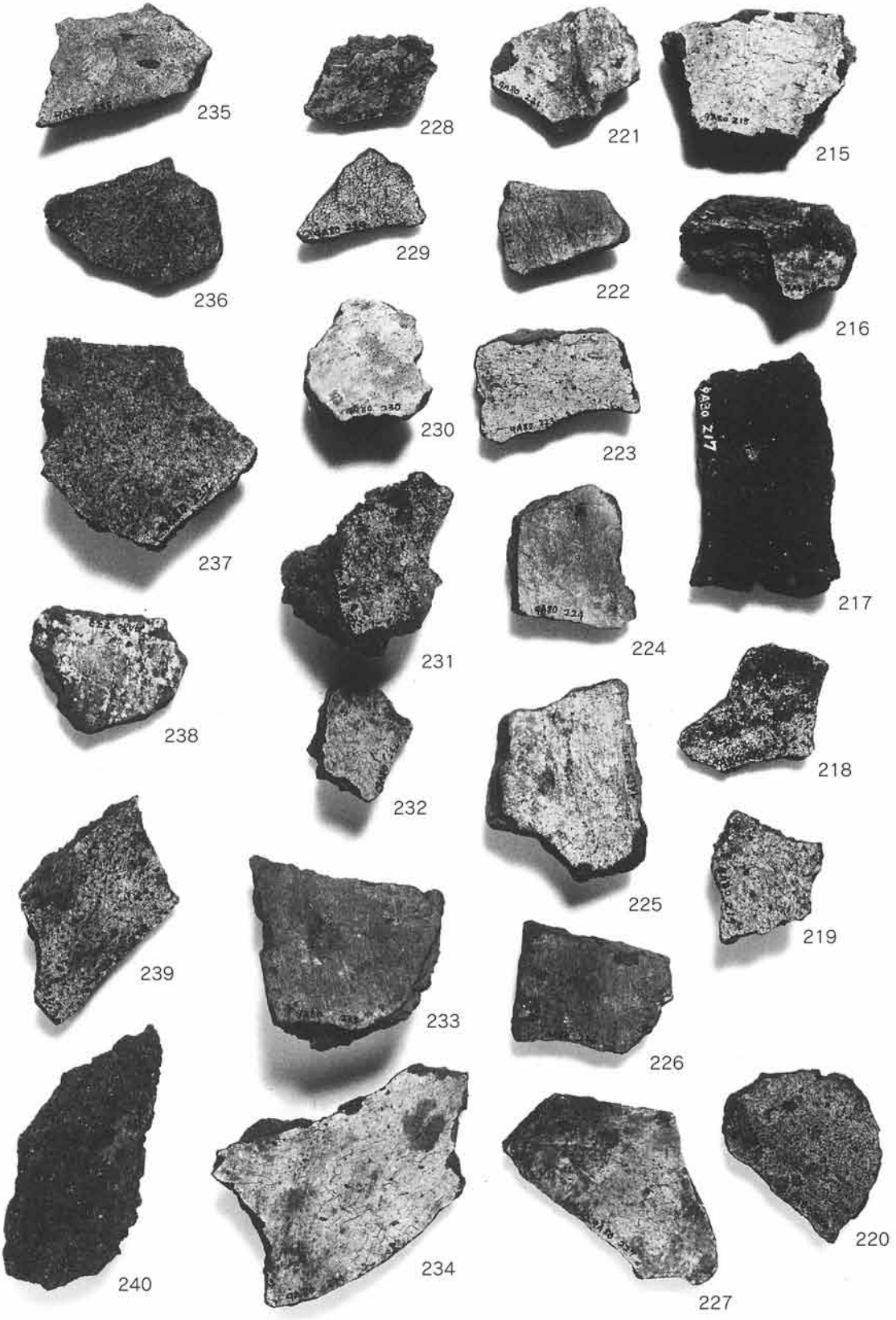
9A8071～9A80120（塑壁）



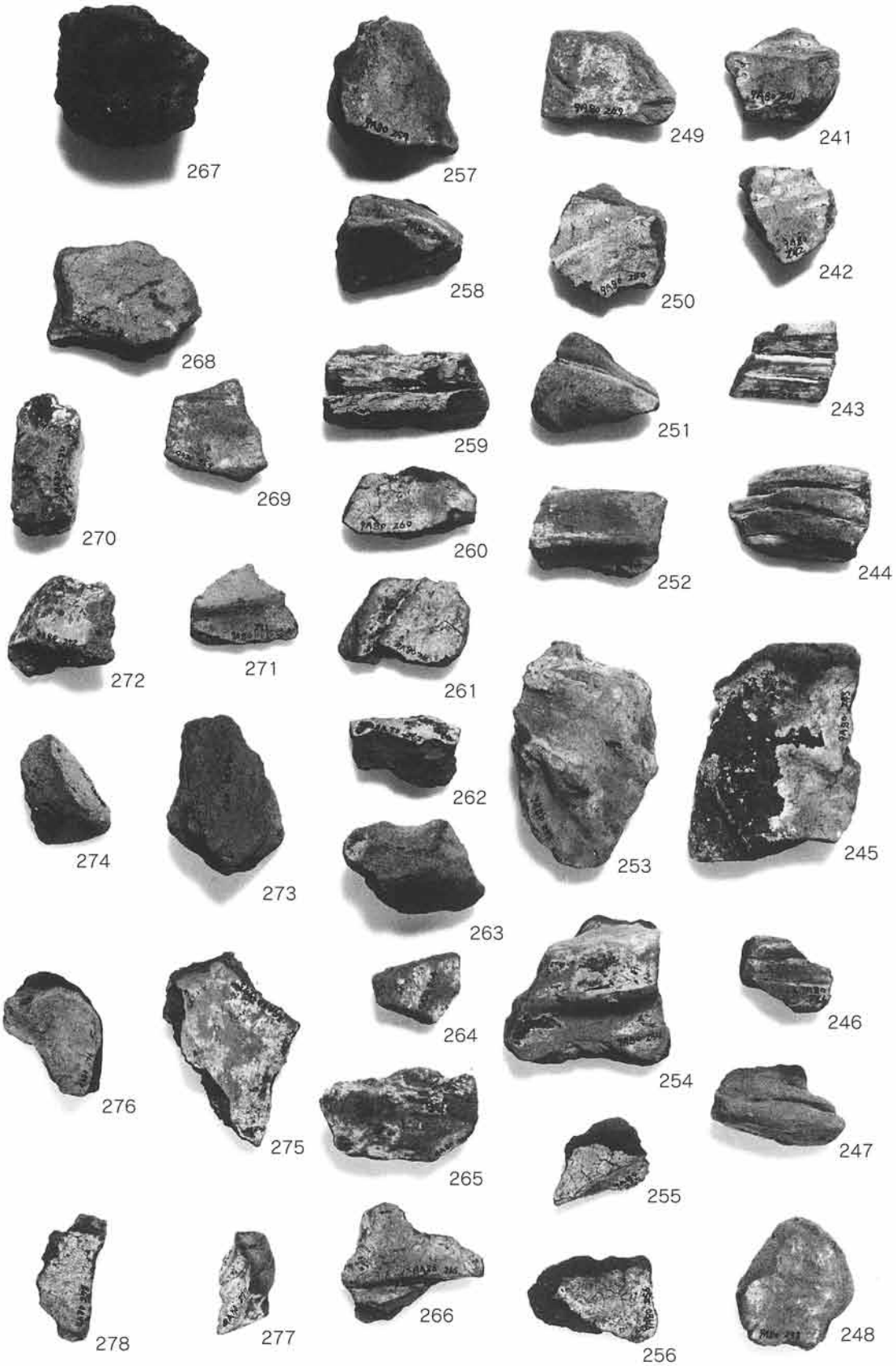
9A80121～9A80171（塑壁・塑像）



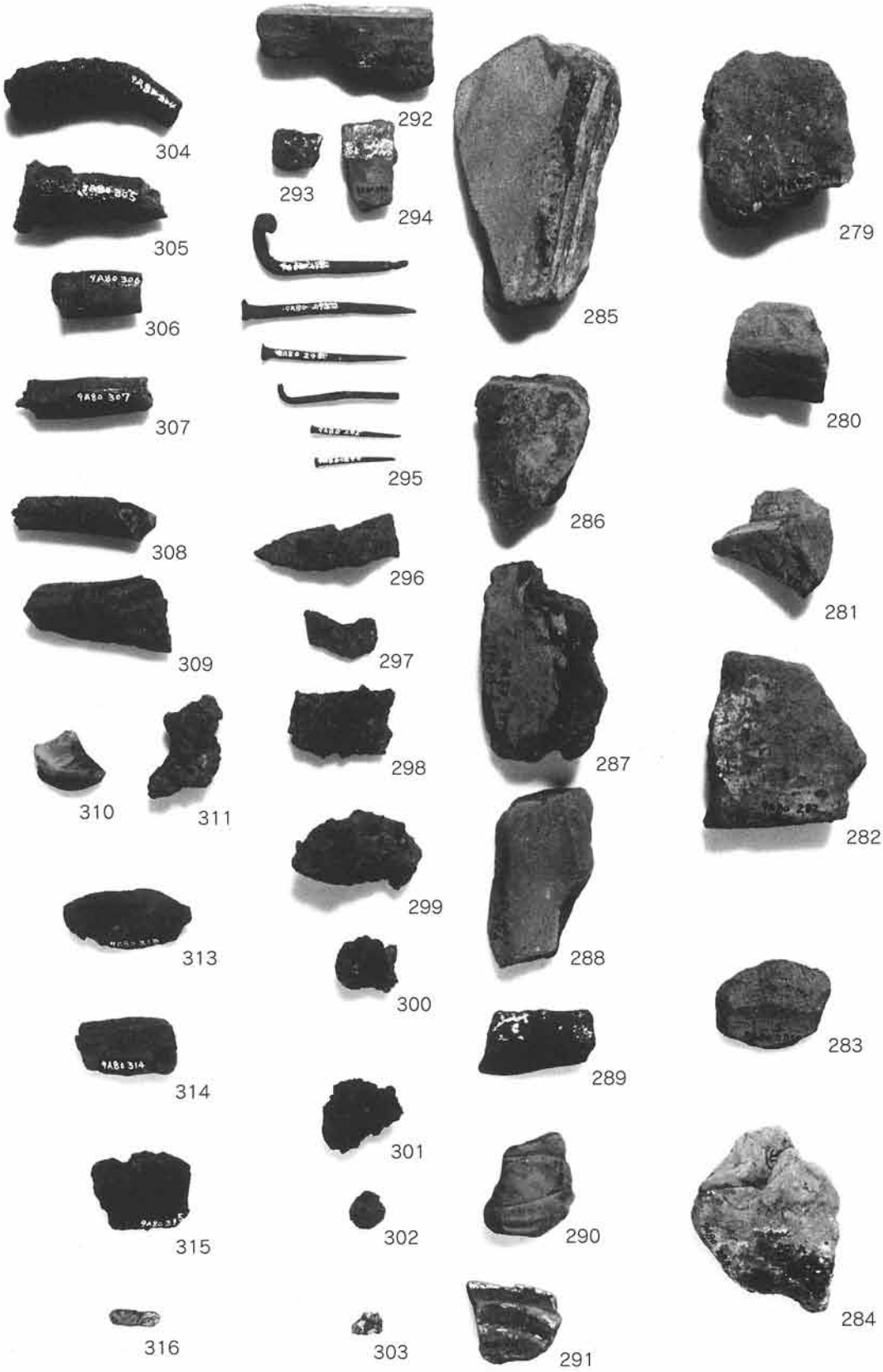
9A80172～9A80214（塑壁）



9A80215～9A80240（壁）



9A80241～9A80278（塑壁）



9A80279～9A80316（塑像・塑壁・釘・銅製品 等）

321

317

322

318

323

319

324

320

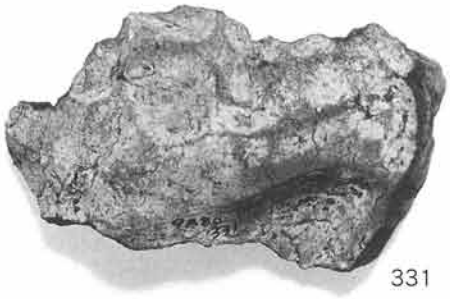
9A80317～9A80324（塑壁）

329

325

330

326


331

327

332

328

9A80325～9A80332（塑壁・飛雲・山岳・塑像）

355

333

356

350

357

351

358

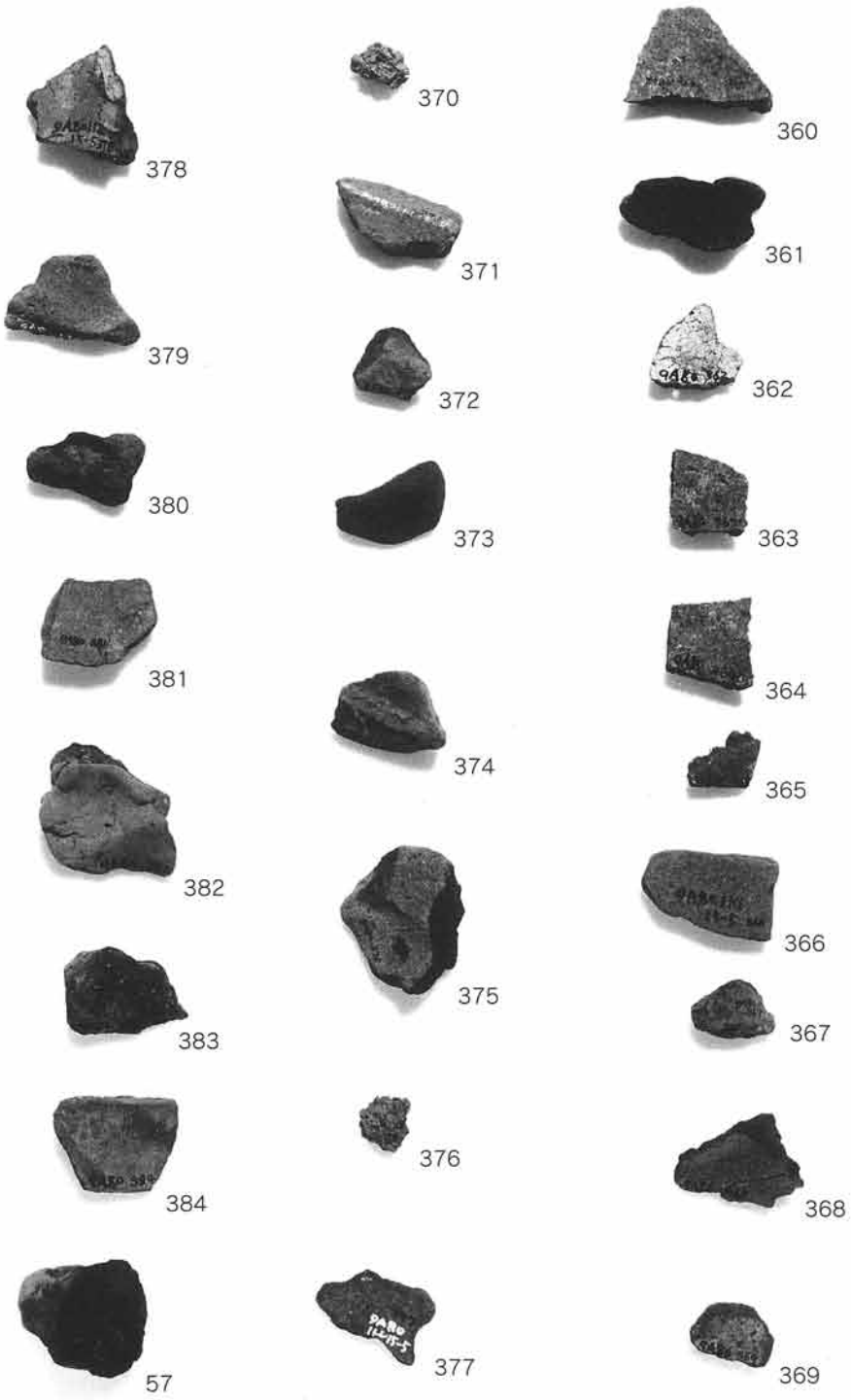
352

353

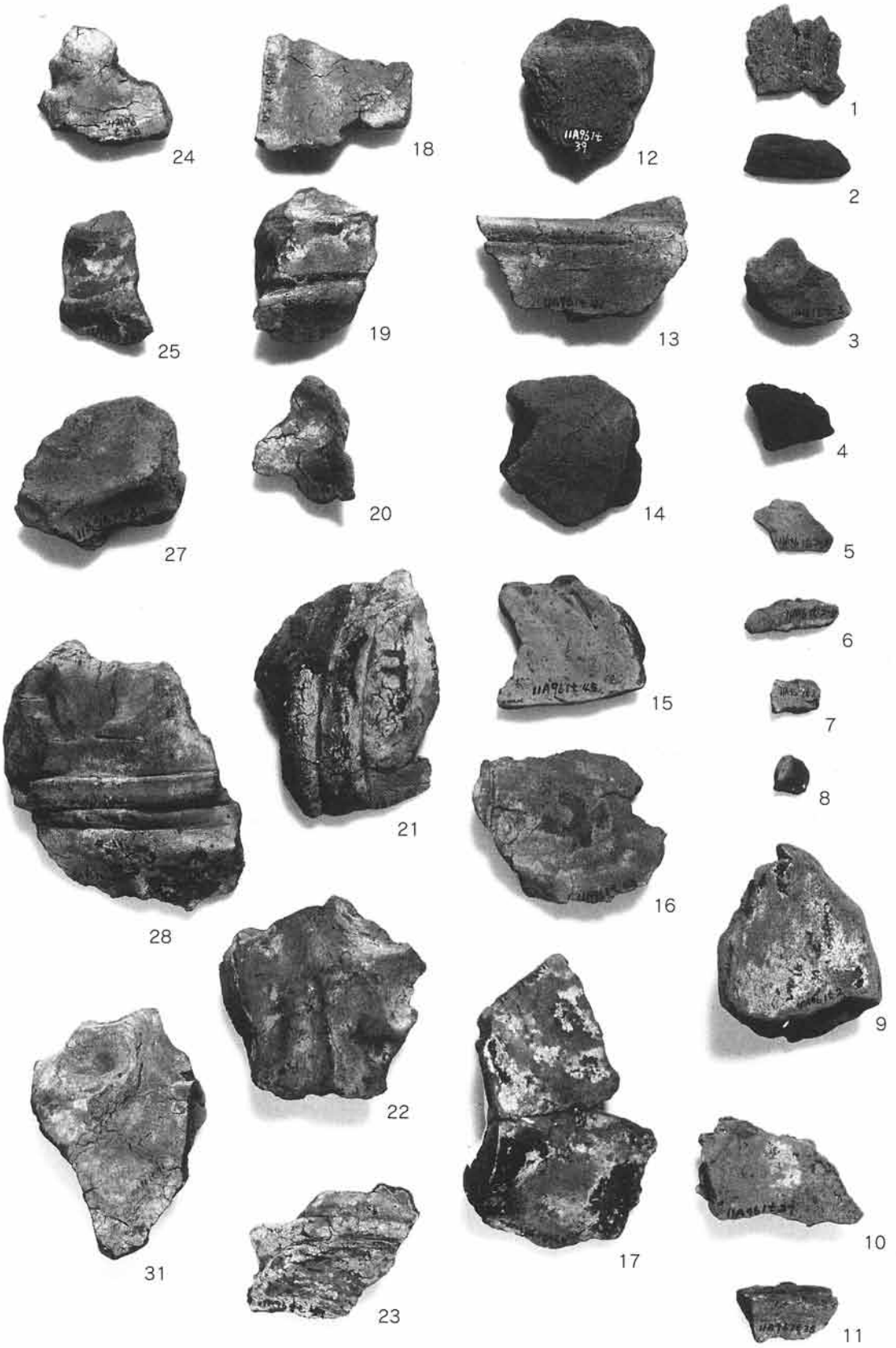
359

354

9A80333～9A80359（塑壁）



9A80360～9A80384（塑像・塑壁）



11A961～11A9631（塑像・塑壁・磯形）

36

33

29

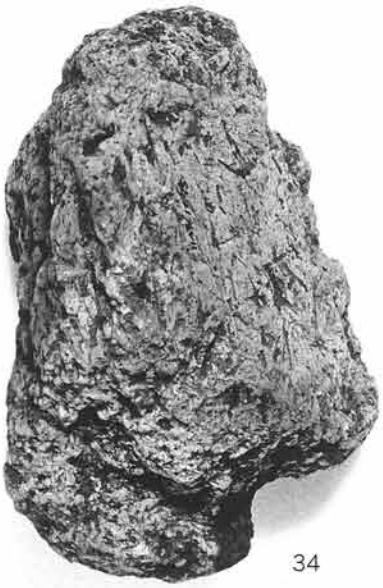
37

35

30

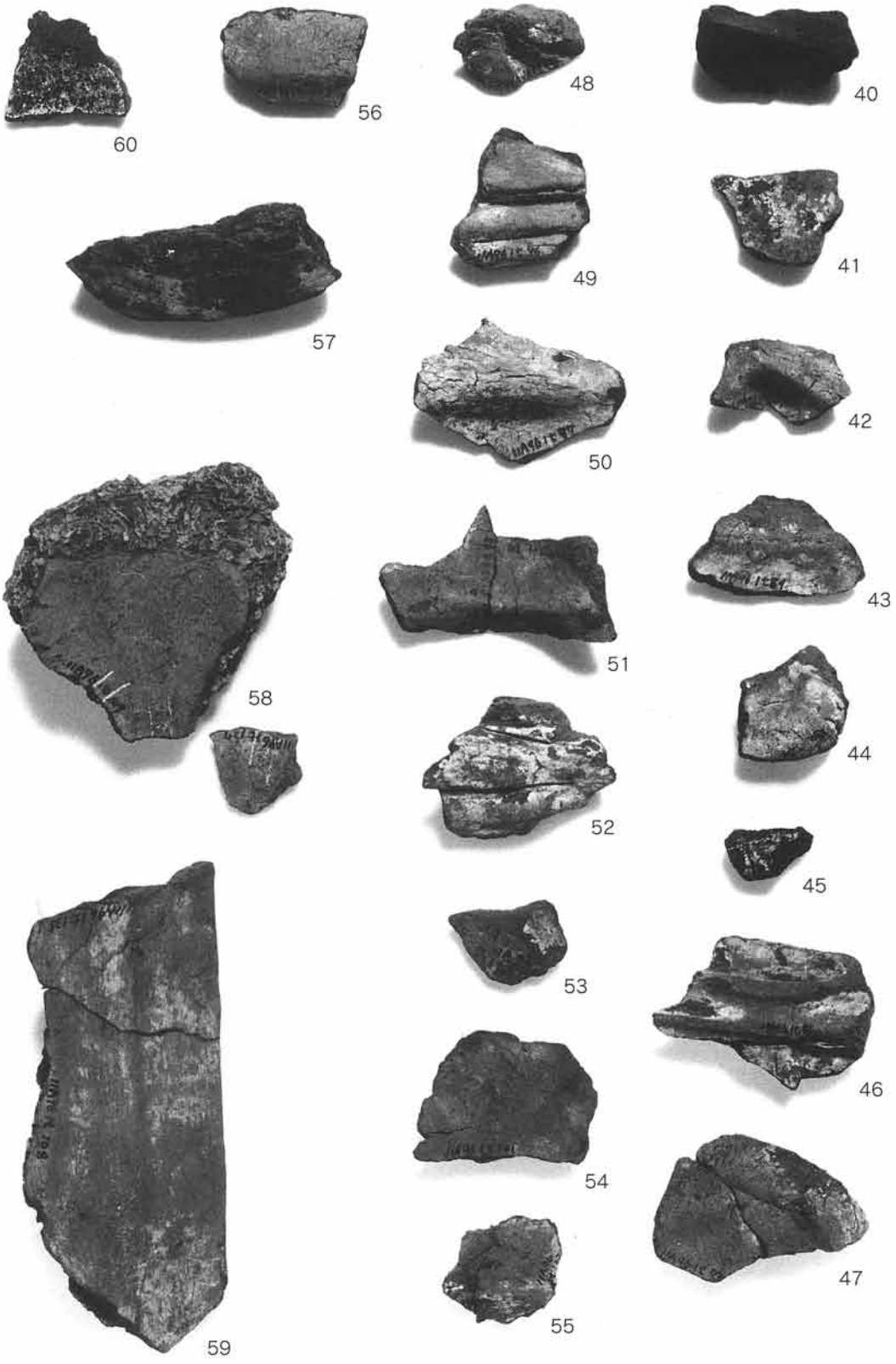
39

38

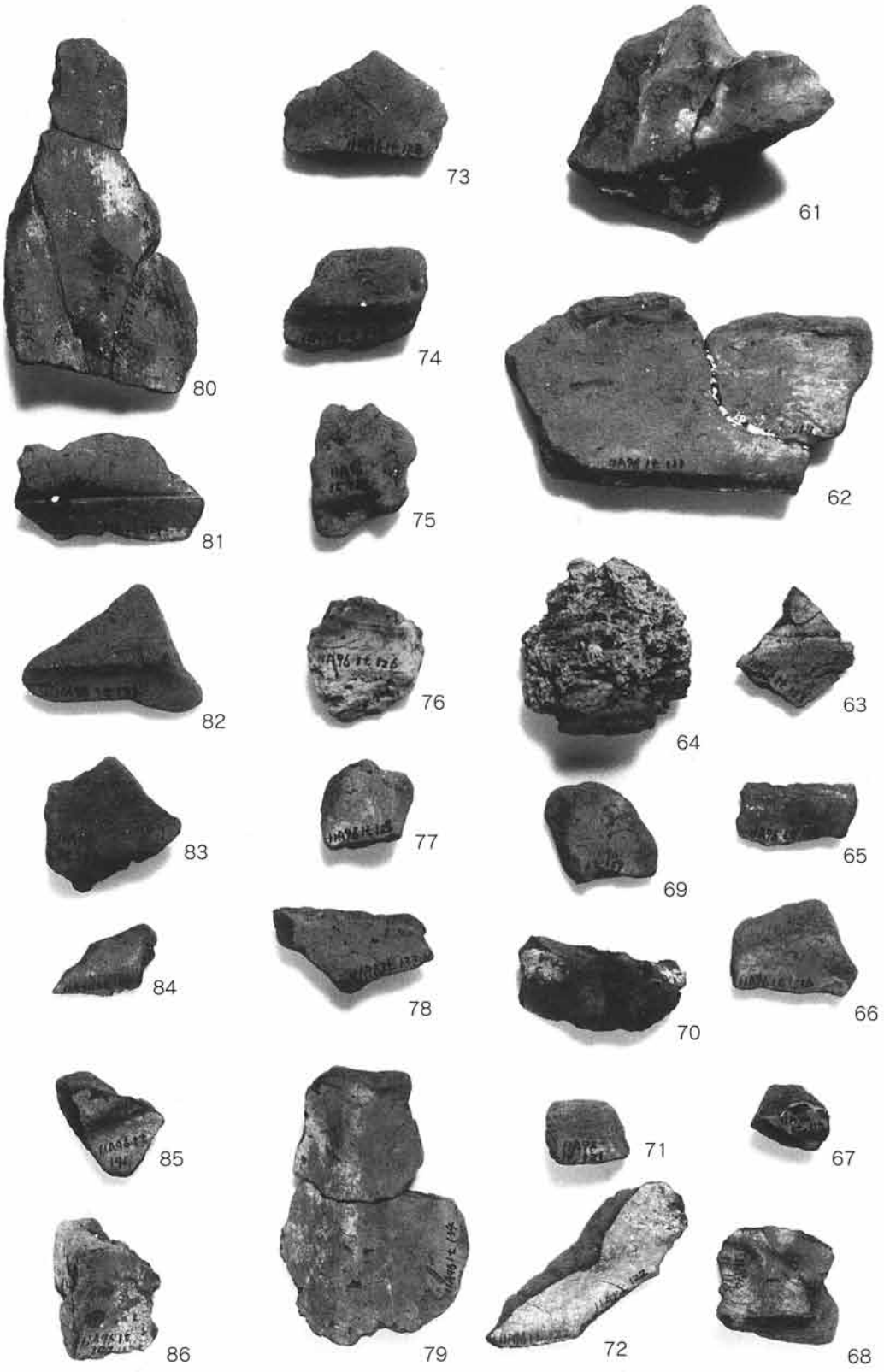

34

32

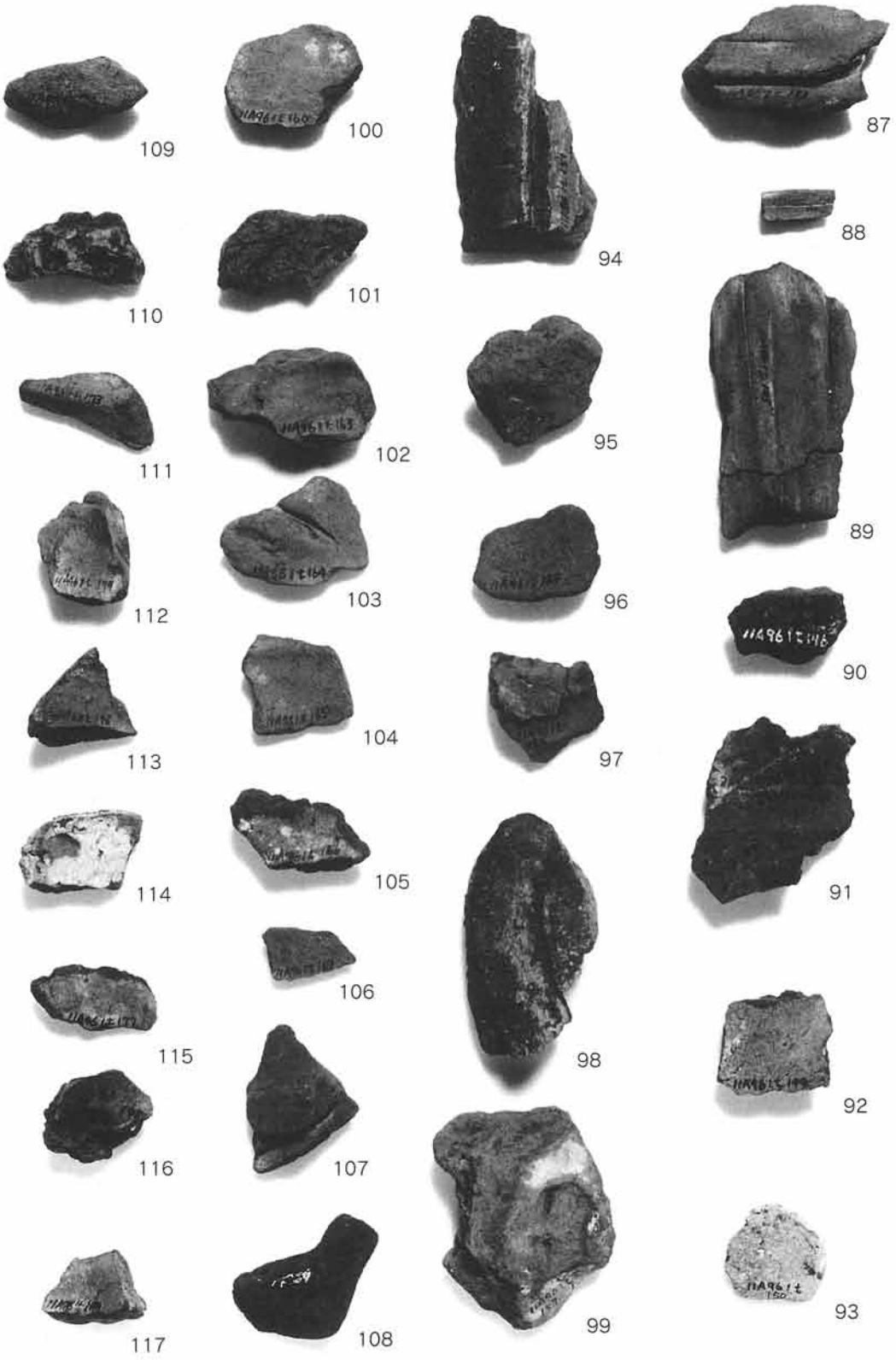
11A9629～11A9639（磯形・塑壁）



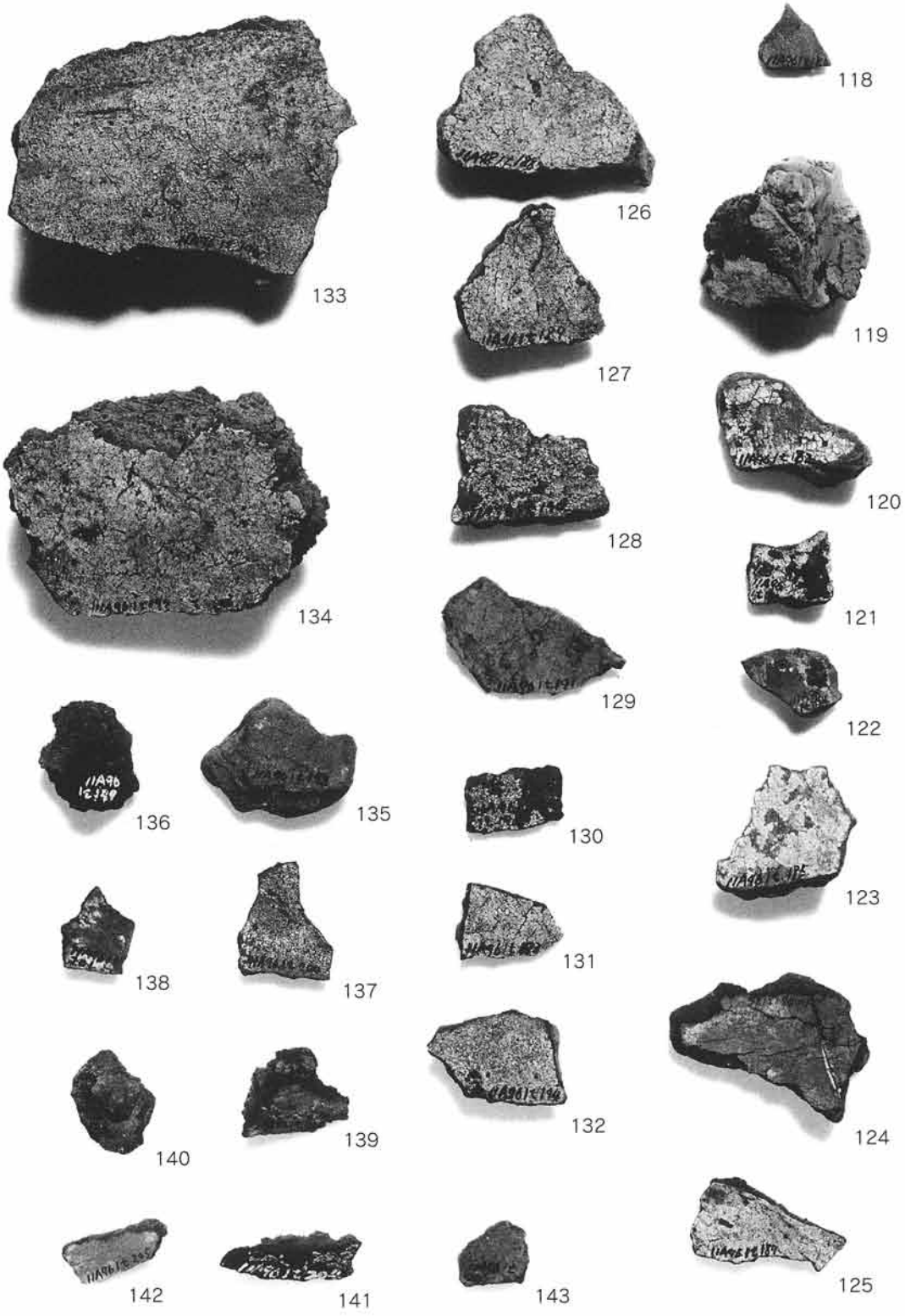
11A9640～11A9660（塑壁）



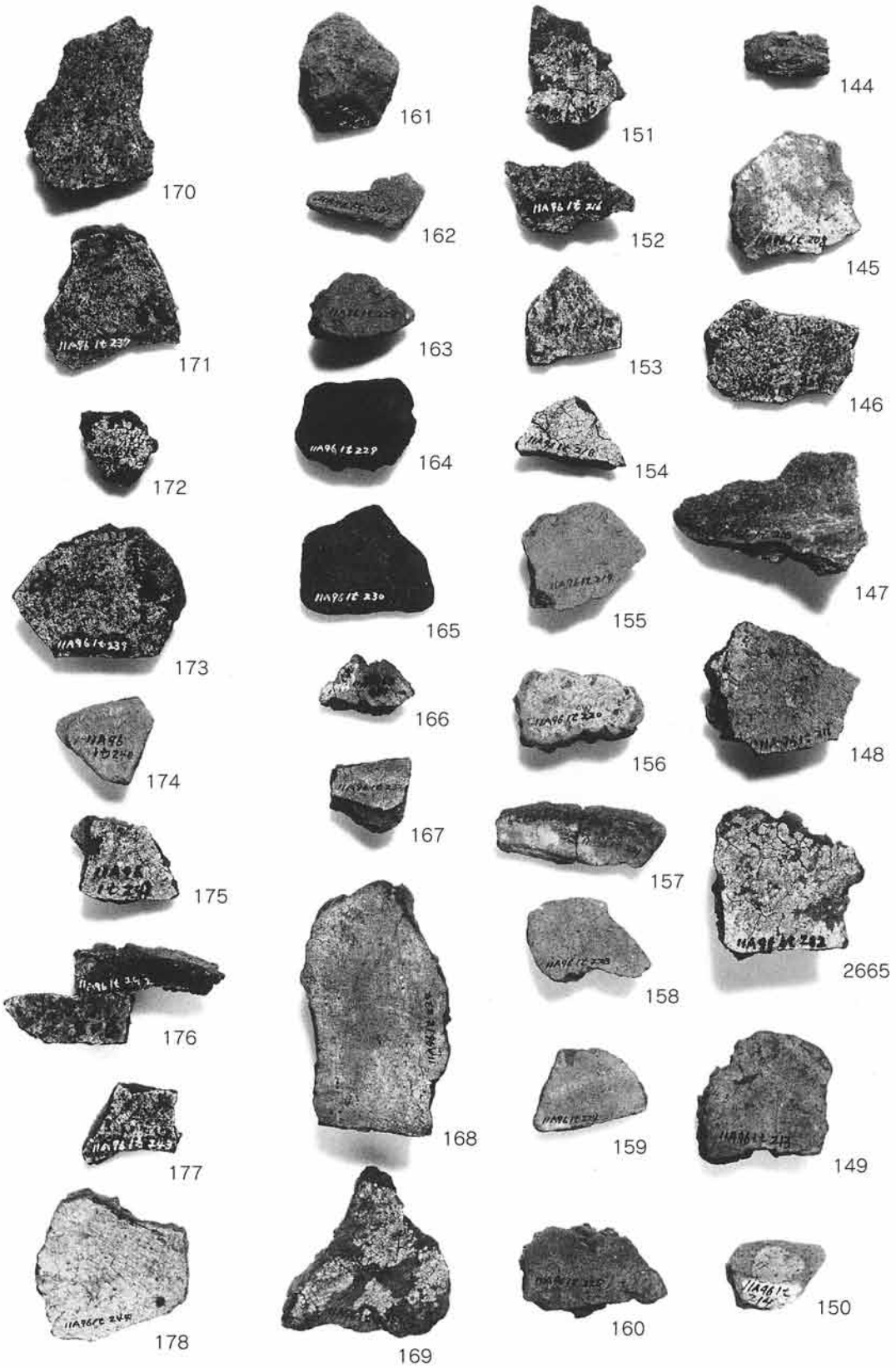
11A9661～11A9686（塑壁）



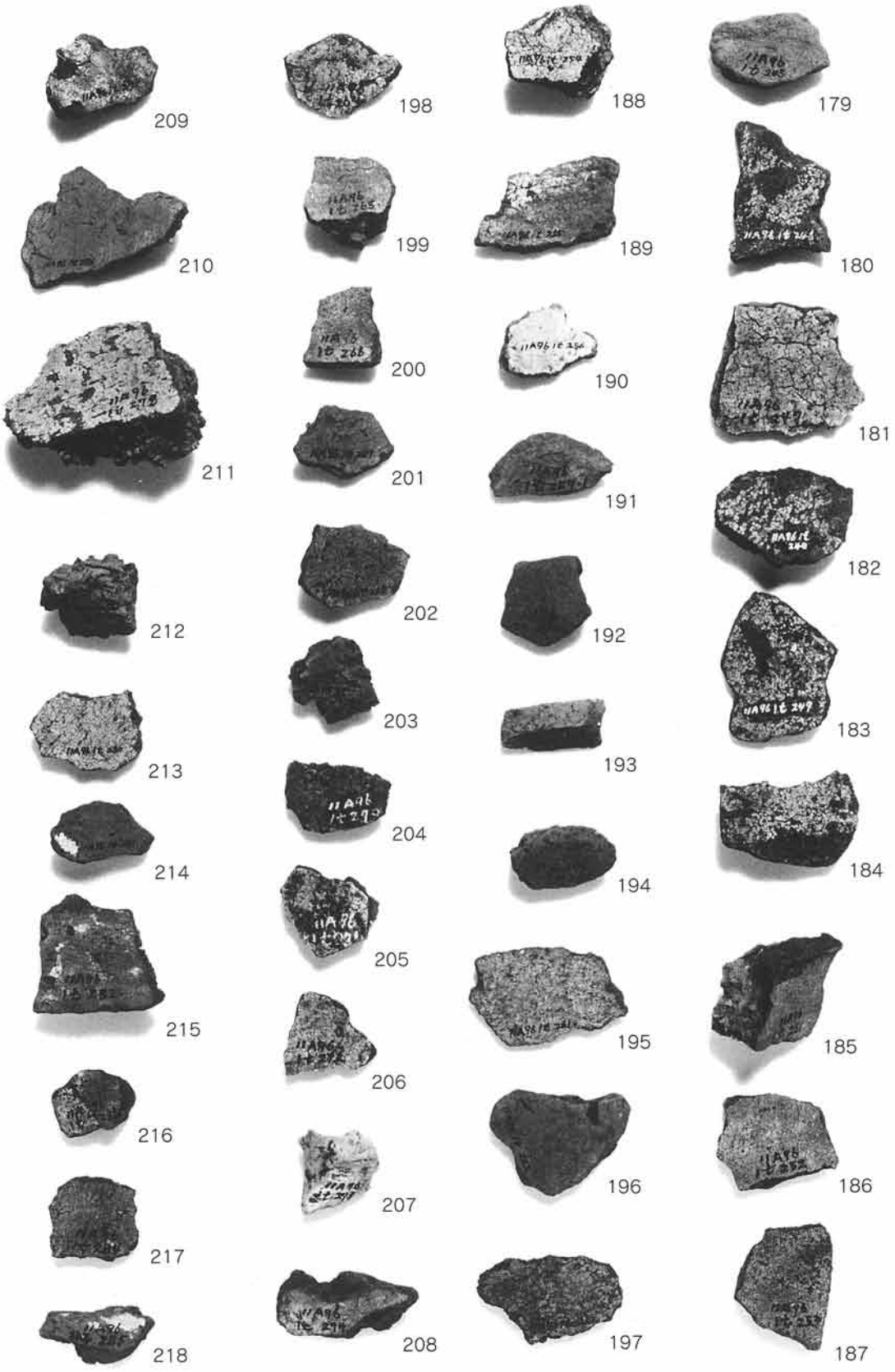
11A9687～11A96117（塑壁）



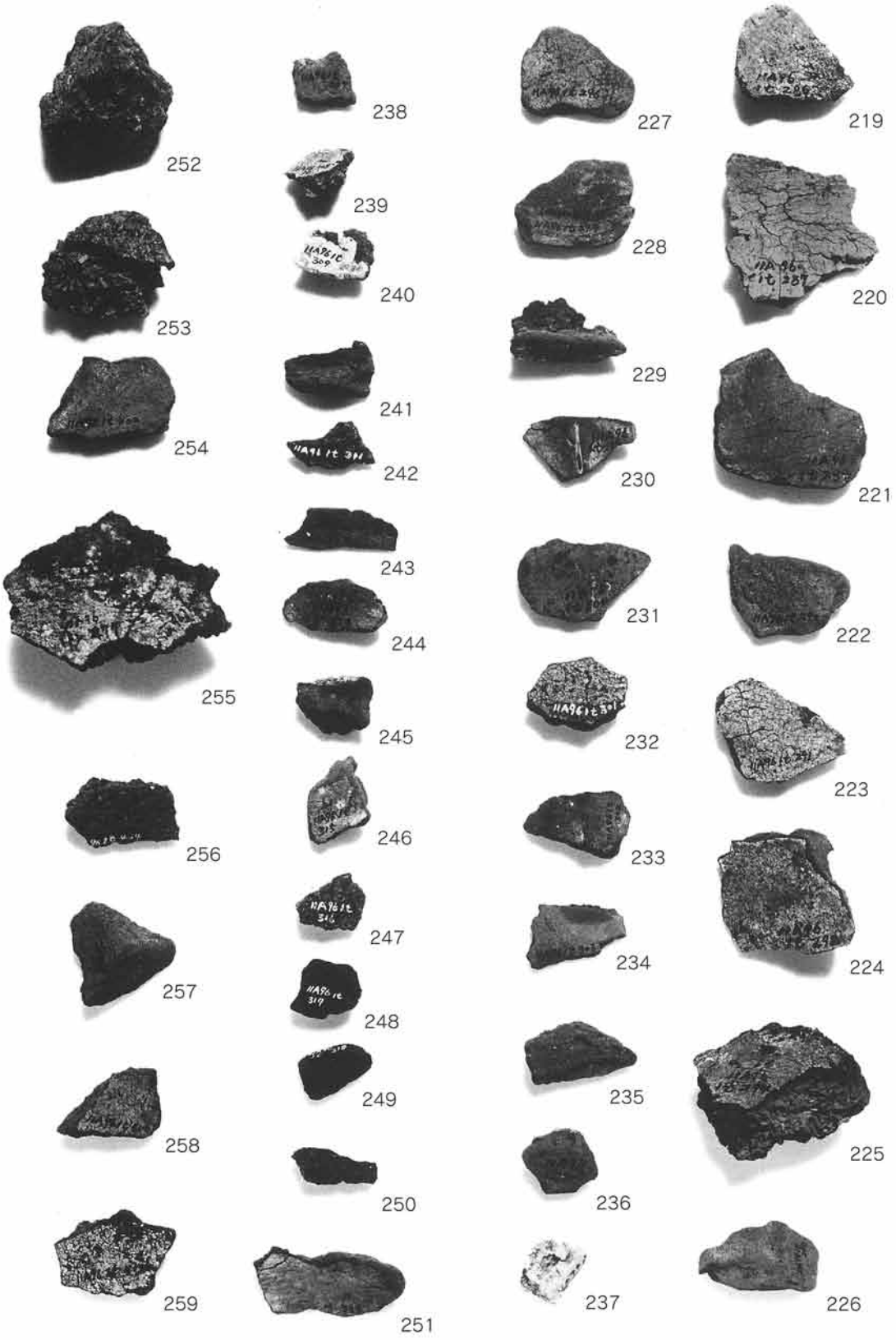
11A96118～11A96143（塑壁）



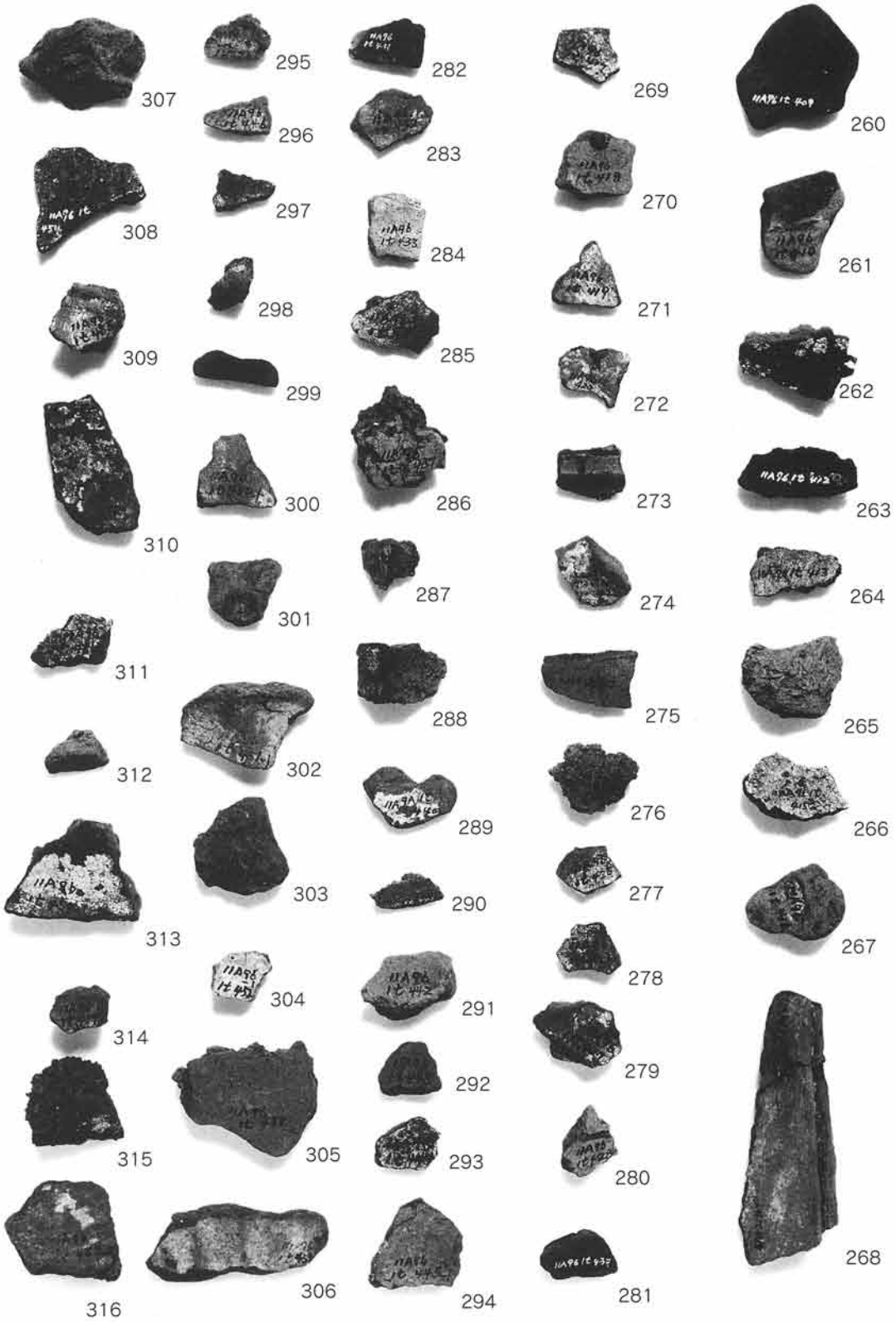
11A96144～11A96178（塑壁）



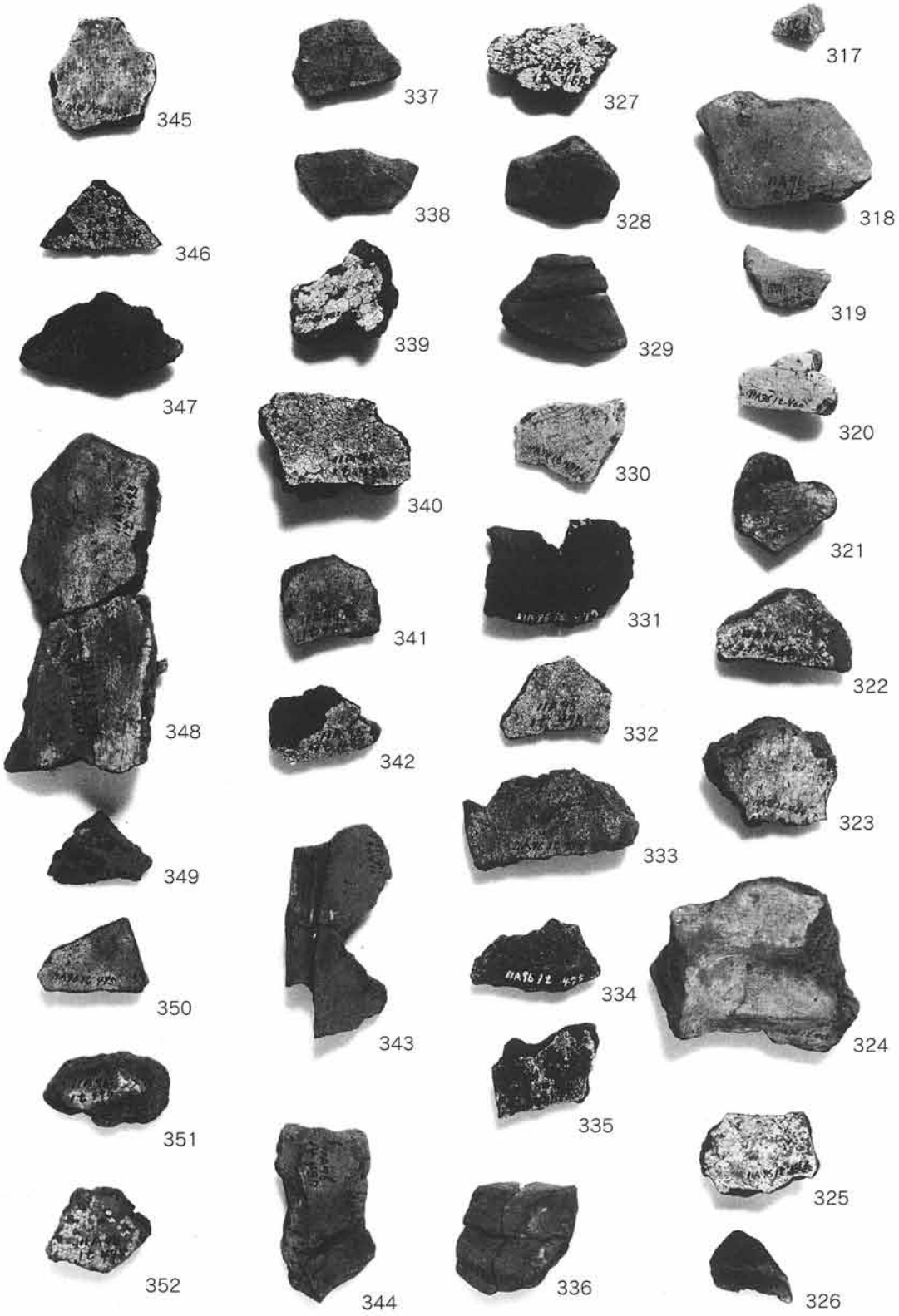
11A96179～11A96218（塑壁）



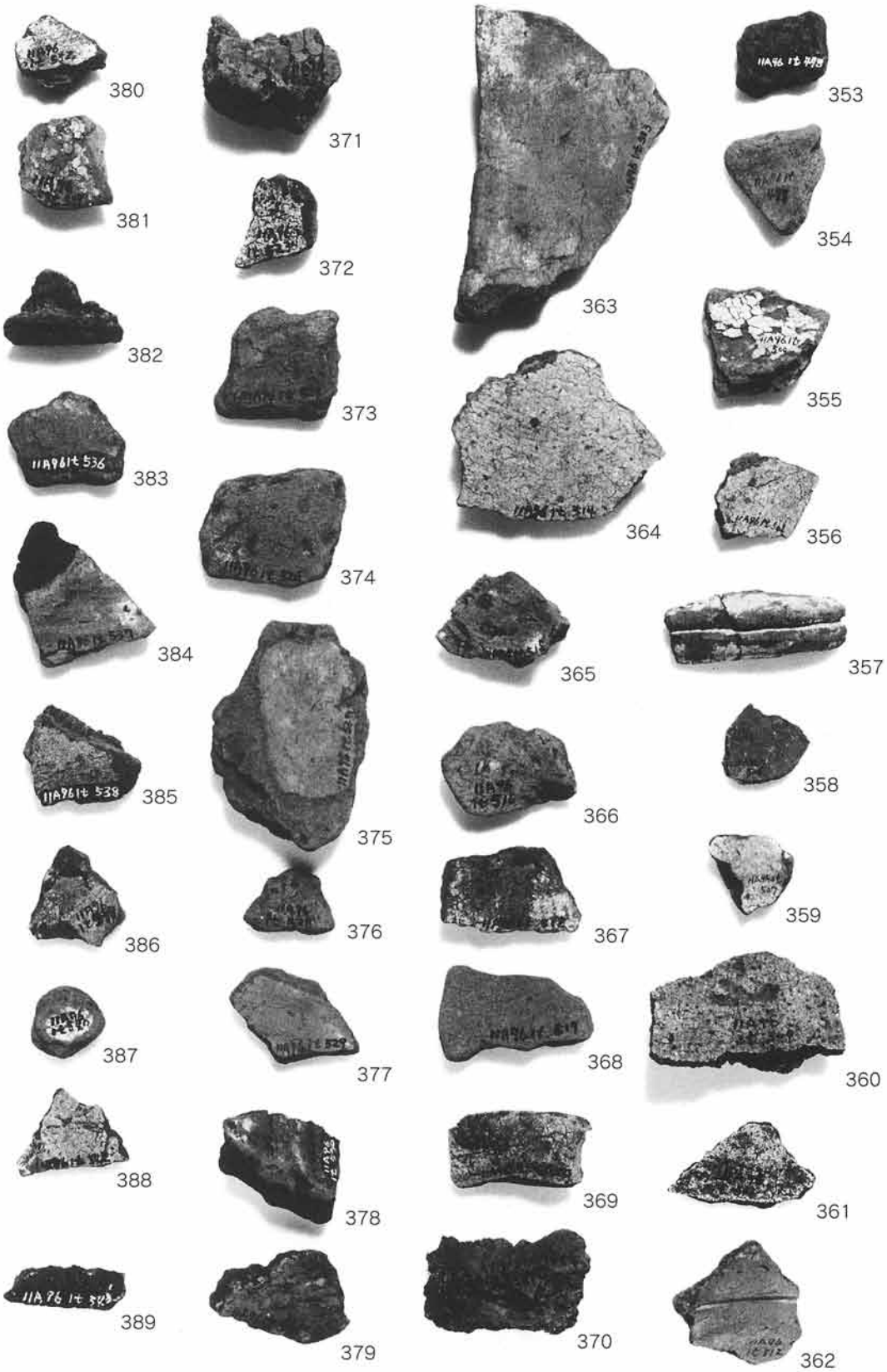
11A96219～11A96259（塑壁）



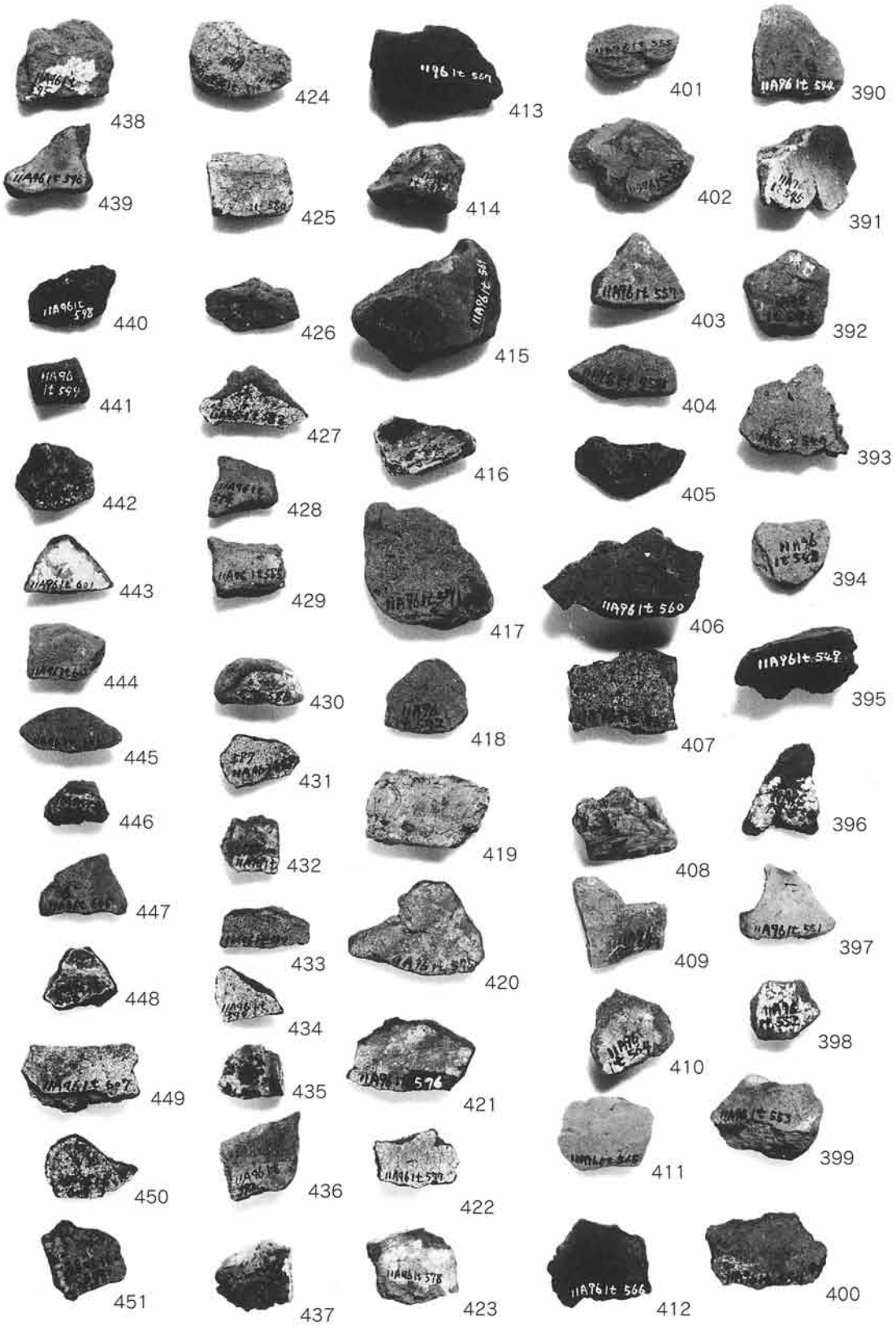
11A96260～11A96316（塑壁）



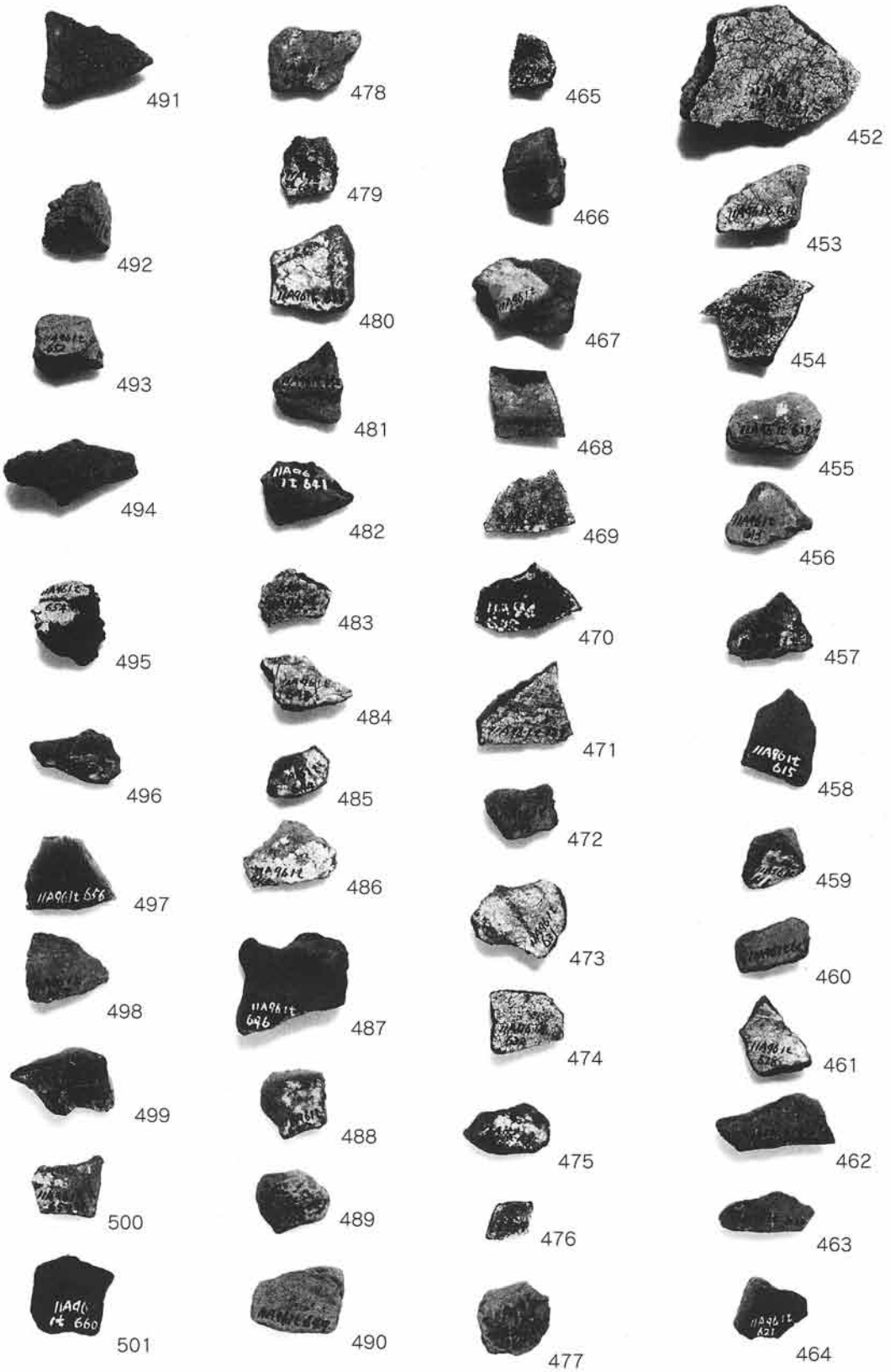
11A96317～11A96352（塑壁）



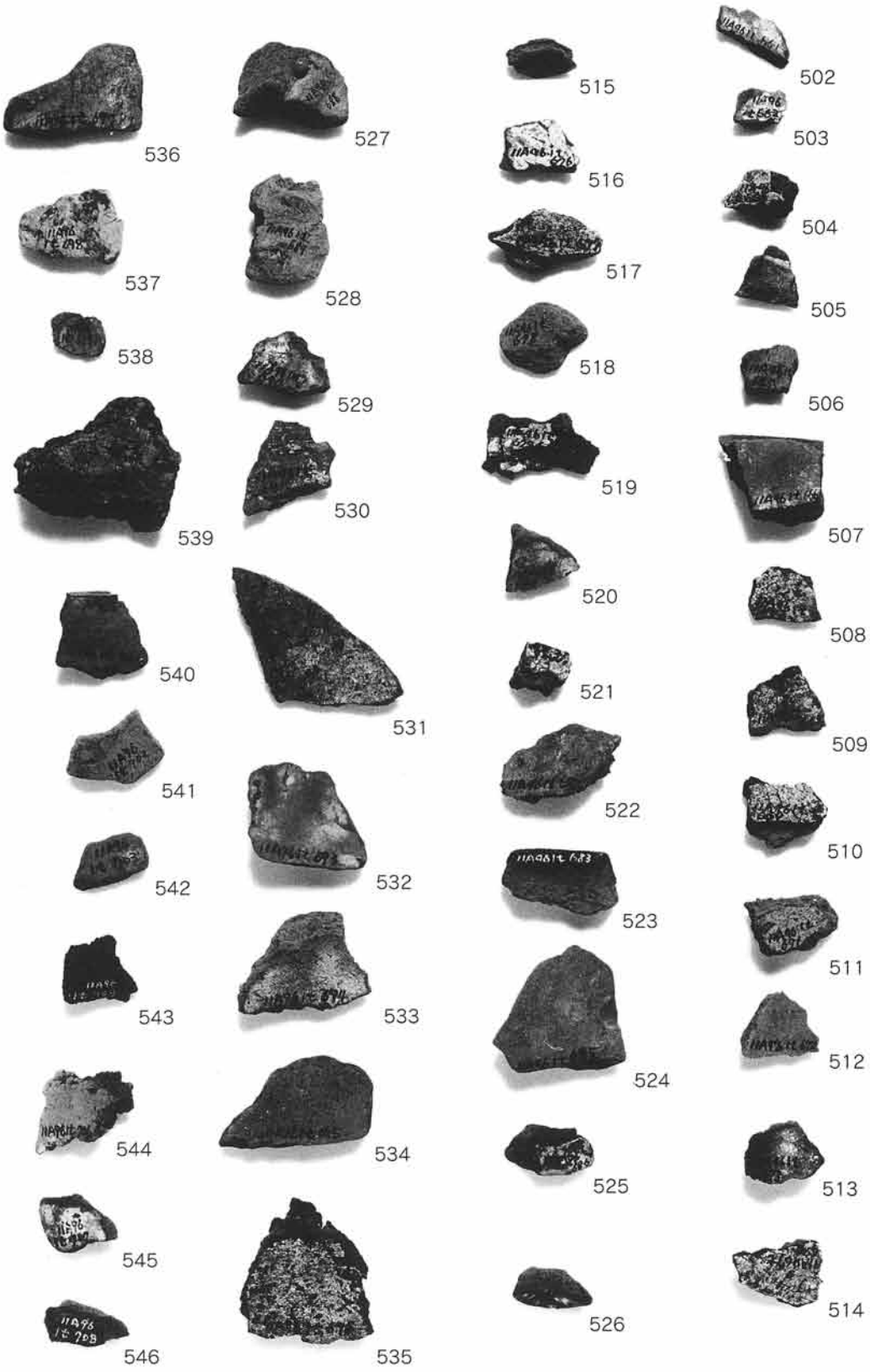
11A96353～11A96389（塑像・塑壁）



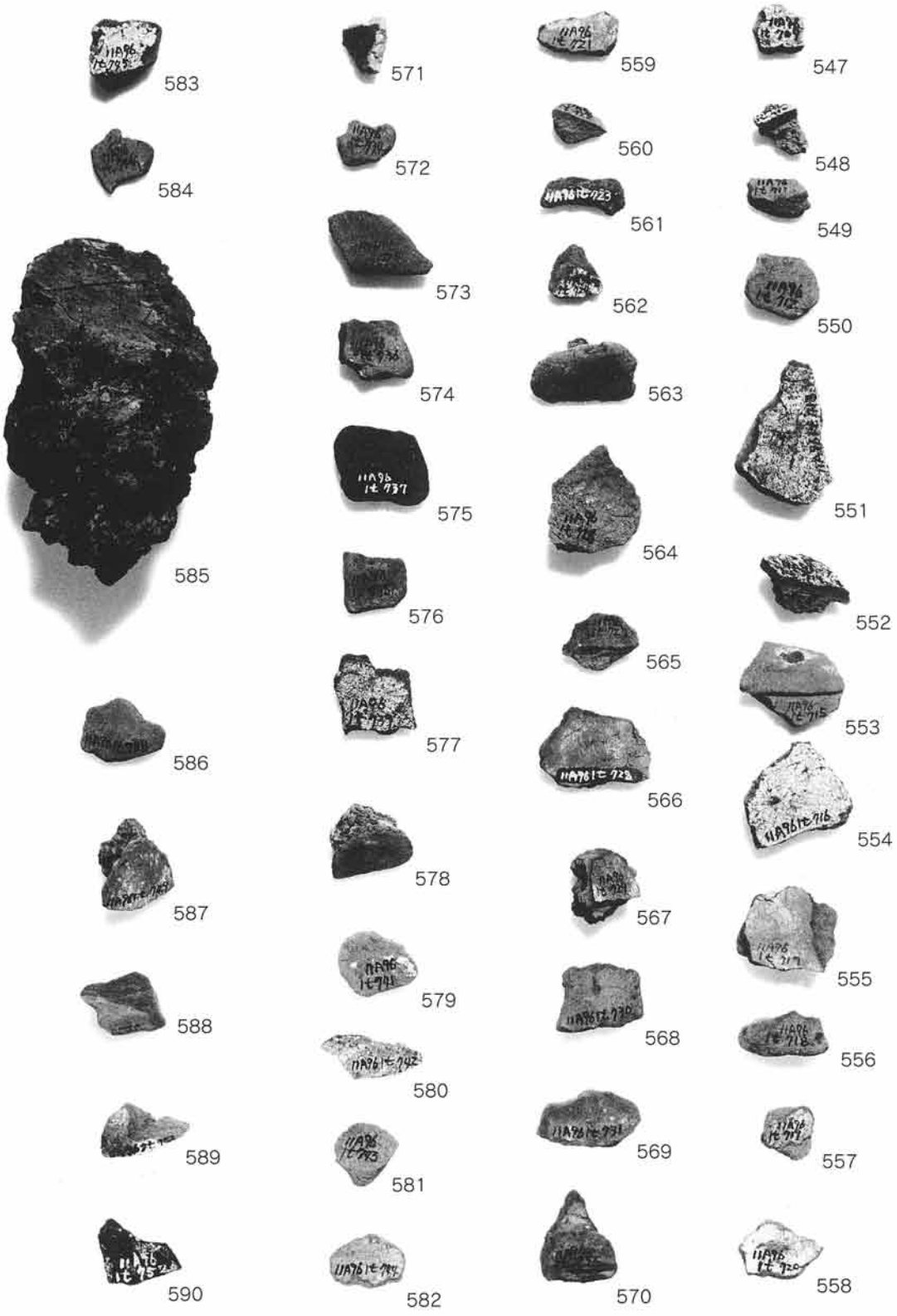
11A96390～11A96451（塑壁）



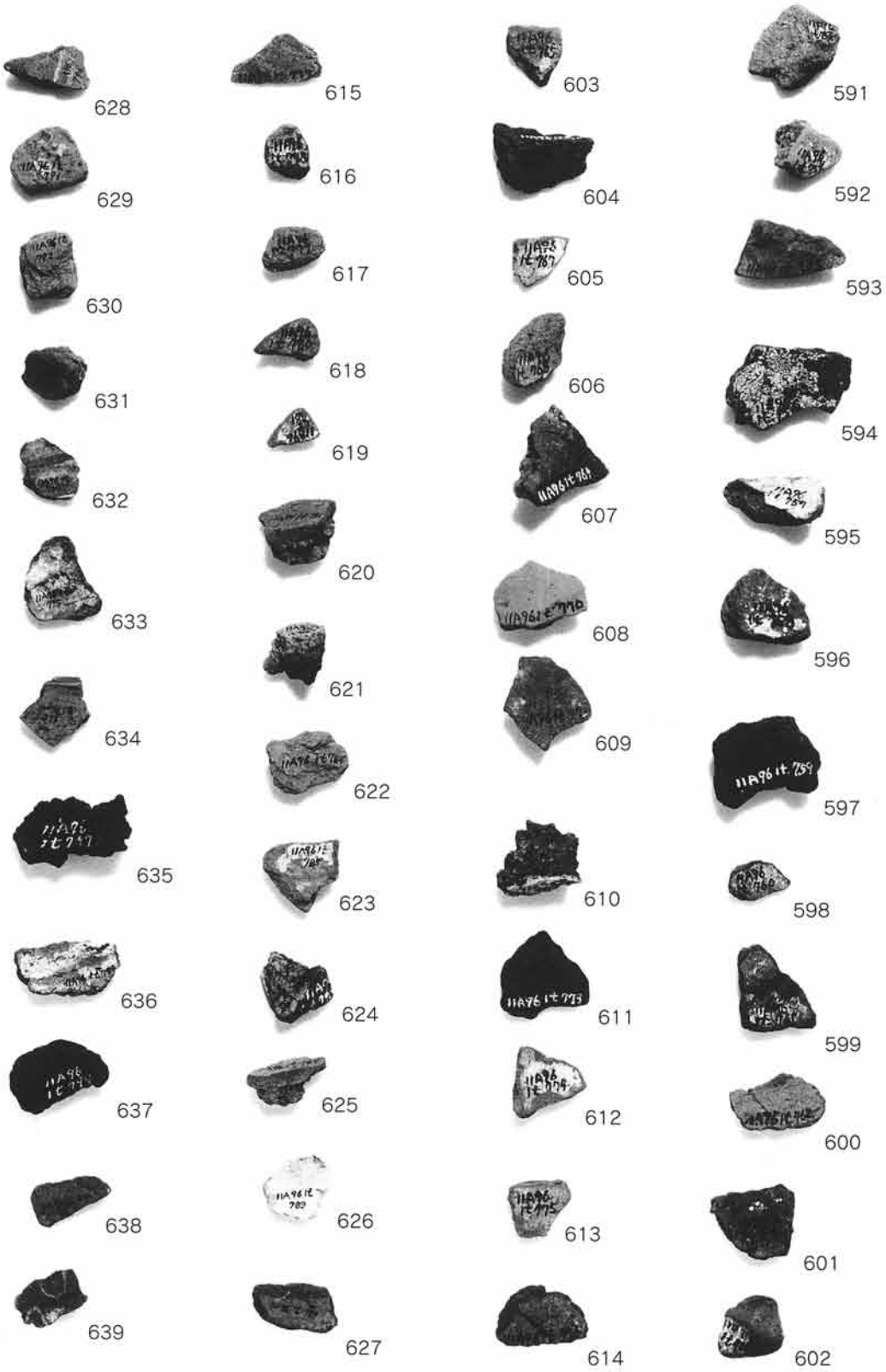
11A96452～11A96501（塑壁）



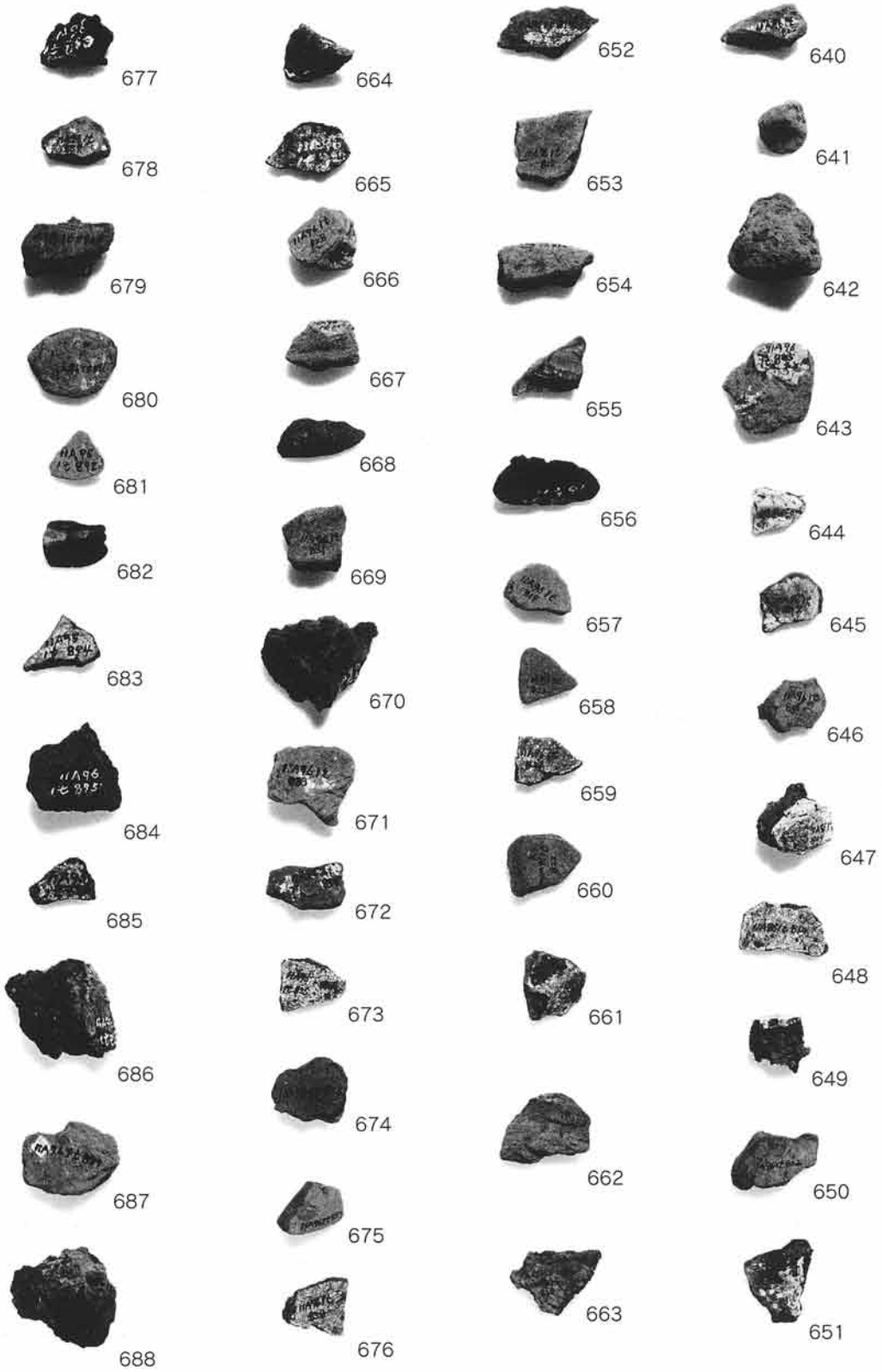
11A96502～11A96546（塑壁）



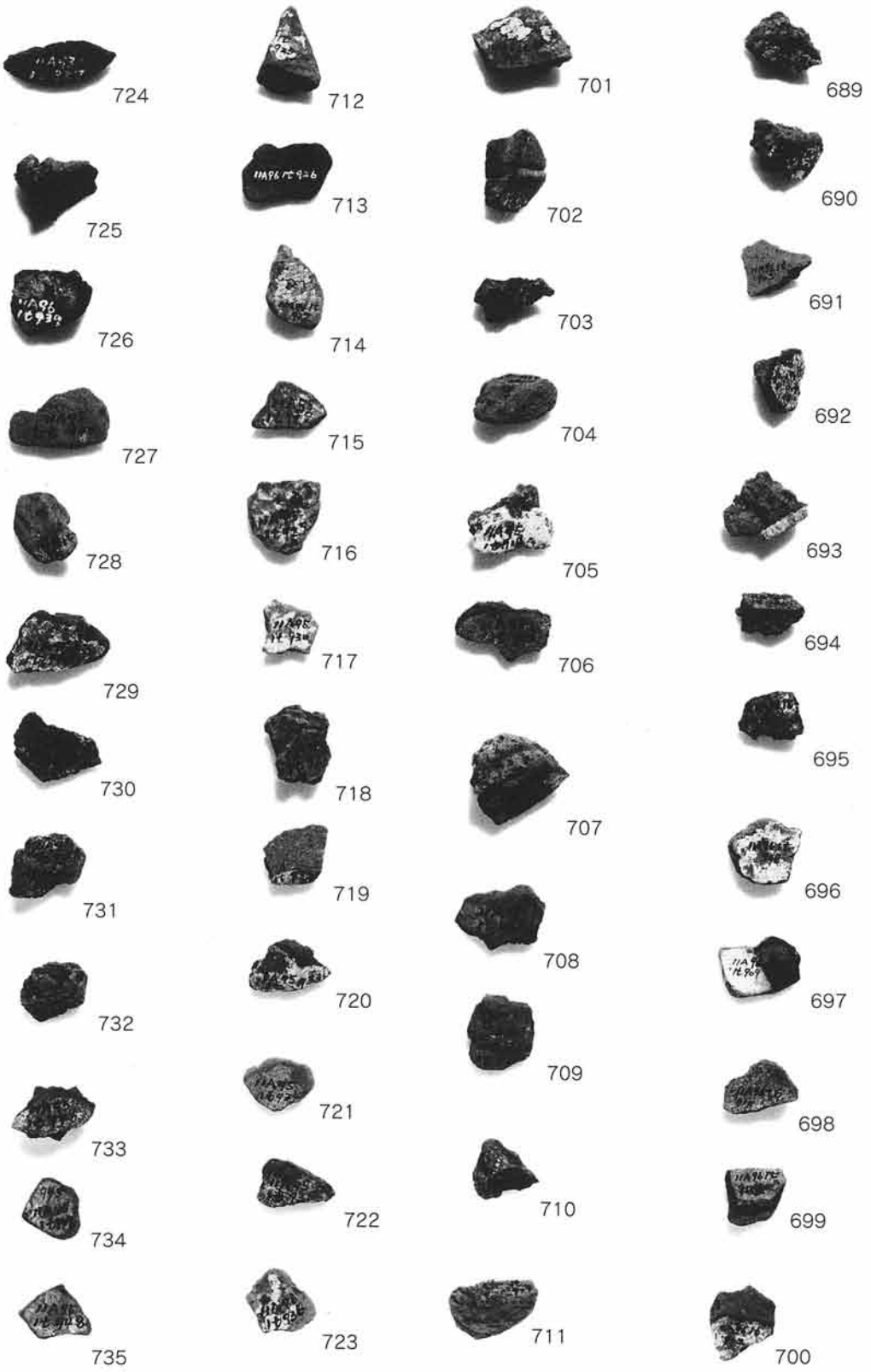
11A96547～11A96590（塑壁）



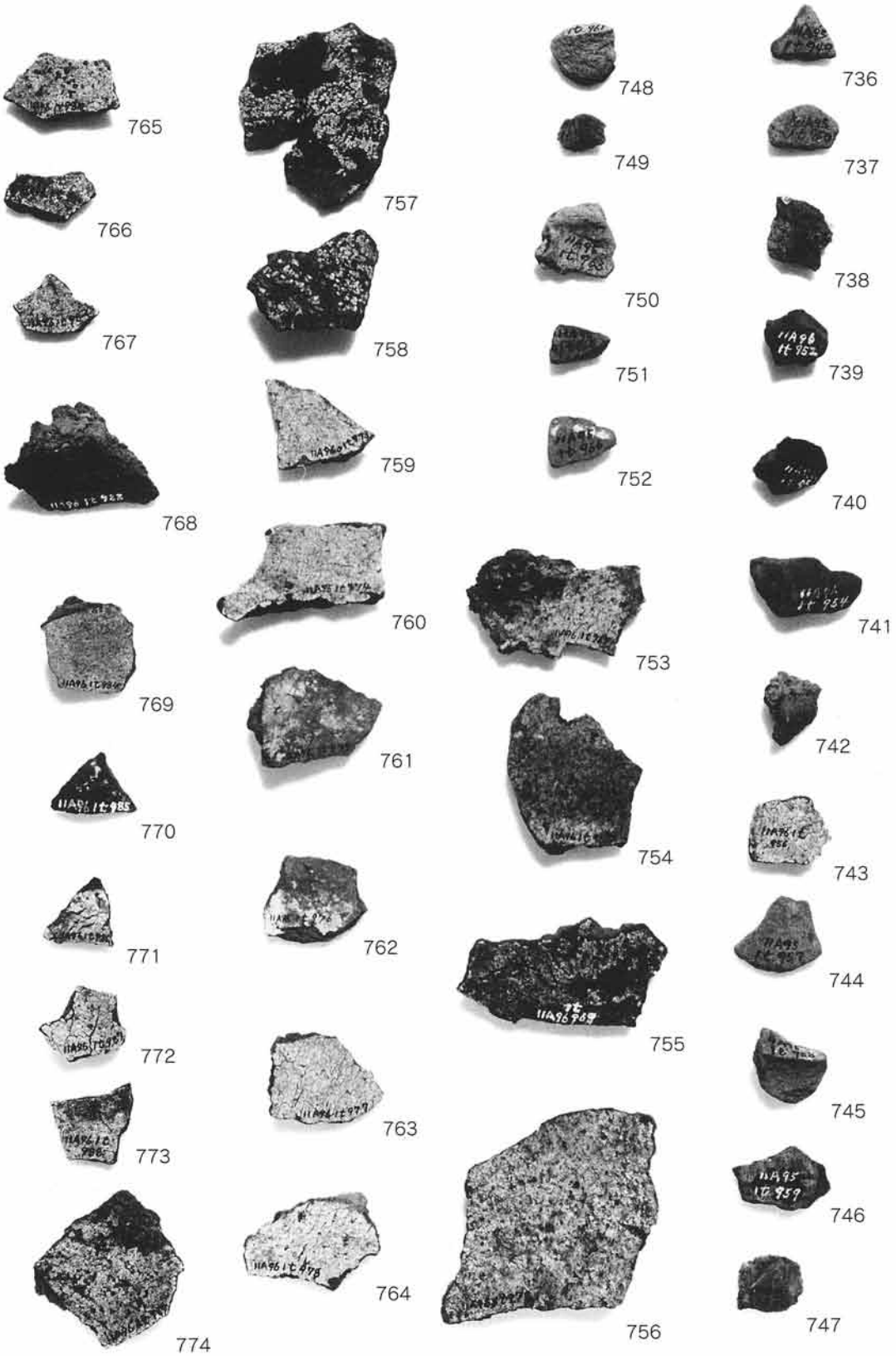
11A96591～11A96639（塑壁）



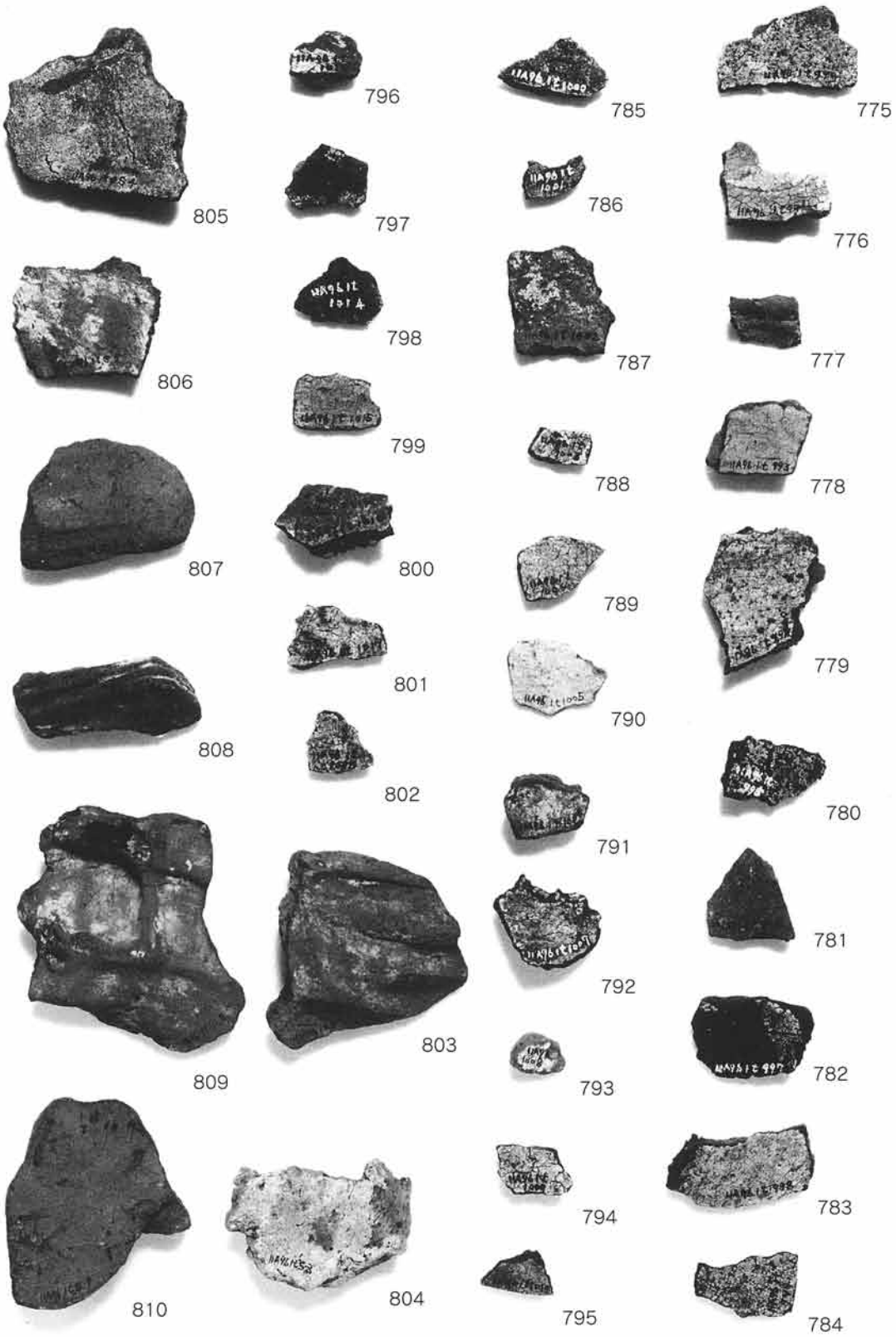
11A96640～11A96688（塑像・塑壁）



11A96689～11A96735（塑壁）



11A96736～11A96774（塑壁）



11A96775～11A96810（塑壁）

828

829

830

831

832

833

834

820

821

822

823

824

825

826

827

811

812

813

814

815

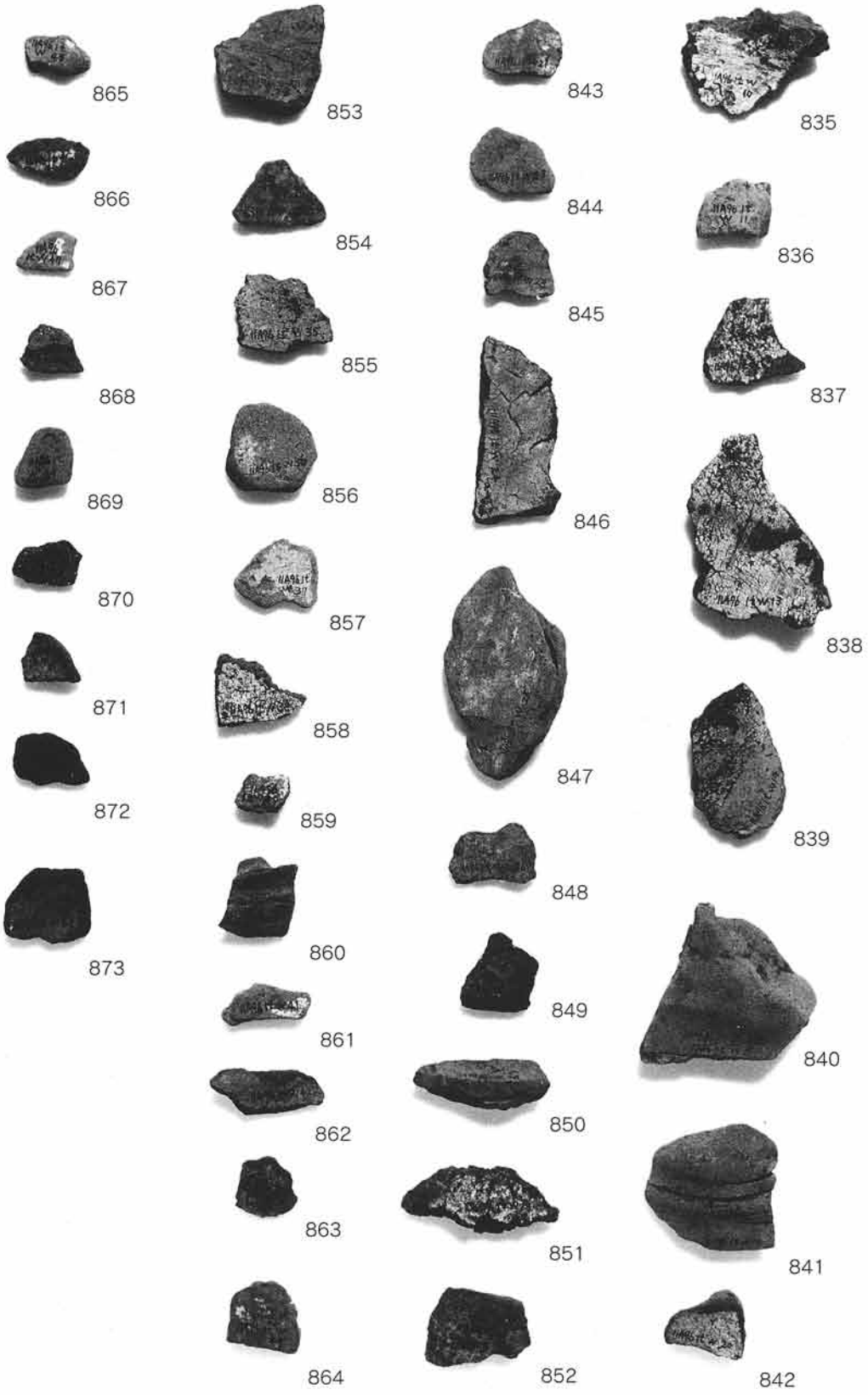
816

817

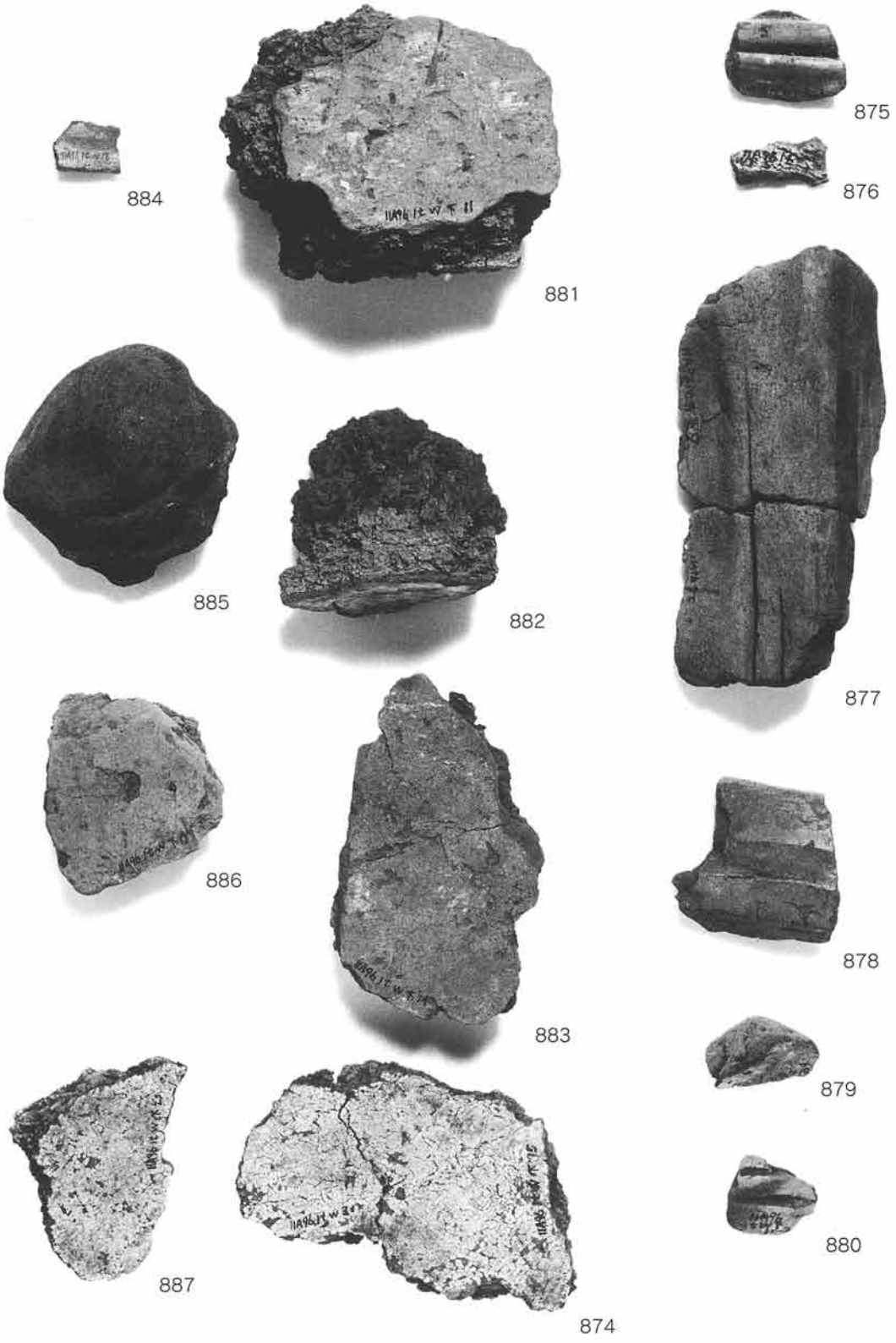
818

819

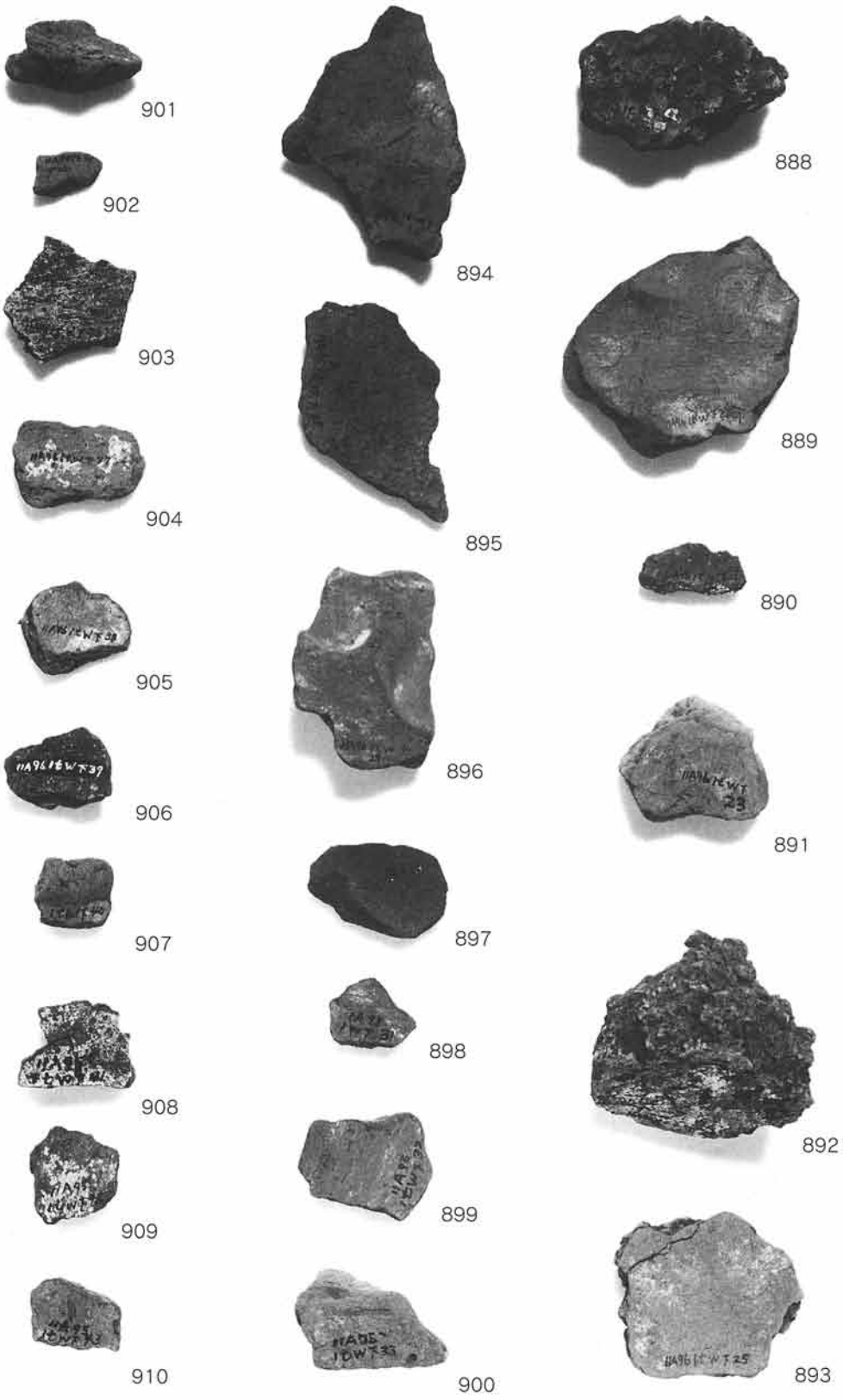
11A96811～11A96834（塑壁）



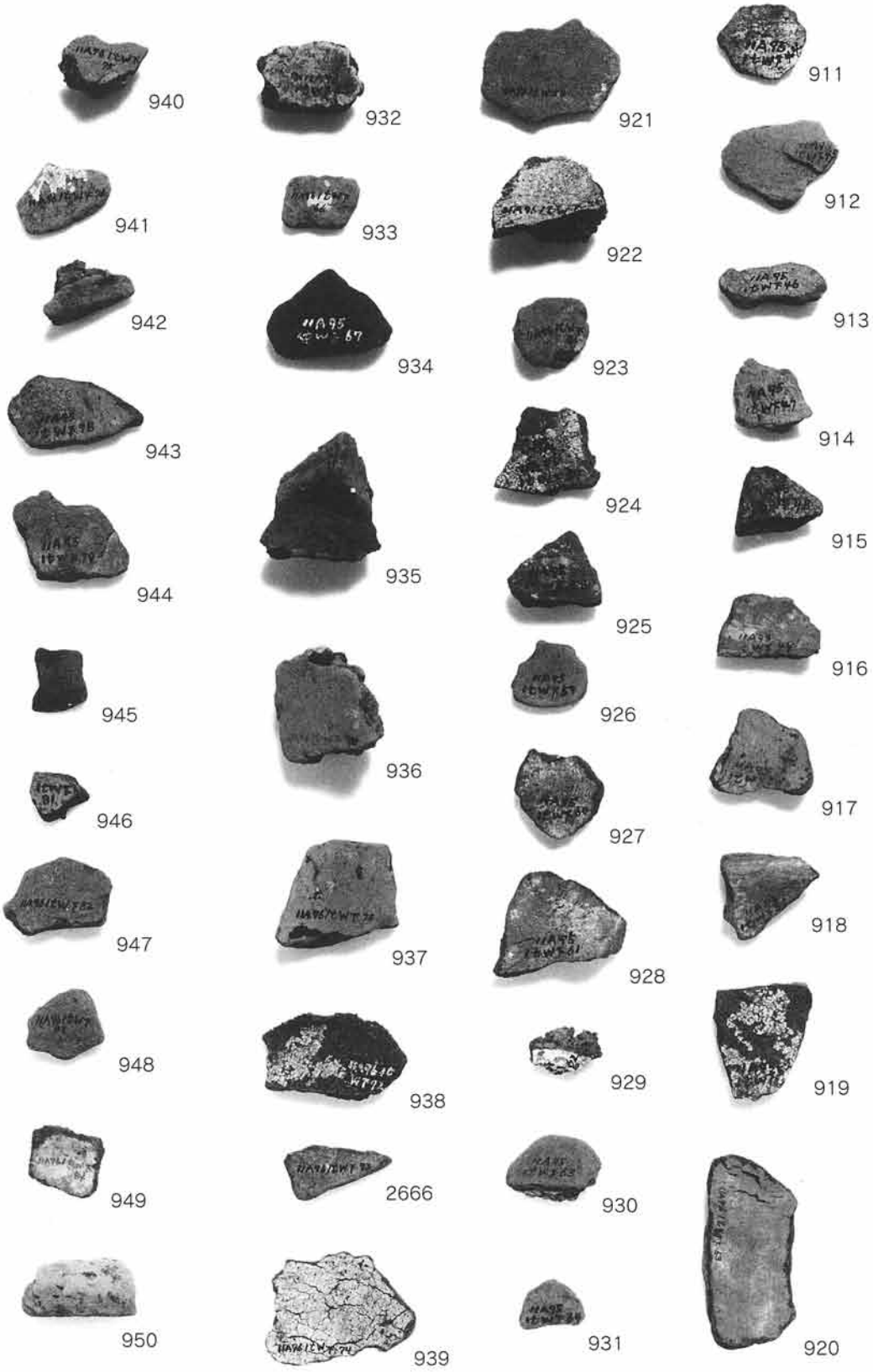
11A96835~11A96873（塑壁）



11A96874～11A96887（塑壁）



11A96888～11A96910（塑壁）



11A96911～11A96950（塑像・塑壁）

970

971

972

973

974

975

976

977

961

962

963

964

965

966

967

968

969

951

952

953

954

955

956

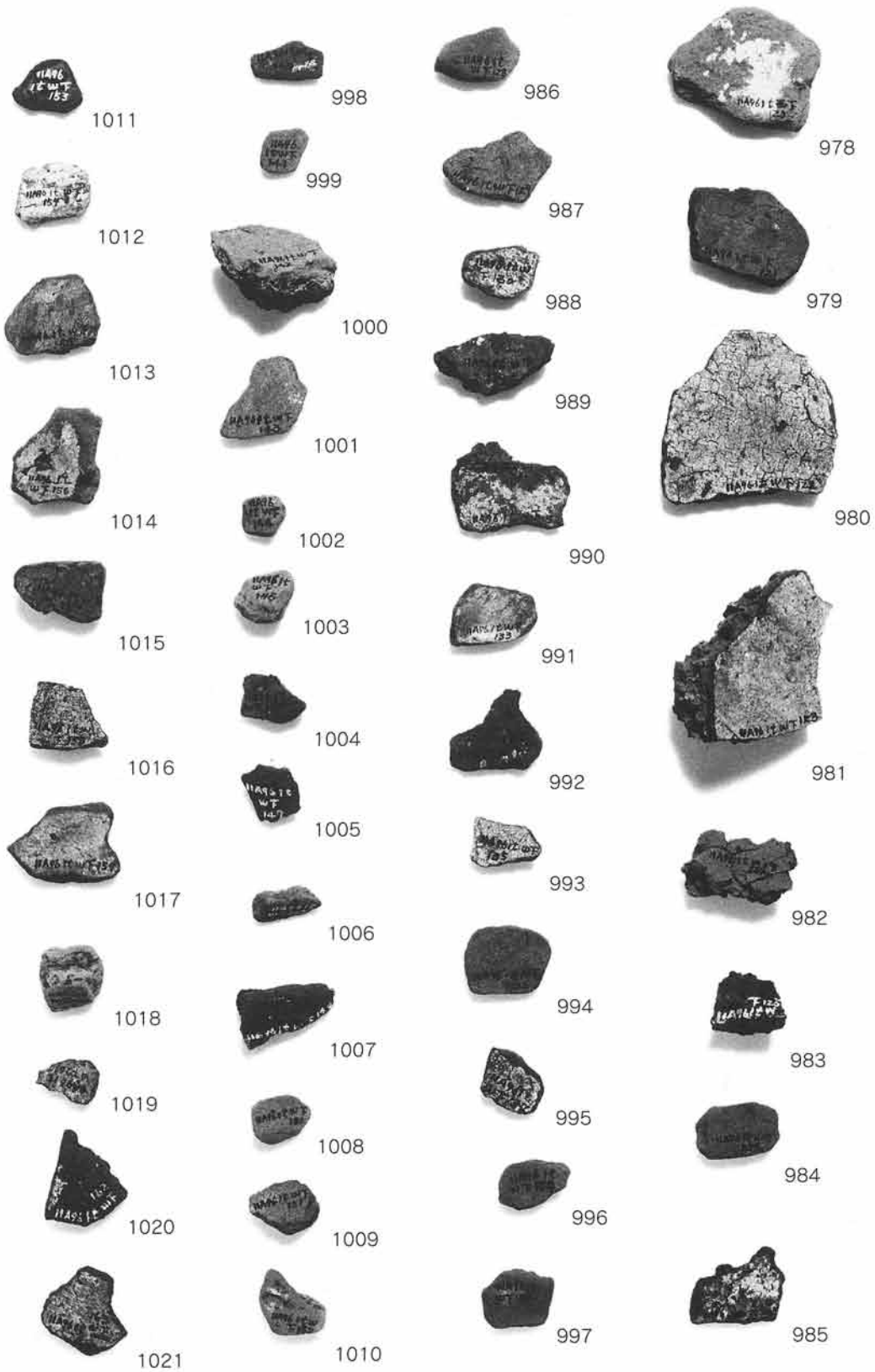
957

958

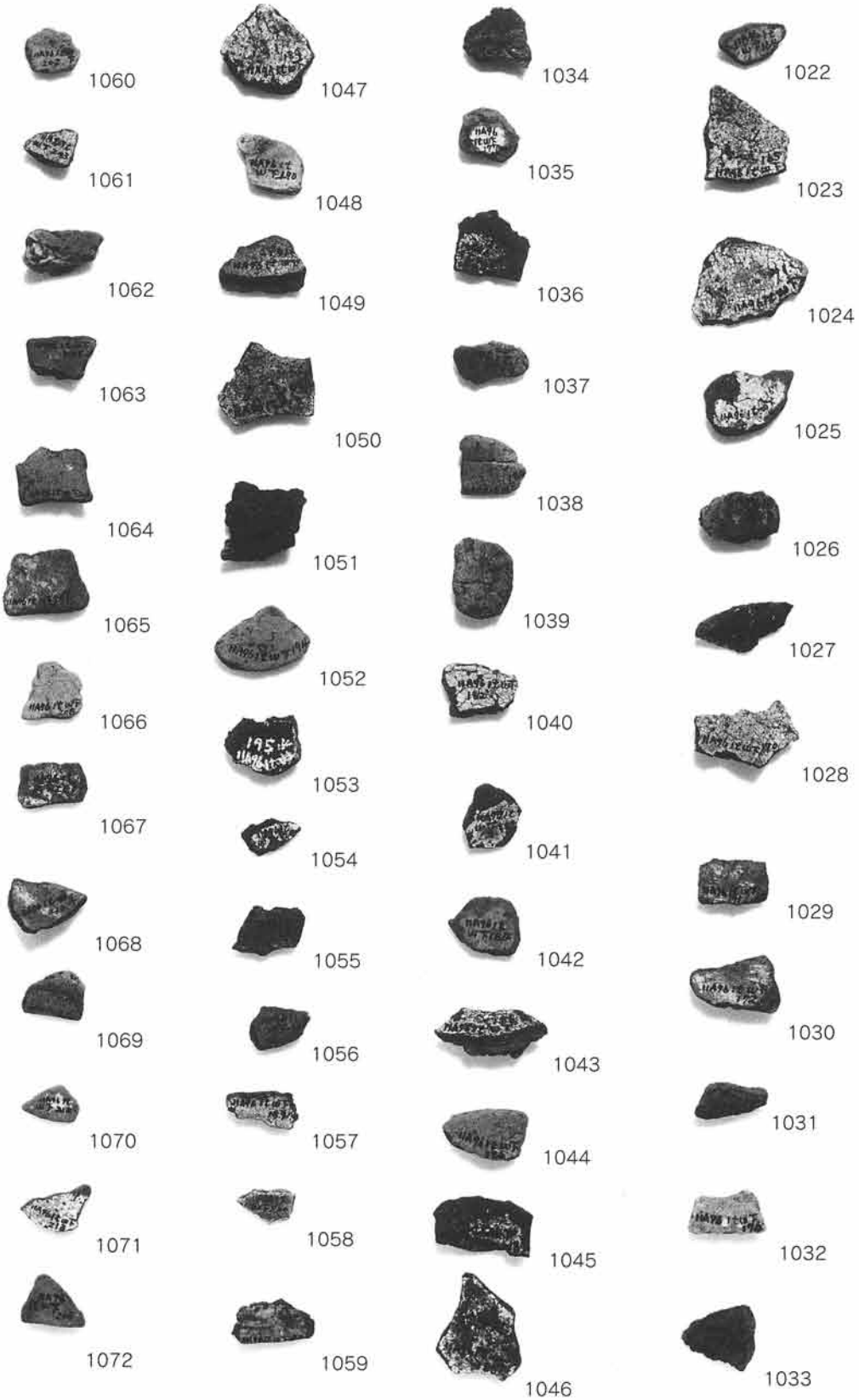
959

960

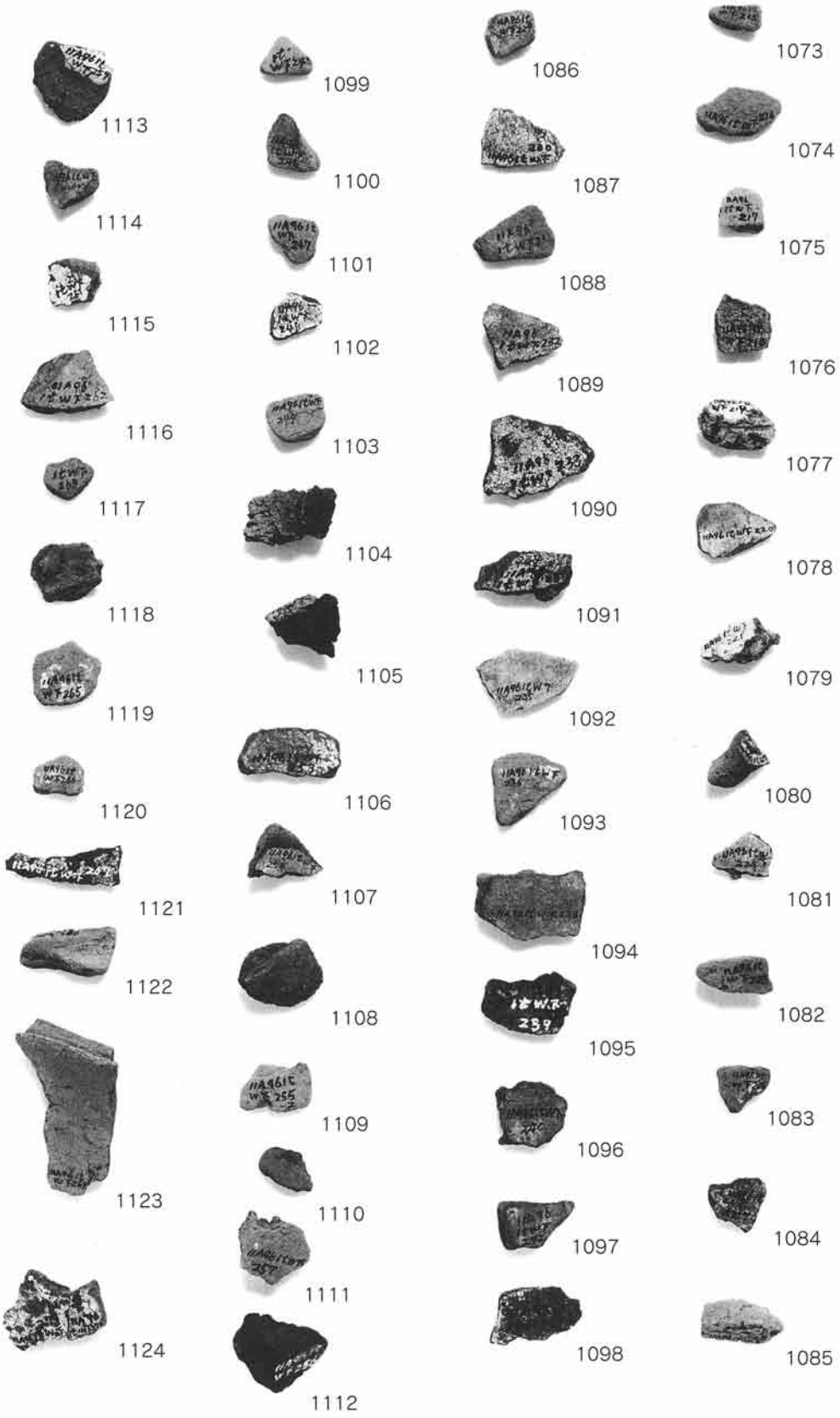
11A96951～11A96977（塑壁）



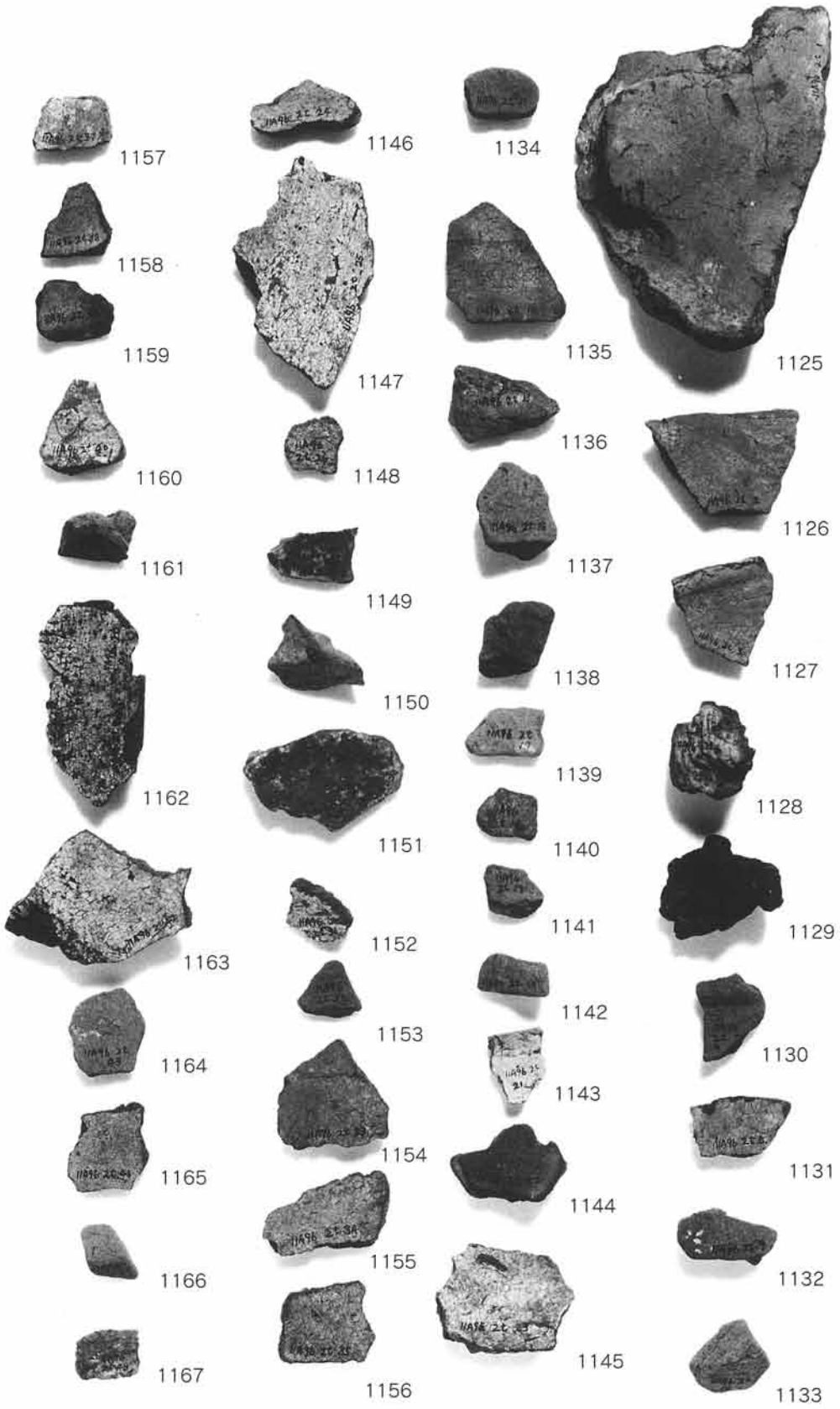
11A96978～11A961021（塑壁）



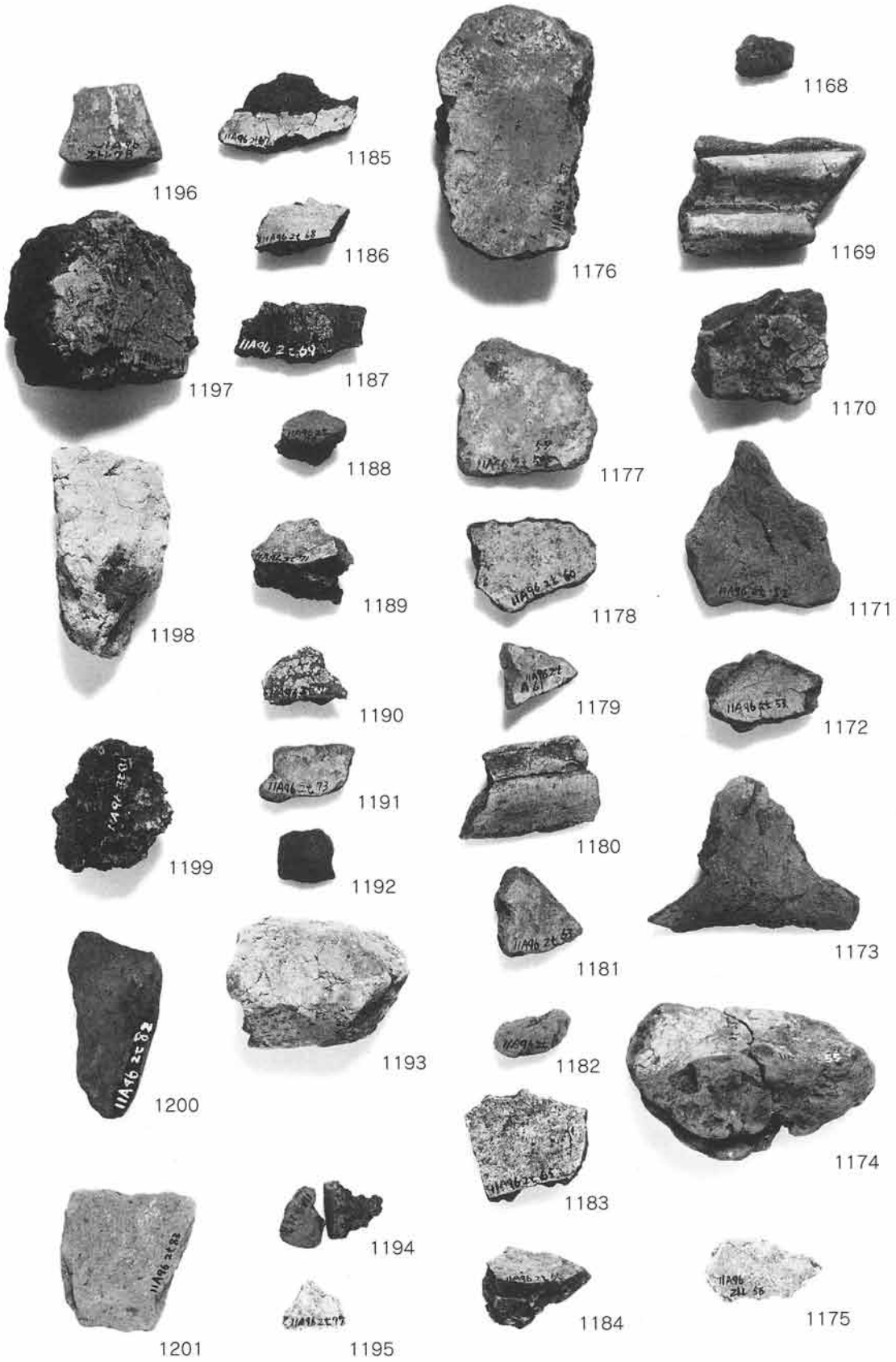
11A961022～11A961072（塑壁）



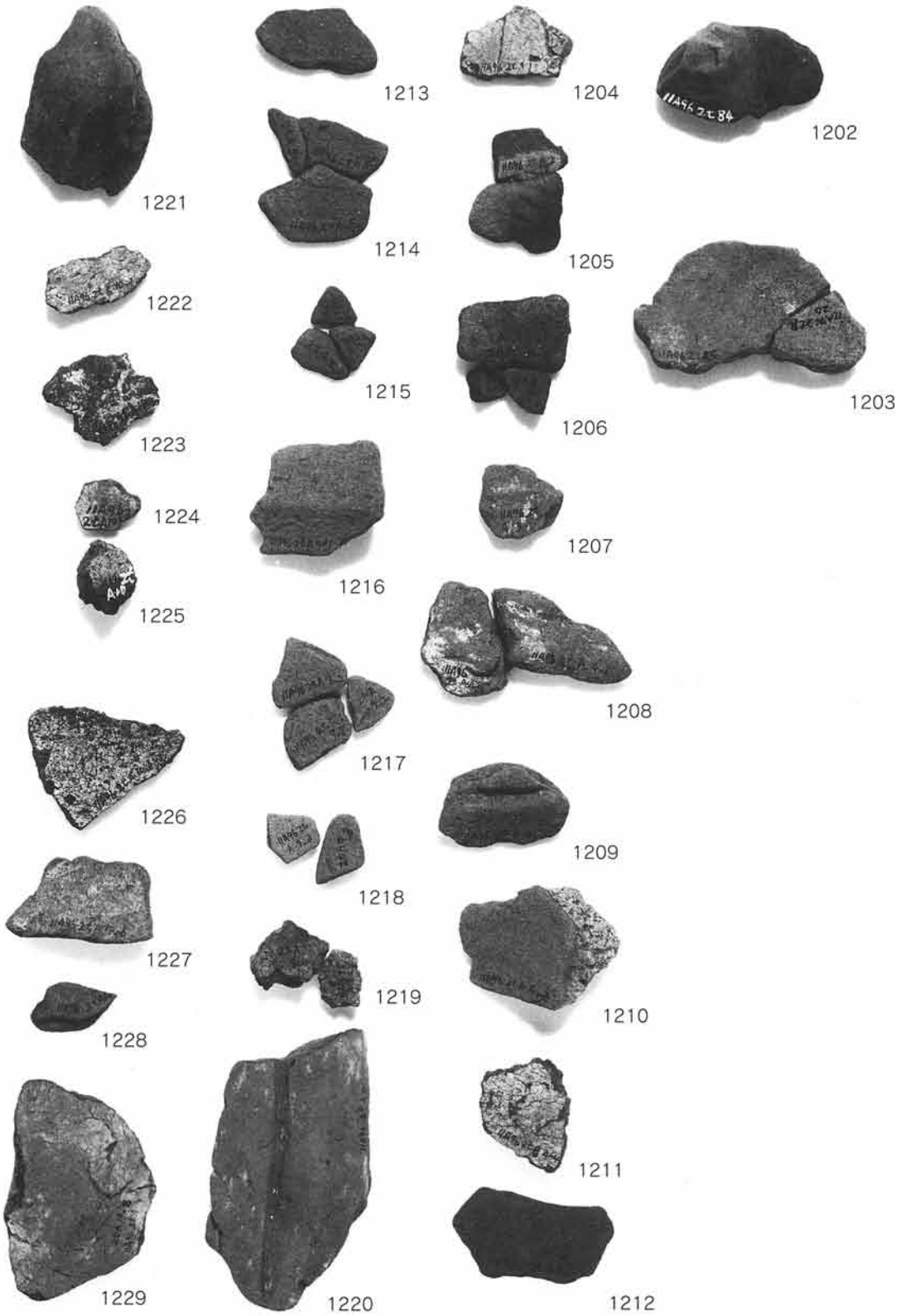
11A961073～11A961124（塑壁）



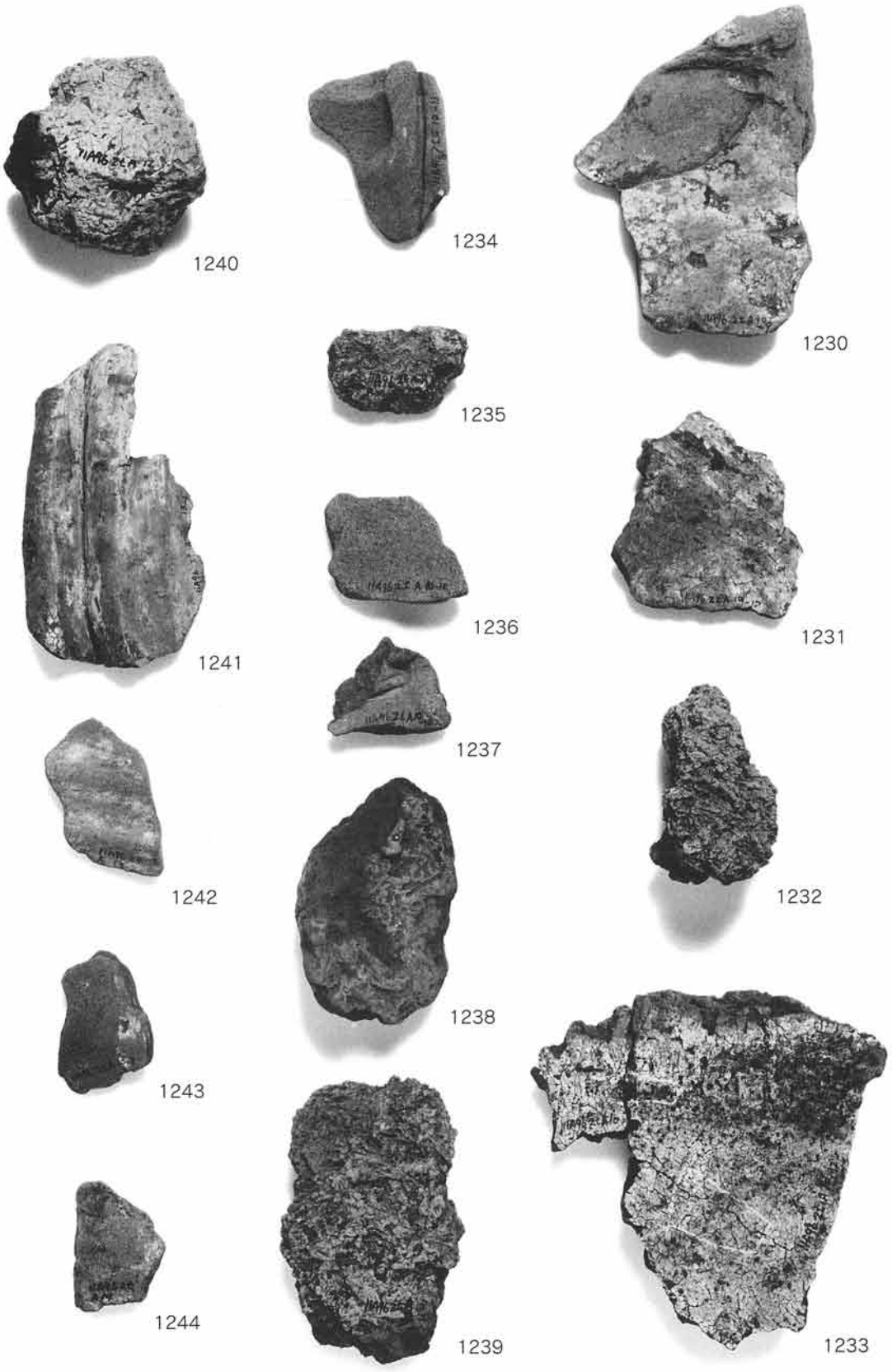
11A961125～11A961167（塑壁）



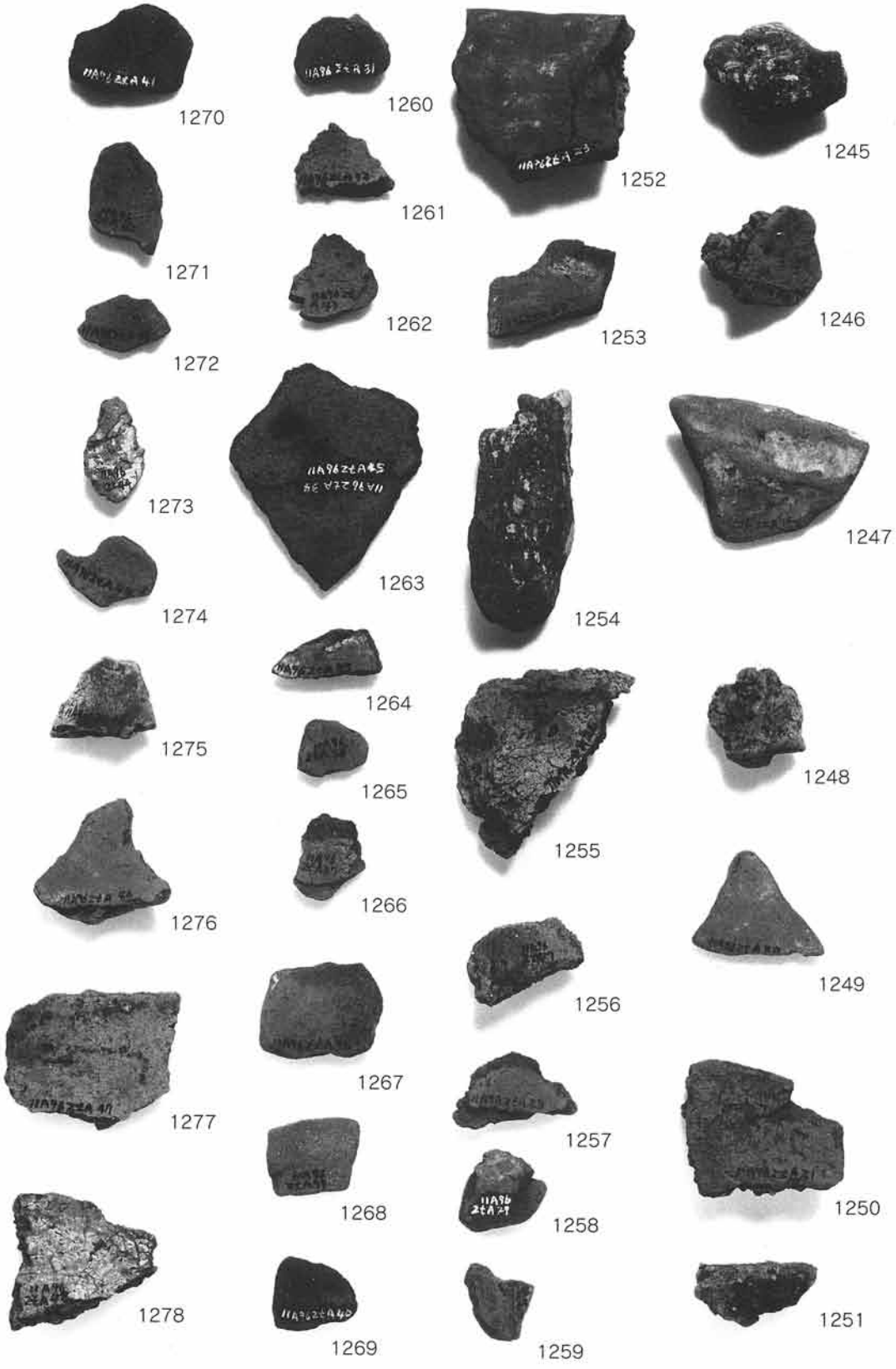
11A961168～11A961201（塑像・塑壁）



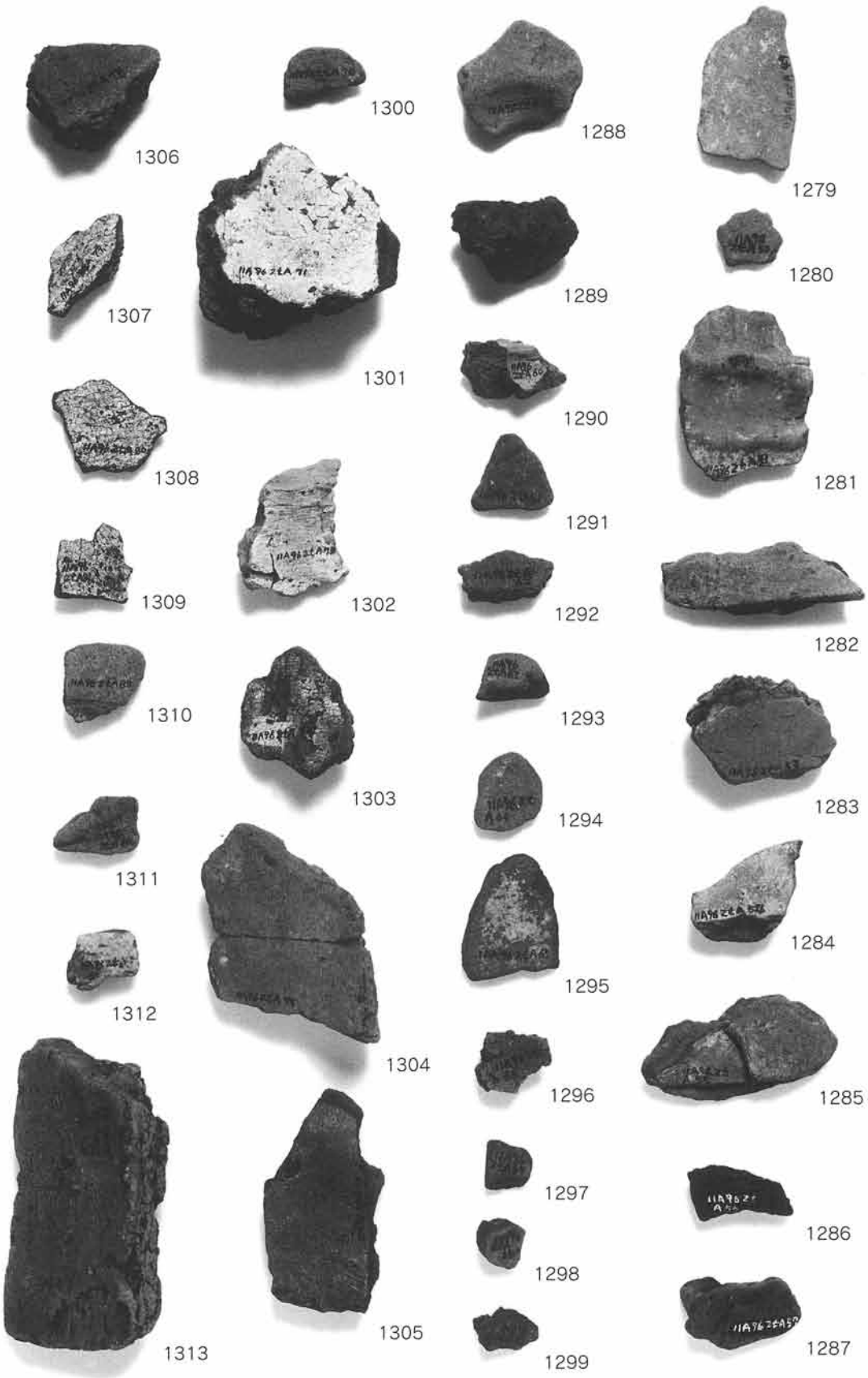
11A961202～11A961229（塑壁）



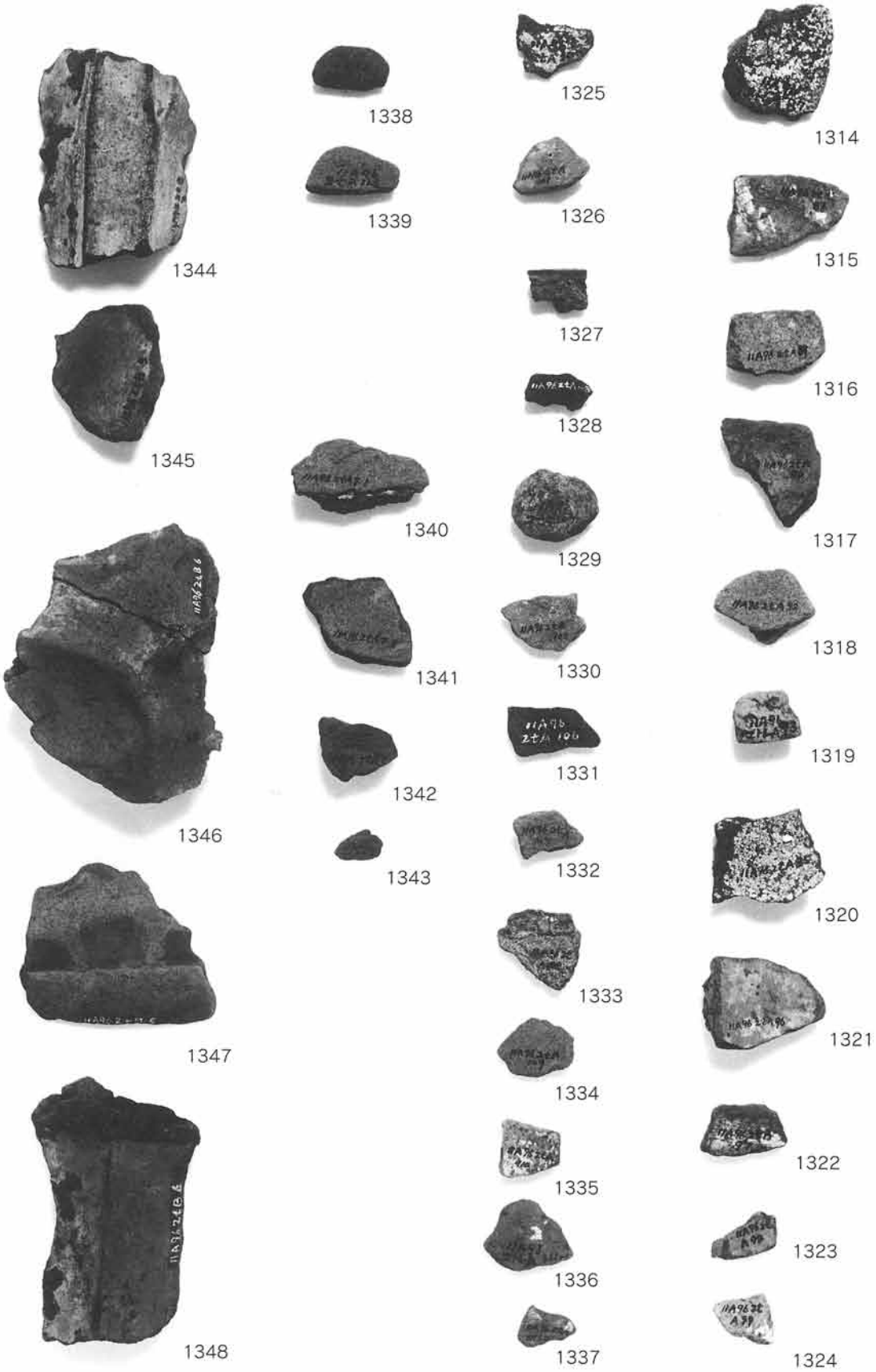
11A961230～11A961244（塑壁）



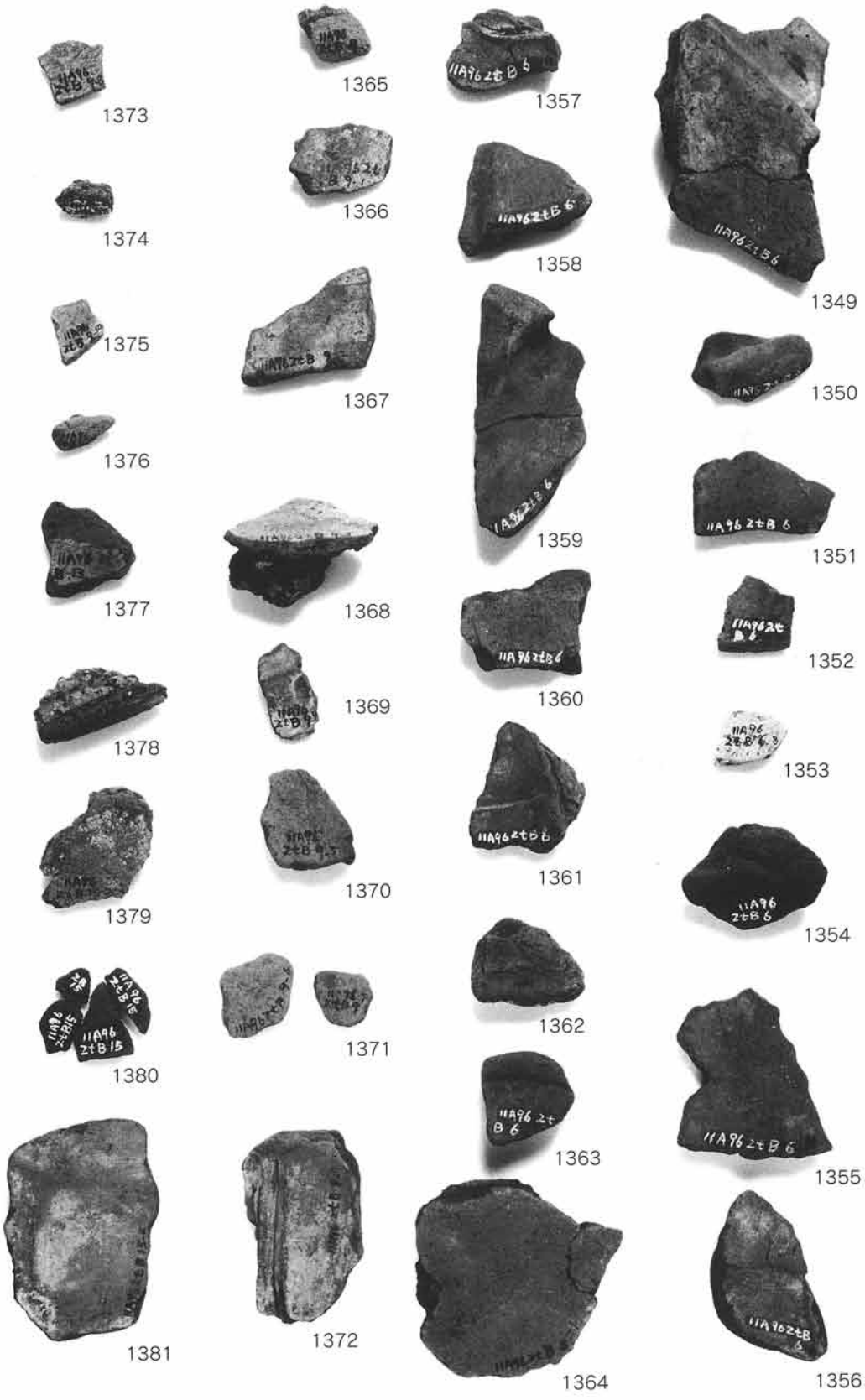
11A961245～11A961278（塑壁）



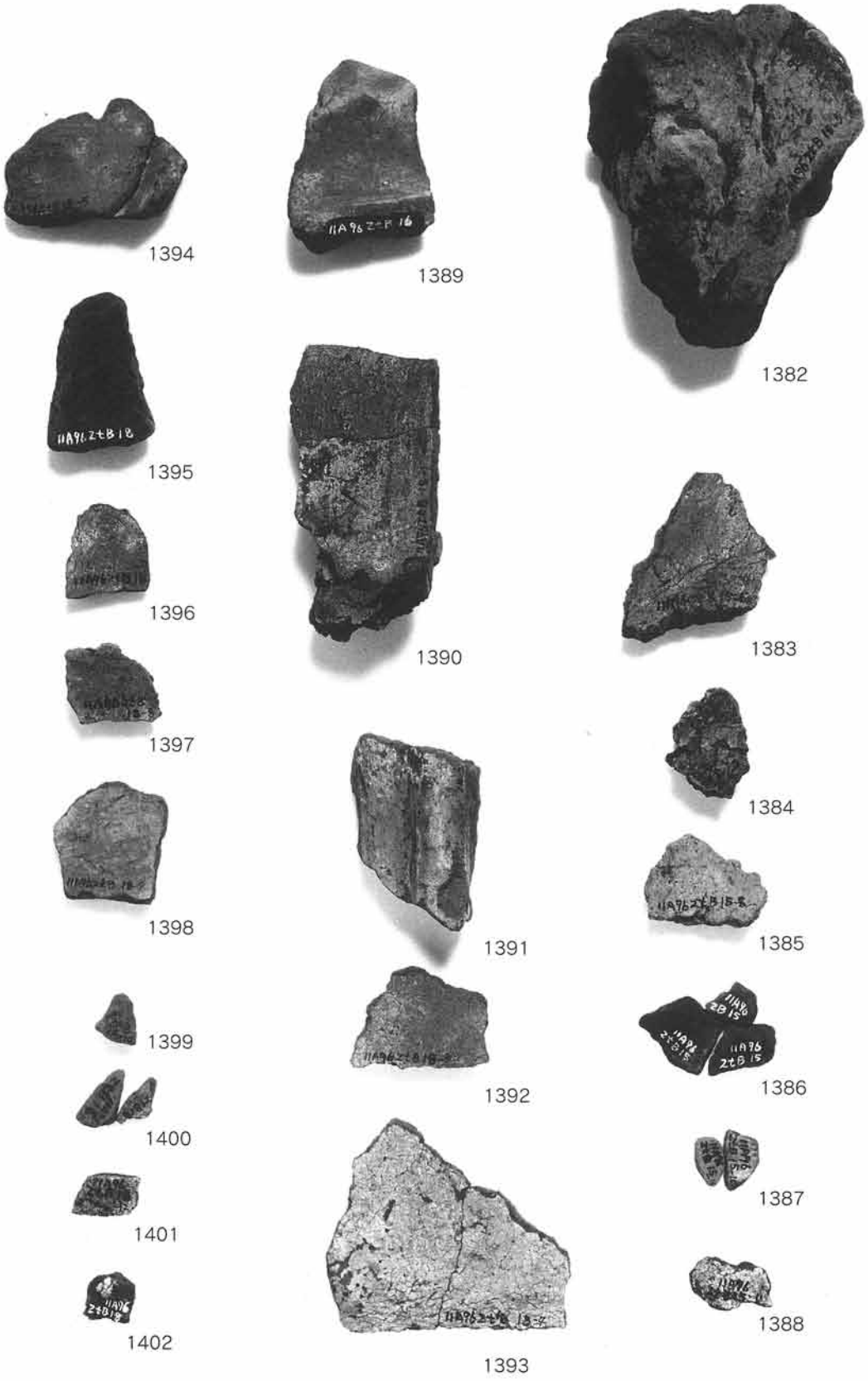
11A961279～11A961313（塑壁）



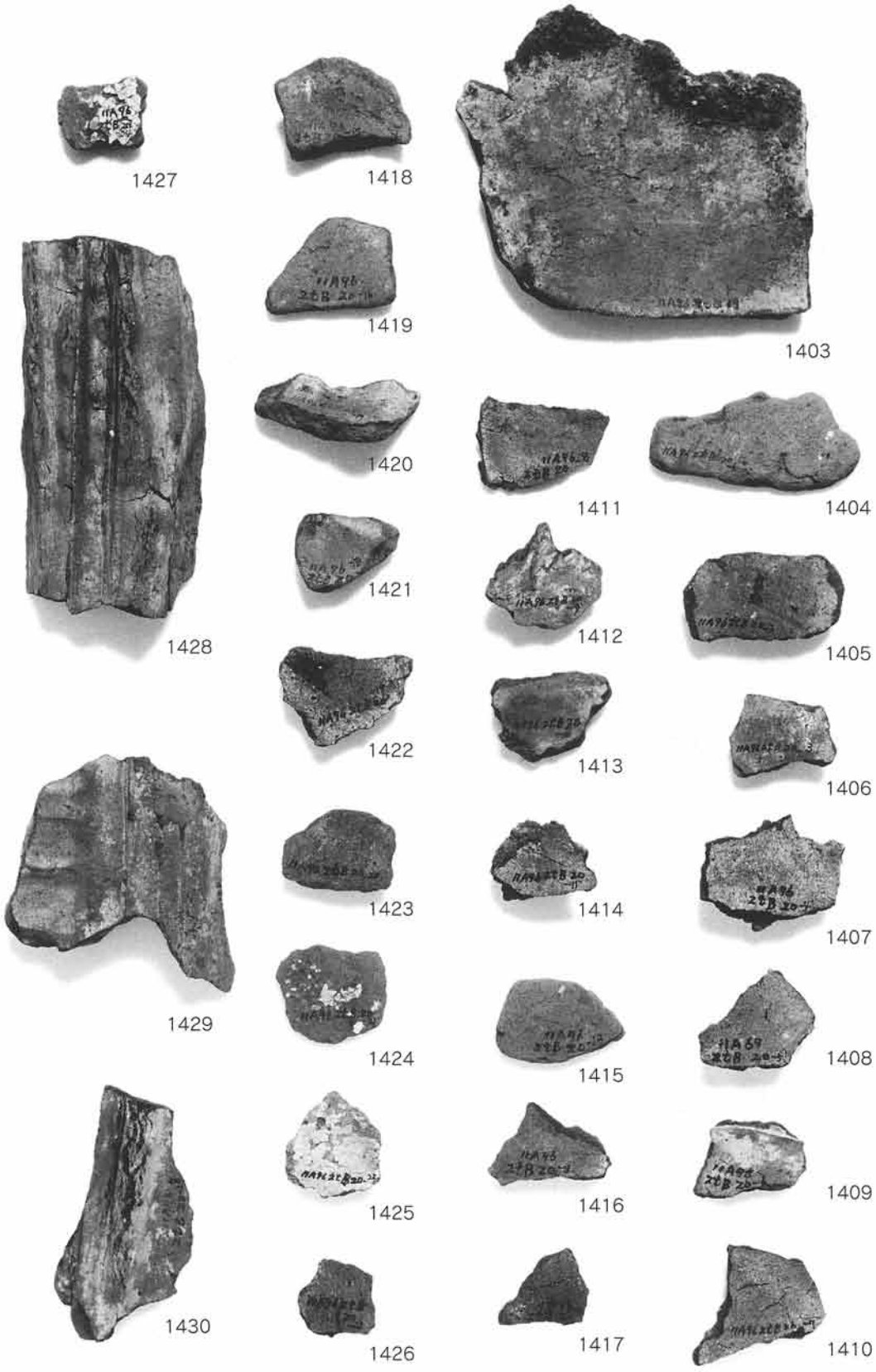
11A961314～11A961348（塑壁）



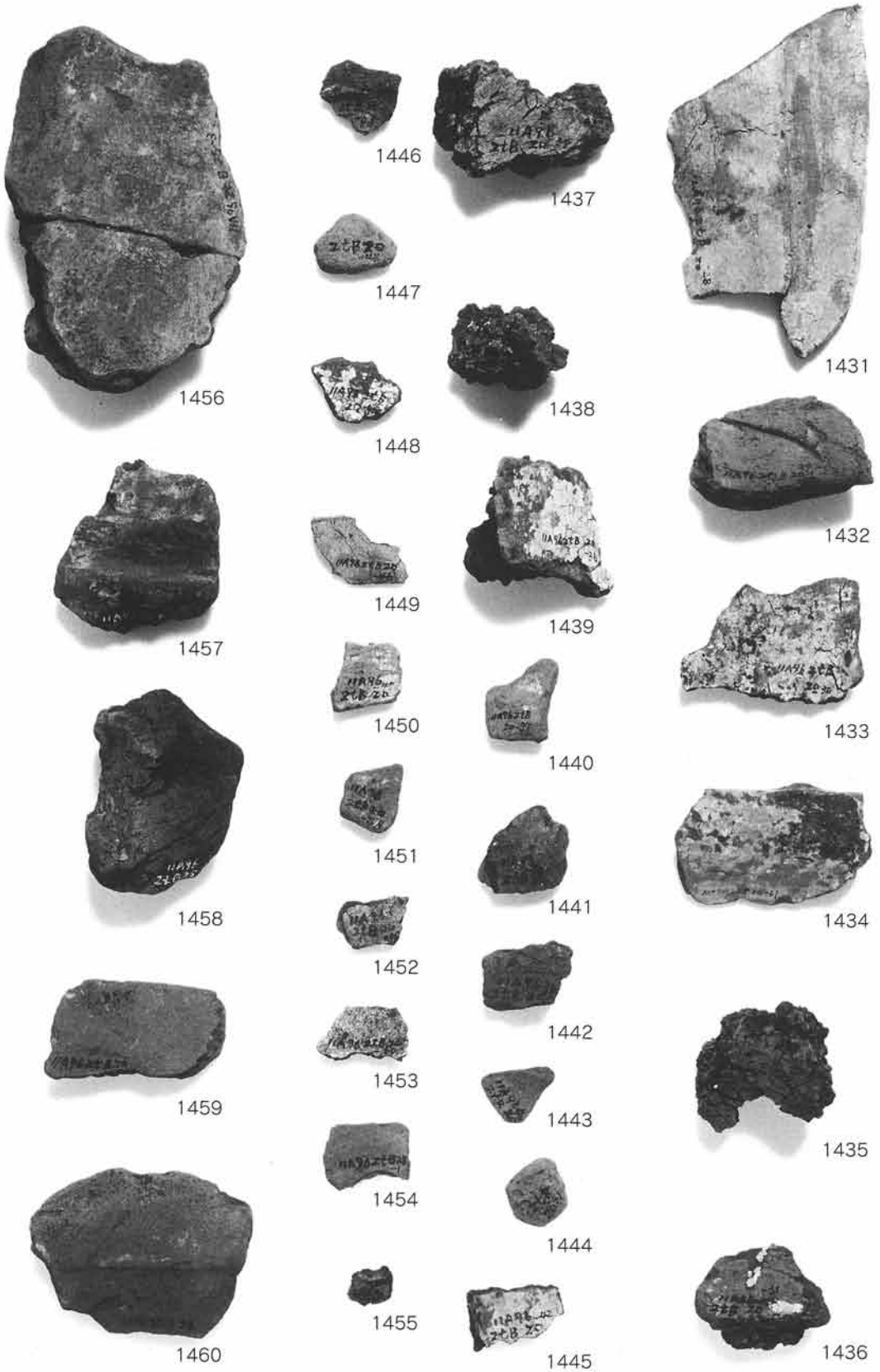
11A961349～11A961381（塑壁）



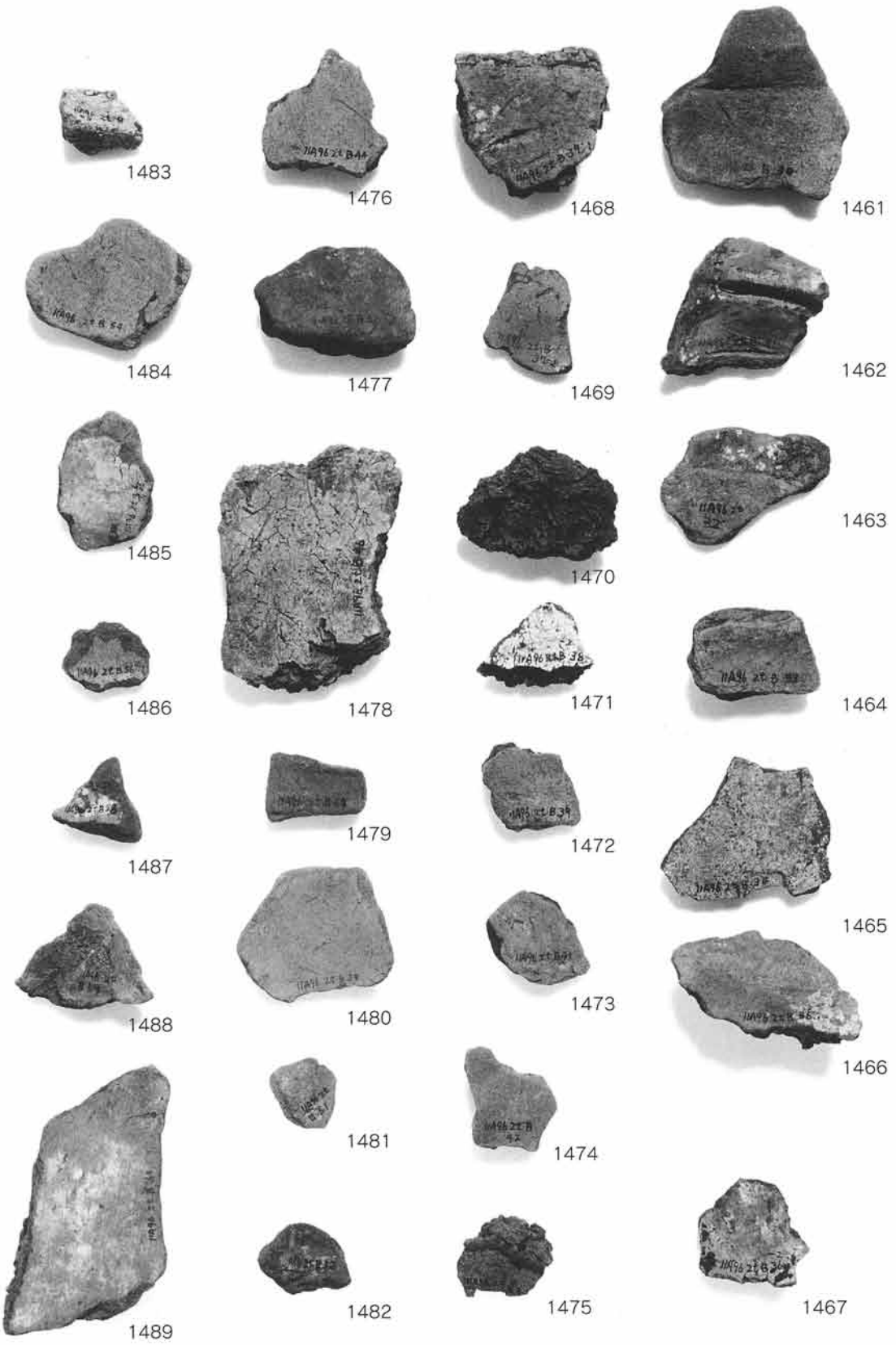
11A961382～11A961402（塑壁）



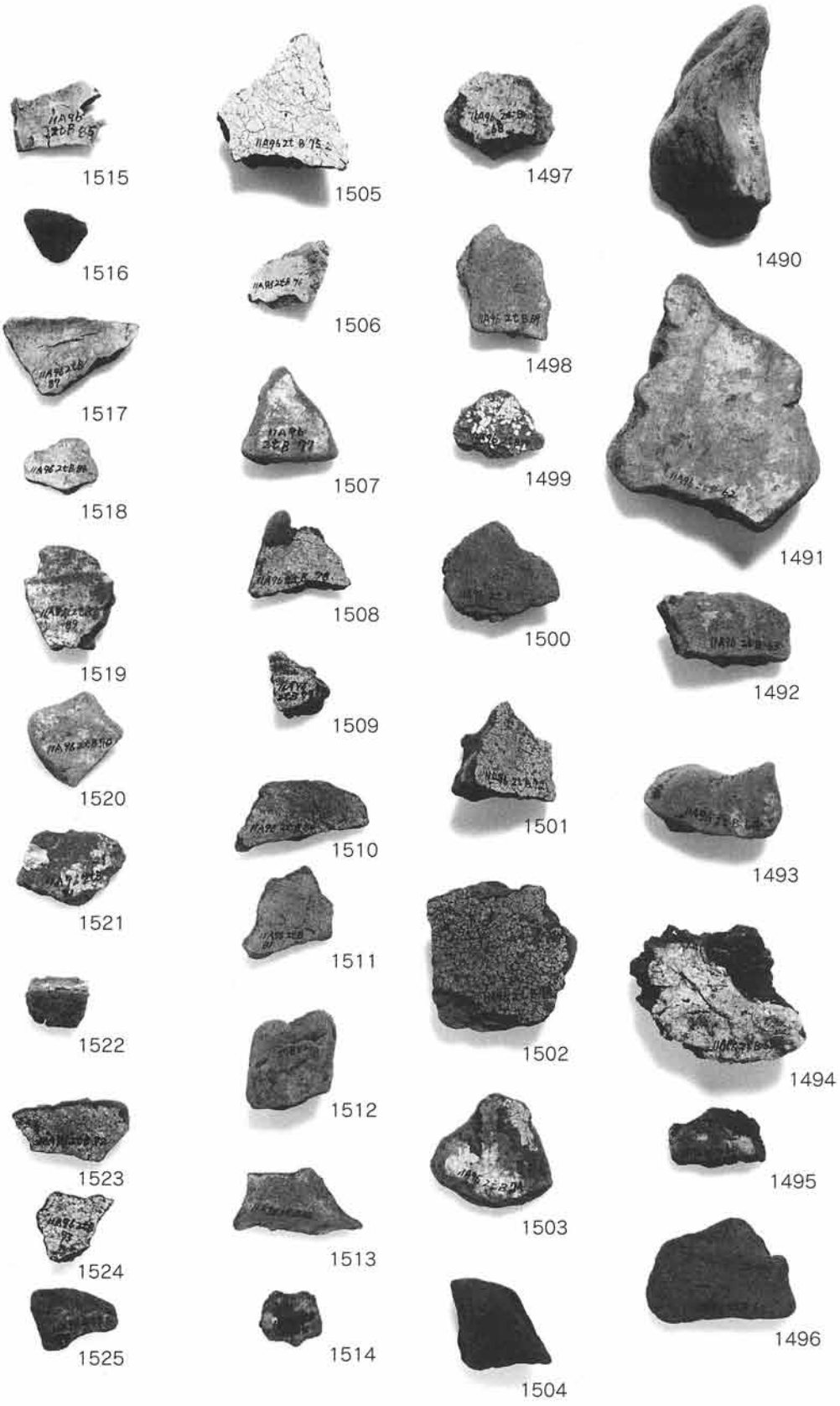
11A961403～11A961430（塑壁）



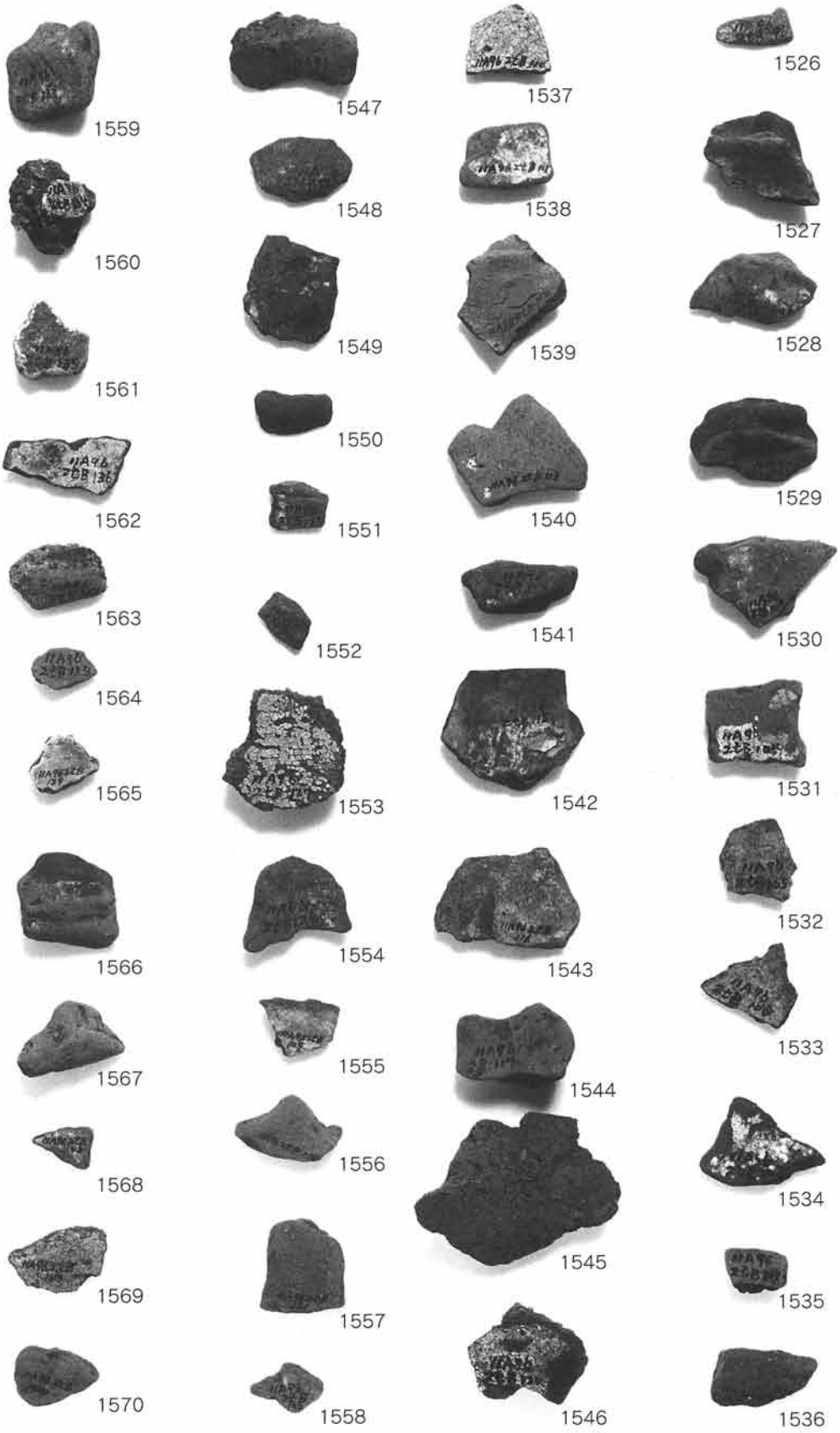
11A961431～11A961460（塑壁）



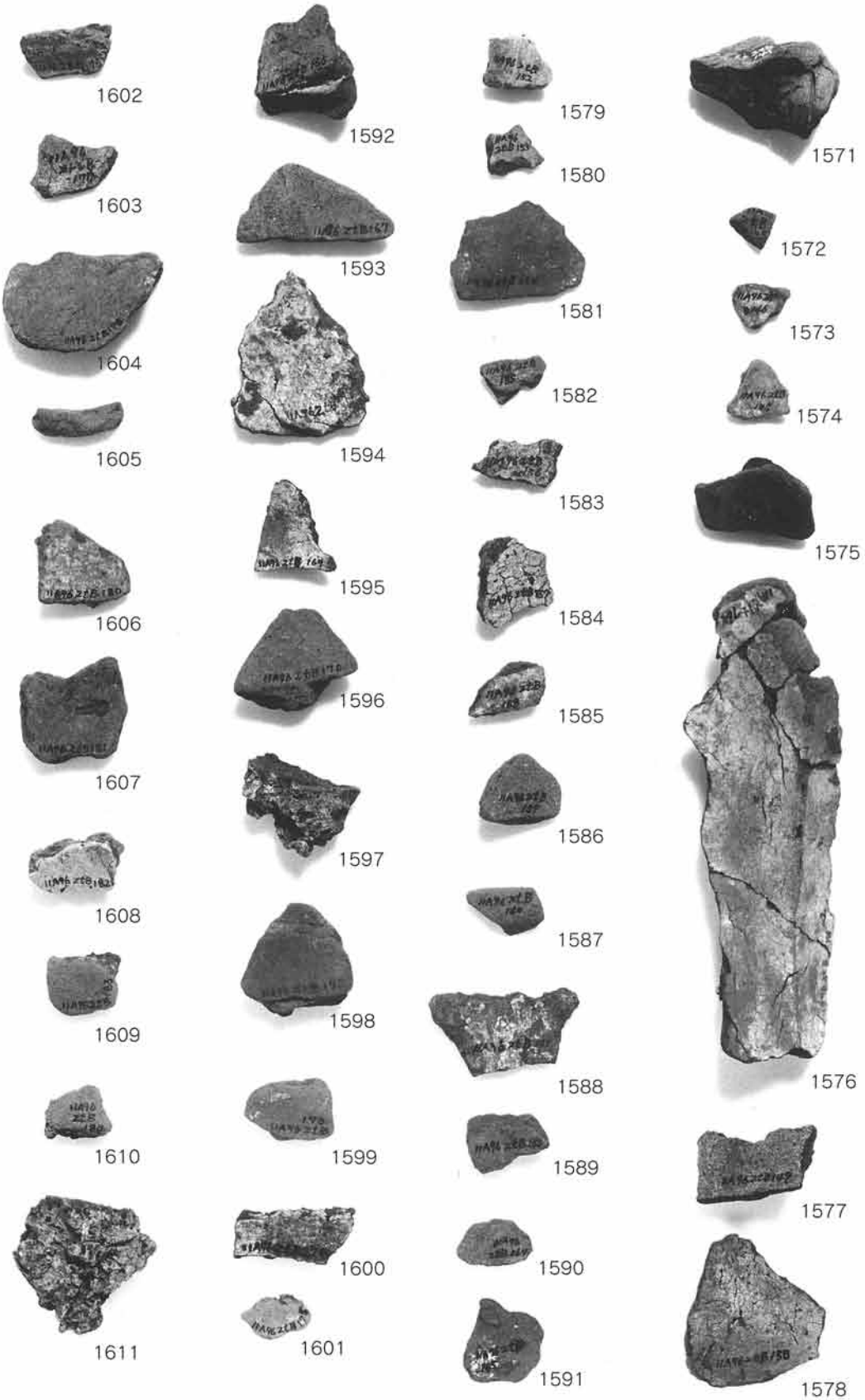
11A961461～11A961489（塑壁）



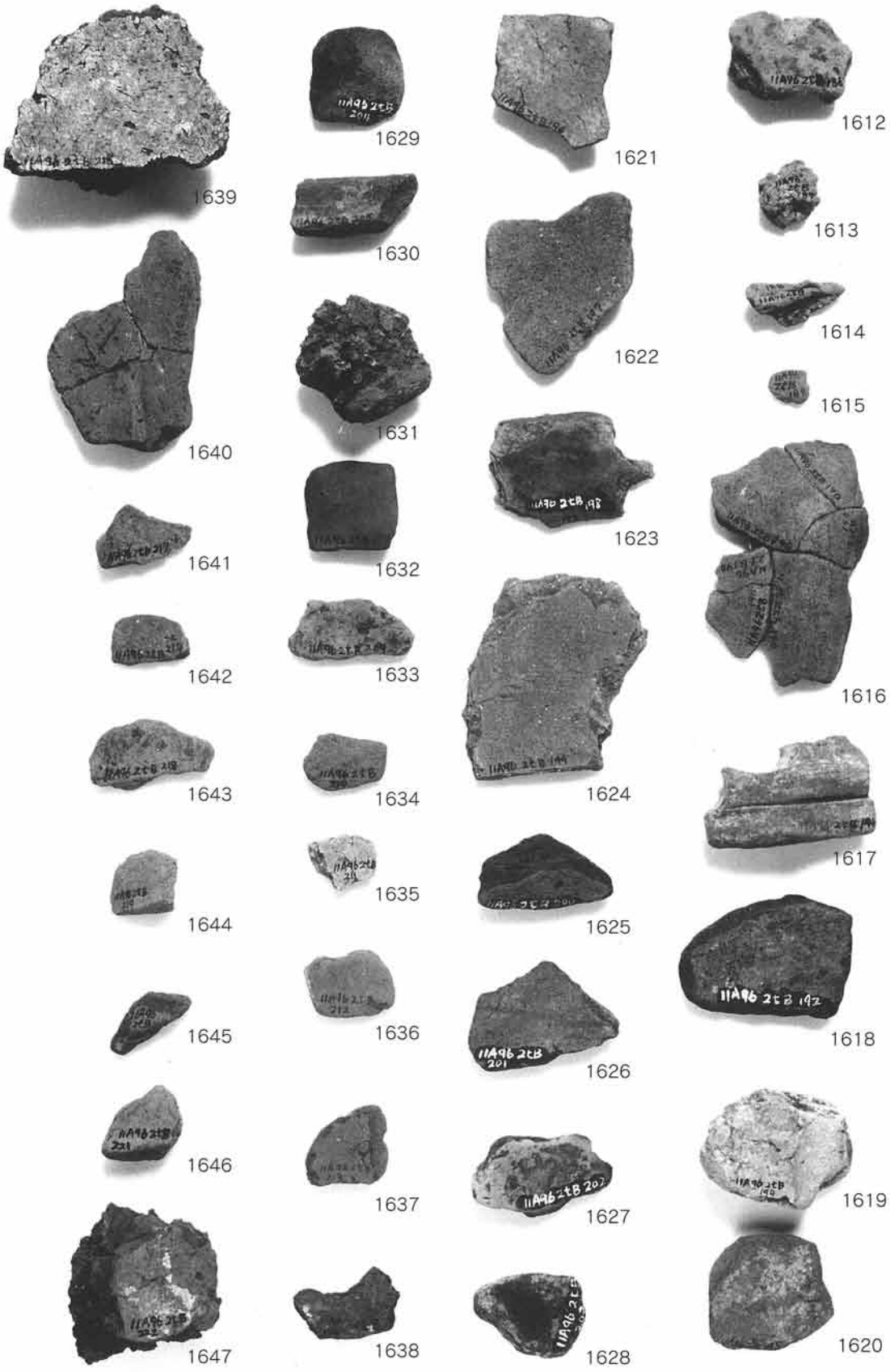
11A961490～11A961525（塑壁）



11A961526～11A961570（塑壁）



11A961571～11A961611（塑壁）



11A961612～11A961647（塑壁）

1666

1660

1661

1662

1648

1649

1650

1667

1663

1651

1652

1653

1668

1664

1654

1655

1656

1669

1665

1657

1658

1659

11A961648～11A961669（塑壁）

1682

1683

1684

1685

1686

1687

1688

1689

1690

1675

1676

1677

1678

1679

1680

1681

1670

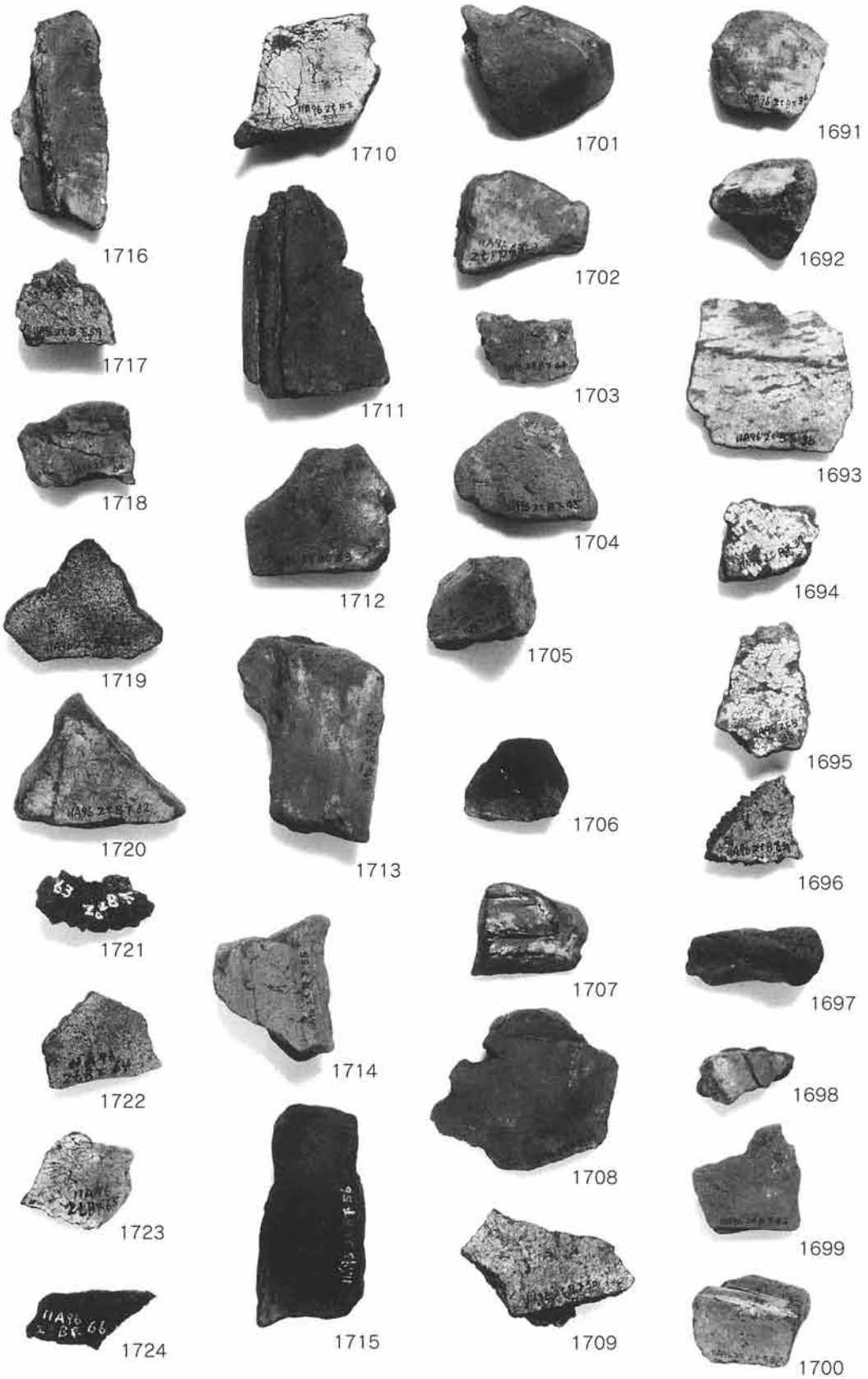
1671

1672

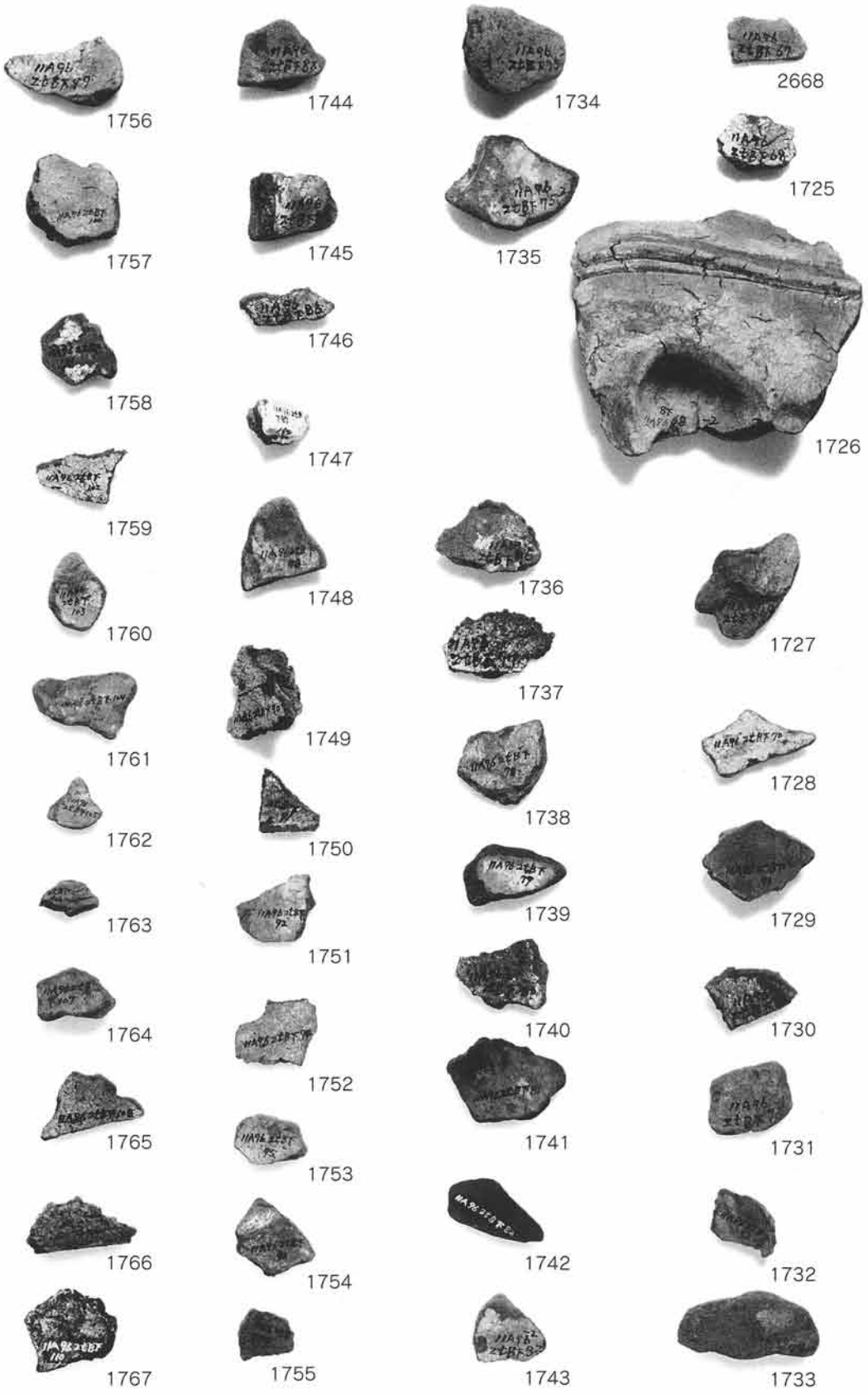
1673

1674

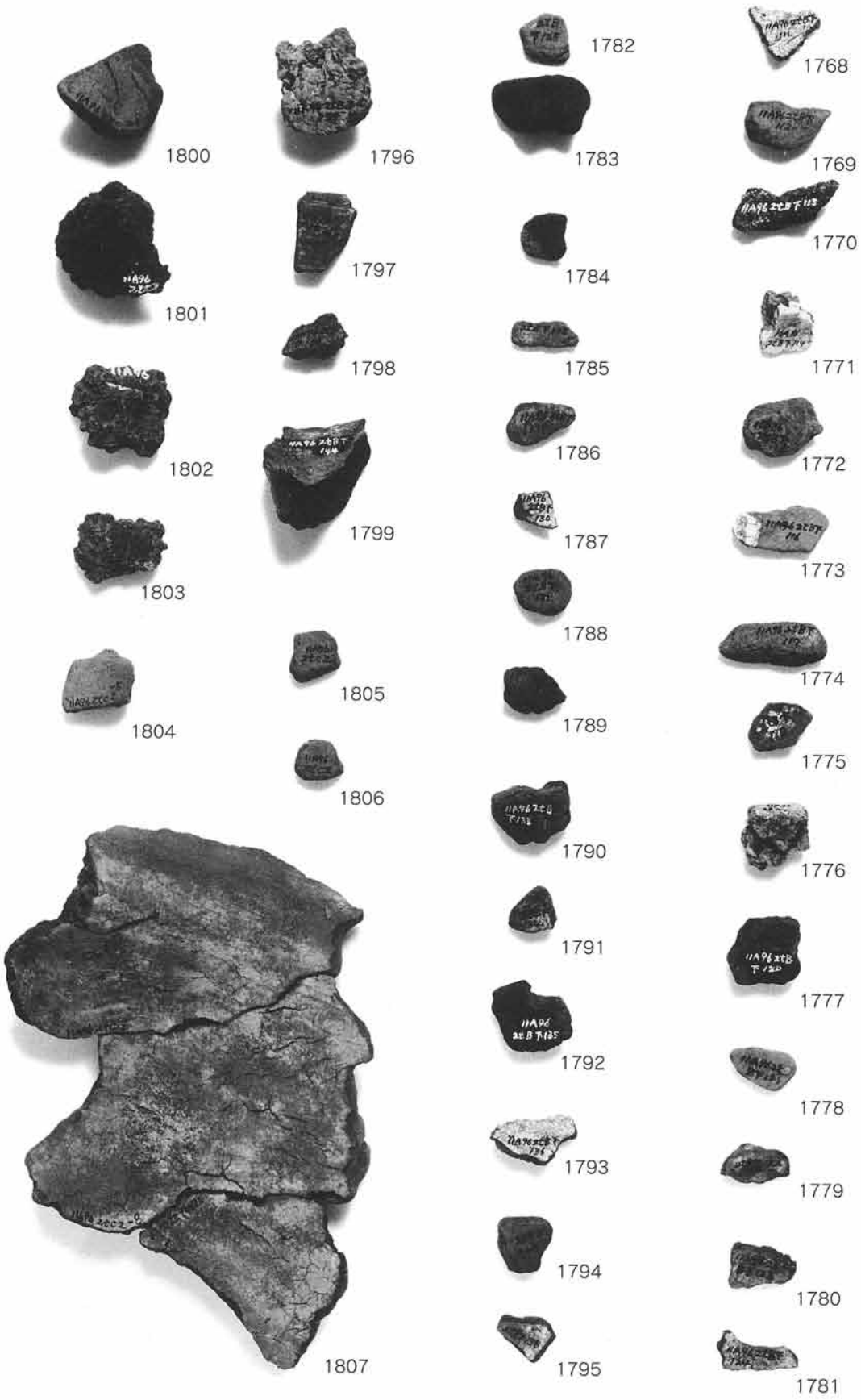
11A961670～11A961690（塑壁）



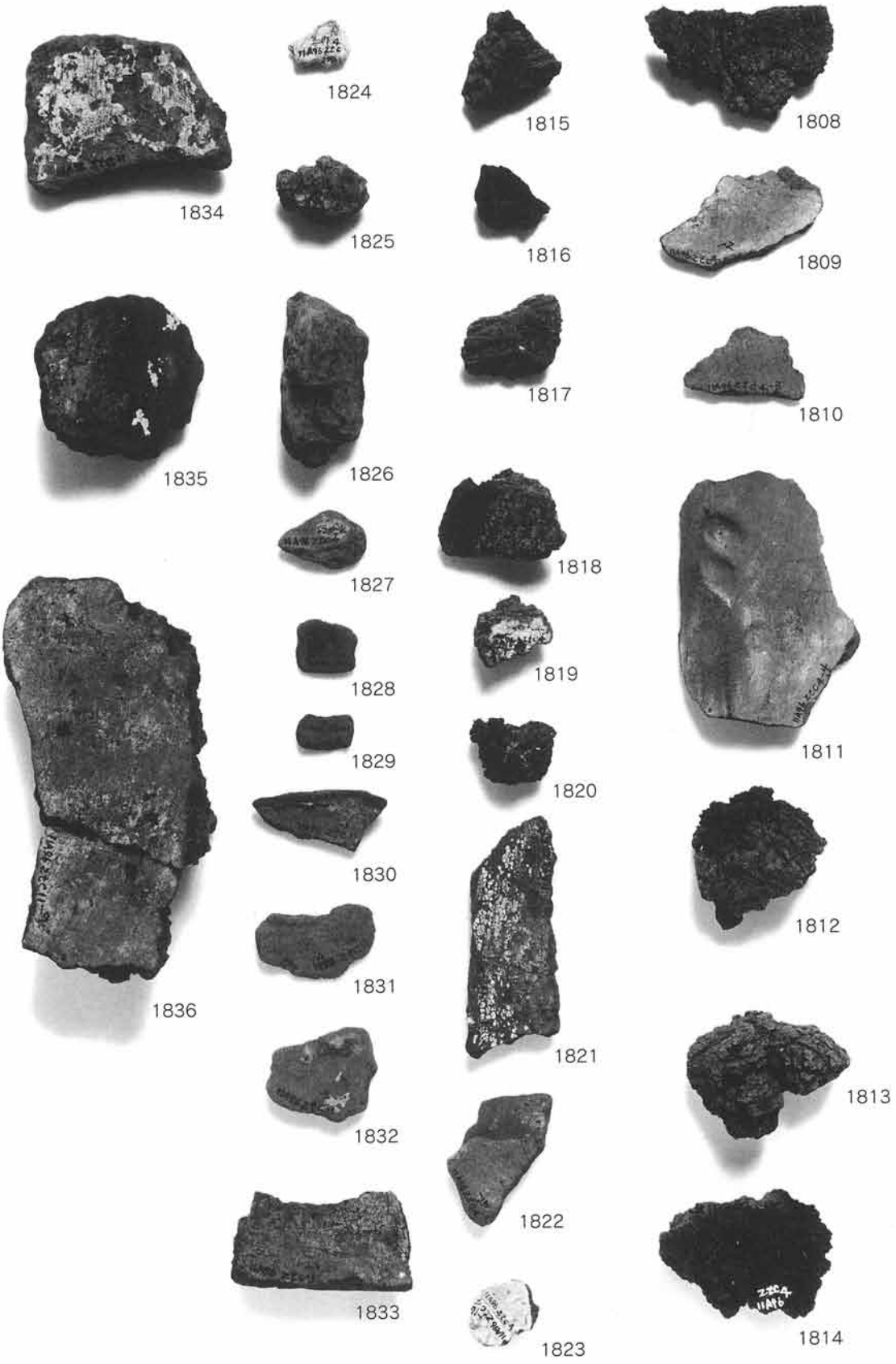
11A961691～11A961724（塑壁）



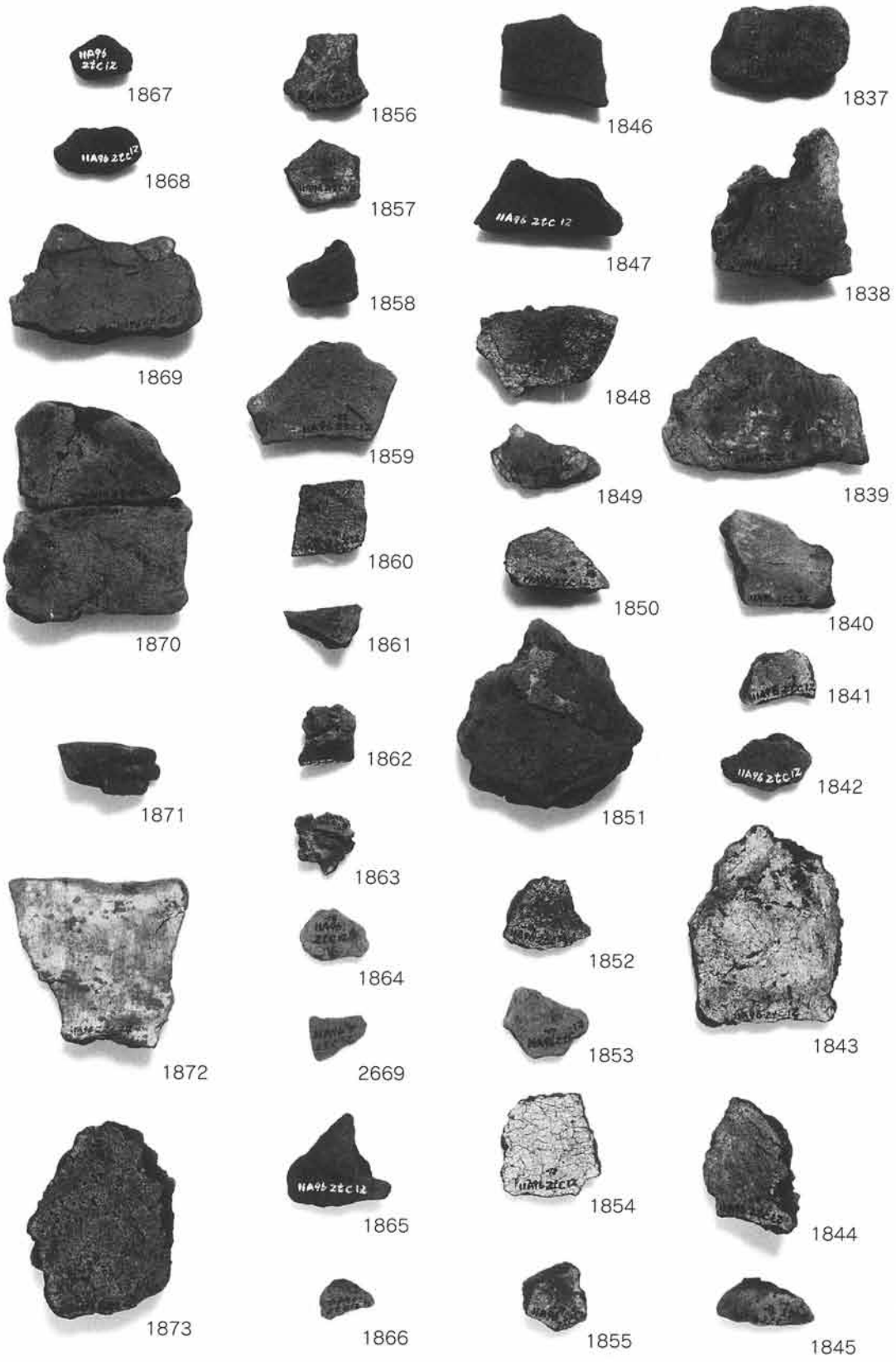
11A961725～11A961767（銅製品・塑壁）



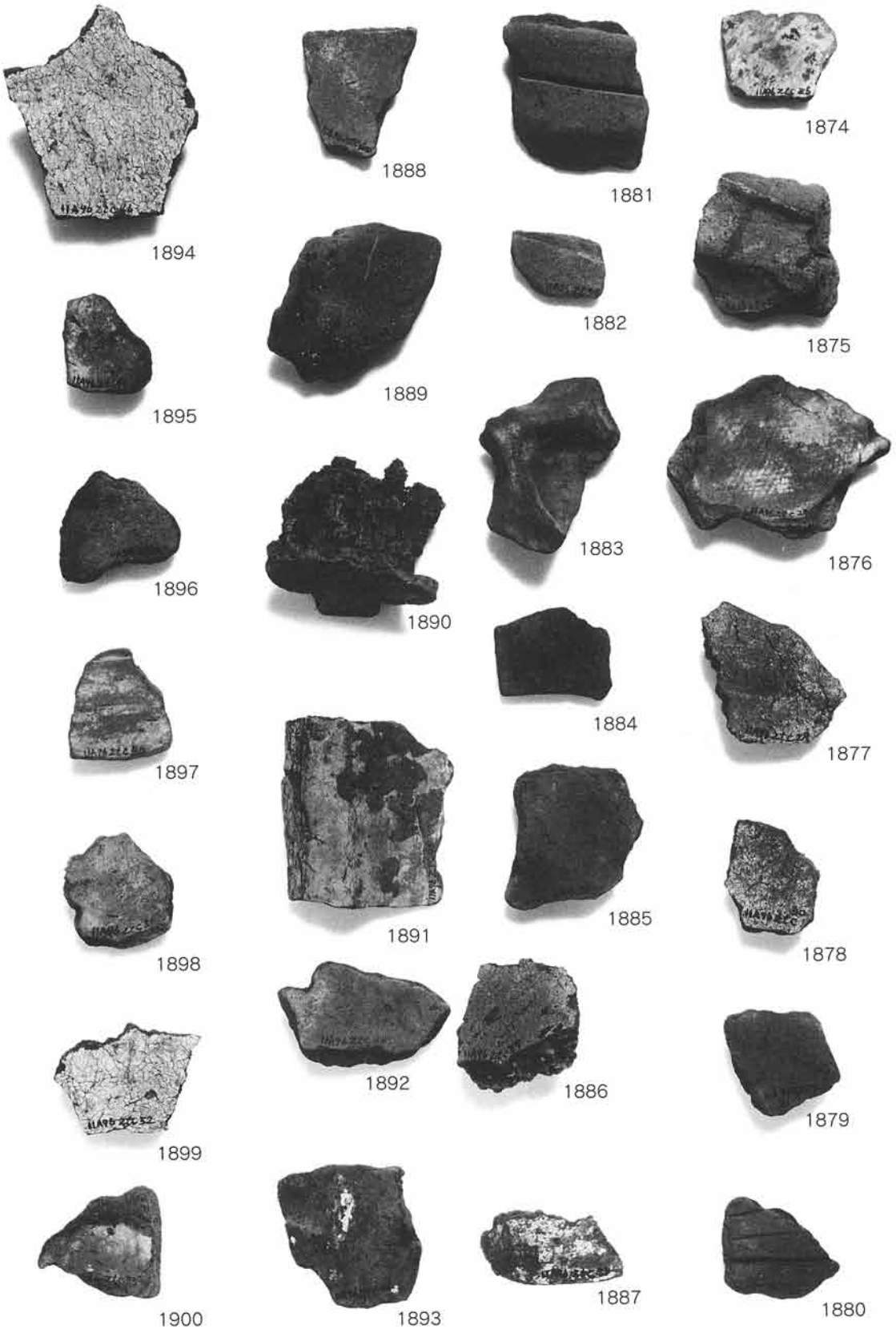
11A961768～11A961807（塑壁）



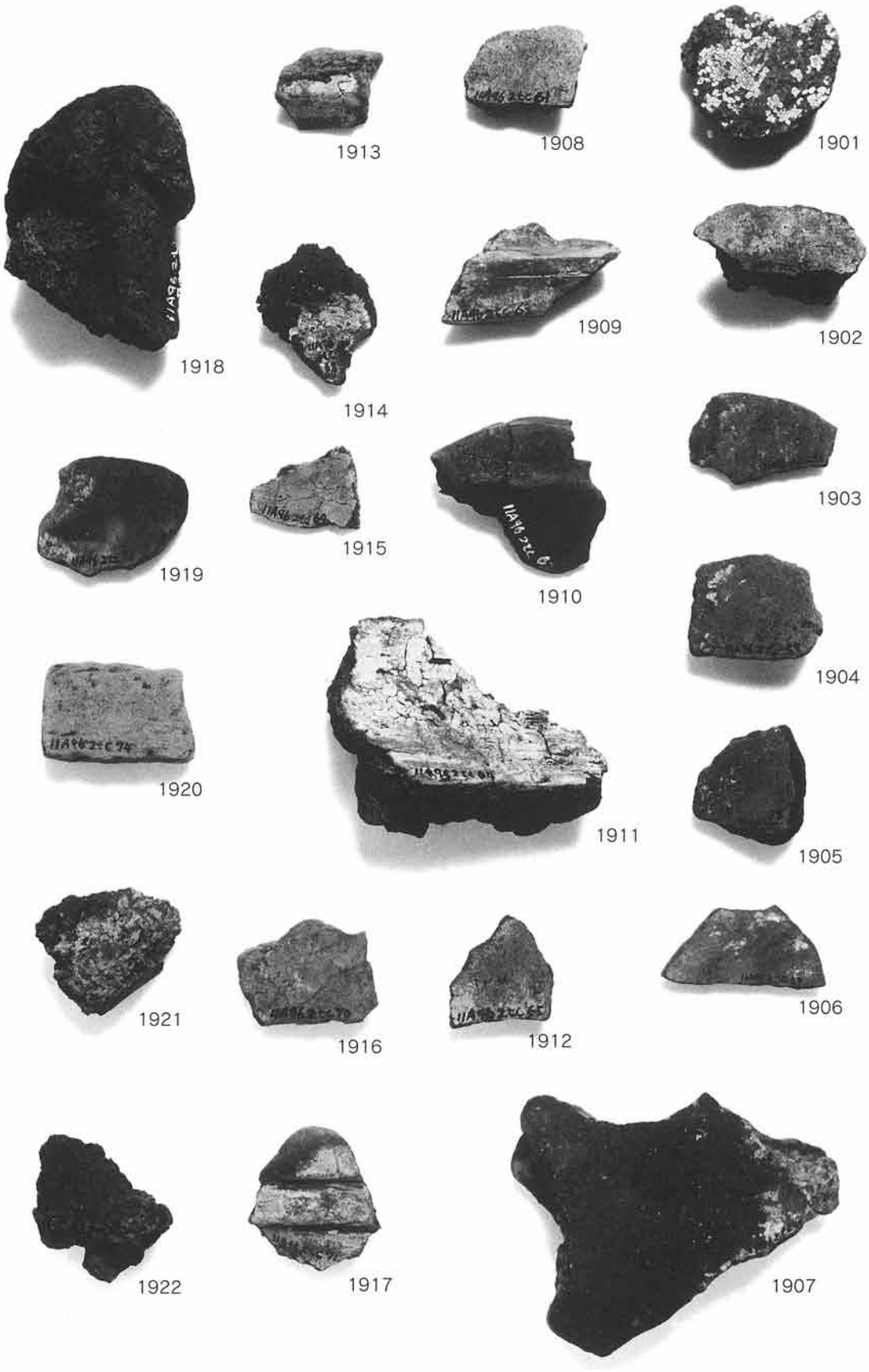
11A961808～11A961836（塑壁）



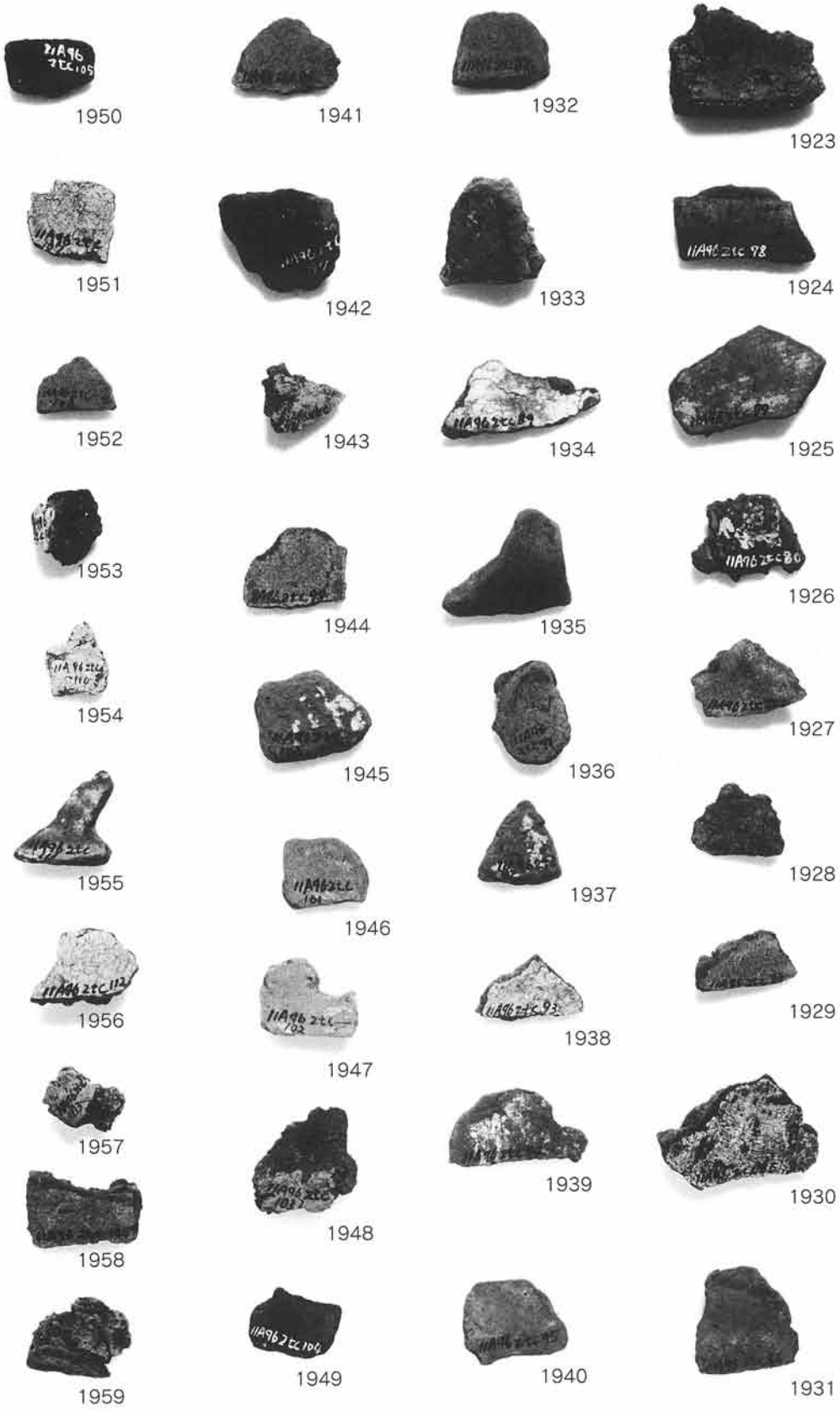
11A961837～11A961873（塑壁・塑像）



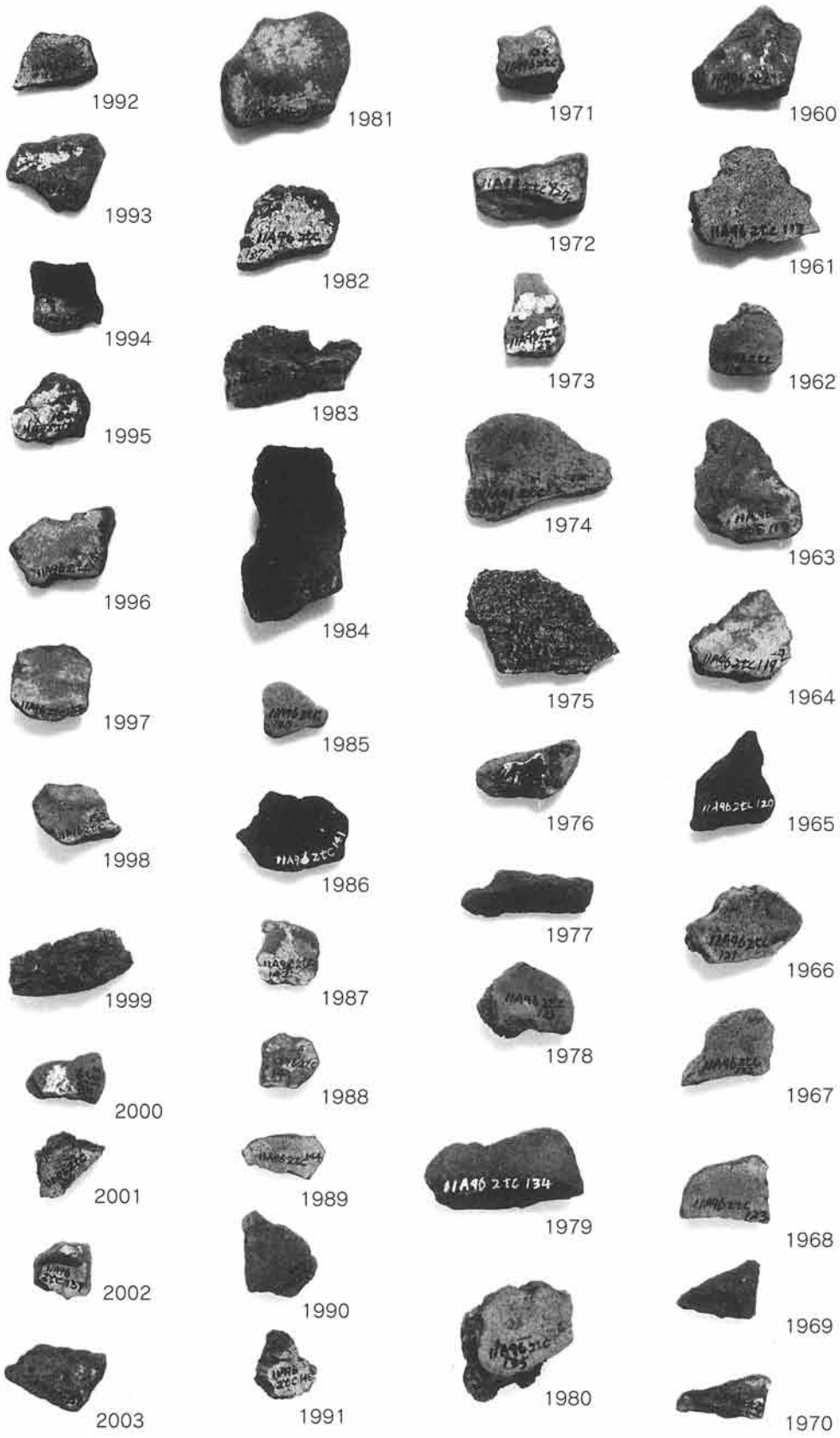
11A961874～11A961900（塑壁）



11A961901～11A961922（塑壁）



11A961923～11A961959（塑壁）



11A961960～11A962003（塑壁・塑像）

2025

2026

2027

2028

2029

2016

2017

2018

2019

2020

2021

2022

2023

2024

2004

2005

2006

2007

2008

2009

2010

2011

2012

2013

2014

2015

11A962004～11A962029（塑壁）

2041

2035

2030

2042

2036

2031

2043

2037

2032

2044

2038

2033

2039

2045

2040

2034

11A962030～11A962045（塑壁）

2056

2050

2046

2057

2051

2058

2052

2047

2059

2053

2060

2054

2048

2061

2055

2049

11A962046～11A962061（塑壁）

2077

2069

2062

2078

2070

2063

2079

2071

2064

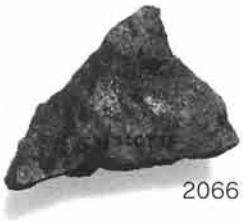
2080

2072

2065

2081

2073


2066

2074

2082

2075

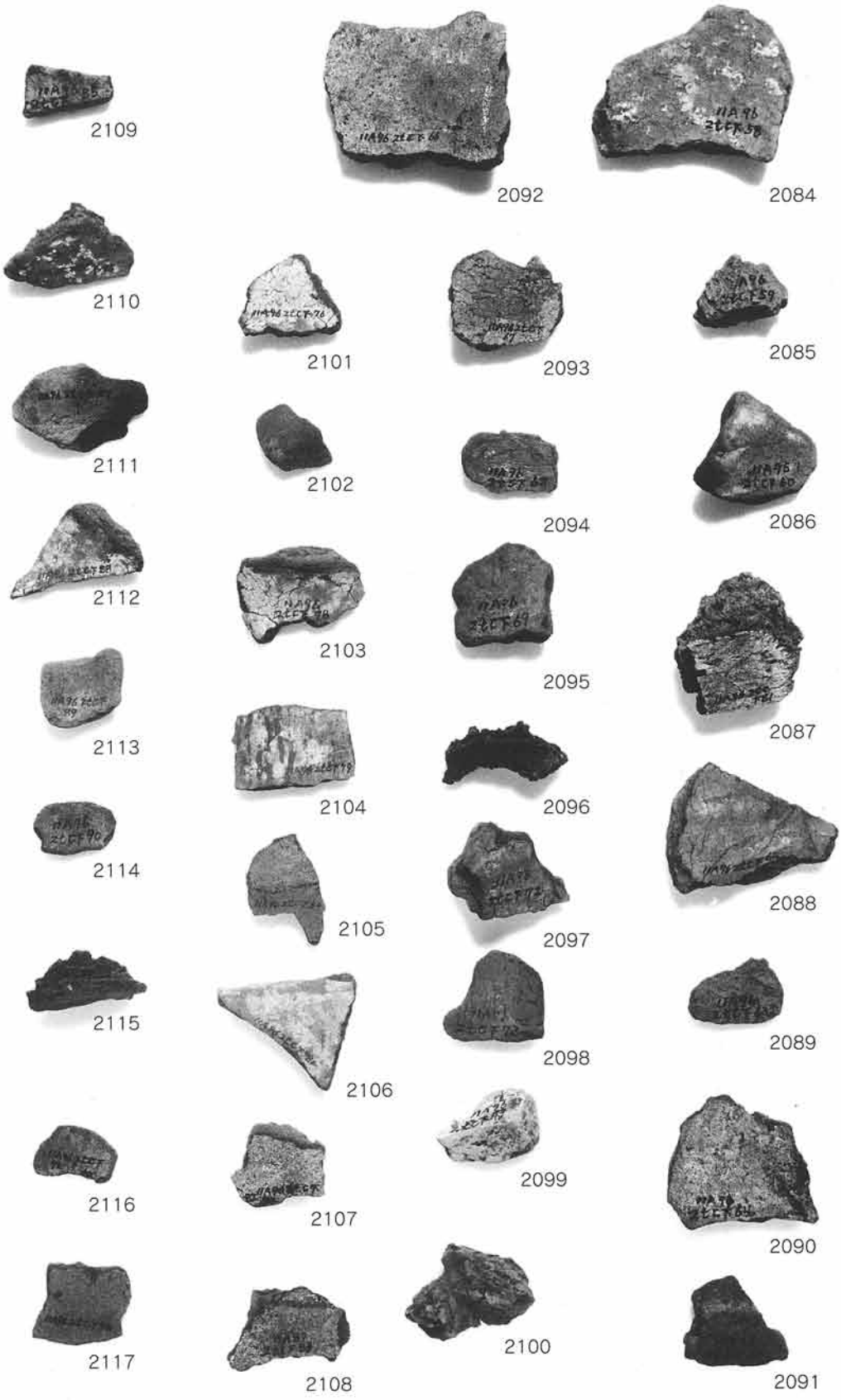
2067

2083

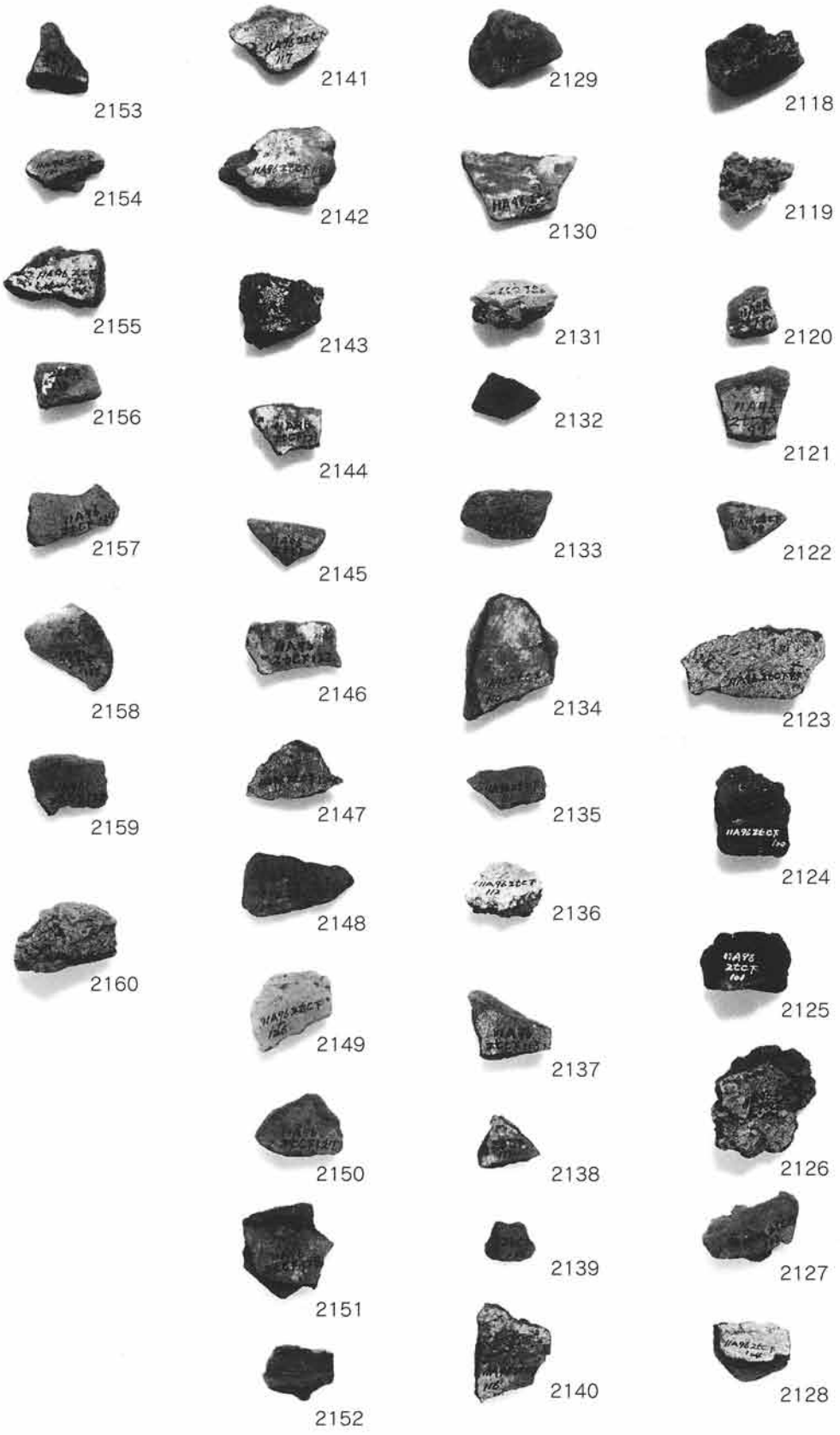
2076

2068

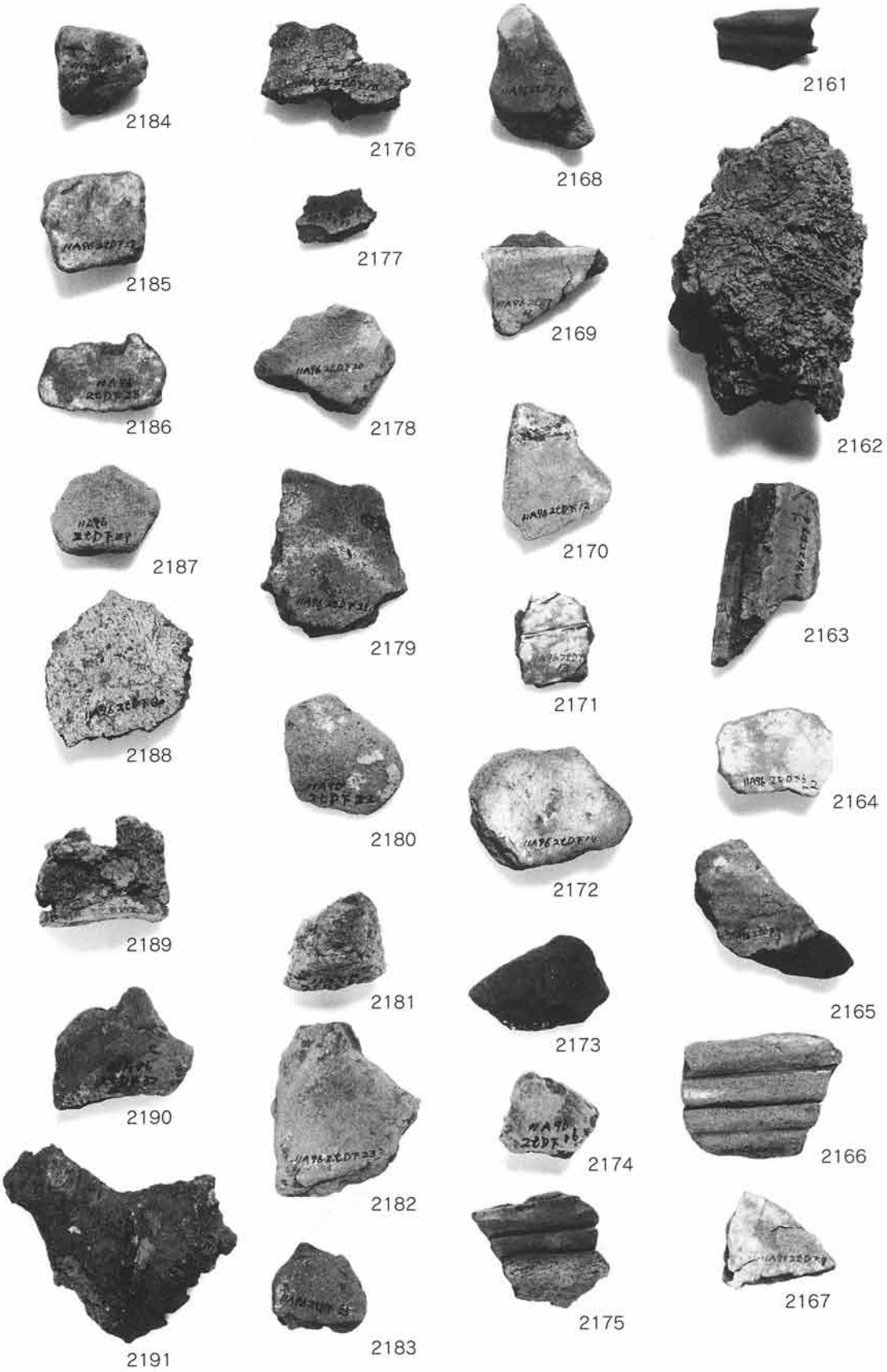
11A962062～11A962083（塑壁）



11A962084～11A962117（塑壁）



11A962118～11A962160（心材・塑壁・塑像）



11A962161～11A962191（塑像・塑壁）

2206

2667

2207

2208

2209

2210

2211

2212

2199

2200

2201

2202

2203

2204

2205

2192

2193

2194

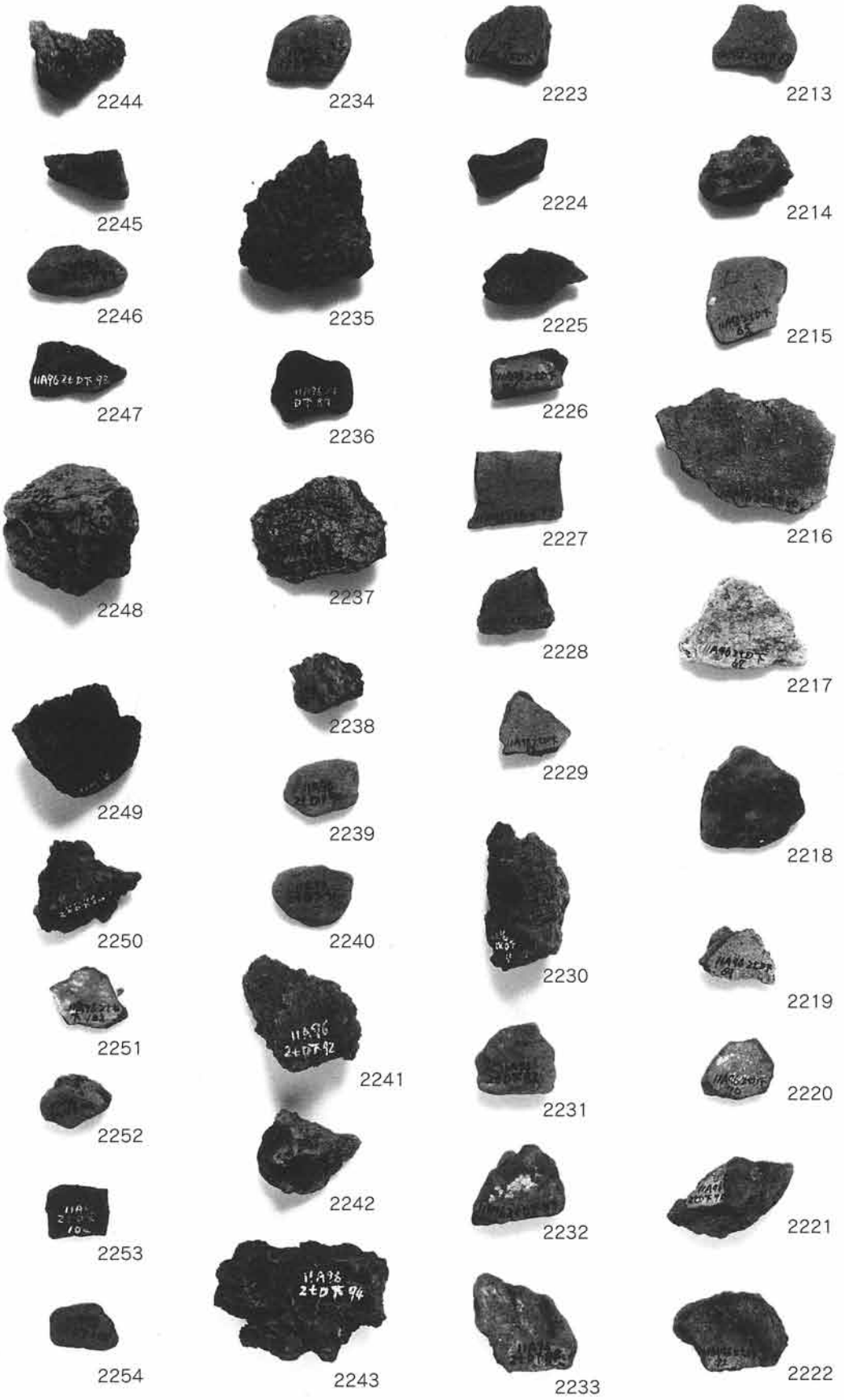
2195

2196

2197

2198

11A962192～11A962212（塑壁）



11A962213～11A962254（塑壁・心材）

2293

2294

2295

2296

2297

2298

2299

2300

2301

2302

2303

2304

2305

2282

2283

2284

2285

2286

2287

2288

2289

2290

2291

2292

2268

2269

2270

2271

2272

2273

2274

2275

2276

2277

2278

2279

2280

2281

2255

2256

2257

2258

2259

2260

2261

2262

2263

2264

2265

2266

2267

11A962255～11A962305（塑壁）

2323

2324

2325

2326

2327

2328

2329

2330

2314

2315

2316

2317

2318

2319

2320

2321

2322

2306

2307

2308

2309

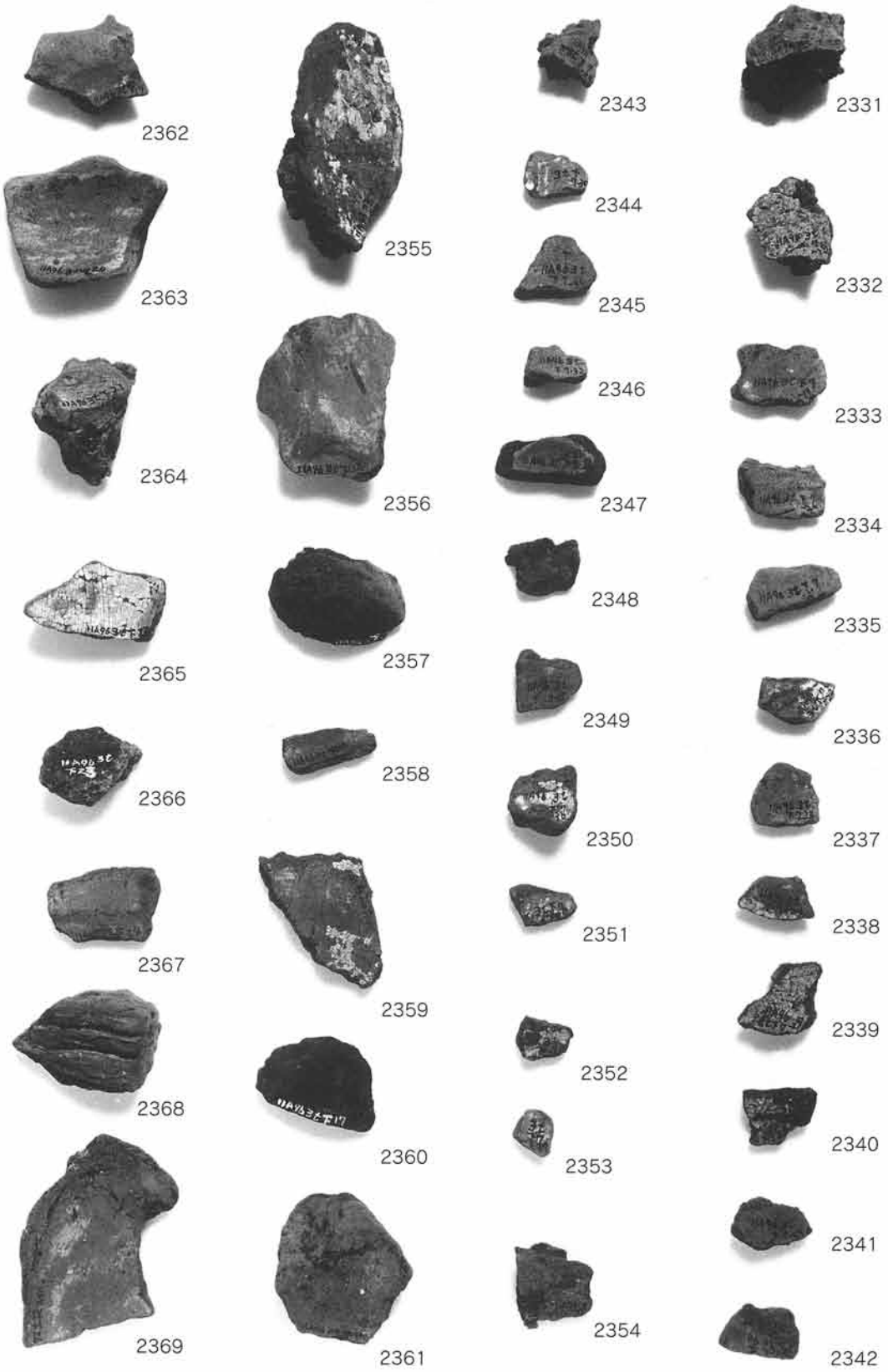
2310

2311

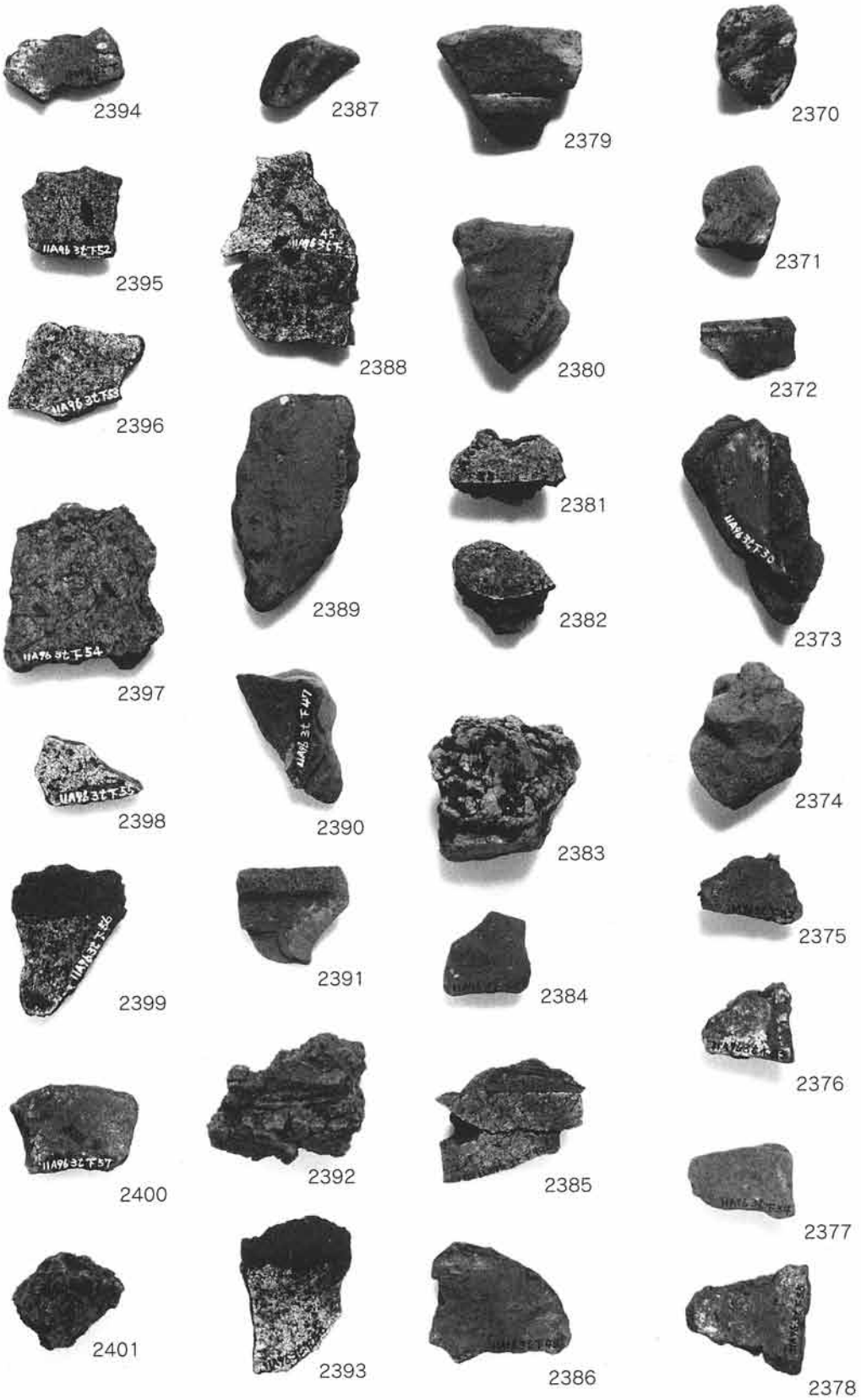
2312

2313

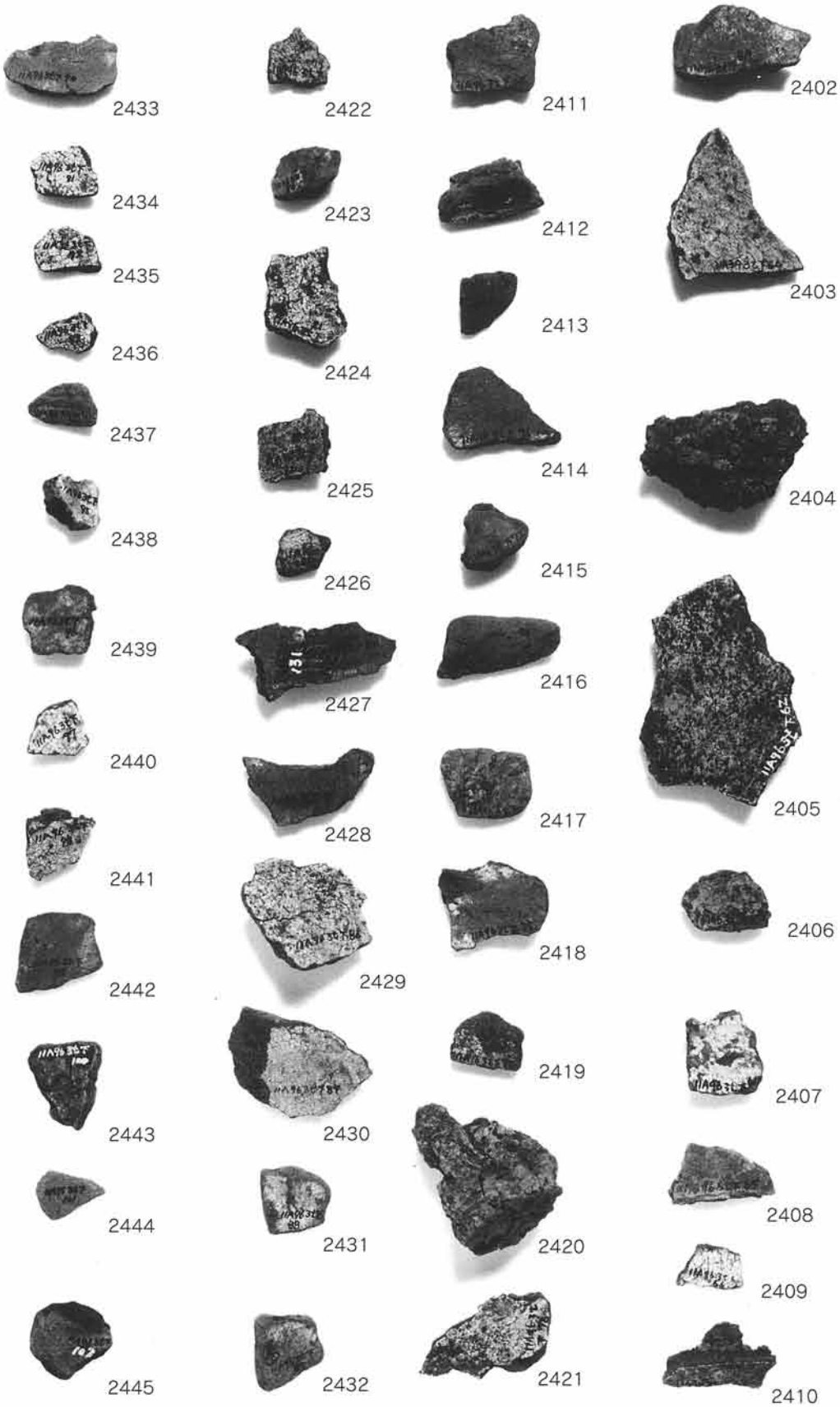
11A962306～11A962330（塑壁）



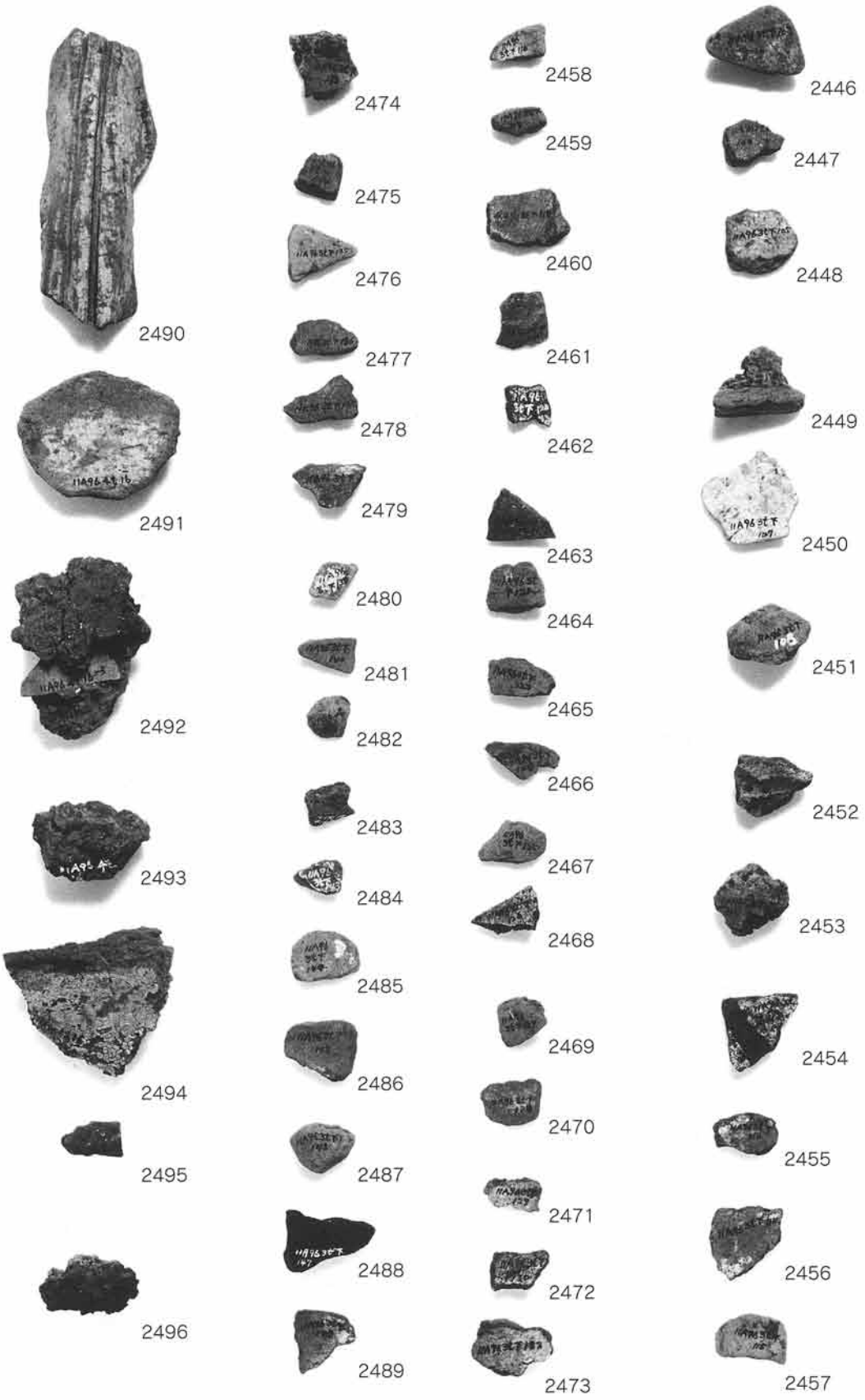
11A962331～11A962369（塑壁・塑像）



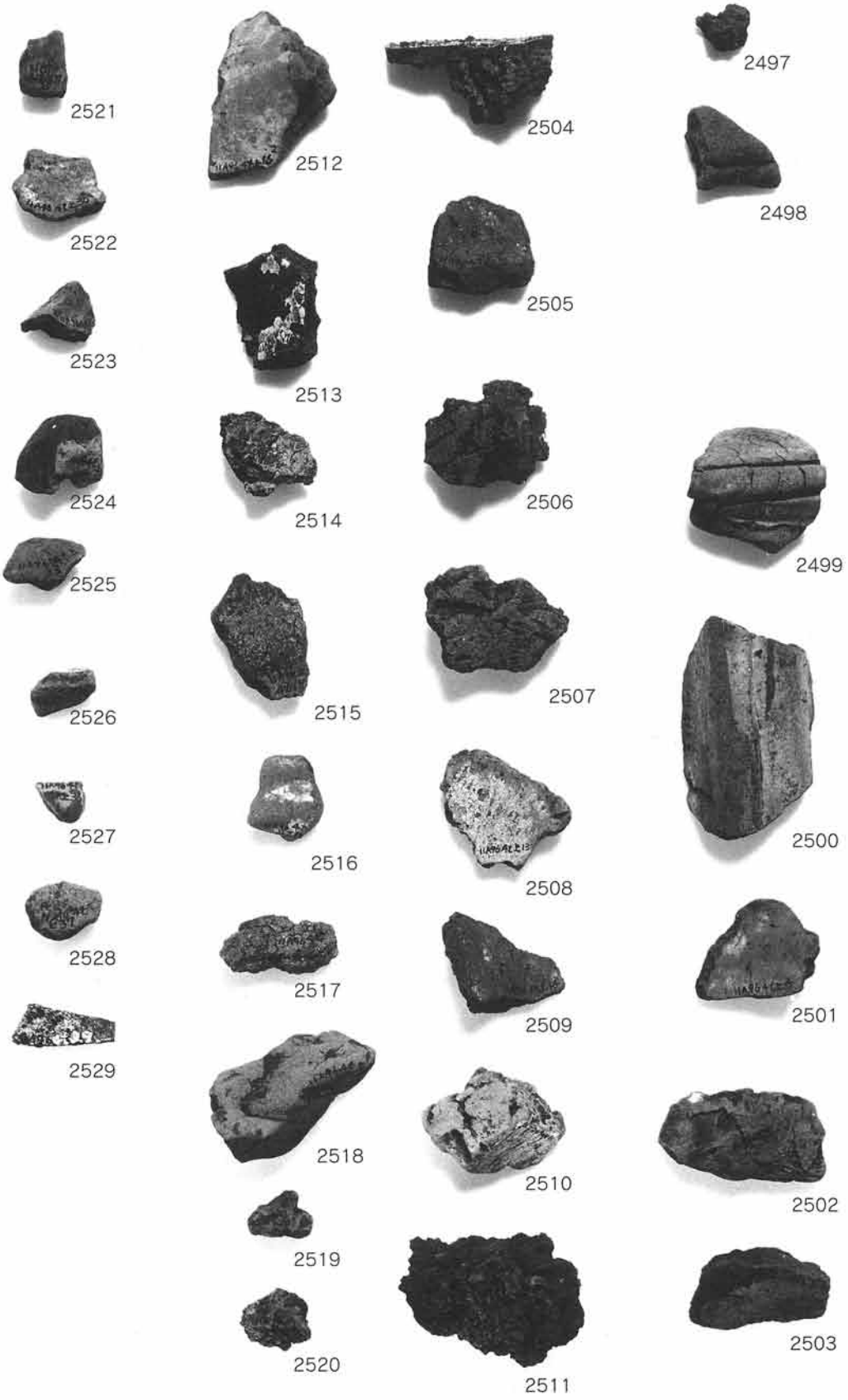
11A962370～11A962401（塑壁）



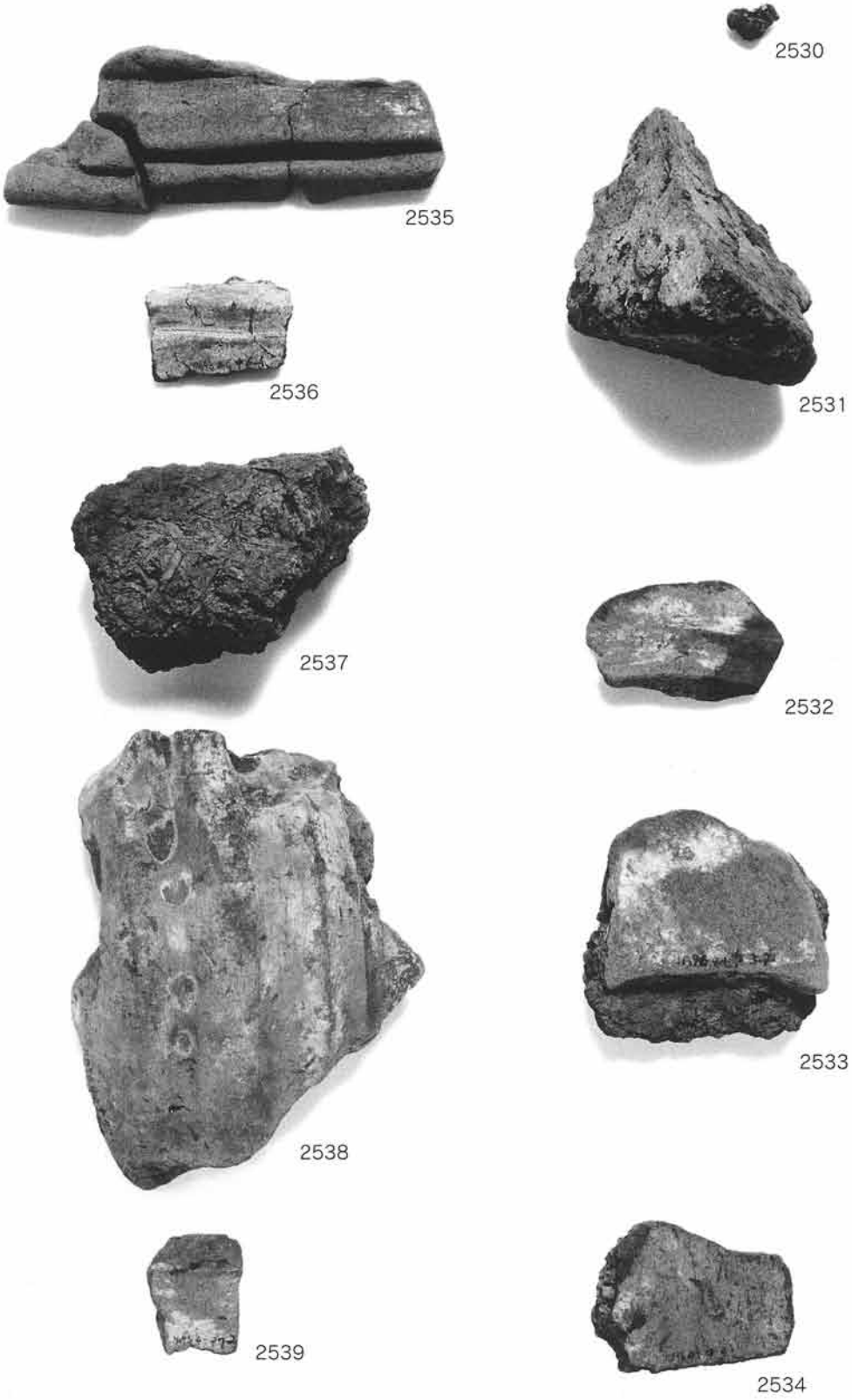
11A962402～11A962445（塑壁・塑像）



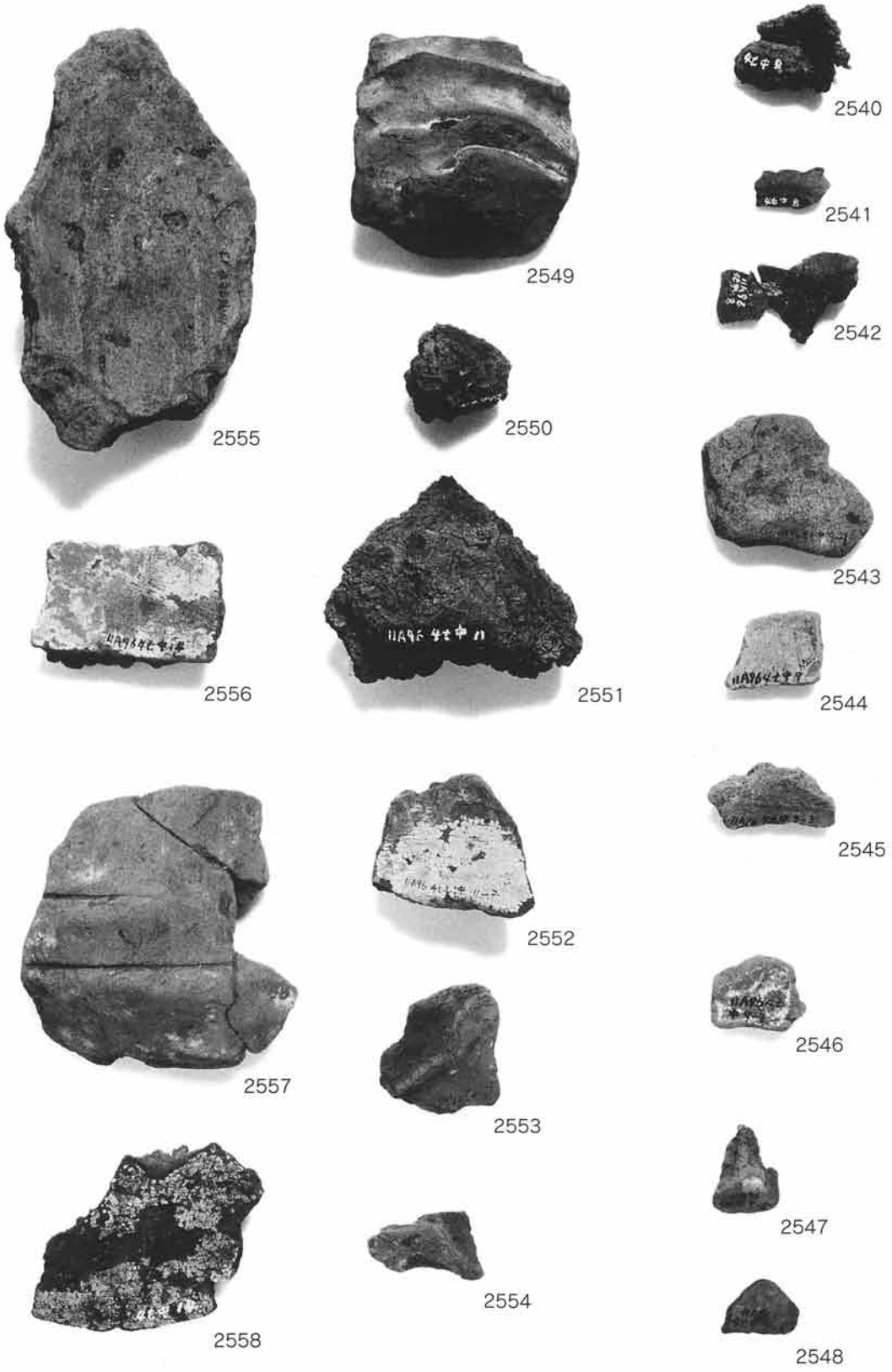
11A962446～11A962496（塑壁・塑像）



11A962497～11A962529（塑壁・塑像）



11A962530～11A962539（銅製品・塑壁・磯形）



11A962540～11A962558（塑像・塑壁）

2565

2560

2559

2566

2561

2567

2568

2572

2569

2562

2573

2570

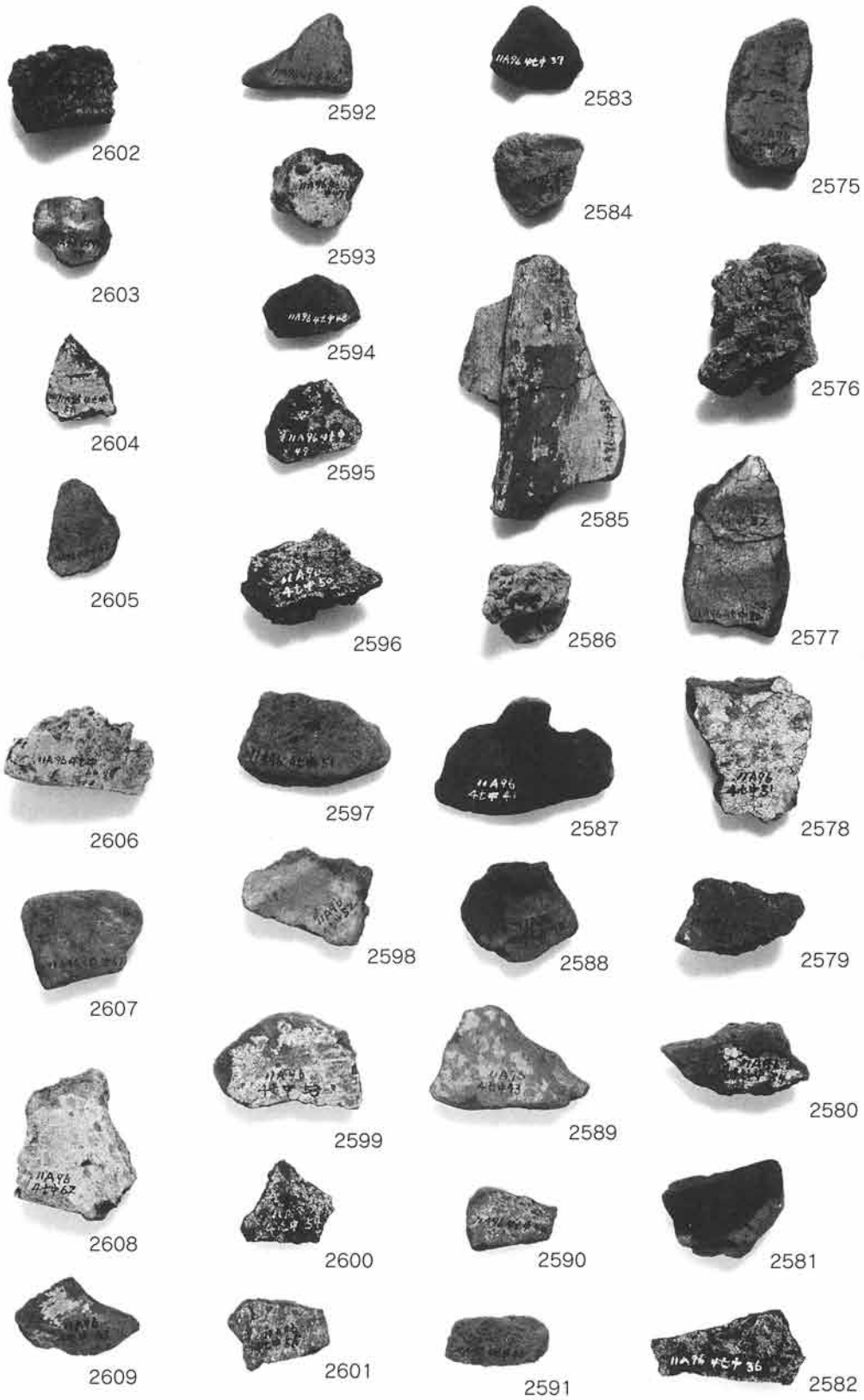
2563

2574

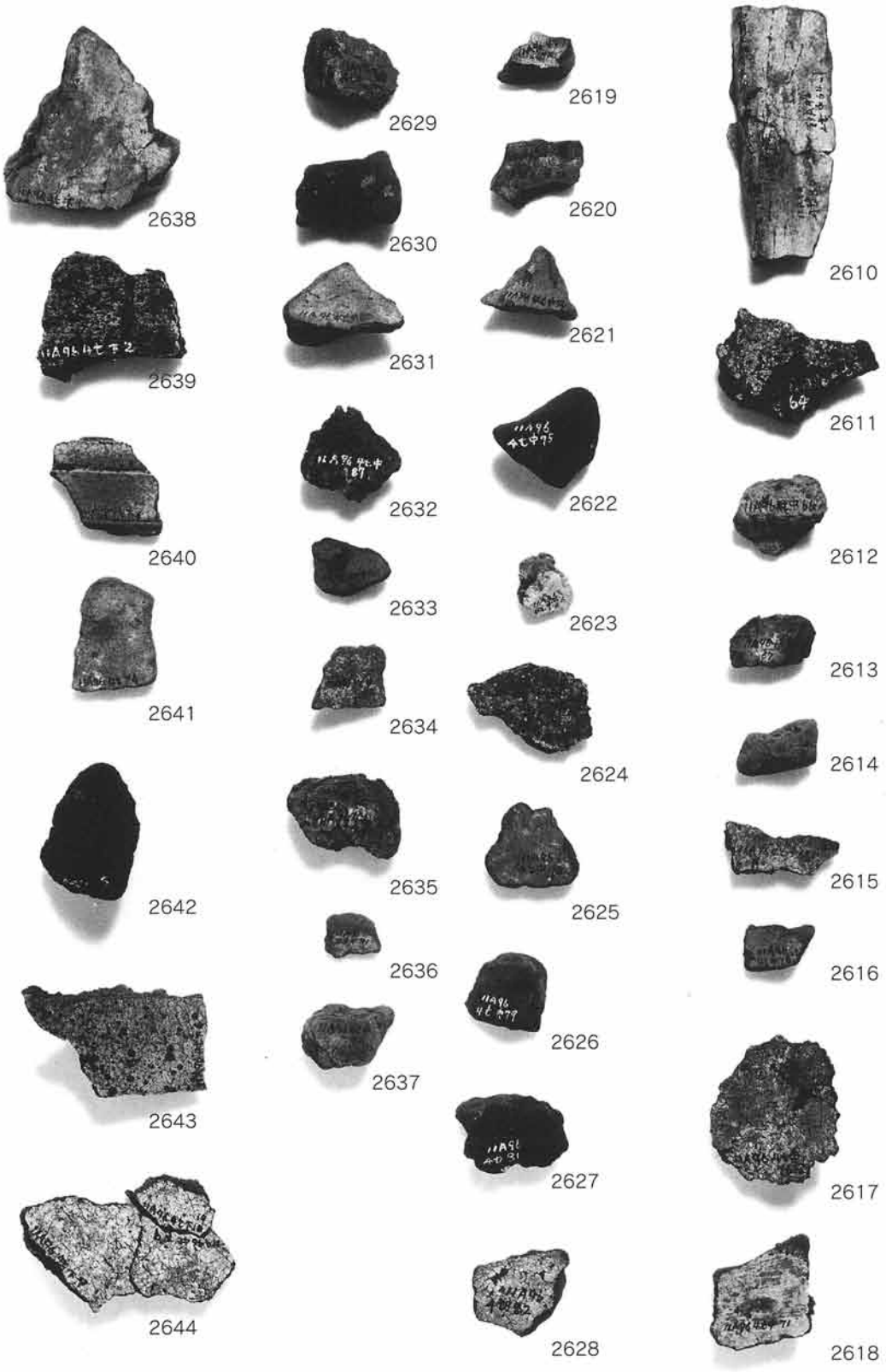
2571

2564

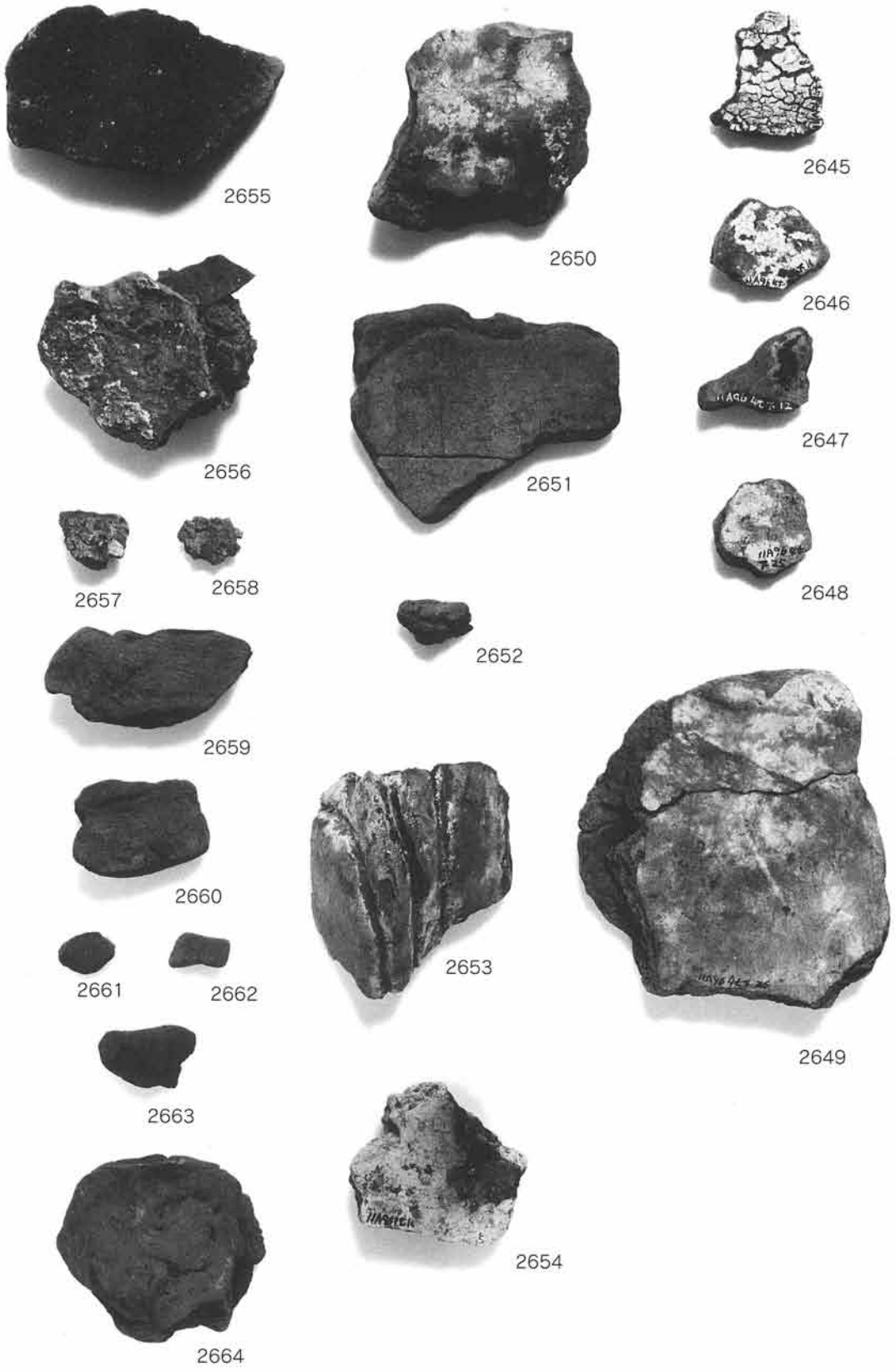
11A962559～11A962574（塑壁）



11A962575～11A962609（塑壁・塑像）



11A962610～11A962644（塑壁）



11A962645～11A962664（塑壁）

塑像等の解説

1　菩薩像胸部　9A80336　PL. 1, 2, 33

〔法量〕全高12.2cm　最大張13.7cm　胸幅12.6cm　胸奥（左）9.1cm　胸奥（右）8.1cm

〔形状〕腹部左側を含む、三道下端より下の菩薩像の胸部。両腕は付根より欠失する。原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。

背面より両肩にかかる天衣（過半亡失）と胸飾（亡失）をつける。胸飾の意匠は、痕跡より次のことが判る。基本帯の幅は0.8cm前後。その下縁中央の3箇所より各上下2個ずつの垂飾（上方は円形、下方は縦長楕円形、中央分が左右分より大きい）を下げ、下縁左右に各1個の横長楕円形の飾をつける。基本帯の右端部には、円形の飾（菊座か）をつけ、その下より短いリボンを垂らす。同左端部にはリボンの痕跡のみ残る。（「左右」は、特に断わらない限り、「像にとっての左右」の意味で用いる。以下、同じ）

左胸下から左腋下にかけて、胸部と腹部の境をあらわす刻線をいれる。背筋のくぼみをあらわす。上半身の軸線がやや右に傾く。もと三尊像の右脇侍菩薩像であった可能性がある。

〔構造〕心木は焼失し、像内中央に縦に孔が貫通する。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土は小石混じりの粗い土で、スサとして切藁を大量に混ぜた痕跡がある。中土は下土より粒子の細かい土で、砂粒が多く混じる。スサとして細かい植物繊維と切藁を混ぜた痕跡がある。仕上土は篩にかけた粒子の細かい土で、スサの痕跡は肉眼では確認できない。製作工程は、まず心木の周りに下土を軽くつけ、次に中土を厚めに盛って像の概形を塑形し、最後に仕上土を0.4～1.0cmほどの厚みにかける。

両腕の付け根には、銅線の心（0.3cm×0.3cm）がわずかに残る。また、天衣の左右縁近くにも、彫刻面に対して直角に近い角度で打ち込まれた短い銅線（0.1cm×0.1cm）が残る。これは、ここから下方に垂れる天衣遊離部の銅心の末端とみられる。両肩にかかる天衣や胸飾は、肉身部を塑形した後、別に作ったものを貼り付けていたが、現在そのほとんどを亡失する。右肩上および背面頸部右後方に残る別製の天衣は、篩にかけた粒子の細かい土で作られており、その厚みは0.1cmほどである。

表面はもと彩色仕上げ。顔料は高熱のために変質するが、肉身部には赤褐色を呈する粒子の粗い顔料が、天衣には暗緑色を呈する粒子の粗い顔料がそれぞれ残存する。別製の天衣や胸飾の剝落した部分は仕上土の表面を露出する。その背面の天衣下縁近くや左右胸脇の天衣内縁近くには、縁に沿って黒褐色を呈する厚みの少ない太い描線が断続的に残存する。この描線は、天衣の貼り付け位置を示した下当たり線の可能性がある。

〔備考〕この像は、正中線を境にして左側の面の方が右側の面よりも横幅が狭く、面の曲率が大きい。胸飾の曲線も左右非対称であり、左側の方が右側よりも曲率が大きい。その造形は、正面からみるよりも、像に向かって右斜め前方からみる方がより自然にみえる。鑑賞者の視点を意識した、浮彫的な表現が用いられていると考えられる。

同様の表現は、法隆寺五重塔東面の文殊菩薩・維摩詰像（和銅4年〔711〕）や法隆寺食堂旧在の梵天・帝釈天像にもみられることが指摘されている（＊）。すなわち、斜め前方からの鑑賞が意識されたこれらの像では、立体をより効果的にみせるため、鑑賞者に近い側の面が反対側の面よりも厚くモデリングされている（＝面の曲率が大きい）という。本像のモデリングの左右の違いは、法隆寺五重塔の文殊像や法隆寺食堂の梵天像頭部のそれと共通している。前者は塔初層東面の左側（北側）に右斜め向きに安置され、後者は通常主尊の左側に安置される。これらの例を参考にすれば、本像は当初の安置空間の左側に右斜め向きに置かれていた可能性が考えられる。ただしこの想定は、ポーズの問題から本像を右脇侍像とみる見方とは相容れない。その当初の安置法については、今後の検討を俟ちたい。（SM）

＊西川杏太郎「梵天立像　帝釈天立像」（『奈良六大寺大観　第3巻　法隆寺3』）、1969年11月、岩波書店。後に「法隆寺食堂の塑像　二、梵天立像・帝釈天立像」と改題して、同『日本彫刻史論集』（2000年1月、中央公論美術出版）所収。

2　菩薩像または天部像垂髻　11A962718　PL. 3, 33, 34

〔法量〕全高4.3cm　最大張4.7cm　最大奥3.7cm

〔形状〕菩薩像または天部像の頭上に結い上げた垂髻。原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。髪はすべて毛筋彫り。髻の根幹部には、斜めに毛筋彫りを施した元結（あるいは束髪）を隙間なく4段に巻く。元結の毛筋彫りは段ごとに向きを変え、全体として矢羽根文風にまとめる。頂上部から左右側面にかけては、同心円状に整えられた輪状の束髪（左右とも各4束）を垂らす。

〔構造〕内部中央やや右後方寄りに孔があく。孔の内面には、縦に細かい平行線状の痕が残り、心木が当たっていたことが確認できる。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土には、スサとして切藁を混ぜた痕跡が残る。

〔備考〕垂髻は、薬師寺西塔跡出土塑像片（天平2年〔730〕頃）、興福寺旧西金堂八部衆像（天平6年〔734〕）のうち阿修羅・畢婆迦羅・緊那羅の各像、唐招提寺伝衆宝王菩薩像・伝獅子吼菩薩像、香川県願興寺聖観音像、岡寺如意輪観音像、秋篠寺伝伎芸天像・伝梵天像など、8世紀第2四半期以後の菩薩像・天部像にみられる。そのうち、興福寺八部衆像の垂髻は、ふくらみの少ない三角状の硬い輪郭をもち、この断片とよく似た造形感覚を示す。（SM）

3　菩薩像または天部像髻　11A962719　PL. 3

〔法量〕全高3.6cm　最大張4.1cm　厚1.1cm

〔形状〕左側面の一部を含む髻の正面部分で、縦方向の束髪5束分が確認される。髪は毛筋彫り。

〔構造〕塑土は下土・中土・仕上土の3層が残る。下土にはスサとして切藁を多く混ぜた痕跡があり、現在炭化して黒ずむ。表面は摩滅が進むが、毛筋彫りがよく残る左方部には、高熱で褐色に変色した顔料が残存する。（SM）

4　如来倚像または菩薩倚像膝部　11A962670　PL. 3, 34

〔法量〕全高11.6cm　最大張9.1cm　最大奥5.9cm

〔形状〕台座に腰掛けて坐る、如来像または菩薩像の衣に蔽われた膝から脛上部にかけての部分。原初像の像高は、70～80cm前後と推定される。

〔構造〕塑土は、仕上土と中土が残る。中土には、細かい植物繊維のスサの痕跡が認められる。中土層には厚みがあり、2～3層に分けて盛られる。下土層に接していたとみられるその内面は、浅く皿状にくぼむ。表面には、比較的粒子の細かい顔料が一面に塗られる。顔料は

高熱のために変質し、現在、濃い黒褐色を呈する。
〔備考〕山王廃寺出土塑像片のうち最大級の像の断片で、原初像の像高は法隆寺五重塔南面の弥勒如来倚像（南１号、像高81.0cm）に近い。塔初層４面のうち、いずれかの面の主尊像と推定される。像種については、倚像の形式や法隆寺・薬師寺の塔本塑像の主題構成からみて、釈迦如来もしくは弥勒如来に当る可能性が高い。(SM)

5　如来像または菩薩像左脚部　11A962764　PL. 3, 35
〔法量〕全高15.8cm　最大張8.7cm　最大奥6.8cm
〔形状〕如来像または菩薩像の片脚の膝から脛半ばにかけての部分で、膝下の衣文線３本を含む。脚の左右端での衣文線の間隔の違いや面の曲がり方からみて、左脚部とみられる。原初像の像高は、立像として90～100cm程度と推定される。最上段の衣文線は、膝の外側で消える。
〔構造〕塑土は下土・中土・仕上土が残る。下土には切藁のスサ（一部残存）が多く混じる。中土には細かい繊維のスサを混ぜた痕跡がある。中土は1.2cm前後の厚みに盛られ、仕上土は0.3cm前後の厚みに盛られる。表面には、現在黒色を呈する粒子の細かい顔料が一面に塗られる。
〔備考〕如来倚像または菩薩倚像膝部（11A962670、４[解説４、以下、番号のみを記す]）とともに、山王廃寺出土塑像片のうち、最大級の像の断片である。塔初層４面のうち、いずれかの面の主尊像であったとみられる。その原初像の推定像高は、法隆寺五重塔北面の涅槃釈迦如来像（北１号、像高99.5cm）に近い。造形的には立像・涅槃像双方の可能性があるが、大きさの面では、塔本塑像の立像としては大き過ぎるきらいがあり、涅槃像とみる方が自然である。(SM)

6　神将像頭部　11A962820　PL. 4, 5, 36
〔法量〕全高13.2cm　髻頂一顎13.1cm　頭頂一顎8.5cm　面長6.9cm　面幅6.9cm　耳張7.9cm　面奥7.5cm（後頭部の仕上土層を失う）
〔形状〕髻頂より頸部上端までを含む神将像の頭部。原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。
頭髪は、地髪部両耳後ろ辺に残る当初の仕上面では、束ね目をあらわした上、毛筋彫りを施す。もとは、頭髪部全体が同様の仕上げであったとみられる。地髪部は正中線で左右に振り分け、頭頂に向かって梳き上げる。頭頂に集められた髪を元結紐１条で束ね、髻を結い上げる。髻は束髪５を左右に並列する。側面からみると、髻は全体に少し後ろに傾き、両端の束髪が輪状にあらわされる。右こめかみ辺より右耳前にかけて、５条の焔髪をあらわす(左焔髪のすべて、右焔髪の上から１条目より４条目までの先端部、各欠失)。焔髪の下端は、右耳上部を覆う。眉根を寄せ、両目を瞋らせる。眼瞼裂は、目頭の部分が縦に裂ける。口唇の輪郭は、表面の荒れが甚だしく確認できないが、口の窪みは表されておらず、もと口を閉じていたとみられる。
〔構造〕心木は焼失し、像内中央には縦に孔（径2.4cm）があく。心木には藁を螺旋状に巻いていたらしく、孔の内面にその痕跡が残る。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土は小石混じりの粗い土で、スサとして切藁を多く混ぜた痕跡がある。土の盛りは比較的少ない。中土は下土よりやや粒子の細かい土で、断面には多数の細かい孔が確認できる。地髪部左側の中土露出部でみると、切藁と屈曲した細かい繊維の両方の痕跡が確認できる。また、中土段階で髪際の立ち上がりを表していたことが判る。仕上土は細かい篩土で、肉眼ではスサの痕跡を確認できない。髻基部および地髪部の左側面から背面にかけての部分は、仕上土層を大きく失ない、中土層を露出する。断面が確認できる地髪部や頸部上端辺では、仕上土層の厚みは0.2～0.5cm程度である。また、地髪部左側辺の中土露出部でみると、焔髪や左耳は中土では塑形されておらず、すべて仕上土で塑形していたとみられる。塑土には各層とも雲母が混じる。
両目の黒目の部分は、別に作った球状のものを嵌め込んでいたが、現在亡失して丸い孔となる。孔の大きさは、左目で直径0.7cm、深さ0.8cm。
表面は、頭髪部・肉身部とも粒子のあらい顔料が一面に塗られる。いずれも熱変し、光沢のある黒色を呈し、激しく発泡する。
〔備考〕顎の先端が尖り、下あごの奥が左右に張り出した面長な顔だちは、東京国立博物館保管の木造伎楽面のうち金剛面・力士面（法隆寺献納宝物第212・213・227号）とよく似ている。なお、推定立像高60～70cmの神将像の断片は、この頭部をはじめとして、多数出土する（６～30)。(SM)

7　神将像右上半身　11A962825　PL. 6, 7, 35
〔法量〕全高19.5cm　最大張11.5cm　最大奥8.6cm（右脇腹で）
〔形状〕襟甲の上縁・肩甲・鰭袖（袖口欠失）を含む、神将像の右肩から右脇腹にかけての部分。原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。鰭袖を着け、下甲・表甲・肩甲・襟甲を着ける。襟甲には縁取線１条、肩甲・表甲には内区と外区とを画する界線１条と、縁取線１条がそれぞれ陰刻される。肩甲の縁は、薄く鋭角に仕上げられ、鰭袖の面との分離感が強調される。
〔構造〕像内の右脇腹辺の高さには、心木が当たっていたとみられる平らな縦の面が確認される。この面は、像の中心よりも大きく右側に偏り(右脇腹の表面より約３cm内側)、像の中心を通る心木の痕跡とは考えられない。正面からみると、この心木の当たっていた面は下方に向かって少し外側に広がっている。心木痕のある部位は、東大寺法華堂執金剛神像では、胴部右側から右脚部に続く心木の上部に当たり、新薬師寺十二神将像では、上半身右側の心木の位置にあたる。原初像の心木は、東大寺像や新薬師寺像のように、複数の材木を組み合わせる構造のものであったと推測される。
塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土には切藁のスサを多く混ぜた痕跡があり、一部に藁スサの実物が残存する。塑土の盛り方は、中土層が下土層よりも薄く、その厚さは0.4～1.3cm程度である。襟甲はすべて仕上土で塑形する。右腕の内部には銅線の心が通っているらしく、腕の付け根の断面に３本の銅線（各0.3cm×0.3cm)、鰭袖下端部の断面に１本（0.3cm×0.3cm）の銅線が確認される。胸部は仕上土層を失い、中土層を露出する。表甲の内区（界線より内側の部分）には金箔地が残存する。
胸部の仕上土層は、胸の輪郭に沿って剝落する。右脇腹辺の表甲上縁が一見、上下２段にみえるが、上段の段差は仕上土層の剝落によるもので、造形ではない。(SM)

8　神将像右肩・右上腕部　11A962749　PL. 7, 37
〔法量〕全高10.1cm　最大張7.0cm　最大奥5.0cm
〔形状〕肩甲・鰭袖（袖口欠失）を含む、神将像の右肩から右上腕部にかけての部分。原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。肩上に襟甲とみられる甲縁（縁取線１条を陰刻）をあらわす。肩甲は、内区と外区を画する界線１条と、縁取線１条が陰刻される。肩甲の

下縁には、正面側に稜角がある。背面側の下縁は欠失するが、界線に稜角があり、正面側と同様の輪郭であったことがわかる。肩甲の縁は、薄く鋭角に仕上げられ、鰭袖の面との分離感が強調される。

〔構造〕鰭袖下端部の断面には、心が通っていたとみられる円孔(径0.6cm)があく。もと銅線に繊維を巻いたものを心としたと推測される。塑土の組成や盛り方の順序は、神将像右上半身（11A962825、７）と同様である。鰭袖の膨らんだ部分は、すべて仕上土で造形される。

〔表面〕肩甲の内区の地には、金の細粒が多数付着しており、もと金箔地であったと推定される。文様は、内側と外側を色分けした三山形の小札文である。外側には、熱変して黒色を呈する粒子の粗い顔料が、発泡した状態で厚く残る。内側には、中心部に赤褐色を呈する顔料がわずかに残るが、外側との境目付近には顔料の痕跡がなく、帯状に素地があらわれる。こうした顔料の残存状況からみて、小札文は縹綢彩色であったと考えられる。肩甲の外区は、赤褐色を呈する顔料の地に、黒色を呈する粒子の粗い顔料で文様が描かれる。顔料が熱変したため文様の輪郭は不明瞭だが、痕跡からみて、上下逆向きの半截花文を交互に並列する意匠であった可能性が高い。鰭袖は白色を呈する顔料の地に、四菱入り斜格子文をあらわす(斜格子の１単位は一辺1.3cm、幅1.6cm、四菱の菱形は各縦0.6cm、横0.3cm)。文様部分には金の細粒が残存する。文様の輪郭が直線的で鋭いことから、切金を用いたものと判断される。肩上の甲縁は、最外縁を細く帯状に残して、黒色を呈する粒子の粗い顔料が厚く残る。(SM)

9　神将像左肩・左胸部　11A962761　PL. 7,38

〔法量〕全高12.1cm　最大張7.0cm　最大奥7.0cm

〔形状〕襟甲の左前端部・肩甲・鰭袖（袖口欠失）を含む、神将像の左肩から左胸にかけての部分。原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。肩上に胸甲（欠失）をつる吊革をあらわす。肩甲には界線２条と縁取線１条、吊革には縁取線１条がそれぞれ陰刻される。

〔構造〕塑土の組成や盛り方の順序は、神将像右上半身（11A962825、７）と同様である。胸部の仕上土層は胸の輪郭に沿って剝落する。

〔備考〕神将像右上半身は、肩に吊革がなく、肩甲界線の意匠も異なる。神将像右肩・右上腕部（11A962749、８）も、肩に吊革がなく、肩甲の輪郭や界線の意匠に違いがある。したがって、両断片は、この断片とは別個体と考えられる。(SM)

10　神将像背面左肩部　11A962748　PL. 8,38

〔法量〕全高6.5cm　最大張11.1cm　最大奥3.1cm

〔形状〕表甲の上縁部と左肩甲を含む、神将像の背面左肩部。原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。表甲と肩甲には、縁取線１条と界線１条がそれぞれ陰刻される。肩甲の下縁には稜角があるが、同様の形式は、神将像右肩・右上腕部（11A962749、８）にもみられる。表甲の上縁に重なる襟は、縁の立ち上がりが明瞭でなく、膨らみのある断面をもつ。①ナマコ状のふくらみをもつ襟巻き、②兜の錣または獣冠の下縁、③首に巻き付く蛇または竜の胴などの可能性があるが、特定はできない。

〔構造〕塑土は、仕上土の下層に中土・下土が付着して残存するが、それぞれ神将像右上半身（11A962825、７）と同様の組成を示す。

〔備考〕神将像右肩・右上腕部は、襟回りの形状や表面の状態が異なり、この断片とは別個体と考えられる。(SM)

11　神将像肩甲　11A962710　PL. 8

〔法量〕全長3.0cm　最大張4.8cm　厚1.5cm

〔形状〕円筒状の曲面をもつ断片で、表面には神将像右肩・右上腕部（11A962749、８）と類似する、内側と外側を色分けした三山形小札文の彩色が残る。推定像高60～70cmの神将像の肩甲の内区であろう。

〔構造〕仕上土の下層に中土が付着して残存する。彩色は、小札文の外側に、黒色を呈する粒子の粗い顔料が一部発泡した状態で厚く残る。小札文の内側や文様の地には、赤褐色を呈する粒子の粗い顔料が一面に残る。

〔備考〕神将像右肩・右上腕部と比較すると、小札文の１単位の大きさが小さめで、小札文の内側や文様の地の状態にも相違があり、これと同一個体のものとは断定できない。(SM)

12　神将像肩甲・鰭袖　11A962713　PL. 8,38

〔法量〕全高6.2cm　最大張4.9cm　厚3.9cm

〔形状〕肩甲の下縁部から鰭袖のくくりまでを含む、神将像の上腕部上半。原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。肩甲には界線１条と縁取線１条が陰刻される。

〔構造〕鰭袖の下端部断面に銅心（0.3cm×0.3cm）が残る。塑土は、この心に２度に分けて盛られるが、いずれも細かい篩土である。表面は、鰭袖に熱変して黒色を呈する顔料が激しく発泡した状態で残る。

〔備考〕鰭袖表面の顔料の状態は、神将像右肩・右上腕部（11A962749、８）、神将像左肩部（11A962761、９）、神将像鰭袖（11A962711、13）のいずれとも異なり、これらとは別個体と考えられる。(SM)

13　神将像鰭袖　11A962711　PL. 8,39

〔法量〕全高3.9cm　最大張2.0cm　最大奥2.5cm

〔形状〕鰭袖のくくりより上の、神将像の上腕部。原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。上部内側に残る一段高い平らな面は、皮甲の可能性がある。皮甲とすれば、法隆寺五重塔北面12号侍者像のように、横幅の広い胸甲の外縁とみるのも一案であろう。

〔構造〕塑土は２層。はじめに少し砂の混じった細かい土で筒状の形を造り、次に細かい篩土で衣文などの細部を仕上げる。表面には、黒色を呈する顔料の痕が残る。(SM)

14　神将像右胸部　11A962731　PL. 9,39

〔法量〕全高4.7cm　最大張3.8cm　厚0.9cm

〔形状〕右肩にかかる吊革の下端部を含む、神将像の胸甲右半部外側の部分。神将像右上半身（11A962825、７）と比較すると、胸部の大きさはこれとほぼ釣り合う。原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。表面が摩滅し、一段高くあらわされた覆輪には縁取線の痕

跡がわずかに残るが、吊革には陰刻線は確認できない。胸甲の外側に接して残る小さな面には、横に段差がみられる。これは、肩甲とその下層に重なる下甲または鰭袖との間の段差とみられる。
〔構造〕仕上土層だけが剝離した薄片である。表面は、覆輪の外側面にわずかに金箔が残る。
〔備考〕神将像右上半身は胸部の仕上土を失うが、肩に胸甲の吊革があらわされず、この断片とは別個体と考えられる。(SM)

15　神将像左胸部　11A962754　PL. 9
〔法量〕全高4.6cm　最大張5.0cm　厚1.6cm
〔形状〕神将像の胸甲左半部の下部。神将像右胸部(11A962731、14)とほぼ同大の胸甲の一部で、原初像の像高も同程度と判断できる。一段高くあらわされた覆輪には、縁取線1条が陰刻され、その輪郭には稜角がある。その稜角からはじまる覆輪の直線部は、胸甲の中央部で、胸甲を締める帯または紐と接する部分とみられる。胸甲中央部の上端には、帯を留める菊座や紐の結びが必ず表されるから、それらを表した痕跡のないこの断片は、胸甲の下部と断定できる。覆輪の下側に接してわずかに残る面は、胸甲の下層に重なる下甲であろう。
〔構造〕仕上土層に少し中土層が付着して剝離した薄片である。覆輪には金の細粒が付着しており、もと金箔押しであったとみられる。神将像左肩・左胸部(11A962761、9)とは接合できず、これとは別個体と考えられる。(SM)

16　神将像胸部外側　11A962　PL. 9
〔法量〕全高5.5cm　最大張2.3cm　厚1.0cm
〔形状〕神将像の胸甲外側の部分。神将像右胸部(11A962731、14)や神将像左胸部(11A962754、15)とほぼ同じ大きさの胸甲の一部で、原初像の像高も同程度と判断できる。一段高くあらわされた覆輪には、縁取線1条が陰刻される。覆輪の輪郭がゆるやかな曲線を描くことから、胸甲の外縁部とみられるが、左半部か右半部かは断定できない。
〔構造〕仕上土層だけが剝離した薄片である。(SM)

17　神将像腹部　11A962753　PL. 9, 39
〔法量〕全高6.0cm　最大張6.2cm　厚3.1cm
〔形状〕半円形の輪郭をもつ前楯の上端部と2重に締めた革の腰帯をあらわした、神将像の腹部。後述の神将像下腹部2点(11A962810・11A96369+11A962755、18・19)と比較すると、前楯の大きさが一回り大きく、原初像の像高は、立像として70～80cmと推定される。前楯には、界線1条と縁取線1条が陰刻され、革帯には縁取りをあらわす。
〔構造〕仕上土とその下層の中土とみられる2種類の塑土が残る。仕上土の厚みは、前楯上端部で0.2cm前後、腰帯の下端で0.7cm前後。中土には炭化した切藁のスサが残る。前楯の表面には顔料が残る。界線より外側の外区・最外縁には、一面に金の細粒が付着する。顔料がまだらに残る外区(界線より外側、縁取線より内側の部分)は、もと金箔地に彩色で文様を描いていたと推測される。
〔備考〕表甲の上に前楯を重ねる甲制は、現存遺品では、天平2年〔730〕頃の薬師寺塔本塑像や天平6年の興福寺旧西金堂八部衆像にあらわれ、以後、日本の神将像に特有な甲制として長く定着する。この断片は、後述の神将像下腹部2点とともに、山王廃寺塑像の製作年代の上限を押さえる上で重要な手がかりとなる。(SM)

18　神将像下腹部　11A962810　PL. 10
〔法量〕全高5.6cm　最大張4.6cm　奥1.8cm
〔形状〕縄状に捻られた腰帯以下、天衣の少し下までを含む、神将立像の下腹部。腰帯・天衣の下層に重なる皮甲は前楯で、その中央左端部。神将像右腰部(11A962702、20)と比較すると、腰帯の太さや皮甲の大きさがこれとほぼ釣り合う。原初像の像高は、60～70cmと推定される。前楯には界線1条と縁取線1条が陰刻される。
〔構造〕塑土は、下土・中土・仕上土の3層が残存する。下土は切藁のスサを混ぜた痕跡のある粗い土で、中土は細かい植物繊維のスサを混ぜた痕跡のある土で、仕上土は細かい篩土である。前楯の界線より外側の外区・最外縁、及び左端側面の立ち上がり部の表面には、金箔が残る。腰帯の上、左端近くにも金箔押しの仕上面がごくわずかに残るが、この部分は前楯上端部の外区とみられる。(SM)

19　神将像下腹部　11A96369+11A962755　PL. 10
〔法量〕全高7.7cm　最大張8.4cm　厚2.5cm
〔形状〕神将立像の前楯の剣先形下端部。前楯の上層に重なる右上端の衣部(11A96369)は、下腹部の前をわたる天衣の一部で、その上方にも前楯の外区がわずかに残る。神将像下腹部(11A962810、18)と同程度の大きさで、原初像の像高は60～70cmと推定される。前楯には内区と外区を画する界線1条と、縁取線1条が陰刻される。
〔構造〕塑土は、下土・中土・仕上土の3層が残存する。各層の組成は、前述の神将像下腹部と同様である。前楯の外区には金箔が残る。
〔備考〕前述の神将像下腹部とは接合できず、これとは別個体の断片と考えられる。(SM)

20　神将像右腰部　11A962702　PL. 10, 39, 40
〔法量〕全高14.5cm　最大張9.3cm　厚4.3cm
〔形状〕腰帯・天衣・表甲下縁を含む、神将立像の右腰部。原初像の像高は、60～70cmと推定される。上端部には縄状に捻られた腰帯があらわされ、これに下腹部の前をわたった天衣(向かって右端から続く)が結び付けられる。結び目の左右から下方に垂れる天衣は、現在、その大半を亡失するが、結び目の向かって左側(像の後側)に輪を作り、右側(像の前側)の末端を表甲の下縁近くまで長く垂らしていたことが、痕跡よりわかる。表甲の下方には、内区と外区を画する界線1条と、縁取線1条が陰刻される。下端部には、表甲の下に続く下甲下端部の立ち上がりがわずかに残る。
〔構造〕塑土は、下土・中土・仕上土の3層が残存する。表甲の上層に重なる天衣は、表甲の造形を仕上げた後に、別に作ったものを貼り付けていることが、その剝落部で確認できる。表甲の界線は、天衣の垂下部をわたる部分で途切れており、同部を貼り付けた後に陰刻した

ことがわかる。表甲の縁取線には、天衣による中断はみられない。

下端中央の天衣剝落部（表甲縁取線の約1cmほど上）には、銅サビの付着した小孔が横に3個あり、孔の周囲に塑土が付着する。また、同部分の裏面には銅線2本が残存する。これらの銅線および小孔は、表甲下縁より垂れる天衣遊離部の心およびその痕跡とみられる。表甲内区には金箔が残る。(SM)

21　神将像左腰部　11A962750　PL.10,40

〔法量〕全高13.7cm　最大張6.1cm　厚2.8cm

〔形状〕天衣を含む、神将立像の左腰部。上端部の片輪結びは、下腹部の前をわたった天衣（結び目の向かって左側にわずかに残存）を腰脇で腰帯（現在欠失）に結び付けた部分。神将像右腰部（11A962702、20）と比べると、天衣の幅がほぼ等しく、原初像の像高も同程度と判断できる。

〔構造〕塑土は、下土・中土・仕上土の3層が残存する。下方部は、仕上土層が剝落し中土層を露出する。その中土露出部の向かって左端部と下端部には、それぞれ縦方向と横方向の太い線が1条陰刻される。この陰刻線は、仕上土で造形する表甲の大まかな形を示した下当たりと推測される。天衣の結び目とその向かって右側の輪は、表甲の造形を仕上げた後、仕上土を用いて別に作ったものを貼り付けていることが、裏面で確認できる。表甲内区と天衣垂下部の表面には、一部に金箔が残存する。表甲内区は不規則に一面に金箔が残り、もと金箔地であったと判断できる。これに対し、天衣垂下部は衣文線の峰に沿って線状に金箔が残る（挿図A）。表甲内区とは異なる規則的な金箔の残存状態からみて、切金線を用いたものと判断される。

〔備考〕衣文線の峰に沿って切金線を置く手法は、彫塑では、東寺西院不動明王坐像（平安時代・貞観9年〔867〕）、和歌山県慈尊院弥勒仏坐像（平安時代・寛平4年〔892〕）、京都府勝持寺薬師如来坐像（平安時代・9世紀）、室生寺金堂薬師如来立像（平安時代・9～10世紀、彩色・切金は後補）、清涼寺釈迦如来立像（北宋・雍熙2年〔985〕）などの例がある。絵画では、ボストン美術館所蔵の法華堂根本曼荼羅（天平時代または唐時代・8世紀）に古い例がみられる。この手法を用いた彫塑作品としては、この断片が最古の作例となる。(SM)

挿図A．神将像左腰部（11A962750）衣文線の峰に置かれた切金線

22　神将像下甲　11A962712　PL.11

〔法量〕全高5.0cm　最大張5.2cm　厚1.6cm

〔形状〕神将像の皮甲の一部。直角をなす2辺の甲縁に沿って縁取線1条が陰刻され、皮甲の隅部と考えられる。甲縁の断面は鋭角をなし、皮甲の薄さが強調される。甲の厚みや面の曲率は、神将像右腰部（11A962702、20）などに近く、多くの断片が出土している推定像高60～70cmの神将像の一部と考えられる。

この断片のような直角の隅部があらわれる甲の部位としては、表甲下縁の正面、もしくは表甲の下方にあらわれる下甲下縁の正面ないし側面が考えられる。しかし、神将像右腰部の表甲下縁と比較すると、本断片は縁取線外側の外縁部の幅が狭く、界線もあらわされず（神将像右腰部では、縁取線と界線との間隔は約3cm）、表甲下縁に当たるとは考えにくい。他方、下甲下縁に関しては、古代の着甲像では、フリル状にあらわしたり、花弁形を並列する形式のほか、東大寺戒壇堂四天王像のように、水平な下縁をもつ皮甲にあらわす作例が多くみられることが注意される。その場合、表甲に比べて外縁部の幅は狭く、界線もあらわさないのが普通で、その形はこの断片と共通する。下甲下縁では、正面に合わせ目をあらわすほか、興福寺八部衆像や東大寺戒壇堂四天王像のように、側面にも切れ目をあらわす例がある。この断片は、こうした正面の合わせ目もしくは左右側面の切れ目に接した、下甲下縁の隅部に当たるものと考えられる。

〔構造〕残存する塑土は2層。下層は少し砂の混じった細かい土で、上層は細かい篩土の仕上土である。縁取線より内側の区画には一面に顔料が残り、中心部と縁取線沿いの部分に、粒子の粗い顔料で描かれた飛雲文とみられる文様の痕跡が確認できる。縁取線より外側の外縁部には、金の細粒が付着しており、もと金箔押しであったと考えられる。なお、下甲下縁に彩色文様を描く例としては、東大寺法華堂執金剛神像（繧繝唐花文）、同戒壇堂四天王像（繧繝唐花文）、新薬師寺十二神将像（繧繝宝相華唐草文・繧繝花文）などがあり、仕上法の面でも、この断片を下甲下縁とみることに問題はない。(SM)

23　神将像右前腕部　11A962756　PL.11,40

〔法量〕全長9.6cm　袖幅5.5cm　最大奥4.3cm

〔形状〕窄袖（筒袖）を着けた神将像の、肘から袖口までの右前腕部。上部から内側にかけての仕上面の過半を欠失する。神将像右上半身（11A962825、7）などとほぼ大きさが釣り合い、原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。もと肘を屈していたとみられる。

〔構造〕腕の方向に沿って、心が通ったとみられる円孔（径約0.6cm）があく。上部後半の塑土欠失部では、その孔内に銅線（0.3cm×0.3cm）の心が確認できる。孔の直径は銅線よりも大きく、もとは銅線に紐などを巻き付けて心としていたとみられる。塑土は3層で、まず心の周りに植物繊維を混ぜた痕跡のある細かい土を付け、次に同じ土を盛って腕の概形を作り、最後に細かい篩土を薄く盛って仕上げる。なお、中土層と仕上土層の境界付近には、高熱のため激しく発泡した部分がある。(SM)

24　神将像左前腕部　11A962762　PL.11,41

〔法量〕全長11.2cm　袖幅5.6cm　最大奥4.0cm　手首の太さ縦2.5cm　同横2.2cm

〔形状〕窄袖を着けた神将像の、肘から手首までの左前腕部。上部から内側にかけての仕上面の一部を欠失する。神将像左肩・左胸部（11A962761、9）などとほぼ大きさが釣り合い、原初像の像高は、立像として60～70cmと推定される。肘を浅く曲げる。袖は、外側の面には自然な膨らみがあるが、内側の面は平板に作られる。

〔構造〕腕の方向に沿って円孔（径約0.4cm）が貫通する。もと紐などを巻いた金属線を心としていたとみられ、孔の内面にその痕跡が残る。塑土は3層。まず、心の周りに藁スサを混ぜた痕跡のある粗い土を付け、次に植物繊維を混ぜた痕跡のある砂混じりの土で、腕の概形を作

る。最後に細かい篩土を0.1～0.5cmの厚みに盛って仕上げる。窄袖の表面には、黒色を呈する顔料が一面に残り、その一部に金の細粒が残存する。窄袖の縁には、金箔地の痕跡（幅0.7cm）がある。肉身部には一面に顔料が残る。その顔料は熱変して光沢のある黒色を呈し、激しく発泡する。内身部の荒れた表面は、衣部の平滑な表面と明瞭な違いを示す。

〔備考〕神将像右前腕部(11A962756、23)は、この断片に比べて前腕の長さがやや短く、松葉状の分岐を交えた衣文構成など作風も相違し、塑土の構成も異なるので、別個体と考えられる。(SM)

25　神将像右手先　11A962715　PL.11,41

〔法量〕全長4.7cm　最大張3.2cm　最大奥2.5cm　手首の太さ2.6cm

〔形状〕右手首先とそれにかかる衣縁。大きさや手の形からみて、一連の推定像高60～70cmの神将像の断片と考えられる。第１指は先が欠損するが、当初は伸ばしていたらしい。第２～５指は付け根のみが残存するが、当初は、各指とも屈して拳を作っていたとみられる。掌側は平面に近く、仕上面が回っておらず、身体のどこかに当てていた可能性が高い。第５指側の側面も平らである。手首を周る衣縁が確認でき、窄袖の袖口とみられる。

〔構造〕手首の断面と掌側に心木があたっていた痕跡が認められる。塑土は２層。はじめに細かい植物繊維の混ざった土を心の周りに付け、次に細かい篩土で細部を仕上げる。表面は一面に顔料が塗られる。顔料は熱変して光沢のある黒色を呈し、激しく発泡して荒れる。(TM)

26　神将像脛当　9A80289　PL.12

〔法量〕全高5.2cm　最大張4.0cm　厚1.4cm

〔形状〕脛当を含む、神将像の下腿部。推定像高60～70cmの神将像の一部であろう。脛当には、縁取線１条が陰刻される。脛当の正面部には、中央に縦に帯をあらわしたり、稜線が作られるのが普通である。この断片は、中央部にそうした造形がみられないことから、脛当の背面部（ふくらはぎの側に当てる部分）と考えられる。

〔構造〕残存する塑土は２層。下層は植物繊維を混ぜた痕跡のある粗い土で、上層は細かい篩土で0.2～0.3cmの厚みである。脛当の表面には、金箔地が残存する。なお、脛当中ほどにみえる横線は、造形ではなく傷である。(SM)

27　神将像沓先　11A962716　PL.12,42

〔法量〕全高3.1cm　最大張2.7cm　最大奥4.9cm

〔形状〕沓先とそれにかかる脛当の下縁。一連の推定像高60～70cmの神将像の断片とみられる。上からみた沓の輪郭より、左沓先かとみられる。先端は尖り、わずかに反っており、甲の部分はほっそりとする。

〔構造〕足首の部分には縦に心が通った痕跡がある。塑土は、細かい篩土を３度に分けて盛る。はじめに心に円筒状に土をつけ、次に沓先の概形を造り、最後に表面を仕上げる。脛当には金箔が施されている。沓底は平らで、下土が露出しており、邪鬼や台座などに接していたとみられる。

〔備考〕シンプルな形は、川原寺裏山遺跡出土塑像片や興福寺旧西金堂八部衆像の沓先と似る。特に沓の上面に飾りが無く、脛当の下縁も単純な輪郭である点で、興福寺沙羯羅像や緊那羅像の当初の沓先と近いように思われる。(TM)

28　神将像(集合)　頭部(11A962820)、左肩・左胸部(11A962761)、右上半身(11A962825)、左前腕部(11A962762)、右前腕部(11A962756)、左腰部（11A962750)、右腰部（11A962702)、下腹部（11A962810)、沓先（11A962716）PL.42

〔備考〕組み合わせた断片は、いずれも立像として像高60～70cmと推定される神将像の断片である。ただし、それらのうちに同一個体のものと断定できる組合せははなく、左肩・左胸部と右上半身、左前腕部と右前腕部は明らかに別個体と考えられる。

29　魔神像または邪鬼右脚部　11A962751　PL.12

〔法量〕全高3.0cm　最大張6.5cm　最大奥6.0cm

〔形状〕深く膝を屈した右脚の付け根から足首にかけての部分。脚部全体を露出しており、着衣は右脚の付け根に褌の縁の立ち上がりがあらわされるのみである。仰向けに横たわった邪鬼、または仏伝のうち降魔成道の場面の魔神の可能性がある。

〔構造〕塑土は２層。はじめに細かい植物繊維を混ぜた痕跡のある土で概形を造り、次に細かい篩土の仕上土を厚み0.1cm前後に盛り、細部を仕上げる。表面は褌の縁に黒色の顔料が残る。膝から下腿部にかけての地付部に、水平方向に立ち上がる面がわずかに残る。その下に0.8cmほどの厚みで付着する土は、本体の下土よりも粒子の粗い土で、本体の接していた台座や山岳・磯形などの土と推測される。

〔備考〕邪鬼とすれば脚部の外側を台座に密着させていた可能性があり、東大寺戒壇堂増長天像の邪鬼などに近いポーズであったとみられる。ただし、推定像高60～70cmの神将像に踏まれる単独の邪鬼としては小さ過ぎる。醍醐寺本『絵因果経』の降魔成道の場面では、空中を飛ぶ魔神があらわされる。この断片が飛行する魔神であれば、塑壁などに貼付けられていたとみることもできる。(TM)

30　神将像甲　11A962807　PL.12

〔法量〕全長4.1cm　最大張2.2cm　厚0.7cm

〔形状〕神将像の甲の一部。ゆるやかに湾曲する帯状の断片で、縁取線１条が陰刻される。甲の外縁部または革帯とみられるが、部位は特定できない。推定像高60～70cmの神将像の一部か。

〔構造〕仕上土層だけが剝離した薄い断片。縁取線の内側は、現状で赤褐色を呈する顔料の地に、黒色を呈する粒子の粗い顔料がまだらに残る。三山形の花弁など花文の一部を描いたとみられる、この黒い顔料は、熱変して発泡する。縁取線の外側は一面に金の細粒が残り、もと金箔押しであったことがわかる。(SM)

31　比丘像上半身　9A80335　PL.14,15,43

〔法量〕全高16.2cm　胸幅10.0cm　胸奥（左）7.3cm（背面は仕上土層を失う）　同（右）7.4cm（＝最大奥）

〔形状〕頭部と両腕を失った、裸形の比丘上半身。原初像の像高は、立像として45～55cmと推定される。痩身で、鎖骨・肋骨・脊椎・肩胛骨の骨格が露わになる。胸には乳首をあらわし、右腋には右胸につながる膜状の部分をあらわすほか、腋下にこまかい皺をあらわす。

〔構造〕像内中央に炭化した心木が残存する。心木は広葉樹環孔材（環孔は１～３列）製で、胴部内の心木下端部は長方形（1.7cm×2.0cm）の断面を示す。その断面は鋸で切ったように平らな面で、構造的にはやや不自然だが、ここで心木を継いでいた可能性もある。頸部内の心木上端部は、面取りがされ不整な断面を示す。胴部内の心木の当たっていた塑土の面には、斜め方向の溝状のくぼみがやや間隔を置いて２箇所にみられる。心木にあらく螺旋状に紐などを巻き付けていたと推測される。

塑土は下土・中土・仕上土の順に３層に盛る。下土は小石混じりの粗い土で、スサとして切藁を大量に混ぜる。中土は、わずかに砂の混じった土で、スサとしてくにゃくにゃと曲がった細かい繊維を混ぜた痕跡がある。仕上土は緻密な土で、スサは確認できない。製作工程は、心に対して下土を大まかに付けた上で、中土を厚めに盛り、像の概形を造形する。中土層の厚みは、胴部の断面でみると、左脇腹辺で1.4cm、右脇腹辺で2.0cm、背中で0.6cm、腹部で1.0cm前後である。仕上土の厚みは、確認できる部分で0.1～0.6cmである。胸部中央から左胸下・腹部にかけての部分や、背面の左肩周辺から背中の中央にかけての部分は、仕上土層が中土層との境目から剝離して亡失する。左胸部の仕上土層（現存）も、中土層との境目から剝離する。こうした部分で中土層の表面を観察すると、鎖骨・肋骨・臍までが中土の段階で造形されていることが判る。両腕の付け根には、銅線（0.3cm×0.3cm）の心が残存する。腕の銅心の太さは、菩薩像胸部（9A80336、１）や神将像右上半身（11A962825、７）と同じである。

表面には、全面に黒色を呈するやや粒子の粗い顔料が残存する。背面の一部には光沢があり、薄い自然釉のような状態を呈する仕上面がみられる。

〔備考〕自然釉をかけたような表面は、女性像面部（11A962822、34）にもみられる。

肋骨が浮き出た痩せた肉身の表現は、法隆寺五重塔北面の十大弟子像（北21・22・23・24・26・27号像）にもみられる。法隆寺塔本塑像とこの断片を比較すると、ほっそりとした体つきに共通性がみられる。その一方、この断片の胸郭の膨らみや背面での肩胛骨の隆起は、実際の人体を想起させるほどリアルであり、細部も細かく丁寧に造り込まれていて、肉身の表現が一段と現実的になっていることがわかる。また、形状については、着衣が表されない点に特徴がある。法隆寺塔本塑像の十大弟子像では、偏袒右肩に袈裟を着ける像が多く（北26号像のみ、袈裟の末端を正坐した両脚部に懸け、胸腹部を露出する）、法隆寺金堂旧壁画の第１号壁の十大弟子像、同第９・10号壁の２比丘像、興福寺旧西金堂の十羅漢像（天平６年〔734〕、十大弟子像として６軀が現存）でも、半裸の像はみられない。半裸のこの断片は、比丘形像としては異例に属するといえよう。（SM）

32　比丘像左肩・左上腕部　11A962824　PL.13

〔法量〕全高13.8cm　胸奥（左）7.2cm　最大張6.7cm　最大奥7.6cm

〔形状〕吊紐つきの袈裟を着けた像の、左肩から左上腕部にかけての部分。原初像の像高は、立像として45～55cm前後と推定される。興福寺旧西金堂の十羅漢像６軀のうち伝富楼那像・伝迦旃延像に同様の着衣形式がみられ、比丘像であったと推定される。

〔構造〕像内には、心が当たっていたとみられる平らな縦の面が残る。塑土は、下土・中土・仕上土の３層。下土は小石混じりの粗い土で、スサとして切藁を混ぜた痕跡がある。藁スサには長さ1.0cm以上のものもある。中土は下土より細かい土で、断面にスサの焼失痕とみられる小孔が多くみられ、細かい植物繊維のスサが混ぜられていたとみられる。そのほか、短い切藁のスサを混ぜた痕跡もある。仕上土は緻密な土で、雲母が混じる。塑土の盛り方は、中土層が下土層よりも薄く、その厚さは1.0cm前後である。肩をわたる袈裟の吊り紐は、結び目左側の輪や下端部に袈裟の仕上面から剝離亡失した部分があり、別に作ったものを貼り付けていることがわかる。表面の窪んだ部分には、現状で赤色を呈する顔料が残存する。（SM）

33　女性像頭部　11A962821　PL.16,44

〔法量〕全高8.6cm　髻頂―顎7.6cm　頭頂―顎4.9cm　面長3.9cm　面幅3.1cm　耳張4.3cm　面奥4.3cm

〔形状〕頸部を含む、髻を結った俗人女性の頭部。原初像の像高は、坐像として20～25cmと推定される。前髪を左右に梳き分けて両耳の上部に少しかかるようにし、後髪とともに頭頂で束ねる。髻の結い方は、束ねた髪で前方から後方に向かってアーチをつくり、後方より元結部の周囲を右周りに一巡させ、右側方よりアーチの中心を通し、先端を左側頭部後ろに垂らす。髻、地髪部とも毛筋はあらわさない。髪際は緩やかな弧を描く。耳は自然な大きさに造られる。髪型、耳の形、像高から、俗人の供養者とみられる。

〔構造〕頭部内中央に、地髪部中程の高さまで、縦に心の通っていた孔があく。頸部の断面でみると、孔は綺麗な円形（径0.8cm）である。頸部の孔内には細かい布目が確認できるので、頸部では心に布を巻いていたと考えられる。また、頭部の孔内には細い帯状のものが螺旋状に当たっていた痕跡があり、頭部内では心に紐などを巻いていたとみられる。塑土は下土・仕上土の順に盛る。下土は植物繊維（0.3cm位）がわずかに混じる粒子の細かい土で、仕上土は細かい篩土である。表面は彩色仕上げであったとみられる。肉身部には赤褐色を呈する粒子の粗い顔料が残存する。この顔料は熱変し、発泡して荒れる。このため目鼻立ちが不明瞭となり、鼻は欠失している。頭髪部は肉身部の状態とは異なり、平滑な表面である。

〔備考〕従来、山王廃寺出土として知られる個人蔵の女性像頭部と酷似する。ただし、髻の結い方は個人蔵の女性像とは左右対称をなしている。この２像は同一場面の対称位置に安置された可能性があろう。目、鼻、口が顔の中央に集まるのは、女性像（11A962822、34）や神将像頭部（11A962820、６）と同様である。豊かな髪、微妙な抑揚がつけられたこめかみや、頬から顎にかけて肉取りの柔らかさなど、その破綻のない表現力には驚かされる。また、的確な耳の塑形は、細部においても高い造形力が発揮されていることを示している。地髪部や髪際の形が、法隆寺塔本塑像の女性侍者像や川原寺裏山遺跡出土の女性頭部と共通する。（TM）

34　女性像面部　11A962822　PL.17

〔法量〕全高6.8cm　面長4.6cm　面幅3.9cm（現状）　正中線―面部右端2.1cm　正中線―右耳2.7cm　最大張4.3cm　最大奥3.2cm

〔形状〕地髪右半部、右耳下半部を含む女性像の面部。両目より上の中央部から左端部にかけての部分を欠失するが、上瞼を除く右目と左下瞼以下の顔面は残存する。原初像の像高は、坐像として25cm前後と推定される。地髪部は束ね目と毛筋を丁寧にあらわす。耳は全体に小さく、耳垂はやや角張り貫通しない。口は口角をわずかに上げて結び、口端では上唇が下唇の上に被さるように造られる。人中と顎のくく

りをあらわす。耳の形、像高から俗人の供養者とみられる。

〔構造〕裏面には心（縄などを巻き付けた痕跡はない）が当たっていたとみられる、平らで黒色を呈した部分がある。焼失した心木は角材など平面を持つ形であったと考えられる。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土は藁スサ（0.3～1.0cm）の痕跡のある粗い土で、中土は植物繊維を含む土で、仕上土は細かい篩土である。中土の段階で大まかな形を造り、仕上土は0.1cm前後の厚みで盛り、顔や髪の細部を塑形する。表面は彩色を施したとみられる。肉身部には黄褐色を呈する、やや粒子の粗い顔料が残る。部分的に光沢があり、薄い自然釉のような状態を呈する。

〔備考〕表面の自然釉のような部分は、比丘像上半身（9A80335、31）の背面にもみられる。中央に目鼻が集まる顔立ちは、親しみを感じさせると同時に強い印象を与える。頬から顎にかけての肉取りには微妙な抑揚があり、的確で手慣れたヘラさばきには、極めて高い製作水準が看取される。法隆寺塔本塑像の女性像と比較して、顔の細部の塑形はより細やかで、写実性が増している。（TM）

35　女性像胸部　11A962763　PL. 18, 45

〔法量〕全高8.1cm　胸奥（左）4.2cm　同（右）4.0cm　最大張8.1cm

〔形状〕頸部付け根から左腕の肘、右上腕半ばまでを含む女性像の胸部。原初像の像高は、坐像として20～25cmと推定される。打ち合わせのある上着と帯を着ける。上着は襟が立ち上がる。左右の襟の合せ目は欠失するが、左襟の下端部の位置から判断して、左身頃が右身頃の上層に重なっていたとみられる。帯は胸高に締めていたらしく、衣文が胸下に集中する。左手は衣文から推測すれば、屈臂して、腹前辺においていたと思われる。服制、像高から俗人の供養者とみられる。

〔構造〕像内中央に炭化した角材（1.5cm×1.4cm）の心木の一部が残存する。木目の粗い材だが、針葉樹か広葉樹かは確認できない。頸部では心木は面取りされ、楕円形（縦1.5cm、横1.2cm）の断面をみせている。像内の下端部では心木が失われており、心木のあたっていた塑土の面に、約0.5cm幅の撚紐を螺旋状に粗く巻いたような痕跡がある。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土と中土は粒子の細かい土で、ごく小さい孔が多数あき、細かい植物繊維を混ぜていたとみられる。中土には光沢のある黒色の粒子と砂が混じる。仕上土は細かい篩土で、白い砂粒、雲母、光沢のある黒色の粒子が混じっている。製作工程は、まず、角材の心の周りに下土を1.0cm前後の厚みで盛り、中土で両腕などの概形を造る。最後に仕上土を0.2～0.3cmの厚みに盛り、衣文などの細部を塑形する。

〔備考〕この服制に似た例としては、法隆寺五重塔の女性像（東８号）などがある。ただし、この断片は法隆寺五重塔の女性像に比較して撫肩に造られる。（TM）

36　女性像上背・左上腕部　11A962765　PL. 19, 45

〔法量〕全高7.8cm　最大張7.2cm　最大奥4.3cm　上体部の高さ6.0cm（肩上から背子腰上括りまで）

〔形状〕女性の背面上半左側から、左上腕・左肘までを含む部分。原初像の像高は、坐像として20～25cmと推定される。鰭袖の衣・背子を着ける。背子は現存部下端辺りで絞られていたようで、その衣文があらわされる。左肘は、鰭袖衣の下に着ける別の衣（大袖衣か）に覆われる。

〔構造〕下土は藁スサ入り。中土には小孔が多数みられ、細かい植物繊維のスサの痕と思われる。仕上土は緻密である。表面は、背子に花文があらわされる。同形文様を色変わりで交互に配置するか、大型と小型の花文を交互に配置する主文・副文構成と思われるが、放射形構造であること以上の詳細は判明しない。しかし、繧繝は用いない付描風な花文であろうと推測される。また肘の衣に三点文様がみられる。上腕部の表面彩色は、沸き立つような状態を示す。

〔備考〕背子や鰭袖を着ける女性像は、法隆寺五重塔塔本塑像中の像、例えば東13号の侍者像（711年）にみられ、本像も供養者などであろう。法隆寺塔本塑像の鰭袖は、細かい襞がつき自然に垂下する形であり、本像の裾広がりとなって縁が緩やかに波打つ形は、次代の興福寺八部衆像（734年）に近い。更に次の時代になると、東大寺法華堂執金剛神像・四天王像（以上８世紀中頃）のような自然な布の質感を写し大きな襞を作って大きく開く形や、新薬師寺十二神将像（８世紀中頃）・法隆寺食堂四天王像（８世紀後半）のように裾を大きく広げ大きく波打たせる形となり、本像の形からは離れていく。本像に近いのは興福寺八部衆像であり、製作年代も近い頃と考えられよう。（SS）

37　胡人像上半身　11A962823　PL. 20, 21, 45

〔法量〕高10.5cm　最大張7.6cm　最大奥4.4cm　腹奥4.3cm（正面衣表面から背面現存下土まで）　胴張6.1cm

〔形状〕手首までの右腕を含む、胡人の上半身。原初像の像高は、立像として30cm前後と推定される。右胸から腹部、右上腕下半から前腕が残り、頭部、右胸から右肩にかけての部分、及び右肩から背面にかけての表層を欠失する。袖は細い筒袖で、長い襟を左前に打ち合わせて左腹上のボタンで留める。いわゆる胡服である。右襟を大きく折り返す。左襟の処理は保存状態の関係で明確ではなく、片襟であった可能性もある。

〔構造〕像内には心木を２本通した痕がある（挿図Ｂ）。１本は径約１cmで体幹部中央よりやや左寄りに通り、心木に紐状のものを巻いていた痕跡が孔の内面に残る。もう１本は径約0.4cmで胸部から頭部に向けて続き、心木が短い藁で包まれていた痕跡がある。塑土は、下土・中土・仕上土の３層である。下土・中土はともに細かい石の混じる土で、下土には藁スサ、仕上土には細かい植物繊維を混ぜた痕跡がある。仕上土は場所により数層に重なり、慎重に塑形されたことがうかがえる。

右襟下半に団花文の痕跡が残るが、この部分は襟に沿った帯状区画と思われ、半截の団花文が両側から交互に並ぶ構成であろう。団花文はＣ字形をつなげ、その連結部に三裂花弁を置く形である。完形の団花文を想定した場合、Ｃ字形は４個を連ねたものであろう。

挿図Ｂ．胡人像の上半身（11A962823）心木の痕跡

〔備考〕供養者の胡人をあらわしたものだろうか。法隆寺五重塔塔本塑像中にも西域風な供養者がみられるが、この像のような胡服を着けた者は見当たらない。胡服を着けた胡人の造形としては、正倉院の紫檀木画槽琵琶・楓蘇芳染螺鈿槽琵琶の捍撥に駱駝や象に騎乗する姿が描かれ、木画紫檀基局の側面に駱駝を牽引する姿があらわされる。この像は日本最古の胡服を着けた胡人の造形と思われる。なお、団花文の詳細については、第５章、第１節のⅥを参照。（SS）

38　腰と右手先？　11A962758　PL.22
〔法量〕全高7.2cm　最大張5.9cm　最大奥8.1cm
〔形状〕拳を握った右手先をあてた腰部か。人物像の腰部とすれば、原初像の像高は坐像として20～30cmと考えられる。左腰側には手などがあたった痕跡はみられない。
〔構造〕内部に縦に心の通っていたとみられる台形の孔（0.9cm×2.4cm）が貫通する。孔内に長い縦線がみえ、1.5cm程度の藁が残存している。このことから、心木の周囲に藁束を添わせて心としていたと推定される。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛る。下土と中土は小石や藁スサの混じる、同じ組成の粗い土である。仕上土は細かい篩土で0.4～0.8cmの厚みに盛る。右手首かとみられる部分にも心の通っていたとみられる小孔（0.3cm×0.5cm）がある。表面は彩色仕上げで、顔料は高熱のために変質し、黒色を呈し発泡する。
〔備考〕他の人物像の入念な造りに比して、衣文もあらわさず、全体に簡略な造形である。人物像とみてよいか検討の余地がある。（TM）

39　左足先左半部　11A961871　PL.22,46
〔法量〕高2.7cm　全長4.8cm　最大張2.7cm
〔形状〕第３～５指を含む左足先左端部。原初像は立像として60～70cmと推定される。第３指は半ば以下を欠失する。指の付根には関節の膨らみをあらわす。像の種類としては、裸足の金剛力士や、板金剛（サンダル状の履物）を履いた天部・羅漢などが考えられる。おとなしい足指の表現や像の大きさから、八部衆のうち阿修羅像を想定することもできる。
〔構造〕塑土は、細かい篩土を２度に分けて盛る。表面には、一面に熱変して濃褐色を呈する顔料が、発泡した状態で残る。神将像沓先（11A962716、27）と同様、足裏は平らで、仕上土が回っておらず、台座や板金剛などに密着していたとみられる。（TM）

40　天衣　11A962714　PL.22
〔法量〕全長2.6cm　最大張3.4cm　厚0.6cm
〔形状〕衣縁を含む天衣の小断片。全体に薄く、表面・裏面とも仕上げられており、天衣遊離部などの可能性がある。
〔構造〕内部には衣縁に沿うように銅線の心（0.1cm角）が残存している。仕上土の剝落した面に目の細かい布の痕跡がみられる。断面でみると、銅線を包む二つ折りの布を心にし、その片側に細かい篩土を付け、さらに同様の土で表面を仕上げていることがわかる。もとは２本の銅線の間に布をわたして心としていたものと考えられる。
〔備考〕この断片の厚みは最大で0.6cmしかなく、細部にまで神経の行きわたった造りを示す。（TM）

41　衣の下端部　11A962161　PL.23
〔法量〕全長5.3cm　最大張3.1cm　厚1.3cm
〔形状〕折り畳みのある衣の下端部。裙裾や天衣、条帛の末端などの可能性がある。
〔構造〕仕上土層だけが剝離した薄い断片。裏面は表面の折り畳みの形に沿って窪んでおり、仕上げより前の段階で衣文の概形が造形されたとみられる。断片ながら、形に密度が感じられる。（TM）

42　衣部　11A96923　PL.23,46
〔法量〕全長4.5cm　最大張3.9cm　厚1.7cm
〔形状〕全体に湾曲し、衣文の残る断片。
〔構造〕仕上土層だけが剝離した薄い断片。
〔備考〕丁寧に塑形された衣文や、薄茶色の焼色を呈する仕上土は、胡人上半身（11A962823、37）と共通し、その右肩にあたる可能性が高い。（SM）

43　衣部　11A962693　PL.46
〔法量〕全長4.7cm　最大張9.1cm　厚1.4cm
〔形状〕全体に湾曲し、弧を描く衣文のある断片。
〔構造〕仕上土層だけが剝離した断片。（TM）

44　衣部　9A80290　PL.23,46
〔法量〕全長4.2cm　最大張4.8cm　厚1.9cm
〔形状〕衣縁を含む衣部の断片。中央から左右にかけて全体に緩やかに湾曲する。向かって右側に、左前の打ち合わせをあらわす。下端向かって左側には、蓮弁の先のように反り返る衣縁がみられる。菩薩像の裙の折返部、台座蓮弁に懸かる裳の一部などの可能性がある。
〔構造〕残存する塑土は２層で、下層は植物繊維が混じった痕跡のある土で、上層は細かい篩土の仕上土で、厚みは0.3cm程度である。表面には薄い褐色を呈する粒子の細かい顔料が残る。衣縁の一部には金箔が残存する。裏面はほぼ平らである。（TM）

45　衣部？　11A962789　PL.46
〔法量〕全長4.2cm　最大張3.4cm　厚1.3cm
〔形状〕襞のある断片。中央部の一段高くあらわされた部分に、３条の深い線と１条の浅い線を陰刻する。下層の土が露出している部分にも当りとみられる陰刻線が４条ある。衣部の可能性があるが、他の衣部の断片と比較すると表現が粗い。
〔構造〕残存する塑土は２層で、下層は小石の混じった粗い土で、上層は細かい篩土の仕上土である。他の小像の断片と比較すると下層の土の粗さが目立つ。裏面はほぼ平らである。（TM）

46　衣部？　11A962757　PL.23,47
〔法量〕全長8.2cm　上面径6.5cm前後　底面長径9.6cm　底面短径9.1cm
〔形状〕衣文（？）のある円錐状の断片。
〔構造〕内部には心木が通ったとみられる長方形（1.1cm×1.6cm）の孔が貫通している。その孔の内面には藁や縄を巻き付けた痕跡は認められない。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛られる。下土と中土は1.5cm位の藁スサ（一部残存）を多く含む粗い土。仕上土は黒い粒子の

混じる細かい篩土で、0.3～0.7cmの厚みに盛る。表面は一部に赤褐色を呈する顔料が残る。底面の下土・中土層には、わずかに甲盛りのある硬いものが当たったとみられる平滑な面がある。
〔備考〕全体に面の造りが単純で、塑土の組成も粗く、供養者像などの小型の人物像とは考えにくい。ここでは一応、衣部（？）とするが、他の可能性についても検討を要する。（TM）

47　金箔地に色帯のある断片　11A962817　PL.23
〔法量〕全長5.0cm　最大張5.4cm　厚1.4cm
〔形状〕全体に浅く湾曲した断片。
〔構造〕残存する塑土は２層。下層は粗い土で、上層は細かい篩土の仕上土で、厚みは0.2cmほどである。表面は一面に金箔が残るほか、茶褐色を呈する顔料による色帯が平行状に３本残る。中央の色帯の幅が0.3～0.4cm、残り２本の色帯の幅が0.2cmである。その色帯の間隔は1.1cmと1.8cmである。この色帯の一部に金の細かい粒が残る。もと金箔地に顔料で色帯を描いていたとみられる。
〔備考〕金地彩色であるとすれば、神将像の甲の一部の可能性がある。（TM）

48　顔料の残る断片　11A962804　PL.23
〔法量〕全長5.7cm　最大張3.9cm　厚1.8cm
〔形状〕ゆるやかに湾曲する断片。
〔構造〕残存する塑土は３層。下土は植物繊維の混じる粗い土で、中土にわずかに付着して残る。中土と仕上土はともに細かい篩土である。表面には粒子の粗い顔料が厚く一面に残る。この顔料は熱変して、光沢のある黒色を呈し、激しく発泡する。（TM）

49　猪頭部前半　9A80311　PL.24,47
〔法量〕全高3.2cm　最大張3.2cm　最大奥5.3cm
〔形状〕猪の鼻先から下顎にかけての部分。口の左右には、上下より嚙み合わさる牙をあらわす。下顎より生える牙は長く、そのため上口唇が少しめくれる。鼻先は反り、鼻孔が穿たれる。鼻の上面には横皺が多くあらわされる。
〔構造〕上顎内から鼻先に向かって、心が通っていたとみられる丸く細い孔（径0.3cm）があく。孔の内面には、細い紐ないし藁スサなどを巻いた痕跡がある。塑土は下土・中土・仕上土の順に盛られる。下土と中土は植物繊維の混じる細かい土である。仕上土は細かい篩土で、0.2～0.3cmの厚さに盛り、細部を仕上げたとみられる。表面には、一面に光沢のある赤褐色を呈する顔料が残る。
〔備考〕小断片ではあるが、猪の特徴が的確に細かく表現されている。猪が登場する仏伝中の場面としては、降魔成道（猪頭の魔神像）、涅槃（十二獣像のうちの猪頭像）が考えられる。山王廃寺の塔本塑像が、どのような場面で構成されていたかを考える上で重要な断片である。詳細については、第５章、第１節のⅣを参照。（TM）

50　獣毛　11A962700　PL.25
〔法量〕全長4.8cm　最大張4.5cm　厚1.8cm
〔形状〕獅子のたてがみなど、獣毛とみられる断片。
〔構造〕仕上土層だけが剝離した断片。表面には竹ヘラの先端などでつついたような窪みが造られ、窪みに濃赤色を呈する顔料が残っている。裏面は凹凸が無く、全体に浅く湾曲している。
〔備考〕西方や南方の外国人のウェーヴのかかった頭髪の可能性も考えられる。（TM）

51　駱駝前脚部　9A8057　PL.25
〔法量〕全高4.6cm　最大張5.4cm　最大奥5.0cm
〔形状〕先端の縮れた毛が片側の面にある逆円錐状の断片。断片の上面、底面とも楕円状で、上面に対して底面は細く造られる。また、上面は何かに密着していたとみられ、底面は欠損面となっている。駱駝の前脚の付け根にあたる可能性が高い。毛筋が直線的に塑形されるので立っている駱駝とみられ、原初像の像高は30～40cmと推定される。
〔構造〕内部中央に、縦に直っすぐに心が通っていたとみられる円孔（径0.6cm）が貫通する。孔の内面には縄などを巻き付けた痕跡は確認できない。欠損面より下にさらに筒状のものが続いていたとみられる。塑土は２層で、はじめに心に植物繊維を含む細かい土を付け、次に細かい篩土で表面を仕上げる。毛の部分は皮膚の面を仕上げた上で、同じ篩土をさらに盛りつけ、ヘラで毛筋を塑形する。表面は毛のある側の皮膚に顔料が残る。この顔料は熱変して、光沢のある黒色を呈し、少し発泡する。毛のない側には一部黒色の顔料の及ばない素地の部分がある。毛の部分は褐色を呈する顔料が残る。
〔備考〕７世紀第４四半期以後の唐墓から出土した駱駝俑には、前脚の付け根に毛を竹ヘラで塑形する例が多くみられる。付け根の周囲全体に毛をあらわすものと、前面から外側のみに毛をあらわすものとがある。この断片は、陝西省独孤思敬夫婦墓（長安３年〔703〕思敬葬、景龍３年〔709〕夫人追葬）、河南省安菩夫婦墓（景龍３年）、陝西省鮮于庭誨墓（開元11年〔723〕）から出土した駱駝俑の前脚に類似する。また、唐墓より出土する駱駝には胡人の牽駝俑を伴うことが多く、山王廃寺塑像の中に胡人像上半身（11A962823、37）が含まれていることは興味深い。（TM）

52　動物頭部？　11A962581　PL.47
〔法量〕全長4.5cm　最大張5.5cm　厚2.4cm
〔形状〕動物の頭部の一部かともみられるが、断定はできない。
〔構造〕塑土は細かい植物繊維の痕跡のある篩土を２度に分けて盛る。（TM）

53　棒状の断片　①11A962771　②11A962772　③11A962770　PL.26
〔法量〕①全長6.4cm　径2.3cm　②全長4.7cm　径1.4cm　③全長5.9cm　径1.4cm
〔形状〕①は先端が細く、基部が太い。太い方の一端は造形が終わっており、側面に欠損面があるので、横方向に造形が続いていたとみられる。②③はともにほぼ円柱状であるが、片側が幾分細くなる。③の先端部はほぼ完存している（わずかに先端部の塑土を失う）。

〔構造〕①は心の有無は確認できない。基部の欠損面に斜めに孔（径0.4cm）が貫通する。塑土は植物繊維の混じる土の上に、細かい篩土を薄く盛って仕上げる。表面には白色を呈する顔料が残り、縦に裂けたような亀裂が入る。②③はともに先端に銅心（0.4cm×0.3cm）があらわれる。基部の一部にわずかだが立ちあがりが残る。塑土は細かい篩土を２度にわけて盛る。表面には顔料が残る。
〔備考〕②③は形状・構造が共通し、同類のものとみられる。（TM）

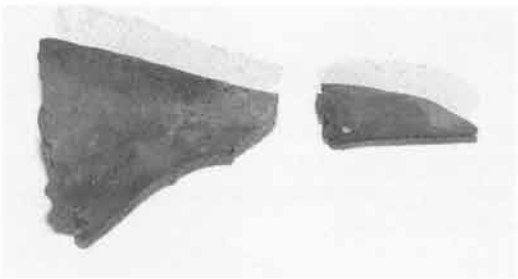
54　棒状の断片　9A80304～9A80308　PL.26,48
〔法量〕①304　全長8.1cm　上端の径1.5cm
②305　全長7.6cm　上端の径1.9cm　下端の径3.4cm
③306　全長4.3cm　上端の径1.9cm　下端の径2.4cm
④307　全長6.7cm　上端の径1.7cm　下端の径2.0cm
⑤308　全長7.2cm　上端の径1.6cm　下端の径1.8cm
〔形状〕①②は一端が細く、一端は太くなり、微妙な起伏のある造形を示す。①は太い方の一端は造形が終わっており、側面に欠損面があるので、横方向に造形が続いていたとみられる。
〔構造〕①②③は中心に心の通ったとみられる円孔があく。①は孔の内面に螺旋状の痕跡が確認される。④⑤は内部中央に銅心（各0.3cm×0.3cm）が残る。①～⑤の塑土は細かい篩土を２度に分けて盛る。①②は表面に粒子の粗い顔料が残り、その顔料が熱変して光沢のある濃褐色ないし黒色を呈し、激しく発泡している。
〔備考〕①②は、表面の状態が他の肉身部の断片と近く、形状を勘案すれば、小像の腕の可能性が高い。④⑤は、形状・構造が棒状の断片（11A962772・11A962770、53―②③）と類似する。（TM）

55　筒状の断片　11A962759　PL.26,48
〔法量〕全長9.7cm　最大張4.7cm　厚4.1cm
〔形状〕一部に角張りのある筒状の断片。
〔構造〕中央に心の通ったとみられる円孔（径2.2cm）が貫通している。孔の内面に心の方向に沿って藁の痕跡が疎らに確認できるので、もと心には藁束を粗く沿わせていたとみられる。塑土は、２層で植物繊維の混じった痕跡のある細かい土を心に付け、細かい篩土で表面を仕上げる。表面には粒子の粗い顔料が残っており、その顔料は熱変して光沢のある黒色を呈し、一部は激しく発泡する。
〔備考〕何の部分か特定できないが、同様のものが数片確認されている。（TM）

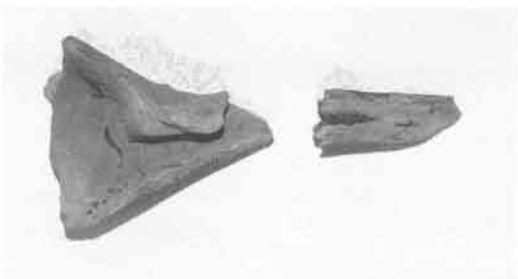
56　半円筒状の断片　11A962745　PL.26,49
〔法量〕全長5.2cm　最大張2.8cm　厚1.9cm
〔形状〕半分を失った円筒状の断片。
〔構造〕内部中央には心の通ったとみられる円孔があく。裏面でその孔の内面を観察すると、心に巻かれていたとみられる細い紐の痕跡が確認される。塑土は、心に比較的粒子の細かい土を１～２層に付け、次に細かい篩土で表面を仕上げる。表面は一面に、熱変して光沢のある黒色を呈する顔料が残る。（TM）

57　筒状の断片　11A962671　PL.26,49
〔法量〕全長9.7cm　最大張4.1cm　厚2.8cm
〔形状〕断面が蒲鉾型を呈する筒状の断片。
〔構造〕内部中央に心が通っていたとみられる孔がある。片側には土が詰まっている。塑土は２層。まず、心の周りに植物繊維の混ざった痕跡のある土を付け、次に細かい篩土を盛って仕上げる。表面の一部に金箔が残る。（TM）

58　三角状の断片　11A962692　PL.26,49
〔法量〕全長8.4cm　最大張7.5cm　厚3.4cm
〔形状〕一端は扇状に大きく開き、一端は細い筒状となる、イカのエンペラのような形をした断片。
〔構造〕細い筒状の部分の中央には心が通っていたとみられる窪みがある。塑土は細かい篩土だけが残る。ただし、２度に分けて盛られているようである。表面は一面に濃灰色を呈する顔料が残る。
〔備考〕表面の色、心の通った痕跡、塑土の状態が一致する半円筒状の断片（11A962677、全長5.6cm、最大張2.3cm、厚2.0cm）が出土しており、同一個体の可能性がある（挿図C・D）。（TM）



挿図C．三角状の断片（11A962692）と半円筒状の断片（11A962677）表面



挿図D．三角状の断片（11A962692）と半円筒状の断片（11A962677）裏面

59　直方体状の断片　11A962728　PL.27,49
〔法量〕全高6.0cm　最大張7.9cm　最大奥3.0cm

〔形状〕３つの平面と１つの隅角で構成される断片。箱形の造形物の一部とみられる。このうち２面には界線とみられる直線１条が陰刻される。
〔構造〕残存する塑土は２層。下層は藁スサの痕跡のある、小石混じりの粗い土である。上層は細かい篩土を厚み0.5～1.0cmに盛る。界線のある面のうち、大きい方の面に金箔が残る。
〔備考〕台座、倚像の椅子、涅槃像の寝台などの可能性ある。(TM)

60　陰刻線２条のある断片　11A962691　PL.27
〔法量〕全高7.3cm　最大張5.1cm　最大奥2.2cm
〔形状〕平面に界線とみられる陰刻線２条のある断片。
〔構造〕残存する塑土は３層。下層は藁スサ（約1.5cm）の痕跡のある粗い土、中層は植物繊維を混ぜた痕跡のある細かい土、上層は細かい篩土の仕上土である。表面にはわずかに金箔が残る。
〔備考〕直方体状の断片（11A962728、59）とは、平面に陰刻線があること、金箔が残ること、薄い煉瓦色の焼色を呈することなどに共通点がある。しかし、塑土の構成がやや異なり、同一個体とは断定できない。(TM)

61　稜線のある断片　9A80292　PL.27
〔法量〕全高8.6cm　最大張3.7cm　最大奥2.6cm
〔形状〕２つの平面を持つ稜線のある断片。箱形の造形物の一部とみられる。
〔構造〕残存する塑土は２層で、ともに細かい篩土である。表面には金箔が残る。
〔備考〕直方体状の断片（11A962728、59）とは、仕上面の状態や塑土の構成が異なり別個体とみられる。(TM)

62　稜線のある断片　11A962800　PL.27,49
〔法量〕全高4.5cm　最大張2.7cm　最大奥1.8cm
〔形状〕２つの平面を持つ稜線のある断片。箱形の造形物の一部とみられる。
〔構造〕仕上土層だけが剝離した断片。一面にのみ金箔が残る。
〔備考〕直方体状の断片（11A962728、59）とは、平面があること、金箔が残ること、薄い煉瓦色の焼色を呈することなどに共通点がある。(TM)

63　稜線のある断片　11A962729　PL.27,49
〔法量〕全高6.6cm　最大張1.3cm　最大奥1.5cm
〔形状〕２つの平面を持つ稜線のある断片。箱形の造形物の一部、もしくは框のような部分とみられる。そのうち１面に稜線に沿って界線１条が陰刻される。
〔構造〕残存する塑土は２層で、ともに細かい篩土である。界線のある面に金箔が残る。
〔備考〕直方体状の断片（11A962728、59）とは、塑土の構成が異なり別個体とみられる。(TM)

64　飛雲頭部　11A962730　PL.28,50
〔法量〕全高6.0cm　最大張10.2cm　最大奥3.2cm
〔形状〕雲頭の巻き込みの一部と、雲脚の稜線の一部が残る。全体の造形にはあまり奥行きがない。
〔構造〕表面には金の細粒や彩色痕がみられる。一部に溶銅が付着する。(SS)

65　飛雲脚部　11A962717　PL.28,50
〔法量〕全高4.2cm　最大張6.1cm　最大厚1.9cm
〔形状〕細くなりながら伸びる雲脚の末端近くと思われる断片。仕上面は裏面にまで及ぶ。表面には稜線を塑形するが、造形にはあまり奥行きがない。
〔構造〕裏面では、心の通っていた部分が溝状に欠損する。表面の仕上げは、稜線間の谷の部分に縞状の彩色痕がみられる。彩色は現状で鈍い赤色を呈し、所々泡状に沸き立ったような状態を示す。金の細粒が顔料の残る部分を中心に残存するのは、金箔地に彩色をしていたためとみられる。(SS)

66　飛雲脚部　11A962752　PL.28,50
〔法量〕全高4.6cm　最大張13.1cm　最大奥4.4cm
〔形状〕細くなりながら伸びる雲脚。仕上面は裏面にまで及ぶ。表面には稜線を塑形するが、裏面では稜線は省略される。
〔構造〕裏面では、心の通っていた部分が溝状に欠損する。塑土は２層が残存する。下層の土には小石が混じるが、スサの痕跡は確認できない。仕上土は緻密な篩土で、0.2～0.3cmの厚みに盛る。表面は全面を金箔地とした上、稜線間の谷の部分に縞状に彩色を施し、稜線に沿って1.0cm前後の幅で金箔地を残す。同種の飛雲断片のうち、最も良好な保存状態を示す。(SS)

67　飛雲脚部　9A80309　PL.28,50
〔法量〕全高2.8cm　最大張7.1cm　最大奥3.4cm
〔形状〕少しうねりながら細く伸びる雲脚。断面はほぼ三角形を呈し、そのうち２面を仕上面とし、稜線をあらわす。
〔構造〕面積が広い方の断面でみると、内部には銅線の心（0.2cm×0.2cm）が通る。面積が狭い方の断面には、この心は貫通していない。表側の２面には、稜線間の谷の部分に縞状に顔料が残り、稜線に沿った顔料痕のない帯状部（幅0.6cm前後）に金箔が残存する。残りの１面

は不整形で彩色痕もみられない。(SS)

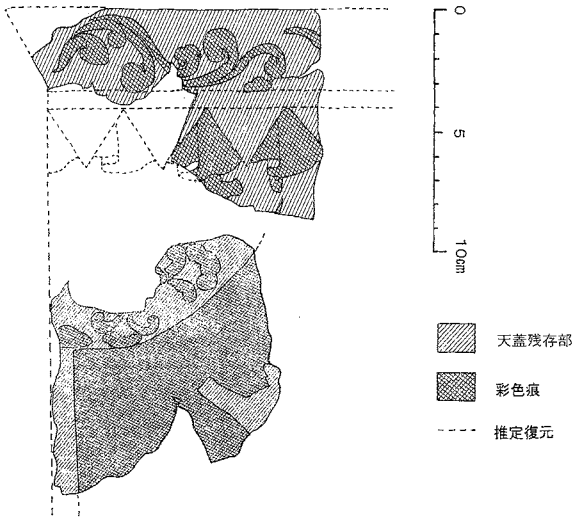
68　飛雲脚部　9A80291　PL.28
〔法量〕全高4.1cm　最大張5.1cm　最大奥3.4cm
〔形状〕平行状に弧を描く稜線2条をあらわす。
〔構造〕表面は金箔地で、稜線を挟んだ上下の部分に縞状に顔料が残る。(SS)

69　飛雲？　11A962788　PL.28
〔法量〕全長5.9cm　最大張2.9cm　厚1.7cm
〔形状〕稜線1条をあらわす。
〔構造〕仕上土層だけが剝離した薄片。表面は全体に金の細粒が残り、もと金箔地であったとみられる。稜線に沿って帯状(幅1.2cm)に顔料痕のない部分がある。これに接して稜線に平行な帯状の彩色痕がみられる。その顔料は熱変して茶褐色を呈し、発泡する。
〔備考〕64～69は飛雲と思われる断片である。これらには奥行きの浅いもの(63･64)、立体感のある奥行きの深いもの(65･66)があるが、壁面近く張り付くような部分と、前に大きく張り出す部分とがあったのであろう。奥行きの深いものにも塑形の施されない面があり、一方向からの視線にあわせたものであろう。これらの雲は金地に彩色が施されていたとみられ、仕上げの入念さとともに、聖なる雲としての表現が注目される。(SS)

70　飛雲脚部／磯形？　9A80332　PL.50
〔法量〕全長17.1cm　最大張10.5cm　最大奥6.7cm
〔形状〕平行状に多くの襞をあらわす。ふくらみのある造形やうねりのある襞の形から、雲の一部かともみられる。しかし、他の飛雲断片と比較すると、稜線に鋭さがなく、むしろ磯形とみた方がよいかもしれない。
〔構造〕残存する塑土は2層。下層の土は砂混じりの比較的細かい土で、植物繊維のスサを多く混ぜた痕跡がある。仕上土は緻密な篩土である。表面には、彩色の下地とみられる白色の顔料が残る。(SM)

71　箱形天蓋(集合)　上段向かって左より11A962720＋11A962809、11A962721、11A962725、11A962722、11A962802、11A962706、下段向かって左より11A962724、11A962723　PL.51

72　箱形天蓋　11A962720＋11A962809　PL.29,51
〔法量〕全高8.8cm　最大張13.3cm　最大奥3.8cm
〔形状･彩色〕天蓋の葺返しと飾幕、およびその下のカーテン状の垂幕の一部。葺返しは飾幕に対して約150度程の角度で迫り出す。葺返しの上縁は約45度、隅は約100度の稜角となる。表面に白色下地に濃褐色の彩色痕が残る。葺返しには唐草文、飾幕には三角文が表される。文様の縁は淡赤色に滲む。
〔構造〕塑土は3層で、下土は1cm前後の藁スサを多く混ぜた粗い土、中土は微細な孔の残る(スサの焼失痕か)比較的細かい土、仕上土は緻密な土である。下土で概形を造り、これに中土を0.5cm前後の厚みに、仕上土を0.2cm前後の厚みにそれぞれ盛って、白色下地を塗って彩色を行う。以下の箱形天蓋の断片(73～79)も同様の構造を示す。
〔備考〕72～79は、箱形天蓋とその下のカーテン状垂幕の断片と思われる(挿図E)。出土しているのは、天蓋の葺返しとその下の飾幕、および隅部分で括られるカーテン状の垂幕である。葺返しには唐草文が描かれ、その下の飾幕との間には、境界の帯(現在彩色消失)が設けられる。飾幕には三角文･襞列帯が描かれる。その下のカーテン状垂幕は、上より団花文帯、無文帯で構成される。



挿図E．箱形天蓋　推定復原案

現在、白色下地に濃褐色の彩色痕が残るが、火を被って、多くの彩色が失われているものと思われる。現状から文様を推測する場合には、注意を要する。例えば、襞列の表の彩色は残るが、逆三角形の垂幕列や襞列の裏の彩色は失われて、現状では白色の下地をあらわしているものと推定される。濃褐色の三角形は、もとは逆三角形の垂幕列の間から覗く襞列をあらわした部分であり、底辺の不整形な繰り込みが襞裾の折り畳みであると考えられる。
箱形天蓋の例としては、法隆寺金堂中の間･西の間の天蓋(7世紀後半)や法隆寺橘夫人念持仏厨子の天蓋(7世紀末～8世紀初)が知られる。これらは上下2段の葺返しを備えるが、その下段葺返し以下が、これらの天蓋残存部に該当する。前記法隆寺の諸天蓋の下段葺返し以下の部分は、上から葺返し(唐草文)･細い境界帯･飾幕(鱗形2段、逆三角形･襞列)の順で構成されているが、本天蓋では、飾幕のうち鱗形の部分が省略され、その分丈が低いものと考えられる。71で測ると、葺返しの高さは約3.4cm、飾幕の高さは約2.9cmである。(SS)

73　箱形天蓋　11A962724　PL.29,51
〔法量〕全高10.6cm　最大張9.1cm　最大奥5.7cm
〔形状･彩色〕天蓋下のカーテン状の垂幕の隅部分。隅はほぼ直角で、隅をはさんだ2平面は灰白色下地に濃褐色の彩色痕が残る。その2面の文様構成は同一である。カーテン状垂幕の上半部は団花文帯で、団花文は先端に扇状花を置く十字構造と思われる。その下半部は平塗

りの無文帯で、隅には各面約0.8cm幅の縁取りをあらわす。団花文帯と無文帯の境界は、2面ともほぼ同じ高さで、隅の稜線に対して斜めに弧を描いている。(SS)

74　箱形天蓋 11A962725　PL.30
〔法量〕全長5.2cm　最大張3.3cm　最大厚1.4cm
〔形状・彩色〕天蓋の葺返しの一部で、白色下地に濃褐色の唐草文の痕跡が残る。(SS)

75　箱形天蓋 11A962721　PL.30
〔法量〕全長6.6cm　最大張4.9cm　最大厚3.8cm
〔形状・彩色〕天蓋の飾幕の下部と、その下のカーテン状垂幕の一部。白色下地に濃褐色の彩色痕が残る。飾幕には三角文と襞、カーテン状垂幕には団花文の一部が残る。(SS)

76　箱形天蓋 11A962722　PL.30
〔法量〕全長6.4cm　最大張4.4cm　最大厚2.7cm
〔形状・彩色〕天蓋の飾幕の下部と、その下のカーテン状垂幕の一部。白色下地に濃褐色の彩色痕が残る。飾幕には三角文と襞、カーテン状垂幕には団花文の一部が残る。(SS)

77　箱形天蓋 11A962723　PL.30
〔法量〕全長4.5cm　最大張2.5cm　最大厚2.5cm
〔形状・彩色〕カーテン状垂幕の団花文帯の一部。白色下地に濃褐色の団花文の一部が残る。(SS)

78　箱形天蓋 11A962802　PL.30,51
〔法量〕全長4.7cm　最大張4.2cm　最大奥2.3cm
〔形状・彩色〕天蓋の飾幕の隅部分。白色下地に濃褐色の彩色痕が残り、三角文・襞をあらわす。(SS)

79　箱形天蓋 11A962706　PL.30
〔法量〕全長3.9cm　最大張3.7cm　最大厚2.4cm
〔形状・彩色〕天蓋の飾幕と、その下のカーテン状垂幕の一部。白色下地に濃褐色の彩色痕が残り、三角文・襞をあらわす。(SS)

80　山岳頂部　11A962767　PL.31,52
〔法量〕全高18.6cm　最大張14.0cm　最大奥6.9cm
〔形状〕側面に山襞を数段重ねた細長い山岳の頂部。前面、背面ともに仕上げる。
〔構造〕内部中央に心が通っていたとみられる丸い孔(径1.8cm、下端からの深さ11.0cm)があく。円孔の内面には紐などの痕跡は確認できない。塑土は下土、仕上土の順に盛る。下土は長めの切藁のスサを混ぜた、小石混じりの極めて粗い土である。仕上土は砂混じりの土で、断面にピンホールが多数みられ、スサとして細かい植物繊維を混ぜていたとみられる。製作過程はまず心に下土を付け、山襞の一部を含めて山容の概形を造る。次に仕上土を厚めに盛って山襞の細部を塑形する。この断片では下土の段階で、肉付けの少なかった側に仕上土を厚く付け足して山容を整えている。表面には彩色の下地とみられる白色を呈する顔料が残存する。(SM)

81　山岳頂部　11A962699　PL.31,52
〔法量〕全高23.8cm　最大張13.7cm　最大奥14.3cm
〔形状〕山襞を前後に重ねた山岳の頂部の、向かって左側の半分。前面、背面ともに仕上げる。稜線は垂直に切り立ち、半U字形の輪郭を呈する。山の稜線を挟んだ前後の部分には造りに精粗がある。奥行きが大きく山襞を明瞭にあらわした側が前面にあたるとみられる。
〔構造〕塑土は2層。下土は藁スサを混ぜた、小石混じりの粗い土。仕上土は0.3～1.0cmの厚みに盛り、山襞などを塑形する。表面は白色の下地の上に、濃灰色を呈する顔料が部分的に残存する。(SM)

82　山岳頂部　9A80334　PL.31,52
〔法量〕全高14.0cm　最大張10.4cm　最大奥7.0cm
〔形状〕山襞を前後に重ねた山岳の頂部。前面、背面とも仕上げる。片側の面のみ、縦に稜線をあらわすが、この面が前面と考えられる。
〔構造〕塑土は2層。下土は藁スサを混ぜた痕跡のある粗い土で、この上に仕上土を盛って山襞などを塑形する。表面は一面に白色の下地が残り、その上の諸所に黒色ないし褐色を呈する顔料が残存する。(SM)

83　山岳頂部　11A962695　PL.52
〔法量〕全高26.0cm　最大張14.5cm　最大奥14.3cm
〔形状〕山襞を前後に重ねた山岳の頂部。前面、背面ともに仕上げる。山の稜線を挟んだ前後の部分には奥行きに差があり、奥行きの大きい側が前面とみられる。
〔構造〕塑土は2層。下土は長めの藁スサを多く混ぜた痕跡のある粗い土である。仕上土には細かい植物繊維の焼失痕とみられるピンホールがあく。表面は白色の下地の上に、黒色を呈する粗い顔料が、発泡した状態で残る。(SM)

84　磯形　11A962827　PL.31,53
〔法量〕全高14.9cm　最大張25.4cm　最大奥14.5cm
〔形状〕上面が平らな崖の一部。側面上部には横方向の層理をあらわし、下方に横に並んだ浅い窪み（直径4.0cm前後）を造る。上面部には孔２（その１＝0.2cm×0.7cm、深さ1.5cm、その２＝0.5cm×0.2cm）があく。銅心などを挿した孔とみられ、樹木などを立てた可能性が考えられる。
〔構造〕塑土は、仕上土層の裏面に、藁スサを混ぜた痕跡のある粗い下土が付着して残る。表面は全面に白色の下地が残り、その上の諸所に黒色ないし赤褐色を呈する顔料が残る。
〔備考〕山王廃寺出土塑像片の中には、群像の安置空間を造形したとみられる前後に山襞を重ねた山岳、切り立った崖、平らな広い面をもつテーブル状の岩場、斜面などがある。その内、前後に仕上面をもつ山岳の頂部と特定できる断片以外のものを、ここでは「磯形」と総称して扱う。(SM)

85　磯形　11A962538　PL.31,53
〔法量〕全高16.7cm　最大張21.5cm　最大奥8.1cm
〔形状〕水平方向の層理をあらわした少し前方に迫り出す崖の一部。上方に横一列に数個の窪みを造る。
〔構造〕塑土は、仕上土層の裏面に、藁スサを多く混ぜた痕跡のある粗い下土がわずかに付着して残る。仕上土は２度に分けて盛る。表面は白色を呈する彩色の下地が残る。(SM)

86　磯形　11A962701　PL.32,53
〔法量〕全高7.0cm　最大張25.0cm　最大奥9.2cm
〔形状〕緩やかに湾曲する切り立った崖の一部。水平方向の層理と２カ所の窪みをあらわす。
〔構造〕塑土は２層。下土は切藁スサの痕跡が残る粗い土で、仕上土層の裏面に付着してわずかに残る。下土の段階で岩の概形をあらわし、仕上土で水平方向の層理や窪みを造形する。表面は彩色の下地とみられる白色の地が残る。(SM)

87　磯形　11A962697　PL.32,53
〔法量〕全高7.9cm　最大張23.0cm　最大奥12.9cm
〔形状〕窪み数箇をあらわした、迫り出した崖の一部。
〔構造〕仕上土層の裏面に、藁スサの混じった粗い土の痕跡が残る。仕上土の断面には植物繊維の焼失痕とみられるピンホールがあく。表面は一面に彩色の白色の下地が残る。(SM)

88　磯形　11A962709　PL.32,53
〔法量〕全高3.6cm　最大張11.4cm　最大奥7.9cm
〔形状〕浅いU字形の段差５をあらわす斜面の一部。段差の縁は鋭角的に鋭く仕上げられる。表面及び裏面にも仕上面がまわる。前方に迫り出した平らな岩の縁、または山岳の頂部とみられる。最も手前側の段差の面には縦に稜線が１条あらわされる。
〔構造〕塑土は２層。木心があたっていたとみられる下土の内面は、浅く窪み、炭化して黒ずむ。表面は山襞の窪みなどに白色の彩色下地が残存する。(SM)

89　磯形　11A962704　PL.54
〔法量〕全高5.7cm　最大張37.3cm　最大奥14.6cm
〔形状〕広く平らな上面をもつ、緩やかに湾曲したテーブル状の岩場。その上縁部には横方向の層理をあらわす。
〔構造〕塑土は２層。下土は長めの切藁を含む、ごく粗い土。仕上土に黒く光る粒子を含む。(SM)

90　磯形　11A962703　PL.54
〔法量〕全高16.0cm　最大張23.8cm　最大奥7.4cm
〔形状〕水平方向の層理をあらわした斜面の一部。
〔構造〕仕上土層の裏面に下土が付着して少し残る。下土は藁スサを多く混ぜた痕跡のある粗い土で、仕上土には細かい植物繊維の焼失痕とみられるピンホールがあく。表面は全面に白色の下地が残る。その上に褐色の顔料が、上部の斜面を中心に残存する。(SM)

91　磯形　11A962694　PL.54
〔法量〕全高13.7cm　最大張29.8cm　最大奥15.9cm
〔形状〕急な斜面をもつ山塊の一部。上部に小さな窪みがある。横方向に層理をあらわす条線を入れる。
〔構造〕塑土は、仕上土層の裏面に粗い土が付着して少し残存する。粗い土は２cm位の切藁スサを混ぜた痕跡がある。仕上土にはピンホールがあく。表面は一面に白色の下地が残る。上部を中心に熱変して赤褐色を呈する粒の粗い顔料が発泡した状態で残る。(SM)

92　磯形　11A9629　PL.55
〔法量〕全高15.2cm　最大張14.3cm　最大奥8.0cm
〔形状〕上方に横方向の浅い迫り出しを造り、下方に縦の岩襞をあらわした崖の一部。
〔構造〕長めの藁スサを多く混ぜた粗い土で概形を造った後、厚みを増すために、藁スサの少な目な粗い土を付け加える。最後に仕上土を盛って岩襞などを造形する。粗い土の内側は緩やかな曲面をなす。表面は一面に白色の下地が残る。一部に黒色ないし褐色を呈する顔料が残る。(SM)

93　磯形　11A9628　PL.55
〔法量〕全高13.7cm　最大張11.6cm　厚6.3cm
〔形状〕垂直に切り立った崖の一部。横方向の層理をあらわし、下方に窪みを造る。
〔構造〕仕上土層の裏面に藁スサの混じった粗い土が付着して残存する。下土の段階で層理の概略をあらわしていたことがわかる(挿図F)。表面には彩色の下地とみられる白色の顔料が残る。(SM)

挿図F．磯形（11A9628）裏面

94　磯形　11A962766　PL.55
〔法量〕全高4.4cm　最大張12.2cm　最大奥8.2cm
〔形状〕浅い弧状の段差4をあらわす斜面の一部。
〔構造〕塑土は2層。下土は藁スサの痕跡が残り、ほとんど脱落している。表面には彩色の下地とみられる白色の顔料が残る。磯形の上面には、わずかに顔料が残る。(SM)

95　彩色の残る磯形　11A962708＋11A962726　PL.32,55
〔法量〕全高10.5cm　最大張11.7cm　最大奥4.7cm
〔形状〕浅いU字形の断面をもつ磯形の一部とみられる断片。中央に帯状の平らな面があり、その両側に層理を2条ずつあらわす。
〔構造〕仕上土層の裏面に、藁スサを混ぜた痕跡のある粗い土が付着して残存する。下土の段階で概形を造り、帯状部分や層理などの細部は仕上土を1.0～3.0cmの厚さに盛って造形する。表面には全面に白色の下地が残る。平らな帯状部分には、暗紫色を呈する粒子の粗い顔料で不定形な模様が描かれる。暗紫色の顔料には橙色にみえる部分があり、丹（四酸化三鉛）の変色の可能性が考えられる。(SS)

96　彩色の残る磯形　11A962818　PL.32
〔法量〕全長7.5cm　最大張7.4cm　厚2.2cm
〔形状〕平らな面にまだら状に彩色の残る断片。
〔構造〕仕上土層の裏面に藁スサを混ぜた痕跡のある下土がわずかに付着して残存する。表面は白色の下地に、暗紫色を呈する顔料で不定形な模様が描かれる。断面でみると仕上土層と白色下地層の境目付近が激しく発泡する(挿図G)。
〔備考〕彩色の残る磯形（11A962708＋11A962726、95）の帯状部分と表面の顔料の状態が類似する。(SS)

挿図G．彩色の残る磯形（11A962818）断面

97　彩色の残る磯形　11A962819　PL.32
〔法量〕全長11.3cm　最大張4.2cm　厚1.3cm
〔形状〕平らな面にまだら状に彩色の残る断片。
〔構造〕残存する塑土は2層。下土は2.0cm以上の切藁を含む粗い土である。仕上土の断面には細かい植物繊維の焼失痕とみられるピンホールがあく。表面は白色の下地に黒色を呈する顔料で不定形な模様が描かれる。その周囲の白色下地は赤味を帯びる。断面でみると仕上土層と白色下地層の境目付近が激しく発泡する。
〔備考〕現状では付着する顔料の色は異なるが、不定形の彩色痕や塑土の状態は、彩色の残る磯形（11A962708＋11A962726・11A962818、95・96）と共通する。(SS)

98　壁画　11A962733　PL.56
〔法量〕縦7.3cm　横6.7cm　最大厚4.2cm
〔形状・彩色〕暗灰色の笹の葉形の彩色が残る。
〔構造〕残存する壁土は2層。下層の土は、長い藁スサを大量に混ぜた粗い土である。仕上土は緻密な篩土で、0.5cm前後の厚みに均一に盛られる。表面には白土を塗り、彩色の下地とする。以下の壁画の断片（99～103）も同様の構造を示す。(SS)

99　壁画　11A962737　PL.56
〔法量〕縦3.1cm　横5.2cm　最大厚1.5cm
〔形状・彩色〕黒色の直線2条が引かれる。(SS)
〔構造〕壁体は下層の土がほとんど残らず、仕上土だけが残存する。他の壁画断片に比べ、仕上土が厚めである。(SS)

100　壁画　11A962734　PL.56
〔法量〕縦7.5cm　横9.7cm　最大厚2.8cm
〔形状・彩色〕赤褐色の彩色が残るが図様不明。
〔構造〕壁体の下層の土には、2.5～4.0cmの長い藁スサが大量に混ぜられる。(SS)

101　壁画　11A962736　PL.56
〔法量〕縦6.2cm　横4.6cm　最大厚1.7cm
〔形状・彩色〕茶色の直線2条が描かれる。(SS)

102　壁画　11A962732　PL.56
〔法量〕縦10.0cm　横9.6cm　最大厚4.4cm
〔形状・彩色〕茶色の直線２条が認められる。
〔構造〕他の壁画断片に比べ、表層の土に藁スサが多く含まれ、粗い肌合いをみせる。(SS)

103　壁画　11A962735　PL.56
〔法量〕縦7.2cm　横6.9cm　最大厚3.8cm
〔形状・彩色〕黒褐色物質が飛沫のように散るが、図様不明。
〔備考〕98～103は白下地の上に何かを描いたような痕跡があり、壁画としたが、主題やモチーフについては不明である。壁面の仕上げも粗く、精緻な絵画を描くには不向きであるようにも思われる。これらが壁画であるのか、今後の発掘成果も期待しつつ後考に俟ちたい。(SS)

104　頭部・面部（集合）　向かって左より女性像頭部(11A962821)、神将像頭部(11A962820)、女性像面部(11A962822)　PL.57

105　体部ほか（集合）　上段向かって左より比丘像上半身(9A80335)、比丘像左肩・左上腕部(11A962824)、菩薩像胸部(9A80336)、神将像右上半身(11A962825)、中段向かって左より女性像胸部(11A962763)、胡人像上半身(11A962823)、神将像左腰部(11A962750)、神将像右肩・右上腕部(11A962749)、猪頭部前半(9A80311)、神将像左肩・左胸部(11A962761)、下段向かって左より女性像上背・左上腕部(11A962765)、神将像右前腕部(11A962756)、飛雲頭部(11A962730)、飛雲脚部(11A962752)　PL.57

106　文様のある断片（集合）　上段向かって左より箱形天蓋(11A962722、11A962725、11A962724、11A962723、11A962720＋11A962809)、下段向かって左より箱形天蓋(11A962721)、彩色の残る磯形(11A962819、11A962818、11A962708＋11A962726)　PL.58

107　山岳・磯形（集合）　向かって左より山岳頂部(9A80334)、磯形(11A962827)　PL.58

108　銅製懸裳？　11A962760　PL.59
〔法量〕全高8.1cm　最大張10.5cm　最大奥3.8cm　銅厚（上端）1.0～1.5cm　同（前面下端）0.5～1.0cm　同（左側面下端）2.1cm
〔形状・構造〕如来坐像または菩薩坐像の懸裳の右上隅の部分か。鋳銅製で、火中のため、表面は荒れる。衣縁または衣文とみられる浅い段差に沿って、縁取線一条を鏨刻する。隅の部分には袋状の折り畳みをあらわす。上面には緩い立ち上がりがある。裏面は概ね表面の造形に沿って窪む。
〔備考〕懸裳の可能性があるが、上面の立ち上がりは坐像の膝とみるには緩やかに過ぎるきらいがある。部位の特定については、なお検討を要する。(TM)

109　銅製蓮弁　9A80315　PL.59
〔法量〕全長4.0cm　最大張5.1cm　厚1.0cm
〔形状・構造〕仏像の台座蓮弁とみられる断片。鋳銅製で、火中のため、表面は荒れる。全体に浅く湾曲する。仰蓮か反花かは不明。蓮弁の中央に菊座１箇がある。その中心は窪み、宝石やガラスなどを嵌めていたとみられる。裏面は概ね表面の造形に沿って窪む。
〔備考〕台座蓮弁に菊座をあらわす例は、長崎県黒瀬観音堂銅造如来坐像（８世紀）など、統一新羅の遺品に多くみられる。日本では奈良県薬師寺東院堂銅造聖観音菩薩立像の台座反花に同様の例がみられるが、その作例は多くない。(TM)

110　銅製框座　11A962668　PL.60
〔法量〕全高4.2cm　最大張5.7cm　最大奥3.6cm　一辺の長さ（最大）3.4cm
〔形状・構造〕隅一つを含む、多角形の框座の断片。その角度から八角形とみられる。鋳銅製で、火中のため、表面は荒れる。框座の上面には蓮弁かとみられる造形が残るが、輪郭などの意匠の詳細は不明である。見附の上縁には約0.3cm幅の縁取りがある。見附の隅部には花飾がある。その中心は窪み、宝石やガラスなどを嵌めていたとみられる。花飾の約1.7cmほど向かって右側には、縦の界線３条（0.3cm間隔）を鋳出する。
〔備考〕銅製懸裳？（11A962760、108)、銅製蓮弁（9A80315、109）とこの断片はいずれも小金銅仏の一部とみられる。このうち銅製蓮弁と銅製框座は菊座や花飾の中心に宝石やガラスなどを嵌める技法に共通性があり、同一個体である可能性も考えられる。(TM)

111　金銅製帯状金具　9A80316　PL.60
〔法量〕全長2.6cm　幅0.8cm　厚0.08cm
〔形状・構造〕両端が欠損する帯状金具の一部で上下縁にも欠損が多い。銅製鍍金で、上下縁近くに陰刻の縁取線を入れ、その間に波状唐草を陰刻する。唐草の地には魚々子を打つ。唐草は縁取線をはみ出し、魚々子もあまり精緻ではない。
〔備考〕厨子や献物台などの飾金具であろうか。極めて簡略な簾手唐草であり、これから年代などを推定するのは難しい。(SS)

112　風鐸上部　9A80296　PL.60
〔法量〕全高3.5cm　最大張3.0cm　厚0.6cm
〔形状・構造〕風鐸上端部の断片。舞から鐸身側面上部にかけての部分で、乳（径0.7cm、高0.9cm）１が残存する。鋳銅製で、火中のため、表面は荒れる。
〔備考〕9A80297、9A80298の銅製品はこの断片と関連するか。(SM)

平成9年度遺物観察表（9A80）

番号	長径	短径	種別	PL
1	10.7	4	塑壁	63
2	11.5	5.5	塑壁	63
3	8.2	8	塑壁	63
4	9.3	6.5	塑壁	63
5	7.7	5.5	塑壁	63
6	10	5.5	塑壁	63
7	7	5.5	塑壁	63
8	8	6.5	塑壁	63
9	6	4.3	塑壁	63
10	10	5	塑壁	63
11	8.5	7	塑壁	63
12	6.2	5	塑壁	63
13	7.5	5	塑壁	63
14	7.5	5.2	塑壁	63
15	9.7	5.5	塑壁	63
16	7.5	7	塑壁	63
17	10.5	8.5	塑壁	63
18	11.5	6.5	塑壁	63
19	5	4	塑壁	63
20	10.5	7	塑壁	63
21	9	6.5	塑壁	63
22	8.3	6	塑壁	63
23	6.7	4.5	塑壁	63
24	9	8.2	塑壁	63
25	10.2	9.7	塑壁	63
26	10.2	4.5	塑壁	63
27	7	6	塑壁	63
28	8.2	4	塑壁	63
29	11.3	7	塑壁	63
30	10	6.2	塑像	63
31	7	5.5	塑壁	63
32	8.8	8	塑壁	63
33	9	9	塑壁	63
34	8.8	8.5	塑壁	64
35	7.3	5.6	塑壁	64
36	8.4	6.1	塑壁	64
37	13.7	10.2	塑壁	64
38	12.7	9.6	塑壁	64
39	10.4	6.5	塑壁	64
40	7.3	3.7	塑壁	64
41	7.7	7.5	壁	64
42	7.8	6.5	塑壁	64
43	7.2	4.5	塑壁	64
44	5	4.7	塑壁	64
45	6	5	塑壁	64
46	5.5	5	塑壁	64
47	5.5	3.5	塑壁	64
48	5.7	4.2	塑壁	64
49	4.3	3.5	塑壁	64
50	4	3	塑壁	64
51	5	4	塑壁	64
52	6	4.5	塑壁	64
53	5.2	3.5	塑壁	64
54	5	4.2	塑壁	64
55	6	3.5	塑壁	64
56	4.5	3.7	塑壁	64
57	5.4	4.6	駱駝	25
58	5.3	5	塑壁	64
59	8.5	8.3	塑壁	64
60	7.2	4	塑壁	64
61	6.5	4.4	塑壁	64
62	8	6	塑壁	64
63	6	5.7	塑壁	64
64	7.2	4.7	塑壁	64
65	6.5	5	塑壁	64
66	6.8	4.2	塑壁	64
67	6.6	4.8	塑壁	64
68	8	5.7	塑壁	64
69	7.8	4.8	塑壁	64
70	6	5.4	塑壁	64
71	5.7	5.2	塑壁	65
72	6.7	4	塑像	65
73	5.3	5	塑壁	65
74	6	5.9	塑像	65
75	6.5	6.3	壁	65
76	7	6	塑壁	65
77	7	4	塑壁	65
78	6.5	5.8	塑壁	65
79	6.4	5	塑壁	65
80	7.7	5.7	塑壁	65
81	5.5	5.3	塑壁	65
82	6.5	3	壁	65
83	6.5	4.5	塑壁	65
84	5.5	4	塑壁	65
85	5	3.5	塑壁	65
86	5.7	5.5	塑壁	65
87	8	4.5	塑壁	65
88	5.5	3	塑壁	65
89	5.5	3.7	塑壁	65
90	5	4.5	塑壁	65
91	5.5	5	塑壁	65
92	7.5	5.3	塑壁	65
93	8.2	6.7	塑壁	65
94	7.7	5	塑壁	65
95	10.6	6	塑壁	65
96	6	3.5	塑壁	65
97	5.5	4	塑壁	65
98	7.5	4.5	塑壁	65
99	7.2	4	塑壁	65
100	5.5	5	塑壁	65
101	5.7	5.7	塑壁	65
102	5.7	3.5	塑壁	65
103	4.8	4.3	塑壁	65
104	6.3	3.9	塑壁	65
105	6.7	4.2	塑壁	65
106	4.8	3	塑壁	65
107	5.7	5.5	塑壁	65
108	6.7	3.7	塑壁	65
109	5	4.8	塑壁	65
110	5	4.1	塑壁	65
111	5.5	4	塑壁	65
112	5.8	3.5	塑壁	65
113	5.6	4	塑壁	65
114	5	4.5	塑壁	65
115	6.6	4.5	塑壁	65
116	5.3	4.2	塑壁	65
117	3.7	3.3	塑壁	65
118	8.5	6.5	塑壁	65
119	5.7	2.8	塑像	65
120	4.8	4	塑壁	65
121	6.5	5.2	壁	66
122	8.5	3.2	塑壁	66
123	8	3	塑壁	66
124	6	3.5	塑壁	66
125	6	4	壁	66
126	7.8	5.5	塑壁	66
127	5	4.5	塑壁	66
128	6.8	4.5	塑壁	66
129	7.5	6	塑壁	66
130	6	5.5	塑壁	66
131	6	4.5	塑壁	66
132	7.3	3.5	塑壁	66
133	6.5	4.5	塑壁	66
134	6.5	4.5	塑壁	66
135	6	3.5	塑壁	66
136	6	5	塑壁	66
137	6.8	5.3	塑壁	66
138	5	5	塑壁	66
139	6.7	6.2	塑壁	66
140	8.7	4.5	塑壁	66
141	5	3.5	塑壁	66
142	6	3.7	塑壁	66
143	4.4	4	壁	66
144	6	2.5	塑壁	66
145	5.3	3.3	塑壁	66
146	3.9	2.9	塑壁	66
147	5.5	2.7	塑像	66
148	5.6	4	壁	66
149	5.7	3	壁	66
150	4.4	2.7	塑壁	66
151	5	4	塑壁	66
152	6	4	塑壁	66
153	3.5	3.3	塑壁	66
154	4	2.7	塑壁	66
155	5.5	4	塑壁	66
156	6.5	4.5	塑壁	66
157	4.6	4	塑壁	66
158	7.4	6.5	壁	66
159	5	4	塑壁	66
160	5	4.3	塑壁	66
161	4.3	4.2	塑壁	66
162	8.2	7.5	壁	66
163	5.2	5	塑壁	66
164	6.5	5.2	塑壁	66
165	5	4.5	壁	66
166	7.1	5.7	壁	66
167	7.7	6.1	塑壁	66
168	7	5	塑壁	66
169	6.6	5.3	塑壁	66
170	5.2	4.5	塑像	66
171	6	3.4	塑壁	66
172	4.7	3.4	塑壁	67
173	6.6	3.3	塑壁	67
174	4.4	4.2	塑壁	67
175	5.5	4.5	塑壁	67
176	5	4.5	壁	67
177	6	4	塑壁	67
178	5.3	4	塑壁	67
179	5.7	2.4	塑壁	67
180	7.5	4	塑像	67
181	7	3.2	塑壁	67
182	5	4	壁	67
183	7	5.5	塑壁	67
184	7	5	壁	67
185	7	5	塑壁	67
186	5	4	塑壁	67
187	5	4.7	塑壁	67
188	7.5	6.5	壁	67
189	6.5	6	塑壁	67
190	6.2	4.5	塑壁	67
191	4.4	3	塑壁	67
192	5.7	5.5	塑壁	67
193	5.8	4.5	塑壁	67
194	5.5	4.5	壁	67
195	5	3.3	塑壁	67
196	7	3.5	塑壁	67
197	8.3	3.5	塑壁	67
198	7	6.4	塑壁	67
199	7.8	6	塑壁	67
200	7	7	塑壁	67
201	7.5	4.7	壁	67
202	6	4.4	壁	67
203	8.2	5.5	壁	67
204	7.8	5.3	壁	67
205	7.4	6	壁	67
206	8.8	4.3	壁	67
207	13	10.8	壁214接合	67
208	8.7	4.6	壁	67
209	9.9	8	壁	67
210	8	4.8	壁	67
211	7.7	6	壁	67
212	6.7	6.2	壁	67
213	7.5	7	壁	67
214	13	10.8	壁207接合	67
215	9.5	6.5	壁	68
216	8.5	5	壁	68
217	11.8	7.3	壁	68
218	8.5	6	壁	68
219	6.3	5.4	壁	68
220	8.5	7	壁	68
221	7.5	6	壁	68
222	6.3	5	壁	68
223	7.7	5	壁	68
224	7	5.5	壁	68
225	9.2	7.7	壁	68
226	7.8	5.1	壁	68
227	12	7	壁	68
228	7.3	3.6	壁	68
229	6.3	3.6	壁	68
230	7.5	6.8	壁	68
231	10.5	6.5	壁	68
232	6	4	壁	68
233	9.8	9.5	壁	68
234	15	8.7	壁	68
235	9.6	5	壁	68
236	9	6	壁	68
237	11	10	壁	68
238	7.9	6.5	壁	68
239	12.6	8.2	壁	68
240	14.6	7	壁	68
241	6	5	塑壁	69
242	5.5	4	塑壁	69
243	4.6	4.1	塑壁	69
244	7.2	4.8	塑壁	69
245	11	8	塑壁	69
246	4.5	3.1	塑壁	69
247	6.5	3.7	塑壁	69
248	6.2	5.3	塑壁	69
249	6.8	4.5	塑壁	69
250	5.8	5.5	塑壁	69
251	6.2	5	塑壁	69
252	6.3	4.5	塑壁	69

番号	長径	短径	種別	PL
253	11.5	8	塑壁	69
254	8	7	塑壁	69
255	5.2	4.7	塑壁	69
256	6	4.6	塑壁	69
257	6.6	6	塑壁	69
258	6.2	5.1	塑壁	69
259	8.3	4.5	塑壁	69
260	6.7	3.2	塑壁	69
261	5.7	4	塑壁	69
262	5.4	2.5	塑壁	69
263	7.6	4	塑壁	69
264	4.5	3.2	塑壁	69
265	8	4.2	塑壁	69
266	7.2	5.5	塑壁	69
267	8	6.3	塑壁	69
268	7.8	5.2	塑壁	69
269	5	5	塑壁	69
270	7	3.2	塑壁	69
271	5.3	3.5	塑像	69
272	5.5	4	塑壁	69
273	7.5	5	塑壁	69
274	5.5	2.8	塑壁	69
275	9.5	6	壁	69
276	6.5	3.5	塑壁	69
277	5.7	2.2	塑壁	69
278	6.5	2.6	壁	69
279	8.5	7.3	塑像	70
280	5	5	塑壁	70
281	5.5	4.7	塑壁	70
282	8	7	壁	70
283	5.5	4.3	塑壁	70
284	8.5	6.5	塑壁	70
285	13.5	8	塑壁	70
286	7.5	5.7	塑像	70
287	9.5	5.5	塑壁	70
288	8.5	5.5	塑壁	70
289	5.2	1.4	神将像	70
290	4.8	1.9	衣部	23,46,70
291	5.1	3.4	飛雲脚部	28,50,70
292	8.6	2.6	稜線断片	27,70
293	2.4	2.1	塑像	
294	4.1	2.7	塑壁	70
295	4		釘	70
295	4.5		釘	70
295	6		釘	70
295	7.2		釘	70
295	7.7		釘	70
295	8.6		釘	70
296	3.5	0.6	銅製風鐸	60
297	3.7	2.2	銅製品	70
298	5.2	3.7	銅製品	70
299	6.3	3.7	銅滓	70
300	4.5	3.2	銅滓	70
301	3.1	2.7	銅滓	70
302	1.9	1.8	銅滓	70
303	1.3	1.3	銅滓	70
304	8.1	1.5	棒状断片	26,48,70
305	7.6	1.9	棒状断片	26,48,71
306	4.3	1.9	棒状断片	26,48,72
307	6.7	1.7	棒状断片	26,48,73
308	7.2	1.6	棒状断片	26,48,74
309	5.1	3.4	飛雲脚部	28,50,70
310	4	3	塑像	70
311	5.8	4	鉄滓	70
312	5.3	3.2	猪像	24,47
313	6.5	3	塑像	70
314	5	3	塑壁	70
315	5.1	1	銅製蓮弁	59,70
316	2.6	0.8	金具	60,70
317	20	10.9	壁	71
318	11	11	壁	71
319	16.5	13	壁	71
320	17	10.5	塑壁	71
321	11.4	8	塑壁	71
322	10	9	塑壁	71
327	13.5	12.2	塑壁	72
328	17.5	13	塑壁	72
323	15.5	14	塑壁	71
324	10.5	10.5	塑壁	71
325	9.5	9.5	塑壁	72
326	13.5	10.5	塑壁	72
329	19.7	14.5	塑壁	72
330	15	10	塑壁	72
331	17	10	塑壁	72
332	17.1	6.7	飛雲脚部	28,50,72
333	13.5	9.5	塑壁	73
334	14	7.3	山岳頂部	31,52
335	16.2	7.3	比丘像	13,14,31
350	10	8.5	塑壁	73
351	8	7	塑壁	73
352	6	3.5	壁	73
353	5.3	5.3	壁	73
354	10.3	6.5	壁	73
355	7	5	塑壁	73
356	7	6.5	壁	73
357	8	6	塑壁	73
358	12	7	塑壁	73
359	8	7.5	塑壁	73
360	6	4	壁	74
361	6	2.3	塑像	74
362	4	3.6	壁	74
363	3.3	3.3	壁	74
364	3.7	3.5	壁	74
365	2.6	2.2	壁	74
366	5.4	3.2	塑壁	74
367	3.9	2.5	塑像	74
368	5.4	4	塑壁	74
369	3.5	2	塑壁	74
370	2	2	壁	74
371	5.4	3.5	塑壁	74
372	3	2.5	塑像	74
373	4.9	2.4	塑像	74
374	4.7	3.3	塑壁	74
375	2.5	0.3	塑壁	74
376	2.5	2.4	塑壁	74
377	4.9	2.7	塑壁	74
378	5	4	塑壁	74
379	5.8	3.8	塑壁	74
380	4.3	2.6	塑像	74
381	4.2	3.5	塑壁	74
382	5.5	5	塑像	74
383	4.8	4.2	塑像	74
384	5.2	4.2	塑壁	74
336	13.7	8.1	菩薩像	1．2．33

平成11年度遺物観察表（11A96）

番号	長径	短径	種別	PL
1	4.8	4.5	壁	75
2	5.5	1	神将像	9
3	6	4	塑壁	75
4	3.5	3.3	塑壁	75
5	3	2.5	塑像	75
6	4.6	1.5	壁	75
7	2.5	1.6	壁	75
8	2	1.5	塑像	75
9	9.5	8.5	塑壁	75
10	8.5	5	壁	75
11	5	2.5	塑壁	75
12	7.5	6.5	塑壁	75
13	10	6.5	塑壁	75
14	7.5	7	塑壁	75
15	7	6	塑壁	75
16	9.5	8	塑壁	75
17	15	9	塑壁	75
18	7.5	6	塑壁	75
19	8	5.5	塑壁	75
20	6	4	塑壁	75
21	12.5	9	塑壁	75
22	10	9.5	塑壁	75
23	9.5	6.5	塑壁	75
24	7	5.5	塑壁	75
25	6.5	4.8	塑壁	75
26	62と接合			
27	9	7.2	塑壁	75
28	13.7	6.3	磯形	55,75
29	15.2	8	磯形	55,76
30	14	11.5	塑壁	76
31	12.5	8.6	塑壁	75
32	23.5	13	塑壁	76
33	10.5	10.5	塑壁	76
34	21	14	塑壁	76
35	6.5	4	塑壁	76
36	7	5.5	塑壁	76
37	6.5	3.5	壁	76
38	7.5	4.5	塑壁	76
39	6.5	5.5	塑像	76
40	7.5	4	塑壁	77
41	6.5	4.5	塑壁	77
42	6.5	4	塑壁	77
43	8.5	4.5	塑壁	77
44	5	5	塑壁	77
45	3.5	3.5	塑壁	77
46	10.5	7	塑壁	77
47	10	7	塑壁	77
48	6	3.5	塑壁	77
49	6.5	6.5	塑壁	77
50	9.8	6.5	塑壁	77
51	11	6	塑壁	77
52	9	7	塑壁	77
53	4	3.5	塑壁	77
54	9	8	塑壁	77
55	5.5	5	塑壁	77
56	6.5	4.5	塑壁	77
57	12.5	5	塑壁	77
58	12	12	塑壁	77
59	22.5	9	塑壁	77
60	5.5	5	壁	77
61	13	11	塑壁	78
62	16.5	9.5	塑壁	78
63	5.7	5.7	塑壁	78
64	8.5	8	壁	78
65	5.5	3	塑壁	78
66	6	4.5	塑壁	78
67	3.7	3.2	塑壁	78
68	5.5	4.5	塑壁	78
69	4.5	4	塑壁	78
70	8	4	塑壁	78
71	4	2.5	塑壁	78
72	11	3.5	塑壁	78
73	7.5	5	塑壁	78
74	7	4.5	塑壁	78
75	6.5	5	塑像	78
76	5.5	5.5	塑壁	78
77	4	3.5	塑壁	78
78	7.8	4	塑壁	78
79	13	9	塑壁	78
80	17	9	塑壁	78
81	9	5.5	塑壁	78
82	8.5	6	塑壁	78
83	6.5	6	塑壁	78
84	5.5	3.5	塑壁	78
85	6	4	塑壁	78
86	5.5	4	塑壁	78
87	10	6	塑壁	79
88	3.5	1.5	塑壁	79
89	12.5	7	塑壁	79
90	5.5	3	壁	79
91	10	7.5	塑壁	79
92	5	4.5	塑壁	79
93	5.5	4.5	塑壁	79
94	11	6.5	塑壁	79
95	7	5.5	塑壁	79
96	6	4	塑壁	79
97	5.5	5	塑壁	79
98	11.5	6	塑壁	79
99	10	8	塑壁	79
100	6.5	4.5	塑壁	79
101	7	3.5	塑壁	79
102	8	5	塑壁	79
103	6.5	4.5	塑壁	79
104	4.5	4.1	塑壁	79
105	4.3	2.2	塑壁	79
106	3.5	2	壁	79
107	6.5	6	塑壁	79
108	7.5	5	塑壁	79
109	7	3	塑壁	79
110	7	3	塑壁	79
111	7	2.5	塑壁	79
112	5.5	3.1	塑壁	79
113	4.8	3.5	塑壁	79
114	5.5	4	塑壁	79
115	5.5	2.8	塑壁	79
116	5	4	壁	79
117	4.5	2.5	塑壁	79
118	3.5	3.4	塑壁	80
119	7.5	5	塑壁	80
120	6.5	4	壁	80
121	4	3.5	塑壁	80
122	4.5	3.3	塑壁	80
123	6	5.6	壁	80
124	9.5	7	塑壁	80
125	7	3.5	塑壁	80
126	10.5	7.5	塑壁	80
127	6.5	6.2	壁	80
128	7	5.6	壁	80
129	9	5.5	壁	80
130	4.5	2.8	壁	80
131	4.8	3.1	壁	80
132	7	4.1	壁	80
133	17	12	壁	80
134	14	10	壁	80
135	7.5	5.5	塑壁	80
136	5	4	壁	80
137	5.5	4.5	壁	80
138	4	3.5	壁	80
139	5	3.5	壁	80
140	5	3.5	塑壁	80
141	6.5	2.5	壁	80
142	5	2.5	壁	80
143	3	3	塑壁	80
144	4	2	塑壁	81
145	7	6	壁	81
146	7	5	壁	81
147	8.5	6.5	壁	81
148	7	6.5	壁	81
149	6.5	6	壁	81
150	4.5	3	塑壁	81
151	6	5	壁	81
152	6.5	3.5	壁	81
153	4.8	4.4	壁	81
154	5	3.2	壁	81
155	6	5.5	塑壁	81
156	5.5	4.5	壁	81
157	7.5	3.3	塑壁	81
158	6	4.2	壁	81
159	5.5	3.9	塑壁	81
160	6.8	4.8	壁	81
161	5.5	5	壁	81
162	5.8	2.7	塑壁	81
163	5	3	壁	81
164	5.3	4	塑壁	81
165	6.5	5.2	壁	81
166	4.5	2.3	塑壁	81
167	3.6	3	塑壁	81
168	12	7.2	塑壁	81
169	8.8	7.6	壁	81
170	7.5	5.5	壁	81
171	6.5	6	壁	81
172	3.5	3.3	壁	81
173	8.3	6.4	壁	81
174	4.5	3.8	塑壁	81
175	4.5	3.5	壁	81
176	11.5	5	塑壁	81
177	4.7	4	塑壁	81
178	7.8	7.4	壁	81
179	6	3.8	塑壁	82
180	7.3	5.5	壁	82
181	7.4	6.5	壁	82
182	7.2	5	壁	82
183	7.5	5.5	壁	82
184	8.2	4.5	壁	82
185	5.5	5	壁	82
186	5.7	4.5	塑壁	82
187	6.2	4.7	壁	82
188	5.5	3.7	壁	82
189	7	4.2	塑壁	82
190	4.5	3.5	塑壁	82
191	6	3	壁	82
192	4.5	4.3	塑像	82
193	5	3	塑壁	82
194	5	3	塑壁	82
195	7.5	4.5	壁	82
196	6	5.3	塑壁	82
197	7	4.2	壁	82
198	5.5	4.1	壁	82
199	4.5	3.8	塑壁	82
200	4	3.5	塑壁	82
201	5	3.5	塑壁	82
202	5.5	4	壁	82
203	4.2	3.3	塑壁	82
204	5.3	3.3	壁	82
205	4.6	4	壁	82
206	4.3	3.9	壁	82
207	4	3	塑壁	82
208	7.5	2.7	塑壁	82
209	5.8	4.2	塑壁	82
210	9	5.5	塑壁	82
211	9	6	壁	82
212	4.5	3.7	壁	82
213	5.4	4	壁	82
214	5	3	塑壁	82
215	6.6	5.3	壁	82
216	3.8	3	壁	82
217	4.4	3.7	壁	82
218	5	2.3	塑壁	82
219	5.7	5	壁	83
220	7.8	7.2	塑壁	83
221	7.4	7	塑壁	83
222	6.3	4.5	塑壁	83
223	6.5	4.2	壁	83
224	6	5.4	壁	83
225	6	4	壁	83
226	6.4	2.3	塑壁	83
227	5.5	3.7	塑壁	83
228	5.7	4.2	塑壁	83
229	5.6	2.8	壁	83
230	5.6	2.5	塑壁	83
231	6.5	4	塑壁	83
232	4.9	3.2	壁	83
233	4.4	2.5	塑壁	83
234	4.8	2.7	塑壁	83
235	5	2.5	塑壁	83
236	3.5	3.5	塑壁	83
237	3	2.3	塑壁	83
238	2.8	2.3	塑壁	83
239	3.2	2.3	壁	83
240	3.5	2	壁	83
241	4.2	2	塑壁	83
242	4	2.4	壁	83
243	5.4	1.9	塑壁	83
244	5	2.2	塑壁	83
245	3.5	1.5	塑壁	83
246	3.5	3.5	塑壁	83
247	2.9	2	壁	83
248	3.5	2.5	塑壁	83
249	3.5	1	塑壁	83
250	4	1.8	塑壁	83
251	6.5	3.6	塑壁	83
252	7	5.3	壁	83

番号	長径	短径	種別	PL
253	6	5	壁	83
254	6	4	塑壁	83
255	11	7	壁	83
256	5	3.1	壁	83
257	4	4	塑壁	83
258	4	3	塑壁	83
259	6	4.5	壁	83
260	6.5	5.3	塑壁	84
261	3.9	3.5	塑壁	84
262	5.5	3	壁	84
263	5	2.5	塑壁	84
264	4.1	2	壁	84
265	4.5	4	塑壁	84
266	5	3.4	塑壁	84
267	4.3	3.4	塑壁	84
268	13.5	4.5	塑壁	84
269	3.5	2.5	壁	84
270	3.4	3.1	壁	84
271	3	3	壁	84
272	3	2.8	塑壁	84
273	3.2	3.2	塑壁	84
274	4	2.5	塑壁	84
275	4.6	2.7	塑壁	84
276	3.5	3	壁	84
277	2.6	2.3	壁	84
278	2.8	2.4	壁	84
279	4.3	2.7	塑壁	84
280	3	3	塑壁	84
281	3.9	2.3	塑壁	84
282	3.3	2.3	塑壁	84
283	4	2.4	壁	84
284	3	2.7	塑壁	84
285	4.3	3	壁	84
286	5	4	壁	84
287	2.7	2.5	壁	84
288	2.8	2.5	塑壁	84
289	4	3.2	塑壁	84
290	3.3	1.7	壁	84
291	4.7	3	塑壁	84
292	3	2.3	塑壁	84
293	3	2.5	壁	84
294	4.5	4.2	塑壁	84
295	3	1.6	壁	84
296	3.4	1.5	塑壁	84
297	3	2	壁	84
298	2.3	1.6	壁	84
299	4.3	1.5	塑壁	84
300	3.9	3.5	塑壁	84
301	3.5	2.9	塑壁	84
302	6.2	3.5	塑壁	84
303	5	4.7	塑壁	84
304	2.6	2.4	塑壁	84
305	6.2	5.4	壁	84
306	8.6	3.3	塑壁	84
307	6	4	塑壁	84
308	5.6	5.6	壁	84
309	3.6	2.1	壁	84
310	7.5	3.2	壁	84
311	4.5	2.5	壁	84
312	3.5	1.9	塑壁	84
313	6.2	4.8	壁	84
314	2.5	1.6	塑壁	84
315	4.7	3.2	壁	84
316	5	5	壁	84
317	3	1.7	塑壁	85
318	7.5	6.4	塑壁	85
319	4.3	2.5	塑壁	85
320	4.8	2.7	塑壁	85
321	4.7	4.7	塑壁	85
322	6.7	3.5	塑壁	85
323	6.5	4.8	塑壁	85
324	9	8	塑壁	85
325	5.4	4	壁	85
326	4	3	塑壁	85
327	6.3	3.7	壁	85
328	5.7	2.3	塑壁	85
329	6.5	5.7	塑壁	85
330	6	4	塑壁	85
331	6.5	5.5	塑像	85
332	5	3.7	塑壁	85
333	7.8	4.1	塑壁	85
334	6.3	3.6	壁	85
335	5.5	3.6	塑壁	85
336	6.2	5.8	塑壁	85
337	5.3	3.5	塑壁	85
338	5.8	3.1	塑壁	85
339	5.4	5	塑壁	85
340	7.1	5.3	壁	85
341	4.8	4	壁	85
342	4.9	3.2	壁	85
343	10.6	5.3	塑壁	85
344	8.6	3.8	塑壁	85
345	5.5	5.4	塑壁	85
346	6	3.5	壁	85
347	7.6	4.4	塑壁	85
348	16	8.1	塑壁	85
349	5.2	3.4	塑壁	85
350	5.2	3.6	塑壁	85
351	6.3	3.4	塑壁	85
352	5	4	塑壁	85
353	4.8	3.7	塑壁	86
354	5.6	4.5	塑壁	86
355	6	5.8	塑壁	86
356	5	4	壁	86
357	8.2	2	塑壁	86
358	4.1	3.7	塑壁	86
359	4.3	3.5	塑壁	86
360	9.5	5.1	壁	86
361	6.4	4	壁	86
362	6.3	6	塑壁	86
363	14.8	10	塑壁	86
364	9.6	9.5	壁	86
365	6	4.8	壁	86
366	6.7	4.5	塑壁	86
367	6.5	4	壁	86
368	7.3	4.5	塑壁	86
369	7.7	2.5	神将像	10
370	8	4.5	壁	86
371	6	4.5	壁	86
372	5	3	壁	86
373	6	4.8	塑壁	86
374	6.1	5.8	塑壁	86
375	11	7.8	塑壁	86
376	4.5	2.7	塑壁	86
377	6.5	3.5	塑壁	86
378	6	4	塑壁	86
379	6	4.8	塑壁	86
380	4	3.2	壁	86
381	4.5	4.5	塑壁	86
382	5.7	3.5	壁	86
383	5.7	4.8	塑壁	86
384	7.5	5.2	塑壁	86
385	5	4.1	塑壁	86
386	5	4.5	塑壁	86
387	3.8	3.5	塑壁	86
388	5.5	4	塑壁	86
389	6	2	塑壁	86
390	4.6	4.5	塑壁	87
391	5.8	4.8	塑壁	87
392	4	3.8	壁	87
393	5.5	4.8	壁	87
394	3.5	3	塑壁	87
395	6	3	塑壁	87
396	5.2	3.6	壁	87
397	4.6	3.7	塑壁	87
398	3.3	2.9	壁	87
399	5.5	3.7	塑壁	87
400	6	3.7	壁	87
401	4.9	2	塑壁	87
402	6.3	4.5	塑壁	87
403	5	3.6	塑壁	87
404	5.3	2.5	塑壁	87
405	4.9	2.3	塑壁	87
406	7.8	4.4	壁	87
407	5.4	4.2	壁	87
408	4.7	3.7	塑壁	87
409	4.4	4.3	塑壁	87
410	3.7	2.8	塑壁	87
411	5.1	4	塑壁	87
412	5	4.2	塑壁	87
413	6.9	3.9	塑壁	87
414	4.4	3.5	塑壁	87
415	7.5	5.2	塑像	87
416	4.6	3.4	塑壁	87
417	8	5.5	塑壁	87
418	4.3	3.7	塑壁	87
419	5.5	3.7	塑壁	87
420	6.8	4.7	塑壁	87
421	6.3	3.4	壁	87
422	4.5	3	壁	87
423	4.1	3.8	塑壁	87
424	5	4	塑壁	87
425	4.3	3.7	塑壁	87
426	4.8	2.3	塑壁	87
427	5.4	2.3	壁	87
428	3.4	3.1	塑壁	87
429	3.6	2	塑壁	87
430	4.5	2.3	塑壁	87
431	4.1	2.7	壁	87
432	2.7	2.1	壁	87
433	4.5	2.1	壁	87
434	3.4	2.8	壁	87
435	2.1	2	壁	87
436	5.4	3.5	塑壁	87
437	2.9	2.2	塑壁	87
438	5	4	塑壁	87
439	5.1	3	塑壁	87
440	4.8	2.8	壁	87
441	2.7	2.1	塑壁	87
442	3.5	3.2	塑壁	87
443	4.3	2.8	壁	87
444	3.5	2.5	塑壁	87
445	4.9	2.2	塑壁	87
446	2.7	1.4	塑壁	87
447	4.3	3	塑壁	87
448	3.5	3	塑壁	87
449	5.9	3	壁	87
450	4.5	3.2	壁	87
451	3.7	3.5	壁	87
452	8.9	6.3	壁	88
453	4.4	3.2	壁	88
454	5.6	4.5	壁	88
455	4	2.3	塑壁	88
456	3.7	3.3	塑壁	88
457	4.1	3.7	壁	88
458	4.2	3.5	塑像	88
459	3.2	2.6	塑壁	88
460	3.5	2	塑壁	88
461	3.6	2.6	塑壁	88
462	5	2.5	塑壁	88
463	4	2	塑壁	88
464	4	3	壁	88
465	2.4	2.2	壁	88
466	3.5	2.8	塑壁	88
467	5	3.5	塑壁	88
468	3.5	3.3	塑壁	88
469	4.2	3	壁	88
470	5.2	3.4	壁	88
471	4.4	3.8	壁	88
472	3.4	2.3	塑壁	88
473	4.7	4.1	壁	88
474	3.6	3.2	壁	88
475	4.2	1.8	塑壁	88
476	1.8	1.4	壁	88
477	4	3.5	塑壁	88
478	5	3	塑壁	88
479	2.8	2.2	壁	88
480	4	3.5	塑壁	88
481	3	2.5	塑壁	88
482	4	2.7	壁	88
483	3.5	2.5	壁	88
484	4.7	2.6	塑壁	88
485	3.4	2	塑壁	88
486	4.2	2.6	塑壁	88
487	5.2	4.5	塑壁	88
488	3.5	2.8	塑壁	88
489	3.5	3	塑壁	88
490	4.2	3	塑壁	88
491	6	4	塑壁	88
492	2.5	2.4	塑壁	88
493	2.6	2.5	塑壁	88
494	6	2.6	塑壁	88
495	3.5	3	塑壁	88
496	4.5	2.6	塑壁	88
497	4.5	3	塑壁	88
498	4.2	3.5	塑壁	88
499	4.7	3	塑壁	88
500	3.4	3	塑壁	88
501	3.6	3	塑壁	88
502	5.2	1.4	塑壁	89
503	2.5	1.6	塑壁	89
504	3	1.9	壁	89
505	3.1	2.8	塑壁	89
506	2.7	2.6	塑壁	89
507	5.2	5	塑壁	89
508	3.8	2.5	壁	89
509	3.6	3.1	壁	89
510	3.7	2	壁	89
511	4.2	2.1	塑壁	89
512	3.8	3.1	塑壁	89

遺物観察表

番号	長径	短径	種別	PL
513	3.5	2.5	塑壁	89
514	4.6	3	壁	89
515	3	2	塑壁	89
516	3.7	2.1	塑壁	89
517	5.4	2.5	壁	89
518	4	3.2	塑壁	89
519	5.5	2.9	塑壁	89
520	3.4	2.9	塑壁	89
521	2.4	1.9	壁	89
522	6	3.2	塑壁	89
523	5.5	3	塑壁	89
524	6.7	5.5	塑壁	89
525	4.5	2	塑壁	89
526	3.8	1.5	塑壁	89
527	5.5	3.5	塑壁	89
528	5	3.6	塑壁	89
529	4	2.8	塑壁	89
530	5.2	3.8	壁	89
531	7	6.2	壁	89
532	7	5	塑壁	89
533	6.2	4.7	塑壁	89
534	7.2	4.1	塑壁	89
535	6.5	6	壁	89
536	6.7	4.5	塑壁	89
537	5	3.5	塑壁	89
538	2.3	2	塑壁	89
539	7	6	塑壁	89
540	4.7	4.3	塑壁	89
541	4	3	塑壁	89
542	3.2	1.9	塑壁	89
543	3.5	2.5	塑壁	89
544	6	4	壁	89
545	3.5	2.5	塑壁	89
546	4	1.7	塑壁	89
547	2.5	2.4	塑壁	90
548	2	1.5	塑壁	90
549	3	1.5	塑壁	90
550	3.5	3	塑壁	90
551	6.2	4.9	壁	90
552	4.5	2.2	壁	90
553	5.3	4.3	塑壁	90
554	5.2	4.5	壁	90
555	4.2	3.9	塑壁	90
556	4.5	2	塑壁	90
557	2.7	2.7	塑壁	90
558	4.1	2.7	壁	90
559	4.1	2.1	塑壁	90
560	3	2	塑壁	90
561	3.9	1.4	塑壁	90
562	2.5	2.5	塑壁	90
563	5.3	3.5	壁	90
564	5.5	4.9	塑壁	90
565	3.7	2.7	塑壁	90
566	5.3	3.9	塑壁	90
567	3.5	3	塑壁	90
568	4.3	3.1	塑壁	90
569	4.7	2.4	塑壁	90
570	4.1	3.5	塑壁	90
571	2.4	2.3	塑壁	90
572	2.4	1.9	塑壁	90
573	4	3.3	塑壁	90
574	3.4	2.8	塑壁	90
575	4.6	4.2	塑像	90
576	3.2	3	塑壁	90
577	4	3.8	壁	90
578	4.1	3.5	壁	90
579	3.7	3.1	塑壁	90
580	4.5	2.2	壁	90
581	3	2.5	塑壁	90
582	3.7	2.5	塑壁	90
583	4.3	3.6	壁	90
584	3	2.9	壁	90
585	15.5	10	塑壁	90
586	4.2	3	塑壁	90
587	4.2	3.7	壁	90
588	4.6	3.5	塑壁	90
589	4.1	2.5	塑壁	90
590	3.8	3.4	壁	90
591	4	3.7	塑壁	91
592	3	2.4	壁	91
593	5.2	2.3	塑壁	91
594	6.3	4	壁	91
595	4.3	2.8	塑壁	91
596	3.4	3.3	塑壁	91
597	4.5	3.9	塑壁	91
598	3	1.9	壁	91
599	5	3.4	塑壁	91
600	4.5	2.3	壁	91
601	4.1	3.2	塑壁	91
602	3.1	2.1	塑壁	91
603	2.6	2.5	塑壁	91
604	4.9	2	塑壁	91
605	2.6	2.2	塑壁	91
606	4	2.5	塑壁	91
607	4.2	4	壁	91
608	4.5	3	塑壁	91
609	4.5	4.1	塑壁	91
610	4.1	2.7	壁	91
611	4	3.4	塑壁	91
612	3	3	塑壁	91
613	2.7	2.5	塑壁	91
614	4.2	2.4	壁	91
615	4.2	2.5	塑壁	91
616	2	1.8	塑壁	91
617	2.7	2.1	塑壁	91
618	3	1.8	塑壁	91
619	2.5	1.5	塑壁	91
620	3.5	2.7	壁	91
621	2	2	壁	91
622	3.5	2.6	塑壁	91
623	3.6	3.1	塑壁	91
624	3.3	3.1	塑壁	91
625	3.6	1.7	壁	91
626	3.5	2.9	壁	91
627	4.2	1.6	塑壁	91
628	4	2	塑壁	91
629	3.5	2.8	塑壁	91
630	3.3	2.8	塑壁	91
631	3.8	2.9	塑壁	91
632	3.4	2.5	塑壁	91
633	3.5	3.2	塑壁	91
634	3.3	3.1	塑壁	91
635	5.5	3	塑壁	91
636	4.5	2.5	塑壁	91
637	4.5	1.8	塑壁	91
638	3.7	1.7	塑壁	91
639	3	2	塑壁	91
640	4	1.7	塑壁	92
641	2.5	2.5	塑壁	92
642	3.7	3.5	塑壁	92
643	4	3.7	塑壁	92
644	2.6	1.5	塑壁	92
645	2.7	2	塑壁	92
646	2.6	2.2	塑壁	92
647	3.5	2.8	塑壁	92
648	4	2	壁	92
649	2.3	2	壁	92
650	4.5	2.7	塑壁	92
651	3.2	2.5	塑壁	92
652	4	2	塑壁	92
653	3.5	3	塑壁	92
654	4	1.5	塑壁	92
655	4	1.5	塑壁	92
656	5	2	塑壁	92
657	3.2	2.1	塑壁	92
658	2.6	2.1	塑壁	92
659	3	2.1	壁	92
660	3.5	2.8	塑壁	92
661	3.4	3.3	塑壁	92
662	4.2	3	塑壁	92
663	4	3	塑壁	92
664	3.5	2.6	塑壁	92
665	4	2.8	壁	92
666	2.8	2.3	塑壁	92
667	3.5	2.5	塑壁	92
668	4.3	2	塑像	92
669	3	3	塑壁	92
670	5.5	4.5	塑壁	92
671	3.5	3.5	塑壁	92
672	3.5	2.3	塑壁	92
673	3.4	2.5	壁	92
674	3.7	3	壁	92
675	2.9	2	塑壁	92
676	3.1	3	壁	92
677	3.5	2.5	壁	92
678	3.3	2	壁	92
679	4.5	2.7	塑壁	92
680	4.3	3.5	塑壁	92
681	2.5	2.3	塑壁	92
682	3	2.2	塑壁	92
683	3.8	2.8	壁	92
684	3.7	3.7	塑壁	92
685	2.7	2	壁	92
686	4.8	3.3	塑壁	92
687	4.6	3.3	塑壁	92
688	5.2	4	塑壁	92
689	3.8	2.5	壁	93
690	2.7	2	壁	93
691	3.4	2.3	壁	93
692	3.2	2.8	壁	93
693	3.7	1.7	壁	93
694	2.6	2	壁	93
695	2.6	2.1	壁	93
696	3.2	3	塑壁	93
697	3.5	2.1	塑壁	93
698	3.5	2.1	壁	93
699	2.7	1.7	塑壁	93
700	3.7	3	塑壁	93
701	4.8	3.7	壁	93
702	4	2.5	塑壁	93
703	3.4	1.7	塑壁	93
704	3.2	2	塑壁	93
705	3.8	3	塑壁	93
706	4.3	2.4	壁	93
707	4.2	4.2	壁	93
708	4	2	塑壁	93
709	3.1	3	塑壁	93
710	3	2.3	塑壁	93
711	4	2.8	塑壁	93
712	3.2	2.4	塑壁	93
713	4.3	2.7	塑壁	93
714	4	2.5	塑壁	93
715	3.6	2.1	塑壁	93
716	3.3	3.3	塑壁	93
717	2.6	2.2	塑壁	93
718	4	3.5	壁	93
719	3.3	2.5	塑壁	93
720	3.8	2.2	塑壁	93
721	2.9	2.1	塑壁	93
722	3.1	2.2	塑壁	93
723	2.5	2.2	塑壁	93
724	5.5	1.8	塑壁	93
725	3.5	2	壁	93
726	3.3	2.4	壁	93
727	4.9	2.7	塑壁	93
728	3.8	2.6	塑壁	93
729	4.6	2.4	壁	93
730	4.2	2.1	壁	93
731	3	2.2	塑壁	93
732	3	2.7	壁	93
733	4	1.9	壁	93
734	2.7	2.5	塑壁	93
735	3.3	2.1	塑壁	93
736	3.1	2	塑壁	94
737	3.1	2	塑壁	94
738	3.5	3	塑壁	94
739	2.8	2.7	塑壁	94
740	3.1	2.4	塑壁	94
741	5.5	3	塑壁	94
742	2.5	2.2	塑壁	94
743	4	3.3	壁	94
744	4.1	3.5	塑壁	94
745	4	2	塑壁	94
746	3.9	2.9	塑壁	94
747	3	2.5	塑壁	94
748	2.5	1	塑壁	94
749	2.3	1.5	塑壁	94
750	3.8	3.7	塑壁	94
751	2.8	1.8	塑壁	94
752	3.3	2.3	塑壁	94
753	8.5	5	壁	94
754	8.3	6.5	壁	94
755	10.4	5.3	壁	94
756	14	9.5	壁	94
757	9	7.5	壁	94
758	6.5	5	壁	94
759	6	4.6	壁	94
760	8.2	4	壁	94
761	6	4.5	壁	94
762	4.8	3.5	塑壁	94
763	5.6	4.3	壁	94
764	6.7	4.1	壁	94
765	5.9	3.1	壁	94
766	4.5	2.1	塑壁	94
767	4.2	2.9	塑壁	94
768	5.8	5.5	壁	94
769	5.2	4.8	壁	94
770	4.1	3.1	塑壁	94
771	3.5	3.4	塑壁	94
772	4.2	3.7	壁	94

番号	長径	短径	種別	PL
773	4.1	3.9	壁	94
774	6.4	6.3	壁	94
775	7	4.1	壁	95
776	5.1	4.3	壁	95
777	3.8	2.4	塑壁	95
778	4.5	3.5	塑壁	95
779	6.3	5.8	壁	95
780	5.1	3.1	壁	95
781	4.5	4.3	壁	95
782	5.9	4.2	壁	95
783	7.2	3.8	壁	95
784	4.9	3.2	壁	95
785	5.4	2.9	塑壁	95
786	3.3	1.8	壁	95
787	5.4	4.9	塑壁	95
788	3	1.8	塑壁	95
789	4.2	2.9	塑壁	95
790	4.8	3.7	塑壁	95
791	4.1	2.8	塑壁	95
792	4.8	4.7	壁	95
793	2.6	1.8	塑壁	95
794	3.7	2.5	塑壁	95
795	3.6	2.1	壁	95
796	3.7	2.6	壁	95
797	4.3	3.8	壁	95
798	3.8	3	壁	95
799	4.8	2.8	壁	95
800	5.6	3.5	壁	95
801	4.9	3.1	壁	95
802	3.3	3	壁	95
803	9.6	9.5	塑壁	95
804	8.8	7	塑壁	95
805	10	8	塑壁	95
806	7.7	6.8	塑壁	95
807	8.5	6.7	塑壁	95
808	9	4	塑壁	95
809	11.8	11.5	塑壁	95
810	10	9	塑壁	95
811	9	8	塑壁	96
812	5.3	3.5	壁	96
813	5	3.5	壁	96
814	6.5	6	塑壁	96
815	3.5	3.5	塑壁	96
816	4.5	2.2	壁	96
817	3.2	3	塑壁	96
818	4.3	3.2	壁	96
819	9	5.8	塑壁	96
820	8.5	6	塑壁	96
821	7	5	塑壁	96
822	6	3.4	塑壁	96
823	6	3.8	塑壁	96
824	5.5	3	塑壁	96
825	3.8	3	塑壁	96
826	4	3.6	塑壁	96
827	4	2.6	塑壁	96
828	9	7.3	壁	96
829	8.3	3.5	塑壁	96
830	6.1	4.5	壁	96
831	6.5	4	塑壁	96
832	6.2	5.7	壁	96
833	10	6.2	塑壁	96
834	6	5.5	塑壁	96
835	6.5	5	塑壁	97
836	2.6	2.5	塑壁	97
837	4.6	4.1	壁	97
838	9.6	6	壁	97
839	7.2	4	塑壁	97
840	7.5	6.5	塑壁	97
841	7	6.5	塑壁	97
842	3.5	2.2	塑壁	97
843	3.8	2.7	塑壁	97
844	3.9	3.3	塑壁	97
845	3.4	3.1	塑壁	97
846	8.7	4	壁	97
847	10.5	6.3	塑壁	97
848	4	2.3	壁	97
849	3.7	3.3	塑壁	97
850	6.2	2.3	塑壁	97
851	7.5	2.5	壁	97
852	5	3.7	塑壁	97
853	5	4.5	塑壁	97
854	4.5	3.1	壁	97
855	4.5	3.7	壁	97
856	4.3	4.1	塑壁	97
857	3.5	2.7	塑壁	97
858	4	3.6	壁	97
859	2.5	1.7	壁	97
860	3.8	3.5	塑壁	97
861	3.7	1.5	塑壁	97
862	5.5	2	塑壁	97
863	2.9	2.6	壁	97
864	3.3	3	壁	97
865	3	1.7	塑壁	97
866	3.4	2	塑壁	97
867	2.6	1.8	塑壁	97
868	2.2	2.2	塑壁	97
869	2.7	2.6	塑壁	97
870	3	2.1	塑壁	97
871	2.8	2.7	塑壁	97
872	3.5	2.7	塑壁	97
873	4	3.8	塑壁	97
874	16	9	塑壁	98
875	5	4.4	塑壁	98
876	4.3	1.4	塑壁	98
877	20	10	塑壁	98
878	8	7	塑壁	98
879	5	4.6	塑壁	98
880	4.3	3.3	壁	98
881	15	11	壁	98
882	10	7	壁	98
883	16	19	壁	98
884	3.3	2.2	塑壁	98
885	11.8	10.6	塑壁	98
886	8.5	8.5	塑壁	98
887	11.3	6.5	壁	98
888	9.2	5.1	壁	99
889	11	8.7	塑壁	99
890	4.7	2.2	塑壁	99
891	7	5.5	塑壁	99
892	10.3	7.2	壁	99
893	8	7.4	塑壁	99
894	11	8.7	塑壁	99
895	8	7.5	壁	99
896	10	6.6	塑壁	99
897	6.5	4	塑壁	99
898	4.2	3	塑壁	99
899	6	4.8	塑壁	99
900	6.5	3.4	塑壁	99
901	5.5	4	塑壁	99
902	3.5	2	塑壁	99
903	6.5	6	壁	99
904	6.2	4	塑壁	99
905	5	3.5	塑壁	99
906	5.3	3.7	壁	99
907	3.5	3.3	塑壁	99
908	5.3	4	壁	99
909	4.5	4.3	壁	99
910	4.8	3.2	塑壁	99
911	4	3.5	壁	100
912	6	4	塑壁	100
913	5	2	塑壁	100
914	3.8	3.3	塑壁	100
915	4.2	3.3	塑壁	100
916	5	3.2	塑壁	100
917	4.7	4.1	塑壁	100
918	4.7	4.3	塑壁	100
919	5.5	4.6	塑壁	100
920	8.9	4.4	塑壁	100
921	6.8	5.3	壁	100
922	5.4	4.8	壁	100
923	4.5	1.7	衣部	23,46,100
924	5	3.7	壁	100
925	4.2	3	塑壁	100
926	3.3	3	壁	100
927	3.9	3.8	塑壁	100
928	5.5	4.5	塑壁	100
929	3.3	1.5	塑壁	100
930	4.5	2.6	塑壁	100
931	2.6	1.7	塑壁	100
932	4.5	3.2	塑壁	100
933	3.3	2.4	塑壁	100
934	5.2	3.9	塑壁	100
935	7	6.2	塑壁	100
936	6	6	塑壁	100
937	7	5	塑壁	100
938	7	3.6	塑壁	100
939	7	5	塑壁	100
940	3.5	2.5	塑壁	100
941	4.5	3	塑壁	100
942	4	1.6	塑壁	100
943	6.5	3.2	塑壁	100
944	6	3.7	塑壁	100
945	3	2.3	塑壁	100
946	2.3	1.9	塑壁	100
947	5.5	2.8	塑壁	100
948	3.3	3	塑壁	100
949	3.3	3	塑壁	100
950	5.6	3.9	塑壁	100
951	4.2	3.8	塑壁	101
952	5.6	4.9	壁	101
953	3.5	3.3	塑壁	101
954	6.7	4.3	塑壁	101
955	3.8	3.2	塑壁	101
956	4.4	2.6	塑壁	101
957	3.9	2	塑壁	101
958	5.2	1.9	塑壁	101
959	7.2	3.6	塑壁	101
960	5.6	4.5	塑壁	101
961	7.5	4.8	壁	101
962	7	3.8	塑壁	101
963	7.5	4	壁	101
964	5.2	4.2	塑壁	101
965	5.2	4.1	壁	101
966	5.8	5.2	塑壁	101
967	6.5	5	塑壁	101
968	8.5	4.3	塑壁	101
969	6.1	3.9	塑壁	101
970	8.2	5.8	塑壁	101
971	7.8	6.6	塑壁	101
972	5.9	4.4	壁	101
973	4.2	3.7	塑壁	101
974	5.7	5	壁	101
975	4.9	3.4	壁	101
976	4.5	3.8	壁	101
977	6	4.1	塑壁	101
978	6.5	5.5	塑壁	102
979	6	4.2	塑壁	102
980	8.5	8.5	塑壁	102
981	7.7	6.7	壁	102
982	4.7	2.8	壁	102
983	3.5	2.9	塑壁	102
984	3.5	2.4	塑壁	102
985	4.5	3.5	壁	102
986	3.5	2.5	塑壁	102
987	5.4	3.5	壁	102
988	3.8	2.8	壁	102
989	5	3	塑壁	102
990	5.7	4.2	塑壁	102
991	4.3	3	塑壁	102
992	4.3	3.5	壁	102
993	3.5	2.4	塑壁	102
994	4.1	3.2	塑壁	102
995	3.1	2.5	塑壁	102
996	3.5	2	塑壁	102
997	3.5	2.5	塑壁	102
998	3.5	2	塑壁	102
999	2.5	2	塑壁	102
1000	6	4	塑壁	102
1001	4.5	3.7	塑壁	102
1002	1.8	1.7	塑壁	102
1003	2.3	2	塑壁	102
1004	3.2	2.1	塑壁	102
1005	2.7	2.1	塑壁	102
1006	2.8	1.8	塑壁	102
1007	4.7	3.4	塑壁	102
1008	2.8	1.5	塑壁	102
1009	3	2.5	塑壁	102
1010	3.1	2.4	塑壁	102
1011	3.5	2.5	塑壁	102
1012	3.5	2.7	塑壁	102
1013	4.5	3.6	壁	102
1014	5	4.3	塑壁	102
1015	4.2	2.6	塑壁	102
1016	3.7	3.3	壁	102
1017	5.3	3.4	塑壁	102
1018	2.6	2.2	塑壁	102
1019	2.7	2.2	壁	102
1020	4	3.5	壁	102
1021	4.2	3.9	壁	102
1022	3.3	1.5	塑壁	103
1023	4.6	3.8	壁	103
1024	5.9	3.9	壁	103
1025	3.9	2.5	塑壁	103
1026	3.6	2.2	塑壁	103
1027	4.9	2.3	塑壁	103
1028	5	2.6	壁	103
1029	3.3	2.2	塑壁	103
1030	4	2.6	塑壁	103
1031	3.4	1.3	塑壁	103
1032	3.7	1.3	塑壁	103

遺物観察表

番号	長径	短径	種別	PL
1033	3.4	3	塑壁	103
1034	3	2.6	塑壁	103
1035	3	2.2	塑壁	103
1036	4	3.7	壁	103
1037	3.5	1.9	塑壁	103
1038	3.2	2.9	塑壁	103
1039	3.5	3	塑壁	103
1040	3.5	2.4	壁	103
1041	3.1	2.8	壁	103
1042	3.5	3	塑壁	103
1043	5.3	2	塑壁	103
1044	3.8	2.5	塑壁	103
1045	4.7	2.6	塑壁	103
1046	4.9	3.8	塑壁	103
1047	4	3.6	塑壁	103
1048	3.2	2.8	塑壁	103
1049	4	2.3	塑壁	103
1050	4.7	3.8	壁	103
1051	3.6	2.9	塑壁	103
1052	4.5	2.7	塑壁	103
1053	3.6	2.8	塑壁	103
1054	2.5	1.2	壁	103
1055	3.6	2.4	壁	103
1056	2.5	2	壁	103
1057	3.4	1.8	壁	103
1058	2.8	1.7	壁	103
1059	3.2	2	塑壁	103
1060	2.3	2.2	塑壁	103
1061	2.5	1.9	塑壁	103
1062	4	1.5	塑壁	103
1063	3.3	2.2	塑壁	103
1064	3.9	2.7	塑壁	103
1065	3.5	3	塑壁	103
1066	3	2.6	塑壁	103
1067	3.3	2	塑壁	103
1068	3.3	2.3	塑壁	103
1069	2.9	2	塑壁	103
1070	2.5	1.6	塑壁	103
1071	2.8	1.9	塑壁	103
1072	3	2.1	塑壁	103
1073	2.6	1.5	塑壁	104
1074	4	2.3	塑壁	104
1075	2.2	1.8	塑壁	104
1076	2.7	2.6	塑壁	104
1077	2.3	1.5	塑壁	104
1078	3.7	2.5	塑壁	104
1079	3	1.4	塑壁	104
1080	3.3	1.7	塑壁	104
1081	2.8	1.9	壁	104
1082	3.5	1.7	塑壁	104
1083	2	1.9	塑壁	104
1084	2.5	2.5	壁	104
1085	4	1.7	塑壁	104
1086	2	1.9	塑壁	104
1087	3.8	2.8	壁	104
1088	3.5	2.5	塑壁	104
1089	4	2.9	壁	104
1090	5.2	3.8	塑壁	104
1091	4.8	2.2	塑壁	104
1092	4.8	3	塑壁	104
1093	3.5	3.2	塑壁	104
1094	5	3.2	塑壁	104
1095	4.2	2.8	塑壁	104
1096	3.8	3.2	塑壁	104
1097	3.7	2.1	塑壁	104
1098	4.3	2.1	壁	104
1099	2.5	2	塑壁	104
1100	2.8	2.3	塑壁	104
1101	2.4	2.1	塑壁	104
1102	2.5	1.8	壁	104
1103	2.8	2	塑壁	104
1104	3.5	2	壁	104
1105	4	3	塑壁	104
1106	4.5	2	塑壁	104
1107	3.1	1.4	塑壁	104
1108	4	3	塑像	104
1109	2.9	1.6	塑壁	104
1110	2.8	1.7	塑壁	104
1111	3.4	2.6	塑壁	104
1112	4.5	3.5	塑壁	104
1113	3.8	3.5	塑壁	104
1114	2.2	1.7	塑壁	104
1115	2.2	2.2	塑壁	104
1116	3.8	2.9	塑壁	104
1117	2.7	1.4	塑壁	104
1118	2.5	1.3	塑壁	104
1119	2.5	2	塑壁	104
1120	2.5	1.7	塑壁	104
1121	5	1.2	壁	104
1122	4.7	2.2	塑壁	104
1123	7	5.2	塑壁	104
1124	4.8	3.2	塑壁	104
1125	18	11	塑壁	105
1126	7.7	5	塑壁	105
1127	5	4.9	塑壁	105
1128	4.6	4.3	塑壁	105
1129	5.8	4	塑壁	105
1130	4.1	3.1	塑壁	105
1131	4.6	2.9	塑壁	105
1132	4.7	2.2	塑壁	105
1133	3.8	3.6	塑壁	105
1134	3.5	2.4	塑壁	105
1135	6.1	5.6	塑壁	105
1136	5.2	3.7	塑壁	105
1137	4	3.8	塑壁	105
1138	3.7	3	塑壁	105
1139	3.5	2.5	塑壁	105
1140	2.8	2.3	塑壁	105
1141	2.5	2.1	塑壁	105
1142	3.5	1.9	塑壁	105
1143	3.5	2.7	壁	105
1144	5.8	3.7	塑壁	105
1145	6.6	5.3	壁	105
1146	5.2	2.7	塑壁	105
1147	9.5	6.8	塑壁	105
1148	2.9	2.9	壁	105
1149	4.3	2.9	塑壁	105
1150	4.7	4.1	塑壁	105
1151	6.9	5.3	塑壁	105
1152	3.5	2.5	壁	105
1153	3	2.4	塑壁	105
1154	5.5	5.3	塑壁	105
1155	6.5	3.3	壁	105
1156	4.7	3.9	壁	105
1157	3.5	2.7	塑壁	105
1158	3.6	3.4	塑壁	105
1159	3.7	3	塑壁	105
1160	4.3	4	塑壁	105
1161	3.5	2.7	塑壁	105
1162	9.7	5.8	壁	105
1163	9.7	6.5	壁	105
1164	4.1	3.7	壁	105
1165	4.5	4	壁	105
1166	2.5	2	塑壁	105
1167	2.9	2.5	塑壁	105
1168	2.9	2.2	塑壁	106
1169	9.5	6	塑壁	106
1170	6.7	5.3	塑壁	106
1171	9	7	塑壁	106
1172	5.7	3.3	塑壁	106
1173	10.3	8	塑像	106
1174	11.5	5.5	塑壁	106
1175	6	3	塑壁	106
1176	12.3	7.4	塑壁	106
1177	7	6.6	塑壁	106
1178	6.3	4.8	塑壁	106
1179	3.8	3.1	塑壁	106
1180	6.8	5	塑壁	106
1181	4.6	4.2	塑壁	106
1182	4	1.5	塑壁	106
1183	6	4.9	壁	106
1184	5.5	3.4	壁	106
1185	7.1	3.5	壁	106
1186	4.8	2.5	壁	106
1187	6.5	2.9	塑壁	106
1188	3.2	2.3	塑壁	106
1189	4.7	3.4	壁	106
1190	4	2.6	壁	106
1191	4.5	2.5	塑壁	106
1192	2.7	2.6	塑像	106
1193	8	6.5	塑壁	106
1194	3.2	2.2	壁	106
1195	3.2	2.3	塑壁	106
1196	5.2	4.2	塑壁	106
1197	9	8	壁	106
1198	10	6.5	壁	106
1199	6.9	5.5	壁	106
1200	9	5.2	塑壁	106
1201	7.2	6	塑壁	106
1202	7.7	5.1	塑壁	107
1203	11.3	6.5	塑壁	107
1204	5.3	3.6	壁	107
1205	6.2	4.6	塑壁	107
1206	5.5	3.7	塑壁	107
1207	3.7	3.5	塑壁	107
1208	10	5.1	塑壁	107
1209	6.2	4.3	塑壁	107
1210	7.6	5.8	塑壁	107
1211	6	4.2	壁	107
1212	7.6	4	塑壁	107
1213	6	3	塑壁	107
1214	6.2	5.2	塑壁	107
1215	3	2	塑壁	107
1216	6.3	5.8	塑壁	107
1217	3.6	2.8	塑壁	107
1218	3.7	2.3	塑壁	107
1219	4.2	3.5	塑壁	107
1220	12.2	8	塑壁	107
1221	9.3	6.7	塑壁	107
1222	5.3	2.3	壁	107
1223	4.5	4.3	塑壁	107
1224	3.2	2.5	塑壁	107
1225	3	2.7	壁	107
1226	8	5.9	壁	107
1227	7.1	4	塑壁	107
1228	4	1.8	塑壁	107
1229	10.5	7.5	塑壁	107
1230	15.5	11.5	塑壁	108
1231	10	9.5	塑壁	108
1232	10	7	壁	108
1233	17	16.5	壁	108
1234	8.4	7.3	塑壁	108
1235	6	4	塑壁	108
1236	7.1	5.4	塑壁	108
1237	6	4.3	塑壁	108
1238	12	7.5	塑壁	108
1239	13	9	壁	108
1240	8.5	6	塑壁	108
1241	16.5	9	塑壁	108
1242	7.5	5.2	塑壁	108
1243	6.2	4.9	塑壁	108
1244	6.3	4.3	塑壁	108
1245	6.6	4.5	塑壁	109
1246	5.2	4.8	壁	109
1247	9.8	6.8	塑壁	109
1248	3.5	3	塑壁	109
1249	6.3	5	塑壁	109
1250	7.5	6	塑壁	109
1251	5.5	1.7	塑壁	109
1252	8.5	7.7	塑壁	109
1253	5.5	3.5	塑壁	109
1254	11.5	4	塑壁	109
1255	8.5	6.8	塑壁	109
1256	5	3	塑壁	109
1257	6	3.2	塑壁	109
1258	3.5	2.6	塑壁	109
1259	2.7	1.9	塑壁	109
1260	4.5	2.6	塑壁	109
1261	4.7	3	塑壁	109
1262	3.6	3.5	塑壁	109
1263	10.6	9	塑壁	109
1264	5	2	塑壁	109
1265	3.3	1.9	塑壁	109
1266	4.1	3.2	塑壁	109
1267	6	4.6	塑壁	109
1268	4.2	3.7	塑壁	109
1269	3.7	3.2	塑壁	109
1270	6	4.4	塑壁	109
1271	4.4	3.5	塑壁	109
1272	4	2.7	塑壁	109
1273	5	3	塑壁	109
1274	4.9	3.5	塑壁	109
1275	4.6	3.9	塑壁	109
1276	6.9	5	塑壁	109
1277	8	6	塑壁	109
1278	6.5	6	塑壁	109
1279	7.6	4.8	塑壁	110
1280	3.1	2.6	塑壁	110
1281	9	6.7	塑壁	110
1282	9.5	3	塑壁	110
1283	7.3	4.1	壁	110
1284	5	4	塑壁	110
1285	10	4.1	塑壁	110
1286	4.5	2.2	塑壁	110
1287	6.2	3	塑壁	110
1288	6	5.5	塑壁	110
1289	5	4.7	壁	110
1290	5	2.8	塑壁	110
1291	4	3.7	塑壁	110
1292	4.5	2.3	塑壁	110

番号	長径	短径	種別	PL
1293	3.4	1.7	塑壁	110
1294	3.8	3.3	塑壁	110
1295	5.9	4.5	塑壁	110
1296	3.6	3	塑壁	110
1297	2.1	1.7	塑壁	110
1298	2.2	2.1	塑壁	110
1299	3.2	1.6	塑壁	110
1300	4	2.5	塑壁	110
1301	10	9	壁	110
1302	5.8	5.6	塑壁	110
1303	6.3	5.8	塑壁	110
1304	9.5	9	塑壁	110
1305	10.5	5.5	塑壁	110
1306	6.5	4.5	塑壁	110
1307	6	3	壁	110
1308	5.5	4.5	壁	110
1309	4	3.5	壁	110
1310	4	4	塑壁	110
1311	4.5	3	塑壁	110
1312	3.5	2.5	塑壁	110
1313	14	8	壁	110
1314	5.5	5	壁	111
1315	5.5	4	塑壁	111
1316	4.5	3	塑壁	111
1317	5	4.7	塑壁	111
1318	5	3.5	塑壁	111
1319	3.1	2.5	塑壁	111
1320	5.5	4.5	壁	111
1321	5.8	4.4	壁	111
1322	4	2.5	塑壁	111
1323	3.2	1.8	塑壁	111
1324	3	2.5	塑壁	111
1325	3.7	3	壁	111
1326	4	2.9	塑壁	111
1327	3	1.6	壁	111
1328	3.3	1.5	塑壁	111
1329	4	3.4	塑壁	111
1330	3.6	2.9	塑壁	111
1331	4.4	2.5	塑壁	111
1332	3.5	2	塑壁	111
1333	4.2	4	塑壁	111
1334	3.7	2.7	塑壁	111
1335	2.7	2.6	塑壁	111
1336	4.2	3.2	塑壁	111
1337	2.6	2	塑壁	111
1338	3.6	2	塑壁	111
1339	4.5	2.4	塑壁	111
1340	6.6	3	壁	111
1341	4.1	3.8	塑壁	111
1342	3.4	3.3	塑壁	111
1343	2.3	1.1	塑壁	111
1344	22.3	7.5	塑壁	111
1345	6.6	5.5	塑壁	111
1346	14	10.7	塑壁	111
1347	10	8.3	塑壁	111
1348	12	8	塑壁	111
1349	12	11	塑壁	112
1350	6	3.5	塑壁	112
1351	6.9	4.2	塑壁	112
1352	3.6	3.5	塑壁	112
1353	3.2	2.6	塑壁	112
1354	6.5	5	塑壁	112
1355	8	7.2	塑壁	112
1356	7.5	5	塑壁	112
1357	5.5	3.5	塑壁	112
1358	6.3	5	塑壁	112
1359	11.8	5.3	塑壁	112
1360	6.3	4.7	塑壁	112
1361	6	5.5	塑壁	112
1362	5	4	塑壁	112
1363	4.6	4.5	塑壁	112
1364	10.5	9	壁	112
1365	3	2.5	塑壁	112
1366	5	3.2	壁	112
1367	8	4	塑壁	112
1368	7	5	塑壁	112
1369	4.5	2.5	塑壁	112
1370	5	3.5	塑壁	112
1371	4.5	3.5	塑壁	112
1372	8	6	塑壁	112
1373	3	2.7	壁	112
1374	2.5	2	壁	112
1375	2.7	2.2	塑壁	112
1376	3	1.7	塑壁	112
1377	4.5	4	塑壁	112
1378	6	2.5	壁	112
1379	6.5	4.5	塑壁	112
1380	3.5	2.7	塑壁	112
1381	10.5	7.5	塑壁	112
1382	16	12	塑壁	113
1383	9	5.5	塑壁	113
1384	4.5	4	壁	113
1385	5.5	4.5	塑壁	113
1386	4	3	塑壁	113
1387	2.5	1.7	塑壁	113
1388	4	2.5	壁	113
1389	9	7	塑壁	113
1390	13.5	8	壁	113
1391	8.5	5.5	塑壁	113
1392	6.6	5	壁	113
1393	11.5	10	壁	113
1394	9	6	塑壁	113
1395	7.5	5.5	塑壁	113
1396	4.2	4	壁	113
1397	4	3.2	塑壁	113
1398	5.5	5.2	塑壁	113
1399	2.2	2	塑壁	113
1400	3.2	1.5	塑壁	113
1401	3.1	2	壁	113
1402	2.4	2	壁	113
1403	17	14	塑壁	114
1404	10	4.5	塑壁	114
1405	7.1	4	壁	114
1406	5	3.8	壁	114
1407	6.5	5	壁	114
1408	5.7	4.3	壁	114
1409	4.7	3.3	塑壁	114
1410	6.2	4.8	壁	114
1411	6.4	4.2	塑壁	114
1412	5.7	5.1	塑壁	114
1413	5.5	4	塑壁	114
1414	4.9	3.4	壁	114
1415	6	4	塑壁	114
1416	5.8	3.5	壁	114
1417	4.3	3.5	壁	114
1418	6	4	塑壁	114
1419	6.2	4.4	塑壁	114
1420	7.2	4	塑壁	114
1421	5	4	塑壁	114
1422	6.4	4.9	壁	114
1423	5.4	3.8	塑壁	114
1424	5.3	4.6	塑壁	114
1425	4.9	4.4	壁	114
1426	3.8	3.4	壁	114
1427	4.2	3.2	壁	114
1428	17.8	9.3	塑壁	114
1429	10.3	9.5	塑壁	114
1430	11.3	6.7	塑壁	114
1431	16.8	10	塑壁	115
1432	8	5.5	塑壁	115
1433	8.5	5.9	塑壁	115
1434	9	5.6	塑壁	115
1435	6	6	壁	115
1436	6	4.1	壁	115
1437	8.5	5	壁	115
1438	5	3	壁	115
1439	6	5.2	壁	115
1440	4	2.6	塑壁	115
1441	4	4	塑壁	115
1442	4.4	2.9	塑壁	115
1443	3.4	2.7	塑壁	115
1444	2.9	2.9	塑壁	115
1445	4.3	2.2	塑壁	115
1446	4	3	塑壁	115
1447	3.6	2.5	塑壁	115
1448	4.4	2.8	塑壁	115
1449	5.2	2.5	塑壁	115
1450	3	2.9	塑壁	115
1451	3	2.7	塑壁	115
1452	2.9	2	塑壁	115
1453	4	2.1	壁	115
1454	4	3.2	塑壁	115
1455	2	2	塑壁	115
1456	17	10.5	塑壁	115
1457	9.3	7.5	塑壁	115
1458	9.5	7.2	塑壁	115
1459	8	4.2	塑壁	115
1460	10.5	8	塑壁	115
1461	9.7	9	塑壁	116
1462	6.4	5.5	塑壁	116
1463	8.5	5.5	塑壁	116
1464	6	4	塑壁	116
1465	8.5	7	塑壁	116
1466	9	6	塑壁	116
1467	5.5	5	塑壁	116
1468	7	6.5	塑壁	116
1469	5	4.5	塑壁	116
1470	7	5.5	壁	116
1471	5.5	3.5	塑壁	116
1472	5	4	壁	116
1473	5	3.8	塑壁	116
1474	4.7	4.5	塑壁	116
1475	4	3	壁	116
1476	6	5.5	塑壁	116
1477	8	5.4	塑壁	116
1478	11	8.5	壁	116
1479	5	3.5	塑壁	116
1480	7.5	5.7	塑壁	116
1481	4	2.7	塑壁	116
1482	4	3	塑壁	116
1483	4	3	塑壁	116
1484	8	6	塑壁	116
1485	7	5	塑壁	116
1486	3.9	2.9	塑壁	116
1487	3.7	3.5	塑壁	116
1488	6.7	4.7	塑壁	116
1489	12.3	7.1	塑壁	116
1490	10.5	5.5	塑壁	117
1491	10	9.5	塑壁	117
1492	6.4	2.8	塑壁	117
1493	5.8	3	塑壁	117
1494	8.7	6.5	壁	117
1495	4	2	塑壁	117
1496	6.9	4.7	塑壁	117
1497	5.3	3.8	塑壁	117
1498	5.2	3.8	壁	117
1499	4.3	3.3	壁	117
1500	5.3	4.3	壁	117
1501	4.7	4.6	塑壁	117
1502	6.4	6.3	塑壁	117
1503	5.3	5	塑壁	117
1504	4	4	塑壁	117
1505	6.5	5.5	壁	117
1506	3.7	2.5	塑壁	117
1507	4.5	4.3	塑壁	117
1508	5	3.8	壁	117
1509	3.2	2.2	壁	117
1510	6.2	2.9	塑壁	117
1511	4.5	4	塑壁	117
1512	5.5	4.5	塑壁	117
1513	6.2	3.3	塑壁	117
1514	2.8	2.7	塑壁	117
1515	4.7	3.2	塑壁	117
1516	3	2.5	塑壁	117
1517	6.5	3.7	塑壁	117
1518	3.5	2.6	塑壁	117
1519	5.4	4.3	壁	117
1520	4.5	4.5	塑壁	117
1521	5.8	3.7	塑壁	117
1522	2.9	2.1	塑壁	117
1523	5.5	3	塑壁	117
1524	3.2	3.4	塑壁	117
1525	4	3	塑壁	117
1526	3.5	1.5	塑壁	118
1527	5.5	4	塑壁	118
1528	5.6	3.5	塑壁	118
1529	6	4	塑壁	118
1530	6.7	4.3	塑壁	118
1531	4.5	4	塑壁	118
1532	4	3.5	塑壁	118
1533	4.2	3.8	壁	118
1534	5.3	3.7	塑壁	118
1535	3	1.7	塑壁	118
1536	4.5	3	塑壁	118
1537	4	3.2	壁	118
1538	4.3	3	塑壁	118
1539	6	5	塑壁	118
1540	6.5	5	塑壁	118
1541	5.5	2.5	塑壁	118
1542	6	5	塑壁	118
1543	7	4.6	塑壁	118
1544	5	3.2	塑壁	118
1545	8.5	6.5	塑壁	118
1546	5.5	3.5	壁	118
1547	6.2	3	塑壁	118
1548	4.7	3	塑壁	118
1549	5.5	4.5	塑壁	118
1550	3.5	2	塑壁	118
1551	2.5	2	塑壁	118
1552	2.5	2.2	塑壁	118

遺物観察表

番号	長径	短径	種別	PL
1553	6	5.5	壁	118
1554	4.7	4	塑壁	118
1555	3.5	2.5	塑壁	118
1556	5	3.5	塑壁	118
1557	4.5	4	塑壁	118
1558	3.2	2.2	塑壁	118
1559	4.5	4.5	塑壁	118
1560	4.3	4	壁	118
1561	3.5	3.5	塑壁	118
1562	5.4	2.6	塑壁	118
1563	4.5	2	塑壁	118
1564	3	1.9	壁	118
1565	3	2.4	壁	118
1566	4.3	4.3	塑壁	118
1567	4.9	2.5	塑壁	118
1568	2.5	1.8	塑壁	118
1569	4.6	3.9	塑壁	118
1570	3.8	2.7	塑壁	118
1571	7	4.5	塑壁	119
1572	2	1.8	塑壁	119
1573	2.6	2.1	塑壁	119
1574	2.8	2.6	塑壁	119
1575	5.8	4.5	塑壁	119
1576	22.5	7.8	塑壁	119
1577	5.5	3.3	壁	119
1578	7	6.5	壁	119
1579	3.3	2.4	壁	119
1580	2.6	2.1	塑壁	119
1581	6.5	4.5	壁	119
1582	3.1	1.6	塑壁	119
1583	3.7	2.2	壁	119
1584	3.7	3.7	壁	119
1585	3.5	2	塑壁	119
1586	4	3	塑壁	119
1587	3.8	2.5	塑壁	119
1588	6.5	3.4	塑壁	119
1589	3.6	2.1	塑壁	119
1590	3.6	2	塑壁	119
1591	3.6	3.5	塑壁	119
1592	5	4.8	塑壁	119
1593	7.3	3.8	塑壁	119
1594	7.8	6.8	塑壁	119
1595	4.2	3.7	塑壁	119
1596	5.3	4.8	塑壁	119
1597	5.5	3.3	壁	119
1598	5.3	5.3	塑壁	119
1599	4	2.6	塑壁	119
1600	5.4	2.5	塑壁	119
1601	3.3	2	塑壁	119
1602	4.5	1.7	塑壁	119
1603	4	2.9	壁	119
1604	7.5	4.9	塑壁	119
1605	4.3	1.5	塑壁	119
1606	4	3.3	塑壁	119
1607	4.8	4.2	塑壁	119
1608	4.1	2.4	塑壁	119
1609	3.4	2.8	塑壁	119
1610	2.5	2	塑壁	119
1611	6.5	5.7	塑壁	119
1612	6.5	4	塑壁	120
1613	3	2.8	塑壁	120
1614	5	2	塑壁	120
1615	1.9	1.5	塑壁	120
1616	12.3	7.8	塑壁	120
1617	8.5	5	塑壁	120
1618	8	6	不明	120
1619	7.5	4.7	不明	120
1620	6.2	5.7	塑壁	120
1621	6.5	5.5	塑壁	120
1622	8.5	7	塑壁	120
1623	7.3	5.1	塑壁	120
1624	9	8	壁	120
1625	6.1	2.5	塑壁	120
1626	7.5	4.5	塑壁	120
1627	7.6	3.5	塑壁	120
1628	5.1	3.8	塑壁	120
1629	4.5	4.5	塑壁	120
1630	5.5	3	塑壁	120
1631	6	6	壁	120
1632	4.5	4.4	塑像	120
1633	5.7	2.7	塑壁	120
1634	4	2.8	塑壁	120
1635	3	2.5	塑壁	120
1636	4	3	塑壁	120
1637	3.6	3.1	塑壁	120
1638	5	3.1	塑壁	120
1639	10.5	7	壁	120
1640	10.3	7	塑壁	120
1641	4	2.8	塑壁	120
1642	3.5	2.3	塑壁	120
1643	6	3	塑壁	120
1644	3.5	2.5	塑壁	120
1645	4.5	1.8	塑壁	120
1646	4.5	2.7	塑壁	120
1647	7	6.5	壁	120
1648	8	6	壁	121
1649	4.5	3.7	塑壁	121
1650	3.5	3	塑壁	121
1651	2.5	2	塑壁	121
1652	2.5	2.5	壁	121
1653	3	2.8	塑壁	121
1654	4.3	3.5	塑壁	121
1655	4.5	4	塑壁	121
1656	2.5	2	塑壁	121
1657	2.5	2	塑壁	121
1658	3	2.5	塑壁	121
1659	2.5	2	壁	121
1660	2.8	1.6	塑壁	121
1661	3.2	2.5	塑壁	121
1662	2.3	2	塑壁	121
1663	13	10.8	塑壁	121
1664	13	13	塑壁	121
1665	13.3	9	壁	121
1666	12	8.3	塑壁	121
1667	10.5	6.2	塑壁	121
1668	15.5	8.8	壁	121
1669	10.5	8.5	塑壁	121
1670	10.4	9	塑壁	122
1671	9.5	7.8	塑壁	122
1672	9.2	5.3	壁	122
1673	18.5	10	塑壁	122
1674	6.3	5.5	塑壁	122
1675	8.2	6.2	塑壁	122
1676	5.8	5.7	塑壁	122
1677	6	4.3	塑壁	122
1678	8	6.5	塑壁	122
1679	8	5.5	塑壁	122
1680	6.6	6	塑壁	122
1681	13	9.5	塑壁	122
1682	6.2	4.2	塑壁	122
1683	8.8	4.5	塑壁	122
1684	10	4	壁	122
1685	5.5	5.1	壁	122
1686	5.8	4.5	壁	122
1687	6	4	壁	122
1688	5.6	3.8	塑壁	122
1689	4.5	4	壁	122
1690	8.5	6.3	壁	122
1691	5.5	5.3	塑壁	123
1692	4.1	4	塑壁	123
1693	7.8	7.5	塑壁	123
1694	4.9	4	塑壁	123
1695	6.6	4.2	塑壁	123
1696	4.6	4	壁	123
1697	7	3.4	塑壁	123
1698	5	2	塑壁	123
1699	5.5	5.2	塑壁	123
1700	5	3.2	塑壁	123
1701	8	6	塑壁	123
1702	6	4.3	塑壁	123
1703	4.5	3.1	塑壁	123
1704	6.5	5.5	塑壁	123
1705	6.5	4.3	塑壁	123
1706	5	3.7	塑壁	123
1707	5.8	4.3	塑壁	123
1708	9.6	7.7	塑壁	123
1709	8.3	4.5	壁	123
1710	6.1	5.1	塑壁	123
1711	10.1	7.4	塑壁	123
1712	7.5	6.5	塑壁	123
1713	9	7	塑壁	123
1714	6	5	塑壁	123
1715	10.5	4.5	塑壁	123
1716	10.5	4.5	塑壁	123
1717	4.5	4	壁	123
1718	5.5	3.5	塑壁	123
1719	7.5	5.5	塑壁	123
1720	7	6.5	塑壁	123
1721	5.5	3	壁	123
1722	5.5	4	壁	123
1723	5.5	4.5	壁	123
1724	6	2.5	壁	123
1725	3.7	2.5	壁	124
1726	13	11.5	塑壁	124
1727	6	3	塑壁	124
1728	5.5	3	塑壁	124
1729	5.5	4	壁	124
1730	4	2.5	壁	124
1731	4	3	壁	124
1732	3.5	2	塑壁	124
1733	6.5	3	塑壁	124
1734	5.5	4	塑壁	124
1735	6.5	4.5	塑壁	124
1736	5	3.3	塑壁	124
1737	5.4	3	壁	124
1738	4.7	3	塑壁	124
1739	5	2.5	塑壁	124
1740	4	3.5	壁	124
1741	5.2	4	塑壁	124
1742	5	2.6	塑像	124
1743	3.5	2.6	塑壁	124
1744	4	3	塑壁	124
1745	4.2	3	塑壁	124
1746	4.4	1.7	壁	124
1747	3.5	2	塑壁	124
1748	4	3.5	塑壁	124
1749	4.5	4.2	壁	124
1750	3	2.9	壁	124
1751	4	2.8	塑壁	124
1752	4.2	3.2	壁	124
1753	3.2	2.3	塑壁	124
1754	3.9	2.5	塑壁	124
1755	2.6	2.6	塑壁	124
1756	5.8	2.8	塑壁	124
1757	4.8	4.1	塑壁	124
1758	3.9	3.2	塑壁	124
1759	4.3	2.4	壁	124
1760	4	2.5	塑壁	124
1761	5	3.2	塑壁	124
1762	2.4	2.2	塑壁	124
1763	3	1.5	塑壁	124
1764	3.9	2.1	塑壁	124
1765	5	2.7	壁	124
1766	5	1.4	壁	124
1767	4.2	3.6	壁	124
1768	2.9	2.6	壁	125
1769	3.7	2	塑壁	125
1770	5.2	2	壁	125
1771	3	2.7	塑壁	125
1772	3.8	2.8	塑壁	125
1773	4.4	2.2	塑壁	125
1774	5.2	1.5	塑壁	125
1775	3	2.3	壁	125
1776	2.5	2	塑壁	125
1777	3.4	3.2	塑壁	125
1778	3.1	1.9	塑壁	125
1779	3.2	1.5	塑壁	125
1780	2.9	1.6	壁	125
1781	3.6	2	壁	125
1782	2	1.9	塑壁	125
1783	4.8	2.6	塑壁	125
1784	2	2	塑壁	125
1785	3	0.9	塑壁	125
1786	3.4	2.1	塑壁	125
1787	1.6	1.4	塑壁	125
1788	2.7	2.2	塑壁	125
1789	2.5	2.4	塑壁	125
1790	3.8	2.4	塑壁	125
1791	2.2	2.1	塑壁	125
1792	3	3	塑壁	125
1793	4.3	2.4	壁	125
1794	2.6	2.5	塑壁	125
1795	2.3	1.5	塑壁	125
1796	4	4	壁	125
1797	4	2.7	塑壁	125
1798	3.1	2.2	壁	125
1799	5.5	4.8	塑壁	125
1800	5	4	塑壁	125
1801	6.2	4.2	壁	125
1802	4.5	4	壁	125
1803	4.3	3.5	壁	125
1804	3.4	2.2	塑壁	125
1805	2	1.9	塑壁	125
1806	1.9	1.4	塑壁	125
1807	23	18	塑壁	125
1808	8.5	5.3	壁	126
1809	8	4	塑壁	126
1810	6	3.5	塑壁	126
1811	12.1	9	塑壁	126
1812	6	3.5	壁	126

番号	長径	短径	種別	PL
1813	7.5	4.5	壁	126
1814	8.5	5.5	壁	126
1815	4.8	4.5	壁	126
1816	4	2.5	壁	126
1817	5.5	3.5	壁	126
1818	6	4	壁	126
1819	3.5	3	壁	126
1820	4	3	壁	126
1821	11.5	4.5	壁	126
1822	6	5	塑壁	126
1823	3.5	3	壁	126
1824	3	2	壁	126
1825	4	3	壁	126
1826	9	5	塑壁	126
1827	4	3	塑壁	126
1828	3.2	2.5	塑壁	126
1829	2.6	1.5	塑壁	126
1830	6.6	2.5	塑壁	126
1831	6	3.5	塑壁	126
1832	5	4.2	塑壁	126
1833	9	5	壁	126
1834	10	7	塑壁	126
1835	9	7.5	壁	126
1836	19.5	9	壁	126
1837	6.8	3.7	塑壁	127
1838	7	6.3	壁	127
1839	9	6.5	壁	127
1840	5	4.8	塑壁	127
1841	3.5	2.5	壁	127
1842	4	2.5	塑壁	127
1843	9	7	壁	127
1844	6	4	壁	127
1845	4.7	1.8	塑壁	127
1846	5.5	4.2	壁	127
1847	7	3.3	塑壁	127
1848	6.5	5	壁	127
1849	4.7	3	塑壁	127
1850	5.2	3	壁	127
1851	8	8	壁	127
1852	4	3.5	壁	127
1853	4	2.8	壁	127
1854	4.7	4.5	壁	127
1855	3	2.9	壁	127
1856	4	3.5	壁	127
1857	3.5	3	壁	127
1858	3.3	2.7	塑壁	127
1859	7	4.7	壁	127
1860	3.5	3.5	塑壁	127
1861	3.8	2.5	塑壁	127
1862	2.7	2.3	塑壁	127
1863	3	1.4	塑壁	127
1864	2.5	2.3	塑壁	127
1865	5	4.2	塑壁	127
1866	2.7	1.6	塑壁	127
1867	2.9	2	塑壁	127
1868	4.1	1.8	塑壁	127
1869	9.3	5.5	塑壁	127
1870	10.5	9	塑壁	127
1871	4.8	2.7	左足先	24,46,127
1872	8.6	7.7	塑壁	127
1873	9.5	6.8	壁	127
1874	5.7	4.3	壁	128
1875	7	6.1	塑壁	128
1876	10	8.3	塑壁	128
1877	8.1	5.5	壁	128
1878	5.2	4.4	壁	128
1879	5.2	5.1	塑壁	128
1880	5.5	5.1	塑壁	128
1881	6.7	6.6	塑壁	128
1882	4.8	3.1	塑壁	128
1883	9.1	5.5	塑壁	128
1884	5.8	4.2	塑壁	128
1885	8.2	6.8	塑壁	128
1886	7.1	5.3	壁	128
1887	7	3.4	塑壁	128
1888	6.3	5.7	塑壁	128
1889	10	6.3	塑壁	128
1890	8.4	6	壁	128
1891	9	8.5	塑壁	128
1892	8.2	4.2	塑壁	128
1893	8.6	7	壁	128
1894	10	8.5	壁	128
1895	4.9	4.4	塑壁	128
1896	6	4.7	塑壁	128
1897	5.5	4.8	塑壁	128
1898	5	4.9	塑壁	128
1899	7.5	5.2	壁	128
1900	5.6	5	塑壁	128
1901	7.3	6.7	壁	129
1902	8.5	3.5	壁	129
1903	7	4.5	塑壁	129
1904	6.3	5	壁	129
1905	5	4.7	塑壁	129
1906	8	4.2	塑壁	129
1907	16	12.3	塑壁	129
1908	5.7	4.3	壁	129
1909	7.5	5	塑壁	129
1910	8.2	6.5	塑壁	129
1911	12	10.1	壁	129
1912	5	5	壁	129
1913	5.2	3	塑壁	129
1914	6	5	塑壁	129
1915	5.2	4	壁	129
1916	6.5	5	塑壁	129
1917	6.7	6.4	塑壁	129
1918	13.5	9.5	塑壁	129
1919	8	6	塑壁	129
1920	7.3	4.2	塑壁	129
1921	6.7	5.5	壁	129
1922	7.3	6	壁	129
1923	7.8	4.5	塑壁	130
1924	6.3	3.5	塑壁	130
1925	7	4.5	壁	130
1926	5.5	4	壁	130
1927	5.2	3.2	壁	130
1928	4	2.6	壁	130
1929	5	2.8	壁	130
1930	7.5	5.5	壁	130
1931	5	4.4	塑壁	130
1932	4	3	塑壁	130
1933	4.8	4.6	壁	130
1934	7.5	3.5	塑壁	130
1935	6	5	塑壁	130
1936	4.5	3.5	塑壁	130
1937	3.5	3.3	塑壁	130
1938	4.7	2.7	壁	130
1939	6.2	3.2	壁	130
1940	4.8	3.7	塑壁	130
1941	4.8	3.5	壁	130
1942	6	4	塑壁	130
1943	4	3.2	壁	130
1944	4.5	4	壁	130
1945	5.5	3.5	壁	130
1946	4	3	塑壁	130
1947	4.5	3.5	壁	130
1948	5.8	4	塑壁	130
1949	4	2.5	塑壁	130
1950	4.1	2.7	塑壁	130
1951	4	3.5	壁	130
1952	3.6	2.6	壁	130
1953	3.5	2.2	塑壁	130
1954	3.6	2.2	壁	130
1955	5.5	3	塑壁	130
1956	5	3	壁	130
1957	3.5	2	壁	130
1958	5.6	3.6	壁	130
1959	4.7	1.8	壁	130
1960	5.6	3.7	壁	131
1961	5.5	4.7	壁	131
1962	3.3	2.8	塑壁	131
1963	6.3	4	塑壁	131
1964	4.5	3.5	壁	131
1965	4.7	3.8	壁	131
1966	5	3.3	壁	131
1967	5.2	3.3	塑壁	131
1968	4	3.1	塑壁	131
1969	4.2	2.2	壁	131
1970	4.5	2	塑壁	131
1971	3.6	2.3	壁	131
1972	5	3	塑壁	131
1973	4	2.5	壁	131
1974	6.8	4.6	塑壁	131
1975	7.5	5	壁	131
1976	5	2.2	壁	131
1977	7	1.8	壁	131
1978	4	3	壁	131
1979	7.2	3	壁	131
1980	6	3.7	壁	131
1981	6.3	5	塑壁	131
1982	5.8	3.5	壁	131
1983	6.2	2	壁	131
1984	8	4.5	壁	131
1985	3.1	2.5	壁	131
1986	5	3.5	壁	131
1987	3	2.8	壁	131
1988	2.5	2.5	壁	131
1989	3.8	2	壁	131
1990	3.7	3.2	塑壁	131
1991	2.5	2.5	壁	131
1992	4	2.4	壁	131
1993	4.5	3.4	壁	131
1994	3.4	3.2	塑像	131
1995	3.8	3	壁	131
1996	4.7	3.2	壁	131
1997	3.6	3.6	塑壁	131
1998	4	3.1	塑壁	131
1999	5.8	2.5	塑壁	131
2000	3.5	2.3	塑壁	131
2001	3.4	2	壁	131
2002	2.5	2.4	塑壁	131
2003	4	2.5	塑壁	131
2004	3.2	2.6	壁	132
2005	4	2	塑壁	132
2006	3.4	2.8	壁	132
2007	2.8	2.7	塑壁	132
2008	2.8	2.1	塑壁	132
2009	3.5	2.4	塑壁	132
2010	2.6	2.7	壁	132
2011	2.5	1.5	壁	132
2012	3.4	2.5	壁	132
2013	2.2	2	壁	132
2014	2.1	1.7	壁	132
2015	4	2.9	壁	132
2016	3.1	2	壁	132
2017	3	1.8	壁	132
2018	3.2	2.5	塑壁	132
2019	4.1	2	塑壁	132
2020	2.5	2.2	塑壁	132
2021	3.2	1.4	壁	132
2022	3.3	2	塑壁	132
2023	2.7	2	塑壁	132
2024	3.2	2.3	壁	132
2025	13	12	塑壁	132
2026	16.5	14.5	塑壁	132
2027	8.3	5.7	壁	132
2028	3	2.5	壁	132
2029	3	1.5	壁	132
2030	14	9	塑壁	133
2031	6.4	5.5	塑壁	133
2032	7.5	7	塑壁	133
2033	8	8	塑壁	133
2034	9.5	5	壁	133
2035	5.6	3.1	塑壁	133
2036	11.7	6.9	塑壁	133
2037	5	4.7	塑壁	133
2038	6	4	塑壁	133
2039	7	3.5	塑壁	133
2040	8	6.7	壁	133
2041	10.5	7.7	塑壁	133
2042	7.3	7	塑壁	133
2043	7	5.7	塑壁	133
2044	18.4	8.5	塑壁	133
2045	6.4	3.7	塑壁	133
2046	16.5	8.3	塑壁	134
2047	12	12	塑壁	134
2048	13.2	7.5	塑壁	134
2049	8.5	8.1	塑壁	134
2050	10.5	8.5	塑壁	134
2051	4	2.3	壁	134
2052	7.1	6	塑壁	134
2053	8	7	塑壁	134
2054	15.5	6.5	塑壁	134
2055	10.5	6	塑壁	134
2056	7.5	7.5	塑壁	134
2057	6.5	3.5	塑壁	134
2058	7.5	7	塑壁	134
2059	8.3	4.5	塑壁	134
2060	12.5	8	塑壁	134
2061	7.5	6.5	塑壁	134
2062	6	3.5	塑壁	135
2063	6	6	塑壁	135
2064	8	6.5	塑壁	135
2065	6	4.5	壁	135
2066	8.5	6	塑壁	135
2067	7	4.5	塑壁	135
2068	6.5	4.5	壁	135
2069	8	7.5	塑壁	135
2070	9.4	5.7	壁	135
2071	6.7	3	壁	135
2072	6.5	4.1	塑壁	135

遺物観察表

番号	長径	短径	種別	PL
2073	7.3	2.6	塑壁	135
2074	5.3	2.7	塑壁	135
2075	9.5	5.2	塑壁	135
2076	4.7	3.7	塑壁	135
2077	5.5	4.6	塑壁	135
2078	6.2	6	塑壁	135
2079	5.3	4	塑壁	135
2080	8	5.3	塑壁	135
2081	8.5	7.3	塑壁	135
2082	7.4	5.5	壁	135
2083	8.6	6.6	壁	135
2084	9.3	6.9	壁	136
2085	4	2.9	壁	136
2086	6.5	5	塑壁	136
2087	5	4.6	壁	136
2088	8	5.5	塑壁	136
2089	4	3	壁	136
2090	6.5	6	壁	136
2091	4.9	4	塑壁	136
2092	8.6	7.5	壁	136
2093	5.3	4.5	壁	136
2094	4.3	2.8	壁	136
2095	4.4	4.3	壁	136
2096	5.5	3.5	壁	136
2097	5.6	4.2	塑壁	136
2098	4.2	4.2	塑壁	136
2099	4.8	3.2	壁	136
2100	4.5	3.3	塑壁	136
2101	4.5	3.7	塑壁	136
2102	4	2.5	塑壁	136
2103	6	4	塑壁	136
2104	5.9	3.9	塑壁	136
2105	5.5	3.2	塑壁	136
2106	6.7	5.2	塑壁	136
2107	4.3	3.7	壁	136
2108	5.3	3.4	壁	136
2109	4.1	1.9	塑壁	136
2110	5.3	3.5	壁	136
2111	6.5	4.2	塑壁	136
2112	6.4	3.2	塑壁	136
2113	3.8	2.8	塑壁	136
2114	4	2.5	塑壁	136
2115	5.5	3	塑壁	136
2116	4	2.5	塑壁	136
2117	4.2	4	塑壁	136
2118	4	3.5	心材	137
2119	3.5	2	壁	137
2120	2.3	2	壁	137
2121	3	2.5	壁	137
2122	3	2.3	塑像	137
2123	6.5	3.5	壁	137
2124	4	3.5	塑壁	137
2125	3.7	2.5	塑壁	137
2126	5	4	塑壁	137
2127	4	2.5	壁	137
2128	3.3	2	塑壁	137
2129	3.5	3	塑壁	137
2130	5.5	3.3	塑壁	137
2131	4	2.8	塑壁	137
2132	2.5	2	塑壁	137
2133	4	2.5	塑壁	137
2134	5	4.8	塑壁	137
2135	3.5	1.5	壁	137
2136	3.5	2.5	壁	137
2137	3.5	3	壁	137
2138	2.7	2	壁	137
2139	1.7	1.5	壁	137
2140	4.5	3.5	塑壁	137
2141	4.5	3.5	塑壁	137
2142	5.5	3	塑壁	137
2143	4	3.2	塑壁	137
2144	3	2.2	塑壁	137
2145	3.6	2	塑壁	137
2146	4.1	2	壁	137
2147	4.5	2	壁	137
2148	5.1	3	壁	137
2149	4.4	2.5	壁	137
2150	4	2.8	塑壁	137
2151	4.5	4.3	塑壁	137
2152	3.3	2	塑壁	137
2153	3.2	1.8	塑壁	137
2154	3.5	1.3	塑壁	137
2155	4	2.6	塑壁	137
2156	3	1.5	塑壁	137
2157	4	1.6	塑壁	137
2158	4	2.1	塑壁	137
2159	4	2	壁	137
2160	4.5	3.4	塑壁	137
2161	5.3	1.3	衣下端部	23,138
2162	14	9	壁	138
2163	9.1	4.8	塑壁	138
2164	5.6	4	壁	138
2165	6.7	4.6	塑壁	138
2166	7.9	6.2	塑壁	138
2167	5.5	4.5	塑壁	138
2168	8	4.1	塑壁	138
2169	5.8	4.4	塑壁	138
2170	6.5	5.5	塑壁	138
2171	4.7	3.5	塑壁	138
2172	7.6	5.5	塑壁	138
2173	7	4.2	塑壁	138
2174	4.9	4	塑壁	138
2175	6.2	4	塑壁	138
2176	7.1	4.2	塑壁	138
2177	4	2.5	塑壁	138
2178	6.9	5	塑壁	138
2179	8.5	6.9	壁	138
2180	6	5.7	塑壁	138
2181	5	4.5	塑壁	138
2182	8	7.2	塑壁	138
2183	4.7	4	塑壁	138
2184	4.3	4.2	塑壁	138
2185	5	5	塑壁	138
2186	6.5	4	壁	138
2187	5.4	4	塑壁	138
2188	7.9	7	壁	138
2189	5.8	4.5	壁	138
2190	7.3	5.5	塑壁	138
2191	10.7	9	塑壁	138
2192	5	3.2	塑壁	139
2193	7.3	5	壁	139
2194	7	5	壁	139
2195	7.6	4.6	塑壁	139
2196	10.5	6	壁	139
2197	8	6.1	壁	139
2198	8	7.7	壁	139
2199	5.5	5.1	塑壁	139
2200	10.8	9.3	塑壁	139
2201	9.4	7.5	塑壁	139
2202	4.6	3.5	壁	139
2203	9.3	5.5	壁	139
2204	8.2	5.5	壁	139
2205	6.5	5.4	塑壁	139
2206	6.3	4.5	塑壁	139
2207	8.3	5	塑壁	139
2208	6.3	5	壁	139
2209	6	5	壁	139
2210	6	3.7	塑壁	139
2211	5.8	4.8	塑壁	139
2212	5	2.5	塑壁	139
2213	4	3	塑壁	140
2214	3.8	3.5	壁	140
2215	4.5	3.8	塑壁	140
2216	9	6	壁	140
2217	6	4.5	壁	140
2218	5.2	4.8	塑壁	140
2219	3.6	2.8	壁	140
2220	3.2	2.7	壁	140
2221	6.8	3.5	塑壁	140
2222	5.1	3.5	壁	140
2223	3.3	2.8	塑壁	140
2224	3.5	1.3	塑壁	140
2225	4.9	2.4	壁	140
2226	3.5	1.8	塑壁	140
2227	4.6	3.6	塑壁	140
2228	3.7	2.6	壁	140
2229	3.6	3	壁	140
2230	7.1	4	心材	140
2231	3.7	3.3	壁	140
2232	4.5	3.5	塑壁	140
2233	6.7	4	塑壁	140
2234	4	3.2	塑壁	140
2235	6.5	5.2	心材	140
2236	4	3.2	塑壁	140
2237	7.1	4.9	壁	140
2238	3.8	2.5	塑壁	140
2239	3.5	3	塑壁	140
2240	3.7	2.9	塑壁	140
2241	6.5	4.5	心材	140
2242	5.1	3.8	心材	140
2243	8	5.5	塑壁	140
2244	4.5	2.7	心材	140
2245	3.6	2.4	塑壁	140
2246	4.5	2.1	塑壁	140
2247	4.9	2.5	塑壁	140
2248	6.8	5	壁	140
2249	5	5	塑壁	140
2250	5.5	3.8	壁	140
2251	3.7	2	壁	140
2252	3	1.5	壁	140
2253	2.7	2.1	塑像	140
2254	3.5	1.8	塑壁	140
2255	2.7	2.3	塑壁	141
2256	4	3.8	壁	141
2257	4	3	塑像	141
2258	2.6	1.5	壁	141
2259	5.8	3	塑壁	141
2260	4.5	4	塑像	141
2261	2.5	2.5	塑壁	141
2262	3.7	2.5	塑壁	141
2263	3.5	2	塑壁	141
2264	4	1	塑壁	141
2265	4	2.2	塑壁	141
2266	2.7	1.7	塑壁	141
2267	2.5	1.1	塑壁	141
2268	2.3	2	塑壁	141
2269	3	1.6	塑壁	141
2270	2.8	1	塑壁	141
2271	3	1.5	塑壁	141
2272	2.2	1.3	塑壁	141
2273	2.5	1.7	塑壁	141
2274	7.3	4.5	塑壁	141
2275	3	1.4	壁	141
2276	2.3	1.3	塑壁	141
2277	2	1	壁	141
2278	2.4	1.1	塑壁	141
2279	2.9	1.2	壁	141
2280	1.8	1.1	壁	141
2281	2.3	1.3	壁	141
2282	4.5	3.5	壁	141
2283	5.3	3.6	塑壁	141
2284	3.7	2.3	塑壁	141
2285	5	3.3	塑壁	141
2286	4	3.3	壁	141
2287	3.9	3.3	壁	141
2288	3.4	3	壁	141
2289	6	4.3	壁	141
2290	6	4.2	塑壁	141
2291	4.5	3.9	塑壁	141
2292	3	2.1	塑壁	141
2293	4	3.2	壁	141
2294	3	2.6	塑壁	141
2295	3	2.5	壁	141
2296	3.7	2.4	壁	141
2297	4.5	2.5	塑壁	141
2298	4	2.4	塑壁	141
2299	2.8	2.6	塑壁	141
2300	3	2.3	塑壁	141
2301	3	2.7	塑壁	141
2302	2.9	2.2	塑壁	141
2303	3.6	3.2	塑壁	141
2304	3	2.2	塑壁	141
2305	2.6	2.5	塑壁	141
2306	3	2	塑壁	142
2307	2.7	2.1	塑壁	142
2308	3	2.2	壁	142
2309	2.7	1.7	塑壁	142
2310	2.7	1.8	塑壁	142
2311	1.8	1.7	塑壁	142
2312	3.2	2.3	塑壁	142
2313	2.2	1.4	塑壁	142
2314	7.7	5	壁	142
2315	7.6	7.5	壁	142
2316	7.8	5.8	壁	142
2317	7.2	5.7	壁	142
2318	8.2	6.8	塑壁	142
2319	8.3	5	塑壁	142
2320	5.5	4	壁	142
2321	5.5	3.2	壁	142
2322	5	3.5	塑壁	142
2323	5	3.8	塑壁	142
2324	4	2.5	塑壁	142
2325	2.2	1.6	壁	142
2326	8	2.8	壁	142
2327	4.8	3.3	塑壁	142
2328	8	8	塑壁	142
2329	12.2	5.7	塑壁	142
2330	15	9	塑壁	142
2331	4.5	4.3	塑壁	143
2332	4.5	3.4	壁	143

番号	長径	短径	種別	PL
2333	4.2	2.9	塑壁	143
2334	3.6	2.4	壁	143
2335	4.5	2	塑壁	143
2336	3.5	2	塑壁	143
2337	3.1	3.1	塑壁	143
2338	3.6	2	壁	143
2339	3.5	3.5	壁	143
2340	3	2.8	壁	143
2341	3.5	2.5	壁	143
2342	3.8	2.5	塑壁	143
2343	3.6	2.9	壁	143
2344	3.1	2.3	壁	143
2345	3.6	2.5	壁	143
2346	2.9	2.3	壁	143
2347	5.2	2.5	塑壁	143
2348	2.8	2	塑壁	143
2349	3.1	3	壁	143
2350	3.4	3.1	壁	143
2351	2.7	1.9	壁	143
2352	2.4	1.5	壁	143
2353	2.1	1.5	壁	143
2354	4.6	3.5	壁	143
2355	10.5	6	壁	143
2356	7.8	7.2	塑壁	143
2357	6.5	4.3	塑像	143
2358	4.5	1.7	塑像	143
2359	6.5	5	壁	143
2360	6	4	塑像	143
2361	7.5	6	塑壁	143
2362	6	4.6	塑壁	143
2363	7.8	6	塑壁	143
2364	5.8	5.5	壁	143
2365	6.4	3.4	塑壁	143
2366	5	3.3	塑壁	143
2367	5	3.5	塑壁	143
2368	6.3	3.9	塑壁	143
2369	8.5	5.5	塑壁	143
2370	4	3.5	塑壁	144
2371	4	3.8	塑壁	144
2372	4.5	2.7	塑壁	144
2373	10	5	塑壁	144
2374	7	5.6	塑壁	144
2375	5	2.7	壁	144
2376	4	3.6	壁	144
2377	4.9	3	壁	144
2378	5.3	5.2	壁	144
2379	6.7	5.3	塑壁	144
2380	7	5.8	塑壁	144
2381	5.4	3	壁	144
2382	5	3.1	壁	144
2383	7.7	7	塑壁	144
2384	4.2	4	塑壁	144
2385	7	5.5	壁	144
2386	6.7	5.5	壁	144
2387	5	2.4	塑壁	144
2388	9.4	6.4	壁	144
2389	10	6	塑壁	144
2390	6.5	4	塑壁	144
2391	5.2	4.5	塑壁	144
2392	5.5	5.5	壁	144
2393	6.8	5.3	壁	144
2394	5.4	3.1	壁	144
2395	4.5	4.1	壁	144
2396	7	4.5	壁	144
2397	8	7.5	塑壁	144
2398	5	3.5	壁	144
2399	7.3	5.5	壁	144
2400	5.7	4	塑壁	144
2401	5	4	壁	144
2402	6.5	3.5	壁	145
2403	7	6.6	壁	145
2404	7	5.5	壁	145
2405	10.7	7.5	壁	145
2406	4	2.5	塑壁	145
2407	3.7	3.5	塑壁	145
2408	5	2.5	塑壁	145
2409	3	2	壁	145
2410	5	2.3	壁	145
2411	4.5	3.5	塑壁	145
2412	5	3	塑壁	145
2413	3.2	3	塑像	145
2414	5.5	3.5	塑像	145
2415	3	2.5	塑像	145
2416	6	3	塑壁	145
2417	4	3.5	塑壁	145
2418	5.5	4.5	壁	145
2419	3.5	2.8	壁	145
2420	7	6	壁	145
2421	6.5	3.5	壁	145
2422	3	2.5	壁	145
2423	3.5	2.4	塑壁	145
2424	5	4	壁	145
2425	3.5	3	壁	145
2426	2.2	2	壁	145
2427	7.5	3.5	壁	145
2428	6	3.5	壁	145
2429	6	5.5	壁	145
2430	7	4.5	壁	145
2431	3	3	塑壁	145
2432	3.5	3	塑壁	145
2433	5.5	2.7	塑壁	145
2434	3.7	2.5	壁	145
2435	2.9	2	壁	145
2436	3	1.4	壁	145
2437	3.4	1.3	塑壁	145
2438	3.4	2.2	壁	145
2439	4	3.8	壁	145
2440	3	2.6	壁	145
2441	3.2	3	壁	145
2442	5	4	塑壁	145
2443	4.2	3.5	塑壁	145
2444	3.3	2.3	壁	145
2445	4	3.5	塑像	145
2446	5	3.2	塑壁	146
2447	2.9	2	塑壁	146
2448	3.5	2.3	壁	146
2449	5.2	3.5	塑壁	146
2450	4.8	4.5	塑壁	146
2451	3.8	3.3	塑壁	146
2452	3.7	2	壁	146
2453	3.8	3.3	壁	146
2454	3.6	3.6	壁	146
2455	3.1	1.8	壁	146
2456	4.1	3	壁	146
2457	3.3	2	壁	146
2458	2.2	1	塑壁	146
2459	2.5	1	塑壁	146
2460	3.9	2.8	塑壁	146
2461	3.3	1.5	塑像	146
2462	2	2	壁	146
2463	3.4	3.1	壁	146
2464	2.3	2.1	壁	146
2465	3	1.9	壁	146
2466	3.1	1.8	壁	146
2467	3.2	2	壁	146
2468	3.2	1.9	壁	146
2469	2.5	2.1	壁	146
2470	3	2	壁	146
2471	2.5	1.5	壁	146
2472	2.7	1.6	壁	146
2473	3.9	2.5	壁	146
2474	3.5	3	壁	146
2475	2.1	1.9	壁	146
2476	3.4	2.4	壁	146
2477	3.2	1.6	壁	146
2478	3.7	2.1	壁	146
2479	3.6	2	壁	146
2480	2.6	1.7	壁	146
2481	2.7	1.6	壁	146
2482	2.9	2.1	塑像	146
2483	2.5	1.5	壁	146
2484	2	1.5	壁	146
2485	3.3	2.2	壁	146
2486	3.5	2.8	壁	146
2487	3	2.2	塑壁	146
2488	4.2	3	塑壁	146
2489	3	3	壁	146
2490	14.5	5.5	塑壁	146
2491	8	6.3	塑壁	146
2492	9	6	塑壁	146
2493	6	4	塑壁	146
2494	7.5	7	壁	146
2495	2.7	2	塑壁	146
2496	5	3.5	塑壁	146
2497	2.5	2	塑壁	147
2498	5.7	4	塑壁	147
2499	6.5	6.5	塑壁	147
2500	10.5	6.5	塑壁	147
2501	6	4.3	塑壁	147
2502	8	4.5	塑壁	147
2503	7	4	塑壁	147
2504	8	3.5	壁	147
2505	4.5	4	塑壁	147
2506	6.3	5	壁	147
2507	7	4.5	壁	147
2508	6.5	5	壁	147
2509	6.5	4	塑壁	147
2510	4.5	4	塑壁	147
2511	8	5	壁	147
2512	8	5	塑壁	147
2513	6	5.5	壁	147
2514	5.5	3.5	壁	147
2515	6.8	4	壁	147
2516	4	3.5	塑壁	147
2517	5.5	2	壁	147
2518	8.5	4.5	塑壁	147
2519	3.3	2	塑壁	147
2520	3	2	壁	147
2521	3.5	2.2	塑壁	147
2522	4.5	3.5	塑壁	147
2523	3.5	2.5	塑壁	147
2524	4	3	塑壁	147
2525	4	3	塑壁	147
2526	3.5	1.2	塑壁	147
2527	2.3	2	塑像	147
2528	3.5	2.7	塑壁	147
2529	5	2	壁	147
2530	2	1.8	銅製品	148
2531	13.5	8.5	壁	148
2532	8.7	5.7	塑壁	148
2533	11.3	10.7	塑壁	148
2534	9.8	6.5	壁	148
2535	21	7	塑壁	148
2536	6.5	4.3	塑壁	148
2537	13	9	壁	148
2538	21.5	8.1	磯形	31,53,148
2539	5.3	4.3	塑壁	148
2540	4.5	3.3	塑像	149
2541	3.5	1.8	塑像	149
2542	5.5	4.5	塑像	149
2543	7	6.5	塑壁	149
2544	4.4	3.5	塑壁	149
2545	6.2	2.6	塑壁	149
2546	4.6	3.1	塑壁	149
2547	4	2.7	塑壁	149
2548	3.3	2.6	塑壁	149
2549	10.6	10.6	塑壁	149
2550	5	4.5	壁	149
2551	11.5	9	壁	149
2552	7.5	6	壁	149
2553	6.2	5.9	塑壁	149
2554	5.4	3	塑壁	149
2555	20	12	塑壁	149
2556	8.9	5.8	壁	149
2557	13	12.8	塑壁	149
2558	9	9	壁	149
2559	6.5	3.7	塑壁	150
2560	8.6	5.6	塑壁	150
2561	19.8	16.5	塑壁	150
2562	6	5	壁	150
2563	9	5.5	塑壁	150
2564	10	4.5	塑壁	150
2565	20	13.5	塑壁	150
2566	6	5	塑壁	150
2567	4.5	3.5	塑壁	150
2568	7.5	7	壁	150
2569	7.3	5	壁	150
2570	8	5	塑壁	150
2571	7	4.5	壁	150
2572	8.3	6.5	塑壁	150
2573	7.5	5	塑壁	150
2574	7.7	6.5	壁	150
2575	7	3.8	塑壁	151
2576	6	5	壁	151
2577	8.7	4.5	塑壁	151
2578	7	5.5	壁	151
2579	5.3	3.5	壁	151
2580	6.6	3.5	壁	151
2581	5.5	2.4	動物頭部	47,151
2582	7	3.3	壁	151
2583	4	3	壁	151
2584	4.5	4	壁	151
2585	12.2	6.2	塑壁	151
2586	4.2	3.8	塑壁	151
2587	8.5	5	塑壁	151
2588	5.5	4.5	塑壁	151
2589	6	4.7	塑壁	151
2590	4.2	2.5	壁	151
2591	4.4	2.2	壁	151
2592	4.5	3.5	塑壁	151

遺物観察表

番号	長径	短径	種別	PL
2593	4.5	3.8	塑壁	151
2594	4.7	2.8	塑像	151
2595	4.5	3.5	壁	151
2596	6.5	4.2	壁	151
2597	6.6	4	塑壁	151
2598	6	4	塑壁	151
2599	6.2	4.4	壁	151
2600	4.4	4	壁	151
2601	5	3.2	壁	151
2602	5	3.5	壁	151
2603	3.3	3.2	塑壁	151
2604	4	3.1	壁	151
2605	4.4	3	塑壁	151
2606	6.5	3.6	塑壁	151
2607	5	4	塑壁	151
2608	6.5	5.1	塑壁	151
2609	5.7	3.8	壁	151
2610	12.1	5	塑壁	152
2611	7.5	4.4	壁	152
2612	4.1	3.7	塑壁	152
2613	4.2	2.5	塑壁	152
2614	3.3	2.4	塑壁	152
2615	5.2	2.2	壁	152
2616	2.8	1.8	塑壁	152
2617	7.2	6	壁	152
2618	4.4	4	壁	152
2619	2.9	2.1	塑壁	152
2620	4.3	2.8	塑壁	152
2621	4.3	3.1	塑壁	152
2622	5.3	4	塑壁	152
2623	2.3	2.1	壁	152
2624	6.2	3.6	壁	152
2625	4.4	3.9	壁	152
2626	3.3	3.2	塑像	152
2627	5.5	3	塑壁	152
2628	4.5	3.4	壁	152
2629	3.6	3.2	壁	152
2630	5	3.7	塑壁	152
2631	5.5	3.5	塑壁	152
2632	4.5	4	壁	152
2633	3.6	2.5	塑壁	152
2634	3.5	2.8	壁	152
2635	5.5	3	壁	152
2636	2.5	1.6	塑壁	152
2637	4.5	2.8	塑壁	152
2638	8.5	8	塑壁	152
2639	6.5	5.2	壁	152
2640	5.1	4.3	塑壁	152
2641	5.4	3.8	壁	152
2642	6.2	5	塑壁	152
2643	8.4	4.9	壁	152
2644	10	5	壁	152
2645	6.2	5	塑壁	153
2646	6	4.1	壁	153
2647	6.5	3.5	塑壁	153
2648	4.8	4.6	塑壁	153
2649	16	14	塑壁	153
2650	9	9	塑壁	153
2651	13	10.5	塑壁	153
2652	3.2	2	壁	153
2653	10	9.5	塑壁	153
2654	7.8	6.6	壁	153
2655	12	7.5	塑壁	153
2656	10	7.5	壁	153
2657	3	2.3	壁	153
2658	2.4	1.6	壁	153
2659	10	4	塑壁	153
2660	6.4	4.5	塑壁	153
2661	1.8	0.6	塑壁	153
2662	2.9	1.2	塑壁	153
2663	4.5	3	塑壁	153
2664	10	8	塑壁	153
2665	7.2	7	塑壁	81
2666	4.5	2.5	塑壁	100
2667	5.3	3.5		139
2668	5.7	3.4	銅製框座	123
2669	5	3.1	塑像	127
2670	11.6	5.9	膝部	3,34
2671	9.7	2.8	筒状断片	26,49
2672	3.5	2.9	塑像	—
2673	9.5	8.1	壁	—
2674	4.9	3.3	壁	—
2675	10.6	6	塑壁	—
2676	6.3	5	塑壁	—
2677	4.9	2	塑像	—
2678	6	4.9	塑壁	—
2679	6.8	5.5	塑壁	—
2680	7.6	4.6	塑壁	—
2681	10.3	6.6	塑壁	—
2682	7	6	塑壁	—
2683	8.6	5.3	塑壁	—
2684	10.8	5	塑壁	—
2685	13.5	9.5	塑壁	—
2686	3.5	3.2	塑像	—
2687	4.2	2.6	塑像	—
2688	5	3.5	壁	—
2689	5	1	塑像	—
2690	13.7	8.5	塑壁	—
2691	7.3	2.2	陰刻断片	27,49
2692	8.4	3.4	三角断片	26,49
2693	9.1	1.4	衣部	46
2694	29.8	13.7	磯形	54
2695	26	14.3	山岳頂部	52
2696	13.5	9.5	塑壁	—
2697	23	7.9	磯形	32,53
2698	17.5	16.5	塑壁	—
2699	23.8	13.7	山岳頂部	31,52
2700	4.5	1.8	獣毛	25
2701	25	7	磯形	32,53
2702	14.5	4.3	神将像	10,39,40
2703	23.8	7.4	磯形	54
2704	37.3	5.7	磯形	54
2705	3.8	3.5	壁	—
2706	3.9	2.4	箱形天蓋	30,51
2707	15.5	12.5	壁	—
2708	11.7	4.7	彩色磯形	32,55
2709	11.4	3.6	磯形	32,53
2710	4.8	1.5	神将像	8
2711	3.9	2	神将像	8,39
2712	5.2	1.6	神将像	11
2713	6.2	3.9	神将像	8,38
2714	3.4	0.6	天衣	22
2715	4.7	2.5	神将像	11,41
2716	4.9	2.7	沓先	12,42
2717	6.1	1.9	飛雲頭部	28,50
2718	4.3	3.7	垂飾	3,33,34
2719	4.1	1.1	菩薩像飾	3
2720	13.3	3.8	箱形天蓋	29,51
2721	6.6	3.8	箱形天蓋	30,51
2722	6.4	2.7	箱形天蓋	30,51
2723	4.5	2.2	箱形天蓋	30,51
2724	10.6	5.7	箱形天蓋	29,51
2725	5.2	1.4	箱形天蓋	30,51
2726	11.7	4.7	彩色磯形	32,55
2727	4.6	2.6	塑壁	—
2728	7.9	3	直方断片	27,49
2729	6.6	1.3	稜線断片	27,49
2730	10.2	3.2	飛雲頭部	28,50
2731	4.7	0.9	神将像	9,14
2732	10	4.4	壁画	56
2733	7.3	4.2	壁画	56
2734	9.7	2.8	壁画	56
2735	7.2	3.8	壁画	56
2736	6.2	1.7	壁画	56
2737	5.2	1.5	壁画	56
2738	20	18	壁	—
2739	12	9.8	塑壁	—
2740	4.5	3.7	壁	—
2741	13	6	塑壁	—
2742	8	6.5	塑像	—
2743	6.5	3.5	塑像	—
2744	6	4	塑像	—
2745	5.2	1.9	筒状断片	26,49
2746	12	6	塑壁	—
2747	6.1	5.9	塑像	—
2748	11.1	3.1	神将像	8,38
2749	10.1		神将像	7,37
2750	13.7	2.8	神将像	10,40
2751	6.5	3	邪鬼	12
2752	13.1	4.4	飛雲脚部	28,50
2753	6.2	3.1	神将像	9,39
2754	5	1.6	神将像	9
2755	8.4	2.5	神将像	10
2756	9.6	4.3	神将像	11,40
2757	9.6	6.5	衣部？	23,47
2758	8.1	5.9	腰右手先	22
2759	9.7	4.1	筒状断片	26,48
2760	10.5	3.8	銅製懸衰？	59
2761	12.1	7	神将像	7,38
2762	11.2	2.2	神将像	11,41
2763	8.1	4	女性像	18,45
2764	15.8	6.8	左脚部	3,35
2765	7.8	4.3	女性像	19,45
2766	12.2	4.4	磯形	55
2767	18.6	6.9	山岳頂部	31,52
2768	12.5	12	塑壁	—
2769	24	13.5	塑壁	—
2770	5.9	1.4	棒状断片	26
2771	6.4	2.2	棒状断片	26
2772	4.7	1.4	棒状断片	26
2773	39.7	14	塑壁	—
2774	18	16.5	塑壁	—
2775	10.2	6.2	壁	—
2776	4.5	4.3	塑像	—
2777	15.5	10	塑壁	—
2778	14.5	5.7	塑壁	—
2779	4.4	2.5	塑壁	—
2780	4.7	2.6	塑壁	—
2781	4.8	2.5	塑壁	—
2782	6.7	5	塑壁	—
2783	13.5	12	塑壁	—
2784	12	8.5	塑壁	—
2785	5	4.5	塑像	—
2786	7.9	7	塑壁	—
2787	17.3	9.5	塑壁	—
2788	5.9	1.7	飛雲脚部	28,50
2789	4.2	1.3	衣部？	46
2790	14	11	壁	—
2791	1.8	1.3	銅製金具	—
2792	16	6.5	塑壁	—
2793	11	4	塑像	—
2794	23.5	14	壁	—
2795	14.3	8.5	塑壁	—
2796	10.5	8	壁	—
2797	13.5	12	塑壁	—
2798	4.3	3.5	塑壁	—
2799	8.5	4.8	塑壁	—
2800	4.5	1.8	稜線断片	27,49
2801	5	3.5	塑像	—
2802	4.7	2.3	箱形天蓋	30,51
2803	3.5	3.5	塑像	—
2804	5.7	1.8	顔料断片	23
2805	5.3	3.5	塑像	—
2806	4	4	塑壁	—
2807	4.1	0.7	神将像	12
2808	4.5	4	塑像	—
2809	13.3	3.8	箱形天蓋	29,51
2810	5.6	1.8	神将像	10
2811	10	7	塑壁	—
2812	4.7	3	塑壁	—
2813	27.4	8.5	塑壁	—
2814	26.8	13.5	塑壁	—
2815	5	3.5	塑像	—
2816	7	4.5	不明	—
2817	5.4	1.4	金箔色帯	23
2818	7.5	2.2	彩色磯形	32
2819	11.3	1.3	彩色磯形	32
2820	13.2	6.9	神将像	4,5,35,36
2821	8.6	3.1	女性像	16,44
2822	6.8	2.1	女性像	17
2823	10.5	4.3	胡人像	20～21,45
2824	13.8	6.7	比丘像	20～21,51
2825	19.5	8.6	神将像	6,7,36
2827	25.4	14.5	磯形	31,53

注1．本観察表は、井野が作成し、松田原稿のデータで補正した。
種別は、塑像・塑壁・壁に分け、塑像で名称の明らかになったものは、松田原稿により名称を記載した。塑像・塑壁は形状・土質等で分類した。
2．計測値は、井野作成のものを松田原稿で補正している。
3．遺物番号のうち9A80の遺物（1～336）は、出土整理後の通し番号が記載されている。11A96の遺物（1～2827）は、当初の注記後、塑像・塑壁・壁の個体識別用に通し番号を新たに記載している。
4．これらの遺物のうち主要300点あまりは、国・県補助金により、保存処理を行った。塑像片すべてと塑壁・壁材の主たるものが含まれている。
5．写真と一覧表で9A80と11A96の遺物のうち塑像・塑壁・心材を除く壁材のすべてを収録している。
6．これらの遺物は、専用の収納箱を作成し、収納している。

抄　録

フ リ ガ ナ	サンノウハイジ
書　　名	山王廃寺
副　書　名	山王廃寺等Ⅴ遺跡発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	松田誠一郎、瀬山里志、松田妙子、井上唯雄、石川克博、井野誠一、佐藤則和、平石和明
編 集 機 関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0018　群馬県前橋市上泉町664-4　027-231-9531
発 行 年 月 日	西暦2000年3月28日

フリガナ	フリガナ	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
サンノウハイジ	マエバシシソウジャマチ	10201	(11A-96)	36°23′53″	139°2′3″	19990621	1200m²	市道舗装改良工事
山王廃寺	前橋市総社町					19990710		

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物
山王廃寺	寺院跡	古墳時代～平安	塔跡、金堂跡、講堂跡他	瓦片、塑像片、土器片等
特記事項	伽藍の変遷			

前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査報告

山　王　廃　寺

山王廃寺等Ⅴ遺跡発掘調査報告書

平成12年３月28日印刷
平成12年３月31日発行

編集・発行／前橋市埋蔵文化財発掘調査団
印刷／朝日印刷工業株式会社